



徳富猪一郎監修
木崎愛吉
賴成一共編

賴山陽全書

賴山陽先生遺蹟顯彰會藏版

新策〔及び外史〕の成稿に就て

大鹽平泉〔中齋〕に與ふる書

〔廿六歳―文化二年五月二日〕

本文は、本書別卷『頼山陽文集』に據つたもの。『新策』は、初めその成稿に當り、後の『日本外史』『日本政記』の底稿たるべき國史の著述について一書に纏めたものであり、卽ち『國史五種』と題し、

三紀　五書　九議　十三世家　二十三策

の諸篇から成るもの、文化四年廿八歳に至り、之を引離し『新策』・『外史』の兩書とし、各單行せしめ、更に『政記』は、晩年に至りて補稿せられ[illegible]に入る。

命。顧思題一言。因記其顛末。以汗電矚。覽後覆瓿是幸。」

右。皆猥陋不足見者。獨漢注嘗讀國志。卒得此數種。若其擬策。往獲其文詞耳。未嘗經濟〔經國濟民〕。適出位之言也。千萬垂恕。」

[illegible]年代記なり[illegible]蓋し[illegible]・文化の交〔廿四五歳前後〕

[illegible]在り[illegible]。

二十三歳

〔書翰・故人大鹽中齋及び[illegible]・大[illegible]〕

新策〔及び外史〕の底稿に就て

大槻平泉〔子縄〕に與ふる書

〔廿六歳—文化二年五月二日〕

本文は、本書別巻『頼山陽文集』に掲げたり。『新策』は、初めその起稿に當り、後の『日本外史』及び『日本政記』の底稿たるべき國史の著述と一書に纏められつゝあり、假りにこれを『隱史五種』と題して、

三紀　五書　九議　十三世家　二十三策

の部門を分たれしを、文化四年〔廿八歳〕に至り、それを引離して、『新策』・『外史』の二書として各單行せしめ、『政記』は、晩年に至りて起稿せらるゝに及べり。

「仰願賜題一言。因記其梗概。以汙電覽。覽後覆瓿是幸。」

「右。皆猥陋不足見者。獨僕性喜讀國志。卒得此數種。若其擬策。徒摸其文焉耳。非明識經濟〔經國濟民〕。爲出位之言也。千萬垂炤。」

その年代詳ならざるも、蓋し享和・文化の交〔廿四五歳前後〕に在りしなるべし。

〔東京・故大槻如電氏遺愛・大槻茂雄氏襲藏〕

[illegible]

大槻子縄先生

[illegible]

隱史五種　仰覬賜題一言因記其梗槩以汗電覧　[illegible]

三紀　提記　神武至後陽成大事為三卷使童蒙世凡以下[illegible]
業而心知所以示大方也

五書

輿地書　封建書　官制書

財用書　法律書

九議

大勢議　平安議　前鎌倉氏議

後鎌倉氏議　中興議　室町氏議

安土氏議　浪速氏議　総議

十三世家

藤原氏世家　平氏世家　源氏世家

北條氏世家　楠氏世家　新田足利氏世家

足利氏世家　伊勢氏世家　毛利氏世家

武田長尾氏世家　織田氏世家　豊臣氏世家

二十三策　財利之計　裁制商賈　銅鐵之制

君權内治　用才得失　財利之計　平均米價　市糴征課

大臣監察　均田墾籍　財利之計　開墾新畜　資權輕重

銓吏率奬　財利之計　財利之計　水利河漕　法律刑名

分祿選擧　財利之計　移粟富國　金錢楮鈔　訟獄保甲

右皆[illegible]

新策通議の題詩

洪流日夜變成深。未試金甌自古今。策漢過秦同一意。無人識得賈生心。

山陽外史

傍觀時議添蛇足。無識宦途捋虎鬚。自笑世情太不盡。著書猶欲擬潛夫。

題自著通議後　山陽外史

この詩、天保元年冬の作、「題新著通議後七首」の中に見ゆ。但、後首は、文化三年（廿七歳）、『新策』に題する作として、

「時論大半添蛇足。官路眞知捋虎鬚。自笑世情忘不得。著書猶擬擬潛夫。」

字句に小異あるも、蓋し『新策』を改稿して、『通議』と稱するに當り、直にこれを襲用せるなり。〔別葉圖版參照〕書體は、即ち天保元年（五十一歳）のものなるべし。〔[illegible]〕〔[illegible]所藏〕

新策・通議の題詩

洪流日夜淺成レ深。未レ欲金甌自古今。策漢過秦同一意。無ニ人識ニ得賈生心一。山陽外史。

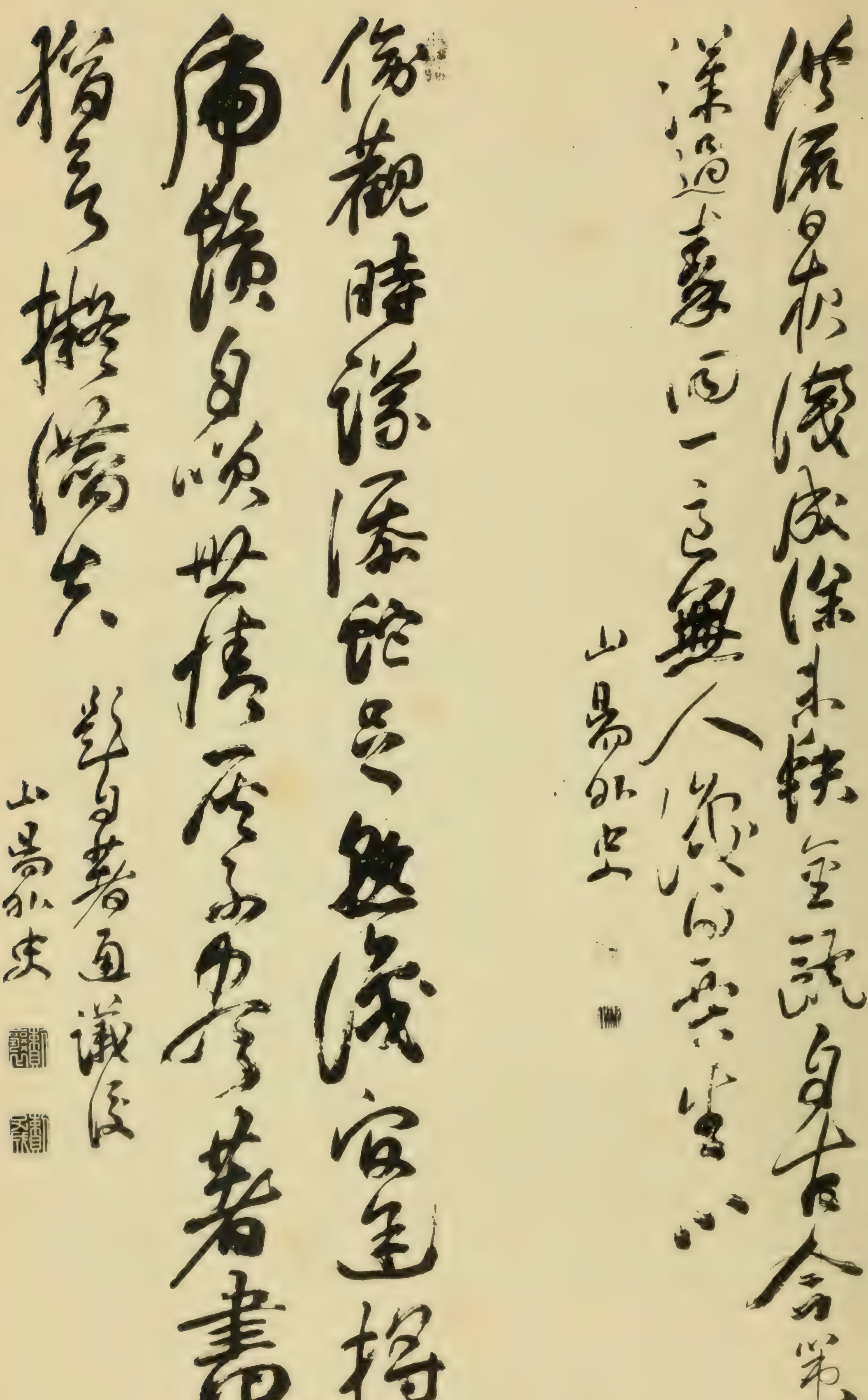
傍觀時議添ニ蛇足一。熟識官途捋ニ虎鬚一。自咲世情灰不レ盡。著書猶欲レ擬ニ潛夫一。　題ニ自著通議後一。山陽外史。

この詩、天保元年冬の作、「題ニ新著通議後一。七首」の中に見ゆ。但、後首は、文化三年〔廿七歳〕、『新策』に題する作として、

「時論大半添ニ蛇足一。官路眞知レ捋ニ虎鬚一。自笑世情忘不レ得。著書猶題擬ニ潛夫一。」

と、字句に小異あるのみ、蓋し『新策』を改稿して、『通議』を編するに當り、更にこれを襲用せるなり。〔別葉圖版參照〕書蹟は、卽ち天保元年〔五十一歳〕のものなるべし。

〔吳市・武田甲斐人氏所藏〕
〔大阪・松井奈良次郎氏所藏〕



『通議』の題詩

題新著通議後。七首。

傍觀時議謾蛇足。　熟識官途劇虎鬚。　却有世情灰不盡。　著論〔書〕猶欲擬潜夫。

肉食成謀誰敢評〔爭〕。　片嘲辻拙老書生。　一窓風雪妻兒臥。　奮筆燈前紙有聲。

隙編檻許口縱横。　敢並諸公費太平。　未必話言當藍菓。　且憐〔將〕筆墨圖酸鹹。

藝苑湖文領典墳。　儒林閲議燎河汾。　吾無用讀横胸裏。　直據所勝寓示君。

散與駢體合流動。　之付分編見貫穿。　跛鼈自知千里隔。　學文亦似上青天。

洪流日夜浚成深。　無〔未〕試金甌自古今。　誰道過秦殊策漢〔過秦策漢同一意〕。　無人識得〔寂寞〕賈生心。

半生歳月酒中消。　萎腕既詩鬢欲凋。　小杜唯留一論在。　豈無身後李文饒。

第二。一作。一瀉寒燈萬古情。　隊穿木榻老書生。　縱論寫到關心處。
奮筆燈前〔行々〕紙有聲。

第四前半。一作。誰欲明議爲臨淵。　又試經野畫棋紋。

第六。一作。動乎曾知爾寂寞。　汗青儘放筆縱横。　過秦寧異治安策。
著眼無人窺賈生。　襄。

○

状がきに入申候。此通議と云名未定、困古論か、古政論か、觀古論などの内、御考可被下候。

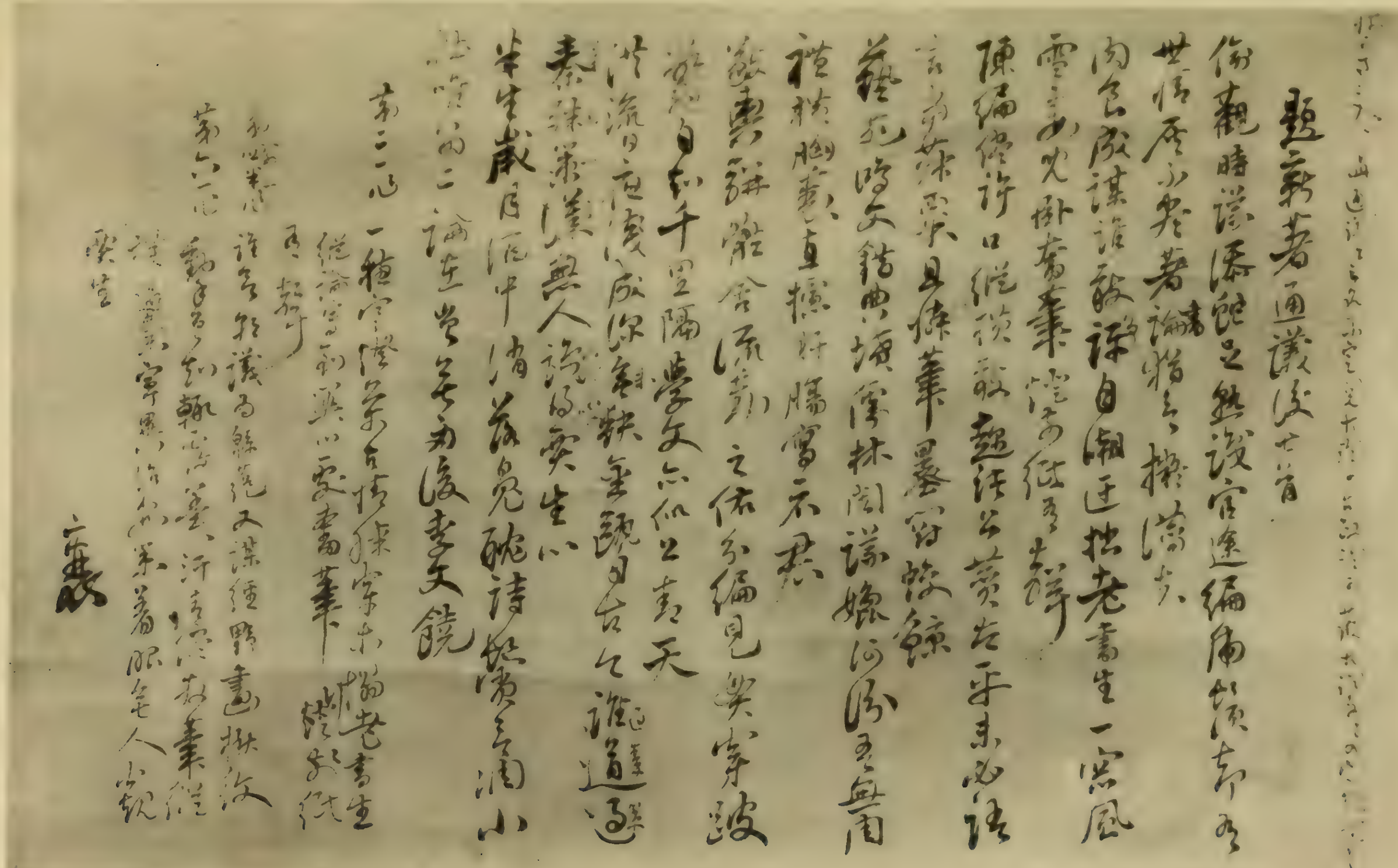
この詩未定稿、書簡の本文短く、「状がき」に書込みたりとあれど、その本文よりも、むしろ詩稿の方が緊要の用務なりしやも知れず。更に未定稿だけに、本書別卷『頼山陽詩集』その他に對讀して、推敲改刪の迹を見るに、興味の深きものあるべし。

この書牘の年代を徴すべく、天保六年、姫路藩老臣〔仁壽山學問所創立者〕河合寸翁に『通議』の手稿本を贈りし時、同じく「七首」を録示して、

「近草困古論二十七篇。僭懸作此命。憶嘗與漢年老丈〔寸翁〕。論及是等目録。併録詩示。乞一語」

といひ、その詩稿には、ここに掲げたるものと同じく、第六首の第一句を杜佑の字が未だ説出されざることを述べ、「恐不免混。店舊見故」といひ、後に「和仲」と改めたることを思へば、これと同年のものなるべく、又、同年、彦根藩老小野田橘齋にも『通議』稿本を贈りし事あれば、蓋し同時にこの詩稿を添へたるならるべし。

〔東京・德富蘇峰氏所藏〕



題新著通議後

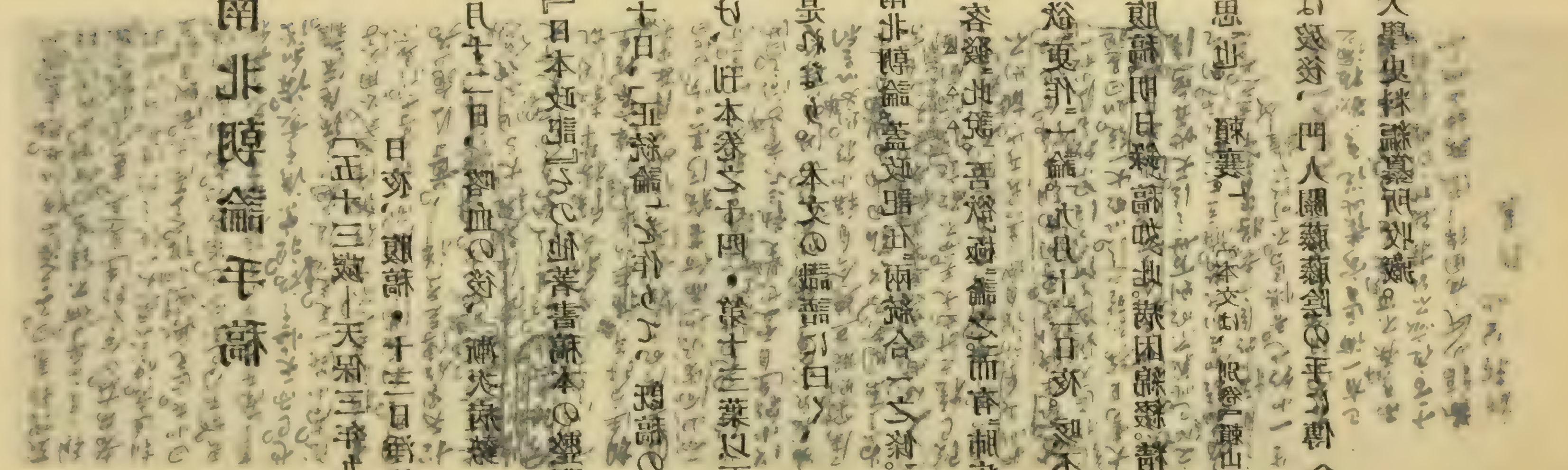
南北朝論手稿

〔五十三歳・天保三年九月十二日夜、腹稿・十三日錄寫刪潤〕

ことし六月十二日、喀血の後、漸次病勢重きを加へ、而も『日本政記』その他著書稿本の整理を急ぎつゝ、歿前十日、「正統論」を作り、これを政記の第一篇に、これを續ぎ、即ち本稿二十四・第十三葉以下に掲載したるもの是なり。本文の識語に曰く、

「右。南北朝論。蓋政記所在。兩統合一之際。已有一論。近有客發此説。吾欲破其論。而有補矣。不可闕誤。遂欲更作一論。九月十二日夜。既不能寐。就枕頭腹稿。明日錄寫如此。病困疲憊。精神止此。不能精思也。　賴襄。」〔本文は別本『賴山陽文集』參照〕

この稿本は歿後、門人關藤藤陰の手に傳へられ、今東京帝國大學史料編纂所收藏。



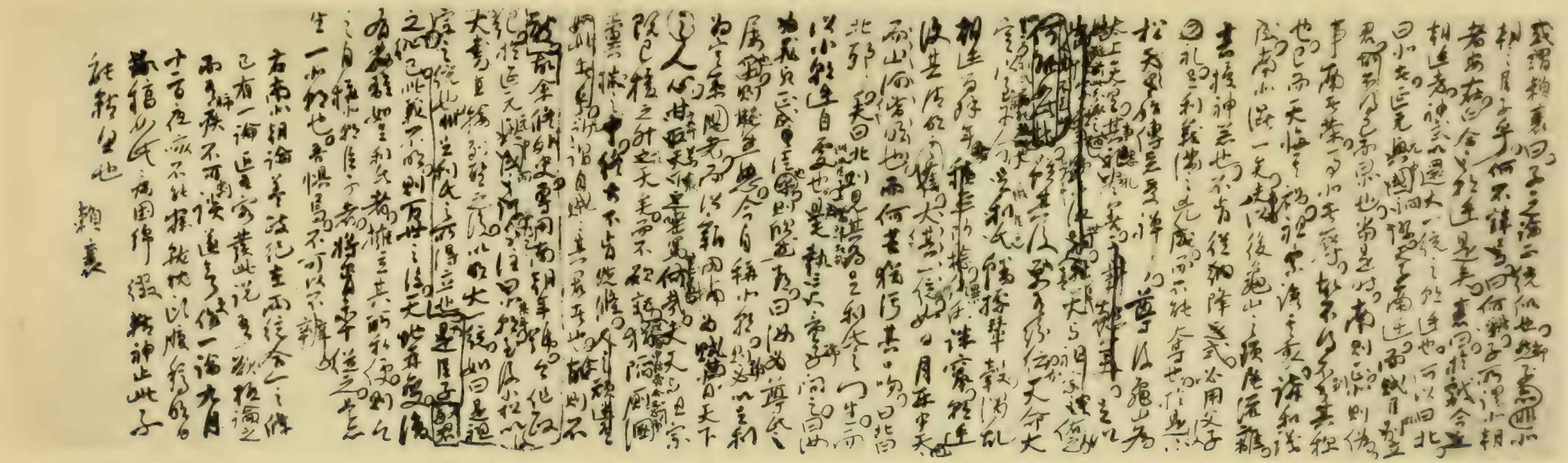
南北朝論手稿

〔五十三歳—天保三年九月十二日夜、腹稿・十三日浄鈔删潤〕

ことし六月十二日、喀血の後、漸次病勢重さを加へ、而も『日本政記』その他著書稿本の整理を急ぎつゝ、歿前十日、「正統論」を作りて、既稿の第一篇に、これを續げ、刊本卷之十四・第十三葉以下に掲載したるもの是れなり。本文の識語に曰く、

「右。南北朝論。蓋政記在両統合一之條。已有一論。近有客發此說。吾欲極論之。而有肺疾。不可劇談。遂欲更作一論。九月十二日夜。咳不能寐。就枕頭腹稿。明日鈔稿如此。病困綿綴。精神止此。不能精思也。　賴襄。」　〔本文は、別卷『賴山陽文集』參照〕

この稿本は歿後、門人關藤藤陰の手に傳へられ、今東京帝國大學史料編纂所收藏。



賴襄

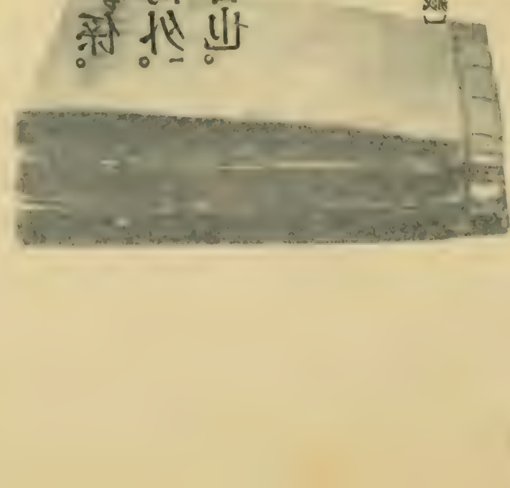
伊藤博文公遺愛の寫本『日本政記』

「政記」は、幕末の時代に、廣く世に傳はり、特に幕末志士の間に愛讀せられた、伊藤公の如き、文久三年四月十三日、外航の途に臨み、この寫本三冊を携帯し、文中の數ヶ所に公の眞蹟で書入れがある。

政記若干卷。藝國賴子成所著。書中擧三古朝政治之所係。論定之。又以足審古今成敗之跡矣。然而今將携之海外。雖於此行素為無要之書。又將有望于歸來之日者也。

文久三癸亥年四月十有三日。

伊藤　醇
志道　精　誌



【山口圖書館藏】

伊藤公は又、別に記してゐる。

「山陽賴子成所著政記若干卷。讀之以足識通宗開闢來二千有餘年之事矣。其間世之變遷。有感於是乎。今日。若又可以觀矣。然而我王朝衰替。近臣倍徼。又無甚於今日。若一讀此書。不起勤王之志。雖知億萬年之古之事。何益之有。於是乎書焉。

平井希昌題誌。

伊藤博文公遺愛の寫本『日本政記』

『政記』は、經世の要書として、廣く世に傳はり、特に幕末志士の間に愛讀せられ、伊藤公の如き、文久三年四月十三日、外航の發途に臨み、この寫本三冊を携帶し、その跋〔公の眞蹟〕を連名にて書入れたり。

政記若干卷。藝國賴子成所ㇾ著。書中概擧二吾朝政治之所一ㇾ係。論二定之一。又以足ㇾ審二古今成敗之跡一矣。然而今將ㇾ携二之海外一。雖下於二此行一素爲中無ㇾ要之書上。又將ㇾ有ㇾ望二于歸來之日一者也。

文久三癸亥年四月十有三日。

志道　精

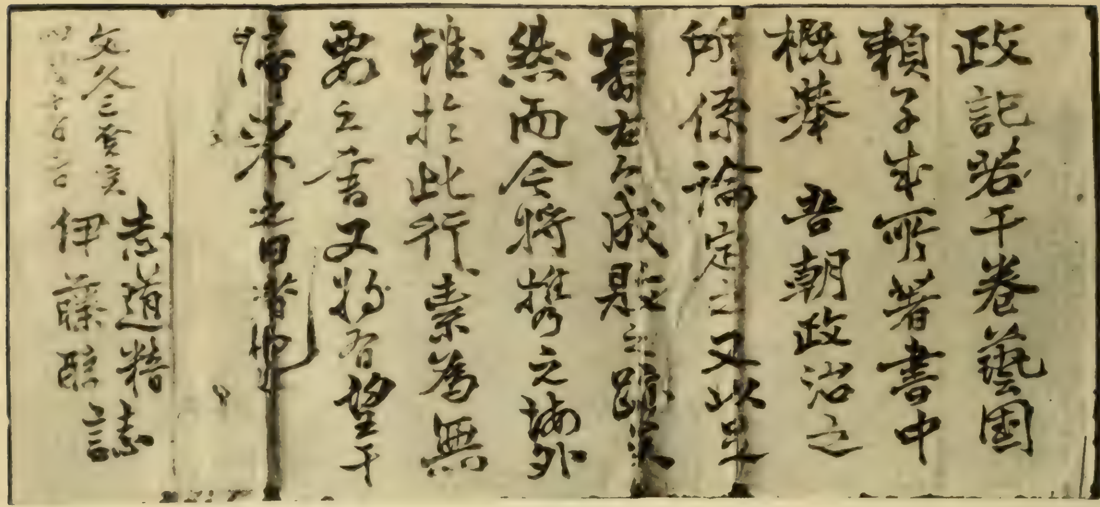
伊藤　醇　誌

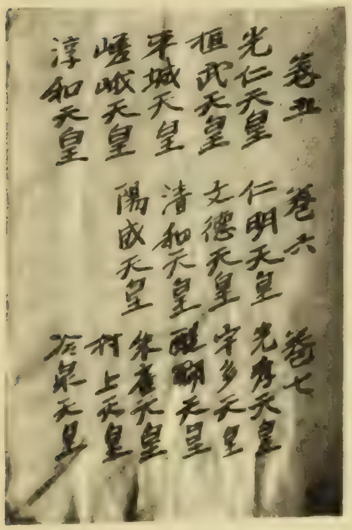
〔山口圖書館藏〕

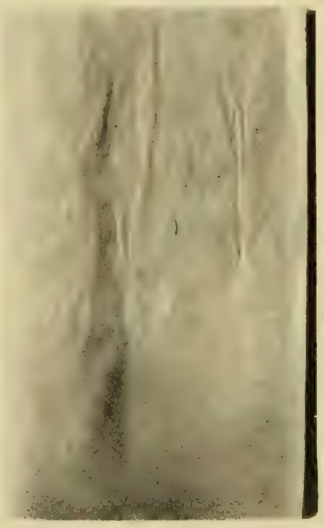
伊藤公は又、別に跋していふ。

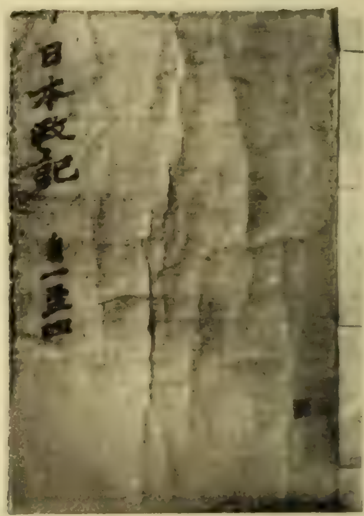
「山陽賴子成所ㇾ著政記若干卷。讀ㇾ之以足ㇾ識二祖宗開闢來二千有餘年之事一矣。其間世之變遷汙隆。至二于今日一者。又可二以觀一矣。然而我王朝衰弊。武臣倨傲。又無二甚於一今日一者。一讀二此書一。不ㇾ起二勤王之志一。雖ㇾ知二億萬年之古之事一。何益之有。於ㇾ是乎書焉。

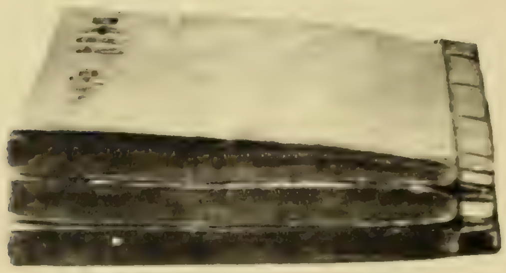
北平洋飄蕩誌。

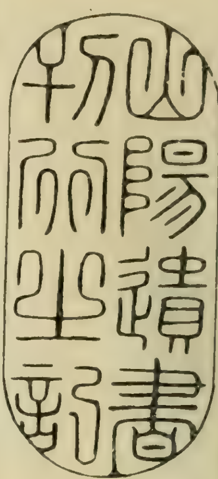

政記若干巻藝國
賴子未所著書中
概俸 晉朝政治之
所係論定之又以皇
家古今成敗之跡渓
然而令將樵之讀外
雖於此行素為無
要之書又將有望于
將來之日者也
志道精
文久三年癸亥
伊藤臨誌


巻五
光仁天皇
桓武天皇
平城天皇
嵯峨天皇
淳和天皇
巻六
仁明天皇
文德天皇
清和天皇
陽成天皇
巻七
光孝天皇
宇多天皇
醍醐天皇
朱雀天皇
村上天皇
冷泉天皇




日本政記
自一至四





日本政記

賴氏藏版

『日本政記』解題

頼山陽修史ノ業績ニ就テハ、別巻『日本外史』ノ解題ニ述ベタルガ如ク、父春水ガ宿志ノ在ル所ヲ繼承シテ、既ニ『外史』ノ成稿ヲ告グルト共ニ、『日本政記』（初メ國朝政記）ノ起稿ニ著手シツヽアリキ。　文政十二年（五十歳）二月三日、雲華ニ與ヘタル書翰ノ中ニ、「拙著（政記）、應仁の處仕まい候て、先一幕すみ候。」トアリ。今ヤ刊本卷之十五、後土御門天皇、應仁元年・二年ノアタリ、已ニソノ初稿ノ成レルヲ知ルベキナリ。又、別ニ同年正月「延喜」ノ條下ニ至ルトイヘルハ、蓋シ改刪ノ謂ナルベシ。

春水ハ早ク修史ニ志シ、壯年ニシテ大坂ニ在リ、講學ノ餘、『大日本史』ノ謄寫ニ專念シツヽ、ヤガテ廣島藩ニ仕ヘ、天明四年（三十九歳・山陽五歳）江戸藩邸ニ在リテ、公務ノ傍、「本朝歴代、治亂興衰之模様相約」メテ、一部ノ國史ヲ編纂スベク、藩ノ重役〇關外衞ニ內申シ、一藩ノ事業トシテ總裁ヲ置キ、『大日本史』ノ紀傳體ナルヲ編年ニ改メ、『通鑑』ノ體制ニ仍リ、コレヲ簡約ニスベキコトヲ言ヘリ。　幾クモナクソノ進言ハ採用セラレ、

自身ソノ事ニ當ラシメラルベク內命ヲ蒙リ、弟杏坪等助手ノ下ニ、事業ハ開始セラレ、著々ソノ稿本ノ進メラルヽニ至リシヲ、一朝、藩議ノ阻ム所トナリ、修史事業ノ中止ヲ餘儀ナクセシメラルヽニ及ベリ。

幼時スデニ國史ノ上ニ興味ヲ感ズルコト尤モ深カリシ山陽ハ、夙ニ父ノ遺緒ヲ續ギ、ソノ史筆ヲ揮フニ意アリ、「此業を成就仕、日本にて必要の大典とは、藝州の書物と、人に呼せ申度念願」ナリト〇文化七年・卅一歳、本藩築山奉盈に呈する書翰言ヒ、先ヅ武家政治ノ沿革ヲ叙シテ、『外史』ノ稿本ヲ作リ、二十餘年ノ歳月ヲ費シテ改刪ノ功ヲ了リ、文政十年〇四十八歳ヲ以テ、幕府前老中松平定信〇樂翁ノ求ニヨリ、一部ノ成書ヲ呈シ、次ニ同ジク姫路藩納本ノ爲メ、更ニ補正ヲ加ヘ了リシハ、文政十二年十二月ニ在リ、同時ニ、『政記』ヲ著シテ、「本朝歷代」ノ史書ハ、既ニソノ業ヲ卒フルニ垂ントシ、春水ノ遺志ハ、今ヤソノ手ニ完成セラルベクアリキ。

飜リテ、『日本樂府』起稿ノ過程ヲ檢スルニ、文政十一年〇四十九歳十二月十九日、門人橋本

竹下ニ與ヘシ書翰ニ、

「此節は、日本の詠史樂府……六十六首いたし候。」（是ヨリ先、五十首成リ、假ニ淨錄セルモノアリ）

又、廿二日、同ク江馬細香ヘハ、

「僕、此冬の業（自注、冬と云へども、臘月以來也、廿日強）、日本樂府六十六闋……。」

ノ成稿ヲ報ジ、廿八日、ソノ跋ヲ加ヘタリ。卽チ自家適意ノ候ト稱スル、梅花水仙・人忙我閑ノ淸興ニ乘ジテ、ソノ一氣渾成セラレタルヲ見ルベシ。是レ倂シナガラ親シク國初以來ノ史書（政記）ヲ編シツヽ、アリシ副產物トシテ、スラ〳〵ト出デ來リタルモノナルヲ想フ。

文政十二年正月九日、大倉笠山ニ與ヘテ、

「〔大〕日本史之內、一二處見合（參照）申度事有レ之、何家にてなりとも、御借書被レ下度奉レ煩候。」

トテ、仲哀天皇。應神天皇・朱雀天皇本紀、及ビ新羅傳・紀貫之傳・藤原純友傳ノ借書ヲ望

メリ。是レ蓋シ『樂府』修正ノ爲メニセル所ナルベキモ、亦『政記』著筆ノ上ニ參照スル所アラントシタルヤモ測ラレジ。

『政記』ノ起稿、將ニソノ完成ヲ告ゲントシテ、天保三年〇五十三歳九月十一日、篠崎小竹ニ與ヘタル書翰ニ、

「積勞出來り〔六月十二日、喀血以來〕、立の物を横にする氣力もなくなり候。然し、一片精神依然、拙著政記も、十四五卷に可ニ相成ハ、案外卷帙浩大に候へ共、觀ニ〔大〕日本史」は大造也。〔巖垣松苗の〕國史畧は年代記同前。〔政記は〕日本の事〔史〕を展觀〔して〕、實に經世の務に補度と存〔ずる〕人には、屈竟の書也。時變多くなり候時節〔鎌倉幕府時代〕より、事迹は外史に讓る心なれども、論〔史論〕は割より多し。追付〔不日〕落成候故、懸ニ御目ニ可レ申と存候へ共、無ニ副本一也。」

「政記は大造〔文中、詩鈔開版の事を語り、それに比しては、政記は大部なりとの意〕此上木は死後と可ニ相成一候。此論計(バカリ)鈔出、刻候も妙ならん、唯今にては、唯箇樣

の事のみ關レ心、道力不レ足とも可レ申哉。 しかし、皆々關ニ世道人心一匪レ細也。」

ト、重患ノ身ヲ提シテ、『政記』纂述ノ上ニ、ソノ抱負ノ在ル所ヲ語レリ。

是ヨリ先、八月八日、在塾關藤藤陰（廿六歳）ヲ病牀ニ呼ビ、『政記』ノ記事增訂ノ事ヲ命ジ、成功ノ上ハ、著者トシテソノ名ヲ卷頭ニ竝ベ、コレヲ千載ニ期スベク、專心事ニ當ルベキヲ勗メシメタリ。 同時ニ門人牧百峯ニ對シテ、ソノ功ヲ分タシムベク、刊本卷七・光孝天皇ヨリ、卷八・後冷泉天皇ノ條ニ至ルマデ（刊本第四册）ハ、コレヲ百峯ノ分擔トシテ整理セシメタリ。

更ニソノ手稿ノ未ダ完成ニ至ラザリシ元龜二年（卷十六）以降、卷末慶長三年ニ至ル期間ハ、全部、ソノ代作ヲ命ゼラレ、百峯ノ意見ヲモ求メテ、九月廿三日―山陽易簀ノ當日―辛ウジテ、一部ノ『日本政記』ハ、ソノ淨錄本ヲ見ルニ至レリ。

ソノ間、山陽ハ稿本ノ字句ヲ、スベテ病牀ニ在リテ删潤シ―同時ニ『通議』・其ノ他ノ修正ト共ニ―八月廿六日、門人後藤松陰ニ與ヘシ書翰ニハ、

「政記體、如ニ貴諭一致申候、追々出來候。」

トアリ。　松陰ハ、本書ノ體制上、何事カヲ進言シタルナルベシ。

妻梨影ガ山陽歿後ノ消息ニハ、

「九月五日ごろより、又々よほどよわりはれ候へども、いつこ〔一向〕氣ぶんも、もとよりは少もかわり不」申〔精神依然〕……しかしながら、せき〔咳〕つよく、夜分よこね〔横臥〕出來がたく、いろ〳〵とかんがへて、ふし〔臥し〕候やうとかんがへ〔ながら〕、やはり、つくえにかゝり、物どもかんがへ、そうこうあらため〔草稿修正〕申候。」

ソノ草稿ハ、主トシテ『政記』ヲ指セルニ外ナラザルベシ。

「〔九月六日〕、御草稿、今朝、大分勞」肺候。」

小石檉園ノ文ヲ批閲シテハ、又コノ言アリ、而モ『政記』ノ改删修正上、多大ノ心力ヲ勞セシコト、其レ幾許ゾヤ。小竹ニ與ヘシ書中ニハ更ニ、

「此間〔九月十一日以前〕、委頓の極に、政記最末に、豐臣氏間竿（ケンザヲ）〔檢地〕の法、一ニ變先王制」候事極論して、徹頭徹尾の括りと致候。此精神は未」死と相見候。」

『政記』最末ノ史論ニハ、堂々ト慶長檢地ノ不可ナルヲ痛論シテ、大化革新ノ正税ヲ壞リ、「丈田ノ法ヲ一變シテ……萬町ニ六百萬歩ヲ加ヘ、又、一歩ニ就キ、各二尺ヲ縮メ……税額ノ百倍シタル」ヲ指摘シテ、「ソノ法遂ニ一タビ成リテ、而シテ破ルベカラズ。」ト論ジ、江戸幕府ノ當時ニ入リ、「上下相習レテ、恬トシテ恠ト爲サズ」ト言ヒ、敢然トシテ大減税論ヲ唱道シテ、民政ノ上ニ心ヲ用キルノ淺カラザルヲ示セリ、以テ『政記』一書ノ結論トナセシハ、カノ畫像自贊ニ、

「躬偃二仰一室一。而心關二百代之失得一。弗レ恤二己鹽虀一。而憂二人家國一。」

ト言ヘルモノ、亦ソノ浮言ニ非ザルヲ徴スベキナリ。

更ニ山陽「行狀」ノ筆者タル門人江木鰐水ハ言ヘリ、

「其ノ病ムヤ、「九月九日」猪飼敬所翁、來リ訪ヘリ。談、南北正統ノ事ニ及ビ、議大ニ合ハズ、戩、時ニ病ニ侍セリ。翁、スデニ去リ、先生ハ曰ヘリ、苟クモ北朝ヲ以テ正統トナサバ、豈新田・楠ノ諸公ヲ以テ、亂臣賊子トナス乎ト。コレヲ言フ時ニ方リテハ、目張リ眉ハ軒リ、其ノ慷慨激烈ナルコト、病メリト雖モ衰ヘザリキ。遂ニ

更ニ正統論ヲ著シテ、コレヲ政記中ナル〔南北朝〕初論ノ後ニ置ケリ。」

南北朝論第二篇ハ、越エテ十二日ノ夜、咳ツヨク寢ツキノ惡カリシマヽ、ソノ腹稿ヲマトメツヽ、十三日〔歿前十日〕ノ朝、自カラ筆ヲ執リテ、コレヲ整錄シタルニテアリキ。

梨影ノ消息ニハ、

「十三・四日ごろは、まだ高づくえにて、とき〲御かゝり、何か御かんがへ遊し候も、せきつよく候。」

南北朝論ニ就キ、改删ノ勞ハ、無理ニモ日ゴロ愛用シツヽアリシ和蘭風ノ高卓ニ凭リカヽリテ、咳キニ咳キツヽ、成サレタルヲ想フベキナリ。

「〔北朝〕後小松〔天皇〕、始メテ〔神〕器ヲ傳ヘテ禪ヲ受ケタマヒ、〔南朝〕後龜山〔天皇〕ヲ尊ビテ、太上天皇トナシタマヘリ。事懿ニシテ、禮ハ善ク、以テ此レヨリ前ノ分派ノ陋ヲ盪滌スルニ足リ、上、列聖ノ統ヲ承ケ、而シテ下、後世ニ顯示セラル。蓋シ天、祖宗トトモニ、實ニコレヲ佑ケラレ……天命一タビ定マリテ、以テ今ニ至リ朝廷ソノ清明ヲ復シテ、其ノ一統ヲ大ニシタマフハ、日月ノ再ビ天ニ中シテ、山河

ノ皆明ラカナルガ如キナリ。而モ「北朝正統論者ハ」何ヲ苦ンデ、ソノ口吻ヲ汚シ、北ト曰ヒ、南ト曰フカ…………此ノ義、明ラカナラズンバ、則チ萬世ノ後、天地再變シテ、復姦雄足利氏ノ如キ者アリテ、其ノ私ニ便ナリトスル所ヲ擁立センニハ、則チ今日ノ自カラ北朝ノ臣子ナリト稱スル者、マサニ相率ヰテコレニ從ハントス、是レ亦一ノ北朝ヲ生ズルナリ。吾レコレヲ惧ル、以テ辨ゼザルベカラズ。」

煌々タル國體ノ精神、尊嚴ナル大一統ノ本義ハ、明目張膽、以テ論斷セラレ、更ニ本論ノ整錄ト共ニ識語ヲ著ケテ言フ、

「…………蓋シ政記、兩統合一ノ際ニ在リテ、スデニ一論アリ。近ゴロ客アリ、コノ説「北朝正統論」ヲ發ス。吾レコレヲ極論セント欲スルモ、而モ肺疾アリテ、劇談スベカラズ。遂ニ更ニ一論ヲ作レリ。九月十二日夜、咳シテ寐ヌルコト能ハズ、枕頭ニ就テ腹稿シ、明日、稿ヲ錄スルコト此クノ如シ。病困綿綴シテ、精神此ニ止マリ、精思スルコト能ハザルナリ。」

九月十六日、詩ノ絕筆トシテ誦セラル、「喜ニ小竹來問ヒ疾」ノ吟ニ、「喜聞ニ吾友聲」

力ㇾ疾咲相迎。 筐裡出ニ新著一。 病來成ニ課程ニ」ノ句ハ、卽チ『政記』ノ外、『通議』ノ稿本ヲ示シタルヲ言ヘルナリ。

九月廿三日、コノ日、ソノ疾スデニ革(キハ)マリテ、幽明、境ヲ殊ニスルニ至ラントハ、神ナラヌ身ノイカデカ知ルベキ。 ソノ晝間、藤陰ハ、別室（山紫水明處）ニ入リテ、稿本執筆ノ折カラ、病室ヘ呼バレテ、元龜二年ノ條以下、ソノ功程ヲ問ハレ、ソノ朝スデニ全部ノ成稿ヲ告ゲシヲ答ヘシニ、山陽ハ最早改刪ノ氣力ヲ絶チ、自身手稿「時ニ國朝政紀ト題シ、後漢・荀悅ガ『漢紀』ノ體制ニ倣ヘリトイヘリ」ノモノニ續ケテ可ナリトイヒ、但、目前ノ急トシテ、跋ノ淨錄ヲ命ゼラレタルニゾ、彼ハ直チニ引返シテ、草々筆ヲ執リ、更ニ枕上ニ就キコレヲ供覽セシニ、山陽ハ眼鏡ヲ用キテ、コレヲ手ニシツヽ、原文不明ノ文字ヲ敎示シ了リ、梨影ノ外、兒支峯（十歲）及ビ百峯ヲ侍セシメ、病軀ヲ撫デ摩ラセツヽ、アリキ。

此クテ藤陰ハ室ニ還リ、『政記』ノ續稿ニ從事中、再ビ病室ニ呼バレテ、脊ヲ摩レト命ゼラレ、梨影ハ腰ヲ壓(オサ)ヘ、百峯ハ來診シタル小石檉園ニ麾カレテ、別室ニ入リ、門人兒玉

旗山等モ駈ケツケ來リ、看護ニ日ノ傾ケルヲ覺エザリシニ、更ニ々々山陽一代ノ終焉ガ、今コノ時ニ在ラントハ、誰モ思ヒ及バザリシナルベシ。

此クノ如クニシテ、『政記』ハ實ニ著述絶筆ノ一トシテ、ソノ生々（ナマナマ）シキ記念書冊ヲ、長ク天地ノ間ニ留メ得タリ。

藤陰ハ、山陽ノ歿後、深ク師命ノ重キヲ思ヒ、嘉永年中、江戸ニ在リ、水戸藩士櫻眞金ニ由リテ、豐田天功ノ手ニ校閲ヲ託シ、ソノ原本ニ基キ、頼氏正本トシテ開版セラレシハ、文久元年ニ在リ。是レヨリ先、江戸ニテハ『外史』ト同ジク、中西伯基ノ木活版拙修齋本トシテ、弘化二年、初稿ノマヽ、開版セラレシガ、本書ノ初刊ニテアリキ。ソノ後、慶應二年、更ニ頼氏藏版ヲ出ダシ、明治九年、同ジク增補本ノ刊行アリシニ、頼支峯ハ、尙進ンデソノ定本ヲ得ンコトヲ期シ、明治十七年二月十日、藤陰ノ子關藤成緒ニ對シテ、天功ノ校閲本ニ就キ、藤陰ノ淨錄シタルヲ、元治元年ノ火災ニ燒亡シタルヲ惜ミ、右底本ヲ更ニ借用センコトヲ求メシニ、ソノ家亦コレヲ散逸シ、タヾ論文三册ノ稿本ヲ存

セシヲ借リ、ソノ改刻本ヲ出ダセルモノ、卽チ明治十九年版是レナルベシ。

『政記』ハ『外史』ト共ニ姉妹本トシテ、流傳尤モ博ク、特ニ幕末志士ノ間ニ愛讀セラレテ、勤王思想ノ上ニ寄與スル所特ニ深キモノアリ。山陽修史ノ業績ハ、實ニ二書ノ存スルアリテ、儼然動カスベカラザルモノアルヲ見ル。乃父宿志ノ在リシ所、亦以テソノ酬イラレタルノミナラズ、山陽一代文章報國ノ念、亦以テコレヲ空クセシメザリシヲ觀ルベキナリ。

昭和七年神武天皇祭。春風駘蕩、櫻花マサニ發セントスル日、東京青山ノ新居ニ於テ識ス。時ニ皇軍、上海ヨリ凱旋相踵ギ、歡聲、輦下ニ滿ツ。

好尙木崎愛吉

凡例

一、本書ノ原文ハ文久元年板行賴氏正本十六冊本ヲ使用シ、明治十九年發行增補日本政記ヲ斟酌シテ校訂ヲナス。

一、日本政記ハ著者、未完成ノマヽ物故セシタメ殁後頻リニ改訂ヲ加ヘラレ、其ノ結果諸本頗ル異同ヲ生ゼリ。ソノ現行本ト尤モ甚ダシキ相違アルモノハ拙修本日本政記トナス。

一、本稿校合ノ際拙修本トノ對照ヲナシ、其ノ異同ヲ摘出セシモ、之ヲ一々鼇頭ニ標掲セバ頁數ノ增多ヲ來シ、割愛セザルノ止ムナキニ至レリ。

一、史實ノ相違等モ一々檢討シテ標記セント試ミシモ、是亦頁數ノ關係ニテ中止スルニ至レリ。

一、訓讀ハ從來ノ諸本、往々不穩當ト思ハルル所アリ。隨ツテ之ヲ訂正スルニ力メタルモ、猶ホ恐ラクハ脫漏ヲ免カレズ。

一、活字並ニ訓讀ノ法ハ前出日本外史ト同樣ノ樣式ニ從ヘリ。

一、五弓雪窓著日本政記考異一卷、林正弼著日本政記考證二卷、雨森精翁著日本政記劄記十六卷正誤一卷等ハ參考ニ資スルニ足ルモノナリ。

昭和七年四月

賴　成　一　識

日本政記目次

卷之三

卷之四

日本政記目次 終

日本政記 卷之一

頼襄子成 著

神武天皇

諱彦火火出見。小名狹野。號神日本磐余彦尊。天照大神五世孫。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子。母玉依姬。以庚午歲生。年十五。立爲太子。年四十七。卽位。在位七十六年。崩。壽一百二十七。葬大和畝傍山東北陵。

元年。(辛酉)春正月。庚辰朔。天皇卽位於大和橿原宮。先是。甲寅歲。天皇在日向高千穗宮。會諸皇族。議曰。此瑞穗之國。我祖宗之所受於天。而運屬草昧。居此西偏。多歷年所。顧此四方。未霑王澤。遂使邑有君。村有長。各相陵轢。莫之能統一。吾聞。東方有美地。山岳四周。足以恢弘大業。有饒速日命者。稱出我祖支屬。爲長髓彦者所推。先據有此。吾將掃蕩之。定都焉。遂經營四方也。十月。親將發日向。至速吸門。(豐前)得珍彦。收爲鄉導。十二月。至安藝。居埃宮。乙卯歲。入吉備。居高島宮。備舟檝。蓄兵食。戊午歲。二月。航抵浪速。溯流至河內。赴龍田。路險隘。乃東

由生駒山。入大和。長髓彥邀擊我軍于孔舍衛坂。我軍不利。皇庶兄五瀨命。傷於矢薨。乃退還示弱。轉由紀伊入。高倉下・武津見等歸順。以爲鄉導。歷熊野之險。出菟田縣。道臣命爲先鋒。誅兄猾。破八十梟帥于國見岳。斬之。又用珍彥計。設疑兵。殺兄磯城。遂進攻長髓彥。饒速日殺長髓彥來降。時冬十二月也。己未歲。分兵。誅諸窟居賊。盡定大和。相畝傍山東南。爲國之奧區。定爲都焉。至是卽位。立正妃媛蹈鞴。爲皇后。事代主神女奉三種神器於正殿。曰劍。曰鏡。曰璽。以天種子命・天富命主祭祀。掌朝政。可美眞手命率內物部。衛宮中。道臣命率來目部。護宮門。可美眞手。饒速日之子也。

二年。壬戌論功行賞。以珍彥爲大和國造。劍根爲葛城國造。弟猾爲猛田縣主。弟磯城爲磯城縣主。賜道臣命宅地。武津見等受賜有差。可美眞手・天日方・奇日方。竝爲申食國政大夫。

四年。甲子立靈畤於鳥見山。祀皇祖天神。

四十二年。壬寅立皇子神渟名川耳尊。爲皇太子。

七十六年。丙子春三月。天皇崩於橿原宮。

丁丑歲。秋九月。葬神武天皇。

賴襄曰。我王國之成。基可謂深且遠歟。自神武以前。莫得而知焉。蓋以神明之胤。累葉積德。雖在西偏。遐邇屬望。而發之於此爾。抑當草昧之世。雄長棊峙之時。能一舉而定海內。海內帖然。以開千萬年之業。自非天錫勇智。首出羣倫。烏能如此。謚曰神武。允矣。舊志稱。帝德明達豁如。帝新得諸縣。而署之首長。皆疇昔之抗兵反刃者。仍而用之。無所變更。其感恩效力於民。民亦便安之。可知也。且夫以敵帥之家嗣。而既納其降。則授之干戈。委以環衞之任。而不疑。非所謂推赤心人腹中者哉。雖然。總領郊畿。典宮外之兵者。乃用勳舊。與內衞相制。猶彼漢之以羣國兵衞宮。以京輔兵衞城。唐之令元從禁軍出屯渭南。創業垂統者所爲。如合符節。亦可以見明達之一端矣。後世庸主。每因親疎。私存形迹。不能服天下之心。而制禍患之萌。皆不達於此者也。或曰。神武以封建爲制。至天智革之。襄曰。不然。吾觀神武東征之議。有言。曰四方未歸我治。遂使邑有首。縣有君。以相陵轢。如此者。神武之所患。而所以征而蕩一之也。然後。命之首長。有新銓者。有因其故用之者。以大和推之。其他皆然。雖然。政任天造。無甚明制。可知也。而其後。漸既弛廢因襲矣。故天智修而釐之。大定司牧之制。考課黜陟之法。蓋成神武之志。以貽範百王者也。不然。雖以天智之英

武。而革祖宗之制。變開國以還既成之勢。滅人國。絶人世。不知其幾千萬。是一朝而可能乎。曰。不能也。

綏靖天皇

諱神渟名川耳尊。神武第三子。母媛蹈鞴皇后。年十四。立爲太子。在位三十三年。崩。壽八十四。葬大和桃花鳥田丘上陵。

元年。庚辰春正月。天皇卽位。遷居葛城。曰高丘宮。初天皇在儲位。三十四年。神武崩。在諒闇。庶兄手研耳命代聽朝政。威福由己。遂謀大逆。太子知之。密與母兄神八井耳命謀。爲之備。己卯歲冬。伺其困臥。襲誅之。神八井耳戰懼。不能射。太子奪其弓矢。射殺之。神八井耳歎曰。吾不及汝武。宜乎能承纘大業。吾常爲汝輔而已。

二年。辛巳春。立五十鈴依媛。爲皇后。事代主神少女。

三年。壬午春。以彥湯支命。爲申食國政大夫。

二十五年。甲辰春。立皇子磯城津彥玉手看尊。爲皇太子。

三十三年。壬子夏五月。天皇崩。

安寧天皇

諱磯城津彥玉手看尊。綏靖子。母五十鈴依媛皇后。在位三十八年。崩。壽五十七。葬畝傍山西南御陰井上陵。

秋七月。天皇卽位。

元年。癸丑冬十月。葬綏靖天皇。

二年。甲寅遷居片鹽。曰浮穴宮。

三年。乙卯春。立渟名底仲媛。爲皇后。事代主神孫鴨王女。

十一年。癸亥春。立大日本彥耜友尊。爲皇太子。

三十八年。庚寅冬十二月。天皇崩。

懿德天皇

諱大日本彥耜友尊。安寧第二子。母渟名底仲媛皇后。在位三十四年。崩。壽七十七。葬畝傍山南纖沙溪上陵。

元年。辛卯春二月。天皇卽位。　秋八月。葬安寧天皇。

二年。壬辰春。遷居輕地。曰曲峽宮。立天豐津媛。爲皇后。息石耳命女。

二十二年。壬子春。立皇子觀松彥香殖稻尊。爲皇太子。

三十四年。甲子秋九月。天皇崩。

乙丑歲。冬十月。葬懿德天皇。

孝昭天皇

諱觀松彥香殖稻尊。懿德長子。母天豐津媛皇后。在位八十三年。崩。壽一百十四。葬掖上博多山上陵。

元年。丙寅春正月。天皇卽位。遷居掖上。曰池心宮。

二十九年。甲午春。立世襲足媛。爲皇后。尾張連遠祖瀛津世襲女。

六十八年。癸酉春。立皇子日本足彥國押人尊。爲皇太子。

八十三年。戊子秋八月。天皇崩。

孝安天皇

諱日本足彥國押人尊。孝昭第二子。母世襲足媛皇后。在位一百二年。崩。壽一百三十七。葬玉手丘上陵。

元年。己丑春正月。天皇卽位。　秋八月。葬孝昭天皇。

二年。庚寅遷居室地。曰秋津島宮。

二十六年。甲寅春。立姪押媛。爲皇后。

七十六年。甲辰春。立皇子大日本根子彦太瓊尊。爲皇太子。

一百二年。庚午春正月。天皇崩。秋九月。葬孝安天皇。

孝靈天皇

諱大日本根子彦太瓊尊。孝安子。母押媛皇后。在位七十六年。崩。壽一百二十八。葬片岡馬坂陵。

元年。辛未春正月。天皇卽位。遷居黑田。曰廬戸宮。

二年。壬申春。立細媛。爲皇后。磯城縣主大目女。

三十六年。丙午春。立皇子大日本根子彦國牽尊。爲皇太子。

七十六年。丙戌春二月。天皇崩。

孝元天皇

諱大日本根子彦國牽尊。孝靈長子。母細媛皇后。在位五十七年。崩。壽一百十七。葬劒池島上陵。

元年。丁亥春正月。天皇卽位。

四年。庚寅遷居輕地。曰境原宮。

六年。甲午九月。葬孝靈天皇。

七年。癸巳春。立鬱色謎爲皇后。鬱色雄命妹。

二十二年。戊申春。立皇子稚日本根子彥太日日尊爲皇太子。

五十七年。癸未秋九月。天皇崩。

開化天皇

諱稚日本根子彥太日日尊。孝元第二子。母鬱色謎皇后。在位六十年。崩。壽一百十一。葬春日率川坂本陵。

冬十一月。天皇卽位。

元年。甲申遷居春日。曰率川宮。

五年。戊午春二月。葬孝元天皇。

六年。己丑春。立伊香色謎爲皇后。物部大綜麻杵女。

二十八年。辛亥春。立皇子御間城入彥尊。爲皇太子。

六十年。癸未夏四月。天皇崩。 冬十月。葬開化天皇。

崇神天皇

諱御間城入彥五十瓊殖尊。開化第二子。母伊香色謎皇后。在位六十八年。崩。壽一百二十。葬山邊道上陵。

元年。甲申春正月。天皇即位。　二月。立御間城姬。爲皇后。大彥命女。

三年。丙戌遷居磯城。曰瑞籬宮。

六年。己丑遷奉神器于大和笠縫邑。祭天照大神。命皇女豐鍬入姬。常侍掌祀事。先是。列朝皆安神器於殿內。同牀臥起。帝懼其褻瀆。故有此擧。別摸造劍鏡。置之御座。

七年。庚寅定天社・國社・神邑・神戶。

十年。癸巳秋。遣大彥命于北陸。武渟川別于東海。吉備津彥于西國。道主于丹波。並授印。將兵巡按。有不受令者。聽征誅之。未發。會武埴安彥反。自山背。其妻吾田自大坂。共襲京師。帝即命五川狹芹彥。要擊吾田。斬之。命大彥及彥國葺。擊安彥于輪韓川南。射殺之。冬十月。大彥等發京師。

十一年。甲午大彥等還。

十二年。乙未校人民戶口。序壯老。課男女調役。初帝即位數年。飢疫。盜起。帝憂惕。勵精求治。至是。歲大稔。家給人足。民稱曰御肇國天皇。

十七年。庚子詔。課諸國。造舟船。

四十八年。辛未立皇三子活目尊。爲皇太子。命皇長子豐城命。鎭撫東國。

六十年。癸未出雲國亂。遣吉備津彦武渟川別。討平之。

六十二年。乙酉詔河內。開池溝。通水利。

六十五年。戊子任那入貢。其使者蘇那曷叱知。留侍皇太子。

六十八年。辛卯冬十二月。天皇崩。

賴襄曰。鴻荒之事。和漢同然。置而不論。可矣。雖然。祖宗之所源始。亦臣子之不可不知者。非如漢人之語軒羲也。蓋大日靈貴之德。雖不可窺測。徵之神器。如有可得而言焉。夫鏡者明也。劍者武也。而玉璽者仁也。信也。仁信明武。繼天君民之道盡矣。故以遺子孫曰。視此猶視我。國祚之隆。當與天壤無窮。因其言之驗於後。可以知其德之基於前已。吾聞。大廟之充神庫者。耕織之具爲首。因此觀之。其猶后稷歟。及至玄孫。發跡西土。整旅東征。與文武之業無異。而垂統千葉。一姓不替。足以眇視彼八百載。其德果不可測也。夫前王之親神器。崇神之防褻瀆。其意一也。而崇神厲精治民。不處肇國之號。眞可謂善繼祖德者也歟。孔子曰。務民之義。敬鬼神。而遠之。故敬神無如務於民也。世之稱神道者。悠謬荒誕。

而無益於民。皆崇神之罪人也。吾嘗稱王業衰而神道興。何則是祖宗之事也。當王政盛時。誰敢騰之口舌。以樹私說哉。騰之口舌。以樹私說者。始於卜部兼倶之教。足利義尙噫。彼爲何等時耶。宜乎。出此無忌憚者也。

垂仁天皇

諱活目入彥五十狹茅尊。崇神第三子。母御間城姬皇后。在位九十九年。壽一百三十九。葬菅原伏見陵。

元年。壬辰春正月。天皇卽位。　冬十月。葬崇神天皇。

二年。癸巳立狹穗姬。爲皇后。　遷居纏向。曰珠城宮。是歲。遣歸蘇那曷叱知。厚賜任那王。新羅人途要奪之。二國相仇怨。始此。

三年。甲午新羅王子天日槍歸化。賜邑于但馬。

五年。丙申狹穗彥反。伏誅。狹穗彥。皇后兄也。陰懷異圖。誘后行逆。后告實於帝。帝謂。非后罪。命將討狹穗彥。狹穗彥入城拒守。后不忍坐視兄死。抱皇子。奔投城中。詔狹穗彥奉還。不奉詔。后使人奉皇子出城。而與兄同死。

十五年。丙午秋。立日葉酢媛。爲皇后。丹波道主王女。

二十五年。丙辰春三月。遷天照大神廟于伊勢度會。建齋宮于五十鈴川上。使皇女大和姬代豐鍬入姬奉齋焉。

二十七年。戊午始以兵器爲祭幣。是歲。置屯倉于來目。

二十八年。癸亥皇后日葉酢媛崩。初帝母兄和彥命薨。以近臣殉葬。帝聞其號泣聲。惻然。詔禁殉死。至皇后崩。野見宿禰奏請。以土偶殉。帝嘉之。定爲永制。宿禰賜姓土部。世掌大喪。宿禰出雲人。有勇力。嘗受詔。與力人當麻蹶速角力。勝之。朝廷有相撲儀。始此。

三十五年。丙寅令諸國。開池溝八百餘所。以便灌漑。民賴殷富。

三十七年。戊辰立皇三子大足彥尊。爲皇太子。賜弓矢於皇長子五十瓊敷命。

九十九年。庚午秋七月。天皇崩。　冬十二月。葬垂仁天皇。

賴襄曰。自神武一傳。而有手研耳之事。十傳而有狹穗彥之反。皆變之大者。其得失之際。後王之所當鑒也。大凡人事莫重於繼續。而繼續原於婚姻。二者。禍福之所由分也。匹夫之家。且然。況有國及天下者。不愼於此。莫以持先業。而保億兆焉也。所以修前史者。於立后建儲之事。必謹書之。夫綏靖之爲儲貳。既定於先皇在世之時矣。則手研耳雖以庶兄

有功伐。固不容覬覦。否則兄弟相殺。與玄武門蹀血之禍。何以異哉。唯夫神武之慮。勝於唐高祖。是以綏靖無太宗之慚。雖綏靖之運謀決機。能濟大難。抑亦神武早爲之處置之所致也。狹穗彦身爲帝戚。敢圖反逆。蓋亦有以致之。崇神遣將四道。大彦命居首焉。乃皇后之父也。豈頼其戚親。委以兵權耶。雖狹穗彦之資位不可考。而非有權力者。何遽萌此非望哉。其後。若蘇我馬子。乃狹穗彦之志者也。及至藤原氏。世藉戚畹。專恣極矣。而未嘗至謀反逆者。雖名分大定。有異往昔。而亦不弱握兵權故爾。可不鑒哉。至皇后之抱皇子爲質。不過計免兄死已。而還質俱斃。雖其心可悲。要之。非配至尊母天下者之所當爲也。幸而垂仁不惑。使玉石共焚。而不恤。使其惑而不能斷。叛臣將得其計。不亦危乎。

景行天皇

諱大足彦忍代別尊。垂仁第三子。母日葉酢媛皇后。在位六十年。崩。壽一百四十三。葬山邊道上陵。

元年。辛未秋七月。天皇即位。居纏向。曰日代宮。

二年。壬申春。立播磨稻日太郎姬。爲皇后。稚武彦女。

四年。甲戌春。行幸美濃。

十二年。壬午秋七月。筑紫熊襲反。八月。天皇親征。行勦周芳豐前賊。冬十月。至日向。起行宮。曰高屋宮。熊襲有二女。或獻策誂之。歸順。長女納款。誘官軍。殺熊襲。帝惡其所爲。誅之。以次女賜火國造。駐日向六年。筑紫悉平。乃還。

二十五年。乙未遣武內宿禰。巡察東北諸國。還奏其地沃壤。民俗勇悍。可收爲朝廷用。

二十七年。丁酉秋。筑紫又亂。命皇子日本武尊。代征。召美濃・尾張射手。從之。尊時年十六。變服。親詗賊巢。窺賊酋醉。手刺殺之。餘衆讋服。乃還。勦吉備難波賊。

四十年。庚戌東夷反。遣日本武尊。征之。吉備武彥・大伴武日副焉。　是歲。封皇子大碓命於美濃。

四十三年。癸丑日本武尊平東夷而還。至伊勢薨。初尊至駿河。虜佯降。襲官軍。尊奮擊克之。遂自相模航海。抵上總。轉入陸奧。蝦夷降附。還巡視上野・信濃。使武彥分按越國。會于美濃。平近江賊。獲病還。獻俘伊勢大廟。使武彥奏捷京師。病篤。薨。

五十一年。辛酉秋。初天皇欲以日本武尊爲儲貳。會其薨。乃立其弟稚足彥尊。爲皇太子。是歲。以蝦夷俘。分居畿外播磨等五國。

五十二年。壬戌夏。皇后崩。秋立八坂入姫。爲皇后。八坂入彥女。
五十三年。癸亥帝東巡。歷覽東海諸國。還駐伊勢。踰年乃還。
五十五年。乙丑遣宗室彥狹島王。都督東山道諸國。途病薨。明年。以其子御諸別王襲職。討蝦夷未服者。平之。
五十七年。丁卯令諸國。興田部屯倉。
五十八年。戊辰行幸近江志賀。號高穴穗宮。
六十年。庚午冬十一月。天皇崩於高穴穗宮。

賴襄曰。我朝以武立國。神武以還。經數十世。雖時有變故。靖難戡亂。頃刻而辨。天下不搖者。非以兵權在上。綱維可挈故哉。然皆係內變矣。其有外叛。始見於景行云。蓋雖神武能肇造中土。東西諸道。號令未周。自崇神。已漸命將四出。至此。治熊襲。則親將伐之。何者。其事大也。其事大。則其用兵亦大。大兵之權。不可委之臣下也。及賊再燃。難於再動兵。則遣皇子代往。其愼也如此。故至巡察東國。雖初遣大臣。至經略之任。亦任之皇子。其意可以見已。及至後世。兵戎之事。委之有司。雖公卿。亦不甚恤之。況於天子。高拱深宮。曰。賊何能

爲。甚則不識將帥之面也。而責其殲蝦夷賊。及於奏捷。又不時論賞。終之致大權下移。國勢一變。長不復於古。可勝歎哉。至景行之封皇子美濃。又以皇族管領東海。亦有深意存焉。夫以未服之國。其土沃兵强。不可不收爲我資。而不可任之牧宰。亦非其所能任也。於是。封建宗室。使自經紀之。使其力足以鎭撫於當時。而藩屛於異日。以制內外輕重之勢。可謂知大計矣。中古。郡縣成制。雖以親王任國守。其人皆生長婦人手。粹姿弱質。足不履地。皆虛任遙領。遣介・掾。代往而已。是以本支益弱。天子孤立。使朝廷大臣無所忌憚。未必不由此。獨後醍醐以諸皇子充將帥。得景行之遺意。而諸皇子亦有雄勇勝任者矣。然終不能復古者。豈其時已不可爲耶。抑天子不能躬親勤勞。克有終始如景行也。

成務天皇

諱稚足彥。景行第四子。母八坂入姬皇后。在位六十年。崩。壽一百七。葬大和狹城盾列陵。

元年。辛未春正月。天皇卽位于高穴穗宮。

二年。壬申冬十月。葬景行天皇。

三年。癸酉春。以武內宿禰爲大臣。帝與宿禰同年生。自幼相親善。景行帝嘗宴羣臣。帝與宿禰

不至。問之。答曰。百僚宴樂。宿衞不可不戒。景行嘉之。遂立爲儲貳。以宿禰爲傅。至繼位。有此命。置大臣。始此。

五年。乙亥詔。界山河。分國縣。隨阡陌。定邑里。國郡立造・長。縣邑置稻置。東西曰日縱。南北曰日横。山陽曰影面。山陰曰影背。

四十八年。戊午立皇從子足仲彥。爲皇太子。

六十年。庚午夏六月。天皇崩。

辛未歲。秋九月。葬成務天皇。

仲哀天皇

諱足仲彥。日本武尊第二子。成務無子。故立爲嗣。母兩道入姬。在位九年。崩。壽五十二。葬河内長野陵。

元年。壬申春正月。天皇卽位。　冬十月。以大伴武以。爲大連。與大臣竝輔朝政。置大連。始此。

二年。癸酉春正月。立氣長足姬。爲皇后。氣長宿禰王女。　二月。行幸越前角鹿。皇后及羣臣從焉。帝南至紀伊。會熊襲反。親帥舟師。征之。遣使角鹿。令皇后以下。會於穴門。居豐浦行宮。

八年。己卯春。進幸筑紫。居香椎行宮。　秋九月。會羣臣議進討。皇后以爲。先征新羅。則熊襲自

服矣。帝不從。親戰不克。

九年。庚辰春二月。天皇病。崩于香椎宮。皇后與諸大臣謀。祕不發喪。令大連率群臣守行宮。而令武內宿禰密奉喪。殯于豐浦。終決策征新羅。修船艦弓弩。諭群臣曰。此事不必諉之汝等。吾自當之。事成。共其功。不成。吾獨有罪。於是。遣鴨別當熊襲。而自齋戒禱神祇。爲男裝。誓師而發。冬十月。至新羅。新羅主波沙寐錦。不意我大兵奄至。惶遽出降。后命納質子。申盟約。徵犒師金帛八十船。遂爲歲貢定額。高麗・百濟。並望風歸款。乃置官司戍兵。凱旋。十一月。至筑紫。十二月。生皇子。名譽田別。初皇后有孕。征三韓而還。乃生。故稱胎中天皇。初景行帝身材長大。日本武尊・仲哀皆類之。及皇子生。亦奇偉。腕肉突起。似母后雄裝負鞆狀。古語謂鞆譽田。故名云。

前志記。仲哀崩之際。多曖昧者。後世讀者。不免容疑於神功皇后云。賴襄曰。是不容疑者。吾深會其前後事跡。斷知其不容疑也。夫熊襲久雄長西偏。以景行與日本武。前後討伐。而其蟠根餘孽。終不可拔者。蓋倚新羅爲後援也。當時諸大臣更事如武內者。必有建舍近擊遠之策者。皇后以有籌略。從軍與議。亦右其策。而仲哀銳意誅鋤。不聽而親戰。敗衂

病創。創劇終崩。皇后恐諸軍沮喪賊來乘之。大事去矣。是以與腹心密謀。祕喪不發。留大連守行宮。如天子在狀。深溝高壘。相持不戰。而潛兵急發。以遂行前策。直擣巢窟。奪其倚據。然後熊襲果不攻而下矣。特以踰海波。赴未知之地。衆情所疑懼。故多方託之神明。曰。神告我以寶玉之國。帝不從。故暴殂。當相與勉往取之。皆鼓舞從兵之語耳。史氏從而實其事。皇張誇大。而後人不察。所以致紛紜也。胎中天皇之稱。已見民望所屬。雖有庶兄之乘變。圖自立。未幾。就誅夷。攝政數十年。中外無異議。可知其事之暴白。當時厭人心。而何必容疑於千載之下。

應神天皇

諱譽田。仲哀第四子。母氣長足姬皇后。皇后攝政六十九年。崩。帝聽政四十一年。崩。壽一百十一。葬河內惠我山岡陵。

辛巳歲。春二月。皇后奉帝至豐浦宮。乃發仲哀帝喪。將奉梓宮還京師。時帝庶兄麛坂・忍熊二王舉兵。要之播磨。皇后使武內奉帝。航赴紀伊。會麛坂暴薨。忍熊退軍住吉。皇后帥舟師。直向難波。忍熊又退軍菟道。皇后與帝會。命武內進擊忍熊。忍熊敗走。死瀨田。　冬。羣臣尊皇后。爲皇太后。臨朝攝政。

壬午歲。冬十一月。葬仲哀天皇。

癸未歲。春。稱帝。爲皇太子。

己酉歲。還新羅質子。

己未歲。遣使於魏。

丁卯歲。百濟·新羅共入貢。皇太后·皇太子大喜曰。是先帝之所欲。而不見也。羣臣爲之感動。

己巳歲。先是。新羅奪百濟貢物。相易而獻。敕逐新羅使者。遣使其國。責問之。至是。遣荒田別等。將兵援百濟。討新羅。破之。遂定任那七國。加賜地於百濟。

丙戌歲。遣使於晉。

己丑歲。夏四月。皇太后崩。壽一百歲。冬十月。葬于狹城盾列池上陵。諡神功皇后。

元年。庚寅春正月。帝卽位。都輕島。號豐明宮。

二年。辛卯春。立仲姬。爲皇后。

三年。壬辰蝦夷入貢。先是。百濟枕流卒。子阿花幼。叔父辰斯簒立。是歲遣紀角·平羣木菟等。責問之。國人殺辰斯以謝。角等立阿花而還。

五年。甲午定諸國海人・山守部。

七年。丙申高麗・百濟・新羅・任那。並入貢。令武內宿禰役韓人穿池。曰韓池。

九年。戊戌遣武內宿禰。按察西海。其弟甘美內宿禰。讒其密招三韓。據筑紫謀反。敕遣使案驗。有眞根子。貌類武內。自殺以免之。武內潛詣闕自明。敕面對質。甘美內伏罪。特赦死一等。

十四年。癸卯秦主政苗裔在百濟者歸化。分置諸郡。使養蠶造絹。賜姓秦氏。

十五年。甲辰先是。以百濟王阿花無禮。削其東韓地。阿花懼。使其子阿直岐來朝謝罪。至此。復來貢良馬。阿直岐通經典。帝使皇子稚郎子師學焉。阿直岐更薦其國秀士王仁。

十六年。乙巳王仁來。齎獻論語十卷。尋阿花卒。敕遣歸阿直岐。繼位。復其削地。

賴襄曰。道一而已矣。道之在天下也。猶日月也。日月者。天下之日月也。非一國所私有也。道亦然。父子君臣夫婦。無國無之。而慈孝忠義。有別不雜。皆存於自然。非有待於人作也。我邦列聖。保民如子。不讓堯舜禹湯。其風俗尊君親上。相愛相養。又有過唐虞三代之民。則雖無經籍。其道固具在。特未有名而教之。曰仁曰義者耳。譬若人家。同是一里也。而居之。有舊有新。某巷陌。某井溝。皆有名目。記以帳簿。新者必問於舊者。而知之。舊者曰。是吾

巷陌井溝也。可乎。今天下之仁義也。儒者指而私之曰。是漢之道也。有稱國學者。斥而外之曰。是非我之道也。皆非也。道豈有彼此。載之以文。彼較舊於我。彼來而貢之。我取而用之。與釀冶織縫之工何異。載籍者。織縫釀冶也。而仁義者。蠶也。桑也。麴米銅鐵也。以麴米銅鐵蠶桑。爲自彼來者。儒者之見也。欲廢織縫釀冶者。國學者之說也。故曰。皆非也。夫道一也。則學亦一也。寧有所謂國云者乎。陋哉。且夫先王已取而用之。著爲令典矣。而敢非議之。是議先王之典者矣。而幸免於誅也。

二十八年。丁巳高麗使至。表文倨嫚。稚郎子奏劾。責使者。壞表書。

三十七年。丙寅遣使於吳。求織縫工女。先是。百濟獻織縫釀酒冶工。至是。導我使入吳。以漢人歸化者充使。

四十年。己巳春。立皇子稚郎子。爲皇太子。大鷦鷯。大山守並長。帝特愛稚郎子。立之。

四十一年。庚午春二月。天皇崩。大山守謀反。大鷦鷯知之。密告太子。誅之。太子素知大鷦鷯賢。欲讓位。避之菟道。固辭相讓三年。貢獻者莫知所適。太子遂自殺。大鷦鷯驚。馳至慟哭。羣臣遂勸進卽位。

仁德天皇

諱大鷦鷯。應神第四子。母仲姬皇后。在位八十七年。崩。壽一百十。葬百舌鳥野陵。

元年。癸酉春正月。天皇卽位。武內宿禰爲大臣。如故。居難波。號高津宮。

二年。甲戌春。立葛城盤之媛。爲皇后。葛城襲津彦女。

十年。壬午修皇宮。初帝登高。望見人烟稀少。知民貧。乃痛自節儉。宮室不堊。任其頹圮。悉除租稅三年。望見炊烟盛起。喜語皇后曰。朕富矣。后曰。屋漏衣敝。何謂富乎。帝曰。天之立君。爲民也。民之富。乃朕之富也。臣民請輸稅修宮。不聽。至是。始科課役修之。不日而成。

十一年。癸未詔。北河橫溢。下流不駛。每霖。海潮逆上。民苦泥濘。宜鑿宮北地。爲渠通海。以全田宅。又築茨田堤。是歲。新羅人朝貢。因從是役。

十二年。甲申秋。高麗入貢。獻鐵盾・鐵的。敕饗使者。令戸田宿禰射鐵的。洞之。　冬。穿栗隈渠。以漑山背田。

十三年。乙酉置茨田屯倉。定舂米部。

十七年。己丑新羅不貢。遣使責問。乃貢絹物八十艘。

三十年。壬寅秋。皇后遊熊野。帝徵八田媛。納宮中。皇后聞恨之。直赴山背筒城。終焉。

三十一年。癸卯春。立皇子去來穗別。爲皇太子。

三十八年。庚戌春。立八田媛。爲皇后。

五十三年。乙丑新羅不貢。遣田道。將兵討之。虜四邑民而還。

五十五年。丁卯蝦夷反。遣田道討之。軍敗死之。

六十二年。甲戌始置氷室。

六十五年。丁丑遣難波根子・武振熊。勦飛彈山賊宿儺。

七十八年。庚寅大臣武內宿禰薨。

八十七年。己亥春正月。天皇崩。帝末年。刑措二十餘歲。及崩。民如喪父母。皇太子初納羽田黑媛。爲妃。太子之弟仲皇子。佯稱太子。與姦。事露。仲畏罪反。時太子既除喪。未即位。仲舉兵闈宮。皇太子方被酒臥。諸大臣入告。不信。扶上馬奔河內。至埴生坂而醒。入大和。發當麻兵。遣弟瑞齒別皇子。討仲。瑞齒別恐事平後。或被疑。請與平群木菟偕。遂誘仲近臣刺領巾。刺殺仲。木菟請而誅刺領巾。太子乃還。　冬十月。葬仁德天皇。

賴襄曰。仁德之所以爲仁。可知已。仁德之言曰。天爲民立君。君自儉以養民。民富則君富。大哉言乎。是我列聖之所傳。而發之於帝。所以貽範萬孫也。六經所訓。百史所傳。豈有以尙此哉。自是其後。循之者安。違之者危。下至武門。一興一廢。無不由此者。大哉言乎。有德者有言。因其言可以知其德矣。稚郎子之讓位。亦知其德屬天下之望也。然讓之。可也。而至於以讓殺身。過斷髮文身之泰伯。可謂爲已甚者矣。遂致使後世容疑其間。以爲。或有希旨之臣。如羽父之請於魯隱者。而抱焉而慟。又類宋太宗之哭德昭。豈仁德之處兄弟。又有未盡其善者耶。可勝惜哉。世知仁德之仁而已。當帝之時。有若戶田之接高麗使者。以弓力折服其心。有若田道之討新羅。避堅攻瑕。仁者之勇。足以使將帥馭夷狄。又可以見已。帝之德。過禹之卑宮惡服。而不及湯之不邇聲色。有文王之無逸。而無其儀寡妻。閨門不修。子孫視傚。故繼續之際。有仲皇子之亂。允恭安康之際。亦云危矣。反正之智。雄略之武。僅足以靖其難。而雄略之失任那。亦由於好色。夫以仁德之德。而一不愼焉。則貽禍後嗣。如此。況不及仁德者。可不戒焉哉。

日本政記卷之一終

日本政記 卷之二

賴襄子成 著

履中天皇

諱去來穗別。仁德長子。母磐之媛皇后。在位六年。崩。壽不詳。葬百舌鳥耳原陵。

元年。庚子春二月。天皇卽位。都磐余。號稚櫻宮。以平群木菟・蘇我滿智・物部伊莒佛・葛城圓執政。

二年。辛丑春。以皇弟瑞齒別爲儲貳。生而駢齒。故名。

四年。癸卯始置史官諸國。記得失。通四方志。

六年。乙巳春。立草香幡梭姬爲皇后。始置藏職。因定藏部。三月。天皇崩。冬十月。葬履中天皇。

反正天皇

諱瑞齒別。履中同母弟。在位六年。崩。壽未詳。葬百舌耳原陵。

元年。丙午春正月。天皇卽レ位。葛城圓執レ政如レ故。　秋。立二津野媛一爲二皇夫人一。又納二其女弟弟媛一。木事女。　冬。遷二都河內丹比一。號二柴籬宮一。

六年。辛亥春正月。天皇崩。帝無レ嗣。羣臣議迎二皇弟雄朝津間稚子宿禰一。立レ之。遜讓不レ許。羣臣奉レ璽固請。

允恭天皇

諱雄朝津間稚子宿禰。反正同母弟。在位四十二年。崩。壽未レ詳。葬二河內長原陵一。

元年。壬子冬十二月。天皇卽二位于遠明日香宮一。

二年。癸丑春。立二忍坂大中姬一。爲二皇后一。稚野毛二派皇子女。

三年。甲寅帝有レ疾。徵二醫于新羅一。瘳。厚賞遣歸。

四年。乙卯詔。定二姓氏一。帝憂二姓氏亂一。會二內外百官一詛盟。勿レ得二詐冒一。

五年。丙辰冬十一月。葬二反正天皇一。

八年。己未納二衣通姬一。爲レ妃。妃皇后妹。帝聞二其絕艷一。召レ之。以二皇后不一レ懌。乃處二之於河內茅渟宮一。數託二游獵一幸焉。

二十三年。甲戌春。立皇長子木梨輕爲皇太子。

四十二年。癸巳春正月。天皇崩。冬十月。葬允恭天皇。初皇太子好色。通同母弟。時盛夏。帝御膳羹氷。帝異之。命卜焉。知有內亂。不忍罪太子。乃流皇女于伊豫。及帝崩。淫虐益甚。羣臣不服。悉屬心於皇三子穴穗。太子知之。聚兵欲襲殺穴穗。穴穗備兵自衞。太子慮不克。匿物部大前家。穴穗從圍之。太子自殺。十二月。穴穗卽天皇位。遷居石上。號穴穗宮。

安康天皇

諱穴穗。允恭第三子。母忍坂大中姬皇后。在位三年。爲眉輪王所弑。年五十六。葬菅原伏見野中陵。

二年。乙未以中蒂姬爲皇后。初帝欲爲母弟大泊瀨。聘大草香皇子女幡梭。使根使主諭旨。大草香大喜。獻珠縵爲信。根使主私珠縵不進。詐奏大草香拒命。詞意倨嫚狀。帝大怒。遣兵殺之。其臣日香蚊死之。取幡梭。配大泊瀨。又取其妻中蒂姬爲妃。遂爲皇后。

三年。丙申秋八月。天皇幸山宮。暴崩。初皇后爲大草香妃。生眉輪王。及入宮。從養宮中。帝在山宮閣上。謂后曰。朕雖愛汝。獨眉輪介於心耳。眉輪時已七歲。戲閣下。聽之。伺帝醉臥。刺而弑之。大泊瀨皇子聞變。疑諸兄所爲。卽擐甲執兵。馳至。逼母兄八釣白彥。問故。不答。大泊瀨拔

刀斫之。又問次兄境黑彥。又不答。亦欲殺之。黑彥懼。與眉輪亡。匿大臣葛城圓第。大泊瀨圍之第。焚之。誅眉輪。殺黑彥。又殺市邊押磐・御馬二皇子。市邊。履中子。初帝立大泊瀨爲嗣。又愛市邊。欲立之。大泊瀨啣之。故殺之。冬十一月。大泊瀨卽天皇位于泊瀨朝倉。遂都焉。

雄略天皇

諱大泊瀨幼武。允恭第五子。安康同母弟。在位三十三年。崩。壽六十二。葬河內丹比高鷲陵。

元年。丁酉春。立草香幡梭姬爲皇后。　冬。以平群眞鳥爲大臣。大伴室屋・物部目爲大連。眞鳥木菟子。室屋武以子也。

三年。己亥秋八月。葬安康天皇。

六年。壬寅令諸國植桑。敕后妃躬桑。勸蠶事。　是歲。吳人來貢。

七年。癸卯以吉備田狹。爲任那國司。又遣其子弟君。伐新羅。田狹據任那反。

八年。甲辰高麗與新羅相攻。新羅乞援於任那日本府。府帥遣兵擊。大破高麗兵。

九年。乙巳帝以新羅久不朝貢。欲親征之。不可。乃遣紀小弓・蘇我韓子・小鹿火等。將師代征。大破新羅。新羅王出國都走。聚餘衆復振。我將帥不和。軍失利。會小弓病卒。我軍引還。

十二年。戊申始起樓閣。

十四年。庚戌吳人來聘。貢吳織・漢織。先是。敕遣使索工。至是帶來。　根使主罪露伏誅。敕雪大草香部寃。索日香蚊子孫。旌其死義。

十八年。甲寅遣物部菟代・目。勦伊勢賊。菟代逗留不進。目奮戰。獲其渠帥。敕奪菟代采地。賜於目。

二十年。丙辰高麗滅百濟。殺其王及王子。

二十一年。丁巳詔。立王弟汶洲爲王。賜之久麻那利地。圖復其國。

二十二年。戊午春。立皇三子白髮。爲皇太子。　秋。遷丹波豐受太神。祀於伊勢山田。曰外宮。

二十三年。己未春。百濟王汶洲卒。詔遣昆支王子末多爲王。賜兵器。發筑紫卒。護送之。別遣舟師。擊高麗。　秋七月。天皇崩。帝初生。神光滿殿。長而雄果。既定內難。峻刻御下。喜殺。數游獵。親殺猛獸。羣下不能傚者。誅之。喜怒不測。至采女入宮者泣求免。嘗遣吉備田狹。守任那。奪其妻。致田狹反。然性明決。時納善言。末年尤留心政治。第三皇子生而白髮。性仁愛。帝異重之。立爲儲貳。帝大漸。召百僚與訣。殊詔大連大伴室屋及東漢掬。輔弼太子。星川王。田狹氏

所生也。帝知其心懷悖逆。使善備之。既崩。星川王據大藏宮反。室屋・掬奉太子。率兵圍宮。誅王母子。

淸寧天皇

諱白髮武廣國押稚日本根子。雄略第三子。母韓媛。大臣葛城圓女。在位五年。崩。壽四十一。或云。四十二。葬河內坂門原陵。

元年。庚申春正月。天皇卽位于甕栗宮。遂都焉。大臣平群眞鳥。大連大伴室屋如故。　冬十月。葬雄略天皇。

三年。壬戌秋。遣臣・連諸國。巡察風俗。　冬。詔。罷獻狗馬器玩。　宴臣・連。賜綿帛。是歲夏。立履中天皇孫億計王。爲皇太子。初雄略帝害市邊皇子。誘與獵。射殺之。皇子有二子。曰億計。曰弘計。帳內日下部使主。與其子吾田彥。奉逃於播磨縮見。使主恐事顯。自縊死。吾田彥終始從二子。二子變名。爲縮見屯倉首家僮。會播磨國司小楯徵貢。宿首家。弘計欲告實伸屈。億計以爲不可。已而酒酣。首命二子歌。弘計決意。因歌示意。小楯驚拜。命築宮處之。因馳奏。帝喜曰。吾憂無子。此天賚也。乃遣小楯。迎而立之。以弘計爲皇子。

四年。癸亥春。宴海外諸蕃使於朝堂。前年入貢者也。　秋。帝親錄囚徒。　蝦夷隼人竝內附。

帝御射殿。敕百僚及諸蕃使射。賜物有差。

五年。甲子春正月。天皇崩。　皇太子讓位於弘計。弘計稱先帝命。不從。於是。太子姑飯豐皇女垂簾聽政。　冬十一月。葬清寧天皇。飯豐薨。太子與羣臣。拜弘計勸進。曰。微君決策。吾不至此。有功者。宜享其祿。

顯宗天皇

諱來目稚子。稱弘計。履中孫。市邊皇子子。母荑媛。在位三年。崩。壽三十八。或云。四十八。葬傍岳盤坏邱陵。

元年。乙丑春正月。天皇卽位于近飛鳥八釣宮。以大臣等復固請。大臣平群眞鳥。大連大伴室屋。如故。以皇兄億計王。爲儲君。　立難波小野媛。爲皇后。邱稚子王女。　二月。詔。索市邊皇子葬處。親幸近江蚊屋野。得之。改葬焉。

三年。丁卯夏四月。天皇崩。帝久在民間。知百姓疾苦。及卽位。薄賦斂。恤貧窮。歲比稔。粟斛直銀錢一文。海內殷富。

仁賢天皇

號億計。諱大脚。顯宗同母兄。在位十一年。崩。壽五十一。或云。五十四。葬埴生坂本陵。

元年。（戊辰）春正月。天皇卽位于石上廣高宮。　二月。立春日大孃爲皇后。雄略帝女。　冬十月。葬顯宗天皇。

二年。（己巳）秋。皇太后崩。后嘗侍宴先帝。無禮於帝。及帝卽位。懼自殺。

六年。（癸酉）遣使高麗。求工匠。

七年。（甲戌）春。立皇子小泊瀨。爲皇太子。

十一年。（戊寅）秋八月。天皇崩。帝聰敏仁恕。吏稱其職。民安其業。戶口滋殖。初顯宗卽位。欲發雄略陵。以報父仇。帝諫曰。如先帝之恩何。乃止。　冬十月。葬仁賢天皇。　十一月。皇太子誅平群眞鳥。眞鳥專政四朝。陰圖不軌。佯稱爲太子築宮。遂自居焉。其子鮪又無禮於太子。太子夜幸大伴金村宅。發兵。要鮪於途。斃之。遂圍眞鳥第。焚殺之。　十二月。皇太子卽天皇位于泊瀨列城宮。遂都焉。　以大伴金村。爲大連。

武烈天皇

諱小泊瀨稚鷦鷯。仁賢子。母春日大孃皇后。在位八年。崩。壽未詳。葬傍丘磐坏丘陵。

元年。（己卯）春。立春日娘子。爲皇后。

六年。甲申百濟入貢。先是百濟王末多暴虐。國人弑之。立其族斯麻。至是來貢。帝以其久闕貢。拘留使者。

七年。乙酉百濟更使其族斯我來貢。

八年。丙戌冬十二月。天皇崩。帝好刑名。日昃視朝。聽決訟獄。善爲鈎距。發奸摘伏。無所失。諸慘刑。必親臨視。至刳孕婦胎。解人指甲。使掘薯蕷。使人緣木。親射墜之。廣苑囿。數游獵。縱酒漁色。横征暴歛。天下苦之。

繼體天皇

諱男大迹。應神五世孫。父彥主人。母振媛。在位二十五年。崩。壽八十二。葬藍野陵。

元年。丁亥春二月。天皇卽位于山背樟葉宮。初應神帝四世孫彥主人王。在近江三尾。納三國坂中井人女振媛。爲妃。生帝。王薨。帝養於母家。及長。有大度。禮賢愛士。武烈帝崩。無嗣。大連大伴金村與羣臣議。求皇族。迎仲哀帝五世孫和彥王於丹波。和彥望見儀仗。懼而逃匿。是歲正月。金村及大臣巨勢男人。大連物部麤鹿火等。更議迎帝於三國。帝據胡床。列臣僕。見之使者敬憚傾心。帝猶豫未就道。會河內荒籠者。潛遣人。具白臣・連奉迎無佗意。帝卽發。至

宮卽位。臣連如故。召荒籠賞之。　三月。立手白香媛爲皇后。仁賢帝女。　詔戒百僚及庶民。并力農桑。禁游手浮食。

二年。戊子冬十月。葬武烈天皇。

三年。己丑檢百濟民逃在內地及任那者。量歸百濟。尋賜筑紫馬四十匹於百濟。

五年。辛卯遷居山背筒城。後遷弟國。終遷大和磐余。曰玉穗宮。

七年。癸巳夏。徵五經博士段揚爾於百濟至。附奏。伴跛國奪己汶地。冬。詔新羅・伴跛。使還之。立皇庶長子勾大兄。爲皇太子。

十六年。壬寅梁使者司馬達來。

二十一年。丁未夏。遣近江毛野。將兵六萬。赴任那。復新羅侵地。筑紫國造磐井受新羅賂。據火豐二國。以遏王師。秋。以大連物部麤鹿火。爲大將。赴援。聽便宜行事。

二十二年。戊申冬。物部麤鹿火與賊戰御井。大破之。誅磐井。遣使新羅。新羅奉約。

二十三年。己酉任那王訴新羅背約。詔。遣近江毛野。和解諸蕃。毛野綏馭失方。敕召還之。

賴襄曰。國朝之服三韓。洵不世之功也。然爾後我所以爲務者。在於三韓。闕貢則不得不

責。責而不服。則不得不伐。如騎虎之勢。不可中下。是以上古之史。三韓之事居半焉。當其時。蓋將卒疲於奔命。農民困於糧餉。敝國內。以事外夷。可知也。是豈爲計之得者哉。是故日羅之答敏達帝也。論內外之本末。言戰守之得失。有見於此爾。雖然。揆之時勢。有不可概論者。當神功・應神之際。吾國風氣未全開。士女金帛之豐備。或不及三韓。而兵卒之勇悍。則不啻過之。故吾用我兵卒。而收彼之金帛。所收多。而所用寡。已納其貢獻。又役其人丁。故稱百濟。爲內官家者。猶曰我外府也。當是時。所失少。而所得多。及至其後。我風氣已闢。凡百民用。無須於彼。而仍襲前代之故。則所得少。而所失多。復任那。扶百濟。如既富之家而猶經紀舊屬之小戶。其事雖義。其志雖殷。內自罷敝。而無益於彼。故曰。不可概論也。雖然。當其初也。置府任那。臂使三韓。易置百濟之主。如奕棊然。何其盛歟。而何修以致之。曰。上下同心。國如一人。而處置外國。足服其心。是已。嗚呼。後之有國者。可不必冀其盛。當學所以致之也。

二十四年。庚戌詔。舉廉節之士。曰。禍亂略平。內外無虞。年穀比登。恐吏民因此。習貪婪。生奢侈。其舉廉節。務清政治。

二十五年。辛亥春二月。天皇疾病。傳位皇太子。而崩。　冬十二月。葬繼體天皇。

安閑天皇

諱勾大兄。繼體庶長子。母目子媛。在位二年。崩。壽七十。葬古市高屋陵。

元年。甲寅春正月。天皇卽位于勾金橋宮。大伴金村。物部麤鹿火爲大連。如故。　三月。立春日山田媛。爲皇后。仁賢帝女。

二年。乙卯春。大酺。　冬十二月。天皇崩。帝有人君之量。在位間。上下殷富。無嗣。羣臣以皇弟武小廣。爲人爽朗謙和。宜立。定議奉之。　是月。葬安閑天皇。

宣化天皇

諱武小廣國押盾。安閑同母弟。在位四年崩。壽七十三。葬桃花鳥坂上陵。

元年。丙辰春正月。天皇卽位。遷居檜隈廬入野。　二月。以蘇我稻目。爲大臣。　三月。立橘仲姬。爲皇后。仁賢帝女。　夏。修諸國屯倉。備凶荒。　秋。大連物部麤鹿火薨。

二年。丁卯新羅侵任那。詔大連大伴金村。遣其二子磐。狹手彥。援之磐留鎭筑紫。狹手彥赴任那府。

四年。己未春二月。天皇崩。帝無嗣。羣臣定議。迎立繼體帝嫡子天國押開。 冬十一月。葬宣化天皇。 十二月。天國押開卽天皇位。

欽明天皇

諱天國押開廣庭。繼體嫡子。母手白媛皇后。在位三十二年。崩。壽未詳。葬檜隈坂合陵。

元年。庚申春正月。立石姫。爲皇后。 秋七月。遷居敷島。號金刺宮。大連大伴金村大臣。蘇我稻目。竝如故。以物部尾輿。爲大連。是歲。高麗・百濟・新羅・任那・蝦夷・隼人。竝入貢。 撿秦漢及諸蕃投化者七千餘戶。編貫諸國。

二年。辛酉詔任那。與百濟。謀復新羅侵地。

四年。癸亥百濟獻扶南貨財及奴二口。

七年。丙寅賜良馬戰船於百濟。

九年。戊辰高麗攻百濟。我遣兵。援擊卻之。城得爾辛。

十二年。辛未賜麥種一千斛於百濟。百濟伐高麗。復其侵地。

十三年。壬申百濟獻佛像經論。大臣蘇我稻目奏請。受之。百濟附表。稱述佛功德。帝下羣臣議。

稻目請受而禮之。物部尾輿・中臣勝海。同奏國家宗廟百神。載在祀典。別禮蕃神。恐有譴怒。帝乃賜佛像於稻目。稻目捨其向原第。奉之。是歲。諸國大疫。尾輿等奏請燒寺。沈佛像於堀江。　是歲。百濟棄其平壤・漢城。新羅入居之。

十四年。癸酉冬。百濟醫・卜・曆・算等博士。遞番來我。且附送藥物。

十五年。甲戌春。立皇子渟中倉太珠敷。爲皇太子。　秋。遣內臣。援百濟。伐新羅。拔函山城。初百濟王伐新羅。復其故地漢城・平壤。新羅通謀高麗。攻取之。百濟請援於我。故有是役。

十六年。乙亥百濟王聖明爲新羅所殺。王子餘昌遣其弟惠來赴。

十七年。丙子發筑紫舟師。護送使者。遣筑紫大君。率兵守彌氐津。立餘昌。

二十二年。庚辰新羅使者入貢。班之百濟使人下。

二十三年。壬午春。新羅滅任那。毀我官府。秋。新羅貢調至。拘留之。以紀男麻呂。爲大將。率兵討新羅。破其軍。其別將輕進失利。軍士伊企儺爲虜所擒。誘降不屈。罵虜而死。　以大伴狹手彥。爲大將軍。率兵數萬。援百濟。伐高麗。大破之。入其都城。　冬。新羅入貢。又拘留之。

三十一年。庚寅春。遣使新羅。詰其滅任那狀。　夏四月。天皇崩。帝有疾。召皇太子。入臥內。執其

手曰。朕欲征新羅復任那。不果。汝繼朕志。帝性慈仁。新墾田賑給貧民。立爲定制。以四月中巳日。祭加茂神武廟。已而有年。遂爲永制。　秋九月。葬欽明天皇。

敏達天皇

諱渟中倉太珠敷。欽明第二子。母石姫皇后。在位十四年。崩。壽六十一。或云。四十八。葬河內磯長陵。

元年。壬辰夏四月。天皇卽位于大井宮。　以蘇我馬子爲大臣。與大連物部守屋並執朝政。馬子。稻目子。守屋。尾輿子也。

四年。乙未春。立廣媛爲皇后。息長眞手王女。　冬。皇后崩。　是歲。遷居譯語田。曰幸玉宮。

五年。丙申春。立豐食炊屋媛。爲皇后。

九年。庚子新羅貢調。却不納。

十一年。壬寅新羅貢調。又却不納。

十二年。癸卯冬。百濟使者德爾。有罪伏誅。初我葦北國造阿利斯登。在任那府。生子日羅。居百濟。帝聞其才。敕百濟徵之。諮以討新羅復任那之策。日羅曰。服夷之道。在培養國本。何必動凶器。事末節。爲當今之計。上自臣・連二造。國造伴造下至小吏。節用薄斂。訓士敎民。結以信義。二

年食足兵足。然後多造舟艦。列置海津。大張聲勢。使韓人見之。乃遣才辯士。使諸蕃。明示恩威。召其國王。國王不來。召其太佐平王子。先服其心。而問其罪。百濟護送官。猜其言國陰事。留德爾。刺殺之。勅收德爾。鞫問。具服。賜之日羅宗族。誅之。

十四年。乙巳春。大疫。初蘇我馬子信佛。建寺塔第中。師高麗僧慧便。及梁人司馬達。及其女善信尼等。設齋。會物部守屋・中臣勝海奏劾其信妖法。惑民致祟。請燒寺塔。逐善信等。馬子憂懼成疾。懇請禱佛。帝曰。汝獨爲之。勿惑他人。乃還與善信等。馬子喜。復精舍。而深啣守屋等。秋八月。天皇崩。　九月。立異母弟大兄皇子。卽天皇位。母蘇我氏。遷居磐余。號池邊雙槻宮。

用明天皇

諱橘豐日。欽明第四子。母蘇我堅鹽媛。大臣稻目女。在位二年。崩。壽四十一。或云。六十九。葬磐余池上陵。

元年。丙午春。立穴穗部媛。爲皇后。　夏五月。誅三輪逆。

二年。丁未春。帝病。皇子廏戸侍側。祈佛誦經。帝因欲歸佛。以其無例。召羣臣議。物部守屋・中臣勝海曰。舍國神而祈蕃神。不可。蘇我馬子曰。宜從叡旨。卽延僧豐國入內。廏戸握馬子手。泣曰。非大臣歸心福田。誰成今日事。馬子叩頭曰。殿下務興佛法。臣以死守之。守屋睥睨二人。

意色俱惡。廏戸謂左右曰。大連昧因果之理。禍今且至。馬子遂與廏戸謀殺守屋。守屋乃退居阿都。備兵自衞。廏戸先令舍人迹見赤檮伺間。擊殺勝海。 夏四月。帝崩。繼嗣未定。守屋欲立穴穗皇子。馬子遣兵。殺皇子。遂鬪守屋澁川第。河內守屋築稻城。拒卻之時廏戸年十六。束髮。置四天王像于頂。與馬子整軍。復進破之。赤檮射殺守屋。守屋衆潰。闔族亡。於是。建寺。安天王像。收守屋田宅貲財。悉施捨焉。分田一萬頃。賞赤檮。 秋七月。葬用明天皇。 八月。馬子奏炊屋媛皇后。立皇弟泊瀨部。卽天皇位。母蘇我氏。居倉梯宮。

崇峻天皇

諱泊瀨部。欽明第十二子。母蘇我小姉君。堅鹽媛妹。在位五年。爲蘇我馬子所弒。年七十二。葬倉梯岡陵。

元年。戊申蘇我馬子爲大臣。如故。 建法興寺。

二年。己酉詔。遣使。觀察東北諸道。

四年。辛亥夏四月。葬敏達天皇。 冬。詔。遣紀男麻呂。爲大將軍。將兵二萬。屯筑紫。遣使於新羅。新羅行成。遂復任那。

五年。壬子蘇我馬子驕暴益甚。帝疾之。謂廏戸皇子曰。馬子內恣私欲。外飾佛法。朕不能堪。如

何。答曰。陛下唯忍耳。　冬十月。有獻山豬者。帝指謂左右曰。孰能斫朕所疾。如斫此豬頭。宮女失寵者。聞之。以告馬子。馬子懼。謀先發。廏戸居間。兩知其情。憂念累日。　十一月乙巳。馬子使東漢駒弑帝於寢殿。事起不意。羣臣擾亂。馬子命殺數人。乃定。廏戸哭曰。是帝過去報也。是日。葬崇峻天皇。　十二月。立皇女弟額田部。卽天皇位于豐浦宮。母蘇我氏。立廏戸。爲皇太子。厚賞漢駒。漢駒負功不羈。通馬子女。馬子怒。縛漢駒庭樹。自射殺之。曰。是弑君之賊。吾爲行誅。廏戸聞之曰。雖有此誅。蘇我氏弑君之名。千載不可雪也。然善遇馬子。不忤其意。

賴襄曰。儒學與佛說。皆自外國來者。無擇也。而佛說一入吾國。有好之崇之。以易君父者。何哉。儒學敍人倫。平易無可喜。其文雖外來。而其實固在我。不如佛說之新異。宏潤誇大。足聳人聽也。吾嘗讀三韓之史。其君之惑於佛說。以致亂亡者。皆是。吾邦未至如彼也。而有酷肖焉者。夫人臣行弑逆。開闢以還所無。可謂天地之大變矣。而諉之過去之報。幾乎三綱淪。而九法斁矣。廏戸智慧過絕人。姑爲太子。以屬人望。其志在異日卽眞。擅乎天下。而倚於馬子之勢。馬子與大連相軋。欲除之而自逞。亦倚太子。以濟其姦。而皆藉於佛說。遂致誦呪媿典禮。堂塔塗膏血。王業之衰。大端在此。三善清行之所言。可以驗焉。雖然。清

行特言其費而已。不知其顚倒是非。混淆善惡。烈於洪水猛獸之害。姦雄之人。每藉之。以解其心。下及北條・足利之崇禪敎。莫非宗此旨也。我邦君臣之義。度越萬國。而西竺之說壞之。歸之於土灰沙塵而止焉。而開其端者。廐戶・馬子也。可勝慨哉。千載之下。獨織田氏斷然不惑。庶幾匡正祖宗之國者矣。是以今之佛說。行於愚夫愚婦。而爲人上者之信之。不至如古昔之太甚。是我邦之幸也。焉知非祖宗佑之冥冥之際也耶。舊事之記。出於廐戶之手。蓋亦有錯亂事實。以資自便者。不可不察也。

推古天皇

諱豐食炊屋。初稱額田部。欽明第九女。用明同母妹。母蘇我氏。大臣稻目女。在位三十六年。崩。壽七十五。葬竹田陵。

元年。癸丑詔皇太子。攝行萬機。蘇我馬子爲大臣。如故。　秋九月。改葬用明天皇。　皇太子建四天王寺于難波。

三年。乙卯詔皇太子。與諸蕃僧。講論佛經于御前。賜播磨水田一百町。倍給東宮俸。

八年。庚申新羅侵任那。遣境部臣等。將兵萬餘。討新羅。拔五城。復使地。

十年。壬戌新羅復侵任那。以來目皇子。爲征新羅將軍。率兵討新羅。

十一年。癸亥來目皇子至筑紫。病薨。詔當麻皇子代往。不果行。
十二年。甲子春正月。始用曆日。賜冠位於羣臣。冠六品。曰德・仁・禮・信・義・智。各有大小。凡十二階。
改制朝禮。頒憲法十七條。
十三年。乙丑詔皇太子。造銅繡丈六佛像各一。高麗獻黃金三百兩。
十五年。丁卯遣大禮小野妹子於隋。
十六年。戊辰夏。隋使裴世清與來。秋。以妹子爲大使。難波雄成爲小使。率學生高向玄理・南淵
請安。及僧旻等。與世清俱如隋。
十七年。己巳妹子等至。
二十六年。戊寅高麗朝貢獻隋俘。
二十八年。庚辰勅皇太子・大臣蘇我馬子等。撰天皇紀・國記及臣・連・伴造・國造等。百八十部。
二十九年。辛巳春。皇太子廏戶薨。諡曰聖德太子。所建寺。四天王・法隆・法興等。凡十一所。諸臣
競倣之。有寺凡四十六所。僧尼凡一千三百八十餘人。
三十一年。癸未新羅復侵任那。遣大德境部雄麻呂等。將兵伐之。新羅降。　是歲。自春至秋。霖

雨。大水。五穀不登。

三十二年。甲申置僧正・僧都。撿校僧尼不法。

三十四年。丙戌大饑。盗賊起。　夏五月。蘇我馬子薨。　六月雪。　以蘇我蝦夷爲大臣。蝦夷馬子子。

三十六年。戊子春三月。天皇崩。秋九月。葬推古天皇。　蘇我蝦夷殺境部摩理勢。立田村皇子。爲嗣。帝臨崩。召故皇太子子山背王。囑後事。蝦夷矯遺詔。欲立田村。羣臣莫敢異議。獨摩理勢不可。故殺之。

舒明天皇

諱息長足日廣額。稱田村。敏達孫。父押坂彦人大兄皇子。母糠手媛。在位十三年。崩。壽四十。葬押坂陵。

元年。己丑春正月。天皇卽位。　蘇我蝦夷爲大臣。如故。

二年。庚寅春。立寶媛。爲皇后。　冬。遷居飛鳥岡。號岡本宮。是歲。遣大仁犬上御田耜等於唐。

三年。辛卯百濟王義慈。使其子豐璋來質於我。

四年。壬辰御田耜等至。唐使高表仁與來。

五年。（癸巳）表仁歸。遣吉士雄麻呂等。送至對馬。

八年。（丙申）夏。岡本宮災。遷居田中宮。

九年。（丁酉）蝦夷反。以大仁上毛野形名。爲將軍。討平之。

十二年。（庚子）大設齋會。講無量壽經于宮中。　是歲。遷居百濟宮。

十三年。（辛丑）冬十月。天皇崩。　葬舒明天皇。

日本政記　卷之二　終

日本政記 卷之三

頼襄子成 著

皇極齊明天皇

諱天豐財重日足媛。稱寶皇女。敏達曾孫。押坂彥人大兄孫。父曰茅渟王。母吉備媛王。在位四年。禪位皇太弟。

元年。壬寅春正月。天皇即位。　蘇我蝦夷爲大臣。如故。　夏。旱。天皇親祈於南淵河上。大雨。冬十二月。遷小墾田宮。

二年。癸卯夏四月。遷飛鳥板蓋新宮。　秋九月。改葬舒明天皇。　冬十月。大臣蘇我蝦夷病。子入鹿代行大臣事。　立舒明帝子古人大兄。爲皇嗣。母蘇我氏。　十一月。入鹿遣兵。襲殺山背王班鳩宮。

四年。乙巳夏六月。皇子中大兄。與中臣鎌足。及倉山田石川麻呂等。誅蘇我入鹿于大極殿。遣兵。討蘇我蝦夷。蝦夷。伏誅。初蝦夷密欲廢帝。立古人大兄。故殺山背王。起第宅。僭擬宮城。皇

弟輕。竝稱病不出。潛謀匡濟。而未敢。鎌足知中大兄皇子可與有爲。會蹴鞠法興寺。皇子靴脫。鎌足跪奉之。因得親近。終告故。懼其漏。同受經南淵氏。密議車中。蘇我氏族倉山田麻呂。與入鹿有隙。因使皇子與結婚。又引佐伯子丸・葛城綱田。爲援。會三韓使來聘。欲乘其際擧事。帝御殿。入鹿侍。皇子戒守門者。鎖絕出入。聚衞士一所。如將賜物。自執長槍。隱戶側。鎌足持弓矢從焉。使子丸・綱田藏二劍貢櫃中而進。倉山田前讀表。將盡。子丸等不敢發。倉山田流汗聲顫。入鹿怪問故。對曰。天威咫尺。不覺乃爾。皇子恐失機。直入斫入鹿肩。子丸斫其脚。入鹿攀御座。乞哀。皇子伏奏曰。入鹿翦滅宗室。陰謀不軌。臣等謹爲宗廟誅逆臣。帝起入內。是日。大雨。潦水溢庭。以席覆尸。賜之蝦夷。皇子入法興寺。以兵自衞。諸皇子公卿皆來從。皇子令巨勢德大古將兵。討蝦夷。蝦夷悉焚圖書珍寶。自殺。　天皇傳位於皇弟輕。初帝以中大兄有功。欲傳位。中大兄以告鎌足。鎌足曰。古人。殿下之兄。不可越次。輕皇子。殿下之舅也。齒德俱高。不如讓焉。以答民望。從之。輕讓於古人。古人固辭。薙髮入吉野。後謀叛被誅。

孝德天皇

諱天萬豐日。稱輕。皇極同母弟。在位十年。改元二。曰大化。曰白雉。崩壽闕。葬河內大坂磯長陵。

大化元年。乙巳夏六月。天皇即位。始建元。尊先帝曰皇祖尊。立皇姪中大兄。爲皇太子。輔政。罷大連。置左右大臣。及内臣。以阿部倉梯麻呂。爲左大臣。蘇我倉山田石川麻呂。爲右大臣。中臣鎌足。爲内臣。以高向玄理・釋旻。爲國博士。　秋七月。立間人媛。爲皇后。　三韓朝貢。百濟攝任那使事。其數有闕。詔卻之。遣巨勢德太古。撿察任那國界。　詔左右大臣曰。治國之方。當遵先王之軌轍。爲政之務。在於無失信於民。詔臣・連・伴造。問民所患苦。具狀以聞。八月。設鐘匱於闕。聽有冤枉者。投牒撞鐘。　九月。遣使諸國。錄戶口。詔曰。歷世天皇。必置標代民。垂名於後。其臣・連・伴造等。亦各置己民。縱情驅使。割水陸地。以爲己有。或兼幷數萬頃。或無立錐地。及進調賦。先自收斂。然後分進。及有徵發。各率己民。隨事而作。方今百姓猶乏。而有勢者。以私地賣與百姓。年索其價。今後不得賣地。勿妄作主。兼幷貧弱。　冬十二月。遷都難波長柄。曰豐崎宮。

二年。丙午春正月。宣新制。詔曰。大夫所使治民。重其祿。所以爲民。前代所置子代民。處處屯倉。及臣・連・伴造・國造・村首。所在部曲・田莊。一切罷之。賜大夫以上食封。宮人百姓布帛。各有差。始修京師。毎坊置長。四坊置令。　按撿戶口。督察奸非。置畿内・國司・郡司・關塞・斥堠・防人・驛

傳。造鈴契。界山河。定郡大中小。置大領・小領・主政・主帳。定租庸調法。造戶籍。制班田收授法。置里長。定田畝。凡田長三十步廣十二步爲段。十段爲町。段租禾二束二把。町租禾二十二束。以秬黍中者一之廣爲分。十分爲寸。十寸爲尺。五尺爲步。三百六十步爲段。以容秬黍中者一千二百爲龠。十龠爲合。十合爲升。十升爲斗。十斗爲石。田一段。得禾五十束。一束得米五升。段米二石五斗。而輸二束二把。則取米一斗一升也。　凡給口分田者。男二段。女減三分之一。每六年。檢戶籍班田。凡庸。正丁歲役十日。若須收庸者。布二丈六尺。一日二尺六寸。制田調。凡絹絁絲緜。竝從鄉土所出。田一町。絹一丈。四町成匹。長四丈。廣二尺五寸。絁二丈。二町成匹。長廣准絹。布四丈。長廣准絹絁。一町成端。又有戶別調。一戶布一丈二尺。凡調副物。及贄。亦從鄉土所出。　二月。三韓入貢。　三月。詔諸國司曰。凡爲人上者。當先正己。而後正人。己不正。何能正人。凡國司在國。不得專判罪。及受賄苦下民。莫藉官勢取公私物。宜各食部內粟。騎部內馬。　秋八月。詔諸國造。納賄國司。兩求其利。貪黷汙穢。不可不治。若有犯者。次官以上。降爵位。主典以下決笞杖。其贓物。倍而徵之。又詔。定葬式。勿得過制。申禁殉葬。　詔諸國。造兵庫問地。收兵仗。繕治沿邊兵備。

賴襄曰。國朝之建。創於神武。開於崇神・景行。而成於應神・仁德。其後德衰。加以雄略・武烈之

酷虐。至敏達・用明。大權下移。姦臣專國。微天智。王業或幾乎熄矣。天智奮宗室之中。運謀決機。親斃大姦於黼坐之下。卽登天位。天下所望。而退讓遷延。歷於兩朝。非有曠世之度。何能如此。而裁定制度。經緯天地。以開萬世之太平。蓋以武王之烈。而兼周公之才。稱曰中宗。非溢也。大凡國朝。以簡質治民。上下同心。國如一人。是國勢所以威四外也。及通隋氏。變質爲文。殆失其故。及至天智。百度大定。後世莫改。大抵取於李唐之制。而所以勝於唐氏者。曰。立吏簡。取民廉。是不失我邦固有之美也。後王之過於模倣。文縟太甚。務於刻剝。則不達祖宗立法之意。而武門之治。民反便之。未必不由於此。雖然。武治有其簡。而無其廉。所以不如王政也。蓋神武以還。國有造。縣有首。雖盡由朝廷撰而命之。或因其舊望。世襲其職者。往往而然。及至天智。蕩而廓之。盡郡縣之。置國司焉。考課易置。收權朝廷。蓋天子精選六十六人之吏。以治萬民。爲民置吏。非爲吏屬民也。雖然。其後國司有更代。而郡大小領。仍或以族望爲之。及關東用兵。有大名小名之目。亦其地方豪族。多出人丁者。而鎌倉創守護地頭。用其類充焉。終成封建之形。而天智之制泯焉。是古今之大勢也。而貴氏族者。由於國俗。雖明王之制。終莫之能勝歟。

九月。遣使。徵新羅質。罷任那調。
三年。丁未春正月。觀射于朝。　夏四月。罷難波渠役。先是。工人比羅夫。建白穿渠通水。民苦其役。有人投匭諫之。即日罷之。
四年。戊申治磐船柵。備蝦夷。置柵戶。
五年。己酉春二月。定置八省百官。制十九階冠。罷古冠。　三月。左大臣阿部倉梯麻呂薨。　殺右大臣蘇我倉山田石川麻呂。初倉山田與弟日向不協。日向譖其謀逆於皇太子。太子奏。遣兵圍之。倉山田自殺。太子後悟其冤。奏。貶日向筑紫太宰帥。
夏四月。以小紫巨勢德大古。爲左大臣。小紫大伴長德。爲右大臣。並授大紫。
白雉元年。庚戌春二月。穴戶獻白雉。因改元。復穴戶三年調役。
二年。辛亥秋。右大臣大伴長德薨。　是歲。新羅入貢。卻之。以使者著唐冠也。
五年。甲寅春。以大錦上高向玄理等。爲遣唐使。　冬十月。天皇崩。先是。皇太子奏請還倭京。未許。太子奉皇祖母尊。移居焉。公卿多從。帝不樂。欲棄位造宮山碕。未成。會病。遂崩。帝爲人柔仁。屢降恩赦。好儒崇佛。不重神道。伐生國魂神社樹。　冬十二月。葬孝德天皇。　皇太子奉

皇祖母尊。踐祚。

皇極齊明天皇

重祚。在位七年。崩。壽闕。葬小市岡上陵。

元年。乙卯春正月。天皇再即位于飛鳥板蓋宮。　中大兄爲皇太子。巨勢德太古爲左大臣。中臣鎌足爲內大臣。如故。　冬。宮災。遷川原宮。

二年。丙辰造岡本宮。又造兩槻。吉野二宮。　鑿渠。自香山。至石上山。

四年。戊午春。左大臣巨勢德太古薨。　夏。越守阿部比羅夫。率舟師百八十艘。伐蝦夷。降之。置渟代。津輕二郡領。又伐肅愼。獻羆熊皮。　冬十月。帝幸紀伊溫泉。　蘇我赤兄留守。有間皇子有罪伏誅。初有間蓄異志。以帝好興造。士民怨讟。因欲起亂。赤兄覺之。收執送行宮。賜死。

五年。己未再伐蝦夷。置後方羊蹄郡領。

六年。庚申新羅借唐兵。滅百濟。百濟佐平鬼室福信。遣使。獻唐俘。請迎其王子豐璋爲主。詔許之。　冬十二月。帝幸難波宮。詔。救百濟。令駿河國造船艦。

七年。辛酉春正月。車駕至筑紫。居朝倉宮。　秋七月。天皇崩于朝倉宮。皇太子奉梓宮。還難波。

冬十一月。殯于飛鳥川原。臨九日。　遣大華下阿曇比羅夫等。救百濟。別令小山下秦田來津以兵五千。護送百濟王豐璋。立爲百濟王。授織冠。

天智天皇

諱中大兄。初稱葛城皇子。舒明長子。母皇極齊明。服喪稱制六年。卽位四年崩。壽四十六。葬山背山科陵。

壬戌歲。春正月。皇太子素服制軍國事。賜金策於佐平鬼室福信。給糧仗布帛。據周留城。進擊唐兵。破之。走新羅兵。

癸亥歲。春二月。福信獻唐俘。夏六月。我兵伐新羅。拔沙鼻岐・奴江城。已而豐璋猜福信專權。殺之。以故羣臣不附。秋九月。唐將劉仁軌等。水陸幷力。攻周留城。我兵拒之白江口。不利退。小山下秦田來津死之。明日。復進戰。敗績。豐璋棄城。逃高麗。百濟亡。皇太子召諸將還。

甲子歲。春。改增冠位。爲二十六階。　冬。興筑紫水城。置防烽壹岐・對馬等處。

乙丑歲。春。追贈鬼室福信小錦下。分處百濟投化民。鬼室集斯等。男女二千餘口於東國。給復十年。　冬十月。大閱于菟道。　是歲。唐使劉德高來修好。丙寅歲。秋。大水。　免租調。

丁卯歲。春二月。葬皇極齊明天皇。　三月。遷都近江滋賀。　冬十一月。城高安（大和）屋島（讃岐）金

田。對馬

元年。戊辰春正月。天皇卽位。　二月。立大和姬爲皇后。　秋。講武近江。置牧馬。　三韓入貢。冬十一月。遣使新羅。賜調船。及絹緜韋等物。　是歲。唐滅高麗。

二年。己巳冬十月。大織冠內大臣藤原鎌足薨。鎌足。小德冠御食子之子。系出天種子命。博學有器略。輔帝。定大難。建制度。至是。車駕臨其第。問疾。就進官位。改賜姓。及薨。賜賻甚厚。

三年。庚午春正月。制朝廷揖讓。行路相避禮。　二月。撿戶籍。糺浮浪盜賊。　修高安城。蓄糧。

四年。辛未春正月。以皇子大友。爲太政大臣。蘇我赤兄。爲左大臣。中臣金。爲右大臣。蘇我果安・巨勢人・紀大人。爲御史大夫。　夏四月。始置漏刻鐘鼓。　秋九月。天皇不豫。冬十月。疾甚。使蘇我安麻呂召皇弟大海人。欲傳位。安麻呂心知帝愛大友。大友因有自立心。因私大海人曰。今日答顧命。宜有意也。大海人領之。乃入。帝屬以後事。辭以病。請出家。聽之。退入省中佛殿。踞胡床。剃髮。詔。賜袈裟。遂入吉野。立皇子大友。爲皇太子。十一月。左大臣赤兄等五人。奉皇太子。盟西殿。再盟帝前。　大炊省鼎自鳴。　十二月。天皇崩。皇太子卽天皇位。　葬天智天皇。

天皇大友

諱大友。初稱伊賀皇子。天智長子。母宅子媛伊賀采女。在位九月。崩。年二十五。

元年。壬申春三月。遣使筑紫。告喪於唐使郭務悰等。停其入朝。　夏五月。高麗入貢。　六月。大海人皇子稱兵吉野。東走美濃。留兵塞鈴鹿道。遣村國男依・鰐部君手等。塞不破道。田中足麻呂塞倉歷。大伴吹負在大和。直應之。帝分遣使諸國。發兵入援。穗積百足等。與和京留守高坂王。軍和京西。發兵庫。輸甲仗于近江。百足爲吹負所誘殺。高坂王叛降吉野。高安城陷。秋七月。朝廷遣壹岐韓國・大野果安。拒吹負。戰於乃樂山。破之。遣山部王。與蘇我果安・巨勢人。進向不破。諸將不協。相殺。軍潰。大海人遣伊勢兵。助吹負。與男依三道並進。韓國敗走。境部藥・秦友足與男依戰。敗。皆死之。吹負・男依等合軍。進至瀨田。帝悉衆。軍橋西。官軍前鋒知尊。撤橋拒之。不利。知尊死之。犬養五十君・谷鹽手等。戰粟津。死之。諸大臣皆逃。獨物部麻呂等・從帝。帝崩于山前。帝多文藝。頗以此驕人。人不樂附。藤原鎌足。其舅也。屢以爲言。不悛・遂及。　八月。大海人議朝臣罪狀。斬中臣金。流蘇我赤兄・巨勢人等。其餘悉赦。不問。　九月。至大和。居島宮。論功行賞。

天武天皇

諱天渟中原瀛眞人。小名大海人。天智同母弟。在位十四年。改元一。曰朱鳥。崩。壽六十五。葬大和檜隈大内陵。

元年。癸酉春二月。天皇即位于飛鳥淨見原宮。立鸕野皇女。爲皇后。三月。大赦。夏五月。詔。凡初出身者。先補大舍人。然後選才授職。秋七月。始置不破關。

二年。甲戌是歲。對馬貢白金。造銀錢。

三年。乙亥春正月。建占星臺。夏四月。祭風神。詔諸國。定百姓貧富。爲三等。中戸以下。許貸税。

四年。丙子春。定諸國司任格。諸臣子弟。及蕃人仕進格。秋。置兵政司。

五年。丁丑春正月。大射于南門。

六年。戊寅詔內外文武官。毎歲。自簡屬官。注擬品階。送法官覈考。送大辨官。

九年。辛巳春二月。立皇子草壁。爲皇太子。三月。詔川島・忍壁二皇子等。撰帝紀。夏四月。制式九十二條。定親王以下。至庶人服色。五月。詔。凡百寮賚縁宮人。恭敬過甚。或納賄請託者。隨事罪之。秋八月。詔三韓投化始至者。並免課役。冬十月。詔大山以下。各上意見。

十年。壬午擬官者。雖有行能。氏族不明者。不得中撰。

十一年。癸未春二月。詔大津皇子。聽朝政。　秋八月。大伴吹負卒。

十二年。甲申夏四月。令親王及諸臣。官無文武。務習軍事。具兵馬器械。有馬者爲騎。無者爲卒。以時撿閱。闕者有罰。　冬十月。分臣民氏族。爲八等。是月。遣使。巡行諸國。定疆域。

十三年。乙酉春正月。改加爵位號。　秋九月。遣使諸道。巡察國司・郡司能否。問民疾苦。　冬十一月。給鐵各一萬斤於太宰府。及周防總領所。箭竹絁布稱之。　詔諸國。鼓角旗幡弓弩類。藏郡廨。勿置私家。

朱鳥元年。丙戌大和獻赤雉。因改元。大赦。　夏五月。天皇不豫。　秋七月。詔諸國。大祓。減海内戸調之半。免徭役。　九月。天皇崩。

頼襄曰。天武之於天智。猶宋太宗之於太祖。而其於大友也。猶明成祖之於建文也。凡書紀所錄。以子書父。必有隱而不證。以曲爲直者。不可盡信已。吾特怪天智不早定儲貳。使太弟與太子分位疑似。所以速壬申之禍耶。雖然。以天智之智。豈有不慮此。察之事情。有難言者矣。蓋天武之與天智。同爲皇極之所出。烏知無有如杜太后之使兄弟相及者哉。

在天智之時。有幸必從。有大號令。必使頒。異日。以皇子知太政。其久屬中外之望者。可知也。唯然。是以難於立年少之大友。及大友年二十四矣。乃以爲太政大臣。蓋欲待其名望足敵太弟。然後立爲太子。而不圖其俄不豫也。則不能不召太弟屬後事。而諸臣已知其旨。所以蘇我安私戒太弟。太弟有披剃之請。其無燭影斧聲之禍者。幸也。大友已立。爲太子。數與大臣詛盟。而其防備太弟。周矣。然適足以迫其起。而決機赴會。每爲所先制。眞建文之類耳。太弟之南。已有放虎之目。迫亦起。不迫亦起。然因其迫。以激衆心。如不得已者。扼其吭。拊其背。其敏兵機。不啻過燕棣。而及難定。獨斬大臣數人。不問其餘。則非永樂瓜蔓抄之比。宜乎。能纘天智之緒。不失天下之望也。至其修明前制。用心武備。令親王諸臣。官無文武。務習軍事。如逆睹後世文武分途。國勢偏枯之弊者。嗚呼。是天武所爲武也歟。

皇后臨朝。稱制。　冬十月。有告大津皇子謀反。賜死。流僧行心於飛驒。

持統天皇

諱高天原廣野。小字鸕野。天智第三女。母蘇我遠智娘。右大臣山田石川麻呂女。配天武。奉皇太子。稱制。三年。太子薨。在位八年。禪位皇太孫。後五年。崩。壽五十八。火葬飛鳥岡陵。

二年。丁亥春正月。皇太子率百官。擧哀。　賜京師民高年。及篤癃貧困者絁緜。有差。　遣使。訃新羅。　秋七月。令諸國。負債在乙酉以前者。莫收息。既役身者。勿量息役之。　冬十二月。爲天智天皇。設法會於崇福寺。

三年。戊子春正月。皇太子朝殯宮。　夏、旱。復諸國今年調賦之半。　冬十一月。葬天武天皇。

四年。己丑春正月。皇太子與皇太后。御前殿。受朝賀。　夏四月。皇太子草壁薨。　是月。新羅使來弔。　責其無禮。卻貢獻。　六月。頒新令二十二卷於諸司。　秋閏八月。點諸國正丁四分。爲兵。以時訓閱。

元年。庚寅春正月。天皇卽位。　大赦。賜鰥寡孤獨。及耆老稻及布。　秋七月。以高市皇子。爲太政大臣。　丹比島爲右大臣。　冬十一月。始行元嘉曆・儀鳳曆。　十二月。行幸藤原。相宮地。

二年。辛卯春正月。始置女官。賜皇女內親王。授命婦位階。　夏。自四月。至六月。雨。

三年。壬辰春。先是。數幸近畿。至是。又欲遊幸。中納言直大貳三輪高市上表。切諫其妨農時。三月。又伏闕免冠切諫。皆不納。高市辭官。　免車駕所過諸國調役。賜國造冠位。　夏閏五月。大水。遣使。稟貸遭災諸國。弛山林川澤禁。

四年。癸巳春三月。詔諸國。勸植桑苧梨栗蕪菁。　冬十二月。遣陣法博士。講武諸國。
五年。甲午春三月。置鑄錢司。　冬十二月。遷居藤原宮。
七年。丙申秋。太政大臣高市皇子薨。
八年。丁酉春二月。立皇孫珂瑠。爲皇太子。時議儲。羣臣各有所主。久不決。葛野王進奏曰。皇朝之典。子孫相承。若兄弟相及。亂之端也。有先太子之子珂瑠王在。誰敢間焉。弓削皇子欲有言。葛野叱之。議遂定。葛野帝大友子也。　秋八月。天皇禪位於皇太子。

文武天皇

小名珂瑠。草壁太子子。母元明。在位十一年。改元二。曰。太寶。慶雲。崩。壽二十五。火葬飛鳥岡。葬檜隈安古山陵。

元年。丁酉秋八月。天皇卽位。　尊先帝。曰太上天皇。多治比島爲右大臣。如故。　以藤原宮子。爲夫人。藤原不比等女。　詔。免諸國今年田租雜徭。及庸之半。優恤高年。
二年。戊戌夏五月。敕太宰府。修大野等三城。　秋七月。始定笞法。禁游手博戲民。
三年。己亥夏五月。流妖人役小角於伊豆。　秋七月。多褹・夜久・菴美・度感諸島人。來貢。
四年。庚子春二月。令越後・佐渡。修石船柵。　申戒諸王諸臣兵仗。　三月。定諸國牧地。　夏六

月。敕淨大參忍壁親王。及直廣壹藤原不比等。撰律令。　八月。多治比島轉左大臣。

大寶元年。辛丑春正月。朔。天皇御太極殿。受百官朝賀。蕃客陪位。朝廷禮儀大備。　二月。釋奠于大學寮。　三月。對馬貢金。因改元。　夏四月。始講新令。使諸王百官就習之。改制官名位號服色。停賜位冠。易以位記。親王自一品。至四品。諸王羣臣。自一位。至八位。各有正從。第九位曰初位。有大少。四位以下。又有上下。總三十等。以大納言阿部御主人。爲右大臣。　五月五日。天皇觀五位以上調馬。　秋七月。左大臣多治比島薨。　八月。律令成。三品忍壁親王。正三位藤原不比等。賜物有差。　是歲。除田租調。

二年。壬寅春。頒新律度量。敕從三位大伴安麻呂。正四位下粟田眞人等。參議朝政。　六月。以粟田眞人。爲遣唐執節使。　秋。多褹隼人叛。薩摩國司請。就國內要害。建柵置戍。　冬十月。詔。旌奕世孝順者門閭。擧戶給復。　十二月。太上天皇崩。持統　是歲。始開岐蘇山道。

三年。癸卯春正月。朔。廢朝。遣使。巡察諸國司治狀。申理寃枉。奏太政官。以屬式部。依令論定。當罰者。屬刑部。　以三品忍壁親王。知太政官事。列左右大臣上。

賴襄曰。國朝。初有大臣。尋置大連。並聞軍國之政。蓋分其權。使無偏重也。蘇我氏以外戚

爲大臣擅政。而物部氏官大連。與之抗爭。物部氏敗。而蘇我氏至行弑逆。則權不分爾。其後。廏戸與中大兄。竝以太子管朝政。多經年所。大友與高市。竝以皇子爲太政大臣。爲日淺。其不委權於人臣。其意一也。及至文武。乃定知太政官事之目。以親王爲之。位在左右大臣之上。自是其後。耆德宗室。更膺其任。以至於聖武之初。朝廷淸明。綱紀畢張。無有權姦壞國之事。當是時。朝議斟酌祖宗之意。立爲至當之制。可爲後世法者。夫太政大臣之名。見於大友高市。前後所無。蓋以爲定國儲之漸耳。非可常置之官也。何則人臣夾輔天子。不可專管太政。人臣而管太政。是弁髦天子也。故特屬之親王。而不敢立官名。稱知太政官事。如曰是儲王也。而與知此官廳之事而已。非實任其官也。實任其官者。則有左右大臣。仍分之也。而其下有辨官。有納言。有外記。判事。體統相屬。管轄而上。而天子臨決焉。所以尊人主之勢。而防權柄之下移也。人主不深察於此。以藤原不比等之爲外舅。欲寵以太政大臣。幸而不敢拜。是猶唐朝臣之不敢拜尙書令。以避太宗舊銜也。如孝謙之於僧道鏡。不論可矣。至文德。以授藤原良房。其後爲帝戚者。往往猥其任。居之不疑。然後祖宗之制一變矣。再變而至武門干政。有主將係此官者。世以爲罕事。以爲是非藤原氏不

拜者。不知藤原氏之拜。已非古也。噫。世變至此。可勝浩歎哉。

夏閏四月。右大臣阿倍御主人薨。　秋七月。詔以年穀不登。災異頻見。減京畿及太宰府管內調半。免諸道庸。　詔五位以上。擧賢良方正士。　冬十二月。葬持統天皇。始火葬。

慶雲元年。甲辰春正月。以大納言石上麻呂爲右大臣。　夏四月。始鑄諸國印。　五月。大極殿西樓上。慶雲見。因改元。賑給高年癃疾。免壬寅歲以前逋稅。　六月。詔諸國兵士。別分爲十番。每番敎習十日。令條之外。勿與雜役。

二年。乙巳夏。旱。大赦。免諸國調半。　五月。知太政官事忍壁親王薨。　秋。饑疫。遣使賑恤。給醫藥。　九月。以二品穗積親王知太政官事。

三年。丙午春三月。前中納言左京大夫三輪高市卒。贈從三位。　詔。禁百官有祿者。勿爭民利。多占山澤。侵蝕疆界。

四年。丁未夏六月。天皇崩。遺詔。擧哀三日。周月除服。　秋七月。羣臣奉遺詔。請天智帝皇女阿閉。卽天皇位。　冬十一月。葬文武天皇。

日本政記　卷之三　終

日本政記 卷之四

賴襄子成 著

元明天皇

小名阿閉。天智第四女。母蘇我姬娘。配草壁太子。生元正・文武。在位八年。改元一。曰和銅。禪位元正。後六年。崩。壽六十一。葬椎山陵。

和銅元年。戊申春正月。武藏秩父郡獻銅。因改元。大赦。賑窮老。旌節孝。免武藏今年庸・本郡調。三月。以右大臣石上麻呂爲左大臣。大納言藤原不比等爲右大臣。　秋八月。改製銅錢。文曰。和銅開珍。廢銀錢。

二年。己酉春。陸奧・越後・蝦夷叛。以左大辨巨勢麻呂爲鎭東將軍。民部大輔佐伯石湯爲征狄將軍。分道討之。　冬十月。初文武有遷都志。不果。帝卽位。決議就役。敕有司。勿致勞擾。因免今年租調。

三年。庚戌春三月。遷都平城。置左右京坊。

四年。(辛亥)秋。詔。凡衞士尫弱。緩急不足用。專委長官。簡點勇敢。每歲代易。後又詔六道諸國。每年貢造器仗。不牢固。巡察使出日。審爲校勘。

五年。(壬子)春正月。正五位上太安麻呂撰古事記。成。奏上。　夏。先是。詔。貸諸國大稅三年。勿收其利。至是。又詔。前賑貸者。本爲濟百姓窮乏。今國郡司及里長等。因緣爲姦利者。以重罪論。秋。大稔。大赦。免諸國田租。畿內調。　九月。太政官奏。陸奧曠僻。蝦夷易叛。請割其地十二郡。爲出羽國。置主宰。

六年。(癸丑)詔諸國。作風土記。

七年。(甲寅)夏六月。立文武帝皇孫美麻斯。爲皇太子。

八年。(乙卯)夏。詔諸國朝集使。諸國百姓。背本貫。規避課役者。淹留踰三月者。卽土斷輸調庸。當從國法。又詔諸國郡司。治殿最。爲三等。致百姓流亡十人以上者。解見任。　秋七月。知太政官事穗積親王薨。九月。天皇禪位於皇女一品氷高內親王。

元正天皇

諱氷高。一名新家。文武姊。在位十年。改元二。曰。靈龜。養老。禪位皇太子。後二十四年。崩。壽六十九。火葬佐保山陵。後改葬奈保山陵。

靈龜元年。(乙卯)秋九月。天皇卽位。改元。尊先帝。曰太上天皇。美麻斯爲皇太子。石上麻呂爲左大臣。藤原不比等爲右大臣。如故。　冬十月。詔。戒諸國司。敎民兼耕陸田。種禾麥雜穀。不專趣水澤之種。

二年。(丙辰)夏四月。詔。凡貢調役夫。入京之日。所司親臨。察其儲備。若國司勤加勸課。能合上制。則與字育和惠。肅淸所部之最。不存敎諭。事有闕乏。則處撫養乖方。境內荒蕪之科。依功過加黜陟。又比年。計帳具言如功。推勘物數。足以掩身。然入京役夫。衣服破弊。菜色猶多。空著計帳。徒延聲譽。務爲欺謾。以邀其課。國郡司如此。朕將何任。今後宜恤民隱。以副所委。　割大鳥・和泉・日根三郡。置和泉監。　秋八月。以多治比縣守等。爲遣唐使。下道眞備・阿部仲麻呂・僧玄昉等。入唐留學。

養老元年。(丁巳)春三月。左大臣石上麻呂薨。　夏四月。詔。禁民恣髡首道服者。及僧尼巫咒妖惑百姓。逐僧行基。及其徒弟。　是歲。行幸美濃。得醴泉。大赦。旌孝義。改元。

二年。(戊午)夏。筑後守道首名卒。道首名爲筑後守。攝肥後事。勸課耕種。多興陂池。及卒。百姓祠之。

三年。己未夏六月。令皇太子始聽朝政。　秋七月。始置按察使。巡省諸道。　冬十月。詔一品舍人親王・二品新田部親王。輔佐太子。

四年。庚申春。遣使。察靺鞨風土。　夏五月。先是。敕舍人親王。撰日本書紀。至是。成。奏上。　秋八月。右大臣藤原不比等薨。不比等。內大臣鎌足子。歷事四朝。文武娶其女。賜封五千戸。世襲。固辭。受二千戸。今上卽位。任太政大臣。亦固辭不拜。及薨。贈太政大臣正一位。至聖武時。追封近江。曰淡海公。四子。武智稱南家。房前稱北家。宇合爲式部大夫。稱式家。麻呂爲左京大夫。稱京家。　以舍人親王。知太政官事。新田部親王知五衞及授刀舍人事。　是歲。隼人・蝦夷竝叛。殺大隅守。陸奧按察使。遣朝臣。討平之。

五年。辛酉春正月。以大納言長屋王。爲右大臣。　二月。以比年凶饑。多軍興。詔求直言。公卿各上意見。免陸奧・筑紫今年調庸。死事者。給復二年。免畿內調・七道役。　冬十二月。太上天皇崩。元明　葬元明天皇。

六年。壬戌秋。詔。以今夏無雨。苗稼不登。諸國司勸課百姓。種晩禾大小麥。及蕎麥。爲儲備。免七道今年田租。

七年。癸亥夏四月。太政官奏。民戶漸多。田地窄狹。勸課諸國。闢田疇。制可。發役所須。皆借官物。給糧食。令各國郡司督役。得良田一百萬町。　是歲。有司奏言。諸國罪人。准法當流以上者。總四十一人。詔並赦之。　漆部司令史丈部石勝。坐盜官漆。當流。三兒皆幼。詣闕。請爲官奴贖父。事聞。詔特釋石勝。

八年。甲子春二月。天皇禪位於皇太子。

賴襄曰。天智畫一之政。天武以還。經於持統・文武・元明・元正。而莫之或更。率由其舊。而倍修治之。課牧宰。禁姦利。通言語。明軍政。正度量。叢律令。其記於策者。班班然可按也。而其大旨在於保民而已矣。民之於君。猶水之於魚。土之於木也。有此則活。無此則死。故保民。乃所以自保也。國朝之定租稅。已輕於二十取一矣。而列朝之政。有水必減。有旱必蠲。有疾疫與作軍旅。必給復之。其逋租積欠。在十數年之前者。時出令除免之。懃懇如此者。不徒垂恩以結其心也。不如此。則民力薄。民力薄。則國本弱。欲強其本者。必培而沃之。猶恐其或蹶。有根斯有枝。有民斯有君。列聖之所爲。亦察於此爾。後世則不然。以爲君本也。民末也。務掊克之。浚其膏血。以自殖。輔其欲者。謂之能吏。呵責鞭撻。以求應副。流亡歲多。田

土歲蕪。補目前之升合。而損後日之億萬。國以貧弱。至不能自保。則誰之咎歟。故曰。君之保民。所以自保也。抑雖後世之君。非不欲保民也。無奈國用不足也。故欲保民者。必自儉。不特自儉也。以此率人。所以上下俱給也。當列聖之時。勸民課種諸穀。至蔬菜之類。莫不曲盡。而交易之用。則止於錢。非如後世之汲汲造金銀幣也。而未嘗聞其用之。或滯且乏。所以能然者何哉。聖武初年。以京師士民。板屋草舍。難營易破。五位以上。及庶民。力堪營辦者。令以瓦葺。嗚呼。其風俗之不奢也。如此。後世之貴金銀。賤穀粟。上下常苦不給。而農民無息肩之日者。其故可知也。

聖武天皇

諱美麻斯。文武子。母夫人藤原氏。右大臣不比等女。在位二十六年。改元三。曰神龜。曰天平。曰天平勝寶。禪位皇太子。後七年。崩。壽五十六。葬佐保山陵。

神龜元年。甲子春二月。天皇即位。改元。尊先帝。曰太上天皇。益一品舍人親王封五百戶。知太政官事如故。加二品新田部親王一品。右大臣長屋王爲左大臣。三月。行幸吉野宮。尊夫人藤原氏。爲皇太夫人。夏四月。陸奧蝦夷叛。詔以式部卿藤原宇合。爲持節大將軍。

討之。令阪東九國兵三萬教習騎射。 五月。以從五位上小野牛養。爲鎭狄將軍。鎭撫出羽。冬十月。遊幸紀伊明光浦。十一月。太政官奏。京師士民。板屋草舍。難營易破。請。五位以上。及庶人力堪營辨者。以瓦葺。塗丹堊。奏可。是月。宇合等還。 是歲。始築多賀城。

二年。乙丑夏五月。幸吉野宮。

三年。丙寅冬十月。行幸播磨印南。

四年。丁卯春二月。聚僧尼九百於中宮。讀金剛經。禳災異。太上天皇好佛。先是。以災異屢見。度僧三千人。令京師諸寺。轉經七日。禱以上皇病。又度三千人。 閏九月。皇子生。 冬十一月。立皇子。爲皇太子。

五年。戊辰秋八月。始置中衞府。及内匠寮。 九月。皇太子薨。是歲。渤海國始遣使來聘。

天平元年。己巳春二月。殺左大臣長屋王。王。高市皇子之子。好文詩。多交游。有告其私學左道。陰謀不軌。即夜。發兵圍其第。明日。遣舍人親王及藤原武智麻呂鞫問。賜死。坐流七人。 夏六月。左京職賀茂子蟲獲龜。背有文。曰。天皇貴平知百年。因改元天平。秋八月。立夫人藤原光明子。爲皇后。藤原不比等女。

二年。庚午夏四月。始置皇后宮職。施藥院。　秋八月。詔。安藝・周防民造妖祠死魂。及京左山原人。妖言聚徒。多至萬人。首斬。次流。

三年。辛未秋八月。以藤原宇合・藤原麻呂・多治比縣守・大伴道足等。爲參議。　冬十一月。新田部親王爲畿内大總管。藤原宇合爲副。多治比縣守等。爲諸道鎭撫使。

四年。壬申夏旱。　秋。發遣唐使。

五年。癸酉赦諸國。以去年旱。貸大税。

六年。甲戌春正月。以大納言藤原武智麻呂。爲右大臣。

七年。乙亥冬十一月。知太政官事舍人親王薨。　是歲。遣唐使還。學生下道眞備・僧玄昉等。偕至。獻曆樂書・佛經等。

九年。丁丑春。陸奥鎭守將軍大野東人奏。本國達出羽柵。行程迂遠。請。征雄勝夷。通直路。制可。遣持節大使藤原麻呂。助之。築雄勝・桃生二城。　秋七月。以右大臣藤原武智麻呂。爲左大臣。尋薨。　九月。以從三位鈴鹿王。知太政官事。

十年。戊寅春正月。立皇女阿倍內親王。爲皇太子。以大納言橘諸兄。爲右大臣。

十二年。庚辰冬。太宰少貳藤原廣嗣。請誅僧玄昉・下道眞備。因擧兵入犯。遣大野東人。將兵伐破之。斬廣嗣。先是。玄昉有寵於太后。還自唐。詔賜紫袈裟。爲僧正。居之内道場。又有寵於皇后。眞備爲中宮亮。不敢言。廣嗣爲大和守。奏劾玄昉。帝不納。納玄昉請奏。使廣嗣外任。廣嗣妻有色。玄昉欲姦之。不可。書告廣嗣。廣嗣乃上表。指斥時政之失。及玄昉・眞備之姦。朝議以爲謀反。發五道兵一萬七千。伐之。廣嗣至板櫃河。縛筏欲濟。官軍先鋒佐伯常人。發弩拒之。呼曰。廣嗣反逆。黨者族誅。廣嗣下馬。拜曰。廣嗣非敢反。請誅姦臣耳。常人曰。矯官符發兵。非反而何。廣嗣不能對。上馬退。其衆遂潰。廣嗣欲航海逃。風逆。還至肥前。被捕斬。及其弟綱手。

十三年。辛巳春正月。遷恭仁宮。受朝。宮垣未成。繞以帷帳。　三月。詔諸道。每國置護國・滅罪二寺。造七層塔。

十四年。壬午春。廢太宰府。　秋。造近江紫香樂宮。

十五年。癸未夏。以右大臣橘諸兄。爲左大臣。　冬。建筑紫鎭西府。置將軍。

十六年。甲申春二月。營難波宮。遷居焉。

十七年。乙酉夏五月。還平城。居中宮院。諸司百官。皆復本曹。遷東大寺。　六月。復太宰府。　秋

九月。知太政官事鈴鹿王薨。　是歲。自夏至秋。地數震。配僧玄昉筑紫。撿造觀音寺。以羣臣多言地震玄昉專恣所致也。

十八年。丙戌秋九月。毀恭仁宮。施於國分寺。　是歲。敕造金銅盧舍那佛於東大寺。　陽下道眞備姓吉備。

十九年。丁亥大饑。

二十年。戊子夏四月。太上天皇崩。　葬元正天皇。

天平勝寶元年。己丑春二月。陸奧守百濟敬福獻黃金。　夏四月。盧舍那佛大像成。帝與皇后・皇太子。幸東大寺。拜慶。改元。左大臣橘諸兄從。授敬福從三位。免陸奧二年調庸。以大納言藤原豐成。爲右大臣。豐成。武智麻呂子也。　秋七月。天皇禪位於皇太子。帝遜位落髮。就唐僧鑑眞。受菩薩戒。自稱三寶奴。

賴襄曰。天武生文武。文武生聖武。當相繼卽位。而持統・元明・元正。以女主。更彌縫其間者。蓋恐幼主不可親政事。馭臣民。而威權或下移也。文武既膺大寶。政無闕失。聖武之爲太子。舍人・新田部二親王。竝以祖叔父輔佐之。稍習聽政。然後元正禪之位。豈非謂其已堪

負荷矣哉。然卽位未周月。輒事巡遊。當是時。太白數晝見。蝦夷叛。發九國兵伐之。將帥未復命。而車駕復南矣。所以消災異者。讀經度僧而已矣。長屋王之獄發於倉卒。不讞而決。莫能審其由。僧玄昉出入兩后宮。醜聲聞外。而無或誰何。則帝之不君柔暗。不待智者而知也。橘諸兄身爲大臣。而不能匡救。不足深責也。獨怪二親王久居輔儲之任。及其未立。必睹其不君之質矣。何不白元正。廢昏立明。以二親王之資望。烏有不可爲哉。不能睹其不君乎。不明也。睹其不君。而不能決廢立乎。不斷也。豈其衰邁耄耋。不能有爲耶。抑勢有不可也。何哉。帝者。藤原氏之出也。鎌足之勳。在於社稷。不比等歷事四朝。身生二后。朝廷崇寵之。至欲拜太政大臣。而爲帝之大援。所以不可搖焉。烏知非長屋王之賢。嘗擬易儲。戚畹所諱。而讒間入之哉。故將兵圍其第。就焉窮治者。皆不比等之子也。而二親王不敢爲別白焉。其事情可見也。玄昉之姦。天下所切齒。故至有抗表擧兵。請誅除之者。而帝不省。雖帝之柔暗。而亦由中有爲之援爾。是君權所以漸下移。非待文德・清和而然也。至如藤原廣嗣之擧兵。激於妻事。類明吳三桂之事矣。而指玄昉・眞備爲讒賊。如宋秦檜之類。未可知其是否也。

稱德孝謙天皇

諱阿倍。聖武第一女。母皇后藤原氏。右大臣不比等第二女。在位十年。改元二。曰天平勝寶。天平寶字。禪位皇太子。

天平勝寶元年。己丑秋七月。天皇卽位。改元。尊先帝。曰太上天皇。　九月。始置紫微中臺。以藤原仲滿。爲大納言兼紫微令。中衞大將豐成弟也。以美姿儀。受寵。

四年。壬辰夏四月。行幸東大寺。百官儀衞如正朝。聚僧一萬。施寺封。至五千戶。禁天下今年殺生。

六年。甲午夏四月。再幸東大寺。受菩薩戒。　是歲。遣唐副使吉備眞備・大伴古麻呂。至自唐。大使藤原清河。留學生阿部仲麻呂。留仕唐。

八年。丙申春。左大臣橘諸兄致仕。尋薨。　夏五月。太上天皇崩。聖武　遺詔立中務卿道祖王。爲皇太子。太子。新田部親王子。天武帝孫也。　葬聖武天皇。

天平寶字元年。丁酉春三月。廢皇太子。夏四月。立太炊王。代之。王。舍人親王子。善於仲滿。得其女寡居者。爲妃。故仲滿立爲儲貳。右大臣豐成爭之。不得。五月。以藤原仲滿。爲紫微內相。

秋七月。下左大辨橘奈良麻呂於獄。杖殺故太子及黃文王・小野東人・大伴古麻呂。流安宿

王於佐渡。貶右大臣藤原豐成。爲太宰員外帥。奈良麻呂。諸兄子也。憤仲滿所爲。謀殺之立廢太子。事露。抵罪。坐得罪者二百六十餘人。豐成又被誣爲黨。故貶。　八月。改元。

二年。戊戌秋八月。天皇禪位於皇太子。

賴襄曰。聖武聽宮闈之勸。糜府庫之藏。塗生民之膏血於寺塔佛像。甘心焉。繼以孝謙之縱恣。居位皆久。六帝豐富之業。於是而衰。譬若民家行儉致富。而逢驕逸之子孫。頓落其產。積之如築山。而喪之如燎毛。是古今通患也。可勝歎哉。吾嘗竊謂。聖武之爲君。其猶唐高宗歟。不能制其婦也。其婦雖橫。未至爲則天矣。而孰知其女之代爲之哉。雖非異姓也。而其忌宗室。剪除之。則同焉。立嗣皇。而旋廢放之。則同焉。變更官名。則同焉。以酷刑立威。彫弊海內。則同焉。悍且淫。則同焉。道鏡如薛懷義。仲滿如張昌宗。而勢力皆過之。怙權作亂。至不可勝言。橘奈良麻呂・藤原良繼。擧李敬業之事。輒不能克。幸而仲滿斃於前。道鏡敗於後。而孝謙亦以病崩。豈非宗廟之有靈焉爾耶。百川・永手運謀定策於廢興之際。頗有狄仁傑・張柬之之風。而不復貽武三思之患。光仁・桓武之中興。不愧明皇之業。而無其天寶之衰。豈其君臣之才。竝有過唐氏耶。抑亦祖宗德澤紀綱。迥別於唐業也。

廢帝

諱大炊。舍人親王第七子。母夫人當麻氏。在位八年。廢於淡路。明年。崩。壽三十三。葬淡路三原郡。

天平寶字二年。（戊戌）秋八月。天皇卽位。尊先帝。曰太上天皇。詔改官名。以藤原仲滿爲太保。改賜姓名惠美押勝。稱尙舅。封三千戶。功田一百町。世襲。冬十月。詔國司交替。以六年爲限。加舊制二年。每至三年。遣巡察使。檢校治績。十二月。敕太宰府。嚴海防。尋令筑紫七國造甲刀弓箭。以小野田守使渤海。還。聞唐有安祿山之亂也。

三年。（己亥）夏六月。追尊皇考。曰崇道盡敬皇帝。冬。置授刀衞。

四年。（庚子）春正月。以太保惠美押勝。爲太師。授從一位。尋進正一位。賜近江高隝淺井鐵穴二所。

五年。（辛丑）冬十一月。以惠美朝獦。爲東海道節度使。百濟敬信南海道使。吉備眞備西海道使。點兵艦四百艘。兵四萬餘。習騎射陣法。以新羅數闕禮。欲征之也。朝獦。押勝子。

六年。（壬寅）夏六月。太上天皇落髮。召五位以上。宣詔。自今。國家大政。賞罰二柄。朕親決之。小事啓天皇。

七年。癸卯夏。旱。　右中辨藤原良繼。謀誅藤原仲滿。不成。詔除姓奪位。良繼。式部卿宇合子。坐兄廣嗣事。流伊豆。赦還。累遷。及押勝擅政。三子竝參議。良繼慚立其下。且疾押勝所爲。與佐伯今毛人・石上宅嗣・大伴家持等。謀除押勝。語洩。下吏鞫問。良繼曰。獨我謀之而已。押勝奏劾大不敬。有是命。　秋九月。以僧道鏡。爲少僧都。道鏡。弓削氏。先是。入內道場。有寵於上皇。帝屢以爲言。故與上皇有隙。

八年。甲辰秋九月。藤原仲滿反。伏誅。押勝懼道鏡奪己寵。謀除道鏡。遂幽上皇。乃諷上皇。自請爲都督畿內・三關・近江・丹波・播磨等國兵事。使兵士更番集習。又私倍其數。用太政官印下之。大外記・兵部省。竝密上變。上皇遣少納言山村王。收其鈴印。詔削押勝官位族姓。遣兵。守三關。其夜。押勝招合黨與。奔近江。官兵直取田原路。先至。燒斷勢田橋。押勝懼。走高嶋。募兵。得數千。奉鹽燒王。爲主。上皇敕從五位下藤原藏下麻呂。將兵討之。押勝航鹽津。逃。風逆還三尾。爲官軍所獲斬。鹽燒王亦被殺。　詔。復官名。召還藤原豐成。復爲右大臣。復藤原良繼姓。敍正四位下。爲太宰帥。以僧道鏡。爲大臣禪師。職掌封戶。一准大臣。　冬十月。太上天皇遣兵部卿和氣王等。率兵。圍中宮院。廢天皇。爲淡路公。天皇不及衣履。出至圖書寮北。受宣。

詔。徙淡路。幽之一院。踰歲。公不勝幽憤。踰垣逃。爲追兵所獲。明日。薨院中。

稱德孝謙天皇

重祚。在位六年。改元二。曰天平神護。曰神護景雲。崩。壽五十三。葬大和高野山陵。

天平神護元年。乙巳春正月。天皇再臨朝。改元。　二月。改授刀衞。爲近衞府。始置內廐寮。禁人臣私蓄兵仗。　以藤原藏下麻呂。爲近衞大將。　秋八月。殺兵部卿和氣王。王。舍人親王孫。竊冀爲皇嗣。數召善巫鬼者。事泄。逃亡。索獲絞殺之。　冬十月。行幸玉津島。　閏月。以僧道鏡。爲太政大臣禪師。令文武百官拜賀。　十一月。右大臣豐成薨。

二年。丙午春正月。以大納言藤原永手。爲右大臣。　冬十月。授道鏡法王位階。在正一位上。服食。準供御。以右大臣藤原永手。爲左大臣。吉備眞備爲右大臣。初帝在東宮。眞備侍讀。

神護景雲元年。丁未春二月。天皇臨大學。釋奠。　秋八月。改元。

二年。戊申七月。旌表對馬貞婦高橋氏。備後孝子綱引金村。

三年。己酉春正月。大臣以下百官。朝道鏡於西宮前殿。　夏五月。放不破內親王京外。帝妹。爲鹽燒王妃。有告其呪詛者。故得罪。　秋八月。詔。遣從五位下和氣淸麻呂於宇佐廟。復命。流

之大隅。先是。廟祝阿曾麻呂希旨。託神語曰。宜傳位於道鏡。因有此命。道鏡召見。怵以禍福。清麻呂出。遇其友路豐永。豐永曰。子此行。所係極大。勉旃。道鏡得天位。吾當與子從伯夷游耳。清麻呂曰。吾生死以之。使還。奏神語曰。我國家。唯神承緒。敢萌非望者。速加誅戮。道鏡大怒。斥爲穢誣。奪官位姓名。處流。使人殺之途。會敕使來。獲免。在配所。參議藤原百川。爲分其封給之。得不乏云。

賴襄曰。所貴於士。以其有氣節。無氣節。非士也。士之有氣節。不獨以立其一身也。足以維持國家。定天下之安危。國之有士氣也。猶家之有柱也。舟之有檝也。舟無檝則覆。家無柱則傾。國無士氣則亡。吾觀於和氣清麻呂之事。有以知之。神龜・寶字之際。朝廷之士。可謂無氣節矣。橘諸兄以華冑。位極正一位矣。聖武之惑溺婦言。事無益興造。不聞其一言匡救之也。帝之慶盧舍那佛也。與皇后・皇太子。備儀衞往。諸兄爲後乘。合掌膜拜。以當萬衆之觀。而不恥也。吉備眞備以儒學受寵兩朝。位至大臣。稱爲帝師矣。玄昉之濁亂宮闈。而熟視之而已。仲滿之驕橫。道鏡之僭竊。而如不聞知。相率拜賀。仰爲法王。而不恥也。觀此二人之所爲。可以推其他矣。景雲之元。釋奠大學。其二年。旌表孝子貞婦。其三年。百官朝

道鏡於西宮。噫。釋奠之禮。何禮乎。旌表之典。何典乎。而眞備則以爲道行矣乎。故講禮講學。儼然稱士大夫。而無氣節焉。則其無益於國也。如此。夫以赫赫天朝。祖宗百世之天下。而欲傳之一比丘。誰不知其不可。而莫敢言者。何哉。曰。懼禍也。當此時。有一人焉。言之。是捐其一身。以存祖宗之天下也。淸麻呂是已。故曰。士之氣節。關係天下國家。有天下國家者。不可不養。此以爲倚賴也。及光仁天皇之卽位。首召還淸麻呂。復其本官。是矜式士大夫。定天下之所向也。嗚呼。可謂知所務矣。天下可百年無如諸兄・眞備者。不可一日無如淸麻呂者。

冬十月。幸由義宮。權建肆廛於龍華寺。號由義。爲西京。　十一月。還。

四年。庚戌春二月。復幸由義宮。　夏四月。還。　六月。不豫。　以右大臣眞備。知中衞左右事。左大臣永手知近衞外衞事。　秋八月。天皇崩于西宮。先是。道鏡侍帝於由義宮。進異味。旣踰。得疾。不起。　右大辨藤原百川。與左大臣藤原永手。近衞大將藤原藏下麻呂等。定策禁中。迎天智天皇孫白壁王。立爲皇嗣。差近江兵二百騎。守衞朝廷。　葬稱德孝謙天皇。流僧道鏡于下野。　九月。詔。省冗官。召還流人和氣淸麻呂。尋復本官。

頼襄曰。宜哉。藤原氏之比隆於王室也。我王家一危於皇極。再傾於孝謙。而匡正之者。皆藤原氏。微鎌足。雖有天智。誰翼戴之。微百川。雖有光仁・桓武。誰定其策哉。其後。又有基經焉。而光孝・宇多得立焉。此五君者。皆光復大業。澤浹後世。謂之中宗・高宗。上接於神武。無愧焉者。而藤原氏援而立之。如捧赤日。而上之天衢。排雲霧。而衣被山川草木。其功。豈不偉也哉。有功斯有報。宜乎。其與王室比隆也。乃天道也。世徒見其中世以後。奕葉專擅也。而憎疾之。過矣。夫使藤原氏無其前之功。而獨有其後之罪焉爾。則謂無天道。可矣。夫其專權也。非倚外戚之親也哉。如此五君。則概非其出也。而其殷殷運謀效力於此者。豈非其心以宗社爲憂。公且誠者也耶。天下之事。非公且誠。不能成也。況當其事之艱難危疑。以不公不誠。處之。雖有才略智勇。安能有濟乎。觀百川之處事。可以見焉。孝謙有疾。有人。曰。能治之。而卻不使進。及議嗣續。大臣之意。有他所屬。而不顧。直矯遺旨。會百官。宣詔。不如此。則失機會也。可謂明決之才。能濟大事矣。雖然。其所爲。不幾於抗悍自用乎。而立談之頃。能轉危爲安。中外恬然者。何哉。人心去孝謙。思得明主。屬望於光仁。而百川因而定之爾。桓武之事。亦然。是之謂公也・誠也。公且誠。則人心服焉。人心服焉。則天意從焉。故曰。

藤原氏比隆王室。天道也。天道不可覩也。以人心視之也。或傳。百川定桓武之際。有醜怪不可言者。吾斷以爲野人語耳。何以證之。曰。以其非人心。

日本政記卷之四終

日本政記 卷之五

賴襄子成 著

光仁天皇

諱白壁。天智孫。父施基皇子。母紀氏。在位十二年。改元二。曰寶龜。天應。禪位皇太子。崩。壽七十三。葬廣岡山陵。後改葬田原陵。

寶龜元年。庚戌冬十月。天皇即位於大極殿。詔免諸道今年田租。吉備眞備罷中衛大將。十一月。追尊皇考施基皇子。曰春日宮天皇。是歲。遣唐留學生阿倍仲麻呂死于唐。

二年。辛亥春二月。左大臣藤原永手薨。三月。右大臣吉備眞備致仕。以大納言大中臣清麻呂。爲右大臣。中納言藤原良繼爲內臣。尋爲內大臣。

三年。壬子春。渤海來貢。以表文無禮。卻之。秋八月。遣使淡路。改葬廢帝。

四年。癸丑春正月。立皇子中務卿山部親王。爲皇太子。先是。以妃井上內親王。爲皇后。以其所生皇子他戶。爲太子。皇后。聖武帝女。自帝爲親王。降爲妃。妃年方盛。而帝春秋高。以故頗淫

縱。帝斥之后怨望。參議藤原百川。以其巫蠱事。奏廢之。幷廢太子。親王有賢名。百川欲帝立之。公卿中頗有異議。帝意未決。百川執奏。數日不退。終得敕裁。　三月。定常平法。以穀貴遣使七道。糴穀賑民。其賤糶私粟者。授位。　大納言藤原魚名。兼近衞大將。

五年。甲寅秋。蝦夷入寇。敕鎭守將軍大伴駿河麻呂。討之。

六年。乙卯春。詔。復陸奧今年課役・田租。　秋八月。先是京官祿薄。國司利厚。因是庶寮咸望外任。至是。割諸國公廨四分一。益京官俸祿。

七年。丙辰配陸奧出羽俘囚于筑紫。免陸奧今年田租。

八年。丁巳秋九月。內大臣藤原良繼薨。

九年。戊午春正月。藤原百川任中衞大將。

十年。己未春正月。以內臣兼近衞大將藤原魚名。爲內大臣。　二月。贈遣唐副使小野石根從四位下。以其遇風覆沒也。　五月。唐使孫興進來。　秋七月。參議中衞大將藤原百川薨。百川有定策功。帝委以腹心。及薨。贈正二位。延曆初。追贈右大臣。

十一年。庚申春正月。詔。免諸道今年田租。　三月。幷省內外官員。除三關邊要外。並除諸國冗

兵。專就農耕。
賴襄曰。光仁中興之政。如日之升。天地清明。足以使百官萬姓。洗濯磨淬。以求副上意。非帝之厲精。自強不息。曷能如此。而何弊不可革哉。黜中立自全之大臣。收其兵權。代以忠鯁。廢驕縱難制之中宮。併廢其所生。更立賢明。國本立矣。置常平。濟穀貴。省官汰兵。選將鍊甲。儲糧防邊。賞功勞。而罰退懦。其擧動處置。較有次第。可以爲後世之法矣。夫承前朝彫弊之餘。上下共困。當以罔利富國爲務也。而史無所見。所見者。數免田租。給復邊民也。是何以然。吾嘗讀其朝議。曰。制令之日。限置官員。職務不滯。今官衆事殷。蠶食者衆。穀帛難生。而用之不節。一歲不登。便有菜色。昔人稠田少。而有儲蓄。今地闢戶減。而患不足。由節用與縻費。爾當今之急。省事息役。并省官員。上下同心。唯農是務。則國用足。而廉恥行矣。是省冗官之議也。又曰。諸國兵士。頗多羸弱。徒免身庸。不歸天府。自今。除三關邊要外。隨國大小。爲額。點殷富百姓。才堪弓馬者。專習武藝。應徵發。其羸弱皆就農桑。是汰冗兵之議也。皆鑿鑿然可誦法。所以能行賑恤於不足之時也。或以爲。後世人稠戶倍。地闢田多。與當時異。噫。是徒觀都邑郊甸。然耳。古之所謂田地戶口。皆謂鄙野也。是古今同者也。

若夫古今不同者。兵也。兵民之判。漸於是時。然致武門之強梗。勢也。及其勢極。終成封建。兵雖冗。不可汰也。而況官乎。雖然。苟知兵與官之皆本於農。而見其冗之爲弊乎。時有以疎理振刷之。不至其本末甚不相稱。則可謂善慮國者已。

陸奥夷反。攻殺陸奥守紀廣純。詔遣中納言藤原繼繩。爲征東大使。正五位上大伴益立等。爲副。討之。　秋九月。以正四位下藤原小黑麻呂。爲持節征東大使。督諸軍進討。先是。陸奥守大伴駿河麻呂卒。廣純代任。建議。築覺鼈城。遏膽澤賊。三月。賊入長岡。廣純防之伊治城。道島大楯・伊治呰。竝以郡領從。呰本夷種。廣純不善遇之。專信大楯。呰怨煽俘軍。爲內應。殺大楯。遂闖廣純館。殺之。介大伴眞綱潰圍。奔多賀城。城中多糧仗。民爭先入保。眞綱懼。潛遁。民潰。數日賊至。大掠焚其餘。朝議遣繼繩等。調阪東兵。限九月五日。集多賀城。又敕東北諸國。作糒三萬斛。製送甲千領。襖四千。限八月十日。輸軍所。繼繩等。頓軍不進。乃遣小黑。十月詔書。切責勿失機會。諸將進戰。

天應元年。辛酉春正月。詔。奥民爲賊詿誤。歸順者。給復三年。兵士從役。免今年租。至八月。蝦夷平。賞諸將。進位有差。副使大伴益立。坐畏懦逗留。削本官。　以內大臣藤原魚名。爲左大臣。

三月。天皇不豫。禪位於皇太子。

桓武天皇

諱山部。光仁長子。母夫人高野氏。贈正一位乙繼女。在位二十五年。改元一。曰延曆。崩。壽七十。葬柏原陵。

夏四月。天皇卽位。尊先帝。曰太上天皇。尊生母中宮高野氏。爲皇太夫人。立皇弟早良親王。爲皇太弟。賜諸道今年田租。五月。始置中宮職。六月。詔。罷內外文武員外官。但郡司・軍毅。不在限。在外國司。未知欠倉。且用公廨。或不畏憲綱。肆漁百姓。其奸濫尤著者。秩雖未滿。貶降。右大臣大中臣清麻呂致仕。冬十二月。太上天皇崩。帝欲諒闇三年。羣臣請因元正帝例。聽政如平日。帝不忍。敕以一年爲限。臣民以六月釋服。是歲。賜遠江介前東宮侍讀土師古人姓菅原。

延曆元年。壬戌春正月。葬光仁天皇。閏月。氷上川繼謀反。以山陵未乾。免死流伊豆。配其母不破內親王淡路。夏四月。省造宮・敕旨二省。法花・鑄錢兩司。隸其工匠於木工・內藏等寮。五月。詔。陸奧百姓被寇者。給復三年。六月。大納言藤原田麻呂。任右大臣。藤原魚名罷左大臣。竝尋薨。

二年。癸亥春正月。詔。罷百官賀正。　夏四月。立夫人藤原氏。爲皇后。故内大臣良繼女。　遣使阪東諸國。民疲調發者。發倉賑給。　六月。申禁京畿定額外。私建寺。捨田宅。及賣易入寺。犯者。主典以上。解見任。其餘杖八十。官司知而不禁者。同罪。　秋七月。以大納言藤原是公。爲右大臣。參議乙麻呂子也。

三年。甲子春二月。以從三位大伴家持。爲持節征東將軍。防蝦夷。請名取以南十四郡僻遠。徵發不及機會。置多賀・階上二郡。置官員。　夏六月。遣使山背。經始都城。　冬十一月。車駕巡視長岡。十二月。免貢役夫國。今年田租。　詔。禁國司。公廨田外。墾私田。妨害民產。有犯。以違敕論。所闕沒官。又禁王臣及寺家。兼幷山林藪澤利。

四年。乙丑秋九月。盜殺中納言藤原種繼。詔。廢皇太弟。流淡路。誅左少辨大伴繼人。初帝好游幸。委政太弟。種繼信任用事。太弟以佐伯今毛人。爲參議。種繼曰。佐伯氏未有任此官。奏。罷之。遂與有隙。會帝幸平城。種繼留守。屬督新京工役。夜照炬催作。有人自暗中射殺之。帝還宮。敕索賊。收獲繼人等數人。詞連太弟。敕。誅首惡。其餘貶竄。太弟絕食。薨。後改葬。追謚崇道天皇。　冬十一月。立皇子安殿親王。爲皇太子。　是歲。刑部卿、淡海三船卒。三船。帝大友玄

孫。賜姓淡海。爲大學頭。定神武以來列帝謚號。

五年。丙寅夏五月。詔。以京邑草創。民未安堵。賜左右京及東西市物。有差。　秋七月。太政官院成。百官始就朝位。　冬十月。改葬光仁天皇。

七年。戊辰自去冬不雨。至夏五月。天皇親出庭禱。遣使奉幣於伊勢大廟及七道名神。是夜雨。秋七月。以參議中衞中將紀古佐美。爲征東大將軍。發阪東步騎五萬二千八百。討蝦夷。是歲。僧最澄。請創根本中堂於比叡山。許之。後賜號。曰延曆寺。

八年。己巳春三月。紀古佐美至多賀城。置營衣河三所。　夏五月。敕書催督。及暑未至。進討。副將軍入間廣成等。遣前軍濟河。陷伏敗走。別將文部善理等死之。六月。敕曰。膽澤賊集河東。宜先勦之。而後諸軍俱進。前後相繼。今將卑兵寡。而無後繼。所以敗。諸將以賊地遠。糧運艱。爲辭。且解軍省糧。敕曰。嚮圖深入。今憚進討。巧言遜難。不忠莫大。廣成等習識賊情。故委以任。今宜力戰見效。而安坐營中。遣褊裨。致敗衄。驕賊損威。閫外之寄。其咎孰任。古佐美等愧懼。秋七月。上捷報。膽澤萬頃。已屬盪平。蝦夷餘燼僅存。敕批曰。撿前後奏狀。獲賊首。與官軍死傷者。大不相値。唯多治比濱成所行軍。差勝他道。凡獻捷書。宜待賊平日。勿得浮詞稱慶。

九月。古佐美等班師。以其嘗有勤勞。不問敗軍罪。餘將帥。解官收冠。有差。有小功者。量加賞賜。免陸奥民從役。今年田租。給復二年。　右大臣藤原是公薨。　是歲。廢伊勢美濃・越前三關。敕置關之設。本備非常。今正朔所施。區宇無外。徒設關險。使中外隔絕。公私稽留。失通利之便。宜廢三關。運其糧仗於國府。

九年。庚午春二月。以大納言藤原繼繩。爲右大臣。兼中衞大將。如故。　閏三月。以征蝦夷。敕阪東諸國。備糗糒十四萬斛。　冬十月。復置鑄錢司。　太政官奏請。令京畿七道諸國。不被東征徵發者。不論土着浮浪。量其資產。課造甲。尋敕。大臣以下。五位以上。造甲有差。

十年。辛未秋七月。以從四位下大伴弟麻呂。爲征夷大使。從五位下坂上田村麻呂等爲副。討蝦夷。　冬。敕阪東諸國。備糗糒十二萬餘斛。

十二年。癸酉定蔭子階。　廢攝津職。爲國司。

十三年。甲戌相地於葛野郡宇太邑。營宮城。課諸國。造宮門。　冬十一月。車駕遷新京。詔曰。此地形勝。山河襟帶。自然成城。宜改山背。爲山城國。士民謳歌。稱曰平安。宜從之。　是歲。敕增置越前水田一百二町於大學寮。曰勸學田。

十四年。乙亥春正月。征夷大使。大伴弟麻呂等。至自討蝦夷。論功行賞。有差。

十五年。丙子春三月。詔。舉諸國武技出衆者。　禁京畿吏民。男女混雜。濫祭北辰。　秋七月。右大臣藤原繼繩薨。

十六年。丁丑夏六月。以遷都。免諸國今年租。　冬十一月。以從四位下坂上田村麻呂。爲征夷大將軍。　是歲。罷筑前國司。隸太宰府。

十七年。戊寅秋八月。以大納言神王。爲右大臣。光仁帝從子

十八年。己卯春二月。前豐前守。美作・備前兩國造。攝津大夫。兼民部大輔。中宮大夫。從三位和氣清麻呂薨。詔。贈正二位。

十九年庚辰春。禁民輸錢求爵。　課南海諸國民。種綿。

二十年。辛巳春。監試對策。　秋。發遣唐使。遭風船破。不果行。　九月。蝦夷酋高麻呂入寇。至清見關。遣坂上田村麻呂。授節刀。討平之。

二十一年。壬午春。遣田村。城于膽澤。配東國浮浪四千人。戍之。夷酋大墓公・磐具公。率衆五百。秋。來降。田村以二酋歸奏。宜放還以招黨類。朝議以虜性反覆無常。如養虎遺患。不如誅之。

敕。斬於河內。賞田村功。授從三位。遷近衞中將。

賴襄曰。國朝王化。自西漸東。陸奧之州。壤地廣莫。民夷雜居。中古剏置出羽。別署官司。而其得力。在於築多賀・膽澤二城。如漢唐取河套。城受降。蓋以其廣莫難理。必得要扼之地。置城柵。貯糧仗。然後兵民有依據。而夷虜可控制。可謂計之得者也。及城膽澤。配東國浮浪四千戍之。則最得計也。何者。此城未始有之者也。則守之之兵。亦未始有之也。然既已築城。不可無兵以守之。守之以民丁。民丁未必樂往。往者浮浪而已。浮浪之於民。如未始有者也。以未始有之人。守未始有之城。國不必騷擾。而民可以就業。今雖不詳其處置。蓋招聚無食之民。以塡荒地。勸之耕墾。使各具糧食。苟然則是得四千人土著之兵也。土著之四千。足以當徵發之四萬。所以震懾夷酋。致其來降也。後世之開邊者。已不得地利。而據之也。守以正額之士民。給以正額之財粟。徒擾敝其內。而其外所獲。不能償也。豈非計之失者耶。桓武此計。出於坂上田村。猶趙充國屯田之議。用於漢宣也。當時廟算不爽。督責諸將。明見萬里。已非宣帝所及。而至得良將。委任之。又未嘗掣其肘。不必待如魏尙者。辨而護之也。夫唯明矣。是以能任。後世人主。暗而善疑。既爲小人所欺。蔽敗爲勝。飾損爲

益。而又不能用有識之計。烏足以語天下得失哉。

是歲。新闢函根路。以富士山焚。沙石壅足柄路。已而復舊。

二十二年。癸未春。遣坂上田村。城志波。

三十三年。甲申春。復以坂上田村。爲征夷大將軍。　夏。發遣唐使。

二十四年。乙酉夏。遣唐使還。　冬十二月。召羣臣。議政事得失。減仕丁・衞士・隼人・歌女・仕女數。免伊賀・伊勢等二十一國今年庸。參議藤原緒嗣進奏。方今所苦在兵與土木。請罷二者。以紓民力。帝嘉納之。下詔。停陸奥役。廢造宮職。緒嗣。百川子也。

二十五年。丙戌春三月。天皇崩。皇太子哀慟不能起。參議近衞中將坂上田村麻呂・東宮大夫藤原葛野麻呂等。扶之下殿。遷東廂。　夏四月。葬桓武天皇。　右大臣神王薨。

賴襄曰。桓武卽位。未百日。卽下詔。罷員外官。國司奸濫者。任雖未滿。貶降。夫國司之奸。毒被國內。黜一人。而一國悅。猶有說也。罷員外之官。必招失職之怨。以常情觀之。始臨宇內。宜布恩德。收人心。故古今人主之卽位。往往大赦與改元。並出例也。今下如此之令。人情所不樂。而桓武首行之。汲汲如不及。何哉。王者之恩。不在小惠。顧天下之利害。民使安與

否而已。是庸主之所畏憚。而英主之所斷不顧也。明年。改元。省造宮・敕旨二省。法花・鑄錢兩司。隷之內藏。其二年。罷百官賀正。禁私建寺。其九年。廢三關。併其糧仗於國府。其十二年。改攝津職。爲國司。其十六年。罷筑前國司。隷太宰府。而最後因藤原緒嗣言。廢造宮職。停陸奥兵役。夫帝者。如何君哉。營無前之宮城。闢未收之版圖。其精神氣力。百倍前代人主。可知也。而觀其他所爲。於凡天下之事。所擧少。而所廢多。嗚呼。可謂明於治體也。蓋國家之患。每病物力之不給。人主者收天下之物。而支配之天下者也。以爲己之有。而暴殄之者。謂之昏主。不足言也。其次知其不給。而無奈之何也。鰓鰓然議之。或計增尺寸之利。而終無成事。左支右吾。不敢有所爲者。今古一也。天下之費。有不得已者。有得已而不已者。帝之所廢。得已者也。如其營宮開邊。不得已者也。不得已者。何代無之。拘於故常。以爲不可去。如人之有駢拇贅疣。割而去之。未必傷性命也。而怯夫護之。以終身。故駢拇贅疣。非勇者。莫能決之。無益之費。無用之官。非英主。莫能省之。省一無益者。則息天下物力之一分。日積月累。乃綽然而有裕。以有裕之本。以臨天下。天下何事不可成。宜乎。帝之能擧前代所不能擧哉。故吾贊桓武之業。不於其擧。而於其廢。廢者所以擧也。

平城天皇

諱安殿。桓武長子。母皇后藤原氏。內大臣良繼女。在位四年。改元一。曰大同。禪位皇太弟。後十五年崩。壽五十一。葬楊梅陵。

大同元年。丙戌夏五月。天皇卽位于大極殿。　立皇弟神野親王。爲皇太弟。以中納言藤原內麻呂。爲右大臣。兼近衞大將。如故。參議藤原園人爲皇太弟傅。坂上田村麻呂爲中納言。兼中衞中將。　差使諸國。賑貸貧民正稅。敕曰。比年不登。豪戶私貸貧民。收倍息。宜貸正稅。濟乏絕。實錄窮民。結保給之。亡者保內塡之。情涉愛憎。退弱進强。及塡補未納。兼收私債者。以重罪論。待民稍給。乃從停止。　六月。敕諸王及五位以上子弟。十歲以上皆入大學。分業敎習。　秋七月。公卿奏。卽位後。故事宜御新宮。請豫營構。天皇憚勞民力。不聽。　八月。大水。免畿內遭水民租。　冬十月。改葬桓武天皇。以山陵爲水壞。是日。素服擧哀。

二年。丁亥春。山陽道觀察使藤原園人奏請。播磨以近都。雜用繁多。民疲運輸租。望減省五百戶。移付東國。收屬不動。庶息民滋儲。又請。西海道吏。非秩滿。不聽輒入京。以紓民迎送之勞。東山道使兼陸奧出羽按察使藤原緒嗣奏。方今緣邊鎭兵三千八百。歲糧五十餘萬束。加每軍興。必課糧東國。杼軸空竭。請以坂東官稻。充陸奧公廨。以陸奧廨。留收官庫。則公私俱

便。並奏可。　秋九月。詔。巫覡妖言惑愚民。增淫祀。積習成俗。虧損淳風。宜一切禁斷。或不懲革。徙諸遠國。所司故縱。隣保容匿。並準法科罪。　冬十一月。殺皇弟中務卿伊豫親王。親王在桓武時。怙寵。帝立。稍抑之。藤原宗成。因勸謀不軌。事泄。其舅大納言藤原雄友。告之右大臣藤原內麻呂。親王懼。遽奏宗成。宗成言親王首謀。上怒。左近衞中將安部兄雄諫之。固保親王無他。上不聽。詔削屬籍。幷其母幽之。不通飲食。貶雄友・宗成等。親王與母。並仰藥死。時人冤之。　是歲。罷參議。置觀察使。改近衞府。爲左近衞府。改中衞府。爲右近衞府。

三年。戊子夏。飢疫。詔。免畿內七道調。國司親巡鄕邑。賑濟。　復置筑前國司。　秋。廢衞士府。置靱負府。

四年。己丑夏四月。天皇不豫。禪位於皇太弟。

嵯峨天皇

諱神野。平城同母弟。在位十五年。改元一。曰弘仁。禪位皇太弟。後十九年崩。壽五十七。

夏五月。天皇卽位于大極殿。　尊先帝。爲太上天皇。立先帝子高岳親王。爲皇太子。右大臣兼左大將藤原內麻呂・中納言兼右大將坂上田村麻呂。如故。

弘仁元年。庚寅春三月。始置藏人所。頭二人。以巨勢野足・藤原冬嗣爲之。皆四位。屬官有五位六位。總七人。　夏六月。以上皇詔。罷觀察使。復參議。　秋九月。右兵衛督藤原仲成反。奉上皇。走東國。詔。以右近衛大將坂上田村麻呂。爲大納言。率兵。塞故三關口。誅仲成及其妹藥子。初藥子故中納言種繼女。早寡。有二女。上皇在東宮。納其長女。併近藥子。爲桓武所逐。及卽位。復召。爲尙侍。巧媚無言不聽。其兄仲成又有寵。凌辱公卿。以帝稔知其奸。懼不自安。至是。勸上皇。遷都平城。因復位。中納言藤原葛野諫。不聽。乃以田村及藤原冬嗣。爲造宮使。物議洶然。帝恐田村爲上皇用。遽進其爵。詔。暴藥子等罪惡。遣使。告柏原山陵。收仲成及其黨文屋綿麻呂于左衞士府。上皇怒。聚畿內・紀伊兵。與藥子同輦。赴東國。宿衞皆從。帝遣田村將兵。邀之美濃路。田村知綿麻呂可用。奏釋之。偕行。上皇衆聞之。潰。還宮薙髮。藥子仰藥死。詔。誅首惡仲成。其餘從東走者。不問。

賴襄曰。平城者。猶崇德也。而嵯峨之處置之。全其懿親。與後白河。不可同年而語也。雖然。藤原仲成名位不及惡左府。坂上田村以三朝名臣。兼源義朝・平淸盛之才。而帝用焉。所以不終朝而事平也。前史稱。帝恐田村爲平城用。遽進其爵。爲大納言。故田村效力濟難。

襄曰。不然。審如是。則帝之所爲。與崇德之遽授源爲朝藏人。何異。雖爲朝也。聞命益怒況爲田村者乎。知帝之當事急。以此餌我也。寧肯欣然受之耶。夫明主之用才賢。在於平昔。加以恩禮。附以職位。其相感孚也。有素。是以臨難。不苟免。有以濟大事。緩則舍之。急則用之。是庸主所爲耳。臣之庸者。猶不可以此驅。烏可以使天下之豪傑哉。果可以使。則其人非豪傑也。何以濟事。當桓武之時。田村以平東夷功。擢爲近衞中將。及桓武崩。扶平城。下殿。遷東廂。蓋以遺託扶嗣王。以定衆心。既當大臣之任矣。已而進中納言。爲中衞大將。中衞之任。自昔爲重任。及定立左右近衞。田村與內麻呂。竝爲大將。及嵯峨立。如故。內麻呂已爲右大臣。而田村猶爲中納言。資望不敵。故進爲大納言。固其所也。而適會有上皇之變耳。故田村之重。在於大將。不在大納言也。上皇之遷平城。以田村與藤原冬嗣。爲造宮使。是臨時所命。非上皇欲收用之也。假令欲收用。以田村之更事。必見其不成。何遽助其狂謀哉。不然。文屋綿麻呂。以仲成黨見收捕。田村薦其可用。而不嫌。嵯峨卽聽之。使與之共事。而不疑。是可知其情也。如前史所傳。殆以中世以後。君臣相市之意。揣之耳。不唯不知嵯峨之爲君。又不知田村之爲臣也。此君也。臣也。皆爲後世法者也。襄不可不以辨。世

亦以藏人爲嵯峨所置。後世人主。委事傳宣之臣。嵯峨爲之弊端也。襄曰。此亦始於平城在院之時。非始於嵯峨也。

廢皇太子。立皇弟中務卿太伴親王。爲皇太弟。大納言藤原園人爲傅。　是歲。以皇女有智子內親王。爲加茂齋。禱與上皇輯睦。齋院始此。有智子年十七。善詩文。

二年。辛卯夏五月。大納言兼右近衛大將坂上田村麻呂薨。　六月。以參議巨勢野足。兼右大將。　秋七月。蝦夷反。以文屋綿麻呂。爲征夷將軍。討之。定置鎮守府于陸奧。　是歲。大納言藤原園人奏。諸國郡司。皆有勞子孫。奕世相承。而取藝業。絕譜第。物情不從。請。郡司之擬。先盡譜第。後及藝業。至是。又奏。郡司之任。既復舊制。國司銓擬。無賴之徒。或身在京。爭第抑奪。請。自今一依國定。若選非其人。政績無驗。則署帳之官。咸解見任。永不敍用。以懲將來。皆奏可。三年。壬辰冬。右大臣藤原內麻呂薨。以藤原園人。爲右大臣。兼皇太子傅。如故。參議藤原冬嗣兼左大將。

四年。癸巳詔。禁諸國吏。撫字無素。非有飢饉疾疫。輒請賑給。

五年。甲午賜皇子未爲親王者。信・弘・常・明四人。及皇女四人。姓源朝臣。貫右京。　先是。敕中務

卿萬多親王等。新撰姓氏錄。至是。成。奏上。
六年。乙未夏。命畿內外諸國植茶。　秋。立夫人橘氏。爲皇后。故內舍人淸友女。　以大水。免畿內今年租。　冬。以連年不登。免太宰府管內三年田租。
七年。丙申冬。以參議文屋綿麻呂。兼右大將。
九年。戊戌春。公卿奏。以水旱相繼。暫省五位以上封祿四分之一。以均公用。俟年稔。復舊。奏可。又詔。省減服御常膳。　秋七月。阪東諸國。地震山崩。民多壓死。遣使巡省。撿被災百姓。免今年租調。幷不論民夷。以正稅賑恤。助修屋宇。使免飢露。壓沒者。速爲斂葬。　九月。又詔。免諸國弘仁八年以前租稅未納者。　冬。右大臣藤原園人薨。園人延曆中。歷諸國守。百姓追思。爲立生祠。
十年。己亥春。以倉廩乏竭。救凶無資。遣使畿內諸國。實錄富豪貯蓄。借貸窮民。俟秋收。依數償之。
十一年。庚子春。所配遠江・駿河新羅人作亂。掠伊豆穀。入海逃。二國司不能制。發相摸・武藏等兵。追討。平之。　夏四月。詔。水旱不登。民有菜色。其天下百姓。所負稅調未納者。左右京畿內。

弘仁十年以前。七道諸國。九年以前。竝宜蠲除。雖府帑未充。國度多遺。而子富父貧。未之有也。務存優允。以稱朕意。

賴襄曰。政有名美而實不稱者。不可不察也。政貴實。不貴名。貴名則無益於民。貴實則有利於國。國與民。相須而存者也。天智定賦役。當其朝。因大水。免租。天武定諸國民產。爲三等。中戶以下。許貸稅。自是其後。賑貸除免之政。不絕於列朝之册。天武朝。令諸國負債。莫收息。元明朝。詔貸諸國大稅。三年勿收其利。又詔。前賑貸者。爲濟小民。國郡司長。因緣爲姦利者。以重罪論。及至平城。以豪戶貸民收倍息。乃貸正稅。濟乏絕。實錄窮民。結保給之。亡者。保內塡之。情涉愛憎。退弱進强。及塡補未納。兼收私債者。處罪。至嵯峨朝。則遣使諸國。錄富豪貯蓄。借貸窮民。俟秋成。依數償之。其明年。詔蠲畿內七道民租未納者。夫曰賑。曰貸。名之美者也。使其實規官利。非恤民窮也。民不被其德。適足以招之怨。如宋王安石所爲。是已。如國朝之政。以此恤民而已。且夫民產之不均。雖當時所不能免。但抑强扶弱。奪其稱貸之權於上。奪於此。予於彼。要其貧富相濟。要歸於恤民也。使其意不在恤民。而特在奪權。則亦安石之破富戶。民失所據也。唯其意在恤民。是以檢覈其實。周密如此。肥

其下。不欲肥其中也。況肥其上乎。上不售虛名。而下被實惠。是之謂貴實。古曰。爲富不仁。爲仁不富。使民被惠。則國無所利。有所利。則民不被惠。二者。終不可竝行耶。曰不然。國之有民。猶園之種蔬菜。圃之栽梨栗棗柹也。計其幾百株。幾百根。可得幾許之利也。而種之。幸而遂長。可采。可擷。與其所計相當。可矣。或逢病蠹隕落。勞而無獲也。則怒。而掘壓。斬伐之乎。抑更培其根。救其枯萎。以望後年之收乎。故曰。國與民。相須而存者也。故貸。而不責其還者。所以生還之道也。今夫有貸金於人。其人不能還也。則呵責催督之。呵責催督而不獲。則罵詈而絕之。絕之則無復還之道矣。何若姑緩之。俟其可還。徐取哉。後世之治民者。徒知呵責罵詈之而已。吾未知其果利於國也。

冬。詔。嚮因水旱。暫割臣僚祿。今五穀頗熟。宜復舊例。公卿表。請御膳復常。

十二年。辛丑春正月。以藤原冬嗣。爲右大臣。兼左大將。如故。　二月。賜高年民穀。有差。

十三年。壬寅春。運近江緣湖諸郡穀。收穀倉院。准天平神護年間例。　冬。中納言良岑安世奏。國宰銓擬郡司。非其人者。解任。夫知人之難。何無謬擧。必據此格。恐人自陷刑辟。或懼罪。知才不撰。請。先申初擬。歷試雜務。得績注擬。而後朝廷付之所司。計會功罪。始預見任。則國宰

免責。郡司絶倖。奏可。

十四年。癸卯春正月。賜號東寺。曰教王護國寺。以僧空海爲長者。先是。空海又創金剛峯寺于高野。　三月。割越前二郡。置加賀國。　太宰大貳小野岑守。奏請管内九國民。佃公營田。曰。古者九年耕有三年之積。三十年通計。十年食。誠如今之策。九國計三十年之積。三千二百餘萬。以之混合正稅。可爲永代之蓄。朝議以古法不可易變。試限四年行之。　京師米價騰貴。發穀倉院。減價糶之。且賑給貧民。　夏四月。帝將傳位皇太弟。右大臣藤原冬嗣曰。倉廩未實。一帝奉二上皇。用度滋多。民不堪命。請待豐饒。徐圖之。不聽。親諭皇太弟曰。朕本諸王子。初望不及此。太上謬充儲貳。未幾嬰疾。萬機壅滯。奉還神璽。不得允。會有小人。令太上與朕有隙。羣臣懼社稷不安。肅清君側。而朕不敢負太上心。如皦日。在位十五年。與太弟周旋久。深知朕所不及。宜登大位。使朕遂宿心。朕既待太弟。猶子。太弟遇朕。亦猶父耳。太弟固辭再三。不許。太弟遂聽命。立皇子正良親王。爲儲貳。帝致書。辭之。欲立太弟子恒世。不聽。上帝尊號後太上天皇。以別於平城上皇。

淳和天皇

諱大伴。嵯峨弟。母夫人藤原氏。參議百川女。在位十一年。改元一。曰天長。禪位皇太子。後七年崩。壽五十五。葬乙訓郡物集村。

天皇卽位于大極殿。　右大臣兼左大將藤原冬嗣。如故。右大將文屋綿麻呂薨。以中納言良岑安世。兼右大將。　秋九月。後上皇幸嵯峨離宮。有司進輿衞。不受。御一馬。率數人往。是後。率在嵯峨。每有大政。設空位朝堂。使五位藏人居側。聽羣議以奏。　冬十一月。大嘗。大納言藤原緒嗣奏。以每禪代。輙行大嘗。民不堪徵求。宜從省約。行事・悠紀・主基三所。以治部・宮內・中務三省廳。充之。停無益器飾。前一所用正稅。各十萬。各減五萬。凡所徵。皆給路糧。　是歲。賜諸國力田超衆者。爵一級。

天長元年。甲辰　秋七月。先太上天皇崩。平城　葬平城天皇。　八月。右大臣藤原冬嗣。奏請。妙簡廉能。任守介。其新除者。特賜引見。勸諭治方。不拘以法律。著績者加寵爵。公卿有闕。隨卽擢用。中納言良岑安世奏。今國守。古刺史也。堪任者。難多得。請得一良守。宜令兼帶數國。得自選僚屬。其公廨擇攝國中般阜地。幷給二守祿。然須先試之一國。明驗治否。參議多治比今麻呂奏請。諸氏子孫咸入大學。學業足用。量才授職。並制可。

頼襄曰。我朝之有國司。猶漢之有二千石也。漢宣有言。與吾共治民。其唯良二千石乎。漢有郡。有國。國委之其君相。非二千石所能制也。如我朝。一王與六十六人。共治四海。其任之重。爲如何哉。故藤原冬嗣曰。妙簡廉能。任守介。其新除者。特賜引見。勸諭治方。不拘以法律。擢著績者。以補公卿之闕。良岑安世。則曰。國司堪任者。難多得。得一良守。令兼帶數國。擇殷阜地。幷給二守祿。先試之一國。明驗治否。皆有識之言。非必按漢宣之故。而與之暗合者矣。而淳和盡嘉納之。宜乎。其不墜桓武中興之業也。當時宰輔。多出於國守。皆習知民事。非亦其效乎。中世以後。則不然。公卿矜其門地。下視國守。而疎外之。一視貪廉。無所激勸。己或不見其面。況使人主引見之乎。況擢以與己比肩乎。國守者。位賤官卑。祿薄而任重者也。任重而祿薄。則易漁於民。官卑位賤。則難望於君。君有以勸勉優裕於法律之外。然後可以責其廉。而異才之士出焉。否則是驅之於貪也。所以中世以後。貪守常多也。及至其後。用吏卑賤祿薄者。以自代。則其貪益甚矣。而其殷阜地。所謂莊者。多爲公卿所占。自遣其吏。或付其地方豪族。代宰之。而王政漸不可復矣。至於輓近。武門之宰民者。目曰代官。存此名耳。而其卑賤且祿薄。難望於君。而易漁於民者。什倍於國司焉。而封建

成勢。羣國犬牙。猶漢之制。則欲民之被善治。難矣。安得用冬嗣・安世之意。而少救之。

二年。乙巳春正月。敕右大臣。簡閱六衛。觀射建禮門。賜物有差。　夏四月。以冬嗣爲左大臣。大納言藤原緒嗣。爲右大臣。大疫。　敕諸國郡司。親巡視給穀藥。免弘仁十三年・十四年調庸未進。　秋八月。召大學諸生紫宸殿。講論經史。著爲例。時大學助伊豫郡眞貞。以甲第。詔進位。賜物。賜姓善道。

三年。丙午秋七月。左大臣兼左大將藤原冬嗣薨。冬嗣。內麻呂子。性弘裕。才兼文武。嘗置勸學院。教子弟。析封戶千。給之。　八月。以中納言清原夏野。兼左大將。夏野奏。親王未習庶務。而任八省卿。官事日墮。請。點定數國。迭任守宰。乃以上總・常陸・上野。爲親王任國。特稱太守。

四年。丁未授藤原高房從五位下。任美濃介。高房。參議藤嗣子。廉明絕請託。善擿姦。管下有陂。堤壞。俗傳。有神。遏水者死。前守懼。不敢修。高房發夫。修之。民賴灌漑。席田郡有妖巫。聚徒爲邑。吏不敢禁。高房單騎行。捕巫誅之。高房魁梧多力。慷慨不拘細謹。後歷數國守。所至有名。

夏五月。敕僧空海。迎佛舍利於禁中。　六月。中納言良岑安世奏。天平中敕博士。撰文章生。專取藝業。及弘仁朝。選止三品以上。及良家子弟。夫大學育才之地。天下英俊所萃。取才

不必貴種。貴種不必出才。王者用人唯才。朝爲厮養。夕爲公卿。可也。今特論門地。後進解體。請。復天平格。制可。　是歳。立王氏爲皇后。（廢太子恒貞之母。）

六年。（己酉）夏五月。令諸國。造水車。使灌漑。依中納言安世奏也。

七年。（庚戌）春正月。出羽地震。城崩。差諸郡兵五百。以備不虞。下詔自咎。差使。免遭震百姓今年租調。發倉賑給。一如先朝例。　秋七月。大納言兼右大將良岑安世薨。安世桓武子。賜姓良岑。善騎射。多技藝。及長。折節潛志學術。又善詩文。　八月。以參議藤原吉野。兼右大將。　冬。新撰格式成。

八年。（辛亥）祕府略成。

九年。（壬子）夏。旱。祈禱無驗。詔。罷作役。錄囚徒。大雨。依皇后請。后貞婉有禮度。爲帝所重。　冬十一月。以右大臣緒嗣。爲左大臣。大納言清原夏野。爲右大臣。左大將如故。

十年。（癸丑）春二月。令義解成。初藤原不比等等作令。歷年已久。學者互有異同。帝敕清原夏野等。與諸儒臣。論辨折衷。至此成。上之。　天皇禪位於皇太子。太子再上表。固辭。弗許。上尊號後太上天皇。以別於嵯峨上皇。

賴襄曰。光仁・桓武中興大業。平城・嵯峨・淳和相繼守成。王政之盛。如日中天。蓋天智之統。始復此時。而其遺範亦大成於此。故紀綱制令。皆足以光前而垂後。如置宰輔。最其大者也。當是時。大臣不必備左右。有以右大臣。兼左大將者矣。則以中大納言。兼右大將者。與之竝。藤原氏已爲外戚矣。而以佗姓之人。間之。唯其才與望是視。不必戚屬也。唯其實與績是責。不必官位名號也。而其官又不必分文與武也。坂上田村・文屋綿麻呂。皆以將帥。樹功邊陲。還則釋鎧冑。襲衣冠。未數年。皆入政府。與聞機務。豈非國之大事。必須親歷者。以決廟議也哉。昔西漢之法。非以軍功列矦者。不以爲宰相。周勃・亞夫・申屠嘉之類。是也。以武帝之橫。欲矦衞・霍・李廣利。不得不先出之爲邊帥者。爲此故也。及後漢梁竇。以外戚爲大將軍・錄尙書事。亦其遺意。而弊不可勝言矣。雖國朝。至文德以後。則宰執皆外戚爲之。備左右大臣・大將。皆以其子弟充之。而列朝紀綱。一廢不復。不問其有才與否也。況望其有武功乎。武事以委源平二氏。又別其品流。至不許昇殿。噫。何其與古懸絕也。夫如文屋及良岑・清原。皆王孫賜姓者。與外戚竝。固其宜也。而何獨怪於源平氏。

日本政記卷之五終

日本政記　卷之六

賴襄子成　著

仁明天皇

諱正良。嵯峨第二子。母后橘氏。贈太政大臣淸友女。在位十八年。改元二。曰。承和。嘉祥。崩。壽四十一。葬深草陵。

三月。天皇卽位于大極殿。　立後上皇皇子恆貞。爲太子。上皇辭。不聽。左大臣藤原緒嗣。右大臣兼左大將淸原夏野。並如故。罷藤原吉野右大將。令侍上皇。以橘氏公代之。大納言藤原三守。爲皇太子傅。

承和元年。甲寅春正月。天皇覲前太上天皇于冷然院。後太上天皇于淳和院。後屢覲焉。　春。太宰府言。慶雲見。公卿表賀。不受。夏四月。再請。許之。

二年。乙卯秋。命正四位下菅原淸公。侍讀後漢書。

三年。丙辰夏五月。遣參議藤原常嗣。爲遣唐使。彈正少弼小野篁爲副。遭風不進。

四年。丁巳春三月。再發。常嗣見篁船堅善。奏換之。篁不平。以家貧親老。身亦病。辭不往。作西道謠。刺朝政。坐流隱岐。　夏六月。罷夏野右大將。以中納言源常代之。　冬十月。右大臣清原夏野薨。

五年。戊午春正月。以大納言藤原三守。爲右大臣。兼皇太子傅。如故。　冬十一月。赦。以災異屢見。令京畿七道。書寫般若心經。禁殺生三日。以祈豐稔。民無疾疫。

七年。庚申夏五月。後太上天皇崩。淳和遺命勿以葬祭煩民。碎粉御骨。散之大原野。中納言吉野以爲不可從。朝議悉從遺命。　六月。旱疫。下詔罪己。減服御常膳。絶左右馬寮秣穀。停作役非要者。撿出寃獄。諸國灌漑。先貧後富。賑贍窮民穀藥。免畿內七道。承和二年以往。調庸未進者。除東海・東山・山陽驛戸租。三年。詔下。大雨。公卿奏請。減百官封。如前朝例。但四位・五位秩祿本薄。今年間不可減。　秋七月。右大臣藤原三守薨。三守好招延文士。遇諸塗。必下馬。家多藏書。資生徒貧者。成業。　八月。以大納言源常。爲右大臣。兼左大將。如故。

九年。壬戌秋七月。罷橘氏公右大將。以中納言藤原良房。爲大納言。兼右大將。良房。冬嗣子也。前太上天皇崩。嵯峨遺詔。斂用故衣。擇不毛之地。今上七日釋服。吏民不得著服供事。乃詔。從

遺制。厥明定山陵。以商布二千段。錢千貫文。充葬費。停百官擧哀素服。　廢皇太子恆貞。流東宮帶刀伴健岑于隱岐。但馬權守橘逸勢于伊豆。立皇子道康。爲皇太子。母女御藤原氏。左大臣冬嗣女也。恆貞幼才慧。長好學。有才名。自以位處危疑。作表。冀效太伯・劉彊。不許。健岑等謀曰。二上皇登遐。太子不得安。宜奉走東國。嘗竊語之阿保親王。及上皇崩。親王告之嵯峨太后。太后白之帝。敕六衞府。戒嚴宮門。遣兵。收健岑等。處竄。太子憂懼。又抗表。辭位。帝優答不許。既而有飛書。語關太子。帝遂遣近衞士。闔太子直曹。太子晏然謂左右曰。吾知有此事。久矣。降爲親王。持戒。不近妃嬪。後及陽成當廢。藤原基經屬意恆貞。率大臣勸進。恆貞堅卻。弗受。

十年。癸亥春正月。左大臣藤原緒嗣致仕。天長初。納封千戸。助國用。弘仁以降。十上表辭。不許。及帝立。又以病固辭。請減封五百戸。不許。至是。聽其致仕。尋薨。稱山本大臣。　冬十月。敕公卿。封祿復故。

十一年。甲子秋。以源常。爲左大臣。兼左大將。皇太子傅如故。橘氏公爲右大臣。

十四年。丁卯夏。帝受莊子於文章博士春澄善繩。　冬。右大臣橘氏公薨。

嘉祥元年。戊辰春正月。以大納言兼右大將藤原良房。爲右大臣。　秋八月。大雨洪水。

二年。己巳夏。霖雨。開倉。賑恤飢民。　冬十二月。帝親巡視京師。過獄前。問是誰家。右大臣良房奏曰。囚獄司。帝憫然。因赦。盡放囚徒。

三年。庚午春正月。京師諸國多盜。敕六衞及諸國司。索捕。　三月。天皇崩。　葬仁明天皇。

賴襄曰。國家盛衰之機。每由於繼續之際。不可不深察也。繼續之爲事。大矣。而難言也。愛憎主其中。而黨援乘其外。大利所在。大禍所伏也。不斷以公道。而挾私用術。自謂濟其志。而適爲大姦之地者。往往而然。桓武器嵯峨。使平城禪位者。蓋出其遺意。是故。立平城之子。爲儲貳。及有庚寅之難。乃廢之。不敢易以其子。而以其弟。然後及其子。是也。至其子則可以已矣。亦不敢立其子。而立其姪。何哉。當此際。其文雖懿美。而其情不無矯飾。夫父子相承。常道也。公義也。叔禪姪立。遞相推奪。豈可爲常乎。仁明誠欲立其子乎。當淳和之再三辭。何不明白稟受。而必待二上皇之死。可謂私心也。仁明生文德。出於藤原氏。生十四而淳和崩。又二年。嵯峨不豫。罷橘氏公右大將。以藤原良房代之。四日而嵯峨崩。翌日葬之。其明。伴橘之獄起。噫。何其速也。據獄詞所傳。則伴橘爲不軌矣。而不可盡信也。至其曰

二上皇登遐。太子不得安。則當時之情已。廢太子初請遜。而不得。流涕大息。及其受閫曰。吾知有此事久矣。則仁明之心。不可掩也。良房者。新太子之母之兄也。故仁明引以爲之羽翼。又納良房女於東宮。帝崩。文德立之月。清和生。生而九月。立爲太子。七年而超拜良房。爲太政大臣。帶劍上殿。其明年。文德夭。而髫齔之天子立。外祖攝政焉。亦何速也。而後王室之事。不可復說矣。夫大臣託孤。何世無之。當用天下之英賢焉。何必賴外戚乎。是亦私心焉爾。論者以爲。王室之衰。由文德以幼主爲嗣。余則曰。由仁明之用私於繼嗣之際而已。至文德之時。則藤原氏勢已成矣。不然。文德何以不敢立所愛長子。而立生甫九月之嬰兒乎。至如源常・源信。竝以嵯峨子。位與良房抗。使一發異議。天子將倚以爲重。乃甘附和之。以成其勢。何取於宗室大臣也。豈亦以己爲良房舅而私之耶。其後。平清盛之基進官爵。由於後白河之欲立愛子。而當時朝臣。連姻平氏者黨焉。其情同也。

文德天皇

諱道康。仁明第一子。母女御藤原氏。贈太政大臣冬嗣女。在位九年。改元三。曰。仁壽。齊衡。天安。崩。壽三十二。葬眞原陵。

夏四月。天皇卽位于大極殿。左大臣兼左大將源常。右大臣兼右大將藤原良房。竝如故。

五月。嵯峨皇太后橘氏崩。后仁明母也。嘗與弟氏公議。建學館院。聚生徒。世以比漢鄧后。又信佛。建檀林寺。稱檀林皇后。　秋七月。大水。　冬十月。出羽地大震。　十一月。立第四皇子惟仁親王。爲皇太子。母藤原氏。右大臣良房女也。生甫九月。以大納言源信爲傅。帝愛長子惟喬親王。欲立爲儲貳。以待太子長。憚良房。未決。從容語之信。信曰。有罪可廢。無罪不可佗圖。上不懌而止。良房聞之。深德信。

仁壽元年。辛未春正月。以諒闇。廢朝賀。　秋。大水。詔。免京畿今年調。遣左右檢非違使。廩給被災者。

二年。壬申春。詔曰。頃年諸國所告。不堪佃居多。由有司不勤地利。不重民命。甚非所以委付黎元也。凡治田。克勤則畝益三斗。不勤則損亦如之。況廢而不耕乎。一畝不耕。一戶受飢。既多不耕之地。何少受飢之人。古者。州郡長。春行田。若有不耕。課而田之。獲者公私半之。自今。國郡司。親自巡視。修繕池堰。勸課耕種。褒勤督懈。　是歲。前參議勘解由使長官宮內卿滋野貞主卒。貞主以文學稱。在銓官。汲引進士。隨器選敍。嘗上便宜十四事。又論。太宰府衰弊日甚。由選吏不精不省。　參議左大辨小野篁薨。篁參議岑守子。岑守爲陸奧守。篁從父赴任。

習騎射。嵯峨帝聞而惜之。乃折節爲學。嘗讀書下野足利鄕。置校。其藏書傳至後世云。
三年。(癸酉)夏。一品太宰帥葛野親王薨。
齊衡元年。(甲戌)夏。陸奧奏。比年不登。戍兵逃亡。盜起。請發援兵數千備之。勅許一千。且以致騷擾。本由飢困。給穀。前後各一萬石。不論民俘。務加賑恤。給復百姓一年。　左大將源常薨。秋。以右大臣藤原良房兼左大將。大納言源信兼右大將。尋罷信右大將。以權大納言藤原良相代之。良相良房弟也。
天安元年。(丁丑)春二月。以右大臣良房爲太政大臣。賜寶劍二佩上殿。如漢蕭何故事。大納言信爲左大臣。大納言良相爲右大臣。(桓武以降。左右大臣。每闕其偏。至是。三公具備。)　夏四月。以右大臣良相兼左大將。大納言安倍安仁兼右大將。　六月。對馬郡吏率島民。攻殺島守立野正岑。太宰府發兵。討平之。　前彈正大弼藤原衞卒。衞。內麻呂子。十八歲。擧文章生試及第。出入四朝。爲國司。爲政寬簡。民安之。爲法官。貴戚側目。
二年。(戊寅)夏。大水。穀倉院出穀。民部廩院出米。大膳職出鹽。賑左右京被水窮民。　秋八月。天皇崩。帝留意政事。性甚明察。然禁網漸密。憲法頗峻。官署遷除。吏人廢置。相繼無已。　九月。

葬文德天皇。

賴襄曰。吾讀仁明・文德二紀。非有暴虐之行。而吏民凋弊。數行赦令。而盜賊漸滋。何哉。紀稱、仁明嘗巡視。過獄、問誰家。右大臣良房從。對曰。獄也。帝憫然盡放其囚。我古聖王往往親錄囚徒矣。今人君而不知囚獄爲何物。且赦、釋惡人。豈可爲法。世以此譽仁明之爲君。無識者之見耳。紀又稱。文德垂心政事。禁網漸密。善知人姦。頗傷於察。然頻廢視朝。委權外戚。則其所垂心者、何政。而所察。何姦乎。所貴於人君者、剛也。健也。不剛則懦。不健則懈。所以紀綱日壞。民輕犯法。不足怪也。自古守文之君。生深宮。長婦人手。坐享成業。謂其當然。不肯厲精勤政。外威嚴而內懦怠。憚見外廷公卿。而好居於內。委祖宗之天下於他人。而不省者。比比皆是。如二君之世。其亦然已。他日三善淸行謂。仁明好奢靡。後房之飾。雕鏤綺組。朝製夕改。府帑爲虛。賦斂滋起。推帝之意。必曰。是我宮中細娛耳。何有害及天下。殊不知。人主有所好。則其下必有計供承補塞之。使不求而至。不知其所從出。終致使吏困民窮。起爲賊。亦其勢爾。文德之密禁網。蓋亦有意濟之矣。識拔能吏。規盡民政。頗可稱述。而好行小惠於目前。而不知耳目所不及爲何如也。不能自治其本。以振紀綱。則徒以

溺耳。本者。何也。曰。剛健勤政也。仁明。壽四十一。文德三十二。其不永年者。亦不勤之效也。

清和天皇

諱惟仁。文德第四子。母皇后藤原氏。攝政良房女。在位十九年。改元一。曰。貞觀。禪位皇太子。後四年。崩。壽三十一。火葬水尾山陵。

冬十一月。天皇卽位于大極殿。太政大臣良房攝政。左大臣信。右大臣兼左大將良相。竝如故。罷右大將安仁。以中納言源定。兼右大將。帝生甫九歲。良房以外祖。事無巨細。莫不與聞。安仁嘗爲國司。以強濟著。嵯峨上皇論吏才。稱爲第一。文德朝。累遷大將。至是。罷。定信弟。生長深宮。溫雅好音。不問家事。

貞觀元年。己卯夏四月朔。日有食之。五月至秋八月。雨不止。大水。地屢震。冬十月朔。日有食之。是後九年。凡十二食。

二年。庚辰春二月。天皇始受經。先讀孝經。後以爲恆例。以參議藤原良繩。爲左大辨。時南淵年名。爲右大辨。大江音人爲左中辨。良繩私謂人曰。二賢老成。吾出入汗顏。良繩。內麻呂孫。大津子。夏四月。殞霜殺草。冬十一月朔。日南至。公卿表賀。大赦。加主典以上爵一級。冬至實在二日。太政官使移在朔。以閏十月小。爲大。

三年。辛巳夏六月。天皇御前殿。觀童相撲。
四年。壬午春。地數震。元年以來。震霖不止。　夏四月。大雨。詔。使參議以上論政事得失。右大臣良相表。薦辨官及諸國司有循良名者。及明經秀才得試及第者。及凡諸僧綱曾經八省講師。通熟世諦者。同上意見。伊豫守豐前王奏。諸王給服。徒費無紀極。請。以見在爲額。不聽輙過數。奏可。

頼襄曰。漢匡衡・杜欽・谷永之徒。當王氏擅政之時。務言人主過失。以售直名。而其實黨附外家。後世鄙之。自清和立。外祖攝政以來。每歲霖雨地震。九年之間。日十二食。所以致之。不待識者而知也。至此。詔朝臣。論政事。而藤原良相又表薦外官及諸生下及僧綱。可謂廣開言路矣。而纔得伊豫守一言。所言裁減諸王支給而已。噫。當時天下之弊事。舍此無可言乎。王室之運日消。外家之勢日長。如漢之爵五侯。黃霧四塞之時也。使一言及此。饒不能救。猶足警戚黨之心。而洩天下之憤矣。乃助之爲虐。何哉。豐前王非亦係宗籍者乎。推其所爲心。不過以此媚藤原氏。以冀昇進耳。豈非夫匡杜之類哉。蓋滿朝野。皆此輩鄙夫也。則人主誰與保其宗社。悲夫。雖然。當時皆知求言之爲虛文。爭言非切要之事。故史

無所載。獨載此言者。蓋外家得此。喜以爲剪削宗室之資耳。吾因是思之。國朝律令。定於天長以前者。百世不可易也。至於格與式。隨世損益。或有因一時之獻替而成歷世之沿革者。貞觀・延喜以下之式者。往往抑宗親。揚輔相。得非所謂禮之末造。未可盡信者乎。至於武門封建之政。非有復一定。如王朝之制者也。而其各口傳。以爲格爲式者。大抵抑彼揚此。各自驕傲。又有自侈大爲無益之費者。烏知非因諛者之言。遂以成典要也。

五月。以海賊公行。奪備前貢米。令山陽・南海二道追捕。　六月。霖。賑京師飢民。　冬十月。免大和絶戸應除籍者三百烟。

五年。癸未春正月。大納言兼右大將源定薨。二月。以中納言藤原氏宗兼右大將。　夏。大疫。令諸國誦仁王經。修御靈會於神泉苑。祭崇道天皇・伊豫親王・藤原夫人吉子・橘逸勢・文屋宮田麻呂等。

六年。甲申春正月。天王元服。良房罷攝政。　二月。天皇幸良房第。觀花。良房召文士賦詩。令山城守。帥郡司・百姓。行耕田禮。曰。使帝知稼穡艱難也。

七年。乙酉秋。大風雨。大水。

八年。丙戌春閏三月。應天門火。大納言伴善男有罪。流伊豆。流肥後守紀夏井于土佐。善男以善逢迎。寵於仁明。自內記累歷顯要。害左大臣源信。欲陷之代其位。作匿名書。誣信及源融・源勤同謀反。及災。奏信所爲。與右大臣良相謀。發兵。圍信第。召參議藤原基經。命之。基經問太政大臣知否。良相曰。大臣慈悲崇佛。必不能斷。基經曰。是大事。不可不告。良房聞之。走造朝。奏信有定策功。不可戮。遣使慰諭。信懼。表辭職。不許。已而有左京人訴焚門者。乃善男及其子中庸。奴紀豐城也。鞫問服罪。當斬。宥流之。遠竄中庸・豐城。豐城。夏井弟也。夏井坐獲罪。夏井。古佐美曾孫。文德嘗聞其名。召見。素貧。衣履弊惡。左右笑之。帝曰。是疲駿也。擢爲少內記。遷右中辨。出爲讚岐守。秩滿。民詣闕。乞留二年。民殷富。乃新造大藏四十宇。皆糙納。爲不動穀。至是。緣坐。肥後民。遮途號哭。過讚岐。民哭聲接數十里。在配所。喪母。哀毀遂卒。　秋八月。勅太政大臣良房。復攝政。　冬十二月。罷良相左大將。以藤原氏宗代之。參議藤原常行兼右大將。氏宗表。讓於參議基經。不許。氏宗。葛野麻呂子。基經。良房子也。

九年。丁亥春。大饑。盜賊劫人。行火。令近衞・兵衞。每夜分番巡察。令畿內國司。每鄉結保督捕。夏。置常平所於東西市。賤糶官米。　自四月雨。至五月。　冬十月。右大臣藤原良相薨。良相

篤於親族。嘗割封戶。置義田。收養宗族子女不能自存者。　是歲。以備中介藤原保則。爲備
前權守。保則。繼繩曾孫。初備中饑。民多流亡。爲盜。前守喜苛政。囚徒塡獄。保則政存大體。務
本禁末。田疇戶滋。外戶不閉。轉備前。知僚吏有奸贓者。不擿。分與己俸。曰。子久疲學官。始得
微官。宜勉廉節。期榮進。特爲仰事俯育。屈受汚名。貧累善人耳。吾薄俸相賚。謹勿犯官物。
十年。（戊子）夏。罷左大將氏宗。以中納言基經代之。　冬。左大臣源信薨。
十一年。（己丑）春正月。立皇子貞明親王。爲皇太子。生甫三月。母藤原氏。　夏五月。陸奧地震。山
裂海涌。死者千許人。　六月。新羅海賊。夜入博多。掠豐前貢絹。追捕不獲。以參議藤原冬緖。
爲太宰太貳。陳四事曰。嚴烽燧。禁出賣馬。庸米雜米。總納稅庫。不容置諸司。穀倉院停交易
勾當。並從之。　秋七月。肥後海溢。漂沒六郡。　冬。大鳥集府廳及兵庫。占。當有寇。敕。以右近
衞少將坂上瀧守。兼太宰少貳。往備之。奏。博多爲輻湊緊要地。距府二驛。請移置統鎭一人。
具兵械。備不虞。從之。又敕西海・山陰諸國。修守備。　是歲。貞觀格成。
十二年。（庚寅）春。以參議在原行平。爲太宰權帥。奏。舊漕肥前等六國穀。爲對馬年糧。阻風覆沒。
達者十四。請。停漕。發其民。營壹岐水田。輸之對馬。止壹岐稅。課之六國。彼此皆便。又奏。肥前

松浦郡庇羅・佐嘉二鄕。爲唐使往來樞轄。新羅賊亦經此入寇。地居海中。般阜多奇產。徒委郡司。恣聚斂。其民厭苦切。欲貢輸公家。請。合爲一島。置島司郡領。任土賦貢。其俸料擧定正稅公廨之間。令兼任肥前國權官。公卿議。許二年。先明息耗。行平。阿保親王子。賜姓在原。

賴襄曰。國朝古重邊防。太宰・鎭守二府。最爲要地。選才勇任焉。當任者。皆盡備禦之略。其綜理微密。非後世所及也。然其要在於不以邊事擾內地而已。先是。按察使以東邊兵糧。每課東國。杼軸空竭。請。以阪東官稻充陸奧廨。以陸奧廨留收官庫。公私兩便。至是。宰帥又以舊漕西海六國米。爲對馬年糧。多覆沒者。請。停漕。發其民。營壹岐田。輸之對馬。止壹岐稅。課之六國。彼此兩便。無佗。皆計不擾內地也。故此後。出羽守亦有所奏請。曰。無用之卒。騷動部內。待敕之處。還致巨害。宜撿出奧羽之逃民。給以中國之甲冑。是濟邊民之困。其實亦濟內地之弊也。蓋因其土毛。用其土兵。土兵之百。當徵發之萬。土毛之升。當漕轉之斛。不唯不以擾內地也。至於宰帥請以松浦二鄕般阜多奇產。徒委郡司。爲外國之利。不若。收之縣官。置吏賦貢。令兼任肥前國權官。是又欲收邊利於內地也。然而廷議許。試

之二年。先明息耗。則慮興利而招害也。恐所獲不償所失也。亦可謂有識矣。要之。古朝廷重邊事。故大小之吏。盡心效智如此。後世雖有災異。略不加意。及有警急。乃爲釋騷。內外皆擾。其費不貲。卽收利之策。不驗而許。終於無獲。嗚呼。何不以古爲師哉。

是歲。參議春澄善繩薨。善繩伊勢人。父爲周防大目。天長中及第。補文章得業生。時內記闕。淳和帝素重士。虛此職。以俟善繩。累遷至今官。疾病。授從三位。時諸博士互相短長。弟子亦各立黨。獨善繩恬退。謝遣門徒。不爲謗議所及。

十三年。辛卯春二月。天皇御紫宸殿。視事。自文德時廢之。至是復故。羣臣皆悅。　秋。閏八月。大雨。鴨河水暴溢。賜穀鹽遭害民。敕。禁民或請河傍閑地。穿渠墾田。又禁占河壖近郊牧地。爲田園。令諸國輸貢者。失放牧之便。凡河傍田爲堤害者。無公私皆廢。　是歲。貞觀式成。

十四年。壬辰春二月。右大臣藤原氏宗薨。　秋八月。以大納言源融。爲左大臣。大納言藤原基經。爲右大臣。兼左大將如故。　九月。太政大臣良房薨。敕廢朝三日。贈正一位。封美濃公。諡忠仁。前後再封三千戶。辭受其半。

十五年。癸巳春二月。惟喬親王薨。王隱居小野。絕外交。歌詠自樂。在原業平。紀有常等。時訪至。

唱和而已。薨。年二十六。

十七年。乙未春。冷然院火。　夏。下總俘囚叛。敕近國兵。討平之。

十八年。丙申夏四月。大極殿火。延燒小安殿・蒼龍・白虎兩樓。及北門北東西三面廊。數日不滅。廢朝。數日。　秋七月。肥後獻白龜。初仁明・文德之際。諸國連獻白龜。至是。又有此獻。公卿稱賀。　冬十一月。天皇禪位於皇太子。時年二十七。帝風儀端儼。寡言好書。尤崇釋教。既遜位薙髮。名素眞。持戒。二三日一進齋飯。毀瘠骨立。後五年崩。

陽成天皇

諱貞明。清和第一子。母中宮藤原氏。贈太政大臣長良女。在位八年。改元一。曰元慶。爲藤原基經所廢。後六十五年。崩。壽八十二。葬神樂岡東北。

元慶元年。丁酉春正月。天皇卽位于豐樂殿。甫十歲。　尊先帝曰太上天皇。右大臣兼左大將藤原基經。攝政如良房故事。左大臣源融・中納言兼右大將藤原良世。竝如故。基經辭大將。以大納言源多。兼左大將。上皇特旨賜基經寶劍一口。佩之。　夏四月。造大極殿。　冬十一月。參議大江音人薨。音人嘗侍讀先朝。與菅原是善等。撰定貞觀格式。

二年。戊戌春。以去年旱。畿內饑多盜。置常平司于東西京。賤糴官米。轉播磨・備前不動穀。給河

內和泉。　三月。勅五畿曰。校班之政。盈紀爲期。自天長五年以來廢之。五十年于今。遂使無身之輩。尙領田疇。見役之人。曾無潤益。宜下知牧宰細校。依實言上。若所申排虛。有致隱沒。科以違勅。　是月。詔太宰府。採豐前規矩郡銅。　夏。出羽夷俘叛。以左近衛將監小野春風。爲鎭守將軍。以右中辨藤原保則。爲出羽權守。討平之。初出羽。民夷雜居。田地膏腴。姦吏豪戶。規私利。困編氓。至是。秋田城司良岑某。徵斂萬端。夷種相聚數萬。攻燒其城。出羽守藤原興世。拒戰屢敗。攝政基經延保則。問計。對曰。夷種怨怒死戰。一可當百。非百萬不可克。救其窮。綏其死。可不血刃而服也。基經欲保則往。保則曰。彼獸性。欲德懷之。須先威蒞之。因薦春風。春風時遭讒。免官。乃奏遣兩人。勅奧羽守吏。皆受保則處分。保則卽發。路疊得敗聞。從者失色。保則自如。人心倚安。時城下不和賊者三村。乃發郡倉。資給之。勉防賊。春風由陸奧出上津野。宣恩詔。春風少在邊。習夷語。脫甲單騎入虜軍。面諭招降。豪酋數十人。挈至國府。保則親慰勞。以其謀斬渠帥二人首。撫納餘種。自渡島至津輕。聞風內附。乃修城倍舊制。保則初在兩備。治尙寬。及來出羽。以嚴治之。奏復出羽庸調二年。給不動穀六千餘斛於雄勝・平鹿・山本三郡狄俘。時以良岑無罰。保則無賞。譏基經失政云。

賴襄曰。國之有亂。譬若人之有疾。謀之良醫。雖未診其脈。而聞其患狀。察知病之所因。曰。是因此焉耳。以某方治之。愈矣。故雖症有劇變。夷然不驚。非如庸醫之動色失措也。如藤原保則者。豈非治邊之良醫歟。其曰先威後恩者。不攻則補未可施也。撫慰未叛邑里者。扶元氣。以壓疾勢也。請復庸調賑給夷俘者。則將息病後。而病之因。實在於此也。故病各有因。病者又有强弱。不可守一方。是以治兩備以緩。治奥羽以嚴治期於愈人。不必專功於己。他醫有慣此症者。可引以助我治。是以薦小野春風。以同其事。而二人所以奏此效者。實由藤原基經。基經其猶病家擇醫。而委任之歟。雖然。其不賞保則。不罰前守者。病愈而不謝醫也。同視良庸。後有疾。誰效力者哉。蓋奥羽之亂。自寶龜至此。凡三次。皆因守宰失撫御。民夷困窮。病之因同矣。而東北隅。每易叛難治。以至天喜・寛治。猶尙爲梗。而東國武人。數立功於彼者。終爲朝廷之大患。如痼癖之與人終始。而對症之藥。每用得效者。亦終貽害遺毒也。

三年。己亥夏六月。春風至。

四年。庚子春二月。保則罷任。　冬十二月。基經爲太政大臣。攝政如故。　太上天皇崩。　葬淸

和天皇。 是歲。參議菅原是善薨。是善以文學著。嘗與基經。撰文德實錄。
五年。辛丑夏。下官符山陽・南海二道。捕海賊。 是歲。建奬學院。
六年。壬寅春正月。天皇加元服。 以大納言源多。爲右大臣。兼左大將。如故。
七年。癸卯春。渤海國使來。以式部少輔兼文章博士菅原道眞。權行治部大輔事。迎接玄蕃寮。
冬。備前守奏請。募國中浮浪二百餘人。建柵要害。給舟及兵械。備海賊。割公廨稻十萬束。別出擧。以其息利充兵糧。

八年。甲辰春二月。太政大臣基經廢天皇。立式部卿時康親王。卽位。初帝稍長。耽嬉戲。喜馳馬。作廐禁中。畜小狎進。基經悉逐之。不悛。至令人緣木。掊殺之。基經有廢立意。屬意廢太子恆貞。恆貞固拒之。更求諸皇子。時康親王。仁明第三子也。嘗赴藤原氏大饗。饌者遺尊者雉足。遽取供親王者。充之。親王夷然。爲滅燭掩跡。基經適見之。知其雅量。至是。密訪諸皇子。諸皇子爭。自修飾。最後詣親王第。久之。出見。衣服雅素。徐曰。何故見過。基經。心益服之。乃陳推戴意。許之。乃會公卿議。不決。左大臣融欲自當之。基經以其已賜姓爲臣。不可。參議藤原諸葛勵聲曰。今日敢不依太政大臣處分者。有罰。議乃定。誘帝。遷陽成院。帝始驚泣。時歲十七。

賴襄曰。國朝有廢太子。未有廢天子。廢天子。自藤原基經始。而當時無異議。後世稱之者。何哉。由其門望無比乎。藉其父勢乎。抑其器略神識。壓服中外乎。三者皆然。然有大焉者。曰。所廢。當廢者也。所立。當立者也。立當立者。而廢當廢者。雖無三者。天下將服之。況有三者。藉而行之。如以巨船大帆。乘順風壯潮。誰能禦之哉。基經不必知古有霍光者也。而能爲光之所爲。豈非大臣慮社稷者。有所暗合耶。而吾以基經爲勝於光也。夫光不及基經之資望者。則基經此擧。宜如易於光也。而其實爲難。光之於昌邑。以己之意。立不當立者。故輒立輒廢。不出一歲。何其易也。基經之於陽成。則以先皇嫡嗣。不得不立也。己爲其外舅。廢之。非其利也。而廢之。不得不廢也。八歲立。輔之七年。其爲之難。可知也。光孝以親王爲省卿。異於宣帝之在民間。然其疏遠不著。略同。光以丙吉奏記。始知之。而基經則預察識其當立矣。光有太后。爲之主。有張安世。與之謀。基經已無所仰稟也。所共議公卿。如源融・源多。概皆紈袴子。是非其器識有勝於光。何能辨此。光立一宣帝而已。基經又定策宇多。亦所謂當立者也。光薦外孫女於昭帝。又計納女於宣。掩妻邪謀。死不血食。累宣之德。而基經無此事。能保功名。君臣兩美。其純爲社稷。不爲私。亦有勝於光者也。基經之勝於

光也。果矣。雖然。其自用專擅。貪於權勢。則同。豈皆不學無術故耶。如其門望滋盛。子孫至
僭上蔑君者。雖勢之馴至。非其所得知。不無有所以貽之也。

日本政記　卷之六　終

日本政記 卷之七

賴襄子成 著

光孝天皇

諱時康。仁明第三子。母女御藤原氏。贈太政大臣總繼女。在位三年。改元一。曰仁和。崩。壽五十八。葬葛野郡田邑陵。

春二月。天皇卽位于大極殿。尊先帝。曰太上天皇。太政大臣基經。左大臣融。右大臣兼左大將多。大納言兼右大將良世。竝如故。基經請罷攝政。使融多代任。不許。　夏五月。敕諸博士。議太政大臣有職掌否。在唐朝相當何官。　六月。特詔。萬機依舊。先稟太政大臣基經。而後奏聞。

仁和元年。乙巳春。賜基經宴內殿。爲度僧五十人。壽其五十。又賜游獵地一處於攝津。以藤原佐世。爲大學頭。初佐世爲基經家司。薦。令與大學生對策。前文章博士都良香。謂人曰。藤氏何求不得。乃又如此。欲使吾曹何處生活。佐世遂及第。爲得業生。累遷右少辨。奏貸新錢三

十貫於左右京職。以其息。充學寮生徒菜資。冬十二月。下信濃守橘良基刑部獄。良基廉直。務富民。治爲當時最。其民有與怨家相鬩者。詣太政官訴之。官遣使鞫訊怨家。良基命。收訴者。官符譴責。不服。乃召之推斷。未竟卒。良基歷任五國守。罷還。不載資糧。其子嘗問治民術。對曰。百術不如一清。及卒。家無餘儲。中納言在原行平賻絹布。纔得葬。

二年。丙午夏。以肥後・攝津・豐後・甲斐四國守。經年不赴任。敕。降位一階。奪其告身。　以左中辨平季長。爲問山城民苦使。季長奏請。停諸院・諸宮。及諸王臣家。或爭民戶田。或奪浮浪財物。不牒國郡司。闌入邑里。遞相壓略者。又奏請。民囑託勢家。不由國宰。爭訟財物者。不限士浪。不論蔭贖。決杖一百。所爭物悉沒官。院宮各家司。並科違敕罪。奏可。季長。葛原親王孫也。

三年。丁未秋八月。帝不豫。召太政大臣基經。立第七子定省。爲皇太子。尋崩。初帝多子。憚基經。未敢立太子。及是。基經入臥內。請有不諱。傳位於誰。帝曰。唯公擇之。對曰。王侍從可。謂定省也。上悅。召定省。右執其手。左執基經手。泣曰。朕與汝得位。皆大臣力。愼勿忘。既出。率百官。上表。立之。帝有志興舊典。屢御外朝。視事。

宇多天皇

諱定省。光孝第七子。母班子女王。仲野親王女。在位十年。改元一。曰寬平。傳位皇太子。後三十四年崩。壽六十五。火葬大內山。

冬十一月。天皇卽位于大極殿。太政大臣基經。左大臣融。右大臣兼左大將多。大納言兼右大將良世。竝如故。基經乞歸政。不許。敕。萬機無巨細。關白基經。關白始此。尊生母從二位女御。爲皇太夫人。

四年。戊申春三月。詔以太政大臣基經。准三宮。初帝卽位。詔基經。有宜以阿衡之任爲卿任語。左大辨橘廣相所草也。或謂阿衡位高。不預事。基經不懌曰。然則吾閑人耳。命放廐馬。奏曰。臣聞。阿衡無職掌。崇高可知。以臣擬之。恐非所堪。然居無職之地。固臣素志也。帝驚。優詔諭。廣相草詔。失朕本意。朕欲庶政仍舊。關白於公。垂拱仰成而已。基經乃奉詔。　秋九月。敕。圖殷・周・唐名臣像於紫宸殿障子。納內大臣高藤女。爲更衣。　冬十月。右大臣兼左大將源多薨。納基經女。爲女御。

寬平元年。己酉冬十一月。聽基經乘腰輿入朝。以大納言良世。兼左大將。中納言源能有兼右大將。能有。文德皇子。　是歲。鑄寬平大寶錢。

二年。庚戌冬十二月。基經疾。乞解職。優詔。許之。

三年。辛亥春正月。太政大臣基經薨。敕。廢朝三日。贈正一位。封越前公。謚昭宣。世稱堀河大臣。二月。召讚岐守菅原道眞。爲藏人頭。道眞上狀辭。不聽。　三月。以大納言良世。爲右大臣。兼左大將。如故。召太宰大貳藤原保則。爲左大辨。先是。保則在朝。不得意。曰。吾老矣。宜預修冥資。聞讚岐多紙。請。爲讚岐守。曰。吾欲寫佛經耳。州民多學法律。健訟。自保則來。人重廉恥。及除宰府。鎭西多盜。吏不能禁。保則知其由飢寒。賑給慰撫。政尙清簡。乃無盜。民安之。帝聞而召之。尋任參議。兼民部卿。

四年。壬子夏五月。敕藏人頭菅原道眞。撰類聚國史。

五年。癸丑春二月。罷左大將良世。以源能有代之。中納言藤原時平兼右大將。時平。基經子。夏四月。立敦仁親王。爲皇太子。藤原高藤女所生。以源能有爲傅。是歲。高藤女爲女御。

六年。甲寅夏五月。唐使來。　秋八月。以參議菅原道眞。爲遣唐大使。報之。聞唐亂。不果行。遂能使不通。　九月。新羅海賊入寇。筑前守文屋善友防戰。大破之。斬其將領十四人。先是。西邊數有寇警。敕太宰府曰。勿以兵故令農失時。且防且耕。至是。府驛奏寇復至。尋捷報至。

賴襄曰。宇多之爲英主也。其攬權柄。振紀綱。躬勤儉。擧賢能。以宗廟生民爲心。所以接天智・桓武之業者。不必論也。獨觀其處分邊防。足以知其他矣。宰府數奏寇警。詔曰。勿以兵故失農時。且防且耕。大哉言乎。可以爲百世法也。大凡太平之世。四海無虞。文恬武熙。一有風魚之警。上下相驚。奔走警告。差將吏。運糧仗。國內爲之騷擾。而寇爲何者。來爲何由。或未之知也。來於東則東奔。來於西則西奔。來者之虛實。未確。而奔者已罷極矣。以彼爲虛。以廢我防。而實矣。其力不可支也。以彼爲實。以盡我防。而虛矣。其費不可給也。如是數次。國有不內壞者乎。嗚呼。亦何不反其本思之。沿海之鎭。何爲而置哉。其將吏守何職。兵卒服何業。我預於平日。命爲之處置。無非備寇。寇至。有戰而已。何必擾擾來告我。我亦何必擾擾往援之。帝之意。蓋亦如此而已。但雖將卒備矣。未有不食而能戰者也。故曰。勿廢農時。且耕且戰。夫使戰而無耕。何資以戰。耕而無戰。亦何損於國哉。故寇有虛有實。而國無損有益。故曰。帝之言。可以爲百世法也。帝不徒言之也。當時寇出於實。而筑前守防戰。大捷。其效驗如此。雖然。當時所以能爲此言。成此效者。又有其本焉。本者何也。曰。收權柄。振紀綱。躬勤儉。擧賢能。以宗廟生民爲心。

七年。乙卯春二月。定置左右檢非使廳。敕中納言兼民部卿菅原道眞。錄囚徒。帝患多滯獄。故有此令。每日聽斷。無少遲緩。道眞多所平反。　三月。敕申禁王臣家出擧私物。貸民求利。犯者沒物。科罪。　秋八月。左大臣源融薨。融。嵯峨皇子。嘗造別業于宇治・嵯峨。及東六條河原。窮極詭麗。稱河原左大臣。

八年。丙辰秋八月。以藤原良世。爲左大臣。源能有爲右大臣。兼皇太子傅。如故。九月。廢二條太后藤原氏。流僧善祐於伊豆。以有醜聲也。冬十月。太宰府奏。慶雲見。公卿表賀。以爲政和德至之應。詔曰。朕卽位九載。水旱癘疫。兵與盜起。政和德至之言。可以偸置齒牙乎。君臣一體也。朕恥。卿等亦可恥。勿爲虛賀。又敕。服御常膳。旣減省准舊四分一。庶擧塵露之積。以成禮節之和。豈圖水旱相仍。諸國闕調。百官乏俸。不怨天。不責人。朕自取之。今重減三分一。省年料雜物之半。其餘用度。中分以折。旣無謀於富國。唯合體於貧民而已。告中外。知朕意焉。十二月。左大臣良世致仕。

九年。丁巳夏六月。右大臣能有薨。以藤原時平。爲大納言。兼左大將。菅原道眞爲權大納言。兼右大將。中納言源光爲權大納言。定爲三員。　是歲。尊皇太夫人。爲皇太后。　秋七月。皇太

子加元服。時年十三。帝好佛乘。遂禪位。自著書。歷擧古今國家得失。臣士賢否。誡新主。其略曰。明賞罰。勿用愛憎。愼喜怒。勿形諸色。勿聽婦言。勿近小人。詢治於有識。求道於六經。左大將藤原朝臣。功臣之後。雖少。諳政事。初頗聞內行不謹。屢加激厲。可資輔導。右大將菅原道眞。當今鴻儒。深通政理。直言不忌。朕立儲貳。獨與之議定。且將讓位。未果。朝臣曰。事留變生。遂使朕意如金石。則不唯朕之忠臣。乃新君之功臣。其敬重之。季長達典故。長谷雄涉經典。竝宜進用。上尊號。曰後太上天皇。以別於陽成上皇。徙東三條院。尋遷朱雀院。

醍醐天皇

諱敦仁。宇多長子。母贈皇太后藤原氏。內大臣高藤女。在位三十四年。改元三。曰昌泰。延喜。延長。傳位皇太子。崩。壽四十六。葬宇治郡山階陵。

天皇卽位于大極殿。大納言兼左大將時平。權大納言兼右大將道眞。以先帝命。輔帝。參決機務。

昌泰元年。戊午冬十一月朔。日南至。羣臣表賀。大赦。　帝讀羣書治要。紀長谷雄侍讀。

二年。己未春二月。以時平爲左大臣。道眞爲右大臣。兼左右大將。竝如故。道眞自以家本儒林。而居臺司。衆望不厭。三上表固辭。不聽。時年五十五。時平二十八。　冬十月。後太上天皇剃

髮。法名空理。稱法皇。
三年。庚申春正月。帝覲法皇於朱雀院。相議。左右大臣竝執朝政。無所統一。乃召道眞。密諭。使關白庶政。如藤原基經故事。道眞固辭不受。且奏。召臣無事。人必怪之。因命題。賦詩以獻。賜御衣而罷。　以大納言藤原高藤。爲內大臣。無何薨。高藤。冬嗣孫。良門子。　冬十月。文章博士三善清行上革命議。以爲。明年辛酉。當帝王革命。君臣剋賊之運。宜深用意。清行上書右大臣道眞。勸其退避。道眞不從。
延喜元年。辛酉春正月朔。日有食之。貶右大臣菅原道眞。爲太宰權帥。以大納言源光。爲右大臣。中納言藤原定國兼右大將。定國。高藤子。初道眞已受殊遇。以格君致治。爲己任。知無不言。綜理政務。裁決如流。天下想聞風采。左大臣時平。年少氣銳。固執不相下。道眞不欲每事立異。常竊嘆之。時平及聞關白密旨。益不懌。光爲帝舅。與定國。皆以門地高。愧位道眞下。式部少輔藤原菅根。道眞所薦。嘗忤意被怒。啣之。時平因與三人相結。譖道眞於帝。誣其欲廢帝立齊世親王。親王。道眞女壻也。帝震怒。下敕貶謫道眞。憂悶。無以自白。作和歌。哀訴法皇。法皇驚。欲見帝申救。菅根戒門者。不通。道眞男女廿三人。流徙各異處。天下冤之。時平又欲

禁錮放逐諸及菅門者。三善清行諫而止之。

菅原相公之貶。世專咎藤原時平。稱讒臣。必以爲稱首。賴襄以爲不然。曰。自外戚專政。類此者多矣。不獨時平也。前焉。如良房之斥安倍安仁。基經之不用藤原保則。後焉。如師尹之除源高明。兼通之忌中書王。皆是也。其意曰。台司獨我家爲。彼何爲者。如源常與信・光。以其易制故。得伴食耳。其與己相軋者。輒搏擊而去之。豈獨時平哉。貶菅公。非必時平所致也。然則誰所致。曰。宇多致之也。宇多非患相門之如彼。故擢公。使與之衡。亦丁寧醍醐。專聽於公者也哉。曰。是所以禍公也。夫如彼者。非一日也。中外慣習。以爲當然。擢之寒族。使與之衡。而能衡焉。無敢異議。何哉。嗾識之者在焉爾。故宇多在位。則儼然右大臣。人望而畏之。一去位。則文章博士妄據政府也。雖無時平。不可久安者。勢也。且夫家宰之寵於父者。其子必憎之。憎其倚父寵。以制我也。以爲我自有所用。何必是。且己所用。與己年齒相若。志趣相投。而父所用皆否。民庶之家且然。況人主有天下者乎。人主之所樂者。此位也。故其所忌。莫甚於兄弟之逼於己。中其所忌。以使恣其所樂。宜乎。其言易入也。況出於己所用。常所愛信者之口乎。故延喜之貶菅公。不必待時平之數言也。其情素然也。情與

勢者。天下之所不能違也。而宇多欲以一紙遺誡禁之。其不可也必矣。故致菅公之貶者。非宇多而誰乎。而公亦可謂不自慮者矣。吾嘗審遺誡所言。立儲禪位之議。菅公實贊決之。曰。事留變生。蓋是時基經之女。未有所生。生則不可不立也。公豈慮於此耶。然已定儲矣。雖不禪位可也。其意蓋謂。雖禪位。猶當傍觀扶植之。不知權已不在我。我言寧可行耶。宇多崩於承和元年。去禪位三十四。專修佛法。噫以此三十四年間。讀經研法之勤。移之於政。政當更何如哉。而公亦終其輔翊之功。何貶謫憂死之有哉。襄故曰。菅公之貶。宇多致之也。而公亦有以自取之。

秋八月。左大臣時平。大外記大藏善行。上三代實錄。實錄。道眞所定居多。以其貶。不得列名。善行年七十。時平會一時名士。開宴稱壽。執弟子禮。時人榮之。

三年。癸亥春二月。前右大臣兼右大將太宰權帥菅原道眞薨。道眞博學敏文詞。爲宇多帝所識拔。終大用。及在配所。閉門不出。以文墨自遣。至是薨。年五十九。

四年。甲子春二月。立皇子崇象親王。爲皇太子。後改名保明。母藤原氏。右大臣源光爲傅。三月。法皇造室仁和寺。稱御室。

五年。乙丑大內記紀友則。御書所預紀貫之等。撰古今和歌集。成。上之。初平城朝。有萬葉集。及嵯峨好唐詩。和歌幾廢。帝有志興廢。敕撰之。

六年。丙寅夏五月。帝受史記於式部大輔藤原菅根。　秋七月。右大將定國薨。　八月。以右大臣源光。兼右大將。

八年。戊辰冬。先是。敕時平及大藏善行。撰延喜格。至是成。上敕頒行之。

九年。己巳夏四月。左大臣藤原時平薨。時平多權數。帝患朝臣奢華。禁之。不止。時平密奏。故自著美服。入朝。帝佯怒。召職事曰。左大臣當躬儉約。以率百僚。乃首犯厥禁。時平爲惶懼者。屏隨身。步歸第。閉門謝客月餘。時人相戒從儉。　源光轉左大將。中納言平惟範兼右大將。惟範。葛原親王孫。季長弟。秋九月。惟範薨。以權中納言藤原忠平。兼右大將。忠平。時平之弟。雅善菅原道眞。及其謫。數問遺之。不以兄故變。時人多之。

十二年。壬申夏。疫。京師火。　是歲。中納言紀長谷雄薨。長谷雄文才敏贍。詔敕。多出其手。嘗與三善清行論文。不合。清行罵曰。自古無有無才博士。有之始於汝。長谷雄不與校。其愼如此。時諸學士多以議論相凌。任誕矜傲者。菅原道眞嘗寄詩長谷雄。勸以敦厚化俗。及道眞及

島田忠臣等相尋逝。長谷雄歎曰。延喜以後。無復知我者。

十三年。癸酉春三月。右大臣源光薨。光有膽識。不惑妖妄說。然以陷菅原道眞。爲時議所貶。

夏四月。以藤原忠平。兼左大將。中納言藤原道明兼右大將。

十四年。甲戌春二月。帝方勵精求治。以連年水旱不登。詔求直言。式部大輔兼大學頭三善淸行上意見封事。其略曰。國朝天險。土沃民庶。臣服三韓。所以能然者。國俗敦厖。民風忠孝。輕賦斂。疎徵發。上垂仁牧下。下盡誠戴上。一國之政。猶一身之治。自後化漸薄。法滋彰。斂增役倍。戶口月減。田畝日荒。既而佛法初傳。上下競傾產造寺。捨田施丁。極於天平國分二寺。各用其國正稅。而天下之費。十之五。桓武營宮城。盡賦庸調。又費五之三。仁明好奢。後房之飾。竭帑倍賦。又費二之一。貞觀中。宮殿頻災復修。又費一之半矣。則當今曾非古之十一也。臣嘗爲備中介。試閱其一鄕。皇極晚年。有二萬兵士。神護中。有二千丁者。貞觀初。七十餘人。及臣時。得九人。今聞其無一人。二百五十年來。衰弊如此。以此推之。天下虛耗可知。陛下照萬古興衰。宵衣旰食。降惠民庶。興復寧無可期。謹陳便宜十二事。其一。請肅祭祀。祈豐穰。不徒備故事而已。其二。請禁奢侈。貞元間。親王公卿。以筑紫絹爲夏衫。今史生以白縑爲之。婦女

婢妾。非紈綾不服。富者誇逞志。貧者恥不及。一衣破産。一饌盡貧。田疇爲蕪。盜賊爲滋。望隨諧定制。至於葬喪亦然。糺其僭忒。自上率下。源澄而流清矣。其三。請修口分田。此制爲收租庸調。而今已奸田闕貢。牧宰懷無用之籍。豪富收幷兼之利。須令閱實班給。其遺田收爲公田。任國司法。或納地子。以充無身之調租。猶有遺稻。納之不動。今略計其數。三倍調庸。爲公有利。爲民無損。其四。請復大學學田。治國在賢。得賢在學。今至以大學爲坎壈之府、凍餒之鄉。望。復學田。又嚴敕博士。公貢擧法。專論材藝。不得受請託。其五。請減五節選妓員。無襲前朝好內之例。其六。請增置判事。舊制判事六員。今獨大判事用明法者。以萬民死生。繫一人脣吻。括五刑輕重。決獨見讞書。乖閱實之理。望。依舊。皆擇明法律者。使俱議科比。詳定條章。復六員。其七。請均給百官四季祿。比年官庫乏物。唯公卿及出納。諸司充給。其餘五六年。難給一季料。雖閑忙殊務。至於頒賜。宜無差別。其八。請停諸國吏民越訴。以牧宰之重。與小吏賤民。比肩受鞫。雖事得白。威權已廢。知恥之士。誰冀爲吏。望。盡無拘以文法。除反逆外。不發朝使。其九。請定勘籍人數。三宮以下。諸王・大夫・命婦資人。諸司・衞府。式・兵二省籍人。一歲稍及三千人。國朝課丁。課奧羽・太宰九國外。不滿三十萬。而大半無有身。則見丁十餘萬人而

已。其中歲除三千人。未盈四十年。天下皆爲不課之民。望。年立定額。大國十人。以次差之。以載鐲符。其十。請選任檢非違使・弩使。檢非違使本掌糺境內奸濫。今其民納贖勞料者。爲之。望。監試明法學生。充任。今奥羽・鎭西。及沿海諸國弩師。皆充年給。許令斥賣。唯論價直。不問才伎。望。令六衛練習。隨功勞任之。其十一。請禁僧徒濫惡。及宿衛强暴。嚮官符禁權貴規錮山澤。侵奪田地。吏易施治。民居得安。猶遺是等。今諸寺僧得度。年二三百人。大半邪濫。及逃課逋租者。天下之民。禿首者居三之一。皆蓄妻啖腥。甚者爲盜。竊鑄錢。望。痛禁懲之。奪度牒。返本役。六衛舍人。須結番警備。而散落諸國。此皆部內强豪。遭國司糺勘。奔入洛。納貨籍宿衛者。望。既充補不得歸住。寧歸者。限暇日。取府牒。送國衙。過限者解職。送狀本府。其十二。請。修魚住泊。西南三道舟程。自檉生至河尻五泊。各一日行。今此泊廢。自韓泊直指輪田。蕩覆年百艘。望。差官司修造。以播備稅給其費。其餘嚮既所獻言。不更重陳。帝嘉納焉。是歲。禁奢靡服。

頼襄曰。三善淸行以實用之才。爲實用之學。雖菅原相公。恐有所不及。其封事者所言。雖有不敢盡者。而切中時弊。可用當世。與彼爲無用之文詞者大異。然其爲書。毋慮五千餘

言。吾恐讀者徒誦。不得其要領也。私芟繁除複。約爲千餘言。而又究其意所歸宿。論之曰。清行之意。不過張紀綱修版籍以復物力而已矣。夫物力者。國之所以存也。而其所以盛衰息耗者。在於紀綱・版籍二者。故祖宗定制。必於此致意焉。使後世子孫。賴以守其國。無此不可一日守也。然守之久。二者歲弛月廢。名存實亡。其終至於守空器。而天下之實移焉。是和漢之所同。而國朝爲著焉。清行生於其漸弛廢之時。欲有以救濟之。當時君相非不嘉納之也。而不能盡用。及至其後。弛者倍弛。廢者滋廢。獨後三條有志於興復之。而短祚不能有成。委靡壞墮。以至保元而窮矣。由二者之不修不張也。豈非百世之永鑒哉。本朝富庶過絕外國。誠如清行所言。而當時丁口耗減如此。其後未知又如何也。而至晩近則息矣。然當時有可班之田。而近世則否。是古今所異耳。至彼不可不修而張之者則一也。故清行之言。不特可用當時也。天下之事。固有衆人不憂。而有識之士。獨憂之者。上共其憂。則其憂可止。上不共其憂。而使之獨憂焉。憂將日深耳。烏見其止也。清行此時已七十矣。而位不過四位。官不過儒門常格。既而纔得參議。未幾而沒。嗚呼。此人也。而不知用。則所謂延喜之政。亦非空名無實者耶。向使寛平不早去位。與菅公並用焉。以盡其才。則

可以收興復之實效矣。吾不獨爲此人惜。爲王家惜也。自古有人才之用舍。關國家之運者。豈獨淸行哉。

夏五月。東京火。延燒六百餘家。敕。賑給遭火者。　秋八月。以大納言忠平。爲右大臣。兼左大將。如故。

十五年。乙亥冬。大赦天下。免延喜十年以前七道調庸。減今年徭半。

十六年。丙子夏。四品貞純親王薨。親王。淸和第六子也。從妻父源能有。學武事。子孫賜姓源朝臣。世爲將帥者。本於此。

十七年。丁丑旱。自九月不雨。至十二月。京城井涸。敕。許民汲冷泉院及神泉苑池水。數日皆竭。

十八年。戊寅冬十二月。從四位下參議三善淸行卒。年七十二。

延長元年。癸未春三月。皇太子保明薨。追復故右大臣菅原道眞官爵。贈正二位。謫道眞以來。歲比不稔。京師屢災。又多旱疫。太子暴薨。世以爲道眞祟。故有此命。　夏四月。立女御藤原氏。爲中宮。皇孫慶賴王爲皇太子。中宮故攝政基經女。故太子母。王太子子也。

二年。甲申春正月。以右大臣忠平。爲左大臣。大納言兼右大將藤原定方爲右大臣。

三年。乙酉夏。皇太子慶賴薨。冬。立皇子寬明爲皇太子。故太子保明同母弟。以左大臣忠平爲傳。其舅也。
四年。丙戌定諸國上損戶法。
五年。丁亥冬。延喜式成。
六年。戊子夏。使少內記小野道風書歷代賢君名臣言行於清涼殿南廂粉壁。道風。篁孫。葛絃子也。
七年。己丑秋七月。大風雨。鴨川決。敕。發正稅。賑山城被水者。甚者免今年調庸。
八年。庚寅春。敕左右京。移養飢疫貧民於施藥・悲田兩院。　夏四月。渤海國使裴璆等來。先是。契丹主阿保機攻滅渤海。改號東丹。命其子突欲鎮之。璆等降附。至是。自稱東丹國使。敕曰。東丹失禮義。使者無人臣之節。璆奉臣下使以入上國。宜詰責以懲將來。因卻還之。前此渤海數通使。此後遂絕。　六月。雷震清涼殿。大納言藤原清貫・右中辨平希世等震死。帝不豫。　秋九月。帝病篤。禪位皇太子。詔左大臣忠平輔之。上尊號太上天皇。是月崩。遺詔。薄葬不奉諡。帝致心政治。每羣臣奏對。必和辭色曰。人主形威嚴。何以得臣下盡言哉。又嘗方寒夜。

親脫御衣。以體凍餒之苦。世以比仁德帝。後世言治。必稱延喜云。　冬十月。葬醍醐天皇。

朱雀天皇

諱寬明。醍醐第十一子。母中宮藤原氏。攝政基經第四女。在位十七年。改元二。曰。承平。天慶。後六年崩。壽三十。火葬。藏骨於後山階陵側。

冬十月。天皇卽位于大極殿。左大臣忠平攝政。十二月。右大將定方轉左大將。大納言藤原仲平兼右大將。仲平。忠平兄也。帝生於舅忠平第。至是甫八歲。生薄弱。常在深室。少見天日。世以爲菅氏祟。

承平元年。辛卯春。以京師多盜。命衞府檢非違使。每夜巡捕。　秋七月。法皇崩。宇多年六十五。法皇深於佛理。所謂廣澤・小野二派。皆推法皇。爲宗祖。屢微行。尋畿甸名山。遺詔。以席裹棺。約以葛。火葬。勿起山陵。奉諡號。天皇無諡。始于此。　八月。葬宇多天皇。

二年。壬辰秋八月。右大臣定方薨。仲平轉左大將。尋爲右大臣。大納言藤原保忠兼右大將。保忠。時平長子也。

三年。癸巳冬。南海道賊起。遣警固使諸國。奉幣諸社。後又修大元法於豐樂院。及治部省。以祈賊平。

六年。丙申夏六月。以從四位下紀淑人。爲伊豫守。追捕海賊。淑人務招流亡。賑困窮。威惠竝行。降渠帥三十餘人。衆二千五百。分給廢田及衣食。悉就農耕。海氛盡淸。淑人長谷雄子也。秋七月。右大將保忠薨。　八月。以大納言藤原恆佐。兼右大將。左大臣忠平爲太政大臣。聽牛車出入闕門。

七年。丁酉春正月。帝加元服。受朝賀。仲平爲左大臣。左大將如故。右大將恆佐爲右大臣。

天慶元年。戊戌夏。恆佐薨。以中納言藤原實賴。兼右大將。是歲。地數震。冬。大雪深丈。

二年。己亥秋八月。盜射殺尾張守共理。　冬十一月。下總賊起。攻常陸介藤原維幾・下野守藤原弘雅・上野介藤原尙範。皆敗之。初上總介高望。葛原親王孫也。賜姓平。子良將爲鎭守府將軍。良將子曰將門。勇悍善射。少仕攝政忠平。求爲檢非違使。忠平不省。將門走赴下總。聚徒爲盜。攻伯父常陸大掾國香。殺之。與叔父下總介良兼數攻鬪。朝廷將討之。將門先馳。詣闕疏辨。得釋。及良兼卒。乃據下總。襲執維幾。武藏權守興世王爲謀主。圖遂割居關東。攻降弘雅。逐尙範。自僭號平新皇。開府猿島。僞置百官。諸國亡賴徒爭殺官吏。應之。初將門與藤原純友者親密。嘗謂之曰。吾王族。當爲天子。藤氏當爲關白。於是純友爲伊豫掾。任滿不還。

據海島。遙應將門。攻殺備前介藤原子高。京師戒嚴。閉三關。

三年。庚子春正月。敕。進天下各神位一階。下官符東海・東山二道。募勇敢士。能殺賊帥者。賜朱紫・田地。世襲。次將以下。隨功賞之。　二月。以參議藤原忠文。爲征東大將軍。賜節刀。討下總賊。以小野好古。爲山陽道追捕使。討伊豫賊。　三月。常陸掾平貞盛。與下野押領使藤原秀鄉等。擊下總賊。平之。五月。征東大將軍忠文等途還。敍貞盛・秀鄉竝從四位下。賜功田。貞盛。國香子。有武幹。欲報父仇。攻將門不克。來訴朝廷。朝廷授此官。乃與秀鄉收兵四千。襲殺將門。忠文素恪勤。及受命。不歸家。直發至駿河。聞事平。乃還。朝議欲與褒格。實賴以其無功不可。藤原師輔曰。是不爲無勞。何可獨遺。實賴固執不可。　秋八月。讚岐介藤原國風討伊豫賊。大破之。賊走太宰府。

四年。辛丑春。追捕使小野好古追擊。悉平之。先是。國風招降賊將藤原恆利。以爲鄉導。衝賊巢窟。純友敗。走太宰府。燒周防鑄錢司。又侵土佐。好古與太宰少貳源經基・主典大藏春實等水陸合攻。戰於博多津。春實爲先鋒。戰尤力。賊敗入海。好古急追。殺溺略盡。純友亡還伊豫。警固使橘遠保。逆擊斬之。

國朝定制以來。稱動兵革者。止於邊寇。未有臣子內叛者。有之。始於天慶。論者歸罪於朱雀之君相。賴襄曰。是徒見其末。未探其本也。天慶之亂。釀於延喜之朝。何以言之。曰。天下之亂猶魚之爛也。魚之爛也。其腸先敗。視其鱗鬣。猶仍鮮美也。以爲鮮美。而度置之。翌日而出之。潰餒臭腐。不可食矣。觀延喜之朝廷。其禮文制度。豈不備且美哉。時稱太平。數擧宴樂。召集文士。歌頌鬱起。而水旱疾疫。民不聊生。盜賊充斥閭里。雖有經理之政。徒行於近。不周於遠也。世徒稱其寒夜脫御衣之一事。是所謂有仁心仁聞。而澤不及民者也。且自貶菅原相公。而藤原氏之勢倍盛。其立國儲。舍長子克明。而立保明。以其爲基經外孫。時平外姪焉爾。猶之可也。及保明夭。更立其子。其子亦殤而立其同母弟。帝多皇子。當是時。言其長則有代明。言其賢則有重明。有兼明。皆舍不立。而必立相家所出。何也。非憚之哉。是所謂仁而不武。無能達也。時平既沒。又以其弟忠平執政。託以八歲天子。以臨制。如彼之天下。如之何其不亂也。余嘗於外史。詳敍此亂。而論之曰。是由相家驕傲。壅隔上下之所致。蓋君相所務。不過目前之私。天下之紀綱廢壞也。人才壅滯也。姦雄窺伺也。皆漫不省恤。及其潰決。所謂雖有善者。無如之何者。何況朱雀之公卿乎。徒呼號神明。以求救

濟。不足怪也。朱雀之時。右大將保忠每冬月入朝。炙餅懷之。以自煖。稍冷賜之從者。世稱其慈惠。呼爲賢人大將。右大臣實賴。聚羣兒嗾巢隔墻聽其語。以知世情。世稱其用心於政。當時大臣之所爲。徒如此類而已。微祖宗德澤。此焉能濟禍亂。而何足責哉。

冬。太政大臣忠平改攝政。爲關白。如基經故事。　帝自寫法華經。追修兵死者福。後亦詔諸寺。造一萬率都婆。是歲。納忠平孫女。爲女御。大納言實賴女也。

六年。癸卯夏。旱疫。

七年。甲辰夏。以大納言藤原實賴。爲右大臣。立皇弟成明親王。爲皇太弟。以帝無子也。是歲。秋。大風雨。

八年。乙巳秋。大風雨。左大臣兼左大將仲平薨。嘗有星變。占咎在大將。右大將實賴讓之。仲平不讓曰。實賴年少才高。吾已老耄。死亦何損於國。性好殖貨。倉庫多於宅地。稱枇杷大臣。

十一月。實賴轉左大將。大納言師輔兼右大將。

九年。丙午帝禪位皇太弟。遷朱雀院。帝性柔仁。關白忠平嘗奏。外議以爲時政過寬。帝曰。朕聞之先帝。君家先關白有言。政如張琴。大絃急則小絃絕。朕若嚴急。下民何堪。

村上天皇

諱成明。朱雀同母弟。在位二十二年。改元四。曰。天暦。天德。應和。康保。崩。壽四十二。葬於葛野郡村上山陵。

夏四月。天皇卽位于大極殿。尊先帝。爲太上天皇。太政大臣忠平。右大臣兼左大將實賴。大納言兼右大將師輔。並如故。帝年二十一。忠平關白庶政。實賴・師輔。其二子也。

天暦元年。丁未夏。實賴爲左大臣。師輔爲右大臣。是歲。祀前右大臣道眞于右近馬場。參議兼民部卿藤原忠文卒。忠文嘗爲近衞司。每宿直。繫寮馬於側。聞其嘶噣聲。警眠。帝欲聽其昇殿。固辭而止。

二年。戊申夏。旱。秋。大風雨。

三年。己酉春。關白忠平以疾請致仕。優詔不許。敕賜度三十人。敕十六寺。禱之。大赦。秋。薨。敕廢朝三日。贈正一位。封信濃公。謚貞信。忠平與兄時平・仲平。並執大政。世稱三平。　前太上天皇崩。冬十月。葬陽成天皇。

四年。庚戌秋七月。立憲平親王。爲皇太子。母藤原氏。左大臣實賴爲傅。先是。大納言藤原元方女爲更衣。生皇子廣平。元方喜謂。必爲國儲。而右大臣師輔女爲女御。生憲平。生三月。立爲

太子。元方失望。遂以憂卒。後冷泉・花山・三條三帝。皆短祚。世謂元方爲祟也。

六年。壬子秋八月。太上天皇崩。遺詔。薄葬勿置陵。稱朱雀院。天皇稱院。始此。　葬朱雀天皇。

八年。甲寅春。太皇太后藤原氏崩。　秋九月。式部卿重明親王薨。親王。醍醐子。好學。醍醐崩。臣子喪服。皆期而除。獨重明行三年喪。所著有吏部王記。　右少辨菅原文時上封事。請停賣官。曰。方今授任非不正。而有以財官人。助國用者。功勞之臣自退。聚斂之徒爭進。昔漢明帝。不許公主爲子求郎。而賜錢十萬。以官非其人。則害及百姓也。降及桓・靈。乃初賣官。漢業以衰。是可鑑也。又請禁奢侈懷遠人。帝皆嘉納。

九年。乙卯罷師輔右大將。以大納言藤原顯忠代之。

十年。丙辰秋旱。詔減服御常膳。禁左右馬寮秣穀。量停諸作役。省冤獄。令諸國灌漑。先貧後富。賑恤窮民。除畿內七道。天曆五年以往調庸未進者。免東海・東山・山陽三道驛戶・田租。限三年。先是。羣臣奏請。減俸祿。不許。至此。敕。減十分之一。

天德元年。丁巳春。罷實頼左大將。夏。以顯忠代之。中納言師尹兼右大將。顯忠。時平子。師尹。忠平子也。　冬。以連年穀貴。運近國不動穀於穀倉院。置常平所。

二年。戊午十月。立女御藤原氏。爲中宮。皇太子母也。是歲。鎭守府將軍源經基卒。經基。貞純親王子。賜姓源。子滿仲又襲父官。

四年。庚申春三月。御清涼殿。爲歌合會。歌合始此。　夏。右大臣師輔薨。師輔能容衆。雖久闕問者。至則待之如初。是以父時賓僚多來歸焉。　秋八月。以大納言顯忠。爲右大臣。　九月。禁中火。歷代重器文書多亡。帝避於太政官朝所。深自警懼。召大臣實頼。曰。其助補不逮。乃索得神鏡燼中。內侍以袖受之。以出。遂稱鏡。曰內侍所。　冬。帝徙御冷泉院。敕。課畿內・南海。及東至美濃。西至長門十六國。修宮。期以明年。令大納言藤原在衡董役。

應和元年。辛酉夏五月。詔。免造宮諸國今年半租。十一月。宮成。還御。

三年。癸亥冬。大納言源高明奏請。獎學院諸生準勸學院。例給年官。任諸國掾。

康保元年。甲子夏。中宮藤原氏崩。納其妹爲尙侍。中宮。右大臣師輔女。有婦德。帝屢問政事。所言多聽。又藤原師尹女爲女御。以明慧得寵。遂疎后。后崩。帝乃念之。后妹登子。爲帝兄重明親王室。出入宮中。帝悅之。通焉。及重明薨。欲納之。而憚后。后崩。踰月乃納爲尙侍。絕寵之。至晝不出寢。欲立爲中宮。以前有子。乃止。左大臣實頼竊惜其累德。而不能匡止也。

二年。乙丑夏。左大臣顯忠薨。年六十八。時平子也。顯忠性節儉。出無前驅。諸兄弟皆壯歲歿。世爲菅氏祟。顯忠每夜出庭拜訴。　五月。以大納言源高明兼左大將醍醐第十七子。　冬十月。行幸朱雀院。觀左右馬寮騎。召文臣四十人獻詩。親試之。

三年。丙寅春正月。以源高明爲右大臣。　三月。御射場。試親王・公卿以下射。　秋。大水。賑兩京民被災者。甚者免調徭。

四年。丁卯夏五月。天皇崩。遺詔薄葬勿置陵。帝寬恕。恩無偏私。嘗問近臣。外間以朝政爲何如。對曰。稱其寬。帝喜曰。朕志也。又嘗召一老吏。問曰。朕治孰與延喜。老吏懼不敢對。帝頻問之。吏乃曰。賤臣何有所見。唯覺主殿寮多進松明。率分堂前生草。與前代少異耳。蓋寮政務所會。堂制大藏省十分一別納。謂政事煩劇。歲貢無餘也。帝聞之。有愧色。自是益加意政治。論者謂其亞醍醐。稱延喜・天曆云。帝好文學。多才藻。而愛文士。上素寵任大納言源延光。適有疎待色。延光懼不朝。俄召見。曰。學生藤原雅材者。甚有文才。卿盍薦之。延光頓首謝。乃奏雅材。爲郎。故事文章博士必兼他官。橘直幹爲博士七年。未有所兼。上疏自訴貧困。帝不懌。然愛其詞。卽日下勅。兼民部大輔。直幹疏。小野道風所書。上以其詞書兩絕。甚賞玩之。後禁內

火。先問曰。直幹疏無恙。其愛才如此。　六月。葬村上天皇。

賴襄曰。世之言王政。必稱延喜天曆。以其典章文物。爛然具備而已。察其實。多不稱者。譬若人之風丰映麗。而心腹蓄疾。是良醫之所畏。故識者於二代無取焉。而謂天曆不及延喜者。非也。然當時已謂然矣。觀村上與老吏問答。可見焉。襄獨以天曆爲勝延喜。何以知其勝。卽此一事。以知其勝也。夫以萬乘之尊。問政事得失於一賤吏。非其留心於政。孜孜不倦。何能如此。至聽其言。以自知不足。益勤於政。則人主之所絕無而僅有。足以爲百世之法矣。延喜恐未能及此。何則其先皇之遺誡。而不肯聽也。則其他可知矣。和顏接下。導之使言。可矣。因災異求直言。可矣。而未聞其聳懼聽納其言。而省於己如此也。蓋老吏言。所謂主殿寮多進松明者。言劇務至夜未已也。夫淸其本源。使不至煩劇。上也。其次雖至煩劇。勤而不倦也。倦而不勤。斯爲下矣。所謂率分堂生草者。言歲貢無餘也。夫量入以爲出。國計常有餘者。上也。其次出者與入者相當也。量出以爲入。而猶不足者。斯爲下矣。醍醐繼列朝太平之業。而村上承天慶大亂之後。國用之贏縮。宜相縣絕也。而其賑恤之政。視之延喜。無或不及。非勤政之效。何以至此。以此言之。雖曰天曆勝延喜。可也。其授政權

於外戚。則延喜之遺毒。不可解免耳。雖然。兼明・高明。於帝爲親兄弟。藤原在衡。於戚黨爲疎屬。而皆引當要路。使與諸權戚相鈐制。視之延喜之忌弟。逐父所簡遺大臣。而獨任二后兄者。孰與耶。或曰。高明亦以中宮妹夫爾。然則謂兼明・在衡何乎。至若夫好內寵。帷薄不修。所謂累德之大者。雖然。未至如唐明皇奪子之妻。勤政不終。終速大亂要之。當時風習。多如此者。不可專尤於帝也。

冷泉天皇

諱憲平。村上第二子。母中宮藤原氏。右大臣師輔女。在位二年。改元一。曰安和。讓位皇太弟。後四十四年崩。壽六十二。葬櫻本乾原。

冬十月。天皇卽位于紫宸殿。帝有疾。未愈。不能御大極殿。時年十八。十二月。左大臣實賴爲太政大臣。關白庶政。聽節會日不就班。直上殿。立皇弟守平親王。爲皇太弟。右大臣高明爲左大臣。大納言師尹爲右大臣。兼皇太子傅。

安和二年。己巳春三月。貶左大臣源高明。爲太宰權帥。藤原師尹爲左大臣。兼左大將。大納言藤原在衡爲右大臣。大納言藤原伊尹兼右大將。初村上中宮。生帝及爲平・守平二親王。殊愛爲平。中宮妹適高明。高明又進其女。爲爲平妃。既而中宮與其父師輔皆逝。爲平失勢。村

上以帝有心疾。欲立為平。為其儲貳。諸藤原氏以其婚源氏。沮之。及村上崩。關白實頼稱遺詔。立守平。高明失望。右大臣師尹害高明。常謀因事除之。代其位。至是。帝病不愈。中外謂當有禪位。左馬頭源滿仲。與中務少輔橘繁延等。密謀奉為平。走關東。作亂。已而滿仲意中悔。詣師尹。誣告高明與繁延等。謀廢立。上未之信。師尹急戒嚴諸門。遣兵。圍高明第。矯詔貶謫。繁延等皆坐流。京師騷擾。如天慶亂。為平憂懼。欲削髮。帝慰喩。止之。　八月。帝疾劇。讓位皇太弟。遷冷泉院。

頼襄曰。安和之變。可謂可疑矣。夫源高明進女於為平親王。出村上之命。曰謀擁立之。以擅政者。臆逆之言耳。雖然。村上欲立為平。為冷泉之儲貳。而以其與源氏婚。有沮之者。實也。及村上崩。遂矯遺詔。立守平親王。蓋不厭中外之心。故曰高明失望出怨言者。或與誣所傳也。而亦未可必其實否也。舊史乃稱。高明怨望為亂者所誣告連及。然而所謂作亂者。何人哉。非省府下僚。則國介耳。典廏耳。忽謀奉親王。奔關東。為平新皇之所為。是最可疑者也。不然。其意中變。走告者。就中稍有威望者也。饒令自首。宜少加斥黜。而無所問。即雖稱為逆首者。間歲輒召還。給封三百戸。無所防護。何哉。嗚呼。此與承和之變。延喜之事。

其情一也。三者。獨延喜。世全知其寃。而承和與安和。以半爲實。以半爲寃。吾斷以爲全寃也。構此寃獄者。有主有從。延喜之源光。安和之藤原師尹。皆所謂從也。知延喜之爲主者。則知安和之爲主者。而承和之爲主者。亦可知矣。曰。雖然。主於承和者。未是其志者也。主於安和者。則既逞矣。而何苦組織構成之耶。曰。彼以其所據地爲私有。欲私相傳。恐佗人奪之也。故其所組織獄詞。皆如自言己之肺肝也。

圓融天皇

諱守平。冷泉同母弟。在位十五年。改元五。曰。天祿。天延。貞元。天元。永觀。傳位皇太子。後七年崩。壽三十三。荼毘。藏骨村上陵側。

秋九月。天皇卽位于大極殿。尊先帝。爲太上天皇。太政大臣實賴攝政。如忠平故事。立皇姪師貞親王。爲皇太子。左大臣師尹爲傅。冬。左大臣師尹薨。大納言伊尹轉左大將。中納言賴忠兼右大將。賴忠。實賴子。伊尹。師輔子。

天祿元年。庚午春正月。以藤原在衡爲左大臣。伊尹爲右大臣。以大納言源兼明。爲皇太子傅。夏五月。攝政實賴疾病。詔。大赦天下。救之。遂薨。贈正一位。封尾張公。謚淸愼。實賴練達朝章。人稱其盡心政治。右大臣伊尹攝政。　秋八月。以大納言源兼明爲皇太子傅。賴忠轉左大

將。大納言藤原兼家兼右大將。兼家。師輔第三子。　冬十月。左大臣在衡薨。系出左大臣魚名。在村上朝。以恪勤至大納言。常探知帝所讀書。每入朝。車中看其書。遇顧問。占對明悉。以是得寵。源高明之貶。在衡聞之。歎息。家臣賀當代其位。在衡大怒。逐之。

二年。辛未冬十一月。以右大臣伊尹爲太政大臣。大納言源兼明爲左大臣。大納言賴忠。爲右大臣。兼明高明兄。是歲。召還高明。

三年。壬申春正月。帝加元服。　冬。伊尹疾。賜度者八十人。罷攝政。太政大臣如故。遂薨。贈正一位。封三河公。謚謙德。以權中納言藤原兼通。爲內大臣。內覽宣旨。兼通。伊尹弟。兼家兄也。以兼家超已顯達。常觖望。屢廢朝參。上稍疎之。兼通意望攝關。恐兼家妨。村上中宮其妹也。其在時。兼通嘗竊請其手書。曰。攝關有闕。當兄弟相及。不宜躐等。置之懷袖。及伊尹病篤。料其不起。乘間進請。上望見欲起入。兼通捉上裾。復坐。乃奉其書。上見母后手跡。愴然乃超任之。

天延元年。癸酉秋。立女御藤原氏。爲皇后。內大臣兼通女。

二年。甲戌春。兼通爲太政大臣。關白諸政。尋賜牛車。

貞元元年。丙子夏五月。禁內火。課諸國。造宮城。六月。地大震。至九月不止。民多壓死。帝避出南

庭。周幄爲御坐。遂遷御關白兼通堀河第。

二年。丁丑夏四月。罷左大臣源兼明。以藤原賴忠。爲左大臣。大納言源雅信。爲右大臣。賴忠。兼通所善。兼明其所惡也。　冬十月。兼通有病。以賴忠。爲關白。罷兼家右大將。以中納言藤原濟時代之。初兼通已專政。又逼。請爲關白。第宅僭擬宮闕。有謗者。中以危法。時人語曰。寧投虎口。勿觸攝政口。與兼家釁隙。朝臣詣兼家者。以夜。又誣奏兼家女幸冷泉上皇。生子。因圖廢立。帝不信。兼家聞其疾劇。曰。吾將爲關白。遽入朝。兼通聞其喝道聲。以爲問己病。拂席俟。過門不入。乃大怒。奮起力疾入朝。兼家望見。避之。兼通意色殊惡。直前奏曰。臣今日行最後除目。左大臣賴忠當代臣爲關白。兼家謀反。當解見任。左轉治部卿。奏可。兼通顧公卿曰。誰欲大將。皆相目未言。濟時趨進。曰。臣可乎。乃奏。代兼家。　十一月。前關白兼通薨。敕。廢朝三日。贈正一位。封遠江公。謚忠義。　十二月。權大納言藤原朝光兼右大將。

天元二年。戊寅賴忠爲太政大臣。關白如故。源雅信爲左大臣。藤原兼家爲右大臣。先是。兼家作歌哀訴。帝慰答之。及兼通薨。賴忠奏請。因有是命。

二年。己卯夏。中宮藤原氏薨。

三年。庚辰冬。禁內又火。詔。減御膳。免諸國調庸逋負。除徭半。

四年。辛巳春。免與修宮役諸國今年租半。

五年。壬午春。京諸國多盜賊。奪調庸。放火劫人。有盜。露刃登弘徽殿。捕得之。夏六月。盜火式乾門。冬十一月。禁內又火。帝遷御堀河後院。　是歲。能登守源順卒。順。嵯峨帝四代孫。有才學而沈滯。作無尾牛歌。述懷。上聞。憐之。與此官。在任三年。卒。著有和名抄。

永觀元年。癸未夏四月。改元。大赦。以頻年多災變故也。

二年。甲申秋八月。帝讓位皇太弟。立皇子懷仁。爲新帝儲貳。初中宮崩。立女御遵子。爲中宮。關白賴忠女也。先是。兼家女詮子亦爲女御。有寵。上以賴忠故。不敢立。兼家恚。已而詮子生懷仁其第。上欲臨視。憚中宮。不果。數召詮子。兼家留不遣。又自稱病不朝。上欲慰之。令懷仁著袴禁內。詮子因入宮。三日復出。上又攜懷仁。出觀相撲節會。因強起兼家。入朝。親諭之。以傳禪意。曰。卿不知朕意耳。兼家乃悅。　九月。上帝尊號後太上天皇。以別於冷泉上皇。

花山天皇

諱師貞。冷泉長子。母贈皇太后藤原氏。攝政伊尹女。在位三年。改元一。曰。寬和。遜位。後二十二年。崩。壽四十一。葬紙屋川上法音寺北。

冬十月。天皇卽位于大極殿。時年十七。太政大臣賴忠關白庶政。左大臣雅信兼太子傅。右大臣兼家。左大將朝光。右大將濟時。竝如故。權中納言藤原義懷。左中辨藤原惟成參決機務。義懷。伊尹子。機敏諳朝章。雖以資望尙淺。未升台司。然以外舅。故親任。惟成。右少辨雅材子。方正有幹略。與義懷協心贊畫。文章博士兼彈正少弼大江匡衡爲侍讀。帝勵精圖治。紀綱稍振。盜賊屛息。先是。太宰府多私帶兵仗者。聞上卽位。皆解散。詔。求直言。曰。朕在東闈十餘年。卽位日淺。粗聞前事。欲圖後治。頃水旱頻降。民困土木。浮食日多。少執節儉。倉廩已竭。田園自荒。夫國之將興。上下聚脣。其將廢。道路以目。雖澆季之俗。疲極之民。忘身戮力。庶可扶濟。人和而天和。民足而君足。所謂大臣重祿不諫。小臣畏罪不言。下情不上通。此患之大者。宜令公卿以下。內外百官。五位以上。及秀才明經及第者。各上封事。匡朕不逮。卿等自虛中心。廣詢衆庶。莫遺微賤。凡國之利害。政之得失。盡露其膽。莫得諱隱。

寬和元年。乙酉秋七月。女御忯子卒。大納言藤原爲光女也。

二年。丙戌夏六月。右大臣兼家。使其子道兼奉帝出宮。剃髮于花山元慶寺。權中納言義懷。左中辨惟成。竝剃髮。從之。初上性輕佻。數易所幸。獨忯子不渝。有身。例出宮。就其家。上不忍離。

強召同寢。終不分娩。卒。上哀毀迷亂。道兼爲藏人左少辨。雄桀多智。兼家授之計。勸上遜位歸佛。曰。臣亦奉從。上許諾。約期。義懷・惟成知之。數諫慰。是月。庚申夜。道兼得間。使入先奉劍璽於東宮。已與僧嚴久。潛奉上出宮。上猶豫。道兼急促之。入寺。厥明。落飾。道兼將剃。佯請還家。訣父母。乃去。不復來。天文博士安部晴明察乾象。有變。急入朝。奏之。不及。義懷與惟成聞之。馳至寺。相視失聲。愧輔翼無狀。竝薙髮爲僧。持戒終身。法皇歷遊。嘗苦。至病臥海濱。殆不起。後入京。居外祖母家。稍近婦女。

賴襄曰。王家之事。至冷泉・圓融・花山之際。吾不欲復論之也。夫以帝王之貴。宰輔之重。宗廟社稷。生民之所寄。而其廢立黜陟。一依閨閤之私。寧可復論其得失哉。至兼通・兼家之事。可謂甚矣。兄弟爭權。至以天位博奕。是謂大亂之世。不待保元・平治也。其謏競無恥。狡悍不忌。千載之下。使讀者掩卷。是爲何等朝廷乎。雖然。原彼所以能然者。人君初使之然焉耳。己不愼其德。欲敗度。縱敗禮。以私滅公。使權下移。其勢終至此。可不哀哉。所賴者。祖宗之紀綱具在。有以一振之。雖潰敗之極。不患不可自立矣。史稱。花山初卽位。厲精圖治。盜賊屛息。太宰府去京師二百餘里。其私帶兵仗。不肯從法令者。聞上卽位。皆解散。其求

言之詔。蹶然起衰。救敝之急務。足以使天下革面洗心。雖或由惟成・義懷之所致。而未必不出於其衷也。苟執此心。不撓。實其言。而擴充之。雖有大姦劇賊。將斂其手。而何有於此猥瑣小黠之輩哉。奈何。其以一婦人之故。而舍天下之悅將歸己。而不顧。甘爲人所騙弄。視其始。如兩人者。何哉。仲尼贊乾曰。天行健。君子以自強不息。它日論剛曰。慾。焉得剛。故人君欲制權臣。當先自制其慾。不能制其慾。則失其剛。其自強者息。彼將反制我。

日本政記　卷之七　終

日本政記　卷之八

賴襄子成　著

一條天皇

諱懷仁。圓融長子。母三條院藤原氏。右大臣兼家女也。在位二十五年。改元六。曰。永延。永祚。正曆。長德。長保。寬弘。禪位皇太子。崩。壽三十二。茶毘。藏骨圓融帝陵側。

秋七月。天皇卽位于大極殿。時年七歲。右大臣兼家攝政。罷太政大臣賴忠關白。兼家辭右大臣。准三宮。位在三公上。大納言藤原爲光爲右大臣。爲光。兼家弟也。上先帝尊號太上天皇。弗受。立先帝弟居貞親王。爲皇太子。

永延元年。丁亥秋九月。中務卿兼明親王薨。親王以雄才博學聞。圓融朝。爲左大臣。爲攝政兼通所忌。罷爲中務卿。陽尊實奪其權。乃營龜山莊。作菟裘賦。以自遣。及帝長。好學。召兼明子伊陟。問其遺物。伊陟對曰。唯有菟裘。令獻之。乃菟裘賦也。有扶桑豈無影乎。浮雲掩而乍昏。

叢蘭豈不芳乎。秋風吹而先破句。上嘆息。自書其句。藏巾箱。帝崩後。關白道長入臥內。視而惡之。手裂之云。

二年。戊子壽攝政兼家六十。設宴其第。兼家又營二條京極第。成。大宴朝臣。東宮大進源賴光贈馬三十匹。以頒賓客。宴集之盛。前此所未有。

賴襄曰。一條帝亦有志於治者也。曰。吾得人才一事。不讓延喜・天曆。然吾觀其所謂人才如四納言。世所盛稱。雖練達朝章。大抵容媚權門者耳。大江時棟・慶滋保胤等。以文學稱。藤原佐理・行成等。以筆札著。而毫無補於國家。然猶謂才與地稱矣。源雅信以善音律能轉喉。爲新調。聞者傾聽。藤原朝光創意。爲透額冠。後人遵用。大臣・大將之所爲。如此而已。朝廷之政。爲權家所擅。使天子於邑鬱結。而袖手傍觀。無敢一言匡救之。可謂之朝廷有人矣乎。攝政兼家之落二條京極第也。大宴朝臣。源賴光贈馬三十匹。以頒賓客。世傳以爲宴集盛事。前此所無也。夫賴光時爲東宮大進。其職小也。其祿薄也。而有馬三十匹。何哉。使當時公卿有慮天下國家者。可不加之意乎。蓋公卿・大夫以恬熙爲務。媮衣目食。漁色鬪歌。而捕盜討賊之事。委之武臣世官者。曰。是賤事耳。而不省地方兵馬之富。漸歸其

手。他日平治・建久之勢。隱然已胚胎於此。而擧朝莫能察。徒以資誇談焉。果無人故也。則其所謂才者。可知已。兼家子道長。更極專擅。家出三后。身爲兩朝外祖。嘗詠歌其意曰。此世。吾之世也。嗚呼。何知二百年後。代有此世者。更有其人哉。

永祚元年。己丑春。以權大納言藤原道隆。爲內大臣。夏。罷朝光左大將。以道隆兼之。道隆。兼家子也。　秋七月。太政大臣賴忠薨。贈正一位。封駿河公。謚廉義。　八月。京師大風。宮門倒。諸國海溢。　冬。以僧餘慶。爲延曆寺坐主。衆徒服前坐主尋禪。不受敕使。破裂宣命。敕賜尋禪封百戶。不問衆徒罪。　十二月。兼家爲太政大臣。攝政如故。尋罷攝政。爲關白。

正曆元年。庚寅春。帝加元服。　夏五月。兼家有疾。奏讓關白職於長子道隆。尋爲攝政。先是。兼家京極第多怪。乃捨爲寺。曰法興院。尋削髮。稱法興院關白。相家稱院。始此。敕度一百人。大赦天下。祈病愈。奏辭職。左中辨藤原有國。右中辨平惟仲。爲兼家信任。曰。是我左右眼也。將奏辭職。問二人。吾子誰可嗣職。有國善道兼。曰。公執柄。三郎力也。惟仲曰。舍嫡則何。乃立道隆。道隆曰。吾至此。非德選。特以嫡長。然所喜。得報有國耳。卽職。卽奪有國父子官。　六月。罷攝政道隆左大將。濟時轉左大將。權大納言道兼兼右大將。　秋七月。兼家薨。道兼以有功

於父歟望。在喪。無戚容。會客游嬉。源賴光弟賴信。仕道兼。欲刺道隆。曰。使吾主代之。賴光掩其口。止之。　冬。立道隆女定子。爲中宮。時帝年十一。中宮十五。

二年。辛卯春正月。法皇崩。圓融　葬圓融天皇。　秋七月。罷攝政道隆內大臣。　九月。右大臣藤原爲光爲太政大臣。大納言源重信爲右大臣。權大納言道兼爲內大臣。　皇太后削髮。號東三條院。女院始此。

三年。壬辰夏。大水。太政大臣爲光薨。贈正一位。封相摸公。諡恒德。稱鷹司相國。其女爲花山女御。病卒。爲光哀戚。遂歸佛。創法住寺。居焉。稱法住寺大臣。

四年。癸巳夏。道隆辭攝政。爲關白。秋。以右大臣重信爲左大臣。左大臣雅信辭職。尋薨。雅信。宇多帝孫。善倭歌及蹴鞠。又善音律。轉喉。爲新調。聞者傾聽。

五年。甲午春。帝始視除目。　秋。內大臣道兼爲右大臣。權大納言伊周爲內大臣。伊周。道隆次子。才貌過人。父愛之。故超越先輩。年僅二十一

長德元年。乙未夏。關白道隆薨。道隆在職。多汲進妻黨。時論少之。性嗜飮。與藤原朝光・藤原濟時爲酒敵。臨終。曰。吾不得與二子俱。則生天堂。亦不樂。已而二人相繼薨。人以爲奇。朝光。兼

通子。濟時。師尹子。竝至大將。朝光美姿儀。嘗創意製透額冠。後人遵用。朝光初娶重明親王女。生數子。聞大納言源延光妻新寡。醜而饒貲。乃逐其室。而娶之。初村上帝善箏。授之濟時。傳其女娍子。皇太子居貞聞。慕之。遂納爲妃。濟時悅。謂。必賜輦車。詣關白兼家。言情。兼家諾之。拜舞而出。然輦車竟不下。世呼爲空拜大將。　以右大臣道兼關白庶政。權大納言藤原道長兼左大將。　五月。道兼薨。在職僅七日。世曰七日關白。　敕道長。內覽太政官文書。道長。兼家季子。豪爽負氣。嘗有相者。視之曰。是謂虎獨步深山。貴顯無比。是歲春。道隆病。奏。令其子伊周攝省中事。帝以伊周中宮兄。固親寵之。及道隆薨。道兼爲關白。伊周失望。道兼薨。伊周自謂。必得政。上意亦在焉。而東三條太后。道長姊也。欲其執政。上不聽。太后大恚。上不得已從之。是月。左大臣源重信薨。　六月。道長爲右大臣。大納言藤原顯光兼右大將。是歲。以藏人頭源俊賢。爲參議。以藤原行成。爲藏人頭。俊賢。高明子。行成。伊尹子。初藏人頭闕。關白道隆難其人。問俊賢。俊賢曰。莫踰下官者。道隆奏。擧之。至此。上問俊賢。自擧可代者。以行成對。後皆爲納言。時藤原齊信。爲光子。藤原公任。賴忠子。與俊賢・行成。竝爲納言。明習朝典。世稱四納言。

二年。丙申夏。內大臣藤原伊周有罪。貶爲太宰大貳。中納言藤原隆家貶爲出雲權守。先是。故太政大臣爲光二女。曰三君・四君。孤居鷹司第。伊周私三君。花山法皇挑四君。數往覘之。伊周意與三君通。告之其弟隆家。隆家率惡少。夜要法皇。放矢怖之。誤中其衣。中外不敢言。已而東三條太后疾。或言其由伊周呪詛。乃有此命。先是。中宮有身。出居伊周第。伊周亦徘徊不往。上憫之。乃安置伊周于播磨。隆家于但馬。已而伊周私歸西京。遣檢非違使。押送太宰府。中宮生皇女。大赦。並見召還。秋。道長轉左大臣。大納言顯光爲右大臣。是歲。大饑。米價騰貴。

三年。丁酉秋。藤原公季爲內大臣。

四年。戊戌以文章博士藤原爲時。爲越前守。越前守闕。爲時與源國盛並冀望之。左大臣道長援國盛。爲時竊上書哀訴。上讀之。悽惻至不御膳。道長乃罷國盛。與爲時。

長保元年。己亥夏。禁內火。課諸國造宮。　冬。以左大臣道長女彰子。爲女御。

二年。庚子春二月。立爲中宮。稱上東門院。故中宮定子。改曰皇后。彰子生豐艷。髮長於身。二尺許。道長殊愛之。欲其貴。及入內。裝奩玩工。究極工巧。居飛香舍。侍女數十人。皆妙選一時才

色。時彰子年十三。帝每戲曰。老翁可愧。先是。皇后有身。出就其父但馬守平生昌家。生皇子敦康。時上未有子。大喜欲見之。憚道長。不果。闕中宮歸寧。召入后及敦康。既而后又有身。生皇女。數日崩。后出寒微。恭謙有恩。中外哀惜。后侍女有淸少納言。中宮侍女有紫式部・和泉式部。並有才名。少納言。淸原元輔女。和泉式部。大江雅致女。多淫行。紫式部。越前守藤原爲時女。嫁右衞門佐藤原宣行。生一女而寡。著文自娛。中宮好文詞。召爲師。道長悅其才色。欲私之。式部拒不從。

三年。辛丑秋。罷藤原道綱右大將。以權大納言藤原實資兼右大將。實資參議齊敏子。爲祖父實賴子養。以强敏稱。　冬十一月。禁內火。帝遷居一條院。東三條太后崩。太后。兼家女。其兄弟相繼爲關白。朝政多取決焉。崩年四十。是歲。復藤原伊周官。進從一位。

四年。壬寅夏。敕造宮。制度務從儉朴。

五年。癸卯冬。宮成。還御。

寬弘元年。甲辰冬。罷太宰權帥平惟仲。以宇佐祠官訴之也。

二年。乙巳春。大藏省火。盜殺大藏大輔平孝信。　冬。禁內火。神鏡・大刀契焚。帝遷東三條第。尋

遷一條院。遣使奉御筆宣命伊勢大廟。是歲。以藤原伊周班大臣下。納言上。參預朝政。
三年。丙午春。造宮。是歲。大和守源賴親糺興福寺僧不法。僧徒二千餘人入京。訴之。左大臣道長慰諭。遣還。
五年。戊申春。以藤原伊周准大臣。賜封千戶。敍正二位。　二月。法皇崩。花山　葬花山天皇。　秋九月。中宮生皇子敦成于上東門第。帝臨幸飮宴。召道長家人。授位有差。伊周謂敦康親王必爲太子。及敦成生。不懌。有流言其呪詛道長究治黨與。停伊周朝參。既而得釋。
六年。己酉秋七月。中務卿具平親王薨。具平。村上帝子。受業於慶滋保胤。有文名。而性恬退。世與兼明並稱。曰前後中書。嘗和御製詩。有忽戴君王還自恥。風聲猶減漢東平之句。冬十月。一條院火。徙御左大臣道長枇杷第。
七年。庚戌春。准大臣伊周薨。臨終。自以不遂志。嗚咽而逝。　冬十一月。一條院成。還御。
八年。辛亥夏五月。天皇不豫。六月。讓位皇太子居貞。立皇子敦成。爲新帝儲貳。尋崩。初帝意。欲立長子敦康。而皇后既崩。伊周亦薨。弟隆家資望猶淺。帝以其無援。又憚道長。密謀於中納言藤原行成。行成亦懼道長。勸立敦成。中宮養敦康。善視之。勸其父立之。曰。我子尙幼。事未

晩也。道長不可。遂立敦成。帝崩。帝性慈仁。嘗效延喜帝。寒夜脫御衣。以體民苦。藤原齊信嘗欲有汲引。聞上語曰。凡事須反淳素。不能請而止。道長日獻珍羞。聞之。不敢復進。帝在位最久。人才輩出。嘗言。朕得人一事。庶不愧延喜・天曆。心疾道長專權。而力不能制也。　秋七月。葬一條天皇。

史稱。一條帝心惡藤原道長所爲。而不能制也。蓋以藤原氏之累葉權威。雖英明之君。有不能奈何者矣。況帝乎。而欲以制道長。難矣。曰。然則是終不可奈何乎。賴襄曰。可。帝嘗從容謂侍臣曰。凡事須反淳素。藤原齊信欲有所汲引。聞帝言。不能請而止。道長獻珍羞。聞之。不敢復進。嗚呼。是可爲之機也。人主據可爲之位。挾可爲之資。雖爲權門所鉗制。處無奈何之時。而非無可回復之機也。其機不在於彼。而在於我。譬若沈痾痼疾。其來非一日。扼其要害。而不可除。欲以攻擊克之。非共斃。不可姑舍之。扶其元氣以勝之。元氣昂。則疾勢伏。其機然也。人主試原其始思之。彼其所以能專其權。以制我者。何哉。我始借之權也。我家每娶其女也。彼以我之舅氏。以擅我政也。是藉我以爲重者也。藉我以爲重者。亦藉我以爲輕。故曰。其機在於我。苟正吾度。爲我所可爲者。則彼將畏服而不敢蔑視我。曰。是

亦如君也。君如君。則臣庶幾將如臣也。其初之所以敢不如臣者。由於君不如君也。帝一言如君。則足以讋服道長。其機如此。惜乎。不知養此機。以遂克之也。敢養此機。以遂克之。則收復朝權。不必待後三條也。夫欲養此機。必當有以輔之。如元氣之須參耆。如藤原實資。乃帝之參耆也。舍此而不用。欲用后兄之伊周以制之。是欲養癰疽以驅痰飲也。

三條天皇

諱居貞。冷泉第二子。母贈皇太后藤原氏。攝政兼家女。在位五年。改元一。曰。長和。禪位皇太子。明年崩。壽四十二。火葬藏骨於北山。

冬十月。天皇卽位于大極殿。年三十六。左大臣道長。知太政官文書。如故。太上天皇崩。冷泉

十一月。葬冷泉天皇。

長和元年。壬子春。立女御妍子。爲中宮。左大臣道長女。上東門院妹也。稱枇杷中宮。道長積備裝奩。十年許。奢華過其姊。　夏。贈故大納言藤原濟時太政大臣。立女御娍子。爲皇后。后濟時女也。上初欲立之。而憚道長。道長陽贊成之。及册拜。朝臣恐補其宮職。忤道長旨。悉往中宮。上遣使召之。無應者。甚至罵辱勅使。投以瓦礫。上大恚。獨右大將實資曰。吾豈阿權臣。而忽王事哉。乃與中納言隆家等數輩入朝。預嘉會。上因是竊倚賴實資。　是歲。侍從大江匡

衡卒。匡衡。左京大夫重光子。受業祖父維時。以文學著。然沈滯終身。子擧周。養子時棟。竝繼其業。妻稱赤染衞門。爲左大臣道長妻侍女。嘗著書。敍藤原氏盛事。曰榮華物語。

二年。癸丑冬十二月。上患目疾。使僧禱之。

三年。甲寅禁內火。三月。內藏・掃部二寮火。累代寶器多焚。夏四月。上徙御枇杷第。　五月。定造宮諸司。課諸國守。督作。以明年三月爲期。

四年。乙卯大疫。　九月。宮成。還御。進造宮諸司位。　十月。詔道長。行京官除目於直廬。儀准攝政。道長欲太子早登位。數諷上遜位。上眼疾增劇。不能視朝。乃有此命。罷內大臣公季左大將。以大納言藤原賴通代之。賴通。道長子。帝謂左右曰。吾委除目於道長。道長所爲不公。自取寃讒。朕不與焉。　十一月。禁內火。復徙枇杷第。目疾不愈。道長使醫官以寒水進金液丹。遂喪明。

五年。丙辰春正月。天皇讓位皇太子。立敦明親王。爲新帝儲貳。敦明。皇后所生也。時道長奏請。立敦良。帝不聽。遂立敦明。年二十三。長於新帝十四歲。敦明不自安。帝欲右大將實資爲東宮傅。實資以衰老不堪辭。朝臣擬東宮屬者。皆固辭。右大臣藤原顯光女爲敦明妃。乃以顯

光爲傅。

後一條天皇

諱敦成。一條第三子。母上東門院藤原氏。攝政道長女。在位二十一年。改元四。曰寛仁。治安。萬壽。長元。崩。壽二十九。火葬。藏骨淨土寺。

二月。天皇卽位于大極殿。帝生甫九歲。左大臣道長攝政。尊先帝曰太上天皇。　夏四月。課諸國。造宮。　冬十月。道長罷左大臣。

寛仁元年。丁巳春三月。顯光轉左大臣。公季轉右大臣。權大納言賴通爲內大臣。道長罷攝政。以賴通代之。位班左右大臣上。　夏四月。中納言敎通兼左大將。敎通。賴通弟也。　夏五月。太上天皇崩。葬三條天皇。　秋八月。廢皇太子敦明。立敦良親王。爲皇太弟。初太傅顯光以舅故。每事擁護太子。然朝臣憚道長。不敢起居太子。及上皇崩益甚。東宮官屬至廝役。皆不肯供職。太子不能堪。欲託疾遜位。道長又使參議藤原兼隆等怵太子。太子愈懼。召道長子能信。言其情。道長喜。謀之大納言源俊賢。俊賢使速決計。乃急奏帝及上東門院。門院曰。果然。宜立敦康。從先帝遺旨。道長曰。彼無外戚援。不可。遂矯詔。廢太子。太子母堀河太后聞之。驚往視。不及。號泣。道長病之。奏。賜號小一條院。置年官・受領吏。准上皇。封戶仍舊。又納其第

五女。爲妃。以慰之。且掩物議。故妃延子歸家。憂憤薨。妃父顯光哭之一夕。鬚髮盡白。　冬十二月。前攝政道長爲太政大臣。敍從一位。

二年。戊午春。辭太政大臣。　夏四月。宮成。還御。　冬十月。立道長第三女威子。爲中宮。中宮長於帝九歲。帝尙幼。以中宮匣奩。爲戲玩。於是。道長一家三后。帝與太弟。竝爲外孫。嘗同集上東門第。道長喜。作歌自頌。以月望無缺自喩。以語右大將實資。使和之。實資辭曰。秀歌不和。自古然也。　十二月。敦康親王薨。年二十一。親王夙有令譽。爲一條帝所愛。憚道長。不得爲太子。及小一條辭位。上東門院欲援立之。亦不果。門院厚資給之。又以其妃爲攝政賴通妻妹。得其助。家纔得不乏。

三年。己未夏。刀伊賊寇壹岐。殺守藤原理忠。遂犯筑前。太宰權帥藤原隆家遣前少監大藏種村等。逆擊。大破之。詔。進隆家爵。以種村爲壹岐守。隆家。伊周弟。以敦康親王不得儲位。憤歎。欲請外任。會帥闕。奏請。得之。有治績。是春。壹岐・對馬有警。驛奏。請勅符。勅符未至。而有此寇。隆家發兵。諸將以賊船多。請益戰艦。種村不可。奮進。捷報。朝議以其私發。不宜加賞。大納言實資引寛平中。對馬守防新羅寇。得賞例曰。有功不賞。何以厲後。大納言藤原齊信亦同其

議。乃與賞。夏五月。左大臣顯光薨。冬十二月。內大臣賴通改攝政。爲關白。

四年。庚申夏。痘行。帝亦患之。因詔。免諸國調庸逋負。疾病者遣吏撫視。

治安元年。辛酉夏六月。以右大臣藤原公季。爲太政大臣。賴通爲左大臣。職如故。實資爲右大臣。敎通爲內大臣。尋以實資。兼皇太弟傅。

二年。壬戌秋七月。先是。道長創法成寺於京極。擬興福寺。究極土木。未成而獲病。乃課諸國。督役速成。帝臨幸。落之。

萬壽元年。甲子秋。幸關白賴通賀陽院第。觀競馬。

四年。丁卯春。京師多盜。入禁中奪物。　二月。右近衞府・圖書寮火。　冬十二月。前攝政道長薨。先是。三條皇后及太子妃。前後崩薨。皆道長女。道長立朝四十餘年。始遭凶事。遂哀戚致病。帝臨視問所欲言。道長曰。臣復何望。唯法成寺成。董役者未被賞。爲憾耳。帝卽敕。加家司等位。賜寺封五百戶。遂薨。年六十二。世稱法成寺攝政。又稱御堂關白。此時禁諸國吏營宅過制。及六位以下。版築作垣。檜皮葺屋。而道長造營僭禁宮。取材木徒役於官。

長元元年。戊辰秋。前上總介平忠常作亂下總。攻殺安房守。遣檢非違使平直方等。下官符東

海・東山二道。發兵討之。是歲。太政大臣公季薨。（閑院祖）

三年。（庚午）安房守藤原光業畏忠常。棄印鑑。奔還。以平正輔代之。　秋九月。召還平直方。敕甲斐守源頼信。率坂東諸國兵。討忠常。忠常負山帶湖。爲固。頼信襲執之。撫降餘衆。

四年。（辛未）夏。携入京師。忠常途病死。斬首以獻。敍頼信從四位上。爲上野・常陸介。頼信以老不堪遠任。請改守丹波。不許。

五年。（壬申）大旱。諸大川皆涸。

六年。（癸酉）盜入禁中及東宮。

七年。（甲戌）自春正月至秋七月雨。八月。大風洪水。

九年。（丙子）夏。天皇崩。在位二十一年。年二十九。　五月。葬後一條天皇。帝毎憚勞民。及葬。役夫相語曰。二十年間使吾儕息肩。今豈不效力。

後朱雀天皇

（諱敦良。後一條同母弟。在位九年。改元三。曰長暦。長久。寛德。禪位皇太子。崩。壽三十七。火葬。藏骨於圓教寺。）

秋七月。天皇卽位于大極殿。年二十八。左大臣頼通關白諸政。如故。

長暦元年。丁丑春。立禎子内親王。爲中宮。三條帝女。母枇杷皇后。以道長孫女。入内。三月。改號皇后。立女御嫄子。爲中宮。初上在東宮。納道長女嬉子。生皇子親仁。又納禎子。生皇子尊仁。關白賴通無女可納。而嫄子其妻妹也。故養爲子。納之。　秋八月。立皇子親仁親王。爲皇太子。

三年。己卯春。以園城寺僧正明尊。爲叡山座主。僧徒以其非慈覺徒。不受。羣聚訴迫關白賴通第。打破其門。令檢非違使驅退之。執首惡。下獄。三月。僧徒放火高陽院。捕獲之。　夏。禁内火。秋七月。徙御京極院。　秋。中宮嫄子崩。　冬。納内大臣敎通女。爲女御。

長久元年。庚申夏。京師盜賊僧徒帶弓箭。殺人行火。懸賞購捕。秋。大風。八省堂倒。京極院火。徙御内大臣敎通二條第。課諸國。造宮。

二年。辛巳冬十二月。宮成。還御。

三年。壬午春。圖書寮火。　冬十二月。禁内火。避太政官廳。

四年。癸未春正月。行諸節會于官廳。已徙御一條院。　冬十一月。右大臣實資罷右大將。以權大納言藤原通房代之。通房賴通長子也。　十二月。一條院火。徙御東三條院。

寛德元年。甲申夏。大疫。 四月。右大將通房薨。 秋八月。宋商至但馬。遣使存問。使奪其財物。宋商訴。命悉還與之。筑前人清原守武坐私入宋。流佐渡。 冬十二月。上視除目。見大人於屏風上。自是不豫。

二年。乙酉春正月。大漸。讓位皇太子。以尊仁親王。爲新帝儲貳。以中宮大夫藤原能信。爲東宮大夫。時帝召關白賴通。命之。賴通以尊仁非藤原氏出。不欲立。對曰。事未晩也。賴通退。能信近御床。奏曰。陛下欲以第二宮。付何僧。上曰。朕將置之東宮。何謂付之僧也。能信曰。苟然。早決之。不可過今日。過今日。恐有他故。帝悟。卽日立爲皇太弟。能信賴通弟也。天皇崩于東三條院。 二月。葬後朱雀天皇。

後冷泉天皇

諱親仁。朱雀長子。母贈皇太后。藤原氏。攝政道長第四女。在位二十三年。改元四。曰。永承。天喜。康平。治曆。崩。壽四十四。火葬。藏骨圓教寺。

夏四月。天皇卽位于大極殿。年二十一。左大臣賴通關白庶政。如故。以權大納言藤原賴宗。兼右大將。賴宗。道長第二子也。

永承元年。丙戌春正月。右大臣藤原實資薨。實資剛直明達。不惑邪說。初攝政道長專權。擧朝

阿附。實資獨侃然正色。屢發忠憤。天子倚賴焉。上東門院入內。道長乞一時名流。作和歌屏風。中納言藤原公任爲選首。華山法皇亦有御製。實資時爲大納言。獨拒之曰。安有官列上達部。而爲女御資裝者耶。後一條帝有凶夢。或勸講最勝經。實資止之曰。陛下唯正己修政。邪不能犯也。僧明尊自稱。夢有關寺牛自稱迦葉佛。往膜拜。朝野翕然羣詣。實資獨不往。道長家臣病。有憑者。妄語。實資適往。輒懾伏曰。吾懼見此人。病乃已。

賴襄曰。藤原實資可謂大丈夫矣。當權臣擅政。擧朝攀附之時。雖天子。猶伺其喜怒。獨實資以其同族。特立不阿。至天子倚賴之。以爲安。可不謂大丈夫耶。如不肯書上東門院之屏風。激一世不振之士氣。吾讀史至此。未嘗不想見其人。以如此之世。猶有如此人也。又讀至其辭爲皇太子傅。則有異焉。敦明。權臣所不欲立。而天子立焉。倚實資以扶植之也。爲實資者。何不慨然以身許之。而以衰老不堪爲辭乎。此時。實資以大納言爲右大將。蓋歲七十矣。後五年。乃遷右大臣。兼皇太弟傅。所謂皇太弟。乃權臣所欲立也。誠使衰老不堪。何以辭於前。而不辭於後。後又二十餘年而沒。蓋九十矣。其矍鑠可知也。則前之辭者。非遁辭耶。觀實資之平素。非怵禍福。喪廉恥。唯官爵是戀。如當時公卿比也。豈度時勢之

不可爲焉爾耶。苟然。何不併辭其官。高視事外。而膴仕至死乎。抑以己受國恩特厚。不敢退就安。姑與權臣共事。以匡濟其太甚耶。或以吾論實資爲苛也。夫唯實資也。故吾苛論之。當時擧朝之士。皆婦人也。婦人不足責。有一丈夫焉。吾烏得不責以其道哉。如源顯基之事。後一條崩後。辭官隱居。卻醫藥以死。則疾世濁亂。潔身而逝耶。審能然。是之謂眞大丈夫。

二月。太政官朝所火。　秋七月。立女御章子內親王。爲中宮。　冬十月。宮成。還御。

二年。丁亥秋。敎通爲右大臣。賴宗爲內大臣。是歲。前權中納言顯基薨。顯基。大納言俊賢長子。仕後一條帝。受恩遇。及帝崩。不欲復立朝。削髮隱大原。患疽。喜曰。病至死。心不亂者。唯癰疽。卻醫藥而逝。

三年。戊子冬。禁內火。徙御京極。

四年。己丑夏六月。皇后・皇太弟所居閑院火。

五年。庚寅春。流大和守源賴親于土佐。賴房于隱岐。先是。賴親訴興福寺僧徒不法。僧徒怒。攻其館。賴親父子防戰多殺傷。僧徒來訴。故有此命。

六年。辛卯春正月。小一條院薨。　二月。立女御藤原寬子爲皇后。關白賴通女。　秋。冷泉院成。徙御。

七年。壬辰大疫。

天喜元年。癸巳秋。上患瘧。徙御賴通賀陽院第。

二年。甲午春。賀陽院火。還宮。　秋。徙御京極院。　冬。京極院火。徙御賴通四條第。

三年。乙未夏。毀冷泉院。移造一條院。

四年。丙申春。一條院成。徙御。　秋七月。彗星見東方。八月。陸奧酋長安倍賴時反。敕陸奧守兼鎭守府將軍源賴義。討之。賴時自父祖世爲酋長。至賴時。略有六郡。據衣川。擅海利。不輸貢賦。時出兵侵掠。國守不能制。朝議以賴義。賴信子得東人心。乃命此任。會有大赦。賴時大喜。厚贈賴義。賴義任滿將還。有夜斫屬將藤原光貞營者。賴時子貞任嘗求婚光貞。光貞鄙之。不許。故報其怨也。賴義欲收貞任。賴時乃閉關復反。其二壻藤原經清・平永衡在官軍。或言永衡貳。賴義收斬之。經清不自安。去歸賴時。賴時益振。賴義以討賊自任。不敢歸。

五年。丁酉春。賴義招降俘四酋安倍富忠。要擊誅賴時。貞任勢猶張。時歲荐饑。　九月。賴義奏

請。輸兵食。久之不至。乞援於出羽守源兼長。亦不敢出兵。經清造私符。徵諸郡兵食。曰。用白符。勿用赤符。赤符官符也。國民靡從。賊軍益張。

康平元年。戊戌春。中院火。延及諸殿。

二年。己亥春。一條院火。徙御賴通三條第。　夏。大雨洪水。　秋。大風。是歲。盜屢行火皇宮。

三年。庚子秋。關白賴通罷左大臣。敎通爲左大臣。賴宗爲右大臣。權大納言藤原師實爲內大臣。師實。賴通子。

四年。辛丑冬。賴通爲太政大臣。

五年。壬寅夏。罷敎通左大將。以師實兼之。　秋。賴通辭太政大臣。關白如故。　陸奧守源賴義以出羽酋清原武則等。討陸奧賊。大破之。斬賊酋安倍貞任。傳首京師。詔敍賴義正四位下。爲伊豫守。武則從五位下。爲鎭守府將軍。先是。以賴義任滿。以藤原良經爲陸奧守。以賊未平。辭不往。又以高階經重爲守。兵民服賴義。不受其節度。經重乃歸。賴義招致武則。得兵萬餘。進攻賊小松柵。拔之。貞任來戰。武則曰。賊不固守。困而出戰。是我利也。速戰破之。乘勝。衝其巢窟。終斃貞任。獲經清。斬之。賴義曰。猶能用白符耶。以餘黨未平。猶留陸奧。

七年。甲辰春。賴義以諸降虜至京師。敕放之伊豫。　冬。罷賴宗右大將。以權大納言源師房兼之。

治暦元年。乙巳春。右大臣賴宗罷。　夏。旱。先是。賴義請賞陸奧役將士有功者。朝議久不決。以故未赴任。公私督責踵至。賴義以私物進濟。又遭旱不登。因上疏請再任。　六月。藤原師實爲右大臣。源師房爲內大臣。師房。具平親王長子。知關白賴通妹醜。故娶之。賴通喜。故累遷至此。

三年。丁未冬十月。行幸賴通宇治別莊。以賴通准三后。賜年官爵。如忠仁故事。初賴通捨莊爲寺。曰平等院。敕賜封三百戶。已而罷其關白。特敕咨詢政事。

四年。戊申夏四月。以左大臣敎通關白庶政。賴通意欲讓職其子師實。啓之上東門院。院以道長夙志在敎通。遂命之。帝崩于賀陽院。　五月。葬後冷泉天皇。

賴襄曰。昔者。元魏之衰。羽林騎焚張彝第。而魏主不問。高歡觀之。謂天下之事可知矣。歸散財結士。我長暦・天喜之際。有類於此者。延暦寺僧徒抗訴。迫關白賴通第。打破其門。已而放火高陽院。夫賴通之名位。不翅張彝也。而僧徒非羽林之比。天下之事爲如何哉。後

興福寺徒。又攻大和守源頼親之館。而朝議流頼親于土佐。不亦甚於不問乎。而陸奥之酋。侵蝕六郡。不奉貢賦。源頼義以國守討征勦之。借出羽酋之力。纔能平之。朝廷遣代人。而兵民服頼義。不奉其號令。頼義以獨力經紀二國十餘年。及奏捷。爲將士請賞格。朝議久不決。其後頼義子義家。再平陸奥之亂。而朝議以爲私鬬。又不與賞典。非源氏父子以私恩撫緝之。則東國豪傑。寧能帖然哉。高歡自以其意結納之而已。我朝則驅而歸之其手。我朝紀綱之廢。甚於元魏。而源氏父子智勇。固過於高歡。異日源氏坐奪朝權者。決於此矣。朝廷公卿。方以聲色歌詠爲事。而血戈汗馬之勞。委之邊鄙之吏。又不肯償其勞。而欲偃然長託於其上。是天道所不與也。大凡治安之久。上者亢而不下。下者滯而不上。上下之間。痞痛不通。而天下覆矣。下者反制其上。上者反制於下。必然之勢也。當是之時。英偉俊傑之士。多生於下。而上者。皆猥瑣頑鈍無恥之人。是之謂氣運之變。故其勢不得不反覆也。噫。可不懼哉。

日本政記卷之八終

日本政記 卷之九

賴襄子成 著

後三條天皇

諱尊仁。後朱雀第二子。母陽明門院禎子。在位五年。改元一。曰延久。禪位皇太子。明年崩。壽四十。葬神樂岡。

秋七月。天皇即位於太政官廳。年三十五。關白左大臣敎通。右大臣兼左大將師實。內大臣兼右大將師房。竝如故。帝生七年。入宮謁後朱雀。進退有度。觀者異焉。後朱雀殊愛之。立爲後冷泉儲貳。尙方有壺切劍。例傳東宮。賴通不肯曰。雖爲太子。自非藤原氏出。不可得也。帝聞之曰。吾何用此一劍爲。中外爲帝孤立無援。危之。會有罪人匿宮側。吏來闌宮。宮人驚擾。帝徐起更衣。復座自若。既而事定。人疑儲位有變。有相者曰。太弟龍質。誰得動搖。僧成尊嘗問。殿下拜北斗乎。曰。每月一拜。非敢祈踐祚也。而有時或念。即位則欲云云。自省。此念萌於不忠。因每拜悔過。成尊感泣。先是。藤原氏競以驕侈相高。賴通造高陽院。壯甚。敎通與二條

第。更美。頼通不憚言之於師實。師實曰。我族所爲。誰敢容議。自帝即位。皆畏懼自戢。頼通屛居宇治。不與政事。教通雖爲關白。備位而已。　八月。造大極殿。

延久元年。己酉春二月。勅。寛德二年以後新置莊園一切罷。雖在以前。契券不明。及有蠶蝕者。停止。　三月。車駕幸石清水大廟。時俗日趨華侈。帝欲革其弊。乘輿鹵簿。務從省約。所過。都人士女觀者。車有金飾者。爲駐輦。剔去其飾。雖貴族不假。　夏四月。立皇子貞仁親王。爲皇太子。　秋七月。立馨子内親王。爲中宮。　停諸國御廚贄。後院御贄。　八月。關白教通罷左大臣。師實爲左大臣。師房。爲右大臣。大納言藤原信長爲内大臣。信長。教通子。帝最重師房。敍從一位。聽輦車入宮門。　冬閏十月。始置記錄所於太政官朝所。聽斷民間訟訴。

二年。庚戌春二月。定絹布制。　禁中火。主殿寮撲滅之。　停近江今年日次御贄。廢筑摩御廚。令高砂御廚進菜蔬。停魚蟹。　三月。以教通。爲太政大臣。　夏四月。遣使備前。撿察銅・金・綠青。

三年。辛亥秋八月。教通辭太政大臣。新宮成。徙御。

四年。壬子夏四月。大極殿成。　秋八月。定沽價法。　九月。定斗升法。帝欲審量制。令藏人頭藤原資仲督作之。上自抽簾竹。截爲之準。及成。使小舍人量殿庭沙試之。然後資仲取穀倉院

米。量之。後世遵用。謂之宣旨升。　冬十二月。天皇不豫。禪位皇太子。帝奪藤原氏之權。關白敎通營作興福寺南圓堂。令大和守督役。守任滿。敎通請其再任。不許。固請。帝奮髯曰。攝關之可憚。以其爲國戚。如朕則何有。敎通大恚。拂衣起曰。藤原氏爲卿相者。皆罷。春日神威。今日墜地。諸藤皆起。朝廷爲之一空。帝不得已。召還敎通。許之。帝欲禪位居院決政。而未幾崩。前關白賴通聞而歎曰。帝季世明主。而早世如此。我邦不幸也。大江匡房稱帝治。可比隆於承和・延喜也。當帝時。大江匡房源經信・藤原資仲・源隆俊・源隆綱。並任參議。匡房以嘗侍東宮。最眷遇。經信。民部卿道方子。以強敏稱。資仲。右大臣實資孫。稱有祖風。隆俊・隆綱。並權大納言俊賢孫。隆國子。帝爲太子。嘗恚隆國無禮。欲報之於其子。嘗窺隆俊入直。正笏端坐。處事敏給。曰。如此人才。亦不易得。有射狐於齋宮者。朝議定其罪。或曰。狐未死。隆綱抽筆書獻曰。雖有飲羽之號。未見首丘之實。帝愛其文藻。乃登用二人。隆國季子俊明爲左少將。會禁內火。帝避之。路人喧塡。俊明執弓毆逐。乘輿得前。帝悅。因亦受恩。其愛才如此。

賴襄曰。世傳。御府藏應神帝玉冠。歷世天子。每大嘗冠焉。未嘗適也。獨後三條帝穿之適焉。其魁偉可知也。烏知非宗廟之靈。特生降之。以匡復國家之衰運也哉。而帝十歲爲皇

太弟。三十五卽位。在位五年而崩。藤原賴通歎以爲我邦之不幸。信矣。大江匡房比之承和・延喜。則非篤論也。史稱。帝剛健嚴明。是固然。然不知其剛明之本在於誠正也。夫苟不誠不正乎。則所謂剛者有息。而明者有蔽焉。帝之在儲宮也。或念卽位欲云云。輒拜北斗。以悔其過。夫以帝之明達。傍觀朝政二十餘年。其切齒扼腕者。何限。而自警其不是。嗚呼。是其心足以質天地。而信宗廟。蓋不以天位爲樂。而以億兆爲憂。是故一旦卽位。痛自節儉。勤勞機務。不敢逸豫。而行之以其剛與明。以令天下。雖藤原氏之盤踞倔强。歷世難制者。畏憚自戢。俯就我馭者。由是道故也。唯然。是以其所使唯其才。不以愛憎爲取捨。不敢私便於己。利於天下而已。帝察於民事。非歷世帝王所及。如其親定斗量制。亦其一端也。吾嘗試因是論帝之政。皆出於天下之正。而己不與焉。猶斗量之不容私也。夫奪大臣之權。收新置莊園。置記錄所。親覈其是非。皆不便於彼者。而彼莫敢齟齬。何哉。是天下之正也。非帝之私也。唐裴度語其君治方鎭之道曰。處置得當。以服其心而已。今帝所處置。亦足服藤原氏之心。不然。聞其崩殂。何不相慶幸。而歎嗟如此。蓋藤原氏之幸。乃我邦之不幸。其實我邦之不幸。卽藤原氏之不幸也。彼與宗社同休戚者。而自其父祖不肯恤國家。

而營己之私。至此乃知其非爾。雖然。藤原氏之營私也。亦由歷世帝王之自徇其私。唯帝也無私。故足以禁其私也。如白河。非不剛健。唯以其剛健。以濟其私。故聽政愈久。而紀綱愈亂。遂釀成保元之禍。白河之久。與後三條反。亦我邦之不幸也。降及元弘。有後醍醐帝出。其剛與明。可以遠纘延久之遺緒。而復急於其私樂。不能反天下之正。以撥天下之亂。是亦我邦之不幸也。噫。何不以後三條之心爲心歟。

白河天皇

諱貞明。後三條長子。母贈皇太后藤原氏。贈太政大臣能信養女。實權中納言公成女。在位十五年。改元四。曰。承保。承曆。永保。應德。禪位皇太子。後四十三年崩。壽七十七。火葬衣笠山東麓。

冬十二月。天皇即位於大極殿。尊先帝。曰太上天皇。藤原敎通關白。如故。立皇弟實仁親王。爲皇太弟。

五年。癸丑夏五月。太上天皇崩。　葬後三條天皇。

承保元年。甲寅春二月。前關白賴通薨。　夏六月。立女御藤原賢子。爲中宮。左大臣師實女。實源氏也。初賴通每戒師實。勿闕朝參。後三條使藏人覘外朝某某在否。師實未嘗不在。帝召

與語。問其有女否。對曰。有。卽命嬪事東宮。師實實無女。以所子養妻姪對焉。賢子是也。卽夜詣宇治。謝賴通曰。非遵庭訓。安得此榮。　冬十月。上東門院崩。年八十七。

二年。乙卯秋九月。關白敎通薨。　冬十月。以左大臣師實爲關白。初賴通讓職敎通。約他日傳之師實。及敎通疾病。請傳之其子信長。上許之。以中宮哀訴。乃與師實。

承曆元年。丁巳春二月。右大臣兼左大將源師房薨。　夏四月。以參議藤原師通兼左大將。師通。師實長子。　冬十二月。先是。創法勝寺於白河。至是成。建九層浮圖。給封一千五百戶。

二年。戊午冬十月。帝臨法勝寺。修大乘會。

四年。庚申春。賀陽・高倉・三條三宮。竝火。　秋八月。以內大臣信長。超拜太政大臣。

永保元年。辛酉冬十月。幸石淸水。敕下野守源義家。扈從。義家。賴義長子也。先是。園城寺與延曆寺僧徒。數相攻鬪。遣敕使禁之。不可制。故倚義家威命。警護道途。

二年。壬戌秋七月。大內火。　冬十一月。前鎭守府將軍伊豫守源賴義卒。　十二月。以大納言源俊房。爲右大臣。師房子也。　是歲。旱饑。停營造宮室。

三年。癸亥春正月。以右大臣俊房。爲左大臣。權大納言顯房爲右大臣。權大納言藤原師通爲

內大臣顯房。俊房弟。爲中宮父。

應德元年。甲子夏。造圓城寺金堂。　秋九月。中宮藤原氏薨。

二年。乙丑冬十一月。皇太弟薨。

三年。丙寅秋。興離宮於鳥羽。課畿內七道徭役。究極鉅麗。　冬十一月。立皇子善仁親王。爲皇太子。即日讓位。上尊號太上天皇。帝弘大剛斷。政自己出。相門斂手。頗有後三條風烈。然愛憎任意。興作不止。國用耗竭。納財者任國司。至有父子三四人竝任者。既遜位。猶在院中。聽政。刑賞皆出其意。

賴襄曰。齊衡而後而得宇多。正曆而後而得後三條。如陰霾之中。乍覩天日之漏射。魑魅罔兩。畏避竄匿。已而得醍醐焉。如晴日而帶薄翳。得白河。則驕陽炎赫。如焮如焚。而黎民靡孑遺也。夫相家之專擅。濁亂朝廷極矣。然其政令。猶依倣先古之格。恤民之典。求言之詔。雖或屬文具。而猶存其名。知其爲懿美也。至於白河。併其名不擧也。而興造之費。空竭府藏。其所以爲功德。三千佛像。四十萬塔婆。皆塗民之膏血耳。往時相家之侈靡。凋弊公私。毒被天下。然民猶曰是某相所爲也。非天子所知也。至白河收復其權。政由己出。則被

天下者。皆其毒也。怨之所歸。不在彼而在此。故白河之收權。適所以收天下之怨也。是猶人抱積痾者。當其有疾。蹙額抱心。以涉日。雖欲恣飲啖。不可得。幸而得疾稍退。乃暴食縱酒。宿疾乘之。變成別症。吐瀉狼藉。而不可救。保元之亂。是已。當相家專權。曰賄賂公行而已。至帝之聽政。納財者得國司。至父子三四人。共宰一國。則其民何罪乎。不翅此也。宇多欲禪位而已看護之。後三條之志亦如此。皆爲天下慮爾。白河則欲縱己之欲。背父遺詔。舍其二弟。而立堀河。堀河崩。又立五歲之鳥羽。猶可也。鳥羽纔弱冠而又奪之。以與五歲之崇德。故鳥羽又尤而傚之。奪以與三歲之近衞。以速天下之亂。遂致其後有八歲之天子。與五歲之上皇。亂曷有已哉。相家立幼弱之外孫。資其專權云爾。天子而何苦爲此乎。當相家權盛。聽其所廢立。而不得自恣。自恣而後。天下益不服。大亂塗地。夫宗廟之所託。生民之所仰。而以襁褓嬰兒爲之。是之謂以天位爲戲。是戲也。則天下誰肯敬戴之。故至使天下武夫健將。視天子如木偶・土梗。視朝政如塵飯・土羹者。皆其自取也。

堀河天皇

諱善仁。白河第二子。母中宮藤原氏。關白師實養女。實右大臣源顯房女。在位二十一年。改元七。曰。寬治。嘉保。永長。承德。康和。長治。嘉承。崩。壽

二十九。火葬香隆寺。

十二月。天皇卽位於大極殿。生八歲。關白師實攝政。太上天皇聽決萬機。

寬治元年。丁卯春二月。上皇幸鳥羽宮。儀衞如在位時。　夏五月。又幸宇治。留三日。　冬十二月。出羽夷酋清原武衡・家衡等作亂。陸奧守源義家討平之。初清原武則以功拜鎭守府將軍。生武貞・武衡。武貞爲嗣。武貞生眞衡。眞衡有異母弟家衡。異父弟清衡。以事相隙。構兵。及義家爲守。攻家衡。不克。叔父武衡又援之。據金澤柵。義家築長圍。持久困之。終拔之。斬武衡・家衡。義家從父賴義。征安倍賴時・貞任。九年平之。曰前九年之役。至此三年平之。曰後三年之役。義家奏捷。因請下官符。還獻二酋首。又賞將士有功者。朝議以爲私鬭。不許下符。卽棄首於途而還。

二年。戊辰春。上皇幸高野山。敕。置阿闍黎。賜僧粟帛。後又幸金峰山。亦如之。冬。幸延曆寺。留三日。自是數幸焉。　罷太政大臣信長。以攝政師實代任。

三年。己巳春正月。天皇加元服。　夏。師實罷太政大臣。

四年。庚午春。上皇幸熊野。敕。奉近田百餘町。　冬。師實罷攝政。爲關白。

五年。辛未夏。左馬允源義家。與弟義綱有隙。將鬪。敕禁二家兵士入京師。

七年。癸酉春。立女御篤子內親王。爲中宮。長於帝十九歲。　夏。上皇慶法勝寺佛像。放左右獄四六十人。　秋。流近江守高階爲家於土佐。緣坐者解任。贖銅有差。因興福寺僧徒訴其侵蒲生郡神人也。　冬。罷右大臣顯房右大將。以其子權大納言雅實。兼右大將。

嘉保元年。甲戌春。罷關白師實。以內大臣師通代任。罷左大臣俊房左大將。以權中納言忠實。兼左大將。忠實師通子。　秋。前太政大臣藤原信長。右大臣源顯房竝薨。

二年。乙亥夏六月。上皇徙御閑院。始置院別當。撰納言・參議。爲之。設兵曹。置北面士。宿直院中。奉宣旨施行。曰院宣。上皇所愛皇女准中宮。號郁芳門院。明年。崩。上皇哀戚。遂削髮稱法皇。然聽政如故。

承德二年。戊寅秋。法皇毀閑院。移營於鳥羽。

康和元年。己卯夏。關白師通薨。師通從大江匡房受學。務進材能。黜勢利。嘉保至康和。朝綱稍正。至是。患頭瘍薨。年三十八。師通不憚上皇親政。曰。豈有遜位之君而聚車於門者耶。上皇聞之。頗自斂。及其薨。無復憚意。　是歲。策仁和寺覺行。爲法親王。覺行。白河之子薙髮者。法

親王始此。凡白河皇子爲法親王者三人。爲僧者三人。堀河・鳥羽以後。世世有之。不可枚擧。

二年。庚辰夏。先是。大內火。上御堀河・賀陽兩院。至是。宮成。遷御。　秋。以權大納言忠實爲右大臣。權大納言雅實爲內大臣。

三年。辛巳春。前太政大臣師實薨。　冬。前對馬守源義親。刼掠鎭西。敕討捕之。流隱岐。義親。義家子。

四年。壬午冬十一月。罷忠實左大將。

五年。癸未秋。立皇子宗仁親王。爲皇太子。　冬。以內大臣雅實。兼左大將。權大納言藤原家忠兼右大將。家忠。師通弟也。家忠素希望大將。而法皇欲以其所寵藤原宗通任之。家忠患之。謀於忠實。忠實敎以密託中宮。爲內援。從之。法皇言旨於帝。帝曰。資望不及家忠。又非有逸才可超擢也。法皇不能奪。

長治二年。乙酉冬。以右大臣忠實。爲關白。

嘉承元年。丙戌是歲。旱疫。

二年。丁亥秋七月。天皇崩。帝留心政治。諸曹所奏。夜輒覆視。可疑者。御批使重議。嘗聞一宮女

談。有所衆某。貧將逃亡。閔之。敕一僧修法。未刻期。預賜兵衞尉一人。以賞其勞。得尉者。例出錢五萬匹。僧任其人。辨功錢。而請期。帝曰。所衆某貧。宜以汝意私給錢於彼。不必煩修法也。其用意惠下。如此。時源俊房・藤原通俊・大江匡房・藤原季仲等列朝。帝敬重之。每事咨詢。以爲得人不愧古也。然白河法皇決政院中。帝不能有所爲。　葬堀河天皇。

鳥羽天皇

諱宗仁。堀河長子。母贈皇太后藤原氏。權大納言實季女。在位十七年。改元五。曰。天仁。天永。永久。元永。保安。禪位皇太子。後三十三年崩。壽五十四。葬安樂壽院塔。

冬十二月。天皇即位於大極殿。生五歲。關白忠實攝政。白河法皇聽決萬機。先是。東宮大夫藤原公實。以帝舅希望攝政。屢言於法皇。法皇未決。至即位日。御內殿。不通人。院別當源俊明入。門者拒之。俊明曰。面稟急切事。排闥而入。奏曰。日已旰。未舉禮何。法皇曰。攝政果可誰屬。關白可否。俊明爲繆聽。高聲答曰。唯。即趨出。直詣忠實第。傳宣攝政。急行即位禮。

天仁元年。戊子春。隱岐流人源義親作亂出雲。敕因幡守平正盛討誅之。　秋。前鎮守府將軍陸奧守源義家卒。

二年。己丑春。敕左衛門尉源爲義。討美濃守源義綱于近江。捕流佐渡。先是。源義家子義忠所殺。莫知誰所使。朝廷意源義明捕誅之。義綱。義明父也。走據甲賀山。爲義。義親子。爲祖父義家子養。

天永元年。庚寅冬。權中納言大江匡房薨。匡房爲三朝帝師。有器識。

三年。壬辰冬。忠實爲太政大臣。攝政仍舊。

永久元年。癸巳夏。延暦寺僧徒數千詣闕。訴興福寺不法。興福寺僧徒又攻延暦寺。敕源平二家。拒卻之。　是歲夏。攝政忠實罷太政大臣。　冬。改攝政。爲關白。

三年。乙未夏。以內大臣雅實。爲右大臣。大納言忠通爲內大臣。忠通。忠實長子。

元永元年。戊戌春正月。立女御藤原璋子。爲中宮。璋子。故大納言公實女。嘗爲法皇子養。許嫁關白忠實子忠通。法皇使忠實女納宮。辭。乃變約納璋子。璋子幼爲法皇所鍾愛。及長私焉。至入宮。猶不改。帝知御之。

二年。己亥冬。輔仁親王薨。輔仁。後三條第三子。白河異母弟。有才學。後三條愛之。遺詔。立第二皇子實仁。爲白河儲貳。以次及輔仁。及實仁早世。白河背之。立堀河。及堀河疾。今上未生。中

外屬望輔仁。終不得立。輔仁退。居北山花園。琴歌自娛。法皇優給食邑。慰之。一時名士多往遊。世稱三宮百大夫。

保安元年。庚子冬。罷關白忠實內覽文書。

二年。辛丑春。以內大臣忠通。爲關白。初忠實忤法皇旨。不納女於宮。謂上輕躁不可保位。既而上稍悛。忠實悔之。會法皇幸熊野。帝敕忠實。納女。忠實喜。裝奩已備。法皇還。怒罷之。忠實懼。退居宇治。禱神復職。法皇欲以其子忠通代父。辭曰。臣家世此職。有父子授受禮。今不得行之。且父廢子登。臣所不忍。法皇爲動容。敕復忠實職。猶不敢出。乃遂罷之。　冬十一月。左大臣源俊房薨。

三年。壬寅冬。以右大臣源雅實。爲太政大臣。特敕坐關白上。非藤原氏上此官。始此。雅實質直敢言。爲法皇所敬憚。每省父顯房。顯房亦改容。

四年。癸卯春正月。法皇立顯仁親王。爲皇太子。使天皇禪位。帝年二十一。太子甫五歲。中宮璋子所生。

崇德天皇

諱顯仁。鳥羽長子。母中宮藤原氏。大納言公實女。在位十九年。改元六。曰。天治。大治。天承。長承。保延。永治。禪位皇太弟。後二十三年。崩于讚岐。壽四十六。葬白峯。

二月。天皇卽位於大極殿。關白忠通攝政。法皇聽政院中。上先帝尊號太上天皇。

天治元年。甲辰秋七月。罷太政大臣雅實。

大治三年。戊申冬。以攝政忠通爲太政大臣。

四年。己酉春。山陽南海賊起。敕備前守平忠盛追捕。

五年。庚戌二月。立女御藤原聖子爲皇后。關白忠通女。　秋七月。法皇崩。太上天皇聽政院中。法皇在院決政。四十餘年。擁立三帝。天子仰成。篤信佛。造丈六像一百餘。等身像三千餘。小佛不知數。多建寺塔。數禁諸國殺生。燒漁網。雖釋奠用素饌。　葬白河天皇。

長承元年。壬子春正月。前關白忠實請一入朝坐攝政忠通上。聽之。　三月。得長壽院成。左衞門大尉平忠盛除但馬守。尋擢刑部卿。聽大內昇殿。上皇漁色。數微行。忠盛每隨。及建寺。命董役。故賞之。諸卿賤其門地。恥與爲伍。謀乘闇刺殺之。上皇益寵之。　冬。家忠轉左大臣。有

仁轉右大臣。大納言藤原宗忠爲內大臣。
二年癸丑上皇納忠實女泰子。
保延元年。乙卯春。以頻年饑疫。多災異。盜賊起。敕諸儒言政事得失。式部大輔藤原敦光疏陳七弊。曰。踈祭祀。不信佛。奪農時。重賦斂。縱奢僭。廢學校。虛府庫。　是歲二月。罷左大臣家忠左大將。以右大臣有仁代之。權大納言藤原賴長兼右大將。賴長。忠實子。忠通弟也。
二年。丙辰冬。以權大納言藤原賴長爲內大臣。是歲五月。左大臣家忠薨。
三年。丁巳左兵衞尉佐藤憲淸辭官而去。憲淸博通兵書。精射。好和歌。爲上皇宮北面士。有寵。而有遁世之志。一日決志陳情。辭官還家。有稚女。迎牽父衣。憲淸蹴之墜牀。直出削髮。改名西行。年二十三。遂周遊海內。詠歌自娛。其妻亦爲尼。時伊賀守藤原爲業。與弟賴業・爲經。皆爲僧。隱大原山。與西行相唱和。爲業著大鏡。紀文德以後十四朝事。
賴襄曰。所貴於士者。以其知時也。時有勢焉。有機焉。勢所推移。機所起伏。非必難知也。而莫之知者。有所蔽耳。唯有識之士。能先見之。去危就安。去濁就潔。舉世不知。而己獨知之。知之明。故決之果。彼之所驚。我以爲當然。如藤原憲淸。不其然乎。當是之時。天下之勢。何

如哉。君臣殉私。廉恥喪亡。國家紀綱。所以維持天下者。無一存者。而天下之武健桀驁者。隱然成黨於下。竊咲朝廷。以爲不足畏。朝廷方計較閨閤之寵。易置童蒙之君。宰執之臣。骨肉爭權。不省宮城之外有何事。大亂之機將發矣。而上下晏然處之。何哉。譬若失火之家。舉家宴集讙嘩。及隣閭來救。始知之。彼汨沒於爭競之間。中熱外謀。顛倒是非。是以其機露於前。而不能見。憲清資不過北面。官不過左兵衞尉。處一世奔波之後。有以窺其端倪。以爲事勢如此。官不可爲。故雖頗受寵使。而決然去之。其曰歸佛辭世者。特託焉而遁。或觸焉而發耳。世蓋駭愕。以爲不近人情。不知自憲清視之。舉朝之士。皆喪心者也。憲清棄官之歲。而藤原賴長爲內大臣。後二十年。而保元之禍作。自是。喪亂蔑資。海宇反覆。而憲清嵩居川觀。超然事外。嗚呼。可謂士也已。史稱。憲清博通兵書。精射。善歌。蓋備文武才略者。使少營求攀援而進。如藤原信西。或所不難。而不屑也。乘世之亂。依附姦雄。樹立功名。如大江廣元。又所優爲。而又恥之。觀其異日見源賴朝。贈之寶玩。而出門拋與兒童。可以見其志矣。世稱其無欲而已。吾則欽其有恥有識也。古曰。利使智昏。憲清唯有恥也。是以能識一世之所不能見也。如藤原敦光。稱文學之士。應敕陳得失。言及敬神佛興學校。

蓋三善清行之所以言於延喜而敦光拾之。是爲何等時。而爲此迂拘之說。而不恥耶。如藤原爲業兄弟。辭官隱居。著史自遣。蓋亦知時之非也。紬繹前事。託空文以自見。此則憲清之徒也。

五年。己未秋八月。立皇弟體仁親王。爲皇太子。以內大臣藤原賴長。爲傅。

永治元年。辛酉春三月。上皇薙髮稱法皇。　冬十二月。法皇使天皇禪位皇太弟體仁。初法皇多內寵。最後納中納言藤原長實女得子。寵專房。稱美福門院。生體仁。生四月。立爲儲貳。得子欲其速得位。至是。法皇諭帝禪位。即日促書詔。詔案改皇太子。曰皇太弟。帝欲須明日審議。法皇不聽。時百官已備儀。待詔出。而中使往復數次。終不聽。及暮。傳劍璽。帝年二十三。太弟生三歲。

近衞天皇

諱體仁。鳥羽第八子。母美福門院藤原氏。中納言長實女。在位十五年。改元五。曰。康治。天養。久安。仁平。久壽。崩。壽十七。火葬船岡山西野。

十二月。天皇即位於大極殿。關白忠通攝政。法皇聽政院中。上先帝尊號太上天皇。於是。世稱法皇。曰本院。上皇曰新院。

久安三年。丁卯春。左大臣源有仁罷。尋薨。始鳥羽上皇好修容儀。有仁亦喜修飾。朝服有稜。烏帽有額。始於此。

五年。己巳冬。忠通爲太政太臣。攝政如故。尋罷太政太臣。改攝政爲關白。

六年。庚午春正月。天皇加元服。　三月。立左大臣頼長女多子。爲皇后。　夏六月。立攝政忠通女呈子。爲中宮。　以頼長內覽文書。初頼長欲后多子。不許。忠實親請之法皇。而得之。及立呈子。頼長不懌。忠實欲使忠通讓攝政於頼長。而他日及忠通之子。又請之法皇。忠通奏頼長凶險。不可。忠實怒。乃曰。攝政朝廷所授。氏長者吾所與。乃令左衞門尉源爲義。遣兵入忠通第。奪藤原氏傳家重器朱器臺盤。以授頼長。又奪其邑。獻之法皇。因請。使頼長領內覽。於是。頼長得專政。忠通備位而已。帝稍長。親信忠通。惡頼長。然壓於法皇。不得如意。居常鬱鬱。積成疾。

仁平三年。癸酉秋。帝有目疾。欲禪位於雅仁親王子守仁。關白忠通承旨。奏請再三。法皇意忠通利其幼弱。不許。忠實聞之曰。愚哉。立其子。其父必專權。他人豈得預乎。

久壽二年。乙亥秋七月。天皇崩。帝無子。上皇冀復位。不然。立重仁。重仁。其長子也。長而賢。中外

亦屬意焉。而美福門院意上皇呪詛帝。法皇近臣受賴長凌辱。啣之。因又譖其與知呪詛事。法皇因欲立帝同母妹暲子。爲女主。又上皇同母弟有雅仁。雅仁子又有守仁。法皇未決誰可立。因密召忠通詢之。忠通曰。捨男立女。舍子立孫。皆非是。宜立雅仁。法皇從之。雅仁稱四宮。性輕躁。無人望。制下。朝野愕然。　八月。葬近衞天皇。

後白河天皇

諱雅仁。崇德同母弟。在位四年。改元一。曰保元。禪位皇太子。後三十四年崩。壽六十七。葬蓮華王院法華堂。

冬十月。天皇卽位於大極殿。以皇子守仁。爲親王。卽日。立爲皇太子。

保元元年。丙子秋七月二日。法皇崩。鳥羽卽夜葬之。上皇入臨。及門。右衞門權佐藤原惟方稱遺詔。拒不納。上皇大恚還。先是。左大臣賴長失寵法皇。諛事上皇。上皇嘗夜密語之曰。法皇舍宜立之重仁。而立非文非武之四宮。今法皇已昇遐。何憚之有。吾欲擧大事。廢豎子。而再踐位。如何。賴長欲立上皇而己專權。乃力贊之。內大臣實能知之。入諫曰。天位。宗廟所幽贊。非人力。陛下宜以天命自安。今信諛言。輕擧震驚殯宮。恐鬼神不右。上皇不聽。乃令賴長誘召將士。先是。實能密啓法皇曰。宮車晏駕。大亂必興。宜豫備之。法皇乃署源義朝・賴政等十餘

人名。屬美福。綏急召之。時上皇謀頗漏。朝野洶洶。帝召將士自衞。遣檢非違使近畿諸路。捕兵士入京者。時上皇居鳥羽宮。法皇崩七日。修法會田中殿。上皇不臨出宮。入據白河北殿。召頼長。間道入。召源爲義。辭。强之。乃率諸子至。陳策。奉上皇南狩。兵即不利。遂奔關東。第八子爲朝請。即夜。直襲大內。火攻取帝。奉上皇代居。事可立定。頼長皆不聽。曰。吾已約南都衆徒。明旦必來。然後戰。十一日。帝御東三條殿。關白忠通以下皆從。遣源義朝・平淸盛等。攻白河殿。義朝請火攻之。上皇大敗出走。不能跨馬。藏人平信實。累騎將東奔。扶掖至如意山。徒步傷足委頓。揮諸將散之。及夜。從者肩負出京師。無敢舍者。投僧房。得粥進。翌日。薙髮入仁和寺。不納。事聞。帝遣兵守之。遂火上皇宮。及頼長以下黨與十二第。前關白忠實聞敗。出奔南都。頼長走。中流矢。扶上輿。欲就忠實。忠實拒之曰。安有氏長者而死鋒鏑者。吾不欲見此薄命兒。乃齚舌死。少納言藤原通憲獻策。榜亂黨姓名朝堂。各署流貶處所。於是多出降者。乃悉論死。右大臣藤原雅實。大納言藤原伊通等曰。自弘仁誅仲成。未嘗加刑朝臣。況在諒闇乎。通憲曰。非常之事。宜非常議之。不可遺後患。令重仁削髮。流頼長諸子。及其黨卿以上。忠實以忠通奏請得釋。爲義匿於義朝所。淸盛叔父右馬助平忠政。亂黨也。淸盛素與有隙。

乃殺之。以搖義朝。帝果命義朝。誅爲義。義朝請以己功贖之。弗聽。乃謀於其臣鎌田政家。政家曰。齊死。寧死於子手。乃使政家誘殺。流爲朝伊豆。遂流上皇於讃岐。過鳥羽。欲拜辭山陵。不許。

賴襄曰。保元之亂。其發晚矣。當發於圓融・花山之間矣。而未發也。當發於三條・後一條之際矣。而未發也。何以言之。夫保元之事。雖出帝王之爭位。抑亦出於相臣之爭權。相臣爭權。自昔而然。兼通・兼家以兄弟爭之。道兼・道隆亦然。伊周・道長則以叔姪爭之。而其於帝王。各有所黨。欲援而擁之。以逞己志。但彼未及用干戈。而勝負已定。故曰未發也。雖然。兼通・兼家相驅逐於朝廷。其與用刃相距無幾。源賴信事道兼。欲爲刺殺道隆。因兄賴光言而止。使其不止。則今日之爲義・義朝也。伊周弟隆家。桀悍有氣。至射中上皇衣。使其助兄攻道長。立其所欲立。亦所不憚爲。但無親信兵士如源平者。故不能爲耳。故曰。保元之禍。其發晚矣。夫崇德雖希復位。非賴長從臾黨援之。烏能以深宮弱質。驟決意動兵乎。而鳥羽之立後白河。實由於忠通。世以忠通爲溫厚長者。非賴長凶險之比。吾以爲。忠通特其言語可聽耳。其姦則勝賴長也。夫四宮爲崇德之同母弟。而美福門院勸上皇立之者。何

哉。四宮之子守仁。早喪其母。養於美福。美福無他子可立。而愛其所鞠育。故欲立四宮而及於此也。近衛帝之患目。欲傳位於守仁。忠通數爲請之法皇。至再三不已。是先保元三年矣。夫帝之患目。微疾也。未必欲俄去位。而忠通忽欲易其位。已可疑矣。及近衛崩。議繼嗣。美福欲直立四宮。則忠通亦贊成之。蓋四宮疎遠無寵者。然以守仁故。出入美福之宮。爲其所庇眷。忠通亦結媚於美福。其相結託、以傾頼長。頼長所以失寵於法皇。而走黨崇德者。以此。昔者。弘仁之變。無藤原仲成。則平城無擧事也。承和之恆貞。安和之爲平。拔之者與擠之者。皆出於下。勢每然也。故保元之禍。雖由白河鳥羽。以私愛廢立天子。然發之者。忠通・頼長也。二人之相軋。本由其父忠實。忠實之憎忠通。以其代己執權。父子且然。況兄弟乎。況叔姪乎。當時君相皆然也。君已徇私。相亦營私。私之極。敗倫理。亡廉恥而不顧。壞其紀綱。非一世也。故曰。其發晚矣。而發於此爾。夫欲濟其私。不得不用兵。而天下之兵。皆在武臣之手。不得不借其力。奪一朱器臺盤。亦借源爲義兵。況爭國乎。故彼此竝借人兵。以決勝負。如借人錢以爲博奕。勝非我勝也。他人勝也。天下之遂歸於武人。奚足怪哉。

是歲。敕畿內七道。造營大內。

二年。丁丑夏。左大臣藤原實能罷。　秋八月。以藤原基實爲右大臣。忠通子。年甫十五。　冬十月。大內成。初關白忠通請修宮室。鳥羽上皇憚勞費。不果。至是。藤原通憲決議成之。詔。復記錄所於太政官朝所。復內宴及相撲節會。　進造宮諸國司七十二人位。

三年。戊寅秋八月。天皇禪位於皇太子。是月。忠通辭關白。

二條天皇

諱守仁。後白河長子。母贈皇太后藤原氏。大納言經實女。在位八年。改元五。曰。平治。永曆。應保。長寬。永萬。禪位皇太子而崩。壽二十三。火葬香隆寺。

冬十二月。天皇卽位於大極殿。尊先帝曰太上天皇。決政院中。右大臣基實關白庶政。

平治元年。己卯春三月。立妹子內親王爲中宮。　冬十二月。右衞門督藤原信賴以左馬頭源義朝兵作亂。圍上皇宮。殺少納言藤原通憲。遂幽上皇及帝於宮中。帝逃幸太宰大貳平淸盛第。以其兵討賊。信賴伏誅。義朝東走。爲其下所殺。梟首京獄。淸盛以下。進官爵有差。初信賴。三位忠隆子。貌美。幼寵於上皇。累遷中納言。兼今官。恃勢驕肆。人呼曰惡右衞門督。希望

爲大將。數請上皇。上皇以語通憲。通憲諫之。圖唐安祿山事跡。上之。信賴啣之。稱病不朝。信賴素善於中納言源師仲。就其第講武事。通憲文章博士實兼子。强幹有才學。自相有兵死法。或曰。爲僧可免。遂削髮曰信西。以上皇乳母子。親近用事。義朝嘗請與婚。鄙之不許。而爲子娶淸盛女。經宗・惟方等。皆嫉忌。惟方又與信賴有姻。遂相共謀除之。因引義朝爲黨。闚淸盛赴熊野。擧事。九日。白虹貫日。通憲察將有亂。入奏之。上皇內宴。乃密告之宮女。而出奔大和。信賴等不知。以爲必侍宴。圍而焚之。不在。乃焚其第。遂幽上皇。遷帝。使經宗・惟方伺察動靜。自稱大臣大將。黨與皆授官。以義朝爲播磨守。十三日。獲通憲於石堂山。殺之。梟首。信賴居朝餉所。專決諸政。公卿以下。俯伏陪位。獨藤原光賴不肯出。信賴矯詔。大會公卿議事。光賴乃出。戒從者。有變以我首免。勿辱賊手。遂入曰。今日朝班何異。吾左衞門督也。因進坐信賴上。端笏勵聲曰。聞今日有旨召百僚。不至有誅。抑所議何事。信賴俛首。衆皆屛息。光賴回視久之。曰。無所議則請退。乃出。召惟方及經宗。責以大義。歔欷流涕。使保護二宮。曰。平氏還。力能匡復。狂賊不能久也。惟方等悔悟。淸盛還。途聞變。欲避之。其子重盛奮決議。歸六波羅第。使人潛入詗事。經宗・惟方敎帝逃出。平氏兵迎路入其第。公卿多踵至。上皇亦潛出。入仁

和寺。信賴方醉臥。及醒懊悵曰。惟方負我。惟方短小多智。世呼爲小別當。至是。又呼中小別當。謂其中立能左右也。敕平氏討賊。以大內新建。恐罹兵燹。宜誘賊出外戰。重盛等攻大內。且戰且卻。誘賊至其第。別遣兵入大內。賊進退失據。遂敗走。信賴初盛氣指揮。及聞敵呼譟至。怖失色。不能騎。追及義朝於八瀨。呼請與偕。義朝怒。抶其面去。乃趨仁和寺。求哀上皇。上皇爲請上釋之。不報。平氏兵以敕旨來捕。誅之。遂囚其黨五十餘人。藤原成親以重盛姻免死。其餘公卿貶官。清盛及子弟皆進官。流通憲子十二人。世以爲出經宗・惟方所爲也。信賴闔上皇宮。宮人多墜井死。左大臣伊通戲曰。殺人多者得賞。宮井當先受官。義朝東奔。至尾張。投鎌田政家妻父長田忠致家。忠致心動。伏兵浴室。殺之。及政家。獻其首。賞爲壹岐守。忠致觖望。平氏臣家貞者。請斬之以懲不忠。不許。義朝諸子。皆爲平氏所捕殺。獨第三子賴朝。清盛繼母爲尼者憫之。爲請免死。流伊豆。婢子三人。皆幼。以母殊色。清盛納之。因亦得免。

平治之亂。盡出於藤原信賴乎。賴襄曰。不然。信賴白面狂童耳。不過希望大將。何必舉兵刧宮。徙帝幽上皇。欲何爲乎。彼雖狂騃。何遽欲身爲帝王乎。且上皇。乃其所受寵昵者也。徙帝可也。何幽上皇。然則出於源義朝乎。曰。不然。義朝之觖望爵賞。信矣。然不至蹂躪宮

闕以求之。信賴之不足與有爲。寧有不知。受其敍爵。晏然居之。何恃而然乎。饒令其怨通憲。斃之於路。如殺犬耳。何至犯兩宮。且其心所仇者平淸盛。彼難强宗。兵不精於我。使義朝有意擧事。何不直攻之。而攻三條殿乎。然則平治之事。出於誰。曰。出於藤原經宗・惟方。自昔。壻爲天子。外舅執政。常也。經宗爲帝之舅。惟方爲帝之乳母子。二人者以爲。帝立則己執政必矣。而政在於上皇。通憲用事。是二人之所不平也。是以視信賴之不逞於通憲。且輕躁易動。故從臾使作亂。患其無兵也。視義朝之怏怏。敎信賴結之。以淸盛爲通憲親姻。瞯其不在。草率擧事。蓋皆出二人之計。其本意在除通憲廢上皇。然後已擁帝以擅政。不然。何以及平氏歸京。獨扶帝逃出。而委上皇於賊乎。信賴不足言也。義朝武人。暗於朝典。恃二人。以爲可得志。而利去害止。蓋噬臍而不及也。二人委賊名於人。而已盜其功。及其得志。勸帝爲政。不使上皇預焉。可以見其情矣。是以上皇憤怒。借平淸盛之手。以逐二人。而淸盛威權倍起。又可以見其勢矣。雖然。二人皆巧黠多智。不露蹤跡。故無幾召還。經宗又以外戚。故富貴終身。時無燭其姦者耳。故襄以爲。保元之亂出於忠通・賴長。而平治之亂。出於經宗・惟方。彼皆驕逸不更事者。故以兵爲易事。輕忽擧之。禍遂至此。如藤原成

親。亦然。譬若悍婢黠豎。利主家財物。注火其屋。欲乘擾攫取之。若夫義朝。清盛。傔從之有力者。赴救效力。焦頭爛額。或爲其詿誤。至胥以陷罪。一勝一負。所就逈別。其初念皆不及此也。

永曆元年。庚辰春正月。納太皇太后藤原氏于宮。大納言公能女。爲左大臣賴長所養。近衞皇后是也。保元亂後幽居。上聞其美。諭旨公能。納之。朝臣公卿引唐高宗納武氏事。諫之。上皇亦不可。上不聽曰。是朕家事。不問外議。天子無父母。何有於先皇哉。遂册立爲皇后。世呼二代后。　三月。上皇令平清盛收藤原經宗。流于阿波。藤原惟方流于長門。經宗以上舅。惟方以乳母子。親任用事。每事以上旨行。不使上皇知。上皇自仁和寺之八條第。時登閣觀望。二人以上旨。施板爲蔽。上皇恚收之。清盛欲殺之。前關白忠通請而減死。　秋八月。以內大臣藤原伊通。爲太政大臣。基實爲左大臣。關白如故。藤原公能爲右大臣。藤原基房爲內大臣。基房忠通子。伊通上疏言三事。一曰。用人材。宜舍短取長。二曰。宿衞宜選材武。不可備文具。三曰。君臣所學。皆要濟時。不宜徒事詩賦。　是歲。以平清盛敍三位。尋任參議。踰歲。兼右衞門督。檢非違使別當。爲權中納言。

應保元年。辛巳秋九月。奪左中將藤原成親。右少辨平時忠等官。皆上皇所親近也。帝啣上皇收經宗等。故報之也。

二年。壬午春三月。召還流人藤原經宗。復本官。　是歲。平清盛敍從二位。

長寬二年。甲申秋八月。崇德上皇崩于讚岐。崇德在遷所。刺血書大乘經。成。請藏京師佛院。後白河上皇不許。崇德大恚。齧舌出血。每軸書曰。願爲大魔王。惱亂天下。以五部大乘經。廻向惡道。自是成疾。遂崩。其後亂不止。敕建廟栗田。祀之。　冬。閏十月。以權大納言藤原兼實。爲內大臣。兼實。基房弟。　是歲。前關白忠通薨。忠通工歌詞。善書。嘗有乞寺榜者。既成。聞陸奥押領使藤原基衡所求。怒奪還之。

永萬元年。乙酉平清盛任權大納言。夏六月。天皇不豫。立皇子順仁。爲皇太子。禪位。上尊號太上天皇。帝頗用心政治。與關白基實謀。未嘗咨稟上皇。時論謂。帝長於政事。短於孝道。

六條天皇

諱順仁。二條第二子。母伊岐氏。大藏少輔兼盛女。在位四年。改元一。曰。仁安。禪位皇太子。後八年崩。年十三。葬清閑寺。

秋七月。天皇卽位於大極殿。甫二歲。關白基實攝政。後白河上皇決政院中。太上天皇崩。

八月。葬二條天皇。興福・延暦二寺會葬。爭班構兵。京師訛言。上皇令僧徒討平氏。平氏聚兵自衞。大內亦戒嚴。上皇親往諭清盛。清盛稱疾不見。

仁安元年。丙戌春三月。召還流人藤原惟方。　秋七月。攝政基實薨。近衞祖以左大臣基房攝政。

冬十月。立皇叔父憲仁親王。爲皇太子。甫六歲。初上皇納兵部少輔平時信女滋子。嬖之生親王。欲立之。親王母滋子。清盛妻妹也。後稱建春門院。　十一月。罷攝政基房左大臣。以經宗爲左大臣。內大臣兼實爲右大臣。權大納言平清盛爲內大臣。

二年。丁亥春二月。以平清盛。陞從一位太政大臣。

三年。戊子春二月。天皇禪位於皇太子。

賴襄曰。吾嘗論平清盛之不臣。皆倣藤原氏所爲者。不可獨罪清盛。而使其勢驟至此者。後白河上皇也。請詳論之。夫平氏自白河・鳥羽之世。已受寵任。門望出源氏之上。帝以無望之親王。忽得大位。而恐失之。故倚有望之武臣。以爲重。保元之變。清盛功勞不及源義朝。而賞則過之。猶延元帝之寵足利高氏。過新田義貞。視其門望之高下焉爾。故藤原通憲不許婚義朝。而連姻清盛。君臣同見。抑彼揚此。遂激成平治之亂。義朝無義貞之臣節。

而清盛坐得尊氏之所圖。皆帝致之也。清盛心知帝之無望。而倚己之望也。意素輕之矣。及上皇以先朝定議。禪位二條帝。欲己聽其政。如白河・鳥羽。而帝與其親信謀。不使上皇逞志。上皇已喪通憲矣。尤倚於清盛。借其力。以除帝之謀主難除者。已借其力。不得不酬其勞。今年。任中納言。明年。任大納言。勢已駸駸矣。及帝崩。太子立。上皇又欲別立其所愛。犯衆情之所不是。而必行之。則又借清盛之力。以爲。高倉之所出平氏。而其舅無望。清盛亦平氏。而威名著世。是眞可倚以爲大援也。於是。驟進其官爵。自內大臣。直超拜太政大臣。是顯然以異時外戚・攝政之地與之也。使清盛謹愼有學之君子。猶不能不自恣。況武人之負功恃力者。其驕肆不忌憚。固其所也。亦猶延元之假尊氏大將軍之地。故曰。上皇使之然也。夫清盛。虎也。上皇傅之翼。而騎之。欲中下。不可得。況欲搏而斃之。速其噬攫。莫足怪焉。清盛之意則以爲。既與我以藤原氏之地。藤原氏之所爲。無不可爲也。於是。納女爲后。立其所生。爲天子。己爲外祖。專政。己之子爲外叔。任左右大將。族類列卿相。莊園跨天下。而天下之兵。役屬其大半。則出藤原氏之所不及。有其所不及。故爲其所未爲。亦莫足怪也。天下之兵。半屬平氏。半屬源氏。源氏之意則以爲。彼之所爲。我何有不能爲。是以

奮起取而代之。如雙虎相鬬。一斃一在。在者負嵎。後白河上皇懲而不復攖之。建久之事。是也。後鳥羽上皇攖之而大傷。承久之事。是也。後醍醐帝乘其自斃殪之。而更養一猛惡者。延元之事。是也。

日本政記卷之九終

日本政記卷之十

頼襄子成著

高倉天皇

諱憲仁。後白河第五子。母建春門院平氏。贈左大臣時信女。在位十三年。改元四。曰嘉應。承安。安元。治承。禪位皇太子。明年崩。年二十一。火葬東山清閑寺。

嘉應元年己丑夏六月。前太上天皇薙髮稱法皇。先是。平淸盛以病削髮。曰淨海。稱太政入道。造西八條第。究極土木。又興別莊于福原。攝津朝廷賞罰。出其喜怒。上皇積不能平。削髮歸佛。且以媚淸盛。淸盛乃悅。

三月。天皇卽位于大極殿。尊先帝。曰太上天皇。上皇五歲。帝八歲。

二年庚寅夏。以陸奧夷酋藤原秀衡。爲鎭守府將軍。是歲。權大納言平重盛次子資盛。途遇攝政基房。不下車。從者呵辱。淸盛怒。使武士覘基房出。毀其車。傷從者。上爲之廢朝三日。重

盛懼。黜于其事者。遂貶盛于伊勢。

承安元年辛卯春正月。天皇加元服。　冬十二月。清盛納其女德子。爲女御。

二年壬辰春二月。立爲中宮。長於帝四歲。

安元二年丙申秋七月。太上天皇崩。　葬六條天皇。

治承元年丁酉春正月。罷內大臣藤原師長左大將。大納言兼右大將平重盛遷左大將。權中納言平宗盛兼右大將。師長。賴長子。宗盛。重盛弟。　三月。重盛遷內大臣。　夏六月。流權大納言藤原成親于備前。成親素望大將。不得。因此怨平氏。與檢非違使平康賴。左衞門尉藤原師光。法勝寺執行俊寬等。謀滅平氏。引藏人源行綱爲黨。法皇與其議。四月。延曆寺僧徒。因事有訴。犯闕。法皇令成親・師光等徵兵備之。其實討平氏也。行綱懼事不成。自首清盛。清盛聚兵六波羅第。遣兵至法皇宮。執師光。訊鞫得狀。收成親。遂欲取法皇幽之。曰。以輕躁之君。御僥倖之臣。何所底止。重盛極諫。不聽。重盛大徵兵。兵皆舍清盛歸之。清盛乃止。欲殺成親。重盛爲請。減死處流。竄其子成經及康賴・俊寬等于薩摩。殺師光。師光故事少納言通憲。以狡悍被信任。通憲薦爲左衞門尉。及通憲被殺。削髮稱西光。又嬖於法皇。至是罵清盛死。

清盛尋潛使人殺成親。

賴襄曰。國之所以盛衰者。以士氣之振與不振。國朝之衰。其公卿平時奔競。有事逃避。唯不知退而守其廉。是以不能進而死其節也。故凡士之養氣。在其平時。國之養士之氣。亦在其無事。無事之退。可以望有事之進。有事而能果於進者。及事平。則亦勇於退。其爲氣一也。當賊信賴之幽兩宮也。平時決死生。以競官爵。威焰赫然。凌壓人者。泰首鼠竄。莫敢出身當其難。藤原光賴因會議面折信賴。使其俛首喪氣。當時賊黨。布在朝廷者。噤不能出一語。足以挫狂賊之勢。而定天下之向背。不待平氏來討。而其勢決矣。吾嘗曰。平平治之亂者。光賴爲首。而平重盛次之。及事平。天子欲大用光賴。參政府。則稱病辭之。蓋視朝政之非。已志不立。當衆人計功爭進之際。獨決意而退耳。可謂勇矣。如夫重盛。非天下之所謂賢者乎。而當大將闕。自請拜之。何哉。當是時。藤原成親等。銳意望補焉。而重盛兄弟。以後進超據其地。烏得不激衆怒哉。父爲太政大臣。妹爲后。已爲左右大將。進不知止。以速上下之憤嫉。及難作。乃諫爭於父。固已晚矣。故吾以爲。作治承之難者。重盛爲首。而成親等次之。夫重盛之於清盛。與光賴之於信賴。事固大異。當諫之造膝之際。不當諫之稠

人廣座之中。可爭之事未發之時。不可爭之事已發之日。然已在平時。不知自退。如之何能教其父退也。雖能姑過之乎。恐觀終及大禍也。欲先死於未及。是其氣不足尙也。烏能終勝桀驁之父。噫。曷若光賴之端笏厲聲。横身當賊鋒。以其氣奪賊之氣也哉。

二年。戊戌秋七月。召還流人成經・康賴等。　冬十一月。皇子言仁生。母平氏。十二月。立爲皇太子。初中宮有身。清盛希其生男。每月親禱嚴島祠。臨產。法皇幸其第。爲誦經。已而分娩。清盛喜極。獻砂金千兩。法皇擲之曰。驗者視朕耶。

三年。己亥秋七月。內大臣兼左大將平重盛薨。　冬十一月。地大震。平清盛奏。罷關白基房。貶爲太宰權帥。以右近衞中將基通代之。進內大臣。奪太政大臣師長官爵。流于尾張。遣平宗盛。率兵幽法皇于鳥羽。基房固有寵於法皇。其兄子基通。清盛女壻。中納言闕。清盛請與基通。不聽。基房子師長。超任之。重盛薨。未數日。法皇游幸自如。基房又奏。收其封戶。清盛積怒。自福原。率兵入。行事罷。奏帝。自今諸政。皆陛下意。

四年。庚子春二月。天皇禪位於皇太子。清盛諷之也。太子甫三歲。　三月。清盛奉帝幸嚴島。帝先幸西八條第。過鳥羽。覲法皇。嚴島祠。清盛所虔事也。故引帝誓祠前。欲其不負己。帝少受

學清原頼業。性仁孝。自法皇幽囚。鬱鬱早去位。憂懼遂至于崩。

安德天皇

諱言仁。高倉第一子。母建禮門院平氏。太政大臣清盛女。在位四年。改元二。曰。養和。壽永。後二年。崩于西海。年八歲。

夏四月。天皇卽位于紫宸殿。尊先帝。曰太上天皇。關白內大臣基通攝政。前太政大臣清盛決事。　五月。前右京大夫源頼政。奉皇伯以仁王。起兵。討平氏。不克。王。後白河第三子。幼敏慧。以母賤。未得爲親王。居高倉宮。有善相者。曰。後必升大位。頼政平治中。拔宗族歸順。位不滿其望。其子仲綱爲平宗盛所凌辱。頼政憤懣。勸王潛下令東國。發源氏。所在源氏響應。報至。清盛大驚。奏。削王屬籍。遣兵圍其第。頼政已使王逃之園城寺。牒延曆・興福二寺。爲援。清盛以米二萬石。絹三千匹。啗延曆寺。叛王。頼政欲直襲六波羅。僧徒通款平氏者沮之。止。翌日。奉王奔南都。王以徹夜不寢。比至莬道。凡六墜馬。乃據平等院。撤橋而陣。平氏以二萬騎。來攻破之。頼政・仲綱等自殺。王逃。中流矢薨。年三十。　六月。清盛奏。遷都于福原。以舊京逼於延曆・興福二寺。數蠢動。避之也。令公卿建宮城。以地迫狹未就。奉帝于清盛第。先是。以宗盛請。迎法皇於八條烏丸。稍釋其防。及有以仁王事。又幽之福原。板屋三間。膳日二次。人呼

曰牢御所。　秋八月。流人源賴朝奉以仁王令。起兵伊豆。討平氏。與平氏黨大庭景親戰。敗走安房。　源義重起兵上野。據寺尾城。　九月。源義仲奉以仁王令。起兵信濃。義仲。故檢非違使爲義孫。帶刀義賢子也。義賢與姪義平。私鬬見殺。義仲匿于木曾。曰木曾冠者。賴朝徇上總・下總・武藏・相摸。悉下之。據鎌倉。下官符東海・東山・北陸三道。以右少將平維盛。爲追討使。薩摩守平忠度爲副。東擊源氏。　冬十月。源賴朝逆之駿河。維盛兵潰還。初清盛要上皇。請討賴朝宣旨。又屏人請其誓書不與源氏。宗盛進紙筆。清盛耳語令書。後上皇與侍臣語。飲泣。忠度等。欲進踰足柄山。上總介平忠清。以駿河・伊豆兵未來附。踰險逢敵非計。不如沮富士河待敵。賴朝以大兵來。夾河陣。令族武田信義。以甲斐兵。遶出平氏後。會鵝鴨羣飛。維盛軍以爲敵至。不戰走。賴朝欲追擊遂西。以關東豪傑有窺其後。以信義守駿河。安田義定守遠江。退至黄瀨川。得義經。義經。故義朝第九子。平治之敗。免死。放之鞍馬寺。稍長。走陸奥。依藤原秀衡。聞賴朝起。來從。尤勇悍。善用兵。後用爲將。　十一月。清盛奉帝復都平安。時福原第多怪。占曰。死平治亂者爲祟。清盛會公卿。議兩都利害。公卿皆希其旨。盛稱新都利。獨左大辨藤原長方極言其不便。衆爲危之。清盛默然。遂促駕復闕。人以問長方。長方曰。彼蕭

悔心。故咨。吾因而導之耳。先是。長方從容說清盛。謂亂人得志。皆公毆之使然。清盛頗悟。造宮夢野。奉法皇。 十二月。初清盛使部下妹尾兼康率兵。鎭南都。僧徒攻鏖其兵。清盛怒。至是。使其子藏人頭重衡率兵。燒興福・東大二寺。斬僧徒數百人。

養和元年。辛丑春正月。太上天皇崩。 葬高倉天皇。 二月。尾形惟義起兵筑紫。河野通信起兵伊豫。並應賴朝。 閏月。前太政大臣平清盛薨。遺表。凡事皆咨宗盛。又遺戒子弟。力討賴朝。清盛自左衞門尉。至太政大臣。同姓爲公卿者。十六人。得昇殿者。三十餘人。爲衞府國司者。六十餘人。其采地半海內。衣冠華美。一時慕尙。稱六波羅樣。 三月。平重衡等。與源行家・義圓戰墨股川。破之。獲義圓。義圓。賴朝弟也。行家走依賴朝。請分領一州。以復成軍。不答。乃附義仲。先是。志太義廣聚兵常陸。來見。賴朝不禮。怒還。將攻賴朝。敗走。亦附義仲。行家・義廣。皆賴朝叔父也。 夏六月。先是。平氏請敕旨。令鎭守府將軍藤原秀衡。攻賴朝。又以越後人城資永。爲越後守。攻義仲。義仲逆擊。破資永。資永。越後豪族也。 秋九月。宗盛又遣平通盛・經政等。攻義仲。敗還。

壽永元年。壬寅秋九月。先是。城資永任越後守而卒。弟長茂襲任。至是。發越後・出羽兵四萬餘

人。擊義仲。義仲以三千騎襲擊破之。北陸道悉屬義仲。
二年。癸卯春三月。賴朝率兵十萬擊義仲。義仲避之越後。賴朝自碓氷嶺引還。徵義仲質。義仲遣其子義高爲質。　夏四月。平宗盛奏。以平維盛爲追討使。率宗族六將兵十萬人。北擊義仲。義仲與戰于越中。大破之。獲平知度。追擊西上。六月。連戰于越前・近江。皆破之。使人喩延曆寺爲內應。　秋七月。進據叡山。宗盛挾帝及法皇。奔福原。法皇逃幸義仲營。宗盛遂泛海奔筑前。義仲進入京師。　法皇還御法住寺殿。以源義仲爲左馬頭兼越後守。行家爲備前守。敕討平氏。削平氏二百餘人官爵。

賴襄曰。平源之事。其名分逆順。姑置可也。至其興廢之數。攻守勝負之勢。請得而論之。夫平氏遭遇時變。擁天子以定亂逆。及是之時。退居攝播之間。開府養兵。據爲根本。官止大納言大將。而與聞朝政。庶幾可以保其功名。樹子孫之業。不出於此。而溺於習俗。必求如藤原氏之比。身擅京府。敢爲天下之的。所以天下嗷然競起也。至是乃退據福原。晚矣。適足以示怯動搖人心耳。乃募無根之兵。四出防禦。自竭其力。而敵益得志。其勢固然也。然源義仲自覆平氏之車。而復蹈其轍。何哉。義仲之國。近於京師。所以速奏效。使其既已逐

平氏。留一親信將領。護輦轂。而身歸信濃。如異日之織田氏。據美濃而經營京畿。厚集其勢。與鎌倉對峙。雖源頼朝伺我隙。而無可乘。則未敢動也。或再親將窮追平氏。殄滅之。勢不能然。則或與之和。以謀鼎足。而觀其釁。無不可也。乃以爲。吾據京師。可以號令四方。不知是天下之散地。不可爲根據。如雞棲木上。必有來逐下之者矣。前日之平氏。可以見焉。譬之人家。京師廳事也。可以會議。而不可以坐臥。可以坐臥者。有奥室焉。夫越信者。義仲之奥室也。而鎌倉者。頼朝之奥室也。頼朝據其奥室。而治義仲於外廳。鬪義仲與平氏。而徐制其後。如頼朝。則可謂獨不拘習俗之見。而知天下之形勢者矣。宜乎。其剏建無前之業也。後焉。新田・足利皆不及也。雖然。頼朝初念亦不至此。或觀奥之藤原氏。越之城氏。乘王綱之弛。竊據一隅也。而欲倣之歟。平氏使此二氏圖源氏。如秦人之遠交近攻。亦善計也。雖然。二氏之國富兵强。勝新造之源氏。而其智與勇。非頼朝・義仲之對。所以前後竝斃也。而況平氏乎。

後鳥羽天皇

諱尊成。高倉第四子。母七條院藤原氏。修理大夫信隆女。在位十六年。改元三。曰元暦。文治。建久。禪位皇太子。後四十一年。崩于隱岐。壽六十。

火葬莿田山中。

八月。天皇在筑前。法皇下勅。遙廢之。立皇弟尊成踐祚。左大臣藤原基通攝政。先是。法皇喩旨宗盛還駕。不奉詔。法皇會公卿議。右大臣兼實上言。京師無主。四方觀望。平氏挾乘輿。吾討之無名。宜更立新主。以繫臣民心。祖宗制。無劍璽。不得卽位。然繼體天皇卽位以前。稱踐祚。及得劍璽。乃卽位。今宜據此例。法皇從之。乃議所立。議者謂世亂宜立長君。故以仁王子避亂北走。曰北陸宮。義仲奉入京師。法皇勅問義仲。義仲曰。天位非臣輩所敢議。然三條宮憤陛下幽厄。唱義殺身。臣等奉其令。以有今日。立之。庶幾副天下之望耳。或議其嘗爲僧不可。高倉帝有二子。叔五歲。季三歲。召見之。覺季可愛。命卜之。叔吉。法皇寵姬丹波局勸立季。

頼襄曰。藤原兼實世所稱爲賢相者。然在諸藤可爲巨擘。賢則吾不知也。如其贊立後鳥羽。非有權時之略。徒習見當時立君之易。附會法皇之旨。而利於源氏耳。其所謂天下無主。兆民無所繫心者。似也。雖然。政在院中。天子爲虛位。久矣。民心所繫。在於法皇而已。平氏挾帝及神器。以爲奇貨。固也。然當時之勢。與李氏之父爲虜逐。而子立以繫民望者。不同。又與趙氏・朱氏之兄爲虜囚。而弟立以空敵資者。不同。孫爲外家所將去。而祖父在也。

祖父再聽天下之政。而徐處置之。將無不可。譬猶盜賊窮蹙。劫人子爲質。不過欲免死急之則持。緩之則舍。爲當時計者。明詔諸源曰。今上雖平氏出。於朕爲親孫。不幸爲外家所挾。併神器在彼。朝廷自有處分。勿得私攻擊之。詔平氏曰。今上非汝家所得私。況於神器。苟奉還之。當宥前罪。給以活命之邑。勿妄蠢動以重罪。不奉詔。當告祖廟。致天討。玉石俱焚。源氏既有泄憤於平氏。而平氏亦知其罪矣。休兵就安。兩不敢不聽。奈何遽別立主。以絕彼之望。而資此之戰哉。兼實以爲塞亂源。遏姦軌。吾以爲開而導之也。且誠欲還神器乎。尤不可立主。立主而求器。器還則彼爲空主。寧死不還。其情固然。兼實贊立主之議。而不可無器卽位。非通論也。且卽位與踐祚。相去幾何。其所謂示輕神器於天下。後世藉口僭竊不絕者。其自道可也。承久・建武之事。烏知非藉口兼實哉。曰。不立主。則成平氏之勢。曰。成平氏之勢。孰與成源氏之勢。曰。平氏之罪。不討滅之可乎。曰。彼功罪相半者也。奪其爵邑。殺將覆軍。纔保殘喘。罰亦足矣。必究之所如。至無噍類。是爲源氏復仇也。且夫源義朝露刃犯闕。幽囚兩皇。罪浮平氏。平氏敵王所愾。源氏子弟。烏得仇視之。適因其周旋。以得宥死。可謂有恩矣。苟以此喩源氏。安置之一州。以存舊勳。以設鎌倉之所忌。非計之得

者乎。平氏得安德之復闕。將死亦甘心。況得全活之所乎。或其冥頑不回。挾質乘勢。要求不已。乃赫怒絶之。然後別立主。命源氏整軍臨之。而責還神器。則天下知其不得已焉。而誅伐之權。歸朝廷矣。今鎌倉之兵。殄殲其仇。威被海內。而朝廷傍觀。又成其勢。而資其戰。終致失大權。兼實不得辭其責也。至其處置賴朝・義經之議。爲可聽也。然賴朝欲除其所忌。何有於敕命哉。兼實爲賴朝所薦。而法皇疑其阿黨。非無謂也。是法皇與兼實。俱墜賴朝之計中。而不自知也。賴朝之薦。雖曰從衆望。其實使其君臣相疑。計議不行也。使兼實淸德大節。凜然足以信其君。而服姦雄之心。則何必呶呶分疏如彼乎。一墮其計。不能出脫。故及有守護・地頭之請。不能力爭也。是而不力爭。其餘區區所陳。亦放飯流歠。而問無齒決之類耳。及其患失寵於法皇。則又欲容媚其嬖姬。以自說。其無特操。如此。宜乎。其爲賴朝所賣弄也。

九月。尾形惟義攻平氏。宗盛敗。赴讚岐。造宮屋嶋。徇南海及山陽。法皇敕義仲西伐。義仲以糧乏。遷延未發。抄暴京畿。法皇稍厭苦之。欲引賴朝除之。義仲微聞之。不懌。　冬十月。敕復源賴朝本官右兵衛佐。召致宿衛京師。以關東未平辭。閏月。義仲迫於敕命。率兵至備中。遣

將。與平氏兵戰于水嶋。不利。義仲欲進攻屋島。時頼朝遣兵。以二弟範頼・義經將之。護貢賦入京師。義仲聞之。引還。法皇敕止之。不奉敕還。　十一月。行家討平氏。戰水嶋。敗奔和泉。義仲遣使平氏。欲與連和。以拒頼朝。宗盛欲許之。中納言平知盛執爲不可。法皇命檢非違使平知康。欲使延曆・園城二寺僧徒討義仲。右大臣兼實諫止之。且請諭頼朝滅兵。以釋義仲之疑。法皇不聽。義仲擧兵闖殿。知康敗走。義仲遷帝于閑院。法皇于攝政基通第。逼法皇。乞討頼朝宣旨。許之。尋請罷基通攝政。以藤原師家代之。奪公卿四十餘人官爵。

元曆元年。甲辰春正月。以義仲爲征夷大將軍。而頼朝所遣二弟範頼・義經等。將兵數萬。分道入京師矣。義仲拒之莵道・勢多。敗死。傳首京師。梟于東獄。帛書其髻曰賊義仲。其子義高在鎌倉。頼朝嘗以其女妻之。及義仲敗。義高出奔。追殺之。其妻哀不食。欲更嫁之。不聽。終以憂死。　二月。平氏還據福原。頼朝以法皇宣旨。命範頼・義經。移兵攻破之。斬武藏守知章以下十人。虜左近衛中將重衡等。平氏逃保屋嶋。　秋七月。天皇卽位於太政官廳。先是法皇使重衡作書喩宗盛。奉還劍璽。宗盛等不許。平時忠又罵辱敕使。逐之。法皇大怒。或曰。劍璽在賊所。而吾不卽位。賊重我輕。不如早行卽位禮。內大臣兼實以爲不可。曰。是傷國體。啓僭亂

也。不聽。　八月。法皇以義經任左衞門尉。補檢非違使。尋敍從五位下。聽院昇殿。　九月。賴朝奏請。遣三河守源範賴。爲追討使。西討平氏。凡關東家人。不由賴朝奏。而拜衞府官者。盡收其邑。不許東還。　是歲。賴朝置公文所。以大江廣元充別當。置問注所。以三善康信爲執事。廣元。中納言匡房曾孫。式部大輔維光子。

文治元年。乙巳春正月。範賴留部將三浦義澄。守赤間關。濟海入豐後。　二月。遣左衞門尉源義經。攻屋島。破之。宗盛等挾先帝。航海西奔。三月。義經追擊。會範賴于長門壇浦。宗盛母抱先帝。投海崩。平氏宗族。權中納言知盛。能登守敎經等六人殉死。前内大臣宗盛。大納言時忠。右衞門督淸宗被虜。及皇太后平氏。義經索寶劍。不獲。獲鏡璽。倂諸俘虜。還京師。　夏四月。義經至。奉鏡璽於溫明殿。授賴朝從二位。　五月。義經護送平宗盛于鎌倉。六月還。斬于篠原。　八月。以源義經爲伊豫守。兼院廏別當。　冬十月。盜襲伊豫守源義經第。敕義經。及前備前守源行家。討賴朝。　十一月。賴朝發兵西上。義經・行家逃走。敕諸國捕義經・行家。賴朝遣部將北條時政。守京師。因奏請。諸國置守護地頭。課畿内。及西南四道二十六國。每段取米五升。充兵糧。敕許之。

賴襄曰。擇六十六人之吏。以宰海內民者。王政也。及其政衰。乃擇六十六人之將領。以理海內盜賊。是鎌倉所以成霸業也。其員之簡一也。員簡則擇之精。擇吏精。則民安其生。擇將領精。則盜賊無所容其足。盜賊無所容其足。然後安民之政。可得而施。故大江廣元之議。源賴朝之請。皆濟時之急務。而朝廷許之。亦時勢然也。雖然。使時勢至此者。必有由焉。今之所謂盜賊。古之所謂王民也。使民而安其生。何患盜賊。而追捕之乎。追捕使之不得不置者。由於吏不稱職。吏不稱職。由於擇之不精。夫是六十六人而已。不難於擇也。而不精焉者。不用心也。上之人。不用心於民。而吏以納貲進。非紈袴乳臭之子。則慧黠貪汚之人。知多取租稅。以資其私而已。加之。相家之專權。其私采封邑。所在犬牙。以妨礙吏治。假使有公廉勤幹者。不能盡其職分也。是以拜國司者。多不欲往。徒遣其下僚。代往。或因其地方豪族。代任。所謂目代也。目代以監稅。兼捕盜。故或謂之追捕使。是追捕使之名。所由而起也。故廣元因當時所目習口慣者。爲名而請之。而朝廷易於許之。所謂追捕使。於國司則曰守護。於莊園則曰地頭。亦皆因前此所有也。其名因前此所有。而其實遂成前此所無。何哉。以六十六員。督天下之兵。其名輕。而其實重也。其廢置之權。不總之朝廷。而總

之覇府也。故曰總追捕吏者。亦非有此定名也。而有此定實焉也。自是以還。捕盜者。反兼監税。總之者。數申戒之曰。勿敢侵吏治。亦姑云爾耳。國司雖仍出於朝差。而非必有其實。徒有其名耳。不獨國司徒有其名也。總國司者。亦徒有其名。而其實則歸於總追捕者。是雖時勢之使然。其初植六十六人私黨。以簒天下。其術可謂簡捷也。朝廷以爲。是不過六十六員。何能爲。而不知其失天下之實。而天下之勢。終大變不可復。可慨也夫。夫所謂追捕者。視力能勝追捕而已。不必須精擇也。故皆其地方豪族爲之。雖時有廢置。久而因襲者。往往而然。以及足利氏之時。强弱相并。合爲二三十員。再合爲七八員。員愈簡。而天下愈不治。古之簡所以安民。而後世之簡。所以困民。可不慨哉。

十二月。頼朝薦右大臣兼實。內覽章奏。尋爲攝政。定議奏十人。以內大臣實定等充之。奪預東討宣旨者。參議平親守。右大辨藤原光雅等十餘人官爵。

二年。丙午春三月。源頼朝奏。蠲相摸・武藏・伊豆・駿河・上總・下總・信濃・越後・豐後等。去年以往逋租。因請諸國皆准之。兵興以來。民不暇農務。關東疲弊殊甚。自今。量民力收賦税。　夏五月。北條時定獲源行家于和泉。斬之。

三年。丁未夏六月。頼朝遣大江廣元。修閑院。　秋八月。京師多盜。頼朝薦千葉常胤・下河邊行平。鎮京師。

四年。戊申春二月。頼朝奏。陸奥押領使藤原泰衡。舍匿義顯。請。勅泰衡誅之。奏可。義顯改義經名也。泰衡。秀衡子。先是。秀衡卒。遺囑。擧國聽於義經。以抗頼朝。故泰衡得此命。

五年。己酉春正月。敍頼朝正二位。　三月。修大内。　夏閏四月。泰衡遣兵。襲義經第。義經自殺。函其首。送之鎌倉。　秋七月。頼朝大徵兵。奏藤原泰衡久庇亂人。請討之。朝議未許。頼朝東下。八月。撃陸奥・出羽。悉平之。泰衡爲其下所殺。　九月。勅書至。頼朝留葛西清重。鎮陸奥。凡政皆遵秀衡舊制。毋有變更。　冬十月。還鎌倉。　十二月。攝政藤原兼實爲太政大臣。

建久元年。庚戌冬十月。先是。召頼朝入朝。豫造第六波羅。至是。發鎌倉。　十一月。入京師。先見法皇。後入朝。直授權大納言。兼右近衞大將。賜車服儀從。法皇數見頼朝。每入對。漏數刻輒退。　十二月。上表。辭兩職。尋還鎌倉。

二年。辛亥春正月。頼朝改公文所。曰政所。大江廣元爲別當。如故。自是。賞功臣。頒封邑。皆以政所下文行。　二月。頼朝以勅旨。修法住寺殿。以奉法皇。　夏五月。殺左兵衞尉佐佐木定重。

梟首唐崎。定重父定綱爲近江守護。佐佐木莊租。充延暦寺僧料。歳飢多逋。僧徒督責。壞定綱家。放火民家。屬定綱在京。定重拒之。傷其二人。僧徒守闕訴之。又訴鎌倉。朝議流定綱父子。僧未慊意。固請誅之。賴朝以佐佐木氏勳舊。多方營救。不聽。　十二月。攝政兼實爲關白。

三年。壬子春三月。法皇崩。年六十六。法皇在位在院三十餘年。擁立五帝。而政皆決於己。　葬後白河天皇。

賴襄曰。保元・建久之際。國勢一變。本於朝廷處置失當。論者歸咎於後白河法皇以爲庸暗無比。晉惠帝類也。然不幸處綱紀極隳。姦豪駢起之時。雖英傑之君。或不能濟。如法皇。束手無爲。猶恐不免也。然而輕擧妄動。不恤人言。驟犯強臣。動輒資其强。而損我威。數失信於天下。惠帝無此自用也。蓋漢靈獻。唐代・德・昭・宣之類耳。然國朝祖宗德澤紀綱。在天下者未亡。有異於漢唐之季者。假使如後三條之主。出此之時。而輔以通變明機之士。未必無濟危之策也。處保元之時。不濫其罰。不僭其賞。賞武人以勳爵。不假權柄。而自克自治。清其根本以臨之。可以靖義朝矣。可以不養成清盛矣。至平治而後。清盛得權。則勢不復可奈何矣。然及其專恣極。諸源乘之。則其勢益變。而有可處焉者。何歟。彼皆讎平氏。非

怨朝廷也。朝廷之利在於竝存之。以使相猜制。則其勢不暇及於我。我可以徐處之矣。當
壽永之初。賴朝・義仲未有公然相隙。第其功賞。彼莫敢言。可以見焉。當此時。法皇當禮貌
義仲。以陰備賴朝。賴朝不敢專擅也。一無義仲。則賴朝無復所忌於天下。乃欲倚無地無
兵之義經以抗之。何不初用之於義仲乎。曰。義仲强暴。制之猶不可。曷可倚乎。曰。義仲雖
强暴。不若賴朝之姦猾。撫之以恩。結之以信。而約束之以法度。可以馴服而爲我爪牙也。
法皇乃甘受賴朝之美言。欲遠借其力。以除目前之逼。是以生嫌隙。速淩暴耳。及受其淩。
乃宜。許討賴朝。晚矣。及義仲與平氏共亡矣。而許義經討賴朝。則尤爲晚矣。賴朝既無所
忌於天下。而欲發其自利之請。未敢也。及聞此宣旨。蓋心竊喜曰。是可以持朝廷之短長
矣。於是。訴所欲訴。請所欲請。以罔收天下之利。朝廷不能違。大勢一變。而大權不復可收。
可勝歎哉。曰。處諸源則然矣。何以處平氏。曰。亦存之而已。喻以奉還駕及神器。則宥其死。
給予一州。曰。源平深讎。皆不肯聽也。曰。賴朝初志。在竊據東隅。故不遣一兵西行。又有願
源平竝仕之奏。義仲已取京師。得賜平氏邑。不欲復西伐。而欲與之連和。皆以其竝立。勢
已不得不然也。何不聽之有。源氏且然。平氏以摧頹之餘。恇悸涉日。苟聞沛恩之命。無不

聽之理也。特以朝廷助源氏讎己。又別立主也。故絕望自棄耳。夫安德雖平氏出。在法皇爲親孫。何必別立主。別立主者。利於源氏。不利於朝廷。是亦處置失當之大者也。雖然。並存者。必宜有以漸收其權。而制其爭。不然。是樹兵也。是非法皇與當時公卿之所能辨。而賴朝智略絕世。能定禍亂。併事權。亦時運之致於此。非人力所能歟。

秋七月。詔遣使。就拜正二位源賴朝。爲征夷大將軍。

四年。癸丑夏四月。大將軍賴朝獵那須野。　五月。又獵富士野。　秋八月。大將軍賴朝殺其弟三河守範賴。富士野之獵。伊藤祐泰二子祐成・時致。夜入工藤祐經營。斫殺。復父仇也。遂犯賴朝幕。謂祖父祐親仇也。騈被殺。事聞。鎌倉訛傳。賴朝遭害。政子驚泣。範賴時留守。慰安之曰。範賴在焉。賴朝聞而惡之。終殺之。

五年。甲寅秋八月。大將軍賴朝殺其族安田義定。

六年。乙卯春三月。大將軍賴朝入朝。遂奉車駕。慶東大寺。　秋七月。東還。　平賀義信爲武藏地頭。有政績。賴朝加褒賞。且榜其廳。凡任民牧者。當以義信爲法。義信。源義光孫也。

賴襄曰。國之大政。二而已矣。曰兵。曰食。二者。國之所以盛衰也。有兵無食。無以養之。而食

之所以生者。在於民。故民爲本。食次之、兵又次之。我邦先王常自儉。以撫其民。撫其民。所以豐其食。其食豐。故其兵强。以威制海外諸國。是王政所以興隆。禮文所以備具也。其後徒事禮文。而遺其本。流爲奢靡。克剝其民。而委兵於將吏。將吏自以其計策。蓄糧餉養士卒。而朝廷不省。是王政所以衰頽。而武門代之興也。於是。置守護・地頭於諸國。以掌兵。每段課五升。以調食。而天下一變矣。世知源頼朝之雄略蓋世能創此業。而不知所以能成此業。自有其本也。觀其奏。蠲所領九國逋租。因請諸國准之。又奏。兵興以來。民不暇農。關東疲弊殊甚。自今量民力。收賦税。以平賀義信爲武藏地頭。有惠政。因旌之。以風凡任民牧者。其定陸奥。令凡政皆因秀衡舊規。勿有所變更。亦慮擾民也。嗚呼。當是時。天下方貴驍虓之將。喜進取之功而已。而頼朝獨孳孳以養民爲務。可謂知爲政之本矣。唯然。是以能歲歲出師。一擧殪義仲。再擧殪宗盛。三擧夷泰衡。四海之內。一草一木。無不靡從其風。以遂刱建無前之大業。其本在於此。曰。在於此而已乎。曰。未也。頼朝嘗見侍臣衣服麗都。曰。汝不見千葉常胤・土肥實平等所自奉乎。彼其志在多養兵卒。爲國建功。汝小臣。乃敢爾。命取刀。親截其裔。夫頼朝戒小臣。引常胤・實平。己之所領。雖什百倍常胤・實平。而不敢

奢侈。可知矣。是其所以當多事之日。能矯逋租。養民力。而不患不足也。賴家・實朝。坐享其業。蓋不能然。能然者乃北條氏。所以盛衰相懸也。

七年。丙辰冬十一月。關白兼實罷。前攝政基通爲關白。

九年。戊午春正月。立皇子爲仁。爲皇太子。卽日禪位。時帝年猶弱。太子幼冲。諮之賴朝。賴朝固陳不可。而關白基通等贊成之。時帝生四歲。政在於上皇。大納言源通親。以外祖用事。初上皇之在位也。藤原兼實進其女。爲中宮。無子。乃計納賴朝女。會其罷關白。議未成。而其女死。猶有少女。欲納之。而通親養女有所生。卽立之。賴朝聞之不懌。欲入京議之。不及而薨。

土御門天皇

諱爲仁。後鳥羽第一子。母承明門院。源氏。內大臣通親養女。在位十三年。改元五。曰。正治。建仁。元久。建永。承元。禪位皇太弟。後二十一年。崩于阿波。壽三十七。火葬。藏骨京師西山法華堂。

三月。天皇卽位于太政官廳。尊先帝。曰太上天皇。決政院中。關白基通攝政。

正治元年。己未春正月。征夷大將軍源賴朝薨。敕以長子賴家。爲左近衞權中將。總諸國守護・地頭。如故。

頼襄曰。源頼朝深知天下之形勢。其經營天下。備有次第。大要不自用而用人也。其起於東國。躬被堅執鋭。與敵血戰者。石橋一役而已。親與平氏對軍者。富士川一次而已。已而入據鎌倉。用八州豪傑。以自衛。如曹操據兗州。高歡據晉陽。蓄力養威。以觀天下之釁。未嘗輕用其兵也。及源義仲起。則一自將大兵臨之。徙其跡於北陸。何哉。八州雖形勝之地。不得甲信。則不成國。後世伊勢氏擅八州。而不得一西其鋒者。甲信爲人所塞也。頼朝蓋知之矣。已得信濃。出兵中原易也。而不肯出。使義仲先試之。義仲百戰。挫平氏之鋒。而其鋒亦少鈍矣。於是。頼朝徐起以制其後。故用力約。而收功倍。是義仲亦爲頼朝所用。猶其用範頼・義經也。世傳。範頼不若義經之精悍。而頼朝同視之。又惡彼愛此。獨遣此先往。及其久無功。乃命於彼。不知醫之善治疾者。既用硝黄。又用朮苓。義經硝黄也。不可獨用。必配範頼之朮苓。然後可以奏效。一谷是也。捕鹿者。掎而角之。掎者不緩。鹿將覺而先遁也。故先遣範頼掎之。而後以義經角之。以獲平氏。屋島・壇浦是也。如人有左右手。右手尤可用也。而無左手。不能成右手之功。故頼朝善用人。而已收其功者也。其用範頼・義經也。猶向之用義仲也。是以既收其功矣。則殺所用者。無足怪者。當東南未定。置奥羽於度外。如

趙匡胤之後大原。知其不可不大用力也。其既定矣。於是乎。再自將大兵以治之。然亦非不用人也。初令泰衡殺義經。已殺義經。則以其不早殺。爲泰衡之罪。以起兵端。是互用泰衡與義經。以取奥羽也。豈翅此哉。用藤原兼實與十議奏。以制朝廷。用六十六人追捕使。以制七道。其終始用人。以經營天下。可不謂巧歟。然而不察北條氏之袖手而簒其成功。其巧猾猜忍。自剪手足。足以資其簒耳。則是己亦爲北條氏之所用。而不自知也。可不哀哉。

初梶原景時嬖於賴朝。及賴家立。又有寵。賴朝嘗愛少子千幡。屬結城朝光。朝光悲賴朝薨。曰。忠臣不事二君。吾將爲僧。景時譖之賴家。誣其謀廢立。或告之朝光。朝光乃與和田義盛等六十餘人連署。罪狀景時。因大江廣元。請誅之。廣元留之不下。義盛促之。上賴家。賴家下令。逐景時。景時西奔。明年。至駿河。爲州人所殺。先是。熊谷直實有訴。爲景時所誣。削髮。西奔京師爲僧。佐佐木高綱累功爲備前安藝等守護。亦託事削髮。隱高野山。

二年。（庚申）夏四月。立皇弟守成親王。爲皇太弟。內大臣源通親爲傅。

建仁元年。（辛酉）春正月。前越後守城長茂。作亂京師。初長茂爲義仲所敗。奔會津。降賴朝。及賴

家立。有異圖。聚兵犯上皇宮。請討賴家。宣旨不許。奔匿吉野。鎌倉部將小山朝政鎮京師。索獲斬之。長茂從子資盛。據越後鳥坂。賴家遣佐佐木盛綱。討平之。

二年。壬戌秋七月。詔以賴家爲征夷大將軍。敍從二位。時年二十。　冬十月。內大臣源通親薨。

十二月。基通罷攝政。左大臣藤原良經代之。良經。兼實子也。

三年。癸亥秋八月。鎌倉執政北條時政。殺大將軍源賴家子一幡。及其舅比企能員。遂幽賴家于伊豆。立賴家弟千幡。九月。詔賜千幡名實朝。就拜爲征夷大將軍。時甫十二歲。初賴家有疾。頗危篤。其子一幡。能員女所生也。時政議繼嗣。割關東二十八國守護職。傳於千幡。能員以爲不可。使其女密告之賴家。賴家召能員。謀討北條氏。政子在屏後。聞之。書報時政。時政紿能員招致。擊殺之。比企氏子弟。挾一幡。據小御所。遣兵。攻鏖之。賴家病間。聞之怒。令和田義盛討時政。義盛告之時政。故至於此。

賴襄曰。經營天下。建立大業者。誰不欲使其子孫長守之哉。於是。爲除其所忌者。以託之所信者。人人皆然。雖然。當信者。未必可託也。當忌者。未必可除也。竝存當信當忌者。以使相制。是可謂之善慮子孫已。源賴朝藉父祖餘威。爲其舊部曲所擁戴。終得總海內之兵

權。故忌其同姓。恐其亦爲吾所爲也。如弟義經之威名著軍中。最其所忌也。故決意除之。不必待梶原景時之讒而然也。而後託其子於妻父。以爲。在彼亦爲外孫。吾雖死。當代吾以扶植之。是眞當信當倚者也。嗚呼。亦何圖子孫之死其所信倚者手哉。大凡信外戚而忌骨肉。習俗之私見也。夫賴家嬖小臣。至橫恣無忌。以失士心。固也。然吾觀其所嬖者。概皆比企氏支族也。得非亦視父所爲。專親信戚黨乎。於是。子之戚與父之戚交鬪。而源氏之業墮矣。當是之際。如大江廣元。中立自全。莫足怪焉。所怪者。畠山重忠稱忠鯁不倚者。亦助北條伐比企。殺其君之子而不恤。何哉。無他。亦助戚黨焉爾。已而重忠終斃於北條。與源氏無以異。甚矣。私見之難免也。賴朝何不近鑒之王家乎。王家所以衰者。非由於專信倚外家耶。王家古制。以親王視政。王族賜姓者。每與藤原氏參列相府。是先王之遠慮深識也。守而不變。則何至於如彼耶。今使賴朝亦能存範賴・義經等。各以爲數國地頭。雖不列幕府評定。每有大議。必參焉。則北條氏有所忌憚。而不敢專也。唯其偏信外戚。無復鈐制之者。是以一瞑而禍作。中外環視。而莫敢齟齬。故曰。毋若並存所信所忌也。夫人不可無所忌也。吾獨任吾所信者。吾所信者。獨行胸臆。何以禁之。故使其亦有所忌。夫吾所

信者。實非吾所當信也。吾所忌者。實非吾所當忌也。吾所忌者。吾所信者之所忌也。竝存之。天下相忌相憚。而子孫得以守業於其間。非脫習俗之見。而深見天下之機者。安足與論於此。

元久元年。甲子夏六月。北條時政殺畠山重忠。初重忠子重保在京師。與前武藏守源朝雅因飲酒相訴。朝雅與重忠。皆時政女壻。而朝雅所娶。其後妻牧氏出。故牧氏怒。時政令子義時給致重忠。殺之於途。　秋閏七月。北條時政謀廢大將軍實朝。立源朝雅。事覺。令時政削髮。幷其妻牧氏。放於伊豆。以時政子義時代執政。殺朝雅。

北條時政殺比企能員。又幽殺將軍賴家。已而惑於後妻。殺畠山重忠。又謀廢將軍實朝。立源朝雅。事發。放於伊豆。而子義時代執權焉。賴襄曰。時政之姦猾。無論可也。而視其情。有不可曉者。夫其視賴家之病篤。欲分其業傳其子與弟者。慮比企氏之撓己權似也。及能員不是其議。而告之賴家。事已迫矣。故殺能員。幽賴家。亦不得不然也。至於殺之則甚矣。雖然。猶曰以一幡故懼其讎己也。至謀廢實朝立朝雅。何哉。兩外孫也。已殺其一。又廢其一。而欲與之於壻。豈曰生乎彼者。前妻女也。故不愛而殺之廢之。配於此者。後妻女也。

故愛而立之乎。重忠亦非其壻乎。而殺之何哉。兩女夫也。一殺之。一欲立之。亦曰所配有前後妻出之異乎。何其用情之迂繆也。且使終能立朝雅乎。則往日之賴朝依然也。何若存實朝。已據外祖之重乎。豈其老悖。智慮顚倒乎。抑姦之極。反歸於愚乎。蓋時政初擁賴朝舉事。非爲賴朝計也。欲借之以樹其私也。唯私也。故愛憎變焉。賴朝之威壓已。雖既沒。其子臣視己。故欲援朝雅以市新恩乎。彼雖長君。與賴朝父子。勢當懸絕也。重忠者。不從之者也。故先除之乎。或曰。此出於義時之爲也。時政垂七十。猶不舍權。而義時已強矣。故欲速也。其曰父惑後母者。誣同母女兄之說也。其曰欲立朝雅者。怵甥也。

二年。乙丑春正月。天皇加元服于紫宸殿。

建永元年。丙寅春三月。盜殺攝政藤原良經。初大納言藤原宗賴。其妻。承明門院之母之妹也。宗賴因是有寵於上皇。宗賴沒。再嫁太政大臣賴實。賴實又有寵。及帝元服。良經女將入內。上皇止之。納賴實女。已而良經被殺。以左大臣藤原家實爲攝政。尋改攝政爲關白。

承元元年。丁卯夏四月。前關白藤原兼實薨。

二年。戊辰春。勅禁專修念佛宗。配僧源空於土佐。

四年。午庚冬十月。天皇禪位於皇太弟守成。初上皇深愛守成。故使帝早遜位。自是。稱上皇曰本院。

日本政記卷之十終

日本政記　卷之十一

賴襄子成　著

順德天皇

諱守成。後鳥羽第三子。母修明門院。藤原氏。左大臣範季女。在位十一年。改元三。曰。建曆。建保。承久。傳位皇太子。後二十一年。崩于佐渡。壽四十六。

十二月。天皇卽位于太政官廳。時年十四。尊先帝曰太上天皇。關白藤原家實攝政。本院決政院中。

建曆元年辛未春。立女御藤原立子爲中宮。故攝政良經女。

建保元年癸酉夏五月。信濃人泉親衡。奉故大將軍賴家少子千壽起兵。討北條氏。北條義時遣兵擊敗之。千壽逃之。鎌倉部將和田義盛起兵。攻義時及大江廣元。不克。死。

三年甲戌冬。義盛遺臣。奉千壽擧兵。廣元部兵。獲殺之。

賴襄曰。和田義盛之擧事。非反實朝也。亦非忠實朝也。特疾北條義時。而欲奪其權。故謀

取實朝以治之。而不克也。或曰。義盛受實朝密旨。以圖義時。反爲其所激而怒。輕擧以敗。故實朝嘗眷顧之。又寵其孫朝盛。及事作。將士疑所屬。可以見焉。吾謂。激而怒則然。曰受密旨。則不然。夫義盛視利。不知義者也。初要賴朝於困窮。預求爲侍所別當。其人如此。故一幡之禍。賴家命之討北條氏。乃先告之時政。以誤賴家。何敢受實朝旨。以圖義時哉。實朝亦不至察義時之姦。引義盛自援也。其頗眷之者。以其更事。欲聽談說耳。寵朝盛者。愛善歌耳。觀其戒朝盛。勿同宗族亡。使誠有密謀。何以顯之言迹。如此乎。且義盛亦何以擧族嗷訴乎。凡圖是人者。是人唾我罵我。我不肯怒也。怒者。非圖之也。使之怒者。乃圖之也。吾故曰。義時與實朝圖義盛。夫此事何由而起哉。泉親衡擁千壽起兵。千壽。故賴家子。是實朝所大忌惡也。而義盛子姪黨焉。故義時乘其畏。而讒構之。曰。欲爲賴家復仇。不然。知和田氏之爲强宗。公然縛其姪。以面辱之。夫唾人罵人而不顧者。必有所恃也。義時之爲之。非恃實朝之畏忌之哉。將士疑所屬。則以實朝不在幕府。故以其手書。令之而定矣。嗟夫。義盛雖不能忠實朝。而能疾義時者也。義盛亡。則義時無復所憚。而實朝勢孤。是以遂斃於義時。而其斃之。則使賴家子。乃其所以讒構義盛焉。而自用之也。

三年。乙亥。北條時政患瘍卒。年七十八。

六年。戊寅。冬。立皇子懷成親王。爲皇太子。

承久元年。己卯。春正月。初賴家之及難。有幼子。曰公曉。避在京師。及長。義時以政子命。迎之。補鶴岡別當。公曉常欲殺實朝及義時。以復父仇。而未得閒。實朝爲右大臣。二十七日夜。行拜賀禮於鶴岡。大江廣元勸用晝日。且衷甲自備。不聽。義時捧劍從。及祠門。稱病作。授劍於源仲章而還。禮畢下階。公曉自暗中斫殺實朝及仲章。而逃匿。其弟子駒若。三浦義村子也。因遣使。謂義村曰。吾當代爲將軍。子爲我計之。義村答曰。將以兵奉迎。而急告義時。義時稱政子命。使趣殺之。　秋七月。義時等奏請。以藤原賴經。爲鎌倉主。義時執權。中納言能保。賴朝妹夫也。其女適攝政良經。良經生道家。道家生賴經。初義時欲得本院皇子爲主。本院不許。曰。是樹二主也。乃請賴經。以有與源氏連親也。

賴襄曰。北條義時之弑其君也。己不下手也。假手於其君之從子。而後誅從子。脫賊名。而取討賊之名。以奪君國。人莫敢議。自古弑君之陰狡巧黠。未有如義時者也。然亦有所學也。誰學。曰。學其父也。其父爲之。而不中。其子再爲之而中。術有至與未至也。初時政縱其

女奔賴朝。而爲不知者。欲居賴朝爲奇貨也。終擁之擧事。及事成。欲速其死立外孫。而已專其家也。何以知之。富士野之獵。曾我二孤復其父仇。可以已矣。又犯大將軍幕。何哉。曰。遂復祖父仇也。夫以十萬貔貅之衞。棨戟之環列。而敢欲突入剸刃其腹。豈無大援內爲之主者而然哉。時政嘗眷二孤。親冠其少者。至與其名之偏名之。蓋指教其復父仇之使。而至祖父仇。則陰使人嗾之也。當時至事聞鎌倉。使政子驚泣。則其危可知矣。幸而免耳。故曰。爲之不中也。義時與曾我之子。結爲兄弟。蓋知其故矣。故學焉。蓋亦使人嗾公曉曰。今將軍者。子父仇也。子伺其拜賀。刺而斃之。又賺之曰。苟能斃今將軍。則子者。故將軍之子也。可以代之。觀公曉成事。報三浦義村。使迎己。而義村告之義時。趣命殺之。滅其口也。故曰。再爲之而中也。而義村與其謀者也。大江廣元亦知其謀。而爲不知者也。史稱。廣元與義時議。諫實朝驟進官位。必嬰禍殃。又勸實朝及未昏行禮。衷甲而往。不聽。皆於事後。飾言於衆。以掩己知其謀耳。豈非欲掩益顯者哉。夫以義時之狡黠如此。而又有多智之士爲之腹心者。一時老臣宿將。蓋頗察知其故。而蹤跡詭祕。莫能見端倪。故以政子之智。而終身不悟也。況實朝之紈袴乳臭。日在其機械。而不省。曷足怪耶。或稱。實朝亦知禍之

迫而不可解免。欲赴宋遁之。命工造船。不可用而止。及拜賀之夕。將出。作歌爲訣。吾以爲。皆戲也。審然。何有不告政子。政子聞之。必大會諸將士。窮詰義時。卽座囚之。而特釋其族。則不終朝而事定。實朝雖優柔。而在政子。辨之不難。且愛其子。與庇其弟。其情孰重。故曰。不悟也。猶不悟其父之危其夫也。然則北條氏之蓄此謀。數十年。今而發之中矣。而不自代立。何哉。曰。使人仆之。故亦使人代立焉。苟己代立。世將曰己欲立而仆之也。故不敢立。而引二歲嬰兒。立之。曰。是亦與故君連姻者也。可以立此位矣。其實猶立木偶也。故稍知覺運動則去之。更立不知覺運動者代之。是北條氏本謀。所以貽於九世者也。

三年。辛巳夏四月。天皇禪位於皇太子。上尊號太上天皇。稱曰新院。上皇曰中院。以別於本院。

九條廢帝

諱懷成。順德第一子。母東一條院藤原氏。攝政良經女。在位七十餘日。爲北條義時所廢。後十三年。崩。壽十七。

天皇卽位。甫四歲。太政大臣道家攝政。本院決政院中。　初本院常憤源氏撓朝權。有圖鎌倉之志。置院西面士。親武事。至手造刀劍。及實朝遭害。謂威柄可復。而關東權勢自如。意益不平。幸熊野。見仁科盛遠攜兒。伏謁道傍。本院擢爲西面。義時稱右大將法。奪其在東食邑。

朝旨還與之。不奉敕。會三浦胤義宿衞京師。以事憾義時。過期不還。本院令親信就與謀。胤義奮曰。臣兄義村力能辨之。本院大喜。決策舉事。五月。託城南流鏑馬。集近畿兵。密發使齎詔。諭義村及關東諸豪。義村告之義時。義時大會諸將士。請政子。隔簾親問。曰。汝等聽院宣。赴京師。佐滅關東乎。抑一心戮力。以全故右大將之業。共保食邑乎。卽時決對。僉同聲答曰。誰肯東向關弓。諸將請保足柄・箱根。大江廣元曰。事久衆心變。不如直西上犯闕也。義時乃遣子泰時・朝時・弟時房。分道西犯。東兵稍稍追從。得十九萬人。而官軍僅一萬七千餘人。分付諸將。守美濃・尾張・越中間。與賊遇。皆敗。時六月。淀河方漲。官軍猶有二萬五千。分守宇治・勢多及淀。撤橋守。射卻賊。賊毀民家。結筏以濟。官軍敗績。藤原朝俊及鏡久綱・仁科盛遠・八田知尙・佐佐木氏綱・經高等。前後皆死之。泰時入京師。有敕曰。此舉皆謀臣所誤。泰時求首謀者。收權中納言藤原光親等六人。押送鎌倉。廣元引文治故事。盡處斬。斬于道。釋權大納言藤原忠信。流越後。以其與鎌倉有親也。　秋七月。廢天皇。立高倉帝孫茂仁。遷本院于隱岐、新院于佐渡。雅仁親王于但馬。賴仁親王于備前。尋遷中院于土佐。

承久之事。以倍臣放流天子。天地反覆。論者皆曰。後鳥羽上皇之非舉。自取禍敗。北條義

時不得已而犯闕。廢無道之君。以安天下。噫、假使此事克乎。則必曰。王師東伐。強藩伏誅。盛德大業。光前垂後。故彼因成敗論事者。必顚倒天下之是非。不可以不辨。賴襄曰。上皇可謂有志之君矣。雖然。苟有此志。非憂思勤厲。延攬英雄。遵養時晦。觀釁而動。不可庶幾萬一也。乃游宴泄沓。耀區區之膂力。至自鑄刀劍。其所共謀。非嬖寵公卿。則逋逃將校。信其從諛。輕擧妄動。而欲以圖天下之老姦巨猾。難矣。故吾以上皇爲有志而無謀也。如其擧則不非也。此而不擧。坐視王權之日去。放祖宗舊物而不恤可乎。曰。未得其時也。東藩雖乘亂攘權。然既建立此大業。天下莫不畏其威服其恩。而欲以空拳擊滅之。當時已有以此諫之者。是未得其時也。襄又以爲。不然。曰。王師滅東藩。唯此時爲然。所謂觀釁而動。是已。烏謂之未得其時乎。吾特惜未得其謀耳。何哉。夫建此大業者。非源氏乎。天下之所畏源氏之威也。所服。源氏之恩也。北條氏所以專權者。以外戚源氏也。而陰殺其主者。再矣。有心其主者。因事誅鋤之者。數矣。關東將士。皆知其心跡。而莫敢言。其間豈無慷慨憤激。欲起而擊之者哉。特懷其食邑。顧其妻子。危疑相伏。莫能先發耳。當是之時。使朝廷有智謀之士。改其誥旨。不曰滅關東。而曰復源氏。明諭之曰。故源賴朝有勳勞於王家。特命

元帥。統汝將士。襲之子孫。聞。有賊臣。謀篡其業。欺其寡妻。陰斃其孤。而立異姓嬰孩。斷其血食。汝將士世受源氏恩。與之比肩。乃忍。北面事之。今朝廷盡發其姦。徵天下兵。誅之。將更擇源宗。以爲汝主。其守護地頭。賴朝父子所署。盡安堵如故。能先王師。殪彼醜類者。更加醻賞。敢昧向背。旅拒詔命者。同戮勿赦。以此宣布七道。足以竦動諸豪傑。而破北條氏之膽。夫藤原氏王氏之子。非有恩於將士也。猶且有挾以圖北條者。況以源氏令之乎。而甲信兩野之諸源聞之。必人人自負。皆可鼓舞以爲朝廷用。縱使不能輒盪定。何至一敗塗地耶。唯其以滅關東爲號。關東滅。則將士無生活之地。故義時・泰時得以脅之入犯。而我以烏合之卒。禦之。故曰。未得其謀也。夫二位尼之厲將士。大江・三善之徒之畫籌策。皆稱源氏舊業。以扶其顚墜爲言。朝廷一同其指向。則此輩勢不得不變爲我徒。十九萬人。可使倒其戈也。曰。如此。北條可滅。源氏不可不復。而王權可收乎。曰。我滅之。我復之。德在於我矣。則權亦在於我。

後堀河天皇

諱茂仁。高倉皇子守貞親王第三子。母藤原氏。中納言基家女。在位十二年。改元六。曰。貞應。元仁。嘉祿。安貞。寬喜。貞永。禪位皇太子。後二年。崩。

壽二十三。葬東山觀音寺。

天皇踐祚於閑院。甫十歲。　八月。尊守貞親王。曰太上法皇。所生藤原氏。曰北白河院。　冬十二月。天皇卽位于太政官廳。前關白家實攝政。　北條泰時・時房鎭六波羅南北兩府。

賴襄曰。北條氏可謂知制天下之術矣。既定承久之難。留將鎭京師。建六波羅兩府。置四十八所篝卒。隸焉。名爲護衞宮城。其實鎭壓之。猶大水之後。旣塞其決溢之口。又植石柱木樁。以防後患也。於是。遠近屛息。莫敢生心。四方望以倚安焉。而其威所被。遠及關西諸道。莫不奔赴聽命。譬之人。鎌倉胸腹也。兩府臂也。而諸道指也。胸腹以使兩臂。兩臂以使衆指。關節脈理。運掉自如。所以能制天下也。彼其懲承久之亂。豈不欲直移幕府鎭京師哉。而有不可者焉。何則關東者。其根本也。不可搖也。其巢穴也。不可離也。離其巢穴。搖其根本。而遠居京師。勢如棲泊寄託。烏能制天下。則異日之足利氏是已。故北條氏不爲也。泰時之始置鎭也。不以他將帥充之。而自當之。與叔父時房對守南北。重其任如此。及泰時歸襄執權。遇有內變。輒遣其子與從弟。以鎭兩府。人勸其留以自衞。曰。鎌倉可虞也。泰時曰。不若京師之可虞也。可知其重之矣。蓋北條氏以足利氏所以處鎌倉者。以處京師

也。而足利氏獨任之。北條氏分任之。足利氏襲封之。北條氏更代之。故足利氏不得鎌倉之力。而常患其難制。北條氏能制兩府。得兩府之力。以制天下。可以爲後世之法。凡鎭兩府者。任久乃召還執政。取其諳練京畿・西國事。而當其在鎭。不必汲汲求遷。所隷兵士。又不徒備文具也。觀於元弘之際。亦足驗焉。又可以爲後世之法。

貞應元年。壬午夏四月。中院自土佐遷阿波。　秋八月。內大臣藤原公經。超拜爲太政大臣。其子中納言實氏兼右大將。

元仁元年。甲申夏。北條義時死。子泰時嗣爲執權。北條時氏・時盛。代鎭兩府。藤原光宗有罪。收其邑。放於信濃。

嘉祿元年。乙酉夏六月。前陸奧守大膳大夫征夷府政所別當大江廣元卒。　秋七月。故征夷大將軍賴朝配北條氏薨。

賴襄曰。抱濟天下之才。而不之用。士之所以爲不幸也。雖然。用之而不得其當。不幸有更甚焉。不若不用之爲愈也。夫吾才不可自用也。則必求天下有力之人。借其力。以濟天下。是之謂用人以成我事。以成我事。而不暇擇其人之善惡。得善人可矣。或遇惡人。勢不可

中止。則其所成。無往不惡。惡之大小。隨才之高下。才下則其惡小。才高則其惡大。以蓋世之才。濟滔天之惡。不爲天下之戮者鮮矣。吾於大江廣元。見之。保平以還。天下大亂。廣元爲源頼朝所收。進其計畫。以致平定。世以爲頼朝之用廣元。吾以爲廣元之用頼朝也。承久之役。北條泰時由廣元之策。以靖其難。亦廣元之用泰時也。夫頼朝之擧事。不過欲撫父祖之舊。據有一方。而其下皆粗猛椎朴。知效力戰鬪而已。及廣元持大計。往而敎之。始說而從之。北條氏得京師檄。欲退守八州。非廣元決策。天下之亂。何所底止。非廣元用此輩而何乎。蓋廣元之才。足以濟天下。而不爲朝廷所知也。則不得不借關東之力以展之。苟借其力以濟天下。吾事成矣。彼源氏・北條氏。一起一仆。於我何有哉。是以頼家失行。而不肯諫。實朝陷禍。而不肯救。時政・義時之謀篡竊。而不肯齟齬。泛然中立。自免於禍。世不原其志所在。而咎其負於源氏過矣。吾獨惜其所用以展其才者。非其人也。廣元獨非王朝世臣乎。莫己知則斯已。急於借人之力。而不知其助盜賊也。微廣元。頼朝亦一桀黠將帥而止耳。何至坐攘王權如此哉。承久之役。流竄帝王。敢行悖逆。亦非泰時輩所能辨。待廣元附會故例。處分裁決。然後奉而行之爾。夫業已用是人。以成吾事。是人之敗。敗將及

已。故不能不竭力扶之。勢之必至。無足怪者。而其罪遠出源氏・北條氏之上。廣元蓋悔而不及也。可不惜耶。抑吾又有為廣元惜焉者。管仲用小白。使之扶周。王猛用符堅。使之無侵晉。廣元之才。足以用頼朝・泰時矣。則所以駕馭箝制之。使不能肆其噬搏。以陰報於王家者。豈為無計哉。嗚呼。豈為無計哉。

二年。丙戌春正月。以藤原頼經。為征夷大將軍。

寛喜三年。辛卯冬十月。中院土御門崩于阿波。　葬土御門天皇。　立皇子秀仁親王。為皇太子。

貞永元年。壬辰北條泰時頒式目五十條。　冬十月。天皇禪位於皇太子。

四條天皇

諱秀仁。後堀河子。母藻璧門院。藤原氏。攝政道家女。在位十一年。改元六。曰天福。文暦。嘉禎。暦仁。延應。仁治。崩。壽十二。葬泉涌寺。

十二月。天皇即位于太政官廳。甫二歲。尊先帝。曰太上天皇。關白左大臣敎實攝政。敎實與將軍頼經。皆道家子。道家又以帝外祖。威權無比。

文暦元年。甲午夏五月。廢帝崩。　秋八月。太上天皇崩。　葬後堀河天皇。

嘉禎元年。乙未春。攝政敎實罷尋薨。九條祖以前關白道家攝政。

三年。（丁酉）春。道家罷。以左大臣藤原兼經攝政。

延應元年。（己亥）春二月。本院崩于隱岐。（後鳥羽）葬後鳥羽天皇。

仁治二年。（辛丑）春。天皇加元服。

三年。（壬寅）春正月。天皇崩。帝嬉戲無度。塗滑石宮廊。見宮女健倒爲咲樂。誤自仆傷體。遂不起。葬四條天皇。

後嵯峨天皇

諱邦仁。土御門第二子。母贈皇太后源氏。贈左大臣通宗女。在位五年。改元一。曰寛元。禪位皇太子。後二十六年崩。壽五十三。火葬。地闕。

三月。天皇卽位于太政官廳。初土御門之南遷。帝生二歲。託之外家大納言源通方。通方既薨。家人疎帝。帝徙依皇祖母承明門院。欲爲僧。門院止之。及四條帝崩無嗣。前攝政道家將立順德皇子忠成王。而泰時遣安達義景立帝。義景途還。問有佐渡院皇子立則何爲。曰廢之。遂立帝。　夏六月。北條泰時死。孫經時嗣爲執權。　秋九月。新院崩于佐渡。（順德）

寛元元年。（癸卯）秋八月。立皇子久仁親王爲皇太子。

二年。（甲辰）夏四月。北條經時廢大將軍賴經。立其子賴嗣。請襲職。賴經年二十六。賴嗣甫六歲。

四年。丙午春正月。天皇禪位於皇太子。

後深草天皇

諱久仁。後嵯峨第三子。母大宮院。藤原氏。太政大臣實氏女。在位四年。改元五。曰。寶治。建長。康元。正嘉。正元。禪位皇太弟。後四十五年。崩。壽六十二。葬法華堂。

三月。天皇卽位于太政官廳。甫四歲。關白藤原實經攝政。尊先帝曰太上天皇。聽政院中。夏閏四月。北條經時卒。弟時賴爲執權。　秋七月。時賴流北條光時於伊豆。送還賴經於京師。

寶治元年。丁未春。實經罷。以前關白兼經攝政。　夏六月。北條時賴攻殺三浦泰村・光村等。滅三浦氏。

建長四年。壬子初。前大將軍賴經。謀討北條氏。不成。春二月。北條時賴廢大將軍賴嗣。送還京師。是月。前關白道家薨。道家。賴經父也。三浦泰村之死也。其弟光村謂之曰。嚮使從關白密旨。早決事。何有今日乎。北條氏聞之。又有賴經之事。故廢賴嗣。關白之薨。世稱其不良死云。

三月。立宗尊親王。爲鎌倉主。　夏四月。詔。拜親王爲征夷大將軍。宗尊。上皇皇子。　冬十月。攝政兼經罷。以左大臣藤原兼平攝政。

康元元年。丙辰冬十一月。北條時賴有疾。以子時宗猶幼。令族長時代爲執權。時賴聽決大事。

正嘉元年。丁巳秋八月。立皇弟恒仁親王。爲皇太弟。

正元元年。己未冬十一月。天皇禪位於皇太弟。初帝多病。上皇聽政。及太弟生。促帝遜位。

龜山天皇

諱恒仁。後深草同母弟。在位十五年。改元三。曰。文應。弘長。文永。禪位皇太子。後三十一年。崩。壽五十七。葬龜山山上。

十二月。天皇卽位于太政官廳。年十一。關白兼平攝政。尊先帝。曰太上天皇。前太上天皇聽政院中。

弘長三年。癸亥冬十一月。北條時賴卒。

文永元年。甲子秋七月。北條長時罷。八月。北條政村代執權。　冬十月。前太上天皇薙髮。稱曰法皇。

三年。丙寅夏六月。北條時宗廢大將軍宗尊親王。送還京師。立其子惟康。　秋七月。詔。以惟康爲征夷大將軍。甫三歲。

五年。戊辰春二月。元主忽必烈使來。高麗人爲導。朝廷下大將軍府。府議以書辭無禮。卻不受。

三月。北條時宗執權。政村爲副。　秋。立世仁親王。爲皇太子。
六年。己巳春。元使復來對馬。對馬守逐還之。虜島人塔二郎・彌三郎去。秋。高麗送還二人。
八年。辛未秋九月。元遣使者趙良弼。至太宰府。府索其書。答曰。當致王都。以寫本示之。府致之鎌倉。欲必得報書。以十一月爲期。猶不得答。將以兵問之。朝議欲答書。草示鎌倉。時宗議懼兵答書不可。奏止答書。令太宰府移牒逐還良弼。
九年。壬申春二月。法皇崩。後嵯峨法皇在院。聽政二十六年。　葬後嵯峨天皇。
十一年。甲戌春正月。天皇禪位於皇太子。

後宇多天皇

諱世仁。龜山長子。母京極院。藤原氏。左大臣實雄女。在位十四年。改元二。曰。建治。弘安。禪位皇太子。後十七年。崩。壽五十八。葬蓮華峯寺。

三月。天皇卽位于太政官廳。甫八歲。關白藤原忠家攝政。尊先帝。曰太上天皇。聽政院中。
夏六月。忠家罷。以左大臣藤原家經攝政。　冬十月。元人以兵三萬來攻對馬。守護代宗資國戰死之。遂攻壹岐。守護代平景隆戰死之。虜悉殺二島男子。虜女子。繩穿掌繫船外。進侵沿海諸邑。燒箱崎祠。寇太宰府。府兵力戰防之。少貳景資射殺賊將劉復亨。虜軍夜逃。

建治元年。乙亥夏四月。元遣使者杜世忠等。與高麗人來講和。五月。致之鎌倉。斬之。命太宰府及緣海諸州。修守備。罷京師大番兵。遣還鎭西。　冬十月。攝政家經罷。以前關白兼平攝政。十一月。立熙仁親王。爲皇太子。　是月。時宗以北條實政。爲九州探題。

弘安二年。己卯夏六月。元將夏貴・范文虎等來。遣部將周福・欒忠・通事陳光等。至太宰府。猶以和議爲言。時宗令斬周福等於博多。　冬十月。關東將士至鎭西。　是歲。元滅宋。

四年。辛巳夏五月。元大擧入寇。以高麗人爲前導。蔽海而至。我兵拒之壹岐・對馬。不利。益徵兵諸道。會太宰府。廷議。二上皇宜避鎌倉。召東兵守京師。而未果。龜山上皇尤深爲憂。親祈石清水。奉手書於伊勢大廟。祈以身代國難。六月。虜兵據五龍山。薄平壺。北條實政督兵。壓岸而陣。下視虜船。部將草野七郎夜襲燒虜船。殺獲十餘人。虜悉聚其船。鐵鎖聯之。設弩。河野通有以輕舸進。矢中左肩。遂登虜艦。殺數十人。獲一虜將返。我兵繼進力戰。各有獲。虜退保鷹島。范文虎懼先逃。秋閏七月。大風起。虜艦敗。虜爭上陸。我兵擊殲之。

國朝自置太宰府以還。非無外寇。然止於三韓小醜。未有如元寇之可患也。而防而卻之。使彼懲而不復窺者。北條時宗之力也。世俗之稱此役者曰。賴宗廟之靈。颶風大作。不血

刃而克。是不足言也。稍有聞識者。乃咎時宗武人無謀慮。殺元使者。所以來此寇。賴襄曰。
殺使者來。不殺亦來。殺之速其來耳。何則忽必烈志在呑滅我邦。以其所以滅趙宋者。來
擬於我。先遣使來書。因我不受。乃用兵。剪屠慘酷。以示其威。期我懼而服也。又遣使、猶以
和議爲言。使我聽之。則我爲趙宋矣。稱藩納幣。一不如其意。將又加兵焉。彼既得我要領。
乘我罷敝。大擧而來。其勢便於攻宋。宋阻一江。我環大海。宜若易守也。其實有難焉者。彼
攻宋自一面來。攻我自四面來。扼吾要喉。斷吾糧道。杜絶吾兵之策應。其禍豈可勝言哉。
而當時廷議。必如宋之君臣。苟免近禍。而不恤其後。兵民之心。亦如宋之將士。不敢決於
防禦。如時宗。則雖未知宋事。而能慮及此也。以爲。不若早絶之。以速其來之易防也。是以
斬其使。以示不懼。以報彼前日之寇辱。而決我後日之守心。誰謂之無謀慮乎。吾以爲。宗
廟之靈。誘時宗之衷。以決此計。不在颶風也。是故時宗之所以處元防元。不唯濟當時。皆
可爲後法。曰。所以處元則然。所以防元如何。襄曰。節用蓄力。不內自擾敝。以逸待勞。因其
方面之兵食。而遣一將令之而已。曰。彼幸自一面來耳。自四面來。則何以防之。襄曰。四面
皆有兵食在。我所令之。襄備論之。使後世萬有一逢如忽必烈者。必以趙宋爲戒。而以時

宗爲法。

七年。甲申夏四月。北條時宗卒。子貞時嗣爲執權。

八年。乙酉冬十一月。貞時攻殺安達泰盛。滅安達氏。泰盛以貞時外祖。爲評定衆。與貞時家宰平頼綱相軋。頼綱譖之於貞時。曰。泰盛子宗景自謂。曾祖景盛。實頼朝子。因有異心。貞時遂攻滅之。頼綱無復忌憚。無何。謀反伏誅。

十年。丁亥冬十月。天皇禪位於皇太子。上尊號太上天皇。自是。帝曰新院。後深草上皇曰本院。龜山上皇曰中院。

伏見天皇

諱煕仁。後深草第二子。母玄輝門院。藤原氏。京極院妹。在位十一年。改元二。曰。正應。永仁。傳位皇太子。後十六年。崩。壽五十三。火葬。祔藏骨後深草法華堂。

正應元年。戊子春三月。天皇卽位于太政官廳。　冬十一月。新院皇子尊治生。

二年。己丑夏四月。立皇子胤仁親王。爲皇太子。　冬十月。北條貞時廢大將軍惟康親王。迎久明親王。爲鎌倉主。詔。以久明親王。爲征夷大將軍。貞時聞惟康有滅北條氏志。遽廢之。倒載

網代輿送還世曰。將軍流於京師。久明。本院第三子。
北條氏之悖逆極矣。承久之事。既所不忍言。敢廢立天子。進退宰輔。易置大將軍。如奕棊然。而其家得傳九世。無天道耶。賴襄曰。有天道故也。天之立君。爲民也。非爲君也。而暗君以爲爲己也。猶君之置相爲民也。非爲相也。而庸相以爲爲己也。吾前聖王。若仁德。若天智。若光仁・桓武・宇多・後三條。則不然。知天之立己爲民也。是以自儉勤以養民。其相臣亦知君之置己爲民也。是以體君之心以養民。養民所以報君。不唯貪官爵而已。貪官爵而已也者。中古以下之相爲然。曰。吾關白也。吾攝政也。以驕天下。而不知攝政・關白之職爲何職也。不唯相爲然也。人主亦然。曰。吾天皇也。以驕天下。而不知天皇之職爲何職也。未得之。以得之爲務。奔競爭攫。喪亡廉恥。已得之。則務奢泰淫佚。以位爲樂。以竭天下之民力。而以爲當然。是以盜賊公行矣。夷虜內犯矣。則曰。是武臣之任耳。非吾所親治也。噫。如此。而欲以長持天職。以託於民上。天豈聽之乎。所謂武臣者。則終身百戰。以除民害。而不能得朝廷官爵。官爵。名也。權利。實也。名出於朝廷。而實出於天。天以其實與源氏。曰。是嘗竭力於民者也。故源氏收天下之實。而朝廷擁其名而已。然其曰右大將・征夷大將軍者。

有其實焉。故朝廷亦從而予其名也。至其子孫。乃貪虛名。以買實禍。又忘其職而樂於驕奢淫佚。所以其權利歸於北條氏。北條氏別立主以嗣源氏之名。而己守其實。唯守其實也。故其世世所務。在於養民。養民。非自儉自勤。不可。如曰吾務盡心於其實云爾。名非吾所敢貪也。是以北條義時雖遷官。猶稱原銜。子孫皆循其遺意。終於相摸守・武藏守。而相摸守・武藏守能易置大將軍。能進退攝政關白。能廢立天子。何哉。天下之實在於此也。天下之實。在於此。而自儉勤以養民。是不有天位而爲天職也。雖不及前聖王・良相之爲。庶幾得其意者。而當時天子與宰輔・將軍。徒擁其名以敵其實。欲收奪其權。而不知天之所右在彼不在此。不然。烏以此悖逆無比賊而得傳九世乎。至於高時。一爲驕奢淫佚。則天誅不旋踵。嗚呼。豈無天道哉。

三年。庚寅春三月。盜夜入禁內。伏誅。盜問宮女上所在。女紿之曰。在南殿。盜赴之。上實在中宮。乃女裝避春日殿。宿衞捕盜。盜上紫宸殿自殺。刻其箭曰。太政大臣爲賴。爲賴稱淺原八郎。甲斐源氏。以兇悍聞。所佩刀。前參議藤原實盛所佩。因收實盛。初後嵯峨上皇。愛龜山。遺命大宮院太后。定其後世永承皇統。付後深草以長講堂領。及後嵯峨崩。後宇多立。龜山上皇

置後院別當。聽政。不使後深草與聞。後深草憤懣。求哀於時宗。時宗乃奏。立伏見。及有爲賴事。世以爲中院所使。中院懼。賜誓書於貞時。事得寢。

永仁六年。戊戌秋七月。天皇禪位於皇太子。

後伏見天皇

諱胤仁。伏見長子。母准三宮。藤原氏。參議經氏女。在位四年。改元一。曰。正安。禪位皇太子。後三十五年。崩。壽四十九。火葬。藏骨深草法華堂。

天皇受禪于富小路殿。年十一。關白藤原兼忠攝政。尊先帝。曰太上天皇。聽政院中。　八月。立邦治親王。爲皇太子。　冬十月。天皇卽位于太政官廳。　十二月。兼忠罷。以左大臣藤原兼基攝政。

正安三年。辛丑春正月。天皇禪位於皇太子。太子。後宇多長子。時年十七。長於帝三歲。尊帝。曰太上天皇。時本・中・新三院。幷前後伏見。共五上皇。上皇之多。自古所未有也。

後二條天皇

諱邦治。後宇多長子。母西華門院。源氏。內大臣具守女。在位七年。改元三。曰。乾元。嘉元。德治。崩。壽二十四。葬北白河陵。

二月。天皇卽位于太政官廳。新院聽政院中。　秋八月。立富仁親王。爲皇太子。　初伏見帝

密使人言於貞時曰。中院每切齒於承久之事。立其後。非卿家之利。貞時乃立後伏見。後宇多上皇敕貞時。以後嵯峨之約。乃請。定後深草・龜山兩統。每十年更立。於是。後宇多皇子以後伏見再從弟。爲其嗣。是爲後二條。伏見皇子以後二條再從兄。爲其嗣。是爲花園。初賴朝以藤原氏近衞・九條二家。更爲攝政。後九條分爲一條・二條。近衞分爲鷹司。凡五家。更爲攝政。曰五攝家。又北條氏所約也。

賴襄曰。兩統迭立之議。出於北條氏。猶其分攝家爲五派。使其勢相爭而不相合。而我得持權樹恩於其間。可謂巧詐極矣。而其取滅亡。實基於此。夫以赫赫天統。而敢分析之。以便於己。至每十年相更。惡有不獲罪譴於祖宗之靈者哉。蓋後嵯峨生後深草・龜山二帝。其母同也。而後嵯峨專屬意於龜山。遺誡母后。以龜山之後。永承皇統。付後深草以封邑。則大統已定矣。故後宇多以龜山子嗣立。宜也。而後深草以失勢憤懣。倚北條時宗。以立其子。伏見帝又倚北條貞時。以立其子。而後宇多持先皇遺旨。詰之。於是乎。迭立之議出。宜若出於不得已也。然當後深草・伏見之託。使時宗・貞時仗正義辭之。何有此紛紛哉。所以不辭者。非謂是可以持我權而樹我恩也耶。抑亦有故也。後嵯峨雖爲北條氏所立。然

常陰憤皇道之陵替。而冀於匡復。雖已不得其時。望之於子孫。以爲後深草之孱弱。不足有爲。見龜山有英氣材力。可以庶幾焉。史稱。朝廷有坂上田村鎭國劍。後嵯峨臨崩。屬后。竊付之龜山云。夫田村非能誅東夷者耶。觀伏見帝告貞時。曰。龜山毎切齒承久之事。立其後。非卿家利。然則當時中外。頗察其旨。是北條氏所以右後深草之統也。龜山之愛皇孫。祈其得位。猶後嵯峨之於己也。及花園之議儲。當立後二條之子。而後宇多曰。吾有所慮。故先立後醍醐。由是觀之。兩皇亦不得其時。而望之於子孫也。而後醍醐能不負其望。誅宿猾於斧鉞之下。復除難雪大恥。後嵯峨之志。於是而成。而列聖在天之靈。可以少慰矣。而伏見之統。毎仇疾之。毎爲關東間諜。光嚴爲北條高時所立。光明又爲足利尊氏所擁戴。皆欣然受之不辭。夫兩統均出於後嵯峨。同源同本。宜其恥其恥。仇其仇也。而如此。其後南北分爭。五十餘年。八洲生靈。肝腦塗地。雖叛臣之罪。亦王室之不思懿親也。及兩統合一。足利氏亦擧迭立之議。故致海內之嗷然。夫足利氏之勢。非北條之比。無復事於持權樹恩也。而仍襲其故。其禍亂不止。骨肉相殘。豈非亦獲祖宗之譴者哉。

嘉元二年。甲辰秋七月。本院崩。　葬後深草天皇。

三年。乙巳秋九月。中院崩。　葬龜山天皇。龜山上皇性英發。有膂力。多材藝。而淫蕩。皇后中宮外。所幸凡十六人。至通後宇多之皇后典侍。

德治三年。戊申秋八月。天皇崩。　是月。北條貞時廢大將軍久明親王。送還京師。立其子守邦。詔以守邦爲征夷大將軍。　葬後二條天皇。

花園天皇

諱富仁。伏見長子。母顯親門院。藤原氏。玄輝門院異母妹。在位十二年。改元四。曰。延慶。應長。正和。文保。禪位皇太子。後三十年。崩。壽五十二。葬荻原殿。

天皇踐祚于正親町殿。關白藤原師教攝政。　九月。立中務卿尊治親王。爲皇太子。

延慶元年。戊申冬十一月。天皇卽位于太政官廳。

攝政師教罷。以左大臣藤原冬平攝政。

應長元年。辛亥冬十月。北條貞時卒。族煕時・貞顯。連署行事。以貞時子高時猶少也。

正和五年。丙辰北條高時執權。時年十四。煕時辭連署。高時舅秋田時顯與內管領長崎圓喜。受遺囑。輔高時。

文保元年。丁巳秋九月。前太上天皇崩。　葬伏見天皇。

二年。戊午春二月。天皇禪位於皇太子尊治。尊治後宇多第二子。於龜山上皇爲皇孫。生而英敏。上皇愛之。常置左右。欲其得位。祈之石淸水。以後二條長且無過。不可超次立之。及花園踐祚。議以後二條皇子邦良爲儲貳。後宇多上皇曰。朕有所思。宜先立尊治。次及邦良。乃立之。

日本政記卷之十一終

日本政記　卷之十二

賴襄子成　著

後醍醐天皇

諱尊治。後宇多第二子。母談天門院。藤原氏。內大臣師繼養女。在位二十一年。改元八。曰元應。元亨。正中。嘉曆。元德。元弘。建武。延元。崩于吉野行宮。壽五十二。葬吉野山麓藏王堂。

三月。天皇卽位于太政官廳。尊先帝曰太上天皇。稱新院。立皇姪邦良親王爲皇太子。法皇後宇多聽政院中。

元應元年。己未秋八月。立藤原氏禧子爲中宮。廉子爲媵。後稱三位局。禧子。太政大臣實兼女。廉子。右中將公廉女也。

元亨元年。辛酉冬十二月。法皇還政。帝始御記錄所。聽斷民訟訴。廢京畿除大津·葛葉外諸新關。帝留意政治。日與公卿及儒臣討論經史。僧玄慧以才學聞。又召侍讀。

二年。壬戌夏。大旱。穀價踊貴。敕。減御膳。敕檢非違使別當源親房。閱飢民。賑粟。定沽酒法。喩京師富戶發糶。置場監賣。是歲春。陸奧人安藤堯勢叛北條高時。高時遣兵擊之。不克。高時少荒縱。委政內管領長崎高資。高資貪多私。堯勢與族季長爭邑。訟。各納賂。高資兩納之。不決。故叛。高資。圓喜子。襲爲宰者也。

賴襄曰。承久以後。天下武人。無一人叛北條氏者。至此陸奧人安藤堯勢叛。鎌倉遣兵擊之。不克。士之叛北條氏者。始於此。而北條氏兵威之絀。亦始於此。雖無王師。其亡決矣。況天討乘之乎。夫其兵卒非必有缺也。糧餉非必有乏也。將帥非必無才也。昔者以新造之家。嚮背未定之時。而能抗拒天子之討。挫六軍之勢。如摧枯拉朽。今藉累世之權。四海盡服之威。乃不能克一安藤堯勢。是其故何哉。兵之強弱。不在其鋒而在其本。本弱則末絀。譬之木。心蠧。當其未蠧也。加以大風暴雨。而挺然不折。一得蠧。蠧者其心而已。其幹之壯。枝葉之茂。依然也。童稚攀搖之而動矣。故北條氏之兵力依然也。高時一爲頑幸奢傲。以失人心。則其招衰絀。如此。抑不唯此也。其外戚與家宰專其政。政以賂成。是北條氏之大蠧也。堯勢共其族爭邑。而訟內管領長崎高資。高資兩受其賂。不決。所以怨而叛也。所以討而

不克也。豈不可為後世之戒哉。北條氏先世。非無外戚與家宰也。而未專政也。義時・泰時之際。三浦氏以外戚輔謀議。而時賴之世。安達氏又以外戚與之相軋。時賴右安達氏。以滅三浦氏矣。貞時又滅安達氏矣。其親漸遠。愛憎遞變。其勢固然。莫足怪者。推時賴・貞時之心。猶其滅畠山氏・和田氏。適足以除其逼耳。而貞時既除安達氏。而復親倚秋田氏。其妻父也。而所以除安達氏者。由於平賴綱之力。其內管領也。賴綱雖敗。其甥長崎圓喜又為宰為政。而高資以其子襲焉。貞時臨歿。顧高時幼弱。遺囑圓喜與秋田時顯輔佐之。以為。宗族不足託孤。足託孤者。莫若外戚與家宰。而不知此二者。實亡北條氏也。猶東漢之外戚宦官。相為消長。而終亡於二者。貞時初患外戚。賴內管領以滅之。不懲而倚秋田氏。已而內管領以橫邪敗。又不懲而用長崎氏。何其不明也。故北條氏之亡。不獨高時罪也。雖然。北條氏之於源氏。實兼外戚與家宰。而為其所親倚。得以簒其家。嗚呼。流俗之見。每速禍敗。非一世也。而天道好還如此。亦不獨可罪貞時也。

正中元年。甲子夏六月。法皇崩。　葬後宇多天皇。　秋九月。北衙鎭將殺藏人土岐賴兼・多治見國長。收中納言藤原資朝・藏人頭藤原俊基。送於鎌倉。遣中納言藤原宣房。諭解高時。

二年。乙丑高時奏。放資朝于佐渡。俊基還京師。帝視北條氏失人心。謀誅滅之。與資朝・俊基謀。陰援武人可用者。每會議。脫衣冠。縱酒。結其歡心。稱曰無禮講。又憚外議。召僧玄慧。講韓文。事覺。訊俊基無禮講。俊基曰。吾文臣。不知佗。唯知玄慧講文。是文禮講。謬傳爲無禮耳。

嘉曆元年。丙寅春三月。皇太子邦良薨。　秋七月。立本院後伏見皇子量仁親王。爲皇太子。時帝第三皇子護良有英姿。帝愛之。欲立代邦良。諭旨北條高時。高時擧貞時約。不奉詔。令護良剃髮。號尊雲。補叡山座主。因結僧徒心。居大塔。世稱大塔宮。　冬十月。前大將軍惟康親王薨。　是歲。北條高時有疾。宰高資勸之薙髮。欲讓執權於弟泰家。高時不聽。以族守時・維貞連署行事。

三年。戊辰冬十月。前大將軍久明親王薨。

元德二年。庚午夏四月。殺大判事中原章房。帝謀滅北條氏。章房諫。帝恐語漏。使人陰殺之。五月。北條氏捕僧圓觀・文觀。處流。以其銜密詔。呪咀北條氏。　秋九月。高時疾。高資專權。密令其族高賴圖之。事泄。流高賴陸奧。

元弘元年。辛未秋七月。地大震。富士山崩數百丈。

北條氏收右中辨藤原俊基。　八月。北條高時遣其將二階堂貞藤等率兵入京師。帝幸笠置山。護良親王擊東兵于幸崎。走之。已而衆潰。奔南都。　詔四方勤王。召左兵衛尉楠正成。

九月。北條高時奉量仁親王於京師稱帝。遣兵犯行在。　冬十月。行在陷。天皇幸宇治。御平等院。賊遣使奏請傳神器於新主。帝不許。曰。神器自在帝王所守。非臣下可敢與奪。且鏡璽已失。獨有劍。必欲相迫。朕將自用之。賊欲遷之六波羅。帝使備行幸儀而後往。楠正成起兵勤王。據赤坂城。賊將大佛貞直等攻之。不能克。正成以糧盡。逃入金剛山。　備後人櫻山茲俊起兵。衆潰死之。

二年。壬申春三月。天皇遷隱岐。備前人兒島高德欲奪駕。起兵不成。　夏四月。車駕至隱岐。御國分寺。

賴襄曰。後醍醐卽位之初。厲精政治。擧行恤民之典。而關東多秕政。人心不服。朝廷與東藩。勝負之勢。不待交兵刃而決矣。夫鷙鳥欲搏。必斂其翅。不斂其翅而露其搏擊之機。適足以困敝已。正中・元德之際。不其然乎。同謀公卿武人。既見囚執。使北條氏更究詰本源。豈不危殆。帝之下誓書於關東。雖沿龜山之例。其爲計。可謂窮且醜矣。及東吏再來。又用

苟且詭詐之謀。僥倖一時。雖有智勇忠義之士。施其謀略。而機會皆失。不能救其蒙塵也。幸而投賊之衰運。得義旗四合。纔致歸闕反正耳。向使帝藏其鋒。養其鋭。舍圖賊之謀。而益務自治之術。賊已失人心。叛者驟起。俟其罷極。擠其將墜。用力寡而無後患。何必曰兵哉。且使帝不能已於兵乎。如楠正成。近在畿甸。及其平時。訪求諸謀。必有萬全之策。寄行在於形勝之地。以招聚四方之豪傑。其知義效順。與欲釋憾於北條氏者。將雲合霧集。天下之事。可以指顧而定矣。不必授僞器於光嚴也。不必許寵爵於足利尊氏也。如帝之所爲。其濟者幸也。不然。與承久異者幾希矣。雖然。承久之事。我作彼應。元弘之事。我未作而彼來犯。因危而發。出死得生。以激天下之義氣。其勢然也。當賊徒駕。夾路觀者。公罵北條氏不忌。其時然也。崎嶇憂辱。而未嘗失其常。無恇怯求免。如後鳥羽者。其主德然也。嗚呼。是其所以異於承久歟。

楠正成出金剛山。復赤坂。徇和泉・河內。　五月。賊兵來攻。正成逆擊大破之。進陣天王寺。

護良親王起兵吉野。

三年。癸酉春正月。天皇在隱岐。二月。賊大擧來攻。閏月。吉野陷。護良逃。正成固守不下。上野人

新田義貞在賊軍。奉護良親王令。還上野。起兵應正成。　播磨人赤松則村。起兵應正成。天皇還幸伯耆。州人名和長年。擧族奉之。　三月。帝遣左近衛中將源忠顯。率兵東上。兒島高德等從之。與赤松則村等會。攻六波羅。　夏四月。北條高時遣足利高氏・名越高家。援六波羅。令高氏直犯行在。高氏陰遣使歸順。敕許之。高家與赤松則村。戰于狐川。敗死。高氏還軍。　五月。諸軍進攻六波羅。拔之。鎭將北條仲時等奉新主及兩上皇。東奔。近江兵邀擊。仲時等皆死。新主上皇還。遂收京師。金剛山圍解。　車駕發行在。　新田義貞攻拔鎌倉。誅高時。滅北條氏。奏捷。征夷大將軍守邦親王薙髮。尋薨。　六月。楠正成迎謁于兵庫。敕前驅入京師。　車駕還闕。論諸公卿受新主官爵者罪狀。貶削有差。詔罷置關白。賜足利高氏御名尊字。任左兵衛督。尋遷參議。護良親王請誅高氏。不許。拜爲征夷大將軍。入朝。　秋七月。詔諸國。休士卒。勸課農桑。　八月。置決斷所。議賞軍功。時將士聚闕下者數萬。爭功紛挐不決。使權中納言藤原實世司之。旬月。僅定二十餘人。以多失當罷。以權中納言藤原藤房代之覆審。而內降得賞者已多。藤房知不可諫。乃稱病不朝。代以民部卿藤原光經。上自擇北條高時邑。爲供御。以泰家邑。賜護良親王。大佛貞直邑給內侍三位局。其餘近習僧尼伎樂。以

內降多受地。雖軍功論定。無地可頒。內敕與外議牴牾。往往數人爭一邑。所在武人。頓失勢。被奴虜使。天下囂然。復思武門之治。　冬十月。詔。遣皇子義良。出鎭東邊。准大臣源親房輔之。以參議源顯家。爲陸奧守。兼鎭守府將軍。上野介結城宗廣爲副。詔曰。古者皇子若大臣。皆親臨戎。方今王政維新。不宜分文武爲二途。親書旗銘。賜衣馬。陛辭。顯家親房長子。置評定所・引付衆。如鎌倉故事。　十二月。以皇子成良親王。爲上野大守。出鎭鎌倉。以左馬頭足利直義。爲相摸守。輔之。直義。尊氏弟也。

建武元年。甲戌春正月。營大內。以安藝・周防租賦充費。徵諸國地頭歲入二十分一。始造楮幣。二月。鑄新錢。　立恆良親王。爲皇太子。恆良。帝第六子。內侍廉子所生。上兩中宮竝無子。長子尊良。第三子護良。皆宮人所生。廉子得寵。從幸隱岐。及歸。益專房。善迎合上意。無言不聽。請託皆驗。以護良有大功。恐害太子。足利尊氏因深結之。　夏五月。出雲獻千里馬。　冬十月。權中納言藤原藤房棄官去。　囚大將軍護良親王。　十一月。流護良於鎌倉。令相摸守足利直義監之。　是歲。置武者所。以新田氏族。爲頭人。以上野太守成良親王。爲征夷大將軍。置關東廂番。以足利氏族。掌之。錄元功。以足利尊氏。爲第一。爲武藏・常陸・下總守護。直義

遠江。新田義貞上野・播磨。其子義顯越後。其弟義助駿河。楠正成攝津・河内。名和長年因幡・伯耆。赤松則村播磨。尋奪則村職。給佐用莊。

中興之政失乎。賴襄曰。不然。論者皆謂之失矣。所謂失者。何哉。將門尸政久矣。而一旦收之。代以朝紳。如枘鑿不相入。失矣。曰。令楠正成・名和長年等參直記錄所。置關東廂番・奥州評定衆。掌其方事。置武者所。以新田氏族爲頭人。遣皇子鎮鎌倉。以足利氏輔焉。則不必專付搢紳也。曰。武人采邑。碁布七道者。非一日。而猝奪之。速其怨憤。失矣。曰。歸闕之翌月。詔。除賊黨外。將士所有食田領職。一皆襲故。不須臾來請。則不必奪也。曰。有功將士。羣聚闕下。望賞者。不輒予。不能塞其欲。失矣。曰。所謂有功。孰若新田・足利・楠・名和・赤松等哉。士卒之效力。亦隷此數氏者居多。歸闕之歲。卽論賞。割予土壤不愆。一家各領三四州。少者一二州。於其部曲。蓋足以推恩分祿而有餘。則不可謂不塞其欲也。總之。當時之政。概皆得其宜。合時勢。愜人情。何謂失乎。然則無所失乎。曰。政不失也。而所以爲政者。失矣。所以爲政者。何也。曰。人主之心。是已。謂其意欲太廣。好侈喜大乎。曰否。吾以爲。其欲不廣。所喜不大耳。昔者漢高祖滅嬴斃項。百戰有天下。猶躬被堅執銳。芟刈韓・彭・英・盧之類。至與

匈奴冒頓戰。見蕭何營宮室。怒曰。天下恟恟。成敗未定。何爲此等。世謂天下既定矣。而高祖則曰。未也。推其爲心。非盡掃蕩天下可慮者。不充其所欲也。稱高祖曰大度。謂其心之大如此爾。今帝纔懲一狂童之高時。則謂宇內無復足慮者。是以遇足利尊氏之降。則遽寵爵之。以幸其可倚。纔得歸闕。卽晏然燕息。以營宮室爲急。以悅妃嬪爲務。雖有記錄所。蓋不數親臨。而日居於內。內敕所令。與外廷指揮。每與牴牾。武人之邑。往往爲內官私給。憤怨思亂。固其宜也。吾嘗觀藤原藤房之因龍馬進諫怪。以藤房之有舊恩。豈無可諫之地。何必廷爭。彰主過。而沽己直乎。蓋非因出觀馬。則不輒得面奏也。公卿且然。況將帥乎。故天下之政。無一所失。而盡爲文具虛言者。由此其故也。使帝之心常如元亨以前。而不如建武以後。則縱使政事少有所失。而不至再取困踣也。唯夫其心不大。其量易滿。故當其未得則勤厲。及其已得。則懈怠。待天下之羣雄。苟充其欲。適其意。以冀無事。其少欲者。安於此矣。至其姦豪者溪壑之欲。愈予愈不充。非盡奪我業。則不已。彼之心。乃大於我。我何以能制彼哉。

二年。乙亥夏六月。權大納言藤原公宗。謀逆伏誅。公宗。右大臣公經之後。承久之役。通北條氏。

後世相黨援。出五后。至是。匿北條氏遺孽謀亂。欲請帝幸其別第。因行弑逆。事發。收流出雲。尋伏誅。 秋七月。北條時行招聚餘黨。攻鎌倉。時行高時次子。 直義使人殺護良親王。挾成良親王西奔。

世稱。護良親王察足利尊氏之姦雄。欲先誅之。而後醍醐不聽。反聽尊氏之讒。囚護良付之足利氏。致斃於其手。中興之不終。決於此。而致乘輿再板蕩。天下鼎沸。五十年者。皆尊氏之爲也。賴襄以爲不然。曰。當是時。天下之桀黠。若尊氏者。豈爲少哉。殺一尊氏。則一尊氏生矣。且尊氏肆斬親王之僕隷。戢不法云爾。其反跡固未著也。其有異志。未可必也。使帝聽護良。執而誅之。以何辭徇天下。天下必曰。朝廷忌武臣有望者。因事誅鋤之耳。雖若新田義貞輩。人人自危。變其忠志。爲自固之計。則是又殺一尊氏。而生數尊氏也。中興之業。不待他日而墜矣。故護良之說非也。帝之不聽。是也。曰。帝之不聽護良而殺尊氏。則然矣。其聽尊氏而殺護良如何。曰。非聽尊氏而殺之也。帝固欲殺之。不待尊氏也。何以言之。帝初愛護良。至欲爲儲貳。已而三位姫得寵。生恆良・義良・成良。欲立恆良爲太子久矣。護良雖削髮爲僧。而贊帝謀畫。及帝徙隱岐。蓄髮將兵。樹功最大。是姫之所最忌。忌其害太子。

也。姬從帝於艱難。猶唐韋后之於中宗。哀誓固寵。所言皆聽。蓋浸潤之譖。日夜先入。護良之下令新田氏。權用詔體。是承制也。而可譖曰是有自立之志。猶唐肅宗。靈武之事也。帝始歸闕。護良未入朝。而兵歸焉如雲。帝遣使詰其欲何爲。促使歸僧服。帝何以爲此無情之言乎。可以見其已猜嫌之矣。護良不察。而望爲元帥。帝益猜之。而勉從之。欲殺之之機。已成矣。護良復不察。而請誅尊氏。姬知有此大隙而幸之。敎尊氏。使告其叛也。而帝欲殺之之機。決矣。尊氏雖侮朝廷。非有所恃。烏敢駕虛言。誣大事以構天子之父子哉。是以護良獄中上書。而莫敢奏達者。當時中外知帝意在殺之也。夫監護良。豈無他人。而付之其深仇。非其意殺之而何哉。初護良已爲大將軍。宜遣鎭關東。而不遣也。遣成良。以上野太守鎭鎌倉。遣義良鎭陸奧。而愜良爲皇太子。及護良得罪。陞成良爲大將軍。兄爲國儲。二弟典兵權。可見帝最愛此三子。至此成其志矣。成其志。乃成姬之志也。乃成尊氏之志也。尊氏初志。或未至此。視帝之所爲顚倒。每事便於我。翹然自喜。遂覬覦非望耳。猶唐玄宗自殺二子。愛楊妃。而寵安祿山。自取播遷之禍。尊氏門地。非奚胡之比也。而論其才。則姦而不雄者。帝養之而成其爲姦雄也。不然。以帝之英毅不世出。苟執其初心。無所惑繆。則

雖有百尊氏。何能爲。而何必殺之。

八月。足利尊氏請自將討時行。許之。又請任征夷將軍。管領關東。不許。功成議之。尊氏不辭而發。至駿河。與直義合。擊時行走之。詔賞功進位。促班師。不奉詔。開府于源賴朝故址。自稱征夷大將軍關東管領。遂移書西道諸國發兵。以擊新田氏爲名。　冬十月。上書誣奏。義貞初觀望。聞臣克京。乃敢起兵。義貞又上書。自辯陳尊氏八大罪。　十一月。詔奪足利尊氏官爵。以中務卿尊良親王。管領東國。左兵衞督新田義貞等從之。由東海道。彈正尹忠房親王。由東山道。鎭守府將軍源顯家。奉義良親王會于鎌倉。同討尊氏。

賴襄曰。國朝用郡縣之制。雖宗室親王。不任藩維。如三大守則爲國司。又遙領之而已。其奉邑槪散在數處。少擅全國者。擅全國者。乃藤原氏。如美濃公・越前公。全收其租賦。而族黨之邑。殆跨天下。及平・源代起。蓋襲藤原之故。而加以兵馬之權。所以朝廷不能控御之也。後醍醐蓋覩其弊矣。故中興之初。乃分諸皇子。出鎭邊要。其後征東征西。皆以皇子爲將軍。建藩置屬。經略天下。其勢猶漢末四建宗室。非此莫能濟時艱。其所處置。可謂合事宜矣。其諸皇子皆肖父皇。不少英毅材勇之人。躬擐甲冑。踏險致死。非復前朝紈袴之習。

雖然。就其中論之。不無優劣。護良親王其最可任者。使之鎮鎌倉。帝可以高枕無東顧憂矣。而遇讒而死。成長・義良。口猶乳臭。名爲藩帥。非有實效。況成良既爲足利氏所挾。纔得未死耳。是以遣尊良・忠房二人。年齒差長。可以有爲矣。雖然。非護良比也。帝亦知之。故以新田義貞兄弟爲副。而令義良與其副源顯家以奥兵會焉。使賊腹背受敵。其計可謂周密矣。而有大不可者焉。夫義良係所素置藩鎮。猶之可也。至尊良・忠房。則適足以掣義貞兄弟之肘耳。夫建藩。與遣將不同。建藩。鎮撫於無事。遣將。征勦於有事。有事者。速定其亂而已。故遣一猛將。將數萬精兵。專其委任。無所牽制。得以盡其謀與戰。雖猾賊・姦臣據其巢窟。及其勢未成。不難於覆而取之也。今以元帥屬親王。而義貞爲之所壓。其威令既不伸矣。及戰。其先潰敗者。親王之卒也。而義助爲之所撓。以此當關東一心戴賊之兵。其敗績。奚足怪哉。而義良所將奥兵。雖不及期會。入援京師。朝廷得其力。則建藩之效也。

尊氏遣兵逆擊。義貞連戰破之。十二月。至箱根。兵部少輔新田義助。奉尊良親王。與賊戰于竹下。不利。鹽冶高貞・大友貞載叛降賊。官軍敗績赤松則村・久下時重等。爭起應賊。詔召還義貞。

延元元年。丙子春正月。尊氏入犯。敕義貞守大渡。諸將分拒山崎・宇治・勢多。藤原師基守峰堂。先敗。諸官軍尋敗。帝幸叡山。諸將從之。結城親光佯降賊。刺尊氏。不克死之。賊將細川定禪據園城寺。以逼行在。源顯家奉義良親王。以陸奥兵入援。與義貞攻拔園城寺。義貞追與尊氏戰。大破之。屯京中。賊反襲。義貞敗退。東山道官軍還至。義貞及左衞門尉楠正成等。與賊再戰。又大破之。賊西走。　二月。追至兵庫。還。賊走保筑前。依少貳賴尙。菊池武敏以其兵討之。不克。　車駕還宮。進義貞左近衞中將。　三月。詔義貞。管領山陽・山陰十六國。討尊氏。圍赤松則村於白旗城。不能下。　夏四月。新田義助與兒島高德。夾攻舟阪。遣將據福山城。徇下美作諸城。　是月。本院崩。後伏見葬後伏見天皇。　五月。尊氏稱後伏見上皇宣旨。大擧東上。自率舟師。使弟直義率陸軍。攻陷福山。義貞解圍。退陣兵庫。備後守兒島範長與赤松則村兵戰。死之。範長高德父也。詔楠正成。以其部兵援義貞。賊水陸兩軍會兵庫。義貞不利退。左衞門尉檢非違使兼河內守楠正成。與賊戰于湊川。死之。官軍敗還。帝復幸叡山。　六月。尊氏入京師。據東寺。遣兵犯行在。中將源忠顯・少將藤原雅忠等。戰沒。義貞等進攻京師。不克。伯耆守名和長年死之。　秋七月。北國兵入援。敕山徒。招南都僧兵。又分遣諸將。發畿內

兵。斷賊糧道。因遣義貞。兩攻京師。皆不利。　八月。尊氏立豐仁親王。稱帝。號用建武。是爲光明帝。時人語曰。親王未有一戰功。將軍賜之帝位。　九月。尊氏又啗利南都。南都叛。又令足利高經扼北陸道。佐佐木高氏絕近江糧道。新田義助數攻近江。不克。官軍大困。　冬十月。尊氏佯請降邀車駕。許之。令新田義貞奉皇太子恆良及尊良親王。經略北陸道。車駕還京師。尊氏幽帝于花山院。悉奪從駕朝臣官爵。　十一月。尊氏迫請傳神器於新主。以僞器授之。　十二月。帝潛幸吉野。建行宮居焉。帶刀楠正行與其族和田正朝等來衞。正行。正成長子也。

賴襄曰。孫子論兵。以道爲先。天地次之。將法又次之。元弘之能勝北條氏。由彼之失道而延元之不能勝足利氏。由我之失道。道失則人心背。人心一背。天下麋沸。雖有將帥智勇什倍足利氏者。莫之能戡。況朝廷使用之。乖其宜乎。而乖其宜者。失地利爲最焉。夫地利之於兵。大矣。楠正成之初擧義。以一城受百萬兵。而不屈者。據險固也。否則元弘之績。不可得而成也。況於延元。既失其道。又失其地利。何謂失地利。曰。京師形勢。本不及關東。故北條氏・足利氏。皆據關東爲巢窟。以能制朝廷。而朝廷習於故常。常以得失京師。爲大故。

故論足利尊氏之功居新田義貞之上者。以爲尊氏能爲我取京師。使我歸闕復位。義貞之覆鎌倉不必切我利害也。夫遣尊氏東伐。如放虎於其穴。固大錯矣。及遣義貞討之。如探虎穴。固難必於勝。義貞無他奇道。而平行東海。轉戰千里。遇賊於險。宜。其敗也。即如賊之計則得矣。以爲。義貞新來鋒鋭。逡巡誘之使其竭勢力於無用之地。東海平夷至箱根則高。彼仰。我俯。我以生兵。乘彼之疲。則彼潰矣。是同鬪關東地。賊得利而官軍失之也。抑上野・越信。亦新田氏之舊鄕也。向令義貞歸焉。招其部曲固守其所。連之奥羽。吾憑其高。瞰賊於卑。可以控制尊氏。雖及其敗。山道之軍。與奥羽之兵。未缺而將會也。令義貞收餘兵。猶能成軍。得一險固城塞據之。與諸軍合勢。尊氏必慮根本。不能舍之以入犯。如播・丹之叛者。以一楠正成治之。而有餘。奈何遽召還義貞。以成賊追擊之勢乎。是非亦恐失京師故耶。及賊取京師。官軍再戰得克之。賊既遠離其巢。無穴可入。而棲泊海濱。不於是時急勦殄之。而唱凱振旅。使其雍容上船。摟西兵復來。誠不可曉也。世咎義貞之遷延失機。吾以爲。是亦朝廷之意。以既得京師。不必復恤縱敵。故召還諸將也。賊則據白旗之險。以梗官軍。而得以其間成再燃之計。朝廷至此。不聽正成幸叡山之策。促鑾之郊甸。令以見

卒格闘平地。棄正成而不察者。亦憚再舍京師也。及敗。方行其策。晩矣。然亦可固守焉。以爲後圖矣。乃聽賊僞和。又棄義貞而不顧者。亦喜於歸京師。而未暇慮其他也。噫。其重京師也如此。何知其形勢之劣。萬難守哉。夫太湖・淀水之固。天設以爲大和。非爲山城也。山城當屬山陰者也。叡山支太湖。使之曲行。京城其大麓餘地耳。故迫狹傾仄。守之以防外寇。如在堤下與堤上人鬬。如立墻根。僅恃一溝。以受敵於庭。故有一寇來犯。非舍而上叡山。不可守也。或逃於江。或避於丹。聽寇入京。還而攻之。寇亦不能守。足利氏十三世。亦每如此。彼非不知其地不利。不如關東也。慮於南朝。不得不居此。而巢窟之地。守以子弟。爲深根固蔕之計。是以數搖而纔保耳。男山之役。尊氏覺南朝襲京之謀。而委之義詮。自赴鎌倉者。亦慮根本也。而南朝乃不專圖其根本。而仍急於取京師。數取數失。是以終不能成匡復焉。故曰。失地利也。然足利氏亦不能覆其咫尺之南朝者。何哉。大和地形險固。勢高於山城。而楠氏據河内。爲之藩屏也。雖然。要之南朝與足利氏。其失於道。而不能服人心者。莫能大相異者。其勝敗相持五十餘年者。以此。

二年。（丁丑○北朝光明帝建武四年。）春正月。新田義貞奉皇太子。在越前金崎城。賊將足利高經・高師泰等。

以大兵圍之。義貞遣義助・義顯。募兵杣山。義助留子義治而還。義治得兵來戰敗。瓜生保等死之。義顯義貞長子。　三月。義貞・義助。潛出城赴杣山。將募兵來救。未至。城陷。由良具滋・長濱顯寬。說義顯。使人奉皇太子逃杣山。尊良親王自殺。義顯以下殉之。皇太子爲賊所獲。護送京師。　秋八月。鎭守府將軍源顯家及結城宗廣等。奉義良親王入援。與足利義詮戰利根川破之。　冬十二月。新田義興以上野兵從顯家。遂攻鎌倉。走義詮。義興義顯弟。義詮尊氏子。

三年。（戊寅○北朝曆應元年）　春正月。顯家及諸將西上。與賊將土岐賴遠・桃井直常等。戰美濃破之。顯家軍。所過侵掠。民苦之。尊氏議。守宇治・勢多。高師泰曰。自古未有守宇治・勢多而能克者。乃邀擊之美濃。背黑血川陣。顯家轉出伊勢。　二月。顯家與其弟少將顯信至南都。桃井直常與其弟直信拒之。顯家敗走。　三月。顯信軍男山。顯家軍和泉。與賊相持。　夏四月。尊氏酖弑皇太子及成良親王。　五月。顯家與賊將高師直戰界浦。死之。　六月。師直圍顯信男山。帝手詔。召新田義貞援男山。先是。義貞攻越前府城。拔之。足利高經走保足羽。義貞從攻之。未下。兒島高德建策。留兵通北國糧道。又諭叡山歸順。乃使義助分兵入京師。尊氏聞之。召

還師直。師直曰。不拔此而御。敵必踵之。　秋七月。師直放火。燒官軍資糧。因急攻拔之。顯信走河內。義助至敦賀。聞之引還。與義貞合兵。攻高經。高經結平泉寺僧徒。修藤島等七寨。守之。　閏月。義貞遣兵攻藤島。自出爲斥候。中矢卒。年三十八。　前上野介結城宗廣奏請。陸奧地。可敵海內之半。是以三年間兩次入援。皆資其力。宜及其民心未變。撫爲朝廷用。朝議然之。以源顯信爲鎮守府將軍。奉義良親王往鎮焉。源親房・結城宗廣從之。九月。遇颶風。舟四散。親王與顯信至篠島。親房至常陸。宗廣至安濃津。宗廣以不得夷賊。憤懣成疾卒。

四年。（己卯。○北朝曆應二年）　春三月。義良親王還吉野。　秋八月。天皇不豫。立義良親王。爲皇太子。禪位而崩。葬後醍醐天皇。

日本政記　卷之十二　終

日本政記 卷之十三

頼襄子成 著

後村上天皇

諱義良。後醍醐第八子。母新待賢門院。藤原氏。右中將公廉女。在位三十年。改元二。曰。興國。正平。崩。壽四十一。葬觀心寺。

冬十月。天皇卽位于吉野行宮。時年十二。權大納言藤原實世・權中納言藤原隆資。輔政。

興國元年。庚辰○北朝曆應三年。春三月。以新田義助爲刑部卿。赴伊豫。總督西國軍事。先是。新田義貞之死也。義助還越前府城。糾合義故。攻足羽。走足利高經。已而京師援軍至。高經復振。義助大敗。走美濃。遂詣吉野。詔勞奬之。進官爵。會伊豫官軍請將帥。敕遣義助。夏五月。義助病卒。諸城皆復爲賊有。

三年。壬午○北朝康永元年。夏六月。淮大臣源親房。保常陸小田城。賊將高師冬攻之。親房擊卻之。冬十一月。小田治久翻城降賊。親房走保關城。

四年。（癸未〇北朝康永二年。）師冬攻關城益急。親房乞救於結城親朝。親朝宗廣子也。通款賊。不肯出兵。親房貽書。讓以大義。曰。方今東國爲官軍守者。下妻・眞壁・中郡・西明寺・伊佐與關城而已。然得足下來援。則伊達以西必有響應者。而足下坐失機會。洵爲可惜。夫我邦神聖承統。苟謀反逆者。無能保首領。尊氏何爲者。盜據中原。使家奴師直輩凌蔑世家。罪浮前日之高時。所謂世家。本皆王臣。保平以還。降隷源平。承久以後。又役屬陪臣。觀乃家譜。豈不愧心。方今中興朝爵復故。志士盡忠之秋也。公家鎭守府將軍。門閥勳名。豈出源平下。是以。乃父上野介朝臣圖恢復。振家聲。乃弟又以死戰著名。足下爲冢嗣。宜繼前志。耀後昆。坐觀成敗。如祖考何。僕先朝遺老。辱受顧命。據孤城以控八州。恐一旦隕命。四方解體。且賊息出鎭三年。獨立無援。衆情危疑。方今父子之命。繫於足下。足下實有異圖。則已。苟欲報祖先。豈不勉力。非敢愛餘命也。唯爲天下言耳。親朝辭以兵寡。尋叛降賊。親房遣使命顯信來救。亦爲親朝所沮。不果來。親房不能守歸。

正平二年。（丁亥〇北朝貞和三年。）秋九月。河內守楠正行擧兵。謀收復京師。與賊將細川顯氏戰于譽田林。破之。冬十一月。與山名時氏戰于瓜生野。破之。足利尊氏令高師直・師泰將兵八萬

來擊。
三年。戊子○北朝貞和四年。 春正月。正行及弟正時。與師直戰于四條畷。死之。師直遂犯行宮。帝幸穴生。楠正儀拒高師泰于石河。 冬十月。北朝主禪位於從子興仁。是爲崇光院。 是歲。法皇花園崩。 北朝葬花園天皇。
四年。己丑○北朝崇光帝貞和五年。 先是。北朝拜尊氏。爲征夷大將軍。弟直義爲副將軍。稱曰兩御所。足利氏初擁立光明帝。陽尊之。每事奏聞。及官軍諸將相尋戰沒。大得其志。不復稟敬。肆割膏腴。賞功臣。或奪公卿食邑。雖供御闕乏。不顧。至朝官或學東人語。以免其侮辱。土岐賴遠。嘗途遇光嚴上皇。不下馬。前驅呵曰。院也。賴遠曰。院耶。犬耶。犬則應射之。令環射乘輿。折轅截幅去。直義論罪。賴遠伏誅。武人相謂曰。院且下之。卽遇將軍。將手行耶。高師直以尤多軍功。爲尊氏信任。爲幕府執事。專恣無忌。至譖鹽冶高貞而奪其妻。弟師泰亦專橫。至發菅原氏墳墓。以營別莊。尊氏不罪。師直與直義相軋。上杉重能・畠山直宗亦疾師直。乃附直義。結直義所善僧妙吉。勸除二高。直義然之。直義嘗養尊氏庶長子直冬。出爲中國彈代。以爲外援。
秋八月。直義伏兵。召師直。兵有爲師直耳目者。因知其謀。脫歸。召師泰於石川。直義使人要

說援己。事成代兄執事。師泰唉不肯。與師直合兵數萬。入京師。圍幕府。請斥直義及重能・直宗。尊氏慰喩。聽其請。直義薙髮。屛居錦小路。放重能・直宗於越前。師直使人潛殺之。尊氏召義詮於鎌倉。代執政。以其弟基氏。代鎭鎌倉。高師冬・上杉憲顯爲執事。

五年。庚寅○北朝觀應元年。　夏六月。足利直冬叛其父尊氏。起兵。冬十月。尊氏與高師直等討之。　十二月。足利直義上書行在。請歸順。許之。命討尊氏。時師直欲擊直冬。慮直義圖後。欲殺之而行。直義奔大和。請歸順。下公卿議。大納言實世曰。致先帝播越。王室艱難者。皆由此豎子。今窮迫。來降。非其本心。宜斬之。左大臣藤原師基・准大臣源親房等。以爲。得大援興復可期。乃納其降。詔圖北伐。石堂義房・畠山國清・桃井直常等。皆以惡師直。附直義。

六年。辛卯○北朝觀應二年。　春正月。足利直義進據男山。桃井直常據叡山。夾攻京師。足利義詮西奔。與尊氏及高師直。合兵而還。既而尊氏與師直奔播磨。義詮奔丹波。　二月。尊氏與直義戰御影濱。大敗。保松岡。與直義和。還京師。師直・師泰出降。爲上杉顯能所殺。上杉憲顯攻殺高師冬鎌倉。尊氏以仁木賴章爲執事。　秋。尊氏與直義外和而內不諧。直義欲廢義詮。已復執政。尊氏勉從之。石堂義房・桃井直常等。恃勢橫恣。仁木賴章・細川賴春等。疾之。冬。引還國。

義房・直常亦不自安。奉直義北歸。與尊氏相拒近江。敗而東奔。尊氏欲追擊。恐官軍乘虛。佯乞歸順。帝亦佯許之。　冬。尊氏東伐。與直義戰于薩陲。敗而降之。攜至鎌倉。明年藥殺之。尊氏令義詮遣使行宮。請降。許之。義詮廢崇光帝。奉正平號。欲迎車駕。敕。以方忌。待明年復闕。

賴襄曰。足利尊氏之有直義。猶趙匡胤之有匡義也。匡胤簒有周室。由出征握兵。反劫其君。尊氏受東伐之命。因得煽兵犯闕。其事勢一也。而匡胤之謀。決於匡義。尊氏之逆。成於直義。尊氏之才。不及匡胤之什一。而其所犯者。後醍醐。與恭帝隔如天地。是以不能速取之。而累其逆節。概直義所贊焉。其有功於己。如此。尊氏之始決反於關東也。有家國之事。一委直義之語。自是。政事概此自出。蓋以其事成否不可知。故併禍福任之也。已而其事稍成。轉禍爲福。則忌之之意生焉。尊氏爲大將軍。稱直義爲副。隱然如儲貳然。而義詮出在鎌倉。是匡義代立。德昭不得立之勢也。使尊氏不幸早死。則直義爲匡義之所爲。無疑矣。則烏得不忌乎。是以寵任高師直。以分其權。聽其專擅。而莫之禁。是直義所以與師直相惡。匡胤友於匡義。故無敢離間之者。使其不友。則如趙普者。必勸匡胤除之。師直雖專

擅。非知尊氏之忌之。安敢公然以兵劫。而廢之。而尊氏亦許而不罪乎。故直義出奔。乞降南朝。懼尊氏意在必殺也。非獨懼師直也。夫師直以兵劫。而廢直義。直義又以兵劫。而除師直。而尊氏不罪彼。而咎此。其意忌乎此故也。尊氏初廢直義。乃召義詮代之。又封基氏於關東。然後尊氏之志成矣。而直義劫制尊氏。再執政權。亦恃大謀之成於己也。是以尊氏亦勉從之。而其忌益甚。固其宜也。直義之東奔。尊氏所大懼。懼其據根本。自爲其嘗所以贊己者也。是以親往。親往則不得不和南朝。至廢其所立。迎駕返闕。其大懼也可以見焉。而以直義之狡黠。而終不得志於關東。輒被執殺。何哉。不特以弟敵兄。衆情不附。亦罪逆之所由。先受天誅也。抑以基氏在焉。而尊氏夾擊之。其勢易辨也。夫尊氏之犯君。猶弟制於其臣。不復論可也。至建親藩。其計之得者矣。假令尊氏早死。未必至如匡胤之子。悉魚肉於弟手也。其後。京師雖多外患內變。賴關東之維持。終得以濟。尊氏之所措畫。可謂善慮國家矣。匡胤務削將帥兵權。而宗室無尺土之封。內削弱。既不救於家禍。又失於國計。是以不能併燕雲。而貽靖康之禍。僅保江南。不若足利氏之能吞南朝。令制海內也。由此言之。雖曰尊氏勝匡胤可也。雖然。足利氏將帥驕蹇。叛服無常不獨師直也。宋豈有此

乎。此由樹兵與不樹也。則時勢之異。然焉爾歟。曰。不特然也。臣胤嘗論唐莊宗。曰。二十年夾河。百戰。不能以軍法約束諸將。直兒戲耳。吾雖愛養將帥。苟不用我命。有劍而已。使臣胤目足利氏。得不亦謂之兒戲哉。而宋自匡義而後。威刑不復振。足利氏得義滿。能繩以法。果非兒戲也。

七年。（壬辰○北朝後光嚴帝文和元年。）春正月。足利義詮獻金及馬。　二月。車駕發行宮。使兒島高德奉密旨。赴東國。發新田氏兵。伐尊氏於鎌倉。閏月。車駕至男山。楠正儀・和田正忠等。以河內・紀伊兵。北畠顯能以伊勢兵。皆會。義詮令細川顯氏・賴春拒之。正儀等擊敗顯氏。獲賴春。走義詮於近江。官軍入京師。收廢帝・廢太子及光嚴・光明二上皇。載之一車。送行在。幽之穴生。　新田義宗・義興・義治等。與尊氏戰武藏。破之。襲基氏鎌倉。走之。義宗奉征東將軍宗良親王。與尊氏戰碓氷嶺。敗走越後。京畿將士多附義詮。　三月。義詮據東山。官軍不利。退保男山。義詮復入京師。　夏五月。正儀・正忠等還河內。募兵。正忠病卒。正儀未至。北軍急攻男山。帝親擐甲。御馬。衝圍南出。權大納言藤原隆資。死之。左兵衞督藤原康長。力戰。帝達行宮。宗良親王。與新田義宗・桃井・吉良・石堂等。自東北。土居・得能氏。自西南。共赴難。聞男山不守。皆途還。

漢劉璋患寇。迎劉備於蜀。其諸臣欲戴備。來說襲取蜀。備曰。今世與吾爲水火者。曹操也。操以暴。吾以仁。操以譎。吾以忠。每事與之反。乃可成業。今以小利。失信義於天下。奈何。然諸葛亮。素策取益州。龐統等又勸備。備遂取蜀。宋蘇軾論之。歸咎於亮。曰。曹劉不敵。天下所知。兵不若曹多。地不若曹廣。所恃以勝之。以區區忠義。有激天下之心。雖無措足之地。天下爲之用。今璋以好逆之。乃扼吭拊背。而奪之國。與操異者。幾希。既失天下義士之心。而北向長驅。欲四方響應。難矣。頼襄曰。嗚呼。是可以論正平之事矣、足利尊氏。雖不及曹操之能。其以譎詐馳驟一時。地廣兵多。什倍南朝。南朝特仗其信義。與之相形。庶幾可匡復耳。尊氏有事關東。而慮於我。來講和。廢其所立。用我年號。請乘輿復闕。雖非出實情。而見其跡。亦以好逆也。奈何佯許而遂襲之。爲所謂扼吭拊背之計。因執同姓。以爲功乎。曰。知尊氏之詐也。曰。彼以詐。我亦以詐。可乎。苟知其詐。勿許。可也。許而襲之。曲在於我。師壯於直。而老於曲。宜。其一勝而終敗也。劉備唯無措足之地。故不能不取益州。論者猶非之。南朝既有和・紀・河・泉之地。其險沃彷彿蜀漢。而藩服忠義。東西應援。何必取一彈丸之平安。以失信義於天下。自棄其所恃以勝賊者。恢復之無成。果誰罪歟。不寧唯此。前焉納直

義之降。佐之以攻其兄。後焉許直冬之請。驅之以攻其父。時氏・氏淸之屬。皆彼之叛臣。來輒受之。嗾之北向。蓋天下望南朝。爲逋逃淵藪。其詭譎不正。不知與足利氏孰伯仲也。而何以激天下之心乎。曰。雖然。蘇軾之論又有言。曰。曹氏父子兄弟。有可間之勢。使其大臣骨肉。內自相殘。然後擧兵伐之。孔明既不能全其信義。又不能奮其智謀。故屢戰而屢卻。爲失機也。夫南朝非亦乘其機。而奮其謀也耶。襄曰。不然。彼謂間而後伐之耳。足利氏大臣骨肉。既內自相殘矣。不待吾間之而然也。則吾整我堂堂之義旅。伐之可矣。何必助其子弟。攻其父兄乎。當時源親房。稱爲賢相。或比之諸葛亮者。而又賛其謀焉。親房嘗論保平之亂。父子兄弟之相攻。曰。名敎之斁。亂所以不已也。今自斁名敎。以開亂源。何哉。

秋八月。足利義詮立彌仁親王。稱帝。是爲後光嚴院。初後醍醐帝以僞器授光明帝。及亂。又亡。衆議。無神器。不可踐祚。關白藤原良基曰。尊氏劍也。良基璽也。何不可。遂立之。　九月。山名時氏歸順。

八年。癸巳〇北朝文和二年。　夏六月。詔。遣左馬頭楠正儀等。助時氏。攻京師。足利義詮奉新主。走近江。

秋。尊氏西歸。與義詮合兵。復入京師。時氏走。初佐佐木道譽。世領近江。助尊氏逆。又以近江。

數救義詮。義詮甚寵之。專權。男山之役。時氏子師義。最有功。因要賞。欲得邑若狹。數造道譽。道譽方宴。竢至日暮。怒曰。吾得邑。何必待汝輩哉。遂父子來降。請北伐。事不成。走歸其國。

九年。甲午〇北朝文和三年。夏四月。准大臣源親房薨。親房具平親王後。大納言師重子。家稱北畠。以博洽聞。嘗讀司馬光通鑑。有感。著神皇正統紀。三子顯家・顯信・顯能竝勤王事。顯能孫世領伊勢。每屬官軍。　先是。足利直冬遣人行宮。乞降。請攻京師。許之。賜號總追捕使。　冬十二月。山名時氏・桃井直常・足利高經等竝應之。奉之爲主。再攻京師。義詮出。拒播磨。直冬進。至丹波。尊氏走近江。

十年。乙未〇北朝文和四年。春正月。直冬等入京師。　二月。敕遣大納言藤原隆俊等。助直冬。據男山。尊氏以近江兵。據叡山。細川賴之。舉南海兵。援義詮。東上。官軍及時氏逆擊之神南山。敗績。

三月。官軍及直冬。與尊氏戰京師。敗退保男山。義詮絕直冬粮道。直冬・時氏・直常・高經等。各引還。尊氏・義詮復入京師。　秋八月。征東將軍宗良親王。起兵信濃。諏訪某・仁科某等。應之。

十一年。丙申〇北朝延文元年。春正月。足利高經降足利尊氏。

十二年。丁酉〇北朝延文二年。春正月。還光嚴・崇光二主及直仁親王。先是。已還廢帝。

十三年。戊戌〇北朝延文三年。夏四月。足利尊氏卒。義詮嗣。秋。左兵衞督新田義興。募兵武藏・上野。足利基氏將畠山國淸。使人誘殺之。

十四年。己亥〇北朝延文四年。肥後守菊池武光。奉征西將軍懷良親王。與賊將少貳賴尙。戰于筑後河。大破之。初菊池武時勤王。子武重又奉懷良親王。數與大友氏時・少貳賴尙等戰。武重卒。弟武光嗣。攻足利氏筑紫彈代一色直氏。走之。氏時・賴尙望風降。是歲春。討畠山國久於日向。走之。氏時・賴尙叛。作九寨。絕其歸路。武光返擊。悉拔九寨。　秋八月。與賴尙大戰于大原。破之。賴尙走。保寶滿岳。中納言北畠顯信等戰沒。　冬十月。賊將畠山國淸。大擧關東兵六萬。西上。與足利義詮合。犯行宮。

十五年。庚子〇北朝延文五年。春正月。左馬頭楠正儀。請帝幸觀心寺。自據赤坂。修平岩・八尾等砦。守之。大納言藤原隆俊守龍門砦。　夏四月。賊將畠山義深。攻龍門。隆俊擊。破之。敕興良親王。率吉野兵。赤松氏範援之。興良叛。通賊。火穴生行宮。龍門陷。帝遣前關白師基。討之。興良敗走南都。興良。故兵部卿護良子。氏範。則祐子。　閏月。諸砦皆陷。　五月。賊令攻赤坂。和田正

武。夜斫賊營。不利。退保金剛山。賊軍引還。　秋七月。正儀等出兵攝津。畠山國淸來拒之。官軍又退。入山。賊亦還兵。初尊氏死。有流言。基氏通行宮。圖義詮。國淸因請自將南犯。以解嫌疑。其實欲已收兵權。儕輩皆疾之。正儀知之。建言。北軍不足懼。是時。仁木賴章已死。弟義長爲執事。與佐佐木道譽・細川淸氏等相軋。道譽因結國淸。除之。國淸亦疾義長專擅。誣其通南朝。遂還兵。攻之。義長言於義詮曰。諸將以臣爲名。以作亂也。義詮然之。因以義長兵自衞。道譽夜入。見義詮。勸其逃觀變。乃出。與義長聒語。義詮出自後門。奔嵯峨。比曉覺之。衆潰。義長走伊勢。諸將奉義詮。還。義長降行宮。　八月。官軍競起。北軍歸咎國淸。國淸時以狐皮蔽膝。時人爲之作狐媚歌。唱者滿衢。國淸懼。逃東歸。後基氏逐之。用上杉憲顯爲執事。

十六年。辛丑〇北朝康安元年。　秋九月。楠正儀・和田正武出兵攝津。與佐佐木秀詮・氏詮戰。斬之。秀詮・氏詮竝道譽孫。先是。道譽奪赤松光範攝津守護。使二孫守焉。至是竝敗死。　冬十月。細川淸氏歸順。先是。淸氏代義長。執事。道譽又忌害之。激之使反。又譖其有異圖。義詮信之。出居外。召兵。自備。淸氏使人自辨。不聽。乃走若狹。從討之。淸氏遂南走。奏曰。足利氏兵。西拒時氏。東備義長。臣請。乘其空虛。京師可復。楠正儀曰。元弘以來。官軍五復京。而不能守。力不繼也。

今欲取京師。臣一人力可辨。不必待清氏。唯恐已取復失。恥之。强戰併我所有。失之。宜養威力。徐圖匡復。朝議不聽。 十一月。敕正儀等大擧。助清氏攻京師。 十二月。義詮奉北帝奔近江。官軍焚諸第。道譽之走。戒守者。具酒食犒師。正儀報以甲馬。禁焚掠。已而時氏・義長。東西皆敗。義詮還兵。令赤松氏範。直侵行宮。官軍留京師。十九日。乃還。清氏走阿波。

十七年。壬寅○北朝貞治元年。 春。細川清氏據白峰。徇四國。 夏。山名時氏略地美作。遣兵徇三備。足利直冬以石見兵助之。時氏子師義。略丹波・但馬。 秋。足利義詮遣細川頼之。圖清氏。頼之守備未全。說以禍福。往復間。備成。乃絕之。挑戰。誘出斬清氏。自是細川氏・山名氏始大。 九月。菊池武光討足利氏彈代足利氏經。氏經敗。逃還。

十九年。甲辰○北朝貞治三年。 秋。北朝光嚴上皇崩。 是歲。大内弘世以周防・長門附義詮。因授二州守護。尋益以石見。山名時氏降義詮。請因領所略地。義詮許之。以時氏爲因幡・伯耆・丹波・美作五州守護。仁木義長・石堂頼房等。皆降義詮。

二十一年。丙午○北朝貞治五年。 足利義詮逐其執事足利義將。義將。高經子也。初高經子氏頼。娶佐佐木道譽女。細川清氏之叛。氏頼冀爲執事。而高經以後妻故。愛義將。薦爲執事。以其年少。

已代決事。高經有宿望。世望治績。而高經爲政。嚴刻。諸守護舊賦五十分一。更取二十分一。嘗宴諸將。道譽不會。而自張妓樂。高經銜之。會道譽欠賦。二歲。因罰之。奪其攝津守護。義詮造別第萬里巷。徵役諸國。赤松則祐坐功緩。亦削邑。則祐道譽壻也。道譽課京師戶租。修五條橋。過期不成。高經出私財。不日成之。於是。道譽與則祐及佐佐木氏賴譖高經於義詮。義詮密使氏賴徵兵近江。欲討高經。高經聞之。入見泣曰。老臣果有罪。一介賜死可。何煩徵兵。臣以不才。忘私利公。謗讟所叢。不敢愛餘年。唯恐將軍得殺耆舊名耳。義詮亦揮涙。久之辭出。義詮呼曰。衆怒難犯。卿且就國。高經以義將北歸。遣兵攻之。已而高經病卒。道譽多機智。善逢迎。自高師直後。獨錮權寵。家極豪侈。陷四執事。（蓋謂義長。清氏。高經。義將也。）而己每解脫。義詮欲以爲執事。及義詮病。基氏別有所薦。乃止。

二十二年。（丁未〇北朝貞治六年。）夏四月。足利基氏卒。子氏滿嗣。爲關東管領。　冬十二月。北朝將軍足利義詮卒。子義滿嗣。以細川賴之爲管領。輔之。先是。足利基氏薦賴之。義詮臨終。謂義滿曰。與汝一父。又謂賴之曰。付卿一子。賴之竭心。輔導。撰方正兼文武者。充左右。置髡者六人。以爲弄客。將士有便佞者。目爲毛童坊。斬辱之。於是。士風大革。

二十三年。戊申 應安元年。○北朝 春三月。天皇崩于住吉殿。葬後村上天皇。

長慶天皇

諱寛成。後村上長子。所出不詳。在位五年。改元二。曰建德。文中。禪位皇太弟。壽及葬地闕。

天皇即位于行宮。立皇弟熙成親王。爲皇太弟。 秋七月。左近衞少將新田義宗・式部大輔脇屋義治。起兵越後・上野。與上杉憲將戰。不克。死之。義治奔出羽。

二十四年。己酉 應安二年。○北朝 春正月。楠正儀叛。降北朝。 三月。楠氏族攻正儀。

建德元年。庚戌 應安三年。○北朝 春正月。脇屋義治出兵武藏・上野。與上杉朝房等戰。不克。奔信濃。

冬十一月。和田正武等討楠正儀。攻其城。

二年。辛亥 應安四年。○北朝 春二月。北朝主禪位於太子緒仁。是爲後圓融院。 秋八月。細川頼之遣其義子頼元。援楠正儀。入寇。

文中元年。壬子 ○北朝後圓融帝應安五年。 春二月。足利氏筑紫彈代今川貞世。與大內義弘合兵。攻肥後守菊池武政。武政奉征西將軍懷良親王。逆戰。敗之。武政。武光子也。

二年。癸丑 應安六年。○北朝 秋八月。天皇禪位於皇太弟。

日本政記　卷之十三終

日本政記　卷之十四

賴襄子成　著

後龜山天皇

諱熙成。後村上第二子。長慶弟。母嘉吉門院某氏。在位二十年。改元三。曰。天授。弘和。元中。禪位後小松。後三十二年崩。壽及葬地闕。

天皇。卽位于天野行宮。賊將細川氏春來犯。大納言藤原隆俊。屯兵天野。夜襲敵營。不克。死之。上移蹕吉野山中。

天授元年。乙卯○北朝永和元年　秋八月。少貳冬資應菊池武朝。與今川貞世戰。敗死。武朝。武政子。先是。武政卒。武朝嗣。爲肥後守。

二年。丙辰○北朝永和二年　秋七月。足利直冬降北朝。尋卒。

三年。丁巳○北朝永和三年。　秋八月。菊池武朝奉征西將軍懷良親王。與大內義弘戰。敗績。菊池氏族百餘人。死之。　是歲。高麗遣其使鄭夢周來。先是。我西邊不逞者。數侵高麗。高麗使來。見今

川貞世。請禁之。

四年。戊午〇北朝永和四年　秋九月。菊池武朝奉征西將軍懷良親王。與今川貞世戰託麻原。破之。

五年。己未〇北朝康曆元年　春。山名義理・山名氏清入寇。陷土丸・藤波・石垣三城。足利義滿出軍東大寺。徵近江・美濃兵。美濃土岐康行反義滿。義滿召兵鎌倉。討之。鎌倉執事上杉憲顯既卒。子憲春。繼爲執事。遣弟憲房將兵而西。會康行降。而止。義滿既壯。不聽賴之。政稍縱恣。失人心。氏滿因潛蓄異志。事覺。義滿乃止南行。以書讓憲春。憲春諫氏滿。弗聽。憲春憂懼自殺。氏滿驚悔。乃以憲房執事。　冬十一月。細川賴之寇伊豫。河野通直戰死。先是。義滿役諸將。大營室町第。稱花御所。驕奢太甚。賴之諫。弗聽。相嫌隙。近臣從而譖之。是歲夏。義滿聚兵幕府。遣使。罷賴之職。就國。賴之聞命。卽日上途。其弟業氏。勸其擧族訴屈。不聽則遂圖廢立。賴之不許。乃赴其國讚岐。已而義滿思其功。命總管南海。

六年。庚申〇北朝康曆二年　夏五月。小山義政起兵下野。與宇都宮基綱戰。破之。　六月。北朝光明上皇崩。

弘和元年。辛酉〇北朝永德元年　楠正儀歸順。

楠正成與子正行。竝盡忠王室。身殉國難。而正行之弟正儀。繼任大將。終叛降於賊。辱其家聲而不恥。幾乎無人心者矣。中興諸將。忠義無出楠氏右者。諸將子孫。未有降賊者。而楠氏如此。且諸將散處東西。爲聲援而已。藉使叛降。未必切行宮利害。楠氏世爲南朝藩屛。南朝得以抗强大之賊咫尺間而不亡五十年者。以楠氏在焉。一日無楠氏。是無南朝也。正儀爲王室之倚賴如此。而舍而降賊。與其臣僕比肩而不恥。孰謂正成之子・正行之弟而有此禽獸耶。爲楠氏惜者。謂之虛傳矣。然北朝志乘。顯然載其年月。不可滅也。且其族不義之而攻之。北朝爲出援軍。與王師戰。其跡亦不可揜也。賴襄曰。吾嘗紀楠氏之事。徵之南朝舊志。而散亡不詳。故不敢斷其虛實。曰。正儀蓋有深謀焉而已。已而反覆考之。雖未能覈其實。如有差得其情焉。何以得其情。曰。亦因其跡與年月得之也。後村上之正平廿三年。帝崩。長慶帝卽位。先是一歲。北朝以足利義滿爲將軍。細川賴之輔焉。後一歲。正月。正儀降。先見賴之。遂見義滿。其三月。和田氏族攻正儀。自是連年攻討。賴之請救之。諸將不肯。賴之恥其言不行。欲辭其職。乃發兵。而以其子弟爲將。後戰鬭之事。無所見者。十二歲。及後龜山之天授・弘和間。賴之遭讒見斥。而山名氏入寇。連陷河・紀諸城。而正儀

歸順。與山名氏戰。敗績。於是。南國之屬行宮者。獨存吉野而已。後又十年所。正儀蓋既沒。而賴之再任職。乃誅滅山名氏。間歲而南北之和成矣。初正儀數受命攻京師。細川清氏之降行宮。請攻京師也。正儀以爲不可。曰。取京師。臣一人力可辦。何借清氏。唯恐既取復失。恥之強戰。併我所有失之。宜養威力。徐圖匡復。是可以知正儀之本意矣。而賴之亦有弭兵之志。以爲。南人所以能數來者。賴於楠氏。欲除南患。莫若和楠氏。是以百方就議和焉。而正儀之意。與之克合。是時。長慶新卽位。銳意用武。敕東西諸將。一時竝起。蓋圖京師。如正平例。而正儀仍執前議。是以帝怒。令其宗族攻之。故正儀不能自立。姑爲此權時之計耳。其意如曰。今而與北戰。是自速亡也。然南無我則莫能戰。北有我亦不敢軼我而南。故正儀之爲背南嚮北之狀者。是以其一身。橫塞南北間。以存南而遏北也。賴之亦知其意。欲因以成前議。不然。何不遂究其南向之兵。而過十年乎。其被讒也。非曰其庇南乎。是以山名氏代之。疾南其鋒。而南不能支。正儀已失賴之矣。不可與謀矣。是以復背北嚮南。決意防戰。南朝之所以延殘喘十年者。豈非正儀歸順之效哉。及賴之再入。先變向南之賊。後成還北之議。及南北迭立之約違。怒而起兵者。楠氏之遺孽也。是可以知正儀之降

非其素心矣。自古老成之謀。不合少年推鋒之論。而讒間入焉。終以被背叛之名者多矣。如近世片桐且元之於大坂。可以見焉。正儀得非亦且元類也。嗚呼。使正儀而誠舍弱黨强。圖其富貴也。何以前此爲南朝百戰。不辭其徒勞。而至此忽降耶。又何以降於正平。而歸順於弘和耶。

二年。壬戌○北朝永德二年 春閏正月。左兵衞督楠正儀。與山名氏淸戰平尾。敗績。 夏四月。北朝主禪位於皇子幹仁。是爲後小松帝。 是歲。山名氏淸悉略和泉・紀伊。獨吉野屬行宮。

三年。癸亥○北朝後小松帝永德三年 足利義滿置僧錄司。創鹿苑院・相國寺。課諸國守護助役。

元中三年。丙寅○北朝至德三年 足利義滿定禪寺五山班位。

五年。戊辰○北朝嘉慶二年 秋七月。足利義滿巡遊南海・東海。

六年。己巳○北朝康應元年 足利義滿西遊至嚴島。遂如鎭西。舟遭風還。過讃岐。見細川賴之。尋召還京師。以其子賴元爲執事。而決於賴之。

七年。庚午○北朝明德元年 春。楠氏與山名・畠山戰河內落合。敗還。

八年。辛未○北朝明德二年 冬。山名氏淸作亂。犯京師。足利義滿討而破之。誅氏淸。初山名時氏爲五

州守護。時氏死。子師義・時義略地山陽。義理・氏清攻取南海。於是山名氏所領跨十州。世呼曰六分一。時義二子時熙・氏幸。分襲但馬・伯耆守護。師義子滿幸。與氏清譖之義滿。義滿乃遣二人。攻時熙・氏幸。走之。分與其地於二人。十月。時熙・氏幸潛入京師。訴冤。請復邑。義滿欲見氏清諭旨。氏清不見。義滿怒。會滿幸有罪。罷其出雲守護。復時熙・氏幸邑。滿幸往界浦見氏清。勸擧兵。氏清然之。十二月。滿幸擧丹波。義理以紀伊。並應氏清。氏清進軍男山。小林某諫之。弗聽。義滿會諸將議戰。守避孰可。或擧尊氏・義詮故事。勸其避。不聽。乃自陣一色詮範堀川第。令諸將陣內野。一軍陣東寺。爲犄角。大內義弘爲先鋒。戰最力。逆擊氏清。破斬之。小林某戰死。細川賴元等亦擊滿幸。走之。義理乞降。不許。後滿幸被捕殺。乃以山名氏地和泉・紀伊。賜於義弘。其餘盡分賞戰功諸將。獨氏幸所領如故而已。

賴襄曰。制馭天下。恩與威而已。恩懷之而威服之。相待而行。無恩則威不可以加。加之則怨我。無威則恩不可以施。施之則不德我。夫使之怨我。固不可。使之不德我。亦何以制馭之哉。足利氏之所以不能制馭天下者。無威而施恩也。夫足利尊氏非有智勇過人也。特因天下之厭王政而思武治。欲得一將種門望最高者。推戴之。各自分利耳。尊氏亦知之。

是以割土地。頒金帛。務充其欲。惴惴然唯恐彼之觖望背我而去也。然背焉而去者。足利踵也。而不能禁也。既背復來。不問也。數背數來。坐成强大。不能削也。無他。彼其初受封得賜。狃以爲當然。而不以爲德。一有不便於己。掉臂而逝。饒使責而讓之。彼必曰。汝已叛其君矣。何以禁吾叛汝哉。是尊氏・義詮所以不能責諸叛將也。然既施之以恩。是我之恩也。被我之恩。而叛於我。我罰之而有辭。何所恤乎。況彼之所恃以叛我者。土地也。甲兵也。皆藉吾所予。用以反噬我。是可誅殛無釋者矣。是義滿之所以用戈於氏淸・義弘而不疑也。足利氏之威。於是始加天下矣。而後其恩能使人德之。非復如前二世也。昔者。唐氏姑息藩鎭。叛將强臣。羅列天下。如不可措手者。至於憲宗。平一淮西。而諸鎭震慴。恩威並行。韓愈稱其唯斷以成之。義滿雖不倫於憲宗。其斷以成之一也。是故人主患不斷耳。苟有以斷於中。何紛亂之不可治也。雖然欲斷之。必先謀之。不謀而斷。其斷不可達。適足以損其威耳。故貴於謀。謀必有所與者。義滿有細川賴之與謀。猶憲宗之有裴度。所以能達其斷也。尊氏任高師直。如代宗之元載。義詮寵佐佐木道譽。如德宗之盧杞。所與謀如此。而惡乎斷。

九年。壬申〇北朝明德三年 夏五月。足利義滿令畠山義深攻諸城。楠氏亡。 冬十月。義滿使大內義弘・六角滿高來請和。曰。駕還授器。則兩統更立。如故事。許之。二十八日。丙子。車駕發行宮。羣臣戎服扈從。閏月二日。己卯。御大覺寺。義滿欲用來降禮。遣使奏請帝。帝曰。朕欲用父子禮相授。否則寧以神器斃。不肯屈下以辱祖宗也。滿高謂義滿曰。神器在彼。彼卽眞天子。不可違也。

兩統分立。五十餘年。至此而合矣。當其未合。孰爲正。孰爲閏。或曰。神器在南。南爲正。賴襄曰。不然。夫神器之在南。宜也。儻使在北。北爲正乎。南之所以爲正者。不在神器之在焉與否。夫後醍醐天皇爲祖宗復仇。雪王室之大恥。而猾賊再起。以其不使於己也。更有所擁立。成兩帝爭統之狀。而己成志於其間。曰。吾非爭天下於天子。天子與天子爭也。天下之趨利無恥者。靡然服從。亦曰。吾仕北朝天子。非從足利氏也。不知其所仕者。乃足利氏所門生視之也。豐仁親王之立也。至當時民間曰。王無一戰之功。而將軍賜之帝位矣。夫如此。假使神器在於北。得謂之正乎。是以少有人心者。皆相率以就於南。公卿然。武人然。愚夫氓隸亦然。而況於神器之靈乎。其不在於北。而在於南。宜也。祖宗之所誘爲也。天道也。

而北人强詞求勝之曰。尊氏劍也。良基璽也。夫無劍無璽可矣。必以賊爲劍。以無恥無義之大臣爲璽。而謂之朝廷。是忠臣義士之所以不欲立焉。非以其無劍無璽也。而其立於南朝。亦非以其有劍有璽也。夫南之俸祿。不如北之利也。其官爵不如北之有權也。而相與共其艱難。折首殞躬。肝腦塗地。子孫殲於賊手。澌盡灰滅。而不肯背南而嚮北。有識之士患之也。是以擧南北合一之議。欲以慰其心而弭其禍也。抑後醍醐念祖宗濟民之心。不勝其樂位伸欲之志。求成此志也。而使天下之忠臣義士。公卿武人。愚夫氓隷。被此禍於五十餘年間。祖宗終不右此也。是以終絕其胤。而神器歸於北朝。傳祚無窮。亦天不忘祖宗之德。而眷其裔孫也。及至於此。何必論彼此哉。自天與祖宗視之。一也。而足利氏猶曰。此吾家所立也。彼仇之者也。世之無識者。又追斥南朝。呼其忠臣義士爲國賊。顚倒是非。如此。不知。忠於南朝者。非特忠於南朝也。忠於祖宗也。微此輩。足利氏不肯顧公議。以戴皇族也。則此輩謂之忠於北朝亦可也。足利氏滅。而皇統儼在。天下之心。莫不仰嚮。而神器奠安於千載。此輩亦可以瞑矣。襄故曰。祖宗之意。天人之心之所嚮爲正統。正統所在。神器歸之。非神器所在。正統歸之。

或謂頼襄曰。子之論正統。似也。抑子非亦北朝之臣子乎。何不諱。曰。何居。子所謂北朝安在。曰。今朝廷是矣。襄曰。於戲。今朝廷者。神武以還。大一統之朝廷也。何以曰北。曰北者。延元・元中間。天子南遷。而賊臣私立君。當是時。南則正。北則僞。事南者榮。事北者辱。故不得不別其稱也。已而天悔其禍。祖宗誘其衷。講和議。成南北混一矣。夫以後龜山之瑣尾流離。其授神器也。不肯從降式。必用父子禮。足利義滿之兇威。而不能奪也。於是後小松始傳器受禪。尊後龜山爲太上天皇。事懿禮善。足以盪滌前此分派之陋。上承列聖之統。而下顯示後世。蓋天與祖宗。實佑之。非足利氏之所能爲也。雖其後內有紛紜。而天命大定。以至于今。賊臣之蟠據輦轂。濁亂朝廷百餘年者。畢伏誅竄。朝廷復其淸明。大其一統。如日月再中天。而山河皆明也。而何苦猶汚其口吻。曰北曰北耶。夫曰北。則見其爲足利氏之門生。而以小朝廷自處也。此非臣子之當諱者哉。今夫執童孺問之曰。汝義貞・正成徒也。則欣然喜。曰。汝尊氏屬也。則艴然怒。今自稱北朝。則勢必以足利爲定策國老。而以新田・楠爲賊。甘背天下人心。萃萬衆唾罵。何哉。夫天與祖宗。既已援之升於天矣。而不欲就。以冢中枯骨介意。而猶陷厠溷糞穢之中。終古不肯洗滌。是所謂自賊。賊其君者也。余則

不敢。乃臣子之心已。此義不明。則萬世之後。天地再變。復有姦雄如足利氏者。擁立其所私便。則今之自稱北朝臣子者。將胥率從之。是亦生一北朝也。吾懼焉。不可以不辯。

後小松天皇

諱幹仁。後伏見玄孫。北朝後圓融長子。母通陽門院。藤原氏。內大臣公忠之女。在位二十九年。改元五。曰至德。嘉慶。康應。明德。應永。禪位皇太子。後三十二年崩。壽五十七。葬泉涌寺。

冬。閏十月五日。天皇受神器於後龜山天皇。嗣其位。藤原師嗣爲關白。如故。　十一月。宴於禁中。留十餘日。還御大覺寺。尋上尊號太上天皇。　十二月。征夷大將軍義滿爲左大臣。是歲。相摸守細川賴之卒。義滿問其所欲言。曰。臣每憂山名氏强大爲後患。今已誅鋤。臣可以瞑矣。復何言哉。義滿惋惜。親臨送葬。時論韙之。

明德四年。癸酉夏四月。後圓融上皇崩。

應永元年。甲戌冬十一月。關白師嗣罷。以左大臣藤原經嗣爲關白。　十二月。征夷大將軍義滿奏請。讓職於子義持。以義滿爲太政大臣。義滿請大政大臣。朝議謂平相國以還。武家無昇此官者。義滿怒曰。天子我家所立。而不我聽。則廢而自立。以細川・畠山爲攝家・淸華。誰能

禁レ我。朝廷懼許レ之。

二年。乙亥夏六月。義滿辭二太政大臣一。削レ髮曰二道義一。

四年。丁丑義滿營二別業北山一。起二金閣一。徙居焉。稱二北山殿一。又造二一殿禁內一。每レ朝就取レ安。稱二小御所一。每レ造レ朝。公卿皆下レ階拜跪。嘗游二叡山一。擬二上皇行幸儀一。

五年。戊寅春正月。崇光上皇崩。　三月。關白經嗣罷。以二前關白師嗣一爲二關白一。　冬十一月。鎌倉管領足利氏滿卒。子滿兼嗣。爲二管領一。

六年。己卯夏。師嗣罷。以二經嗣一爲二關白一。　冬十月。大內義弘作レ亂。擧二周防・長門兵一。東據二界城一。土岐詮直・山名時清等應レ之。前大將軍義滿出二軍男山一。遣二畠山基國・細川賴元・斯波義將等一。將レ兵三萬討レ之。十二月。諸將攻拔レ城。斬二義弘一。詮直・時清等皆平。初今川貞世鎭二筑紫一。威惠竝行。義弘說レ之曰。方今自强者興。守レ節者替。公宜下與二我及大友氏一連結。以自强上。貞世不レ聽。義弘慚懼。反譖二貞世有二叛心一。義滿頗惑レ之。召二還貞世一。之二其國遠江一。義弘代任。兵力日强。是時。鎌倉管領滿兼嗣立。凡事准二擬京師一。自稱二將軍一。第曰二御所一。執事稱二管領一。義滿遣レ使誚レ之。不レ服。遂有二異圖一。義弘潛通レ使合レ謀。欲二東西夾攻京師一。滿兼又陰招二貞世一。貞世封二其書一。上二義滿一。及二義弘東上一。滿

兼亦出軍武藏府聲言援京師。義滿諜知之。欲討之。上杉朝宗百方講和。乃授以足利莊。凡與謀者。釋不問。事乃寢。此役或勸義弘。及四方兵未聚。急攻京師。義弘曰。山名氏清唯長驅。自疲其兵耳。乃大修城塹。然終敗。及亂。義滿召貞世曰。吾甚愧見卿也。又欲用以鎭筑紫。辭焉。或譖其通鎌倉。貞世懼還遠江。事得白。又召至京師。待之如初。貞世父範國爲駿河・遠江守護。長子範氏早死。貞世爲嗣。及父卒。不肯立。立兄子氏家。傳兄孫泰範。細川頼之以是知其賢。薦爲彈代。義滿使泰範割駿河與貞世。泰範意貞世所請。故與義弘俱譖之。至是。以貞世養子。爲遠江守護。

頼襄曰。吾既論足利義滿善用威。非如其父祖之有恩無威也。雖然。猶惜其善於用威而不善於恩耳。義滿之用威。其最大者二。曰。誅氏清之叛也。曰。夷義弘之亂也。可謂武矣。而何如不使其叛且亂乎。使其叛且亂者。義滿所致乎。曰然。夫山名氏數叛於尊氏・義詮之世。每叛。有所侵略。既服。因而有之。是以至有海內六分之一。義滿不行削讓。而又加河內・紀伊。是氏清所以能叛也。幸而其子弟分領其國。其勢不合。義滿因得施誅鋤之計。否則難制也。其於大內氏亦然。大內弘世乘亂。擅有周防・長門之地。賂於義詮左右。得授二州

守護。又加以石州。既已强大矣。至於義弘。又譖今川貞世。得代其任。經略鎭西。故又加筑前。及賞誅氏清戰功。又加和泉・紀伊。是義弘所以能作亂也。夫義弘雖雄跨西道。不得紀泉。何以能作亂畿甸哉。雖然。作亂畿甸。在義弘爲失計矣。義弘嘗欲與大友・今川二氏連結。以謀跋扈。今川氏不肯而止。使果如其計。則義滿夷之。必費歲月。不能如拔界城之速也。果擧兵畿甸乎。亦擧之於義滿薨後。則義持之不武。何以制之。是亦義弘之失計也。義弘之失計。義滿之幸也。然則義滿之能誅夷二氏。雖由其武。抑亦有幸焉。誅夷之不可必也。而其叛且亂。則可必。養之使能叛亂也。故曰。雖善於用威。而不善於用恩。義滿罵義弘曰。豎子。恃其强大。不知迺公使然。則義滿亦自知之矣。而爲之何哉。豈未免襲父祖之遺習耶。或曰。加授泉紀於二人者。圖南朝也。猶近時織田信長之使諸將各取敵地。以自封也。襄曰。譬之使鷹。信長縱其饑者爾。義滿則縱既飽者。彼寧肯爲我趨搏哉。將反搏我耳。

八年。辛巳義滿遣使通好於明。參議菅原秀長作書。書辭甚恭。

九年。壬午明主允炆使來。封義滿爲日本國王。義滿受之。

十三年。丙戌明主棣使來。義滿厚贈謝之。

十五年。戊子夏四月。關白經嗣罷。以左大臣藤原忠嗣爲關白。 五月。前征夷大將軍大相國義滿薨。年五十一。敕。贈太上皇號。義持辭不受。

十六年。己丑鎌倉管領滿兼卒。子持氏嗣。爲管領。

十九年。壬子秋八月。天皇禪位於皇子實仁親王。諸南朝遺臣請立後龜山帝後如約。不聽。於是。南朝餘孽。所在起兵。尋皆平。

稱光天皇

諱實仁。初名躬仁。後小松長子。母光範門院。藤原氏。贈左大臣日野資國女。在位十六年。改元一。曰正長。崩。壽二十七。葬泉涌寺。

八月。天皇受禪。時年十二。尊先帝。曰太上天皇。聽政院中。藤原敎經爲關白。

二十一年。甲午冬十二月。天皇卽位於太政官廳。

二十三年。丙申鎌倉管領持氏。罷其執事上杉氏憲。以上杉憲基代之。氏憲憲房之後。世居山內。憲基憲房兄。憲顯之後。世居扇谷。更爲執事。稱兩上杉。持氏與氏憲有隙。奪其權。冬十二月。氏憲奉持氏弟持仲作亂。攻持氏。持氏奔駿河。依今川氏。

二十四年。丁酉春正月。義持令關東諸將援持氏。攻復鎌倉。誅持仲・氏憲。

二十五年。戊戌春正月。大將軍義持殺其弟大納言義嗣。初義滿愛義嗣。請超遷其官爵。居北山第。勢威出義持右。及鎌倉事起。與氏憲通謀。將襲幕府。事覺。遣兵圍之。削髮出亡。至是。獲殺之。

賴襄曰。足利氏之所以能得天下者。由其多割土壤。與諸將不恡。而所以不能治天下者。亦由於此。尊氏・義詮創業於南朝未衰之時。勢不能不然。至於義滿。天下戴足利氏之久。而南國日蹙。又能戡內亂。威令大振。不乘此時以裁制之。而仍襲父祖之遺習。動輒舉數州加授將帥。賞而授之。猶可也。又有貶而授之者。豈姑息以希無事乎。抑欲驕而斃之乎。可謂無術者矣。而何以治天下。異時嘉吉・應仁之禍。已胚胎於此。不可不察也。夫治天下。譬若縛薪。薪大而少。不若小而多之易縛束也。故縛薪者。逢其大而難縛者。析而小之。治天下者。逢諸侯之大者。亦析而小之。然後可使聽我約束。足利氏不知此術。宜乎。其不能治天下也。其於將帥。既然。於宗族。亦然。尊氏之封少子以八州。強大其力以制敵國。而鎮壓諸將。亦不得不然之勢也。而其後恃其強大。每有圖宗家之意。將帥懷異者。亦覬戴之爲名。足以煽衆心。義滿不能究。纔賴其宰臣調停之。輒有所加恩。既加足利莊。又加陸奥・

出羽。或出彼之請。不能拒耶。不然。八州已爲天下勁兵處。而加以奧羽。其大極矣。不唯不能殺之。乃豐之如此。將何以制之。夫宗族之封。父祖之所授。不得無故殺之。固也。然大內之亂。關東黨援之。已有明證。加之讓削。我豈無辭。怨而叛焉。彼曲。我直。異日義敎之舉。固義滿所優爲也。既克。改立其胤。誰曰不可。卽不能然乎。所謂析而小之。不爲無術也。諭旨推恩。封其庶孼。以分其勢。是賈生・主父之所以策漢也。夫人情莫不愛其子。而子非一人。全傳一子。不若分傳數子之樂也。因彼之所樂。以施我術。何難爲之有。而義滿不爲也。不特不爲之於其宗族。亦不爲之於其家。何者。義滿愛少子義嗣。崇高其位望。而不爲之所。是以招義持之猜嫌。夫封建海內。宗族臣隸之邑。各跨數州。而己之子弟。無尺土之安。可不謂愼也。義滿何不以其所加予鎌倉者。以予義嗣乎。則可以制鎌倉。而絕宗府之嫌矣。是一舉而兩得者也。誰憚而不爲之。或以明德・應永兩役之所沒收。不以盡予諸將。而以封子弟。使犬牙相制。亦不必忤物情。不知出於此。乃使義嗣死於義持之手。義持亦懲於此。盡僧其諸子。是以有還俗之將軍。關東不服。至稱兵相圖。幸而得克。失其藩維。足利氏益孤立。而其臣隸益無忌憚。各憑強大。以相噬攫。而不可制。以至失其天下。豈非不知術

之過哉。賴襄曰。不獨足利氏也。豐臣氏之所以得天下而旋失之。如此。

二十七年。庚子秋。義持有疾。或告呪詛事。夷卜徒。獲罪處流。朝臣亦有坐廢黜者。

三十年。癸卯春二月。義持辭征夷大將軍。詔以其子義量襲職。義持薙髮稱道詮。

三十一年。甲辰夏四月。前太上天皇崩。後龜山

三十二年。乙巳春二月。征夷大將軍義量薨。前大將軍義持再視事。

三十四年。丁未冬十月。赤松滿祐據其邑稱兵。前大將軍義持遣諸將討之。不發。十二月。赤松持貞自殺。赦滿祐入京師。持貞滿祐族也。有寵於義持。爭邑相訴。義持庇持貞。滿祐怒。自焚其第。奔歸播磨。遣諸將討之。諸將素疾持貞。連署訴之。請赦滿祐。義持不得已許之。持貞自殺。召還滿祐。

正長元年。戊申春正月。前征夷大將軍義持薨。初義持懲義嗣。悉使諸弟爲僧。及義量早世。無子。衆議立鎌倉管頭持氏。持氏聞喜之。管領畠山滿家。探籌石清水祠。得義圓。義圓時爲青蓮院僧正。義持同母弟也。即迎入室町。改名義宣。後改義敎。即日敍爵。　秋七月。天皇崩。上皇議。立崇光帝曾孫彥仁親王。初崇光南遷。後光嚴以弟立。傳至帝。崇光子孫退居伏水。至

是。得出受統。後龜山皇子。冀立不得。怒奔伊勢。明年。北畠氏・越智氏。奉之起兵。足利氏擊平之。以皇子歸。置之嵯峨。

後花園天皇

諱彥仁。後伏見五世孫。北朝崇光曾孫。父曰貞成親王。母敷政門院。源氏。贈左大臣經有女。在位三十六年。改元八。曰永享。嘉吉。文安。寶德。享德。康正。長祿。寬正。禪位皇太子。後六年崩。壽五十二。葬泉涌寺。

七月。天皇踐祚。甫十歲。關白藤原持基攝政。太上天皇後小松聽政院中。

永享元年。己酉春三月。以足利義教為征夷大將軍。以正長號於將家為凶。奏。改元。鎌倉猶用正長號。

二年。庚戌徙筑紫豪族於京師。

三年。辛亥春三月。太上天皇落飾。稱法皇。　是歲。大將軍義教游伊勢・紀伊。制置南朝遺族。

四年。壬子秋。義教游駿河。託觀富士山。實伺察鎌倉也。

五年。癸丑冬十月。法皇崩。　葬後小松天皇。　是歲。義教遣使於明。明使與我使偕來。

七年。乙卯秋八月。叡山僧徒有訴。入京師。幕府遣兵。防禦之。

十年。戊午秋九月。鎌倉管領持氏。逐其執事上杉憲實于上野。　冬十月。大將軍義教下敎關東。發兵。助憲實擊持氏。　十一月。執持氏。囚于永安寺。

十一年。己未春二月。攻殺持氏。令上杉氏管領關東。初持氏冀將軍。不得。居常憤憤。曰。吾何屈還俗將軍哉。憲實驟諫。弗聽。上杉憲直・一色直兼因譖憲實。持氏令二人徵兵。兵多屬意憲實。不爲持氏用。持氏不得已。自造山內。面諭憲實。歸罪憲直。憲直逃藤澤。事乃釋。持氏冠其子賢王。故事鎌倉管領子元服。必受將軍偏諱。持氏不屑之。名曰義久。諸將皆賀。憲實不賀。出奔上野。訴之京師。義教以故上杉氏憲二子持房・教朝。爲大將。分道東伐。與憲實合。關東將士。多應憲實者。持氏立其子義久。使三浦時高輔之。守鎌倉。自軍武藏。當教朝・憲實。遣上杉憲直防持房。持房大破憲直于早川尻。進逼鎌倉。三浦時高叛通京軍。執義久。諸軍合圍持氏。持氏兵散亡。窮蹙欲自殺。憲實遣使止之。諭諸將解圍。持氏削髮徙永安寺。憲實歸罪憲直・直兼。誅之。馳使京師。請宥持氏死。弗聽。至是使諸將逼持氏自殺。命憲實爲管領。憲實固辭。使弟清方嗣家。居山內。自削髮。退居伊豆國淸寺。

賴襄曰。足利氏開軍府于京師。而置宗藩于鎌倉。鎌倉之有上杉氏。猶京府之有細川氏

也。皆有輔佐之功。而亦有逼犯之禍。細川猶有畠山・斯波之僚。足以相制。至於上杉。獨任世襲。如二君焉。焉得無禍哉。然頼其分爲兩家。更任執事。是以爲之上者。得以暫安耳。而京府則利其危也。如尊氏自封其子。無論已。自義詮・義滿。族屬漸疏。每與鎌倉相圖。故誘上杉氏以制之。而上杉氏亦援京府以爲重。君臣之際。常有嫌隙。爲將軍者。以爲是彼之不利。而我之利也。獨上杉氏憲之叛持氏也。將軍義持不援氏憲右持氏。何也。氏憲之黨有義嗣。義嗣者。義持之弟。其所深忌也。故右持氏除氏憲。其心私也。而其跡則公矣。足以服關東將士之心。及義敎之繼爲將軍。持氏亦與執事憲實有隙。則右憲實以斃持氏。蓋義持無嗣。持氏冀立。而義敎脫僧服登壇。故其心不服。憲實以爲口實。訴之義敎。中其所忌。以得其援。義敎之意。必曰。吾乘此時。斃而滅之。父祖之所欲爲而未能也。而吾能之。其實非義敎能斃持氏也。持氏自斃於强臣之計也。而義敎右臣滅君。何以服將士之心哉。是以如結城氏朝者。奉持氏之孤起兵。亦命憲實平之。非憲實肯循義敎令也。自除其患也。其後將士再求遺孤爲主。而上杉氏更戴將軍之子。將士仍不之將軍之子。而之管領之子者。可以見人心也。故治天下者。常從人心所嚮。以成其事。事成而天下仰吾權。不從

人心所嚮者。雖克於一時。而未久而壞。壞則我權廢矣。觀義持・義教之所爲。不其然乎。爲義教計者。縱使不右持氏。攻而囚之。更立其子。或析其封以傳數子。誚憲實之不臣。代以衆望所屬。則一處置。而關東之心盡悅服。自是以往。廢置鎌倉君相。其權盡歸於京府。惜乎。義教之不足以語此也。義教已夷鎌倉。自以爲。無復足患者矣。愈益矜驕。以致將帥之不服。嘉吉之禍。應仁之亂。相因而作。子孫終爲細川氏之所弱。雖擁空名於上。而與鎌倉奚異哉。

十二年。（庚午）春正月。結城氏朝奉故管領持氏遺孤春王・安王起兵。討上杉氏。秋七月。上杉憲實以大將軍義教令。率諸軍攻之。

嘉吉元年。（辛酉）夏四月。結城城陷。獲春王・安王。氏朝擧族死之。　五月。大將軍義教。殺其弟義照。義照爲大覺寺僧正。與後龜山皇子親善。聞關東兵亂。勸皇子。乘是時以遂夙志。密遣人。約菊池氏起兵。竊自蓄髮。事覺逃匿。竟被捕殺。　六月。赤松滿祐弑大將軍義教。奔據其邑。秋八月。詔以義教子義勝襲職。遣諸將討滿祐。山名持豐與族教之・教清先進。九月。攻滿祐白旗城。誅滿祐。持豐等盡領赤松氏地。初滿祐族曰貞村。自叔父持貞。與滿祐相隙。義教寵

貞村。每事抑折滿祐。遂欲制滿祐所領。與貞村。滿祐積怨。因饗義敎其第。弑之奔播磨。管領細川持之。與畠山持國議立義勝。生八歲。細川持常受征討命。以與滿祐有姻。逗留不進。滿祐逆擊蟹坂。大破之。已而持豐破美作而入。遂滅赤松氏。持豐時熙孫也。滿祐兄子敎祐。逃依少貳嘉賴。幕府令大內敎世討嘉賴。破而走之。盡幷其地。山名氏・大內氏。復興。

叛逆罪也。逆至於弑。大罪也。故行弑逆者。不論而可。可論遭弑逆者之所以速之。足利義敎之所以遭弑者。安在。在其待將帥無恩意耶。驕而不加禮矣。信讒殺之矣。使人人自危。雖無赤松滿祐。而恐不免焉。賴襄曰。是所謂知其一。未知其二也。二者何也。曰。威權不立也。義敎之速此禍也。非由恃其威權太盛乎。如近時織田信長之遭弑焉爾。曰。信長則然。義敎則不然也。義敎自以爲威權已立。爲可恃也。不知足利氏之威權不立。非一世也。而恃之而不加恩意於其臣。所以速此禍也。夫恩意與威權。不可闕一。而義敎則兩無之。何以保其臣之不叛逆哉。夫人臣所以戴其君。以其有威可畏。有恩可愛。愛而畏之。是以無凌犯之禍。不然行道之人耳。何所不至。雖然。唯可畏也。而後可愛。可愛而不可畏。則其可愛者。終不久矣。今夫妻之於夫。亦猶臣之於君也。以義合者也。愛而不舍。以全其夫妻。人

人知之。不知非有所畏。則不可以全也。不畏則狃。狃則輕之。輕之之至。心驕於外。而疾視其夫。甚則陰斃之。以從其所私者。皆非初不愛其夫者也。不畏之者也。足利氏之將帥。皆如驕婦不畏其夫也。數叛而不禁。猶婦之數背其夫。旋歸其家。是以輕之益甚。加以怨隙。側目咆怒。不足怪也。如滿祐者。其尤者已。初義滿之世。威令稍振。諸將莫不敢戴上者。而義持庸懦。幸時無事。優游宴晏。寵赤松持貞。滿祐與之訴而不得直。怒焚其第。據邑而叛。下敎討之。而諸將不肯往。連署乞赦滿祐。不得已而聽之。足利氏威權。於是乎不足畏也。則滿祐之目。無將軍久矣。而義敎則以爲畏己。遇之無狀。至殺其女而不恤。復致其怨叛。幸而克降之。復赦而近之。滿祐憤怨塡胸。而義敎不以爲意。曰。大權在我。彼無奈我何也。於是。亦庇持貞之從子。欲諭滿祐割予之邑。爲滿祐者。何肯坐受其令哉。嚮叛焉。莫我能誅也。今弑焉。誰能禁我。是其所以敢剸刃於其君之腹也。諸將雖赴討。亦忸前役。逗撓不進。但山名持豐欲復興其家。故力攻耳。其餘。意皆在於縱賊。寧肯感奮進擊。必於復君仇乎。故足利氏之臣。唯無畏其君之意。是以又無愛君之心。故曰。威權不立也。然則威權之所以立不立者。何哉。曰。所行公則立。所行私則不立。如義持・義敎行小私也。如尊氏行大

私也。足利氏之大私。成於赤松氏。故禍先發於赤松氏。天也。足利氏或縱其臣之叛逆。而天則必不赦足利氏之叛逆。

二年。（壬戌）冬十一月。義勝加元服。任征夷大將軍。畠山持國爲管領。

三年。（癸亥）秋七月。義勝墜馬薨。管領持國議。立義勝母弟義成。生八歲。後改名義政。　九月。南朝遺臣藤原有光・資親・楠次郎等。奉後龜山帝皇子。爲主。稱中興宮。夜入禁內。奪神器。遣兵追擊。獲神鏡・寶劍。

文安元年。（甲子）秋八月。有光・資親。助南朝皇子。擁神璽。據叡山。大和・紀伊・河內兵。竝起應之。管領畠山持國。說山徒。爲內應。皇子自殺。有光・資親・次郎等死之。諸國應者皆平。

二年。（乙丑）冬十一月。關白持基薨。以左大臣藤原房嗣。爲關白。　細川勝元爲管領。　是歲。關東將士請。立故管領持氏季子成氏。爲鎌倉管領。上杉憲忠執事。憲忠憲實子。

四年。（丁卯）夏六月。房嗣罷。以太政大臣藤原兼良。爲關白。　冬十一月。畠山氏兵攻敗紀伊兵。殺南朝皇孫。傳首京師。皇孫後村上皇子泰成之子。先是。楠次郎弟某。奉之起兵。保紀伊湯淺城。至是。遇害。某死之。

寶德元年。己巳夏四月。義政加元服。任征夷大將軍。　是歲。畠山持國再爲管領。

享德元年。壬申冬十月。細川勝元再爲管領。

二年。癸酉夏四月。兼良罷。右大臣藤原持通爲關白。

三年。甲戌春。令士民不辨負債。稱平均德政。　秋七月。持通罷。左大臣藤原房平爲關白。八月。盜焚畠山持國第。初持國老。削髮曰德本。擁立二將軍。爵至三位。得乘網代輿。負功專橫。其家臣多爲不法。公卿將士。皆諂事之。獨山名持豐。勢不相下。細川勝元娶持豐女。相比與德本抗。德本無子。養弟持富子政長爲嗣。已而生義就。義就母日短政長。其母乃與醫卜謀。佯爲狂病。卜者曰。必有近親呪詛者。德本意政長所爲。是歲。夏四月。德本立義就爲嗣。欲殺政長。政長逃依勝元。勝元・持豐援政長。畠山氏家臣皆往從之。已而德本第火。德本逃入族滿則家。義就奔河內。依家宰游佐某。德本使人謝勝元。復立政長。自屛居建仁寺。勝元乃以政長入謁幕府。幕議知火畠山氏第者。勝元・持豐所爲。勝元歸罪家臣磯屋某。斬之以說。持豐又因勝元謝。退居但馬。事乃釋。　冬十二月。鎌倉管領成氏。殺其執事上杉憲忠。奔古河。成氏已長。怨上杉氏殺其父。與故結城氏朝子成朝謀。殺憲忠。家宰長尾景春等。立憲忠弟

房顯。兵攻成氏。成氏奔。房顯入鎌倉。自稱管領。

康正元年。乙亥夏五月。以赤松則尚爲播磨守護。山名持豐攻則尚殺之。先是。畠山德本以赤松氏不可絕祀。赤松滿則子則重。不與嘉吉之逆。因立則重。邑於播磨。持豐怒曰。吾以功受封。豈容賊徒遺種。發兵殺則重。則尚。敎祐弟也。細川成之請而立之。赴播磨。乘持豐之蒙譴退居也。亦爲持豐所擊殺。　六月。房平罷。持通再任關白。

長祿二年。戊寅秋八月。先是。中興宮之遇害也。南人復立其子。擁神璽。居吉野山中。赤松氏遺臣石見某等。往佯事。刺殺之。奪璽。還獻。請立赤松氏後。以赤松政則爲加賀守護。使石見率舊臣奉之。持豐又使盜刺殺石見。持豐削髮曰宗全。爲人面色赤。人呼曰赤入道。　冬十二月。藤原敎房爲關白。

寛正二年。辛巳冬十月。大將軍義政。遣其弟政知居伊豆。先是。兩上杉氏與足利成氏連年搆兵。關東大亂。因請得主。奉政知於堀越。稱堀越御所。然關東將士。多歸心成氏。

四年。癸未先是。畠山義就奔河內。畠山政長攻之。不克。義政兩和解之。共入京師。已而義就忤旨。復奔河內。細川勝元遣兵援政長。攻陷若江・金胎寺二城。圍義就於岳山。義就善守。累年

不下。是歲。岳山陷。義就逃入高野。　持通復任關白。

五年。甲申秋七月。天皇禪位皇子成仁親王。　是歲。大將軍義政奏。以其弟義視爲嗣。任左馬頭。敍從五位下。居今出川第。細川勝元管領。初義政娶藤原重政女。曰富子。無子。弟義尋爲僧。充淨土寺門主。義政欲養爲嗣。義尋恐其有渝辭。義政曰。吾後有子。襁褓爲僧。誓不渝也。義尋乃蓄髮。改名義視。

日本政記卷之十四終

日本政記 卷之十五

賴襄子成 著

後土御門天皇

諱成仁。後花園子。母嘉樂門院。藤原氏。內大臣信宗女。在位三十六年。改元六。曰。文正。應仁。文明。長享。延德。明應。崩。壽五十九。葬泉涌寺。

六年。乙酉春二月。天皇卽位於太政官廳。尊先帝曰太上天皇。持通關白如故。冬十二月。足利義視任大納言。敍從三位。

文正元年。丙戌義政子義尙以前年冬生。其母富子不欲僧之。而難渝義視約。又細川勝元輔之。難搖。念諸將抗勝元者。唯山名宗全。於是密召宗全託之。初宗全以女妻勝元。無子。養宗全子是豐爲嗣。已而生子。廢是豐。宗全不懌。赤松則尙之復邑。又意勝元所爲也。啣之。故受託不辭。稔聞畠山義就勇。與勝元相仇。因欲結焉。遂請赦之召還爲援。義政許之。時伊勢貞親爲幕府奏者頭。掌出納。甚有權。斯波氏無嗣。立族人義敏。其家宰不服。因貞親請逐之。立

義廉。娶宗全女。已貞親娶義敏妹。廢義廉。復義敏。宗全怒。將援義廉攻貞親。京師騷然。諸將居間和解。夏四月。貞親・義敏。皆奔。　冬十一月。義就被赦入京師。謁幕府。造宗全。極驩而出。十二月。地大震。

應仁元年。丁亥春正月。故事。大將軍歲首臨三管領以下宅。受饗。時畠山政長爲管領。治具請焉。不臨。十五日。臨山名宗全宅。已而宗全率義就・義廉以下諸將。詣幕府。請使政長避本第。納義就。許之。遣使諭旨勝元。勝元曰。臣將面對焉。使者復命。久之不至。遂與政長聚兵自備。宗全亦召兵守幕府。義政令曰。政長・義就宜各以手兵相決。諸將毋得援。義就曰。可也。十八日。義就擊政長于御靈林。宗全潛援義就。政長敗走。義就復入本第。世嗤勝元不援政長。以爲怯。勝元慚。杜門不出。勝元第在幕府東。宗全第在西。義視往來兩軍間。和解之。不聽。二月。宗全散遣其兵。勝元覘之。乃潛與族政之・師春・政春。徵所管攝津・丹後・和泉・淡路・阿波・讚岐・土佐・備中・三河兵。政長以河內・紀伊。斯波義敏以越中。京極持清以近江之半・飛驒・出雲・隱岐。武田國信以若狹・安藝。赤松政則以加賀。皆屬焉。兵凡十六萬。宗全聞之。亦與其族敎幸・敎清。發但馬・因幡・播磨・伯耆・石見・備前・美作兵。義就以大和及河內・紀伊故黨。畠山義

純以能登。斯波義廉以越前・尾張・遠江。六角高賴以近江之半。一色義直以丹波・伊勢。土岐成賴以美濃。皆屬焉。兵凡十一萬。兩軍絡繹入京師。京師人民。負擔奔竄。　夏五月。義政令曰。先戰者我敵也。一色義直第。在幕府前。勝元遣兵屯實相院。逼義直。義直走。勝元乃入幕府。樹其旗四足門。迎義視入府中。宗全怒攻實相院。不克。自是。兩軍交戰京中。東軍每勝。退保相國寺。又使赤松政則往收其故黨。　六月。大內政弘黨宗全。以周防・長門兵三萬東上。政則拒之尼崎。大敗。西軍復振。東軍每失利。　秋八月。勝元疑幕府近臣有爲西軍耳目者。請逐其十二人。十二人怒曰。內旨在西。西勝則咲。東勝則顰。何獨吾輩。勝元從殺之。又逆帝及上皇於幕府。　九月。西軍遣義就・政弘等。攻相國寺奪之。或說勝元曰。是吾東西受敵也。乃遣政長復取之。勝元請復伊勢貞親伺察幕府。義視素惡貞親。不自安。出奔伊勢。依北畠氏。

賴襄曰。應仁之亂。本於嘉吉之變也。夫家奴戕主人於衆奴中。而衆奴逡巡。莫能齟齬。有一奴焉。獨能奮前擊斃之。則擊斃之者。昂首橫行於衆奴中。而不可制固也。而爲家宰者。引之以排己所嫉者。嗣主人又引之以濟己之私。是授之權。以長其勢也。及其勢長。復欲

與之抗爭。則其鬪亂紛紜也固宜。自古國家之亂亡也。必由其威權陵替。紀綱廢壞。而英雄之人。樹大功其間。是以能操其權。遂至移其國者。皆然。今以足利氏之國勢如此。而桀驁悍惡。如山名宗全者。其功出一國之上。使宗全大過人者乎。其簒足利氏國也不爲難矣。異日之豐臣秀吉於織田氏是已。幸而無遠志大略。故止於橫恣無忌而已。雖然。當時之爲將軍管領者。所宜加之慮焉。荅之以恩禮。以靖其心。酬之以金帛子女。以充其欲。不可多與土地也。多與土地可也。不可授之權也。既與土地。而復奪之。既授權。而復爭之。乃大不可矣。夫賞宗全。盡領赤松氏地。使其同族之封相聚。已非慮之固者也。然猶曰。有不得不然者焉。又立赤松遺孽於播。以怒之而鬪之。何哉。彼怒而不直我。鬪而奪之。我何辭責之。正足以成其勢而失我權。況我固授之權乎。夫所謂授權者。何必其官職云哉。我倚託之。使彼爲輕重於我。是之謂授權。細川勝元。嫉畠山德本之資望。欲擠而代之。是以引宗全爲黨。與之結婚。又養其子。及德本之欲易嫡。乃與之幷力。陰助其子。以蹙其父。是管領授之權也。將軍義政既養義視。而欲復立己子。則亦藉宗全爲援。是將軍亦授之權也。夫德本之事私也。而宗全據公以排之。義政之事。亦私也。而宗全知私以援之。其乘焉以

執權逞志。則一也。勝元初與宗全結。以得其志。既而視宗全之勢殆出己上。亦知將軍之陰有託焉以軋己。於是。亦植黨以與之爭。而不知己先授之權。以至於此也。義政亦授之權。使與勝元爭。而已乃爲勝元所劫持。亦不能得宗全之力。所以應仁亂。陷天塗地。十餘年而不決也。後之爲國家者。不幸逢惡人之有功者。務善處置之。以服其心。則何患其不可制哉。雖然。不使國家之勢。至惡人之有功者。爲先務也。

二年。戊子春二月。藤原政嗣爲關白。　夏四月。義政以書招還義視。勝元等。又連署請。　秋九月。義視還。有飛語。勝元謀廢立。義政疑懼。將潛赴西軍。勝元乃使人將義視上叡山。宗全遣兵。迎取入西陣。自是兩軍。如將軍兄弟戰者。

文明元年。己丑秋。大內氏家臣作亂。大內政弘引還。赤松政則盡復播磨・備前・美作。

二年。庚寅冬十二月。太上天皇崩于室町。

三年。辛卯春正月。葬後花園天皇。葬儀不備。大將軍義政。徒步從之。　斯波氏家宰甲斐。弑其君義廉。宰朝倉誅殺甲斐。取越前。宰織田取尾張。義政令朝倉領越前。　是歲。上杉顯定攻拔古河。逐管領成氏。顯定房顯子也。

四年。壬辰畠山義統降東軍。通北國糧道。
五年。癸巳春三月。山名宗全死。年七十夏五月。細川勝元死。年四十四子政元嗣。冬十二月。大將軍義政致仕。子義尚嗣。甫九歲。敍正五位下。任左中將。拜征夷大將軍。畠山政長爲管領。七日辭。以畠山義統代之。賞降東軍功也。
六年。甲午秋九月。前大將軍義政贈書朝鮮。求明國勘合印。購明貨寶珍玩。
七年。乙未義政使使入明。
八年。丙申夏五月。左大臣藤原政基爲關白。
九月。丁酉春。天皇還宮。　冬。西軍悉解歸國。義視奔美濃。依土岐氏。畠山政長再爲管領。

賴襄曰。郡縣之世。患在於姦臣與叛民。而封建無之。非無之也。雖有之。而不至猝亡其國也。何者。諸侯各有其土地甲兵。其力足以內懾姦邪。而外禁盜賊也。然其力足以禁盜賊。而懾姦邪。故難制。制之以權。權在於上。則天下之勢分。以奉上令。權不在於上。則天下之勢合。而下恣其志。合者何謂。謂有黨。有黨。必有耦而爭。爭以其土地甲兵。故呑噬挐攫。數十年而不止。非如郡縣之存亡立決也。而爲之上者。既莫以制之。聽其或勝。或負而已。而

勝者或挾我。以取其勝。而及於既勝。乃終制我。我無如之何。是封建之通患。而應仁之亂。亦爲然。何由而然也。曰。喪權而已。何以喪權。曰。不公也。不一也。唯不公。是以不一。史稱。足利義政之令。斯波氏之嗣也。十年之中。二奪之。而二予之矣。畠山氏之續也。二十年中。三奪之。而三予之矣。予播於山名氏。賞其討滅赤松氏也。而復祿赤松餘孽於播矣。其不一也如此。此皆因請謁賄賂而然也。非不公而何。自以其弟爲儲貳。細川勝元傅之矣。而復援山名宗全。以軋勝元。其不一也如此。此由欲廢其弟。以立其子也。非不公而何。已亦知其不公也。是以宗全慫赤松氏子。以奪其邑。而不能禁也。勝元出怨言。盡除其左右爲西陣耳目者。而不能止也。而天下莫肯復奉其令者。夫苞苴陰行閨閫之間。襁褓之呱呱與枕席私語。浸漸於耳。而致兵戈之氣。塞天地之間者。十有餘年而不絶。蓋雖義政。始不自知其患之至此也。幸而渠魁兩斃。如無勝負。而細川氏終專其權。至廢置將軍。如奕棊然。羣豪相拚。海內分裂。至織田・豐臣氏。纔得混一之。其禍遠矣。雖然。室町以衰弱而得長存。非如鎌倉之速亡於姦臣者。何哉。封建郡縣之勢異爾。如豐臣氏。亦爲封建。其季世嬖寵亂政。亦以私易儲。而天下諸侯。陰各有所黨援。以至於亂亡。其勢乃與應仁同。其主之明

暗。雖大懸絕。其以不公不一以喪其權者。一也。而其亡速於室町者。新造之國也。

十年。戊戌冬十月。管領成氏復古河城。

十一年。己亥春二月。右大臣藤原政家爲關白　冬十一月。前大將軍義政。築東山別業。起銀閣。以擬金閣。徙居焉。稱東山殿。尋削髮。曰道慶。

十八年。丙午春。細川政元爲管領。　是歲。上杉定正殺其將大田道灌。時定正居相摸大場。上杉顯定在上野平井。交構兵。道灌有才略。築河越・江戶二城。招八州將士。將士多背顯定。歸定正。顯定縱反間。使定正殺道灌。將士又叛定正。定正失勢。求援於成氏。

長享元年。丁未春二月。藤原政忠爲關白。　秋九月。大將軍義尙。召六角高賴。不至。義尙自將討之。軍鉤里。

二年。戊申秋。政忠罷。以藤原冬良爲關白。

延德元年。己酉春三月。大將軍義尙薨于鉤里。年二十五義尙好學。嘗就前關白兼良。諮問治道。兼良爲著樵談治要。在軍中。猶講左氏春秋。及薨。遠近莫不哀惜。義尙晚改名義熙。無子。義政召義視於美濃。養其子義材。爲嗣。後改名義植。

二年。庚戌春正月。前大將軍義政薨。年五十六

賴襄曰。足利義政可謂喪其心者矣。以八歲童子。爲諸將所奉立。在職二十九年。乃讓位於其子。以就安。又十九年而終。通前後四十八年矣。而集我邦前後無比之大亂於四十八年之中。輦轂兵燹。蕩爲廣野。七道之內。無無戰者。誰致之歟。史稱。義政驕逸。其在職。窮極奢靡。至花亭之甍費六十萬緡。高倉第之障子値二萬錢。其佗稱之。上下相倣。競以侈麗相尙。是以民賦日倍。橫斂苛征。戶耗。田蕪。故事借富商金者。義滿時。歲四次。義教歲。十二次。至於義政。月八九次。又擧稱貸不償之令。號曰德政。故事每有大儀。課諸侯助役。概五六年一擧。猶病難給。義政時。五年而九擧。是以公私共困。怨讟四起。義政乃日恣淫樂於內。天下之政。委之傳宣之臣及妾媵僧尼之屬。請謁公行。號令牴牾。而外朝大臣。結黨相軋。見上令不便己者。持其曲直。公然罵詈而不從。紀綱壞廢。威權墜地。如此。夫如此者。處於祖宗厚澤善制之後。猶不能不亂。況如足利氏者乎。而義政概乎不察也。又以其私。託外臣之有力者。欲以濟之。以此啓亂端。兵禍驟起。己遂爲所劫制。傍觀戰鬪。心悸舌揚。不能出一語。以禁止之。幸得其兩敵交綏。如脫於械囚。亦可以少懲毖矣。而讓職之明年。

乃贈書朝鮮。求勘合印信。以求海外書畫珍寶。尋築別業於東山。興銀閣其中。有人心者而可能乎。正如唐德宗脫奉天之厄。而興瓊林大盈庫。彼猶有志削平藩鎮。不得其計。而懲於困乏。懲其所不宜懲。猶有說也。義政則直竭海內。以自奉。以致大亂。而不懲。又欲竭其未竭者。夫天託一人。養萬民。非取萬人。養一人也。故明王必躬勤儉。以恤天下。非苟爲美而已。懼負天託。而取其譴也。天子且然。況代天子。權宰天下者。烏可曰是吾有也。吾臣僕也。而奪其所以生活。以資己逸樂哉。而有不亂乎。不察於未亂。不懲於既亂。故曰。喪其心也。而得全首領。沒牖下者。何哉。曰。天疾足利氏深矣。欲歷其家。故生此喪心之人。又使不速死。以極其亂。亂不極。不足以歷也。

秋七月。義植任征夷大將軍。

三年。辛亥春正月。前大納言義視薨。　夏四月。左兵衞督政知。爲其子茶茶所弑。北條長氏討誅之。

明應二年。癸丑春二月。以藤原尚通爲關白。　夏四月。管領畠山政長。奉大將軍義植。擊畠山義豐。軍正覺寺。細川政元。與義豐合謀。攻之。義植脫身。走筒井。政長戰死。立故足利政知子

義澄。義豐。義就子也。先是。義就死。義豐嗣。據河內。常忌害政長。政長請而伐之。政元與政長爭權。因援義豐。初政知之被弑也。義澄奔駿河。依今川氏親。於是。政元稱義政遺旨。諸將莫敢異議。乃立爲主。閏月。攻義植。以歸。幽之。　六月。義植逃奔越中。遂西依大內義興。義興政弘子也。

三年。甲寅義澄任征夷大將軍。細川政元爲管領。　是歲。北條長氏略地相摸。取小田原。據之。

六年。丁巳冬十月。冬良復任關白。

九年。庚申秋九月。天皇崩。

後柏原天皇

諱勝仁。後土御門子。母准后源氏。權大納言長賢女。在位二十六年。改元三。曰文龜。永正。大永。崩。壽六十三。葬泉涌寺。

冬十月。天皇踐祚。冬良關白如故。　十一月。葬後土御門天皇。置柩於黑戶。四十餘日。然後克葬。

文龜元年。辛酉夏六月。以藤原尚通。爲關白。　是歲。義澄奏請。削前大將軍義植官爵。

永正元年。甲子秋、九月。上杉朝良與北條長氏合兵。與上杉顯定。戰于栝川原。朝良定正子也。

三年。丙寅秋九月。長尾爲景攻其君上杉房義於雨溝。弑之。房義顯定弟也。

四年。丁卯夏六月。細川政元家宰。香西元近弑政元。立政元養子澄之。秋七月。宰三好長輝以阿波兵。奉政元養子澄元。討元近。誅之。及澄之。立澄元。初政元無子。養藤原政基子澄之。又養族政春子高國。皆不稱意。更養族細川義春子澄元。澄元猶幼。在阿波。付長輝。輔之。元近恐澄元立。長輝專權。陰謀殺政元於浴室。聞長輝北上。城嵐山。拒之。敗死。長輝乃請以澄元爲管領。將軍義澄。輒從之。

五年。戊辰春三月。大內義興奉前大將軍義植。大擧東上。細川高國擧兵。應之。入京師。大將軍義澄奔近江。依六角定賴。長輝以澄元奔阿波。　夏五月。長輝與定賴。夾攻京師。長輝敗死。定賴引還。　秋七月。義植復任征夷大將軍。奏削義澄官爵。以義興爲管領。

六年。己巳冬。大將軍義植伐六角定賴。

七年。庚午夏六月。上杉顯定討長尾爲景。敗死於長森原。

八年。辛未秋八月。前大將軍義澄薨于近江。　是月。細川政賢擧兵。入京師。管領義興奉大將軍義植。避之丹波。義興還。襲政賢於舟岡山。斬之。義植還京師。

九年。壬申秋八月。北條長氏伐三浦義同。破之。

十年。癸酉春三月。大將軍義植伐六角定頼。敗還。

十三年。丙子秋七月。北條長氏陷新井。獲義同。

十五年。戊寅大饑。　秋八月。大內義興西歸。細川高國爲管領。

十六年。己卯秋八月。北條長氏卒。子氏綱嗣。

十七年。庚辰春二月。三好元長擁細川澄元。入京師。攻細川高國。高國敗走近江。發兵。還攻京師。澄元・元長敗走阿波。澄元尋卒。元長長輝孫也。後削髮。曰海雲。

應仁而還。足利氏之事。紛紛擾擾。不足復論也。綜其大略。以爲世戒云。足利氏之君臣。其事酷相似也。初畠山氏欲廢其義子。而立其子。足利氏與細川氏。亦然。是以成應仁之亂。足利氏立義尙。細川氏立政元。竝如其所欲。而畠山政長以義子立。爲管領。其所與爭立者死。其子猶存。政長害之。挾將軍。往擊之。所挾者。義尙所與爭立者之子也。蓋義尙之夭也。父義政召其舊所養義視。立其子義植。以義尙無嗣不得已也。是政長所挾者也。而細川政元稱義政遺旨。立義澄。義澄與義植。於義政均之姪也。義政豈有所愛憎哉。政元所

以矯旨。立之。欲排政長。而奪其所攝耳。猶其父勝元之與山名宗全戰。以賭義視・義尙之位。其意在排宗全也。而勝元未逞其志。而死。而政元成之。政元廢義植。殺政長。而己爲管領。專權十有五年矣。乃爲其臣所弑。何哉。初政元無子。養其族子二澄元・高國。以澄元付三好長輝。輔之。而香西元近欲排長輝也。是以弑政元。更立它義子。反爲長輝所誅。而三好氏專細川氏。義植・義澄之交爭者。至其子孫。以終足利氏。高國・澄元之交爭者。至其子孫。以終細川氏。澄元與高國。或助義澄。或助義植。而長輝子孫始助澄元及子晴元。敵高國。後又助高國之子。以排澄元之子。三好氏既亂細川氏矣。而三好氏之臣。有松永久秀者。亦亂其家。至毒殺其子。以立它義子。然後相與共弑將軍。而足利氏滅矣。賴襄曰。孔子論鄙夫之不可與事君。曰。未得。患得。既得。患失。患失則無所不至。今細川氏之事足利氏。志不在足利氏。而患己之得失而已。是以。其臣之事之者。志不在細川氏。一彼一此。唯己之得失。是視。而無所不至者。酷相似也。是豈細川氏之罪也。足利氏事王家也。爭其兩統。以便於己。亦由其志不在王家。而患己之得失。其源如此。宜其末流轉相倣傚也。故三好氏之臣之亂三好氏。猶三好氏之亂細川氏。三好氏之亂細川氏。猶細川氏之亂足利氏。

細川氏之亂足利氏。猶足利氏之亂王家。

大永元年。辛巳春三月。天皇即位。本願寺僧供資。以擧禮。因賞准門跡。是月。細川高國逐大將軍義植。奔淡路。夏六月。迎故大將軍義澄子義晴於播磨。秋七月。義晴任征夷大將軍。

三年。癸未夏四月。前大將軍義植薨于阿波。立義榮爲嗣。義榮義晴弟。義維子也。

四年。甲申春正月。北條氏綱取江戸城。上杉朝定走。保河越。

六年。丙戌夏四月。天皇崩。

後奈良天皇

諱知仁。後柏原第一子。母豐樂門院。藤原氏。贈左大臣教秀女。在位三十一年。改元三。曰。享祿。天文。弘治。崩。壽六十二。葬泉涌寺。

四月。天皇踐祚。右大臣藤原植家爲關白。五月。葬後柏原天皇。

七年。丁亥春二月。三好元長奉細川晴元。發兵。入京師。細川高國逆戰于桂川。敗走。先是。高國乞援於朝倉孝景。孝景以越前兵。來擊元長。元長敗。還阿波。三月。元長奉晴元。據界城。晴元。故澄元子也。

享祿元年。戊子春正月。晴元與高國議和。既而和敗。高國奔近江。遂之播磨。請援於浦上氏。大將軍義晴奔近江。居朽木。依佐佐木植綱。

三年。庚寅春。詔。就任義晴大納言。敍從三位。

四年。辛卯夏六月。細川高國在備前。得浦上村宗兵。攻細川晴元於攝津。三好元長奉晴元。與戰于天王寺側。大破之。誅高國・村宗。

天文元年。壬辰夏。晴元殺其家宰三好元長。元長叔父宗三。與元長有隙。惡之晴元。晴元亦忌元長。使宗三誘殺之界城。

二年。癸巳春。大將軍義晴還京師。細川晴元爲管領。　二月。內大臣藤原植通爲關白。　冬十月。星隕。如雨。

三年。甲午冬十一月。植通罷。尹房再爲關白。

六年。丁酉秋七月。北條氏綱攻上杉朝定河越。取之。

七年。戊戌夏五月。武田晴信逐其父信虎。自立于甲斐。　冬十月。北條氏綱與足利義明・里見義弘。戰于鴻臺。走義弘。殺義明。義明成氏子。政氏之次子。居下總御弓。稱御弓御所。

八年。己亥夏六月。大將軍義晴出居八瀨。依朽木植綱。避三好氏餘黨也。

九年。庚子夏。尼子晴久攻毛利元就於吉田城。大內義隆遣其將陶晴賢救之。晴久敗還。晴久鹽谷高貞裔也。世居出雲。及山名氏衰。蠶食隣境。稍强大。元就。大江廣元裔。世居安藝。據吉田。屬晴久。已而背附大內氏。

十一年。壬寅春三月。左大臣忠冬爲關白。　秋八月。今川義元與織田信秀。戰于小豆坂。敗走。

十二年。癸卯夏。大內義隆攻尼子晴久富田城。敗還。

十四年。乙巳夏六月。忠冬罷。左大臣藤原房通爲關白。

十五年。丙午夏四月。北條氏康與上杉憲政・上杉朝定。戰于河越。大破之。獲朝定。憲政逃走。足利晴氏援上杉氏。亦走。晴氏。成氏曾孫。嗣居古河。　冬。細川晴元逼大將軍義晴。奔坂本。以義晴子義輝。爲征夷大將軍。初細川高國子氏綱。起兵河內。畠山政國・遊佐長教等應之。晴元遣三好宗三擊之。不克。義晴惡晴元。陰右氏綱。許爲管領。晴元覺之。乃與六角定賴通謀。將攻義晴。義晴出避。讓職於義輝。

十六年。丁未春三月。義晴・義輝保北白河。夏四月。晴元・定賴攻之。義晴・義輝奔坂本。請講和。歸

京師。晴元管領。如故。　是歲。武田晴信攻村上義清於信濃。敗之。義清奔越後。依長尾景虎。景虎爲出兵信濃。擊晴信。

十七年。戊申冬十二月。左大臣藤原晴良爲關白。

十八年。己酉春三月。故三好元長子長慶。應細川氏綱。攻三好宗三中島。取之。宗三走。保榎並城。細川晴元援宗三。據三宅城。　夏六月。長慶與其弟十河一存。攻榎並・三宅。並拔之。斬宗三。晴元走還。遂挾義晴・義輝。奔坂本。　秋七月。長慶入京師。留其臣松永久秀。守之。引還中島。

十九年。庚戌春二月。細川晴元城如意山。　夏五月。前大將軍義晴。薨于穴太山中。晴元・定賴以大將軍義輝。移比叡衢。　冬十一月。三好長慶入京師。進至大津。

二十年。辛亥秋七月。三好長慶攻細川晴元。晴元挾義輝。奔朽木。　是月。北條氏康攻上杉憲政於平井。破之。憲政奔越後。依長尾景虎。以其姓氏職號。授之。景虎冒上杉氏。稱關東管領。九月。大內氏宰陶晴賢。攻其君義隆。弑之於大寧寺。迎大友義長。爲主。居山口。

二十一年。壬子春正月。義輝與三好長慶和。還京師。罷細川晴元。以氏綱爲管領。晴元削髮。遁於丹波。　是歲。齋藤秀龍弑其君土岐定朝。奪其國。

二十二年。癸丑春正月。右大臣藤原兼冬爲關白。夏。武田晴信敗小笠原長時于桔梗原。悉取信濃。五月。長慶弟實休弑其君細川持隆於阿波。秋七月。義輝召還細川晴元。三好長慶發兵。攻之。義輝奔朽木。尋講和而還。

二十三年。甲寅春。兼冬薨。以右大臣藤原晴嗣爲關白。冬。北條氏康取古河。放足利晴氏於相摸。

弘治元年。乙卯冬十一月。毛利元就討陶晴賢。戰于嚴島。大破之。誅晴賢。是歲。北條氏康立足利晴氏子義氏。居鎌倉。奏請任左馬頭。

三年。丁巳秋九月。天皇崩。葬後奈良天皇。

賴襄曰。兵有形。有勢。有機。形生勢。勢生機。機者難見而易變者也。隨時而變。隨處而變。如勢與形。必有大而可見。確而不變者。因其形。而制其勢。因其勢。而決其機。是將之智也。故智將之所爲。或有不謀而合。則其形勢同也。故其機亦同也。吾觀永祿・元龜之際。有三大戰。毛利氏有嚴島之戰。北條氏有河越之戰。織田氏有桶峽之戰。此三戰者。皆所以著威天下。以與其業者也。毛利氏・織田氏皆以二千。破敵之三四萬。北條氏以八千。破敵之八

萬。世徒稱其以寡敵衆。勝於難勝。而不深究其所以勝者。蓋所以勝之機。同也。機之所以同。則由於勢與形之同。何以言之。夫陶賊擅防・長・筑。以壓毛利氏之安藝・今川義元略駿・遠・參。以逼織田氏之尾張。兩上杉氏有七州。以蹂北條氏相摸。以强臨弱。客攻主守。其形同也。以形言之。强者勝。弱者負。攻者有餘。守者不足。然而不足者懼。有餘者驕。驕則怠。懼則奮。則勢也。則其勝負之機。將相換矣。雖然。以弱敵强。以不足對有餘。不可徒奮鬬而克也。於是。制其勢。以決其機。夫有餘者。利於分。不利於合。分則整。合則亂。而不足者。反之。彼分其勢。更迭攻我。我何以堪之。是以置城寨於要衝之地。以梗敵路。使敵合衆斂力於此。則吾所與鬬者約矣。是因形以制勢也。譬若投羶于地。以聚羣蟻。敵衆散漫。蔽地而來者。其勢至此沓蹙焉。則吾可以乘其亂。衝突而破之。是因勢以決機也。然可擊之機。其間不容髮。急則未及其機。緩則已過其機。過不及於機。則機之可以勝者。或足以自敗。是則所謂隨時與處。而變者矣。是故。毛利氏・北條氏之用緩。非緩也。織田氏之用急。非急也。其爲不失機。一也。

卷之十五　終

日本政記　卷之十六

賴襄子成　著

正親町天皇

諱方仁。後奈良第一子。母吉徳門院藤原氏。參議賢房女。在位二十九年。改元三。曰。永祿。元龜。天正。禪位皇太孫。後七年崩。壽七十一。葬泉涌寺。

弘治三年。丁巳冬十月。天皇踐祚。關白前嗣如故。

永祿元年。戊午大將軍義輝出。居朽木。避三好氏亂也。　冬。義輝與三好長慶和。歸京師。長慶囚其君細川晴元。

二年。己亥夏五月。上杉景虎入京師。謁將軍義輝。賜偏名。改名輝虎。

三年。庚申春正月。天皇即位。毛利元就獻資。助儀。詔賞之。敍從四位下。任大膳大夫。尋遷陸奥守。　夏五月。今川義元。大擧侵尾張。織田信長逆擊於桶峽。大破之。斬義元。信長信秀子。據

清洲。　秋九月。關白前嗣赴越後。

四年。辛酉春正月。三好義長入謁將軍義輝。義長長慶子也。　三月。義輝臨三好氏第。　夏四月。上杉輝虎率關東將士。攻北條氏康。圍小田原城。將士叛之。輝虎引還越後。　秋九月。上杉輝虎與武田晴信大戰于河中島。先是。二帥竝薙髮。晴信稱信玄。輝虎稱謙信。

賴襄曰。武田・上杉二氏。用兵之才相敵。北條氏・織田氏共不及也。而四氏角立於元龜・天正之際。而不相下。其攻守形勢。請得嘗論之。蓋我邦地勢。自東北來。故東北高而西南卑。其幅員亦隨而豐殺。奥羽山脈。至於甲信。重疊沓蹙。如人有脊梁。而關東八州依其東。越倚其北。海道諸國帶其南。而西。爲尾・濃。爲京畿・西國。大氐甲信之腰膂耳。八州幅員尤豐。北條氏據之。越次焉。上杉氏據之。海道又次焉。織田氏據之。而不得甲信。則不成國者一也。北條・上杉・織田。共不成國。而武田氏奪三氏所以成國者。以自國焉。山岳所重疊沓蹙。雖不及關東・海道之土沃兵衆。然其所處。在於脊梁。憑高四瞰。我利於出。敵難於入。是武田氏所以能介立三氏之中。而不屈。不唯以其用兵之無敵也。而用兵之與敵者。獨上杉氏。故與之爭信地。欲奪彼之國。以成我國。如兩蛇爭穴。螯嚙。相持者數十年。是以北條氏

織田氏在其左右。得以保其國也。二氏之國。與武田氏相爲腹背。二氏居其夷。而仰據險之武田氏。所以能支者。不唯以其士沃兵衆之勝也。以有上杉氏窺武田氏之後。故彼不得輕出深入也。上杉氏之士沃兵衆。不及二氏。猶武田氏也。而其所據險。不及武田氏。而用兵之才同焉。是以數下兵八州。又數圖美濃。所以不能終取之者。亦以武田氏窺其後也。故武田氏與上杉氏。爭天下之脊而不決。北條氏不能以其間取奥羽。而織田氏以其間取京畿。高卑之勢。難易異也。是以織田之士地甲兵。益致强大。至三倍北條。及三氏主帥相繼沒死。乃東南先滅武田氏。得取甲信。豐臣氏繼之。因以服上杉氏。而平北條氏。北條氏・上杉氏。不得甲信。素不能成國。而武田氏獨據甲信而已。猶得以雄壓之。況以甲信以西之全力。而奪甲信之險。甲信以東。至越。至八州。遂至於奥羽。無復有立草者。宜矣。是海内之勢。所以成混一也。否則自卑向高。自殺向豐。安能得克哉。

五年。壬戌冬十月。詔遣使尾張。賜密旨織田信長。

六年。癸亥春正月。北條氏康與里見義弘。戰于鴻臺。破之。　秋八月。松永久秀弑其君三好長慶子義長。

七年。甲子織田信長攻滅齋藤氏。取岐阜據之。

八年。乙丑夏五月。三好義繼等。攻大將軍義輝弑之。迎立義榮爲主。義輝弟覺慶走近江。改名義昭。義繼長慶姪也。

九年。丙寅毛利元就滅尼子氏。

十年。丁卯冬十月。松永久秀攻三好康長於興福寺。焚而走之。時康長與三好政康・岩成左通。稱三好三黨。與義繼・久秀相惡。

十一年。戊辰秋七月。足利義昭赴美濃。依織田氏。　八月。織田信長以義昭西上。攻六角承禎破之。九月。入京師。　冬十月。詔以義昭任征夷大將軍。信長任左兵衛督。信長辭不拜。乃敍從五位下。任彈正忠。　十二月。武田晴信攻取駿河。今川氏眞出奔。遂依北條氏。　關白前久出奔。前關白晴良爲關白。

十二年。己巳春。北條氏康與武田晴信。戰于薩陲。克之。　夏五月。織田信長遣部將木下秀吉。護衛京師。修治皇宮。　六月。尼子氏遺臣山中幸盛。奉尼子勝久。入出雲。復新山・末次諸城。

元龜元年。庚午夏四月。織田信長攻朝倉義景于越前。拔手筒・金崎二城。淺井長政稱兵近江。

應義景。信長引還。　六月。德川氏援信長。與義景・長政。戰于姉川。大破之　秋九月。信長攻三好三黨於攝津。義景・長政追躡南上。信長還擊。棲之於叡山。遣使諭山僧內應。不聽。　冬十月。北條氏康卒。子氏政嗣。　十二月。信長與義景・長政和。還美濃。

二年。辛未夏六月。毛利元就卒。嫡孫輝元嗣。叔父元春・隆景。並輔之。元春出嗣吉川氏。隆景嗣小早川氏。稱兩川。　元春攻山中幸盛末石城。幸盛佯降。遂與尼子勝久。逃歸織田氏。　秋九月。信長縱火叡山。執僧徒。悉斬之。及其所蓄婦女。　是歲。皇宮成。

三年。壬申冬。武田晴信將兵入遠江。德川氏邀戰于三形原。不利。晴信亦退軍。

天正元年。癸酉春三月。將軍義昭城石山・堅田。以伐信長。信長遣兵攻拔之。遂西上。行成而還。夏四月。武田晴信卒。子勝賴嗣。　秋七月。義昭復稱兵。據槇島。信長急攻破之。義昭乞降。信長徙之河內。義昭遂走安藝。詔削其官爵。於是。信長代足利氏。出令京師。以村井貞勝爲所司代。　八月。信長攻滅朝倉氏・淺井氏。九月。六角義弼降。冬十一月。滅三好氏。近畿平。

賴襄曰。應仁以還。七道分崩離析者。極矣。百戰之餘。英雄之才輩出。最成强大者。五氏。毛利氏在西。武田・上杉。與北條氏在東。而織田氏居中。其土境兵力。莫大相過。而獨稱織田

氏。以爲繼足利氏宰天下者。何哉。以先據京師號令四方也。先據京師。號令四方。足利氏之所以成覇也。及其衰且亂也。徒存其名。莫肯復奉其令。而天下耳目所屬。心意所嚮。猶在於此。是以。東國羣雄。其志無不欲樹幟耀兵於京師者。特以其所居隔絕。非多經人國不可達。地勢不便。故莫之能遂也。獨織田氏之國。與京畿。聲氣相通。而扼東國之襟喉。故塞他人入京之路。而己先入京。既入京矣。以兵守畿甸。而遂西嚮其鋒。西道之雄。亦不能禦。不唯以其才過人也。地利便也。猶異時細川・三好氏居攝阿故。數得志京師也。大內義興嘗一用防長之兵。擁將軍義植。以入京師矣。留焉七年。逡巡引去。而細川氏仍執京政。亦以其國遐遠。寄泊京師。糧餉不給爾。今織田氏之擁義昭入京師也。又猶大內氏之爲也。不肯留而去。去而復來。未嘗困乏。又未嘗失機會。而終代執其政者。地利便也。義昭既被廢。西依毛利氏。而毛利氏出兵東嚮。與織田氏抗。非亦欲襲大內氏之爲也乎。毛利元就雖既沒。其二子之才。有過義興。無不及。而遂不能遏織田氏西下之鋒者。亦以其地勢自卑向高。有所不可焉爾。不唯地勢然也。有時勢不可者焉。何則天下之心目。非嚮足利氏也。嚮京師也。義植之時。猶可也。至於義昭。既爲織田氏所立。又爲其所廢逐。如木偶芻

狗之故敗者。挾之而來。欲爭既據之京師。烏可能哉。故曰。時勢有不可也。武田氏・長尾氏。又與毛利氏遙爲應援。欲夾攻織田氏。是亦不知時勢也。以地勢論。此二氏雖隔絶京師處其不便。然視高下之勢。正與毛利氏反矣。而不能加於織田氏者。二氏內自相爭。而不暇及焉。故雖有地利。不知用也。如織田氏則不然。斷然廢義昭而不顧者。知時勢也。知京師四戰之地也。不肯離其巢穴。棲託於此。以躡義輿之轍。又知東國之不易仰攻。是以舍之。而先攻易攻之毛利氏。務大其土境。强其兵力。然後東面治之者。知地勢也。知當時羣雄之所不能知。所以能繼足利氏宰天下也。饒使其所居。處地勢之便。不知用其利。而避其不利。又不知時勢之可否。則何能致此乎。則果其才然也。曰。如其用兵之才。非不如武田・上杉乎。曰。雖然。自知用兵之才之不如武田・上杉。而不與爭。使彼相爭而不暇及我。而我先爲彼之所欲爲。是其才所以過武田・上杉氏也。

二年。甲戌春三月。信長入朝。敍從三位。任參議。奏請。截東大寺黃熟香。　秋。信長討長島賊。平之。

三年。乙亥夏五月。武田勝賴大擧入三河。圍長篠。德川氏與信長擊。大破之。　秋八月。朝倉氏

餘黨。據越前・加賀諸城。應大坂賊。信長親將討平之。　冬十月。大坂賊納降。許之。　十一月。信長奏請。以木下秀吉敍筑前守。改氏羽柴。

四年。丙子春。信長徙治安土。留嫡子秋田城介信忠。守岐阜。　夏四月。信長入朝。詔修二條城爲館。及成。獻之皇子誠仁親王。　大坂賊復叛。信長遣佐久間信盛等討之。尋親將擊。大破之。　冬十一月。信長入朝。進正三位。拜內大臣。

五年。丁丑春。信長討紀伊賊。降之。　秋。松永久秀叛應大坂。據志貴城。信長令信忠討之。初久秀之降。信長衆中辱之曰。此夫爲人所難爲者三。弑公方。叛三好氏。燔大佛殿。是也。久秀慚恚啣之。至是。戍大坂。遂叛。　能登人長重連。承信長旨。據穴水城。圖上杉輝虎。輝虎來攻拔城。斬重連。信長赴援。不戰夜遁。　冬十月。信忠拔志貴。誅久秀。　信長遣羽柴秀吉西伐。十一月。入播磨。拔佐用・上月諸城。城屬浮田直家。直家乞援毛利氏。　信長累遷。敍從二位。任右大臣。

賴襄曰。國之所以治亂興廢。可知已。所以興且治者。由上下之相近。所以廢且亂。由於其相遠。無和漢古今一也。當國之創建也。上意下達。下情上通。歡然無間。而天下治。及其久

也。則不然。上之人。有其位。負其權。以驕其下而不恤也。甚則蹂踐之曰。吾天子也。吾關白也。彼武人賤吏耳。而武人賤吏。終覆天下而奪其權。是王家之所以變爲源氏。爲足利氏也。曰。吾將軍也。吾管領也。彼陪臣輿儓耳。而陪臣輿儓。終覆其天下而奪其權。是足利氏之所以變爲織田氏。爲豐臣氏也。其變者天運也。而必由人事而變。當其未變也。上尊下卑。如天地然。尊者日驕逸。卑者日勤勞。驕逸者日愚。而勤勞者日智。智之極者。足以取天下。而愚之極者。不足以保其身。人事然也。愚者常在上。以役智者。不能久而不變。則天運然也。細川・斯波・畠山三氏。爲足利氏之管領。而關東之管領爲上杉氏。斯波氏先亡。畠山氏亦微。而細川氏與上杉氏張於東西。其宗族各分爭相食。概皆庸才。無大相過。是以更數世。莫或勝負。而細川之臣三好氏。上杉之臣長尾氏。乃有雄傑者。足以制其主。專其權於一時。而終籠罩一切。而掃蕩之者。出於斯波氏之臣。繼其墜緒。而成其大業者。又出於其臣之臣。蓋天厭天下之亂。顧足利氏之不足撥此也。故生此等人。以輔天子而治天下。不得曰足利氏之陪臣輿儓也。不然。陪臣輿儓。何以能爲右大臣。爲關白乎。及至於此。嚮之所螻蟻視之者。我仰其鼻息之不暇。蓋竊歎曰。此位。唯我家可爲。而至彼爲之。豈非大

變乎。不知其變者。乃不能不變也。天也。雖然。變至此極。而不變者存焉。何歟。曰。最下者。反居最上。而其上一等。終不可冀。是我國之異彼殷・周・秦・漢・唐・宋・明者也。嗚呼。是何自而然哉。曰。祖宗不敢有其位。躬臣虜之勞。體氓隸之心。上下相親。如家人父子。如此者。七八百年。雖殷・周之積德。未至於是。況於漢以下。其膏澤彌滿海宇。淪萬民之骨髓。而不知焉。唯天知之。是以雖不得已而收其實。而終存其名。而不變爾。故變者天也。不變者。亦天也。譬若千金之家假貸邑里。薄息不責者。年歲邈遠。雖其家道頹廢。契券不明。而耄倪相告。皆仰其家。以爲不可負。無佗。天爲之保證也。故受知於天深者。久而不絕。受知於天淺者。未久而斷。彼我皆然。如我王家。深之至者也。而如織田・豐臣氏。則淺之至者。乘不能不變之運。以得不能至之位。乃復欲負此以驕天下。所以天忽予之而忽奪之。

六年。戊寅。春三月。別所長治叛據三木城。附毛利氏。羽柴秀吉移兵討之。　是月。上杉輝虎卒。先是。輝虎遺書信長。曰。公數與畿甸敵戰。未識北人技倆耳。請期明春三月五日。聊舉八州兵。西上相見。乃大徵兵。先發二日。疾作不起。姪景勝殺養子景虎。　夏四月。關白晴良薨。羽柴秀吉使尼子勝久守上月城。六月。毛利輝元遣兵攻拔之。勝久自殺。山中幸盛又降。毛

利氏殺之。 冬十一月。荒木村重叛據伊丹。信長親將討之。不克。初信長之擊義昭。村重首應之。信長大喜。許取攝津自封。終如其約。至是。爲明智光秀所讒。遂叛附毛利氏。 十二月。前左大臣藤原兼孝爲關白。 是歲。浮田直家與毛利氏絕。送款織田氏。

七年。己卯夏。信長令明智光秀略丹波。光秀遣母爲質。誘降波多野秀治。檻送安土。磔殺之。國人聞之。磔光秀母。信長賜光秀丹波。治龜山。 冬。信長陷伊丹。村重奔依毛利氏。

八年。庚辰春。羽柴秀吉拔三木。斬別所長治。 夏。詔大坂僧徒。與信長和。僧光佐遜于鷺森。留子光壽。致大坂。 是歲。羽柴秀吉盡定播磨。徇下但馬・因幡諸城。毛利氏將吉川經家。保鳥取不下。明年城陷。經家與諸將領。皆死之。

九年。辛巳夏四月。關白兼孝罷。左大臣藤原內基爲關白。

十年。壬午春二月。信長與信忠。將兵十二萬。伐武田氏。信忠先進。陷信濃諸城。三月。入甲斐。德川氏及北條氏政等。各以兵數萬會焉。獲武田勝賴及其子信勝。梟勝賴首於京師。割甲斐・信濃・駿河・上野。與有功諸將。 是春。詔修伊勢大廟。初天武帝詔。每二十年。改造兩宮。旣中世不擧。至是。復舊制。信長奏請之也。 夏五月。羽柴秀吉入備中。圍高松城。毛利輝元大擧

來救。秀吉請信長親出。乃命池田信輝・明智光秀等先發。而信長・信忠。繼進至京師。信長館本能寺。信忠館妙覺寺。　六月。明智光秀弑其君右大臣信長及左中將信忠。森蘭丸・村井貞勝等。百五十餘人死之。初信長遇將士無禮。屢辱光秀。光秀深啣之。信長又寵蘭丸。嘗許其三歲後領志賀郡。郡時屬光秀。光秀自疑其罹奇禍。至是。受命饗德川氏。怒曰。饗事未竣。又命遠役乎。悉投其具於湖。馳還龜山。與從子光春等決策。急襲本能寺。信長手射斃數人。縱火自殺。信忠馳赴之。途聞信長已弑。退保二條第。賊兵來圍。信忠力戰自殺。遺命前田玄以。逃歸岐阜。奉其子三法師。入清洲。

織田右府以不世出之略。定二百年難合之天下。事成十六七。而身弑業殞。誠爲可惜。而明智光秀。一羈孤客耳。爲右府所擢拔。推食食之。推衣衣之。封土豐足。何苦而至刺刃君腹乎。賴襄曰。嗚呼。雖無光秀。右府未必免於禍也。何以言之。或曰。右府遇臣下無禮。屢罵辱光秀。所以取其怨也。襄曰。不然。夫戰國英雄。其君臣相與。不可以平世之意律也。彼視足利氏動稱禮式。喜修邊幅也。常嗤笑之。故決壞其藩籬。握手強酒。箕踞嘲訾。以結其歡。而得其死命。遇諸將皆然。何獨施之於光秀。光秀亦何以此爲怨哉。且受恩如此之大。見

其無禮。亦宜忍而受之也。不忍於屈己。而忍於殺君。所不忍者小。而所忍者大。何耶。蓋所忍大者。所不忍亦有大者也。非受無禮之類而已也。右府百戰。鏟滅四方故家。而以己功臣代之。然視其難取也。故嗇於與之矣。而不可不與。不與則彼不爲我用也。故姑與之。使彼爲我用。然後因事除之。以奪前所予。或擧其舊惡。如林通勝・佐久間信盛。是也。或誣其有反心。如荒木村重。是也。右府初許村重。以取攝津自封。而聽讒誅之。讒之者。卽光秀也。光秀亦知右府聰明。非惑於讒者矣。而敢組織之者。知右府心在於誅而奪之也。誅村重而奪其攝津。不待吾言之畢。則安知不誅吾而奪我丹波。亦如村重也哉。而吾可忍而待之乎。是光秀之所以先忍於君也。豈獨光秀爲然。諸將皆然。如羽柴秀吉。欲養右府之子讓之其封邑。其受西征之命。又預言其不敢受大賞。右府與之播磨。而入覲。傾其國充貢獻。以爲不如此。則右府之心不喜。而我之身危矣。故當秀吉之聞此變也。不甚驚動。立班師復仇。如曰吾知必有此事也。如柴田勝家扶右府之孤。以抗秀吉。類不忘右府之恩者。然彼初與林通勝同圖右府者也。右府赦而用之。爲北面大將。與之越前。通勝既被罪矣。勝家心自危曰。次將及我也。故右府早死光秀之手。而此輩或建復仇之功。或得扶孤之

名耳。使其不早死。吾恐其君臣終始。未知其何如。吾意。雖無光秀。而右府或不能免於禍也。大凡人之感恩。不在其跡。而在其意。意誠欲施之。雖不能施。而人感戴之。意非誠欲施之。雖能施。而人不德之。甚則反怨之。況既施而又奪之。其取怨也。甚於未施之前矣。嗚呼。可不思哉。

輝元聞信長且至。懼求和秀吉。秀吉未許。會京師凶問至。明日高松陷。輝元遣使治前議。秀吉見使者。具告變故。使還報曰。事已至此。公等猶和乎。輝元大喜欲戰。小早川隆景切諫。乃止。遂送質成和。　先是。信長支子信孝。修艦紀伊。急襲鷺森。幾獲僧光佐。得凶報。還次大坂。聞秀吉班師。乃與丹羽長秀等會于尼崎。俱討光秀。光秀既定京師。在安土。乃將兵出拒秀吉。秀吉整諸軍。與賊戰于山崎。大破之。獲光秀於小栗栖。梟首於本能寺。賊黨盡伏誅。　秋八月。秀吉與柴田勝家・瀧川一益等。議立三法師。爲信長嗣。更名秀信。居安土。奉以近江三十萬石。叔父信雄領尾張。信孝領美濃。諸將分領織田氏地。　冬十月。詔以秀吉。敍從五位下。任左近衞少將。　信孝與勝家・一益。謀除信雄・秀吉。秀吉圍岐阜。信孝佯行成。

十一年。癸未春正月。秀吉擊瀧川一益於伊勢。二月。退屯長濱。拒柴田勝家。　夏四月。勝家部

將佐久間盛政。襲羽柴氏賤岳砦取之。守將中川清秀戰死。時秀吉攻織田信孝。至大垣。馳還。襲復之。獲盛政。遂攻殺勝家于北莊。　織田信雄圍岐阜。信孝走死。　五月。詔以秀吉。敍從四位下。任參議。　六月。一益降秀吉。　冬十一月。秀吉城大坂。尋徙治焉。　是歲。龍造寺隆信。與島津義久。戰于有馬。敗死。時龍造寺氏據肥前。島津氏據薩摩。與豐後大友氏。竝張于西海。

十二年。甲申春。秀吉與織田信雄絶。進兵擊之。信雄乞救德川氏。夏四月。德川氏大破秀吉於長湫。獲池田信輝・森長可。冬十一月。秀吉與信雄和。是月。詔以秀吉。敍從三位。任大納言。十二月。關白內基罷。

十三年。乙酉春。左大臣藤原昭實爲關白。尋罷。　二月。秀吉敍正二位。任內大臣。　三月。秀吉將兵十萬南伐。滅根來・雜賀賊。　夏五月。遣羽柴秀長・秀次。將舟師六萬。伐長曾我部元親于土佐。浮田秀家。小早川隆景。竝帥兵會之。元親出降。南海平。　秋七月。秀吉拜關白。賜姓豐臣。　八月。秀吉將兵十萬北伐。攻佐佐成政于富川。降之。進入越後。與上杉景勝盟。　遣金森長近略飛驒。攻滅姉小路賴綱。　冬十一月。地大震。

十四年。丙戌春二月。關白秀吉築第內野。名曰聚樂。三月。大友義鎭入朝。夏五月。上杉景勝入朝。秋八月。秀吉令毛利輝元・長曾我部元親。出兵西海。遣仙石秀久。招諭島津義久。義久不從。冬十一月。天皇禪位皇太孫。

賴襄曰。駕馭天下之羣雄。使其盡爲我用。而不我叛者。何以致之乎。與土地金帛。不嗇乎。授高爵顯位。不惜乎。曰。皆不然也。夫徒恃土地金帛。以與之市。我之土地金帛有盡。而羣雄之所欲無極。以有盡而供無極。則我之術有窮時矣。且彼攫我之土地金帛而去。不肯爲我用。我欲驅而使之。彼偃然不應我指呼甚。則資我所與。以抗於我。我何以制之。至於爵位。本虛器而已矣。而人欲得之者。以我不濫予之也。濫予之則輕矣。人將唾而不顧矣。是亦不可恃也。故徒恃此二者。欲以駕馭天下。天下將反駕馭我。世稱豐臣太閤之能駕馭羣雄。以爲恃此二者。嗚呼。使太閤果徒恃此二者。則元弘・建武之政。是已。足利尊氏是已。元弘・建武之事。姑置之。如尊氏所使。皆其家臣。用以夷其敵。隨與其土地而已。是易爲力也。太閤之定天下。割據之國。存而撫之。同列之人。服而用之。不止其故臣也。其勢之難如此。況足利氏之將帥。皆庸才耳。而猶不可制。方太閤之時。其布列天下者。概希世之雄

也。而欲用尊氏之所施。誰肯爲其用。而不敢叛哉。所以肯盡爲其用。而不敢叛者。必有術焉。曰。中其意也。曰。出其意之外也。中其意。足以感喜之。出其意之外。足以畏服之。天下之羣雄。感喜畏服於我。我之於天下。何爲不成。何欲不致。是太閤之所以鼓舞顚倒一世。而使其不自知其何故也。故有及時輒予者。有未嘗與而與者。有當與而不與者。有既奪而大與者。有分與而鬬之者。故太閤能用土地・金帛・爵位。以濟其術。非專恃土地・金帛・爵位也。

後陽成天皇

諱周仁。初名和仁。正親町嫡孫。父曰誠仁親王。母新上東門院。藤原氏。贈左大臣晴秀女。在位二十六年。改元二。曰文祿。慶長。禪位皇太子。後六年崩。壽四十七。葬泉涌寺。

天正十四年。丙戌冬十一月。天皇卽位。尊先帝。曰太上天皇。　十二月。詔以秀吉任太政大臣。敍從一位。關白如故。　是冬。島津義久大擧入豐後。攻下十餘城。時大友義鎭病死。子義統與仙石秀久・長曾我部元親等。拒之。大敗皆走。元親子信親。與十河存保等死之。　是歲。秀吉建方廣寺。塑造大佛。高十六丈。

十五年。丁亥春三月。關白秀吉大擧西伐。兵凡十五萬。夏四月。攻岩石城。降秋月種實。進拔小熊・八代諸城。龍造寺政家來附。五月。入薩摩。島津義久薙髮出降。秀吉以義久弟義弘。代領其國。西海平。　冬十月。島津義弘入朝。　是歲。琉球入貢。

十六年。戊子夏四月。天皇輿太上天皇。幸豐臣氏聚樂第。留五日。　五月。關白秀吉遣使相摸。諭北條氏政入覲。不答。先是。氏政老。子氏直嗣。而事決於氏政。　冬十月。秀吉大張茗讌於北野。

十七年。己丑秋七月。復諭北條氏政。又招諭伊達政宗。皆不答。政宗據陸奧・出羽。振威於北陲。

十八年。庚寅春二月。關白秀吉大擧東伐。兵凡二十五萬。夏四月。圍小田原。氏政父子。固壁不出。秀吉分遣諸將。徇下關東八州六十餘城。六月。伊達政宗來降。秋七月。氏政父子出降。秀吉殺氏政。放氏直及其將北條氏規等於高野。北條氏亡。關東平。

善用兵者。可以取天下乎。賴襄曰。不可。天下者大物也。用兵小術也。小術不可以取大物。故能取天下者。未必善用兵也。雖然。兵何爲而用耶。非欲以拓土地。服人民乎。有人於此。諳結陣之法。練行師之術。巧奇正之變。譎詐之計。而無益於拓地。斬首幾千。流血幾里。曰。

吾勝矣。可謂之善用兵乎。善用兵者。善收用兵之利之謂也。故善收用兵之利。則術亦大矣。故其用兵。可擊則擊。不可擊則不擊。可進進。可也。可走走。可也。獲級。可也。空手還。可也。要歸於收其利。而收其利之極。極於取天下。是織田・豐臣之術。所以過武田・上杉也。武田・上杉巧於用兵。而拙於收利。織田・豐臣拙於用兵。而巧於收利。右府之用兵。猶有巧之可見。而亟用亟輟。所收不償所用。至太閤。其用兵無有他繆巧。而天下莫能支吾。何哉。曰。彼僥倖而得之。蓋有命焉。故不必善用兵。而能取天下。襄曰。不然。物之小者。猶不可僥倖而得。況其至大者。非其術之高於一世。烏能得之哉。太閤之用兵。如無巧者。而其實天下之至巧也。夫用兵者。決其勝於既用。不如決之於未用也。決於既用者。不能不亟用亟輟。決於未用者。不用則已。用則必收其利。不收其利。不肯用也。稱強弱之度。算成敗之數。相其可而後動焉。得謂之僥倖耶。觀其經略關右。先治播磨。據形勝地。蓄糧養兵。我先有其強。然後加彼之弱。我先有其成。然後乘彼之敗。其取因幡。奪其糧也。其略備中。堰其水。灌之也。夫奪其糧則饑。堰其水灌之則墊。人人所明知。非有巧譎難知之術也。顧可不可如何而已。用十五萬人。以平鎮西。知非用十五萬人。則不可以平之也。用二十五萬人。以定關

東。知非用二十五萬人。則不可以定也。皆決之於未用者也。可以平可以定。然後可以取天下。

八月。秀吉至白河。遣人撿陸奥・出羽地而還。封蒲生氏鄉於會津。鎮撫東北。　是歲。朝鮮王李昖遣使來聘。先是。秀吉怒朝鮮不來。欲討之。先使宗義智往諭焉。於是使者來獻書及方物。秀吉報書。使其導我攻明。昖終不答。

十九年。辛卯冬十二月。關白秀吉奏請。以內大臣豐臣秀次。爲關白。自稱太閤。秀次秀吉之甥。養爲子者。　是歲。宗義智再至朝鮮。言攻明情實。責其報。李昖不從。於是秀吉謀於諸將。決西征。下令諸道。大具兵食。

文祿元年。壬辰春二月。天皇幸豐臣氏第。　夏四月。秀吉出次肥前名古屋。以浮田秀家爲元帥。加藤清正・小西行長爲先鋒。以伐朝鮮。兵凡十五萬。行長先進。徇下慶尙道。清正略慶州。會行長于忠州。又分路而進。韓王李昖出奔平壤。五月。秀家入國都。　六月。秀吉遣石田三成等三奉行。與伊達政宗等。帥兵六萬追赴焉。昖奔義州。留其將尹斗壽・金命元。守平壤。行長攻拔之。走斗壽・命元。　秋七月。加藤嘉明・脇坂安治等。與韓將李舜臣。戰于巨濟洋。不克。

來島康親死之。明主朱翊鈞。遣其將祖承訓。帥兵來援平壤。行長邀擊於安定。殲之。承訓僅以身免。清正入咸鏡道。與韓將韓克諴連戰破之。獲克諴。遂虜韓二王子及其大臣黃赫・金貴榮等。是月。秀吉母大廳疾。秀吉歸覲。至則已薨。九月。秀吉至名古屋。冬十一月。鍋島直茂以兵三千。與韓將李希得兵三萬。戰於咸興北。大破之。

二年。癸巳春正月。太上天皇崩。葬正親町天皇。是月。明將李如松。大擧來取平壤。行長敗走國都。小早川隆景邀擊如松于碧蹄館。大破之。殆獲如松。三月。加藤光泰・細川忠興等。攻晉州。不克。夏五月。與明講和。明使沈惟敬來名古屋。謁秀吉。先是。惟敬往復再三。納賂行長。議冊封及還韓俘。行長與秀家・三成等。以冊封爲秀吉王。明之謂也。於是。秀吉喜許之。厚饗惟敬。遣歸。使小西如安偕往。六月。還清正所虜韓二王子以下。清正厚視俘囚。皆感泣而去。韓人最畏清正。稱曰鬼上官。是月。諸將合兵攻拔晉州。斬城將徐禮元等。殲六萬餘人。秋八月。秀吉還大坂。以子秀賴生也。

三年。甲午春。秀吉城伏見。

四年。乙未春二月。蒲生氏鄉卒。子秀行嗣。尋徙宇都宮。以會津移封上杉景勝。三月。秀吉徙

治伏見。 秋七月。關白秀次有罪。秀吉逐之高野。奏請削其爵。尋賜死。
慶長元年。丙申 夏五月。秀吉以秀頼入朝。詔以秀頼敍從三位。任右近衞中將。 六月。外征諸將引還。 秋七月。京畿地大震。 八月。明・韓使偕來。九月。秀吉召見明使楊方亨・沈惟敬。惟敬進封册・金印・冕服。翌日饗使者。秀吉著明服。命僧承兌讀册。行長私屬曰。册文與惟敬所說。或有齟齬。子且諱之。承兌不聽。入讀至曰封爾爲日本國王。秀吉大怒。立脫冕服拋之。扯裂册書。曰。吾掌握日本。欲王則王。且吾而王。如天朝何。髯虜何與焉。乃召行長。併明使誅之。承兌救解乃止。卽夜逐明・韓使。遂徵西南四道兵十四萬。再命西征。

賴襄曰。兵所以勝負者。機也。機有大者。有小者。小者一日而萬變。非臨陣相敵。不可決也。至於大者。決之於擧事之前。而萬衆之心乘之而奮。以至事平之後。其鋒未嘗鈍退者。此機也。得此機則勝。失此機則負。是英雄之所獨見。而衆人或莫之能知者。豐臣太閤西伐島津氏。東伐北條氏。擧兩大役。而天下定。以强加弱。以大臨小。宜若直往而無不可也。而必以文告先之。諭以順逆。彼不肯聽也。又諭之。又不肯聽。而繼以慢辭。然後乃下令伐之。其諭北條氏也。彼有所要求。曰。得之則入覲。諸將皆怒曰。彼亡狀。盍速擊之。太閤曰。未也。

如其所求與之。與之而彼猶不來也。於是乎。絕之。暴揚其罪於天下。天下皆曰。彼誠有罪。伐之不得不伐也。我將士皆有怒彼之心。而彼之國人。皆無拒我之意。無拒我之意者。不直其主之所爲也。嗚呼。是勝負之大機也。今有兩人鬭於此。其一倨慢無禮。罵詈雜加。其一卑辭屈躬。欲謝而止之。乃益咆怒。不肯聽。至撫劍疾視。然後不得已而鬭。不得已而鬭者必勝。數十萬人之鬭。與兩人之鬭。其勝負之機奚異哉。諸將不知。而太閤知之。宜乎。其全勝也。而何獨於擊朝鮮而不察於此乎。朝鮮與我隔絕大海。本不相干涉。彼未嘗啓釁於我。而我無故擊之。是以我將士無怒彼之心。而不直太閤之所爲。曰。何故擊之。何故使我裹瘡痍。離妻孥。遠涉大海。而暴骨於未嘗識之地乎。是其所以一勝。而其鋒遂鈍退不振也。彼以怠惰委靡之餘。被我百戰之精兵。非如北條・島津之勍也。而所以能不如北條・島津者。其國人皆怒我。而拒我。我何以勝之哉。不特無以勝之也。又失我既定之天下。兵之勝負。其機在於此。得天下與失天下。其機亦在於此。

二年。丁酉。春。以小早川秀秋。爲元帥。毛利秀元・浮田秀家爲副。黑田孝高充其參謀。兩先鋒及諸將。皆如前役。使小西行長立功自償。秀秋秀吉姪。爲隆景嗣子者。　加藤清正先入韓。復

竹島舊壘。連降機張・梁山・西生浦。行長改築釜山。爲元帥府。韓王昖奔海州。　秋七月。藤堂高虎・加藤嘉明等。攻韓將元鈞於閑山・唐島。大破之。　八月。行長又破之於加德。斬鈞。進陷南海・順天。遂與清正合。攻陷黃石城。　諸將合兵。攻韓將楊元於南原。走之。進入全州。明將陳愚衷敗走。於是。慶尙・全羅盡定。　菅正陰與韓將李舜臣。戰于碧波亭下。敗死。　九月。黑田長政與明將解生・楊登山・牛伯英。戰于稷山。走之。　冬十二月。明將邢玠・麻貴・楊鎬。將明韓兵數十萬。攻清正。圍蔚山。清正與淺野左京大夫堅守。不屈。

三年。戊戌春。正月。秀秋與諸將。分道來救。敵軍解圍。清正出城。追躡。大破之。　夏四月。秀吉遣使諭諸將。留清正・行長及島津義弘等十餘帥。分守諸城。其餘罷歸。至九月。再往。　五月。明軍再來逼蔚山。清正與立花宗茂夾擊破之。　秋八月。前關白豐臣秀吉。薨于伏見城。遺命召還在韓諸將。　冬十月。明將董一元・茅國器。帥兵十萬。攻義弘八壘。夾菅江而軍。義弘在新寨。不敢出。敵連拔三四壘。乘勝直來新寨。義弘與子忠恆。奮擊大破之。追奔斬首三萬餘級。明兵伏尸二百餘里。　十一月。外征諸將。整軍引還。

織田氏爲政。雖偸一錢者亦斬。所以致路不拾遺之盛也。時受室町弛廢之餘。非此莫以

濟之爾。雖然。我先王制爲刑律。又設明法之士。論罪之輕重。期於不愆錙銖。誠以人命至重。人主雖操生殺之權。不妄用之也。今不問罪之重輕。偸一錢者。與故殺人命。奪人財者。同科。是何法哉。夫人主可以殺天下之人。而莫之禁者也。人庇其下者。豈不可危懼。唯知其殺必於有罪者。而罪之輕者。又得不至死。是臣民所賴以安也。今其所賴絕矣。是不能一日相安也。宜哉。其遭弒逆之禍也。然未足言也。至於豐臣氏也。則有一舉而喪先王之澤。絕天地之性。奪生民之命者。天智之制田授民也。以三百六十步爲一段。以二段爲口分之田。女減三分之二。田一段得禾五十束。租二束二把。一束得米五升。每段米二石五斗。而輸二束二把。則取米一斗一升。蓋輕於二十取一也。是謂正稅。千載而無大差者。流澤之所以無窮也。至天下用武。力耕不給於餉。蓋租歲重月加矣。然源氏・北條氏之間。未有所大加。大加者。蓋始於足利氏。而極於豐臣氏。豐臣氏極奢侈。已無比於前代。及末年。窮兵黷武。用度益不給。欲加徵租稅。而不復可加也。於是。一變丈田之法。以三百步爲一段。一段加六十步。一町加六百步。積而上之。千町加六十萬步。萬町加六百萬步。又就一步。各縮二尺。鞭撻有限之土地。以搜索無故之財利。民數依舊。稅額百倍。開闢以來之遺

民。剋未剋之肉。浚未浚之膏血。以供豐臣氏得已不已之欲。豐臣氏以此取絶嗣赤族之禍。其事已逝矣。而其法遂一成而不可破。至今爲梗。上下相習。恬不爲怪。織田氏之法。雖累行一時而已。豐臣氏之流毒。未可知其所底也。憂之則如何。曰。此法也。如商君破井田。開阡陌。不可遽革也。而稅之重。又不可遽減也。三百畝而取三百六十畝之稅。減六十畝之稅可矣。六尺而出八尺之稅。減二尺之稅可矣。所減少。而所澤多。於民如新受賜。而於我則上謝天地。中謝先王。而下爲子孫祈長久之福。誰憚而不爲耶。

男　賴　復

門人　後藤　機

牧　輗　同校

石川　章

岡田　喬

日本政記　卷之十六　大尾

書國朝政紀稿本後。

嚮樂翁公。索襄外史。既覽。手筆題數言其後。大意曰。叙事適繁簡之宜。論事不任偏私。而洞中機先。侍臣窃寫寄示。余感知己之誼。又有以自勸。其後作通議二十八篇。泛論古今制度・政體得失。近又倣荀悅漢紀之意。修國朝政紀。起於開闢。至於輓近。紀其大事。作論八十餘首。於所謂不任偏私洞中機先者。未知能不負公言否乎。而公逝已四年矣。襄今亦獲篤疾。殆乎不起。俯仰今昔。撫卷慨然。〔天保三年九月〕

政記序。

恭惟。方今文物之盛。加以二英明威武一。而天下大治矣。然海內人士。或徒知三其爲二盛且治一。
而不レ知四盛與レ治。固繫三乎教化之隆。與二紀綱之張一。故取二其所レ謂盛與レ治者一。托二諸天運一。以爲三
至治極盛之世。可二以般樂怠敖。以終一レ身矣。於レ是乎酣醉淋漓。奢侈成レ風。竊謂。此風大行二
于天下一。則終使二教化替。而紀綱弛一。亦未レ可レ知也。乃察二幾於未萌一。保二治於無疆一。使二天下不一レ
至二衰且亂一。實在二於今日一。噫。識者可レ不レ留二意乎此一乎哉。京師賴山陽。抱二經濟之才一。騫二古今
之迹一。夙有二外史・通議之著一。晚復作二政記十六卷一。而不幸以二處士一終。未四嘗有三一日而試二其
胸中所一レ蘊。可レ勝レ嘆乎。中西伯基有レ感二于此一。將三活版以刷二三書一。而外史・通議既成。傳播日
久。政記今復成。伯基將下俟二余序一。以傳中諸世上。余觀二政記之書一。自二神武一。至二後陽成一。凡百有八
世。上下二千年。教化之隆替・紀綱之張弛。盛衰治亂之交代。莫レ弗二記載一焉。間亦加以二其
平日所一レ見。可レ謂三其論痛快。切二當事情一矣。余謂。天下之論レ政者何限。要皆不レ能レ出二乎山陽
之右一。而外史・通議。亦皆言レ政之書。而通議僅僅二三卷。外史雖二卷帙浩瀚一。大抵止レ紀二人
之忠姦淑慝一。二書皆不レ若二政記之博且詳一也。然則天下之論レ政者。莫レ善二于山陽一。而山陽
言レ政之書。莫レ備二于政記一。嗚呼。山陽雖レ不レ在レ位。而識者或取以供二其贊レ治輔レ化之一助一。能
出二察レ機愼レ微之政一。使三人士奢侈之風止。措二天下於泰山之安一。亦莫二足レ道者一。然則豈啻山

陽之功多而已哉。伯基之力。亦爲レ不ニ淺淺一矣。余奚不レ樂ニ敍而傳ヒ之。』天保九年長夏上弦。識ニ於靜修堂一。江戸鶴橋學人林長孺。

頼山陽先生著

新策正本

京師　五書房合梓

『新策』解題

文化三年、山陽廿七歳、「書ニ自著外史・新策二書後一。二首」ノ作アリ、ソノ『新策』ニ係ル一首ニ、

「時論大半添ニ蛇足一。官路眞如レ捋ニ虎鬚一。自笑世情忘不レ得。著書猶題擬ニ潛夫一。」

トアリ。又、天保元年、五十一歳ニシテ、「題ニ新著通議後一。七首」ノ第一首ニハ、

「傍觀時議添ニ蛇足一。熟識官途編ニ虎鬚一。御有ニ世情灰不レ盡。著書猶欲レ擬ニ潛夫一。」

卽チ『新策』及ビ『通議』ハ、何レモ後漢・王符ガ、「隱居シテ書ヲ著シ以テ當時ノ得失ヲ譏シ」タル「潛夫論」ニ擬シテ、官途ニ在ラザル自家ノ策論ヲ述ベタルナリ。而シテ『通議』ハ晩年ニ入リテ、『新策』ノ稿本ニ就キ、加除按排、以テ一部ノ成書ニ引直シタルニ外ナラズ。

『新策』ノ錄スル所、〔一〕六略・〔二〕八議・〔三〕二十三論ノ三部ヲ分チ、〔二〕ノ第一節ニ「古今總議」ヲ掲ゲタリ、曰フ、十七歲〔寛政八年〕ノ時、作リシ所ナリト。コノ年、正月八日、元服〔加冠〕ノ禮ヲ行ヒ、六月ニ入リテ宿痾暴發ノタメ、晝夜ニ亘リテ兩親ノ看護ヲ受ケ、十一月、叔父杏坪ニ伴ハレテ、石見・有福溫泉ニ赴キシハ、轉地療養ノ爲ナルベシ。坐湯一週間ニシテ歸リ、ヤガテ白川藩士廣瀨蒙齋ガ長崎ヨリノ歸途來訪スルアリ、ソノ竹原ニ向ハントスルニ臨ミ、父ノ意ヲ承ケテ、コレト同行シ、仲父〔醫〕春風ノ家ニ在リ、蒙齋ノ東歸ニ臨ミテハ送序ノ作アリ。「古今總議」ノ成稿、ソノ何レノ日ニ在リシカヲ詳ニセザルモ、カヽル身境ノ上ニ立チ、敢然トシテ一家ノ經世策ヲ論述セルナリ。ソノ論ズル所ヲ讀ムニ、吾ガ國勢、古來三變ノ由ル所ヲ明カニシ、古今制度ノ沿革・兵制ノ變遷ニ及ボシ、治亂ノ岐ルヽ所以ヲ說キ、ソノ大旨、略『外史』「序論」ノ底稿タルベキモノトスベシ。

文化二年〔廿六歲〕三月、來訪ノ大槻平泉ニ與フル書ニ、ソノ成稿シタル〔一〕三紀・

〔二〕五書・〔三〕九議・〔四〕十三世家・〔五〕二十三策ヲ總括シテ、『隱史』五種ト題シ、ソノ序文ノ撰ヲ求ムル旨ヲ言ヘリ。「三紀」ハ、神武天皇ヨリ後陽成天皇ニ至ル歷代ノ大事記三卷ヨリ成リ、五書ハ輿地・封建・官制・財用・法律ノ目ヲ立テ、「九議」ハ、大勢・平安・前鎌倉〔源氏〕・後鎌倉〔北條〕・中興〔南朝〕・室町〔足利〕・安土〔織田〕・浪速〔豐臣〕・總議ニ分チ、「十三世家」ハ、藤原・平氏・源氏・北條・楠・新田・足利・伊勢〔後北條〕・毛利・武田長尾〔上杉〕・織田・豐臣ニ分チ、「二十三策」ハ君權・文臣・銓吏・分祿・用方・均田・財利〔六篇〕・務農・商賈・米價・新畬・水利・金錢楮鈔〔貨幣〕・銅鐵・征課・貨權・法律・訟獄ニ分チ、大要、後ノ『新策』ト『外史』ノ底稿タルベキモノナリキ。次ニ同年十月ニ至リ、武元北林ガ、ソノ著書ノ目ヲ問ヘルニ答ヘテハ、「八議」・「六略」・「二十三策」ハ、寛政・享和ノ交、ソノ幽屛中、スデニ脫稿ヲ告ゲ、「十八紀事」・「六將傳」ハ、未ダ全ク成ルニ至ラザルモ、コレヲ總稱シテ、『新書』ト題セリト言ヘリ、而シテソノ脫稿ヲ告ゲタリトイヘル三部書ヲ、『新策』ニ・未完成ノ二部書ヲ、『外史』ノ〔後、更ニ『政記』ノ〕底稿ナリトスベク、前掲、文化三年ニ入リテハ、スデニ『新策』ト『外史』トヲ兩立セシムルニ至レルナリ。

尚、仲父春風ニ對スル書翰ニハ、兩者ヲ切リ離シテ、專ラ修史ノ體制ヲ述ベタルモノアリ。是レ明ラカニ『外史』ノ底稿タルベキモノニシテ、『日本世史』•『十六世家』•『十三世家』•『覇史』•『本朝覇史』ナド、假題シ、前述、「十三世家」ノ部目ノミヲ獨立セシメ、單行本トナサントスルニ至リシヲ見ルベシ。コノ書翰、未ダソノ年代ヲ考定スルニ及バザルモ、『外史』•『新策』二書ノ後ニ題スル二首ノ詩ヲ作リシ直前ノモノタルヲ推知シ得ベシ。

「二十三論」ノ成稿ハ、文化元年〔廿五歲〕正月ニ在リ。ソノ自引ヲ讀ムニ、邦人ノ論、經世ニ及ベルモノ少キヲ見テ、嚮ニコノ稿ヲ起シ、場屋ノ文〔漢土科擧對策〕ニ擬シ、一日一課、二十三日ニシテ書キ上ゲタルヲ存錄セリトイヘリ。

「六略」ハ、「本朝制度ノ沿革ヲ論ジテ、ソノ概略ヲ總ベ、「八議」ハ、「古今總議」ヲ冠シテ、平安朝以降、各時代國勢ノ沿革•政治ノ大綱ヲ論ジ、以上三部門ヲマトメテ、コレヲ『新策』ト題セシハ、漢•賈誼ノ『新書』•陸賈ノ『新語』ニ取リ、「一人創意ノ私言ニシテ、天

下素行ノ公議ニ非ザルヲ謂フ」トイヒ、「策」ハ「書策・簡策ノ策ニシテ、策略・籌策ノ策ニ非ズ」ト說ケリ。

本書ノ刊行ハ、他ノ著書ト同ジク、『拙修齋叢書』五卷四冊〔木活版〕ヲ初トシ、安政二年七月、杉本正健〔字士彊〕ノ手ニ成レル『新策正本』六卷三冊コレニ次ゲリ。ソノ自序ニ據レバ、家藏ノ謄本ヲ用キテ、「一活字本」〔拙修本ナルベシ〕ノ誤字ヲ正シタリトイヒ、賴支峯・三樹ハ家ニソノ原本ヲ存セズトイヘリトナリ。

好尙木崎愛吉

凡例

一、新策ハ安政二年板行新策正本ニヨリ、通議ハ嘉永三年發行校正通議ニヨル。
一、舊式訓點ハ悉ク新式ニ改メタリ。
一、通議ノ評ニツキテハ解題ニ詳ナリ。
一、元來、兩書トモ文章改ル每ニ各別丁トナセリ。今其ノ體裁ヲ革メタリ。
一、小竹通議評ハ原本ニ標記セシモノニ非レドモ今ソレゾレ其ノ文章ノ所ニ挿入シテ讀者ノ便ヲ計ル。

昭和七年四月

賴成一識

新策例言

賈生曰新書。陸生曰新語。謂之新者。謂其一人創意之私言。非天下素行之公議也。今亦以新名書。乃是意爾。然新書新語。今也已爲通行之名。莫以自別焉。故曰新策。策書策簡策之策。非策略籌策之策也。或曰。書內多論載國事。則以爲史策之策。如何。吾對曰。要之三義。吾隨人人所取應之。

六略論本朝制度之沿革。綜其概略。自便觀省。但曩時乏書。率出諸臆。爾後稍稍得故典籍考之。其無大差謬者。皆因其舊。不復改竄。

八議之首。總議一篇。十七歲時所作。文體晦澀。特以其足括餘議。故弁其首。

二十三論。蓋試擬彼場屋體。以泛論古今者。非敢爲出位之言也。其詳疏於其部首。

新策例言　畢

新策目次

新策目次　終

新策　卷之一

安藝　賴襄子成　著

六略　上

輿地略

皇和之邦。處于大海之心。蓋東西六百餘里。南北二百餘里。其形如磬折。故其地脈起于中。而左右降。中最隆。東北亞之。西南最纖。皇化與西南而漸東北。故遂古能西服海外之朝鮮・渤海諸蕃。而東北則連山斜限之。連山以往棄之毛夷。景行天皇使皇子日本武尊踰連山而東征而闢之。成務天皇隔山河。而分國縣。隨阡陌以定邑里。東西爲日縱。南北爲日橫。凡爲國百有四十四。爾後相繼竟有四裔。而至文武天皇。因山海形勢。分爲六十六國。曰山跡・山背・河內・和泉・攝津。凡五州。合稱畿內。畿內之地。拖于尾西北海中。其南濱得國七。曰播磨・

備前・備中・備後・安藝・周防・長門。合稱山陽道。其北濱得國八。曰。丹後・丹波・但馬・因幡・美作・伯耆・出雲・石見・隱岐。合稱山陰道。山陰一曰景背。山陽一曰景面。景日景也。山跡之南得國一。曰。紀伊。紀伊之西北海中得國一。曰。淡路。其西南得國四。曰。阿波・讚岐・土佐・伊豫。合稱南海道。南海之西。山陽之西南。海中得國九。曰。豐前・豐後・筑前・筑後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩。合稱西海道。日向爲神武天皇所興。興日向而都山跡。仁德都攝津。天智都近江。元明都山跡之平城。五帝因之。其它遷徙無常。而不出山跡也。至桓武天皇。乃定都山背。自山背之背。緣北海而東北上得國七。曰。若狹・越前・加賀・能登・越中・佐渡・越後。合稱北陸道。自山跡緣南海而東上得國十五。曰。伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相摸・武藏・上總・下總・安房・常陸。合稱東海道。南海・北海之間得國八。曰。近江・美濃・飛驒・信濃・上毛・下毛・陸奧・出羽。合稱東山道。東山謂其多山也。而其信濃與東海之甲斐爲所謂連山斜限者。賴襄曰。余生畿內。居山陽。長游東海。還至東山之信濃。然後知地脈之起在此也。乃測而揣之。其起而左降者。爲上毛。上毛之脈。劃陸奧・出羽而東北。伏而復起。至毛人而極矣。起而右降者。爲美濃。美濃之脈。分爲二。其一經越前・若狹。蜿蜒千里。伏而復起。至薩摩・大隅・琉球而極矣。其右爲山

陰。其左爲山陽。其一經山跡。伏而復起。至伊豫・土佐而極矣。故東面一頭二尾。皆有脊梁骨。而左右裔漸海。梁骨之散殊出沒者。皆爲山。水之發于梁骨中。而左右注海者。皆爲河。兩裔之稍廣者。皆爲土田。如關左八州及陸奥・出羽・三河・尾張。其最廣者也。山之截者爲關。兩裔之彎而水注焉者。爲津。爲城邑。如淀川之注攝津。利根川之注銚子口。岐蘇河之注桑名港。筑後河之注天草港。其最大者也。東西行旅。皆緣兩裔而濟之以舟船。其道于梁骨中者獨東山道。故一曰中山道。南北漕運由于河。東西之運由于海。而往來聚散于其四傍。是立國之大勢也。桓武之詔曰。維此山背。山河襟帶。自然成城。其改曰山城之國。其都曰平安。東曰左京。西曰右京。各領三十坊。南北九條。皇城在中。四面十四門。乃置六關。有相坂于近江。有鈴鹿于伊勢。有不破于美濃。有清見于駿河。以控其東。有須磨于攝津。有赤間于長門。以扼其西。以六關制七道。道以統國。國六十有六。國以統郡。郡六百有四。郡以統鄉。鄉一萬有三千。國有五等。曰大・上・中・下・小。郡亦如此。七道之驛。三百九十三。有八十餘于東山。有二十餘于南海。有九十餘于西海。有各五十于山陽・東海。有各三十餘于山陰・北陸。西海特建太宰府。備西蕃。四邊之塞四十里一堠。海內輻湊歸向中都。其盛極矣。然其實非中也。處地脈之

降裔。而控制其頭。故東北三道。末大不掉。淸見・足柄以往。沃野千里。槪爲蝦夷所巢穴。桀黠時起。乃建鎭守府于陸奧。以習其方土。而威信素著者守之。而其後百年之間。鎭守子孫。擅七道之權。則所謂蝦夷所巢穴。化爲天下都會。而畿之名虛矣。源氏是也。源氏據相摸・武藏・伊豆・安房・二總・二毛。此謂關八州也。而定居于相摸之鎌倉。而降武門司權者。四氏。北條氏仍居鎌倉。足利氏居平安之室町。織田氏居近江之安土。豐臣氏居攝津之大坂。又城山城之伏見。館平安之聚樂。而源氏三世・北條氏九世。最治。足利氏十三世。槪亂日也。織田氏・豐臣氏不能二世。蓋形勢然也。凡海內之形勢。及風氣民俗。大抵畿內以西之民。勤農而少熟。東北之民惰農而多熟。皆仰魚鹽蛤蠃之利。畿內及阿波・讚岐・播磨以東。伊勢以西。其風氣同。其地小險小沃。其民柔軟好機利。其言語浮俐。其產則織工奇技。其港泊或多任俠。而要之非用武之地也。甲斐・信濃・越後・越中其地大險。其民沈毅精悍。業工及蠶。其言語深重。其產則巨材・金鐵・文絹・佳鷹。關八州・尾張以東諸國。其地大沃。其人爽達果斷喜武。其言語斬截。其產則竹箭・利刀・善馬。昔王制。諸國之牧。凡三十九所。而在武藏・上毛・甲斐者三十二。隸左右馬寮。後皆爲鎌倉所收云。常陸・陸奧・出羽。其地大險大沃。其人似關八州而樸摯。其言

語前卑後高。其產則巨牛善馬。其樸摯愈北愈甚。毛人乃其極者。毛人之國其大三分中國之一。其地所謂脊骨之盡露者。斥澤鹹鹵不生五穀・桑麻・六畜。其民茸毛。婦人黥面文身。男子挾弧插毒矢于頭。射熊羆蠟虎。獨鮭魚以爲食。無文書。刻木結繩以爲約束。獨知敬日景。曰。是天皇所宗也。毛人北與魯西亞夾海相望。自魯西亞以西南緣海數十蕃。璊古留・靺鞨・滿洲・女直・兀良哈・朝鮮・渤海及清氏。其最著者。與中國之北陸・山陰・西海千里相望。山陽・山陰・西海及伊豫土佐。其風氣概同。其地小險小沃。其民鄙瑣。其言語卑賤。其產則薦席織布。特肥前・土佐以西。頗有大險大沃者。其民頗類信濃・陸奧。陸奧・西海其人長大。山陰・山陽其人短小。肥前管清氏及紅毛榜葛剌暹羅𠺕咬吧諸蕃交市。肥前西北有二島。曰壹岐。曰對馬。對馬・薩摩管朝鮮・琉球二蕃。二蕃與毛人。景行以來皆服皇朝。經源氏・足利氏而寖倨。豐臣氏而降復故。皆貢方物焉。胡馬海東青虎皮及水銀朱破瑇瑁翠羽酪酒諸物。萃于征夷府。朝鮮之地倍毛人焉。琉球三分毛人之一。其大文於毛人而柔弱。非毛人比。琉球最纖軟易制。故其執禮尤恭。蓋地脈之右降者極於此。非如左之強也。朝鮮・琉球與毛人。間北海而相去者。四百餘里。是故皇和之邦。六百里磬折矣。

賴襄曰。吾嘗適平安。瞻先王之遺風。遂濟淡海。歷三關故趾。踰函根。而至關八州之野。左俯東海。右望中山諸嶽。亦睹覇之略也。於是嘗圖天下山河。指謂人曰。此非某氏據者乎。此非某氏與某氏戰者乎。而吾褒衣以行焉。則誰力歟。余悲游之不可復。聊敍七道之略如此云。

封建略

本朝封建。其來久矣。遂古之史。往往有稱某國君者。蓋鴻荒而來。相襲爲君長。此豈封建所源耶。景行・成務而後。稍剗强梗。蕩一海宇。國置造司。猶因其國人用。至大化白鳳之際。則每國分守介掾目治之。考課易置。而海內爲郡縣矣。當斯之時。上下田祿。皆屬虛封。而等以五。曰食封。曰祭田。曰功田。曰職田。曰位田。位田職田。詳諸官制略。食封凡十八等。皇后東宮各二千戶。一品親王八百戶。二品親王四百戶。無品親王二百戶。內親王減半焉。太政大臣三千戶。左右大臣二千戶。大納言八百戶。中納言四百戶。參議八十戶。致仕者減半焉。正一位三百戶。從一位二百六十戶。正二位二百戶。從二位百七十戶。正三位百三十戶。從三位一百戶。自正四位上。至從五位下。給麻布絲綿而已。凡封戶之租。分爲二。其一納諸縣官。其一

納諸封主。此食封之略也。所謂功田者。大臣之有功而賞之也。凡四等。曰大功。曰上功。曰中功。曰下功。下功止其身。中功及三世。上功及十世。大功世襲之。如近江公・越前公是也。然於近江州某郡。賜功田若干町。則號曰近江公耳。而封建之勢未見也。自相門世權。非大上功者。亦以其閥閲。世襲采邑云。古者五等之田。皆給官符。收其正稅。而獄訟諸政不得犯國守之權。至其後則不然。加之西蕃之教被我皇土。所在僭封。出先王之制外。因襲蟠屈。如封建然。然而寢梗國守之令。而各自治。廼刹龕之大者。或負險睢視。甚則植柵執兵。動抗王命。貴人乃倚以爲重。聲氣相結。守介則束手而傍觀焉。是故後三條帝之矯王政也。首奪莊園之符。莊園者。世襲之謂也。天皇晏駕。矯者復寢如故。承保天仁而降各國莊園。居其十八。而守介號令所及纔一焉。甚則國守終不赴任。而遣所謂目代者。權以其國之豪族武人。爲之目者也。是目亦非眞目也。凡天慶・貞元以來。武官之權。積重不回。至保元以後。則朝廷賴之以伸其所欲。而酬賞之典。勢不得不多。於是平清盛之邑。連播磨・肥前等五州。族屬所食。殆亙海宇之半。則往往遣家人採稅。而目代亦廢矣。源賴朝之起。起於目代・家人相淆之釁。自略相摸・武藏・上總・下總・安房・伊豆・信濃・越後。而朝廷不禁焉。又賜大功田百町。又因其請賜豐

後。皆世襲焉。又因請各國置守護以護公田。置地頭以監私采。皆逐畝課糧米。則所謂家人而世襲薄祿者。碁布海內。傚其主所爲。疽蝕其傍近。薄者寖厚。以終北條氏之世。郡縣之制以壞。而封建之勢漸焉。至建武中興之時。朝廷欲以特恩收武臣之心。則封足利氏兄弟以武藏・下總・常陸・遠江。封新田氏兄弟以上野・播磨・駿河・越後。封楠氏以攝津・河內・和泉。封名和氏以伯耆。封千種氏以三大州。其他朝官皆賜一州若五六莊。而世襲之。源氏而來守護家人所食。許其仍舊。令世襲之。特其係逆賊親黨者。盡奪之。併其三四采賜諸朝士。而封建之勢捌焉。室町之起也。足利尊氏大度喜施。以謀奪中興業。是以陷城拔國者。從而與之。子孫皆襲其遺謀。至其中世。混一海內。而其親族之分封者。鎌倉食關東八州及陸奧・出羽。此其最大者。斯波氏食越前・美濃・尾張。亞之。其家臣則細川氏食讚岐・阿波・攝津・丹後。畠山氏食紀伊・河內・越中。大內氏食安藝・周防・長門・豐後等諸州。赤松・山名二氏分食但馬・播磨・備前・伯耆・因幡・美作・石見等諸州。京極・六角二氏分食近江・出雲・隱岐・飛驒。而一色氏食伊豆。土岐氏食美濃北邊郡。武田・村上・諏訪諸氏。分食甲斐・信濃。今川氏食駿河・遠江・三河。其他西有大友・河野諸氏。東有佐竹・結城・千葉諸氏。中州有北畠氏。皆因其服封之。而封建之勢

成焉。先是。山名氏自尊氏時。叛服無常。以略有但馬・播磨等十州。世謂之六分一。義滿討而削之。至於義政。復封以數州。與細川氏爭權而鬭。自是而降羣牧樹黨。割據其食邑。不復朝將府。將府不能禁也。其更相吞噬。稍爲强大者。如武田氏之於諏訪・村上氏。長尾氏之於富樫氏。其他大友・龍造寺氏之類皆是。其傾擠攘奪者。如三好氏之於細川氏。兩上杉氏之於鎌倉氏。甲斐・織田・朝倉三氏之於斯波氏。皆是。豪傑暴起。乘隙取之者。如北條氏之於上杉氏。毛利氏之於大内氏。長曾我部氏之於三好氏。皆是。以至天文・永祿之交。海内合爲八九。爭納亡命亡賴之士。競務富强。帶甲各數十萬。積粟如丘山。至元龜・天正之交。織田氏稍鋤豪傑。寸攘尺取。以併近畿十有八州。始以穀祿多少。差其功最。其親族之分封者。二子信雄食伊勢十五萬石。三子信孝食其五萬石。弟信包亦食其五萬石。其餘諸州悉分諸功臣。功臣最大者。柴田氏食越前。瀧川氏食上毛。明智氏食丹波。丹羽氏食近江。木下氏食播磨。將用以四出。盡芟海内豪族。而代家臣充之也。而其志未成。爲明智氏所弑。木下氏誅明智氏。立信長嫡孫秀信。以近江三十萬石。爲其湯沐邑。而其餘遺地與公族同僚。便宜分之。信雄取尾張。信孝取美濃。柴田氏取近江北邊郡。丹羽氏取若狹。木下氏取丹波。已而木下氏悉

併公族同僚所取。以掃蕩四方。更姓豐臣。乃見彼寸攘尺取如彼艱難也。於是。務爲粗略。以歲月定海內。其服降者因而撫之。削而存之。有功勞者。輒擧數州數郡而封之。其南征也。封其弟秀長于大和・河內・和泉。封其姪秀次于近江。封蜂須賀・福島・生駒三氏于阿波・伊豫・讚岐。長曾我部氏以土佐降焉。則因而撫之。其西征也。浮田氏以備前・美作。毛利氏以山陽・備中以西十州。島津氏以西海六州服焉。則皆削而存之。龍造寺氏以肥前降。則因而撫之。封小早川・黑田・加藤・小西四氏于筑後・筑前・豐前・肥後。當此時。北條氏據關八州。富强甲海內。甲斐・信濃等五州亞之。豐臣氏結五州諸將。以滅北條氏。擧北條氏故地。以封五州諸將。擧五州以封信雄。辭之。乃逐信雄。放之出羽。奉秀信于美濃。封秀次于尾張及伊勢北邊郡。加藤氏于甲斐。中村氏于駿河。池田・田中二氏于三河。堀尾・山內・渡部三氏于遠江。仙石・石川・毛利・日根野四氏于信濃。上杉氏以越後。前田氏以北陸三州。佐竹氏以常陸。伊達氏以陸奧服焉。則皆因而撫之。獨伊達氏削其南邊郡。以封蒲生氏。隸以百萬石。以鎭東國諸將。而封建之勢定矣。蒲生氏者。近江土豪也。豐臣氏嚮擢之。封以伊勢十餘萬石。至此。乃加以九十萬石。謂之曰。守我東門者。非若無可者。後數年因事奪其八十萬石。以遷上杉氏。豐臣氏

之宰天下。概此類也。其能速定封建之勢以此。其不能長持封建之勢亦以此云。故其季年諸牧長遷徙加損者猶多。今不悉擧。大抵初以粗略之計併海內。海內之地已盡。而功臣尙有不可不賞者。故奪此予彼。左支右吾。於是。丈量田畝。一變古法。蓋本朝之制。造於孝德帝時。五尺爲步。步長三十步。廣十二步。爲段。十段爲町。六町爲里。豐臣氏變之。以方六尺五寸爲步。三十步爲畝。十畝爲段。十段爲町。三十六町爲里。此法傳至于今。此固封建之勢而變者也。其封建之級四等。亦存至今。概百萬石以上一級。十萬石以上一級。五萬石以上一級。三萬石以上一級。一萬石以上一級。三萬石始得列於執政之臣。五萬石始得自通于本朝。

賴襄曰。和自守而侯。漢自侯而守。宇宙之略云爾。漢有柳生者。嘗論侯守之際。曰。封建勢也。非聖人之意也。吾生封建之國。究其世變。以知其言之信然。然我之勢者。大江生實成之端也。余曰。封建勢也。制勢人也。顧人謀如何而已。吾作封建略。恨不使柳生目我今日。又恨不得起大江生。與論其謀也。

官制略

神世以上尚矣。神武帝時有將。有相。有國造。有縣主。至成務帝。始置大臣。國郡置長。縣邑置首。又置屯倉首。其他有倉部・物部・土部・服部等名。以其邈也。不得而詳云。仲哀帝加置大連。與大臣列。而十餘世因之。孝德帝時。始備官制。廢大連。定置左右大臣。亦加置內大臣。終置太政大臣。天智・文武之際。官制大定。蓋比推古・舒明。始通隋唐。簡質者漸趨於文。以冠服采色。定其位級。推古帝創十二階冠。孝德帝制七色十三階冠。天武帝改爵位號。定朝服采色。至稱德帝。一變官名。光仁帝卽位。盡復其舊。今不悉記焉。特就其大定至今者。敍其大略。曰。自一位至三位。各分正從。爲六階。自四位至八位。各分正從。而正從又各分上下。爲二十階。從八位下之下有大少。初位各分上下。爲四階。凡三十階。以敍諸臣。別有自一品至四品四階。以敍親王。別有勳十二等。第一等准正三位。第十二等准從六位下。凡位階皆以少者爲貴。位階之略如此。曰神祇伯。曰太政大臣。曰左右大臣。曰內大臣。曰納言。曰參議。曰外記。曰左右辨納言辨。皆有大中少三等。是爲內文官。曰近衞府。曰兵衞府。曰衞門府。皆分左右。近衞將有大中少三等。曰左右馬寮。曰兵庫寮。是爲內武官。曰太宰府。曰按察使府。曰國守。曰郡領。是爲外文官。曰征夷將軍。曰鎭守府將軍。曰軍團。曰牧。是爲外武官。曰彈正臺。曰左右

京職。曰伊勢齋宮寮。曰加茂齋院司。曰修理職。曰勘解由使。曰檢非違使。曰鑄錢司。曰左右修理宮城防鴨河造寺施藥院四使。曰奬學淳和學館三院別當。曰內豎所內敎坊內膳御廚子大歌所樂所七別當。曰記錄所。曰藏人所。齋宮以下是爲令外之官。曰妃。曰夫人。曰嬪。曰宮人。宮人之下有十二司。曰內侍。曰藏。曰書。曰藥。曰兵。曰闈。曰殿。曰掃。曰水。曰膳。曰酒。曰縫。是爲後宮官。曰東宮傅。曰東宮學士。曰春宮。春宮之下有四監。曰舍人。曰主膳。曰主藏。曰主漿。有五署。曰主殿。曰主書。曰主工。曰主兵。曰主馬。是爲東宮官。曰文學。曰扶。曰家令。曰從。曰書吏。是爲親王官。曰大別當。曰執事。曰年預。曰判官代。曰主典代。曰官人。是爲院官。百僚之政統諸八官。曰中務。曰式部。曰治部。曰民部。曰兵部。曰刑部。曰大藏。曰宮內。謂之八省。屬中務省者。十有三官。曰侍從。曰內舍人。曰內記。曰監物。曰主鈴。曰典鑰。曰中宮職。曰大舍人。寮曰圖書寮。曰內藏寮。曰縫殿寮。曰陰陽寮。屬式部省者一官。曰大學寮。屬治部省者三官。曰雅樂寮。曰玄蕃寮。曰諸陵寮。屬民部省者二官。曰主計寮。曰主稅寮。屬兵部省者一官。曰隼人司。屬刑部省者一官。曰囚獄司。屬大藏省者一官。曰織部司。屬宮內省者十有一官。曰大膳職。曰木工寮。曰大炊寮。曰主殿寮。曰典藥寮。曰掃部寮。曰正親司。曰內膳司。曰造酒司。

曰采女司。曰主水司。八省之政。統諸大政官。大政官有三局。少納言左右辨是也。左辨管中務式部治部民部。右辨管兵部刑部大藏宮內。左右辨局左右大吏掌之。少納言局外記掌之。凡百官屬皆分四等。諸省曰卿輔丞錄。諸職曰大夫亮進屬。諸寮曰頭助允屬。諸使曰長官次官判官主典。諸國曰守介掾目。彈正臺曰尹弼忠疏。四府衞曰督佐尉忠。太宰府曰帥貳監典。鎭守府曰將軍副將軍軍監軍曹。獨諸司三等曰正佑令史。諸省之輔丞錄。諸職之進。臺之弼忠疏。四衞府之尉忠。太宰府之貳。皆分大少。遣唐使征東大使征夷將軍之類。皆臨時所命。在此外焉。官職之略如此。位曰敍。官曰任。諸官所敍之位。大抵太政大臣爲正從一位。左右大臣內大臣爲正從二位。近衞大將彈正尹大納言中納言太宰帥。爲從三位。神祇伯參議左右大辨八省卿四衞府督藏人別當。及頭東宮傅諸職大夫諸使長官。概爲正從四位上下。少納言侍從監物大上國守鎭守府將軍諸寮頭親王家令。概爲正從五位上下。大外記左右大史大內記近衞將監諸司正。概爲正從六位上下。其他可以類推焉。其除目則春秋二次。秋除京官。春除外官。太政官式部省司之。大納言大辨八卿四督彈正尹太宰帥之類係敕任。其餘皆係奏任。大納言以下皆有權官。以德行才藝勞效三者。及上上至

下下九等。考課之。以秀才明經進士明法等科選擧之。非三位以上。不得昇殿。而四位五位或特賜昇殿。秀才明經上上第者。進士甲第者。皆授八位。明法甲第者授初位。藤原氏以門地爲敍任。有攝家清華名家羽林家等之號。以至于今。其敍任各有定例。百官之制至此始壞焉。院政以降再壞焉。其所謂代者猶曰權也。大凡百官之田祿。凡十四等。一品八十町。二品六十町。三品五十町。四品三十町。正一位八十町。從一位七十町。正二位六十町。從二位五十四町。正三位四十町。從三位三十四町。正四位二十四町。從四位二十町。正五位八町。婦女繫位者。減三分之一焉。謂之位田。又有職田。太政大臣四十町。左右大臣三十町。大納言二十町。職田止於重職。職之重者莫若太政官。蓋上古始有大臣。而仲哀帝畏其偏重也。故加置大連以分其權。列四五員。而轄諸天子。孝德乃立兩大臣。其置內大臣者。寵異藤原鎌足也。於是。終置太政官。以皇子司之。稱曰知太政官事。乃廢帝孝謙以大臣任之。曰太政大臣。而至文德以後。則藤原氏以外舅世襲焉。藤原基經之廢陽成立光孝。光孝特敕博士。令議太政大臣有職掌否。當唐何官。帝蓋將使答曰。古制無職掌。當唐大師。當時博士不知出此。蓋答曰。其職掌天下大政。當唐丞相同平章事也。於是。詔曰。萬機之政。盡關白基經。朕

垂拱仰成爾。後乃有攝政。關白。及內覽。宣旨。准三宮等之號。至藤原伊周之免罪。又置儀同三司。位亞大臣云。大臣之外職尤重。權尤隆者。爲大將。上世大臣兼大將之職。軍國一致。而以重臣握兵柄。不能無太重之弊。乃有眞鳥馬子之禍。大化之廟謨蓋懲焉。故別置近衞府。立大將以抗大臣。分其左右。多立其屬。而皆轄諸天子。然及至藤原氏之盛。有自爲太政大臣而以其二子爲左右大臣大將者。藤原氏衰。而平氏興。其所爲皆倣藤原氏。平氏滅而源氏興。爵位不及二氏。而威權過之。先是源平氏雖有武功。不過四位國守。白河以還。乃至刑部卿。至中納言。至太政大臣。至世襲征夷大將軍。而兼右近衞大將。而後天下一變矣。爾後八省百官悉屬虛器。而諸國司有守護。莊園有地頭。天下之民厭朝官。而喜守護。地頭之武斷。其所在不決者亦皆取決於鎌倉府。府開聽受之。賴朝初置公文所。及其爲右近衞大將。則改曰政所。政所之官三。曰別當。曰令。曰寄人。又置問注所。問注所之官一。曰執事。又置侍所。侍所之官一。曰別當。侍者士也。故侍所之官。獨以武人爲之。政所問注所皆以京師儒生來事者爲之。政所掌大政。問注所掌四方訟訴。皆主公文。以土肥實平監京及播磨。備前等五州。北條氏承之。世以四位相摸守輔將軍。攝天下之政。自稱執權。其告成事於朝廷。以連

署行事。或以一署。後世稱老臣曰加判列者。蓋本於此。後定政所曰評定所。廢問注所。置引
附番。毎番有頭人。既而復問注所與引附參焉。承久之後。置府京六波羅。以子弟掌之以監
京。又置評定所焉。遣宗族一人於筑前。號鎭西探題。權西海一道事務。又遣一人於長門。號
中國探題。權山陰山陽二道事務。又數遣使諸道。察守護家人之貪廉。鎌倉官制大抵盡於
此。簡而盡矣。是以天下粗休息無爲。而建武之政亦復王家舊制。而參取武典。朝廷百官如
故。而廢攝政關白。後置征東・征西二將軍。其他官制見於法律略。其酌量時勢。頗有得宜。而
天下之心已簡便武典久矣。見朝官制苦其拘束。則皆趨于足利氏。足利氏復其簡便。而較
諸鎌倉則詳焉。尊氏義詮之際。東國有管領。以宗族爲之。世襲焉。京有執事。以舊臣之習政
治而親信者爲之。後改稱亦曰管領。爾後百度頗具。義滿分其宗族舊臣及諸牧長之門地
等爲十二級。曰一族。曰大名。曰守護。曰外樣。曰評定衆。曰御供衆。曰申次。曰番方。曰國人。曰
奉行。曰末士。別置探題檢斷二官。以管遠地。大名者。鎌倉而來所以呼土豪里正也。外樣者
謂敵國服屬者。供者謂衞從也。申次者謂不得自通於上也。又立三職七頭。撰舊臣充之。皆
世襲焉。曰斯波。曰細川。曰畠山。此三氏更爲管領。號三職。曰山名。曰土岐。曰京極。曰上杉。曰

一色。曰。赤松。曰。伊勢。此七氏分爲奏者武者頭侍所別當京奉行。號七頭。奉行猶曰使也。頭猶曰長也。先是。北條氏欲殺京官之權也。已分皇胤爲兩統。遂分藤原氏。所謂攝家者爲五流。分所謂淸華者爲七派。更任大臣大將納言辨等官。自執奏之。更互錯綜。如奕碁然。蓋亦收其予奪之柄於己。自爲德色也。故每東吏入京。一家痛哭。一家歌舞。而苞苴集北條氏之門。然所謂五流七派。終爲後世定例。而足利氏亦僭擬之也。而鎌倉管領亦倣宗家例。自稱御所。御所者。室町所僭號也。稱國老上杉氏。曰管領。稱小山佐竹宇都宮結城千葉等八名族。曰八館。蓋室町開府密邇王廷。習見文物焉。顧視其家制。有甚質略者。故日繁其文。文之弊弱。終爲所謂管領者所制。爾後管領亦僭。而管領家臣專其政事。制度之紛窮。而後織田豐臣二氏出而糾之。織田氏分其家臣討略四出。而一麾不起。無復官制可言。豐臣氏之世置五奉行。其三人掌法憲。一人度支。一人管僧祝。後簡天下牧長尤强大者五氏。稱五大老。次强大者三氏。稱三中老。分麾下兵。爲十二組。組猶部也。乃置十二頭。五奉行之所不決。決之五大老。五大老與五奉行不合。則三中老調和之。官制之可概見者如此而已。亦尙簡質也。自源氏而下。其官制皆軍國一致。重臣握兵之禍甚於上世。自足利氏而下。其重臣皆有

封土。權力兩隆。故簒奪放弑之禍。項背相望。而後世謀國者仍不改焉。是其所以不永世也。而後名器棼亂。愈降愈甚。比鎌倉創立。武士皆以其所繫朝官。加姓名之上。以便稱呼。而至室町而降。則妄取朝官之號以爲別字。往往數人同稱一官。或封在讚岐而稱武藏守。稱越前守而問其邑則播磨矣。以至于今。不可改也。然至王朝。尙猶守故器云。攝籙五家更爲大臣。以與武門上將抗。而八省百官概如古焉。武門上將職位。源平足利織田豐臣五氏。概以左右大臣爲極。特平清盛源義滿豐臣秀吉至太政大臣。義滿以降其敍任。次序每有定例。大率爲嗣子時。敍正五位下。任左近衛中將。累遷四位三位參議大納言。及其代立則遷正二位。若從一位。轉內大臣。若右大臣。任征夷大將軍。兼右近衛大將。補淳和奬學兩院別當。兼左馬頭。凡本邦尙族。文武世官。故自古有氏長者之目。類爵名焉。藤氏長者必爲攝政關白。橘氏長者必爲學館院別當。而源氏長者必爲兩院別當。兩院別當之職掌遷擧。左馬頭之職掌天下馬政。故武門符天下。雖其勢力乎亦資於名器也。而其家臣門地素隆者。亦得拜朝爵。室町時有敍位三位任大納言。是爲極貴。至豐臣氏。則專挾朝廷以令天下。故武人牧長往往至納言參議。而其舊臣至四位若五位。所謂五大老・家宰亦或有拜五位者。武門

官位與公家自別。每高一等焉。其儀服則大納言中納言參議中將少將侍從。服直垂。均於上將。其四位者服狩衣。五位諸大夫服布直垂。諸官長服布衣。諸士服素襖。而平時皆服便服。無等章。便武事也。特帶二刀。以別於庶人。蓋上世雖庶人。皆有衣冠之制。鎌倉之時。其遺風猶存。至室町之季。而後悉亡。

賴襄曰。吾讀本朝典籍。考其官制。想見文物之美。及見於今之民俗。則未嘗不太息也。今也齊民往往自稱兵衞衞門。是何僭也。蓋嘗思其故。上世諸國軍民從征有功者。拜四府尉。廼加姓與行。榮稱於其鄉。此豈今民俗所由耶。甚哉名之婺也。雖然。是猶以爲先王遺民乎。

新策卷之一終

新策卷之二

六略下

兵制略

頼襄曰。古稱六十六國之兵。每國五千騎。大凡三十三萬騎云。此以中朝以後之制言之也。上古之世。文武一途。擧海內皆兵。而其元帥則天皇。其偏裨則大臣大連。是國勢所以軼萬國也。及至中朝。制度漸繁。乃特置將帥。而兵部居八省之一。六衞之將。將天子親兵。建左右馬寮。以畜貢馬。而有頭監焉。又有兵庫寮者。天下兵制。乃可概擧。而兵農一致。未有所謂武士者也。大率沿邊之國。諸郡皆有軍團。四分一國之丁。而取其一。至文武朝改之。三分取一。兵一千人者曰團。置大毅一人少毅二人領之。六百人以上者。大毅少毅各一人。五百人以下者。毅一人。二百人者。校尉一人。一百人者。旅帥一人。五十人者。隊正一人。十人者。曰一火。

五人者。曰伍。伍二曰火。火五曰隊。隊二曰旅。旅十曰團。凡兵每一人。充米六斗鹽二升。每一
火充六馱馬。其便騎射者。爲騎兵隊。其餘爲步兵隊。每隊定强壯者二人。分充弩手。其上番
者向京一年。向防三年。向京者曰衞士。向防者曰防人。如舍人帳內資人事力。亦兵士之名。
而與衞士別。其衞士者隸左右近衞者六百人。隸左右衞門者千二百人。隸左右兵衞者八
百人。又有隸檢非違使廳者。是皆其尤强幹者。國郡簡點貢之京師。而自餘衞士號曰大番。
不在此限。皆造歷名簿二通。一通在國司。一通在兵部省。每年有司據簿以次差遣。若有征
伐之事。令沿道諸國差發。其二十人以上者。須契敕。有關之國。須契。其餘待敕符勘合遣之。
凡征行一萬人以上。將軍一人。副將軍二人。軍監二人。軍曹四人。錄事四人。五千人以上減
副將軍軍監各一人。錄事二人。三千人以上減軍曹二人。各爲一軍。每總三軍。大將軍一人。
大將出征。必授節刀。臨軍對敵。大毅以下不從約束者。皆聽其專決。還日具狀以聞。於是。以
動位十二等。論功酬勞。而奪其兵權。散兵復舊。凡其器仗建兵庫藏之。諸國並有庫。出納以
時。皆與兵部共其事。蓋兵部掌內外武官名帳考課選敍位記兵士以上名帳朝集祿賜假
使差發儀仗城埤烽火等事。而不得于征伐之事。將帥臨時被命者。專征伐之事。而不得常

握其兵。六衛之將督常握其兵。而其力不及臨時將帥。其權不及兵部諸官。朝廷防亂之制如此。嵯峨・淳和以降。百度弛廢。藤原氏世相。而源平氏世將。陸奧七國之兵。及關東八州之軍民。世屬將家。雖平時而自稱武士。武士之名於是乎起。鳥羽之朝下制符七道。禁諸國兵民屬源平二氏。而不可止。後白河帝乃假二氏之力。以固其位。而二氏更相呑噬。天下兵馬之權竟歸於源氏。源氏以降。天下之人咸隸武門。無後兵制可言者。猶上古之世。而兵農之分又自此始。當二氏之相傾也。各私其兵。稱曰家人。家人者。世相領屬之謂也。而源氏世樹功邊陲。其家人什陪平氏。是其所以剏霸業也。家人有大名小名之目。名者。名主也。蓋其始豪戸大農。多蓄丁男。所謂歷名帳。此戸之丁居其半。故謂之名主。而百度之弛。因仍苟且。差發不次。其被差發者。亦喜功徼賞。終至不自畊而役使下戸。已則稱武士。專習武事。自源賴義爲將士請賞典。而朝議靳而不與焉。源義家拊循有方。恩威竝施。然後東國之大小名。皆爲其家人。以及源賴朝。而西伐東討。皆憑其力。霸業以成矣。其有征伐也。作書檄下沿道。則所謂家人者。帥其私卒。不日而集。私卒有家子郎等之目。皆謂其同族子弟也。其器用百需。皆資給其士。而人人以畜牧爲務。騎步隨便。散而自戰。終以此得意天下。而以家人爲諸國

守護・地頭。使各自守。守其土而食其毛。農食六分而兵食四分。兵農之勢隱然分矣。而其兵尙猶地著也。源氏・北條氏之世。兵馬・精强。非後世所及者。以其地著也。降至足利氏。承源氏・北條氏守護之制。而倣中興封建之典。兵馬事體漸變其故。加之軍役煩興。諸國武士稍離其故土。常就其將率。隨而轉徙。而天下之兵漸不地著。至其季世。羣雄割據。務競進取。往往招納亡命之士。以爲爪牙。取其奉養於農。農不給焉。則使亡命之徒略其外境以自封。兵之與農始不相讎。自織田氏以至豐臣氏之時。則將校之封。數數紛更。於是常聚其士卒于城府。以便遷徙。其不地著者定。而兵與農全分矣。故其所謂士者。自非職事官。皆更直番衞。猶古之衞士。而貴重異焉。士之下有徒。徒之下有卒。士有扈從馬廻之目。皆戰國時呼麾下者也。卒有足輕與力同心之目。皆戰國時呼所納亡命者也。自士以下皆分部伍。置頭領之。此類概謂之兵。而士與徒世襲祿位。卒賤役也。簡黠罷免。一任其頭長便宜爲之。其或有所闕乏。乃驅農民彌縫之。當是時。以穀課之多少。等其兵役。以兵役之衆寡。等其貴賤。大率一萬石者百六十五人。十人一伍。伍長一人騎馬。爲十六騎。五十騎一隊。併步卒雜兵。爲五百人。一隊之陣。鳥銃居先。弓次之。長柄次之。鎗次之。雖多至數十萬騎。以此推焉。然織田氏豐臣

氏居畿內。多步兵。少騎兵。不類源氏・北條氏興關東習騎戰者。而當時言兵者。概宗武田氏。武田氏蓋國甲斐・信濃。其地險阨。不便騎戰。其騎馬徒取致遠。而及戰則下馬徒步。豐臣氏之西征也。令具三十萬人糧二萬匹芻。蓋騎戰之廢始于此時。而士有祿三百石。然後得具一馬。故三十三萬騎之數。不可與古比云。

財用略

我中國。上古蓋謂之食足之邦云。至新羅・高麗諸蕃或貸我穀種數萬石播之其土。足以見其治之貴穀矣。賴襄曰。余廣視宇宙。無不錢穀爲重者。而古貴穀今貴錢。今貴錢者。彼此皆然哉。是以古之時。獨有穀而無錢。亦猶彼日中之市抱布貿粟也已。夫孝元而上尙矣。崇神帝敬天崇神。轉災爲吉。疫息而大熟。十二年始校人民。更科調役法。時稱泰平。泰平者穀之周也。爾後列朝之策。穀飢必書。穀熟必書。以爲大故焉。垂仁帝始詔諸國。修池沼。置屯倉。以備水旱。是垂仁之所以爲仁也。仁德帝都攝津之難波。登高津之臺。望炊烟而不起。以爲重憂也。於是乎。室不堊。柱不藻。菲其服食。悉除天下之課役。勵精求治者三年。登臺望之。嚮之

不起者。如朝霧之氣。帝喜作歌。民至今誦之。登臺之章是也。帝猶以爲不足也。乃鑿茨田江。築堤開田。所謂鑿江也。亦鑿大渠于山背。以漑其田。遂置茨田屯倉。定舂米部。其餘備池沼。鑿溝渠。開墾田。一代之策不絕書焉。是仁德之所以爲仁也。故平安之得民乎千載之下也。蓋源于此也。自是其後。列聖相承。無不以穀粟爲治之本。顯宗以遺孽。久潛微賤。備知民間疾苦。及卽位。勤政從約。以富百姓。歲比大稔。米石一錢。其崩也。民如失其父母。以武烈帝之猛。尙使皇后親蠶。詔天下課種桑。桑且然。農可知已。安閑帝最專意乎此。以前代蓄積未廣也。於是。欲天下國郡莫不置屯倉者。而中道崩。宣化帝繼先皇之志。遣大臣蘇我某等。巡按諸道。列置屯倉。詔曰。食者天下之本也。金銀萬貫不療飢也。白玉千箱不補寒也。其貴穀也如此。以至孝德之朝。其治民之制。始可得而記云。五戸相保。一人爲長。以五十戸爲一里。每里。長一人。滿六十戸者。割其十戸立一里。置長一人。不滿十戸者。隷大村。田五尺爲步。長三十步。廣十二步。曰段。一段之田。獲米二石五斗。凡度以秬黍中者十粒爲分。十分爲寸。十寸爲尺。十尺爲丈也。凡量以秬黍中者一千二百爲籥。十籥爲合。十合爲升。十升爲斗。十斗爲石也。民自二十二至六十曰丁。丁男一人。給田二段。女子減三分之二焉。謂之口分。其賦三

等。田有租。身有庸。戶有調。租者丁男一人。米二斗二升。庸者丁男一人。每歲十日役使之。調者絹絲綿布及雜物。隨其土宜。每一丁絹八尺五寸。六人成一疋。布二丈六尺。二人成一端。孤寡鰥獨不預調課。謂之不課戶。每六年檢戶籍班田。而有災必蠲。有飢必除。有屯倉。有義倉。有公廨田。屯倉以備凶荒。義倉以賑貧困。公廨以塡逋欠。蓋倣李氏制。而仁厚過之。此時蓋始有錢與穀竝用。而獨稅穀不稅錢也。自從大化白鳳。馴致慶雲和銅之際。錢幣之用漸盛。金爲上幣。銀爲中幣。錢爲下幣。置鑄錢司于京。歲鑄之。額十萬一千貫。用銅五萬一千餘斤。鉛一萬五千餘斤。凡權衡以秬黍中者百重爲銖。二十四銖爲兩。十六兩爲斤也。蓋承平之久。商旅四達。始貴此賤彼也。金銀之製。靡得而知。而和銅貞觀寛平延喜諸錢。猶有存乎今者。大都以純銀若銅。有輪郭肉好。徑一寸七八分。初廢銅錢行銀錢。後銀銅竝行。蓋初苦錢輕物重。後嫌錢貴物賤也。其後令伊賀伊勢等諸國始輸錢調。延及諸國。稱德之朝。工役繁興。刑法嚴峻。吏民始彫弊。方帝之時。京城東西市糶糴米斗百錢。始令民輸錢於官。以拜爵位。而漕陸奧出羽之穀六萬餘石。以賑飢民。光仁桓武繼之。革諸弊政。自聖武以來。東北多事。及至於此。遣征東將軍坂上田村滿等。發東海東山兵二十萬伐陸奧夷。救二道運糗

糧十二萬石于多賀城。而糶價賤於前朝數等。禁輸錢取爵。當此之時。六十州守吏以官爵
賞罰之。民部省總天下上計。天子親聽之。海內富庶。烟火萬里。而王家之運漸趨叔季。禮文
日美。物力日絀。末民豪權之徒起。民產始不均。嵯峨帝朝遣吏括畿甸富商之錢。以散給貧
民。帝始不親民政。民部諸官概世官子弟。不習下情。而委諸守吏。班田之法漸廢。民產愈不
均。及至文德清和之際。相家專政。藤原良房爲清和帝之外舅。請帝幸其第。召農民作耕耨
狀。使帝觀之曰。欲示稼穡艱難也。相家之結人心。自此時始。而上下相習。奢侈漸甚。延喜帝
欲行儉富民。與藤原時平謀。使時平盛其車服而朝。天子則大怒。禁其朝請。卿大夫震慄徙
儉。而未幾復故。後三條帝明達勤儉。以富民爲任。諸弊大革。自班田制廢。相家專權。權門莊
園交錯治下。守介之政不得周民。及帝之時。乃收七道莊園公文。而悉銷廢之。錢穀上計莫
不親聽。而御宇不永。白河堀河以還。莊園復故。土豪兼併田地者。蟠屈其間。與守介相結。競
爲姦利。縣官不能禁。凡本朝制。兵農一致。每有軍興。兼併之徒。多出兵賦。往往有功效。則方
面將吏倚爲爪牙。又挍其利。收攬小民者。源平二氏爲最。皆世將也。保元之變。朝廷徵兵四
方。而安藝守清盛下野守源義朝等。挾兵威徼功賞。卿大夫束手聽其所爲。而食粟之權竟

全歸將家云。文治元年。源頼朝用大江廣元策。請朝曰。畿內山陰山陽南海西海二十六州。不論權門勢家莊園。每一段課米五升。以充兵糧。以追捕亂後盜賊。制曰。可。此爲將家執兵食權之始。後又請。其所私管相摸武藏上總下總安房伊豆等諸州。去歲以往逋租。盡行蠲免。以復流民。天下州郡盡准之。朝廷又可之。源氏之結人心類如此。北條氏因之益重民事。泰時時頼爲最。其衣食皆儉薄。多人所不堪者。天下是以富庶。而其後世亦驕逸不親瑣事。而委諸嬖臣。民政以壞。而王家乘此以復其權。後醍醐帝恢復之初。橫恩濫賜。而天下土田不給。錢穀之本已不均焉。建武元年。興卒數千人。修造大內。乃徵諸道守護家人采地租稅二十分一。以充其費。又多女寵好珍異。冗費亦鉅萬。乃鑄錢又造紙錢。是爲本朝交鈔之始。民間不便之。廢不行。縣官令不能行者有刑。民勉行之。居無何。足利氏事起。帝南遷。而民不思也。建武之政。封建官制兵制法律其弊多端。而其大失天下之心。而遽爲足利氏所奪。之其最大由也。足利氏則再以武人乘而奪之。爾後載籍不明。無可記也。大抵十三姓終始擾亂中。其民政固不暇如北條氏之密。知徵稅充餉而已。而尊氏義詮數主猶當草創時。自安薄約。至於中世。版圖漸廣。而奢侈漸長。義滿喜興造之始借京畿富商之錢。號曰藏役。每歲

四次。以四時配取。蓋後世牧長。國用盡。仰商賈者。漸於此也。義教之世。嬖寵甚衆。費用累起。藏役愈加。一歲十二次。以十二月配取。至義政嬖寵與造皆倍前代。至室町府殿上之費。一甍直六十萬錢。紙障一具直三萬錢。當此時。藏役頓繁。無復常度。至歲之十一月九次臘月八次。又不能償之。則立稱貸不償之法。號曰平均德政。加之農税二三十倍前代。後世重斂之習。亦漸於此也。又重天下牧長贄幣。凡室町時有特禮。課牧長供其經費。號曰大儀。大儀之舉或九歲一次。五六歲一次。以爲常。而義政時至五歲九次。海內騷然。是以至有應仁之亂。則牧長各保其國。競務耕戰。鑄山煮海。擅有其利。而室町氏坐困矣。至其季也。細川三好松永之徒紛紛而起。更管京畿利權。而最後織田氏興。盡併其權。蓋應仁而降。京城內外。悉被兵燹。宮闕隳廢。公卿大夫往往散之四方。寄食牧長割据之國。而供御無所仰。列朝即位之禮。或舍而不舉。後柏原帝朝。本願寺僧納錢於官。而禮以舉。詔以僧准門跡。門跡者。皇子爲僧者也。後奈良帝朝。周防主大內義隆又納錢。而禮以舉。詔以義隆爲太宰大貳。正親町帝朝。安藝主大江元就獻金助之。而禮以舉。詔以元就爲大膳大夫兼陸奧守。繼其祖廣元之位。自稱德帝至此再舉此政。及織田氏平定京畿。自貸私錢於京城富商。令每月輸其息於

朝廷。以資供御。至公卿家計。無不措置焉。永祿十二年。遂發卒數千人。興造大內。以美濃二歲租充其資。豐臣氏繼起。襲其遺業。大興廢典。其未改幣也。頒金五千枚銀三萬枚於公卿及諸牧長。其已改幣也。頒金三十七萬五千兩。皆發其私藏也。二氏之得人心而暴起。蓋由此類也。然豐臣氏性喜遠大。視錢穀如糞土。天正中起大佛殿于京師。發二十二州卒。二歲而成。其他興造稱之。又屢游觀畿甸。天下物力已絀。而征伐亦不息。文祿元年。遣小西行長・加藤清正等十六萬人伐高麗。令出羽越後諸州負海之郡。運糧轉輪高麗。文祿四年。檢天下土田。蓋前古所無。亦出於索糧也。已而兵連不解。二歲賦役煩重。西南騷然。肥後州盜起。尋請和。慶長二年。和破。復遣十萬餘人濟海。吏四出調發糧餉。不論公私封。天下糴米價石八九十錢。會豐臣氏薨。遺言止役。而天下錢穀已竭矣。先是。大佛災。豐臣氏後主繼造之。以銅鑄佛像。天下見行錢少。錢貴物輕。小民大困。而其度支使石田三成等侵盜縣官。又欲分其罪。則每有軍興及大徭役。千貫之費與五十貫錢於下吏。庶官承風掊克用事。征斂無藝。而天下人心愈離。以至滅亡。然豐臣氏先主起微賤。知民間疾苦。非後主比也。蓋武門之制。官民貿易。不與上古調役之制均。是故古人主奢傷民。儉益民。後世不必然也。是故先主之

數與工役。蓋於天下未一之時。以此合海內耳目。散財於民。以總攬其心也。故當時其幣不甚著。而民乃有便之者。若其租稅。大抵以什之四爲率。其幣則金銀銅三物。金有大鈑小鈑小方三品。銀有大鋌碎銀二品。銅有慶長通寶錢。鋌銀碎銀及錢。概因前代。而大小鈑金造於天正十六年。其生前也。小方金造於慶長四年。其死後也。而皆出於其意。蓋前代金銀二幣大如今大鈑。特此圓彼方。方者劑而用之。此小方所以作也。以小鈑金爲公私通用之幣。而大鈑金以爲牧長贊幣軍與支費。小方金鋌銀及錢。皆以小鈑金爲母。而權之。小鈑其重四錢八分。小方金以下稱之。小方金一錠直千有五百錢。小鈑金一兩直六千錢。大鈑金一兩。直四萬有五千錢。銀則以其鎔形大小輕重爲直。小方金及銀及錢。皆因時價升降其直。而小鈑金之直。一定不易。凡諸幣皆純其質。不多款識。以防盜鑄。民頗便之。施行至今。大凡自兵食之權去王家。其貴穀賤錢之俗猶存。源賴朝之造大佛于平城也。其薦福之金。不滿五千兩。當時以爲盛事云。自足利氏錢幣之用漸盛。至豐臣氏而極矣。相摸之役。餉二十萬石。而金萬枚云。蓋攝津者。仁德之舊都焉。其俗尚貨利多豪商。其地勢。播磨右轉。和泉阿波左抱。東海而西。中如巨江。和泉阿波之交。中斷者。亦如巨江。諸道之漕舶帆于兩巨江。而萃

于攝津者。以萬數。攝津者。攝其津也。大豪據以爲窟宅。賤糴貴糶。以收大利。自足利氏。將門牧長已資其稱貸。豪商操利權而翕張之。至豐臣氏時。天下牧長集大坂者。以其寄寓便錢幣也。則悉仰于此。行長・三成之徒。或起商賈。而執吏務。則與此爭利。其政賤穀而貴錢。其後天下漸平。諸郡國復流亡。戶口滋息。田土加闢。鹽鐵之利加出。而其習不改。蓋先王之制。藏兵於農。經於源氏北條氏而未變焉。故下尺符。則數十萬兵馬立具。而平時不費一斗餉。有事則合。事止則散歸田畝。衣食器用。自足於其土。而及足利氏以降。亂離相踵。兵常合於將。以漸封建之形。封建之形成於豐臣氏。又數遷其封。故兵之常合於將者。益甚。終至住其城下。猶寄寓之人。衣食器用不得不資於商賈。乃悉販其祿。化穀爲錢。則姦民比周。射利其間。分據天下城府。各置壚坫。四達罔利。諸州農亦日捨業改產。集于城府。城府之勢日盛。寄寓之人益衆。而天下之物力偏枯。是以糴價常貴。動至石七八十錢。其最賤者亦不下三四十錢。鹽醢薪炭諸物之價。亦騰踊不可禁。而錢幣之權漸輕。凡天下之糴。陸奧出羽最賤。關東次之。攝津次之。天下貨權。常以此三所爲準。漕運相資。以時升降。而其賤穀貴錢之習如一。是猶大化和同之際耶。蓋升平之習。自古爲然。人而生此。抑何幸也。吾聞近世明主嘗誦宜

化帝詔曰。王言之爲天下之法也如此歟。又下鮮能知之。貴無益之財。儲怨盈庫。謂之良吏。何其謬也。故其下皆愛民不求富云。有嘗上言。曰。世貴義政遺器。臣以爲不祥。猗歟。君臣相戒如此。欲不與得乎。余欲使天下之民知其生之幸也。作財用略。

法律略

上世刑法之書四。曰律。曰令。曰格。曰式。亂離以降。多殘缺者。其詳不可得而知云。今記其大概。律十二。曰名例。曰衞禁。曰職制。曰戶昬。曰廏庫。曰擅興。曰盜賊。曰鬪訟。曰詐僞。曰雜律。曰捕亡。曰斷獄。刑五。曰笞。曰杖。曰徒。曰流。曰死。笞五等。自十至五十。杖五等。自六十至百。徒三等。自一年至三年。流三等。安藝越前爲近流。伊豫信濃爲中流。隱岐土佐伊豆安房陸奥佐渡爲遠流。死二等。爲絞爲斬。大罪之目八。曰謀反。曰謀大逆。曰謀叛。曰惡逆。曰不道。曰大不敬。曰不孝。曰不義。謂之八虐。除八虐之外。皆得議請減贖。贖以銅。特議之目六。曰議親。曰議故。曰議賢。曰議能。曰議功。曰議貴。贓罪之目六。曰强盜贓。曰枉法贓。曰不枉法贓。曰竊盜贓。曰受所監臨贓。曰坐贓。令之目三十。曰官位。曰職員。曰後宮職員。曰東宮職員。曰家令職員。

曰神祇。曰僧尼。曰戶。曰田。曰賦役。曰學。曰選敍。曰繼嗣。曰考課。曰祿。曰官衞。曰軍防。曰儀制。曰衣服。曰營繕。曰公式。曰倉庫。曰廄牧。曰醫疾。曰假寧。曰喪葬。曰關市。曰捕亡。曰獄。曰雜令。其條凡九百五十五條。大略如此。律懲肅也。令勸誡也。格量時立制也。式補其闕而拾其遺也。吾先王謂民命所繫。故如此其周云。凡律令格式之書。緒於大寶。而成於延喜。弘仁貞觀延喜三代各有格式。蓋成乎藤原不比等清原夏野大江音人菅原是善藤原冬嗣藤原忠平等諸人之手。諸人祖廄戶皇子之憲法十七條。皇子則祖種子命之中臣疏也。故本朝法律雖倣李氏之名。其實本祖宗所自有焉。故刑之不上於士。優彼成周。而漢唐宋明不能望我萬一。上古之世。天皇無不親莅錄囚徒。不惡見其慘。而委諸臣下也。雖中古以下皆承其旨。重刑獄事。刑部一省最謹其選。讞詞斷案。必再四覆審。再四奏請。視例獲旨。乃敢處刑。吏之失出者無責。誤深者有罰。至貪墨無文者。則放之。至若死刑則苟有可宥。百方解釋。不能釋者。天子猶不決也。吏則走出。行法之日。雅樂寮遏鼓吹。故孝德天智之際。聽民誹謗。問民寃枉。沙汰諸國吏。平獄放囚之舉。史相望也。蓋上古之法。止於流死二刑。而文武以後參取隋唐制。加以笞杖徒三刑。亦出愍念。非致其繁也。凡中古以上。天皇每昧爽出御於殿椅而

南面。大臣以下百官椅于左右。設高案于階下。置箱焉。五畿七道訴人至極小民。咸坌入于闕。而羣聚于廷。以次進。投狀箱中而退。左右大少辨少納言史外記以次取之。陳諸御前而讀。羣臣議而判之。天子時出一語決之。告訴繁多。或至日昃則卽朝堂進御膳。羣臣亦食於次殿。一日之訟盡斷無餘。天皇乃敢歸燕殿。歌舞娛遊。羣臣亦敢歸安私第。訟獄中有事體重大不可一日斷者。則盤遊皆廢。蓋帝之心以伸民枉白民冤。爲天下之事莫大焉。是以法司諸吏。人人自謹。不能以其私心折律。迨至大同時。未嘗廢此制。而及至弘仁時始廢焉。委諸外朝諸臣。而自居深宮。置藏人。以司傳宣。然猶設虛椅于舊位。藏人坐椅旁。聽羣議。出入相達。遂致天下之威柄歸世相之手。天長時始置檢非違使。又分其僚屬六十餘人。巡按諸國。至延喜以後。置廳焉。刑部省彈正臺。皆爲使廳所奪。而相家概以黨人充焉。法紀益偏。雖然忠厚之俗猶存。天下之心無不一於王室。卽相家竊柄。亦姑息爲宗。自藤原良房曲赦死囚以後。雖常赦大赦。民輒謂出於藤原氏。藤原伊周射花山上皇。律當斬。而減一等處遠流。未幾召而還之。授以美官。法紀之偏可以知焉。而要之仁厚成習。當時之人蓋不甚怪也。故後三條帝開記錄所。親聽民訟。振其紀綱以奪相家之柄。然其宗忠厚戒覆薄者。猶如故焉

舊制五位以上及皇親獲罪對法吏者。設別座分之。凡罪人五位以上當死者。聽自盡於家。
不加執縛。自弘仁時藤原中成以右兵衞督犯謀大逆律。以至保元時三十六帝。三百四十
餘年。下士以上無抵死刑者。保元之亂。藤原通憲建議曰。非常之變。非常之政。祖宗之風不
必襲也。乃論判官源爲義等以斬。平治時權中納言藤原信賴・左馬頭源義朝。作亂。殺藤原
通憲。平清盛誅之。其後後白河上皇假清盛手。以流新大納言藤原經宗・別當源惟方。自此
清盛浸弄威柄。公卿不便於己者。輒執縛流投。遂流關白藤原基房等。然猶藉朝威而行。至
壽永・文治之際。源賴朝開府關東。不從己命者。以軍法從事。西伐之後。雖京畿西國無不從
其約束者。而後天下之威柄轉而歸世將之手。平氏被虜者。皆致諸鎌倉。斬右大臣宗盛于
美濃。先王風化至此而盡。然中世以降。淫縱弛惰。上下相習。法律不足以取信天下。源氏乃
信賞必罰。以振其弊。又援朝廷儒生明法律者。爲其僚佐。參酌時勢。立簡約法。以新天下耳
目。蓋至此有笞杖徒三刑。其餘律條悉廢不用。北條氏沿之不革。而天下之威柄。轉而歸陪
臣之手。時政義時兇逆無忌。凌轢朝官。至府僚則其不便於己者。輒中以危法。然其竊府權
襲藤原氏故術。勉以仁厚攬人心。泰時制貞永式目。東西評定所皆承行之。而時賴貞時之

徒。因守不變。此數輩大抵皆長者。以伸民枉白民寃。爲己任。時賴嘗擢青砥藤綱者。爲引附衆。藤綱爲人廉明。數爲時賴指陳諸法吏姦狀。時賴輒拔其尤姦猾者。黜免之。姦吏少衰。後時賴授政時宗。而老。乃削髮爲僧。野服獨行。周歷諸州。親察士民寃枉。貞時亦景時賴之政。數遣使者。察諸州守護貪廉。以黜陟之。已而所遣使者又藉威權。爲不法。受守護金。不以實還報。而北條氏耳目未之及也。會紀伊道士某至鎌倉評定所。告使者不法狀。貞時驚。盡罷免之。及其老。則微行親察之。北條氏之愼刑獄收人心。此類也。至高時世法憲寢弛。貪墨進用。元亨時奧州安藤某與其族人爭訟。族人爲曲。高時嬖臣長崎高資納族人賂。曲某也。某怒。北歸。據其邑起兵。泰時時賴以來。天下武士背北條氏者。始於此。高資猶弄柄不忌。攝津之渡部氏。紀伊之安田氏等皆叛。海內詾屈。而天下之威柄得暫復於天子之握。後醍醐帝初倣後三條後白河例。置記錄所。親聽民訟。銳意從事。以公恕收民心。以與北條氏相形。而恢復之業成焉。業成之後。記錄所仍舊。楠名和太田富部諸氏以將臣特旨入直焉。天皇時親莅。大訟大獄聽斷於此。置新決所于郁芳門。左右卿相以下大史外記兩判事紀傳明法兩博士直焉。直日一月六囘。以聽斷四方雜訴。而內謁旁行。近習之臣。無時潛奏。以助其黨。

源北條氏而降爲將府屬僚若諸國守護者。中興以來。卒喪其權。朝士近臣乘勢凌辱之。其采地相錯者。牽矯制侵之。於是。來訟則二所斷令如故。而內旨歸諸侵者。海內又復訴屈。而天下之威柄再歸將家之手。足利尊氏以大度資濟以威斷。雖法紀不定時無明制。而懲中興之弊。勉持公平。至義滿之世。其管領細川賴之令今川伊勢小笠原三氏。草將家法式。號曰三議一統大草紙。又有十一位禮節者。其文書則有御內書下文公帖御教書奉書數等。其號令有遵行施行打渡等名。於是。徵天下教書。其出於尊氏義詮親手者循故。其出於權臣高氏佐佐木氏者。則斥之。天下大悅。義持之中世。乃寵赤松滿貞。曲斷赤松氏之訟。而威令漸廢。義教之始政。復禁權門請謁。署管領廳曰。凡訴事者。得奉書後十日出對。過期者勿聽。已而自倦政。又以姬人小辨者之讒。殺一色義貫。將吏人人自危。義政繼之。使伊勢貞親司傳宣。內謁之行。猶中興時。終開天下分爭之端。而天下之威柄移其權臣。而歸其陪臣之手。織田氏與三好松永諸氏角而勝之。議曰。室町所以不能馭其臣者。在於廢法律耳。於是。以家臣分司京畿訟獄。皆宗酷猛。其性忌克。數治將吏舊罪。亦招將吏自危之禍。而天下之威柄轉而歸其將校之手。豐臣氏性比織田氏稍大度。而其猛摯相若也。京畿之政一循前

世。及至爲關白。則朝廷百官及天下牧長。皆在其所制。其平日待牧長以下士大夫。及治黠首。一以軍法從事。而其慘酷視前古。毋比。凡大逆不道以至銖兩之姦。一切斷死。號曰一錢斬。謂竊一錢者亦斬也。於是重罪之戮。無復可擬。則加立梟首鋸首陵遲磔炮烙鼎鑊弩戮赭族等科。差而擬之。諸爪牙將吏承風。皆以毛摯搏擊爲能。末年處其從子秀次於大逆律。令自屠腹。刎其子。疑其有遺種也。其後宮婦御無少長皆斬之。人莫敢言其寃。豐臣氏初置五奉行。兼掌訟獄。戒之曰。大事五人胥議。小事二三人決之。必愼必審。毋愛富而惡貧。凡人有二病。私欲也。挾讎怨也。溺嗜好也。而私欲爲之根。汝輩苟愈其病根。治可幾也。於是。其始政猶有可觀者。其用法雖酷。能執柄一時。蓋由此也。凡自武門執天下之威柄。槪婾爲一切。其時勢然。不獨豐臣氏也。特北條氏承大亂後。天下小康。故式目頗周。然亦勸誡之令。非律比也。其用法大抵因斷例而擬焉。足利氏以下皆然。方元龜天正羣雄割據之際。武田氏用山本晴行之說。創立律五十餘條。施之甲斐信濃諸州。務耕戰便進取。而其民畏而不愛。其國暴歷。蓋本邦之運。未至如西蕃之季。雖戰國爭奪之時。而風氣朴。民僞未開。故律令格式。雖謂本祖宗之法。亦多視外國而誤倣之者。故王家之詳。終不如武門數氏之略爲愈也。而

忠厚之風。我邦所自有。故雖如源氏豐臣氏。而其不上刑於士。有罪則聽其自盡者。猶尙如故焉。此則王家武門所一。皇和之俗所以絕萬國也云。

賴襄曰。吾作法律略。而悲藤原通憲之意。久矣哉。王法之不振也。而有由焉。由之不求。乃獨振之。如之何其不及也。吾聞。通憲少負才學。嘗題其屛曰。吳桐何日遇知音。夫使通憲而不遇。則後之人將誦而弔之。唯其有遇。乃爲天下之僇。士之不遇。未必可悲已。

新策卷之二終

新策　卷之三

八　議

古今總議

天下之大勢。治則不能不亂。亂則不能不治。然而治亂之變。必有所以然焉。我邦治亂。其源遠矣。上古明王創治定居。歷二十餘世。無大變亂。當此時也。制度簡易。天下皆兵。而天子爲之將。大臣大連爲之偏裨。因俗而治。務結其心而已。然三十世後因外國制。立八省百官。而至五十世。政權爲世相外家所竊。當時之制。郡縣七道。治以守介。天下軍團吏役六衛。有事則遣將合之。事止則散其兵。以奪其權。及相家之專也。選人於流。文武世官。加以鎮守府多事。關八州土豪世隸將家者。因襲之久。如君臣然。然而至七十世。綱紀益弛。二帝爭統。則世將之臣投釁而起。挾兵力。要爵賞者。始于平氏。而成于源氏。遂托總追捕之名。普布私隸于

六十州。以網收兵食大權。而天下之大勢始變矣。變而未幾。其外家北條氏陰結人心。以竊其權。傳之九世。而朝廷乘其失民心。以收復舊權。然濫封汰賞。以失其術。又爲足利氏所橫奪。而大權之歸將家者益定。封少子于東。分功臣。爲世襲守護。而天下之大勢再變矣。而六世而降。大臣爭權。守護不服。割據呑噬。淆亂塗地。而織田氏遂代足利氏。其將豐臣氏繼之。挾衰王而馭羣豪。分山裂河。以成封建之形。而天下之大勢三變矣。三變之治。原再變之亂。再變之亂。原始變之治。治亂之變易於天下。皆有不能不然之大勢。大勢其猶長川大河耶。當其未變也。雖深淵不可測。而懦弱可玩。及一日洪水騰湧而至。則合億萬之力。莫能制其暴。而問其始則可玩者也。故治水者不諉之天災。而治天下者不諉之時變。苟求所以然。則時變可豫制也。夫變亂始定。君民相近。文武不分。故雖有姦雄。莫得而窺其際。而治之久也。制度日文。而國日弱。君日尊而民日遠。所以內相據其隙。而外將利其弛也。豐臣氏而上至王家概無不然。而王家及足利氏。爲最甚焉。皆其子孫之罪也。然有不可專罪其子孫者。上古之制。立左右臣連。以分其權。而轄諸天子。馭臣之術。固宜然爾。中朝乃倣唐制。置太政官。而足利氏豐臣氏亦立管領大老之族。更轄其政柄。皆使權臣扼其子孫之吭也。然王家郡

縣之世。其權臣猶之文吏耳。至封建之世。則其權臣皆挾土地兵馬之力。織田氏所以被禍亦由此也。夫封建非失制也。善稱其本末。則封建乃所以制權臣也。當夫中朝。苟分封皇族小而多之。使其力足維本。而不至勝本。則可以壓權奸之心。可以控制如源氏者。源氏亦徒務强本弱末。而不知出於此。所以孤立自斃均於王家也。足利氏之封建也。蓋似知此矣。然不小而多之。而大而少之。急於攬其心。而不知中興所以失豪傑之心。乃由此焉。而織田氏豐臣氏亦復因之。宜矣。三氏之末大不掉也。且夫封侯維本者也。權臣馭末者也。馭末之權臣。不宜與維本之力。而維本之封侯。不宜授馭末之權。權力相持。而人君得以制其間。今三氏之馭末者。卽維本者。是其所以常亂也。三氏之所以常亂。不獨此也。封建之世。最不可不擇其居也。居之得便者。莫若源氏北條氏。蓋本邦地形。東北爲腹背。西南爲股臂。據其腹背。而制其股臂。是二氏之所以勝王家也。而後之三氏因王家而居誤矣。王家自有可因者。兵制是也。源氏北條氏因之。一其兵民。彼士馬所以精强。不徒地利然也。及大勢之再三變也。囿兵于城而取餉于民。其民弊。其兵冗。其將持權而動。王家上古詎有此耶。然王家之中葉。業已漸不守此制也。彼大勢之所以始變而流爲五氏原乎。此而已矣。吁使夫上古明王出

於中葉。則其居不必乎此也。其制不必郡縣也。然其制兵也。一文武也。維民心也。分大臣之權柄也。因之者治。不因之者亂。故唯上古之制。爲少失也。夫制近上古。而事便於上古者。苟善守之。其治豈有涯哉。故治天下。猶治水。捕蛟龍搏黿鼉。遏萬里奔流。而放之大海者。創業之主也。守其防者。子孫也。中葉及五氏。其創業。固失其宜。而子孫亦有招横流之變者。後之人乃諉諸天下之大勢不能不然。而不知制之之術甚易見也。術者何乎。曰。因其所以治。而革其所以亂。是之謂能制天下之大勢。

平安議

國勢之衰。每由舍我所有而倣人所爲焉。夫我所有。便於我者也。人所爲。便於彼者也。便於彼者。必不便於我。猶便於我者必不便於彼也。況彼我共便者在我。而彼我共不便者在彼。乃舍我而倣彼。可乎。平安勢衰。奪國於武人。原其所由。安在乎。保元建久之際。將帥之勢。積重不回。乘釁而起。邀功賞而不可制。又從而相噬擠。至卻朝廷而要私利。由此而衰歟。曰。否。大安而降。執政大臣藉外戚之親。以一人管轄諸政。而天子贅于上。選才以格。列植私黨。蟠

據要路。牢不可拔。由此而衰歟。曰。否。弘仁之朝始置傳宣之官。天子不親政。盤舞歌咏肆於上。而兵農訟獄壞於下。由此而衰歟。曰。否。然則平安之衰。果安由哉。曰。嗚呼何迂哉。由倣唐制也。我皇和自有制度。貴簡質。不貴繁文。有縣主。有屯倉首。有郡長。有國造。而皆轄諸天子。獄讞稅政。無不親聽。大臣大連分四五員。而左右之。有阻化方命者。則親征之。不則親王代之。公卿爲裨。齊民爲伍。雖其常乎。箙弧以莅。雜臣民角獵。其簡質也如此。是國勢所以懾四夷也。自從大化馴致天長。始數通李氏。美而倣之。彼有專相。故我置太政一員。彼有六曹。故我置八省。彼有守令。故我置國司。彼有北衙六軍。故我置六衞。彼有節度府。故我置鎭守太宰諸府。彼有內侍。故我置藏人以司傳宣。然後黃袍巍冕。高坐深殿。都兪吁咈以治。驅闔國之民而衣冠之。造刑律以束之。其繁文也如此。君民於是漸隔。而天子終不親政。政權於是漸偏重不一。而外戚終蟠據要路。文武於是漸岐。賤武溺文。官政偏枯。而將帥之勢。終積重不回。至不可制。則海內人情安武人之簡質。厭朝政之繁文。而國奪於武人矣。夫便於簡質。而不便於繁文。萬國之通勢也。而舍在我之簡質。而倣在彼之繁文。平安之衰。職是之由。後之治國者盍監焉。然而世之拘儒瞽生。動美西土。而陋皇和。欲以衣冠文物變祖宗馬上之

制。使人主從之。則幾何而不爲平安哉。

前鎌倉議

壞王權而不自操之。授之於己之僕。是源氏之業也。王家之制。州郡之政。分之守介掾目。藩府之政。分之將副監曹。而皆總之八省諸司。兵食大權。常在天王之握。而至文治建久之際。州郡之政。悉爲藩府所總。而八省諸司從爲虛器。王喪其權。天下有大盜而攘之矣。源氏乘綱維之弛。而竊據形勝之地。開府置曹。自取將帥。與其謀主謀。請各州守介之外。莊園鄉保置地頭。國司置守護。遂畝分稅。以充糧餉。以護王土。而追捕亂後之盜賊。朝廷劫于其威。悉聽其請。則分黨人于七道。而自總之。一舉手而悉攫取分食之利。是乃稱捕盜。而自爲盜也。彼經營辛苦。以收千載以來不拔之權。而後悉刈天下可疑可慮之人。殺其外而强其內。蓋欲傳諸子孫。使長操其權也。而至承久之際。禍發其疑慮之外。子孫悉斃於姦臣之計。而嚮之所辛苦而取者。瞬息之頃。又墜于人手。原其所由。則源氏自授之也。源氏世食武藏相摸等九大州。而天下糧稅不與焉。是宜分以封諸弟。或分授遠方數州守護。握重兵于外。以壓

內姦之心。苟根本之力十倍其所分。彼此犄角犬牙相抵。以箝制之。則諸弟雖有雄略。亦何能爲。凡創業之主慮其子孫者必强其內。又固其外。內外相形。然後長久。外無親藩宗室之固。則內之姦臣無所顧忌。王家失權亦出於此也。而不改其轍。姦臣之所忌。吾伐而刈之。以安其心。使其雍容然扼吾子孫之吭而奪之權。雖其盜攘之報宜然。而非源氏之授而何。故曰。攘王權而不自操。授諸己僕。是源氏之業也。

後鎌倉議

天下之事。有分有勢。天子在上。羣臣在下。下至陪隷胥徒等級分明。不得悖而亂之。是所謂分也。然在上以其能撫下也。不能撫下則民心去矣。民心去則天命變矣。天命變則在下者或升在上。代撫其下。人莫能爭之。是所謂勢也。故在上者。宜畏其勢。而在下者不可以勢爲口實。在下者宜敬其分。而在上者不可以分爲憑恃。分之與勢。常相持。而天下之事無不當也。此說也。吾於北條氏得之。北條氏之悖逆甚矣。以陪臣執國命。始欺其主之孤兒寡婦。設陰謀以使其主之骨肉黨與相屠。相屠而至漸盡。然後袖手徐起。以收其權。然猶狼顧恫疑

憚公議也。乃取主人之子。代以爲主而陽尊之。然幼輒立之。長輒逐而更之。不翅如狗豚。天子憤其然。謀討滅之。則擧兵犯闕。取而幽之。廢一帝而流四帝。終分皇統爲二。更互錯綜如奕棊然。其悖逆不亦甚乎。而總攬六十州之權。在萬民之上者及九世。何也。以撫字其下也。北條氏之撫字至矣。自儉而豐民。級租稅平獄讞。以使海內之民各得其所。爲己之任。屢發使巡按諸道。問民疾苦。而察吏之勤惰貪廉。信賞必罰。粗無偏私。至有水旱饑飢。則輿發賑之。凡中世後。武人爲大君者衆。而無北條氏苦也。何其撫字之至也。而其斃也忽焉泯焉莫之或救何也。以悖逆其上也。雖悖逆之甚。以撫字而暫存者。不可爭之勢也。雖撫字之至。以悖逆而驟斃者不可亂之分也。彼當其未斃也。蓋日實其勢。自謂。天下莫能爭我。以至悖逆無忌亂乎其分。而自取亡滅。然中朝帝王自憑恃其分。驕逸日甚。其所以爲政止於歌詠禱祈。至撫字下民之任。則如不聞知。視武人如奴隸。而視陪臣如糞土。豈圖我之糞土視者乘勢而興。代執國命哉。吁乎。後之爲人君者。常鑒北條氏之所以興。而爲人臣者。亦無忘北條氏之所以亡。則上下之禍。豈不兩全焉乎。

役使羣雄。使其盡爲我用。而不背我。是果何術以致之乎。高爵以勸之乎。顯位以勉之乎。大國廣邑以維其心乎。此皆非也。高爵彼將適情。顯位彼將適安。大國廣邑彼將適飽而去。此豈其術哉。元弘之事。已成復敗。議者皆謂。帝賞武人不足。所以取敗。我獨謂。賞武人有餘。所以取敗。何則足利尊氏游移觀望。挾其閥閱而投帝之危懼艱蹙之時。以期殊寵。常有德色。帝果大德之。降挹寵護。唯恐失之。唯恐傷其意。高爵之。顯位之。大國廣邑之。無功而爲羣帥之上。彼計中算得。始有褻玩朝廷之意。陰窺竊望待隙而起。一去而不可復維。是由有餘而背上也。新田義貞有將才。而器量讓於尊氏。竭力以殪大猾者。不過欲伸其積屈取一王爵以光榮門地而已。帝知其功迴出尊氏之右也。是以不得不使比之。乃亦高爵之。顯位之。大國廣邑之。出其望外。彼始也。翹然自喜。中也。快然自足。終也。偃然自安。山門之捷不究。追尊氏。以誤大機宜者。顧之已盈莫可復勸勉之也。是由有餘而不爲上用也。帝之失其術。恢復所以敗。莫大焉。且夫彼之有餘。此又必欲有餘。故不得不厚賚於諸有司臣也。有餘於彼。必不足於此。故不得不已與復奪。加稅與利也。種種敗端。皆生於賞武人有餘也。議者又謂。蓋

獨見其已與復奪者。以爲賞之不足也耳。於乎。使帝知其術。則雖賞之不足。足以勸勉而維其心。何必高爵顯位大國廣邑爲哉。彼尊氏義貞。武人之最雄鷙者也。最雄鷙者。已勸勉而維其心。則如彼赤松少貳小豎子輩。饒使其怨怒而背。使此轉彼。猶饑鷹之於弱禽耳。議者又謂。當時之勢不以高爵顯位大國廣邑。則彼最雄鷙者。怨背不爲用。滋甚矣。此亦非也。當時非承於此條氏乎。北條氏盛時。武人未有過五位者。未有全食一州者。而未有一人怨背之者。未有一人不爲其用者。亦在役使之術如何也已。

室町議

制天下之勢者。必重其本。又强其末。末不强無以維本。本不重無以御末。故擇地之外險。内沃而兵精者而居之。使海内士民偏聚于此。末日輕而本日重。以重稱輕。所以御之也。擇宗族勳舊封諸大國。而列植四裔。裔末强固。則本基不搖。所以維之也。末雖有强固。爲本所御。故不能叛。本雖有重臣之變。外敵之患。爲末所維。故不能肆且横。本末不相通而相形。是善制變者也。室町氏之制其勢。其有見於此乎。論者皆誹其封東藩貽京府害也。吁封東藩乃

貽京府利也。尊氏何不知關東爲便京畿爲不便乎。而棄彼居此者。慮南朝也。既不得居之。亦不可與人。故舉其宗族封焉。使與京府相形而掎南朝。強末以維本也。故京府四世。外患有如南朝如菊池北畠氏。內變有如師直如道譽如時氏國清義弘。而隨興隨熄。本甚不至動搖者。東藩維於其末也。然自義滿已猜而圖之。及至義敎。終乘其內訌而滅之。東藩已滅。鋋血未乾。而有南孽之變。有滿祐之禍。有宗全勝元之難。禍害延於七世。竟爲權臣陪隸所魘者。失末之維而本以搖也。夫權臣之性。豈忠於義持以前。而邪於義敎以後乎。亦外顧有禁其心與不也已。是尊氏所以豫制勢於其末也。夫氏滿輩用八州精兵。而不敢遂叛者。海內士民固偏聚京府。其勢日重。雖四散卑弱之地。亦足以御其末也。且也八州不隸甲斐信濃。則不爲國何哉。沃而不險也。故自古未有以無甲斐信濃之八州而能得海內者也。尊氏之豫制勢於其本也。亦如此。何得誹之以爲貽害子孫乎。子孫變尊氏所制。滅夫東藩。自絕其維。故至生害耳。所謂變制者。不獨滅東藩也。不使本末相形。而使本末相通。亦其一也。尊氏之世。師直賴章之徒爲執事。皆封不大者也。封之大者。特取於其強末。而不授以根本之權。而猶或至倍叛。至義滿則立管領三職。以斯波細川畠山三氏。更爲之。斯波爲宗族。細川

畠山爲勳舊。皆封大國亞于八州而强末者也。而授之以據本御末之重權。其可當乎。義敎以後之禍害已成勢於此矣。況加之以東藩之滅。此輩亦何所顧忌哉。是之謂不使本末相形而使本末相通。已絕其維又隧其御。室町氏之所以失勢。其恐出於此歟。

安土議

創業之主封建其國者。無不欲其長服我而不背叛我也。於是乎。悉芟昔者之外藩而周酬今者之家臣。而後其國盡爲我僕妾也。以爲。是可以長服也。而背叛相踵焉。其或存外藩而家臣其半者。猶未盡爲我僕妾也。惴惴焉恐其或叛也。而長服。何哉。外藩家臣相半者。外藩漏於芟者也。必少而大。家臣欲酧而不充者也。必衆而小。以衆而小者見少而大者。則其勢猶有主客之分。而常有內嚮陪屬于上之心矣。夫然後足以威服外藩。是外藩家臣盡爲僕妾也。悉芟外藩而周酬家臣者。家臣之封少而大。其勢比肩外藩。而抗于君焉。有欲爲君所爲之心。所屬外藩亦恐終被芟。疾視相危。是外藩家臣。盡不爲僕妾也。故盡爲僕妾、適盡不爲僕妾也。不盡爲僕妾、適盡爲僕妾也。盡爲僕妾則服。而不爲僕妾則叛也耳。安土氏之弑

於叛臣。人皆謂由其太薄於臣。我以爲不然。安土氏亦所謂欲盡爲僕妾者也。故屛東諸侯。而芟西諸侯。屛西諸侯。而芟東諸侯。其所芟盡賜家臣。四五臣各封二三州。何爲薄乎。然外藩固多叛。而家臣之勢亦與君抗衡。是以刻責一下。乃忤視而起。嚏而顚之。自代其位。其餘二三臣僕亦相踵角立。爭奪君之遺業。視君之胤子。如狐豚腐鼠。捽而去之。噫向使安土氏不盡芟外藩。因而撫之。衆封家臣而薄小之。則外藩易服而海內早定。必矣。而家臣亦皆自視異於外藩。而讋服之。雖被箠罵。而謂僕妾所當然。不敢以怨。雖怨。而其力不能叛。雖叛而其餘者畏外侯之窺覬。其勢相合相保立胤嗣而共護之。必矣。唯夫欲盡爲僕妾。是以太厚其力。唯夫太厚其力。是以至離叛而不合。故安土氏之亡由其太厚於臣也。非由其太薄於臣也。

大坂議

人主之所恃以馭世者。爵祿而已。可以貴人可以賤人者。謂之爵。可以貧人。可以富人者。謂之祿。人主操貧富貴賤乎人之權。而人臣待之以貧富貴賤矣。不然何以能馭之乎。然不善

操權。褻而濫之使爵祿輕。善操權者。節而時之。使爵祿重。爵祿重則一紙之文。數升之俸。受之者踊躍。而得之者感戴。爵祿輕則今日割十郡。明日割十郡。朝廷之上除目如雨。受之者以爲當然。而得之者不德乎上。以爲當然。不德乎上。則其心各自爲之踴躍感戴。則其勢羈紲于上。人主苟使天下有羈紲于我之勢。而無各自爲之之心。則爲善馭世者矣。大坂氏之馭世。芟而定之。總而攬之。功烈之盛。近古所未有也。而二世輒亡。蓋天之啓眞主也。然原其所由。亦使爵祿輕也歟。挾天子令天下。以朝廷名爵爲濟私之具。武人卒吏或至列朝班。用此而四略。剗三備。躪攝津。批越前。刈紀伊。鋤四國。擣九州。擘關東。而壓陸奥。四海之內頃刻爲其所有。動擧數州之地以封將校。賈豎賤人或至爲司牧。海內之土已不給。則又欲包朝鮮而取明氏。以之窮兵力失民心。國祚愈促。非爵祿之輕乎。是故以此富。以此貴者。皆以爲當然。不德乎上。乃有各自爲之之心。彼柩肉未冷。而社稷爲墟者。出于此也。世乃稱其善攬英雄。嘗譬之捕獸。餌其所嗜者。邀而捕之。然操餌於我。節而與之。然後可以羈紲於我。散餌於地。褻飽其腹。則始也雖驟來乎。終也各自奔躍而去矣。彼輕爵祿者。亦徒攬諸一時耳。豈百世常馭之術哉。雖然當其攬諸一時也。弄大猾于股掌。百萬之兵伸縮起伏。唯其所麾。應

仁以後百有餘年之亂。乃以頃刻定之。抑何雄也。其輕爵祿亦頃刻定之之計耳。吁其所以得天下於頃刻。乃其所以失天下於頃刻也夫。

新策　卷之三　終

新策 卷之四

二十三論 上

客讀二十三論。問吾曰。子何不自揣。爲若出位之言乎。且吾視子之常。何其迂也。吾未知子言世務何如已。曰。否否。我以擬其文也。非以倣其實也。以泛論乎古也。非以切言乎今也。吾結髮受書。唯古人是述。其迂其直。非所識也。客曰。我之文鮮及經世。子之擬之亦宜矣。然子雅稱秦漢。而此文也。方而滯。冗而弱。求諸秦漢。未見其肖。豈倣韓非國策而誤曰耶。曰唯唯。吾嘗謂。擧業病於文。又利於文。我之所謂文。曰記。曰序。曰柬牘。是而已矣。時覯售者焉。而至五六百言。則補塡耳。亂雜耳。彼之操觚。則萬言條達。無他資於擧業也。吾故擬彼場屋之文。一日課一篇。務其達不求其售。今而視之。雖我亦厭。每欲毀而棄之。而二十三日精神亦不忍沒之故紙簏。所以貽是譏。譏者不止子也。請書子之譏以防之。文化甲子孟春。賴襄識。

君權內治

總攬萬人之命。而制之於一人之手。是人君之任也。語物之少。以一人爲至。語物之衆。以萬人爲至。人君以至少總至衆。一失其所攬。其勢將紛亂解散不可收拾。可不懼哉。苟知其可懼。亦何得自宴樂而逸豫哉。然後世之君。以宴樂逸豫。而招紛亂解散之禍。爲姦豪所刧奪者。項脊相望。何也。蓋其心常謂。我一人之權足以制萬人之命。而萬人無如我何也。是以肆然蕩然。沉宴樂而溺逸豫。宴樂逸豫固多其類。而其沉溺之最者。爲內廷。凡百之禍無不源於此也。人君將謂內廷自內廷。外朝自外朝。我退安內廷。何必害于外朝之政。是其所以招禍也。請極言歷代之弊。蓋內廷者。人君退安之地。其始也。嬪婦內豎。匯匯數人。任侍御掃除之事耳。至後世也。則爲外政之源。何謂爲外政之源。蓋人之情。勉強於堂階。而誠實於枕席。易疑於諤諤之言。而易信於刺刺之語。以易信之語。而投於誠實之候。以勉強之心。而聽易疑之言。則必貿於易信者。以斷易疑者。而外政始源於內廷矣。是其弊之大本也。紛亂解散之勢。已萌於此。本蠹而末腐。固其機也。故其始也。投於君之心耳。其中也。請謁於當路諸人。

當路諸人自知此之易疑而彼之易信。常有畏之之心。則不敢不受其託。某忠而才矣。某邪而不才矣。雖邪而不才矣。而爲彼之所託。則不得不用。邪而不才者。不得不用。則忠而才者。不得不舍焉。當路之常者猶然。況其姦者乎。忠者賴以舍焉。邪者賴以用焉。而内廷之黨排布於外。當路諸人間有憂國者。不受其託而爭之。則以夫易信之言。瑕不受託者。而瑜受託者。以誠實之情而聽。無不瑕其瑕瑜其瑜。卽不然而訪之外人。外人已爲其黨。則如合符也。然後黜其瑕者。而委其瑜者。而内外上下無非私黨矣。人君以一人孤立其上。枕席之中已爲敵國。況堂階乎。況四境乎。其所攬者已去其手。而紛亂解散之勢乃極於此。然而其心猶謂。我一人之權足以制萬人之命。而萬人無如我何也。宴樂之益沉。逸豫之益溺。而不知天下之姦豪已窺其後。嬪婦内豎其爲禍猶淺也。至姦豪則不然。夫彼姦豪者。當英明在上。則伏而不見。匿而不出。然其染指垂涎之心未嘗止也。將待上之有暗主以伸其所大欲焉。而其眩惑乎君也。未嘗不因内廷也。其心蓋謂。我欲竊權。而固獲於權。則君亦必生固守之心。於是。逌焉自引。如不有意於權。卑然自伏。如畏於權者。縱君之所爲。而如不聽知者。君乃以爲。彼無如我何也。我權常在我手。人無之能爭也。於是乎。始沉宴樂溺逸豫。而後彼姦豪者

始得以竊其權於外。又從而結其所宴樂逸豫者。酬彼之所欲。而使助我之所欲。使君不得覺權之漸移。又恐他人之爭己權也。乃鼓其好利競榮之心。使內外上下紛爭而不辨。則其勢不暇及我。然後我得以專其權而久持之。久持之則其威牢定而其勢積重。內合內廷。外援萬人。內外聯絡如膠漆然。以萬人膠漆之臣。窺一人孤立之君。其爲禍豈可測哉。是歷代所同也。夫雖至昏極愚之君。豈甘此不測之禍哉。蓋亦不能知禍源而塞之。人君自疑。我退安內廷。何必害外朝之政。然而其禍害至此極也。然則禍源專在內廷。內廷果可去乎。曰。何其然。嬪婦內豎僅僅數人。任侍御掃除之事。獨取於其廣繼嗣。而減冗員者。勉強於枕席。而誠實於堂階。每疑於刺刺之語。而每信於諤諤之言。則雖有姦豪。而將誠伏于其明。尙何僅僅者之患。何紛亂解散之有哉。唯夫宴樂逸豫沉溺於此。是以爲禍之源也。然則禍源專在宴樂逸豫。不宴樂逸豫則可乎。曰。何其然。不原所以宴樂逸豫者。而徒欲不宴樂逸豫。是亦勉强耳。雖得宴樂逸豫而不敢然也。不敢然者。有時而蕩。不得然者無時而肆。彼其始之所以肆然蕩然沉溺於此者無他。其心自謂。我一人之權足以制萬人之命。而萬人無如我何也。禍源所窮在此已矣。人君苟知其以至少總至衆。則謂天下之可懼者無若人君矣。以天

下之可懼者。爲己之任。雖欲宴樂逸豫。而可得乎。人君唯謂天下之可樂者無若人君矣。夫是以自釀不測之禍。授天下之姦豪以己之權。而不悟也。

大臣監官

權柄者。君之所恃以爲君也。君握權柄以馭其臣。是以能制闔國之命。與其臣以權柄。而使專之。是自喪其所恃也。何以爲君乎。故權柄在上則盛。下移則衰。下移而不回則亡。和漢古今之事如星羅也。知符脗而燭然也。古昔明君知其如此也。於是。以其經艱險老事機之智。而立其憂後嗣防禍變之制。制之一立。延於百世。世之俗儒者。乃容喙其間。動援經義紛紛不止。以謂。如古制則使人臣謂人君猜我。殆非所以任使賢公名卿也。夫執政大臣。孰有不忠謹者哉。雖然凡治國者不賴人。而賴法。古制之慮大臣也。非待大臣以邪橫而常猜之也。今雖皆忠謹也。而何知百世後不有邪橫者哉。故立之制。使後嗣常守而不變。則雖有奸人。而不至專權。是法之所以可賴也。所謂制者不獨以慮大臣。而亦所以保全大臣也。爲人臣者。皆知其所以保全我也。孰敢謂猜我哉。況賢公名卿與國同休戚者。亦何視其所憂慮者。

以爲猜疑。而變更之哉。人君固不眩於俗論也。苟眩焉乎。不喪其所恃者幾希。人君宜斷然謹守古制也已。雖然其於古制。當求其所以立焉之意。所謂意者在不喪其所恃而已矣。而古制之中。亦有足以喪焉者。非智之疎也。由密而過也。曰。何謂也。曰。有二。其一曰。執政以輪直宰事也。古昔明君其意蓋謂原祿重權不可竝授。其授權也。亦當分而授焉。庶幾不至專橫也。於是。勳舊巨室與以厚祿者。特取於其內外相形鎭壓奸邪之心。而不使參預機務。乃別擇俸祿不太厚者。以爲大吏以攝制羣士。卽雖巨室。而進止奏請一因其傳宣。然所謂大吏者。亦置六七員。復置其副。而皆統之於君。可謂善制哉。俗儒乃謂。以卿攝於大夫。經義所未聞也。且我之執政。卽彼之宰相。宰相必專任一人。而後可展厥才。宜以卿一人攝制大夫以下以統政權。噫。夫秦漢丞相。唐宋同平章事。元左右丞相皆專任一人。而動至專橫也。朱明懲胡惟庸之禍。歸政六部。尋置閣臣五六員視草。是其所以軼前代也。我之執政。酷肖閣臣。蓋衞帥肖吏部。騎帥步尉肖兵部。計司郡司肖戶部。市司肖刑部。工司肖工部。謁者肖禮部。粗存六部體貌。而執政亦不以一員統之。明君所慮蓋暗符耶。我王家古置大連大臣四五員。尋增內大臣。其後有所謂太政大臣者。然猶非親王不任焉。中朝乃以大臣任之。至立

攝政關白內覽宣旨等名。則上下妄作極矣。其稱賢公名卿者。獨淡海公一二人耳。其他皆專橫如彼。蓋誤取唐制以自招此弊也。而室町氏亦取其弊餘之制。置管領職一員。以細川斯波畠山三巨室更充之。厚祿重權竝以授之。而七頭三司者。皆受其攝制。其稱賢公名卿者。獨細川賴之一二人耳。其他亦皆專橫如彼。大凡管轄諸部之政。而其總合歸一之處。人君以一人操之。是人君之所以不可無也。而業已有以一人操之者矣。則無君可也。有攝政關白。而天子如弁髦。不亦宜乎。今乃謂執政宜專任一人。是使百世後有弁髦其君者也。然使弁髦其君。不獨俗儒之論爲然也。古制六七大吏。以一人宰一月之事。輪直循環。周而復始。此亦不使權柄常在一人也。可謂密矣。然雖不使常在一人也。有時而在一人。何若使常分在數人哉。欲使常分在數人。則莫若廢輪直之制耳。夫所貴於列署攝政者。以其分權也。當夫直月也。銓選食貨兵營工作典禮之政。盡總合於一焉。今也無非忠謹者。則權愈專。事愈成也。百世後遇彼橫邪者。則幾何而不至弁髦其君。如夫攝政關白管領哉。又何在其爲分權也。廢輪直則猶明閣臣協心贊輔矣。不獨不弁髦其君。亦可以絕苟簡推諉之弊矣。雖者將謂。如此則百世之後六七員之中。宿任望隆者。常爲計議之首。易至專權。而新進望輕

者。不得與之抗。君則受其弊矣。是習染之見耳。如此而後雖新進而得以抗宿任者耳。當夫直月。諸政總於一人之手。孰能抗之。廢輪直而人人爭議。取決於君。君則始足以禁其專橫矣。其二則曰。監察之勢輕也。古昔明君。其意蓋謂君而無耳目。羣臣忠邪。庶民疾苦。無由而知也。於是。立監察之官。以親信可倚公忠不偏者。充之。徒隸副焉。掌伺察事。其於都市諸曹。不時出入。毋得拒之。是以人君獨坐深宮。而臣民微事。無不悉知也。非常之變。可以預備而無危也。人君權柄。是以益隆。可謂善制哉。俗儒乃謂三代無監察之官。是叔季之法。生人臣自疑。自危之心者也。宜廢此官。推誠心於羣臣腹中。噫。我王家古置彈正臺。其尹或以親王充之。常爲法紀之司。朝綱由之振肅。而中古徒供文具。至或闕尹不置。執柄大臣愈無忌憚。若彼朱明。亦置左右都御史。以統衆監與閣部。抗爲三焉。世宗以小嫌抑臺諫。而法紀漸萎。愚嘗論明初未有閣臣專權者。而至嘉靖中嚴分宜父子。乃有大小丞相之目。終釀禍變。而其君不得保全之者。起於憲部之勢輕也。夫有此而輕。猶且爲姦臣之地。乃謂宜廢此。□是百世之前豫爲姦臣之地也。然豫爲權姦之地。不獨俗儒之論爲然也。古制監察皆統於大吏。蓋所謂監察。猶我之大少弼。彼之殿中侍御諫議。而所謂大監察者。如我之尹。彼之大夫

左右都。皆宜直統於君矣。而不然也。故其勢太輕。此制也。蓋慮其恃爲君耳目或至橫肆也。是以縱諸此。而操諸彼。可謂密矣。然監官之橫肆。孰若巨室大吏之橫肆。何若其重勢直統諸君使足抗大吏如夫尹與都哉。則百世之後。雖有權姦者。而常有所忌。而不至專橫。白簡一入。無不落膽矣。夫所貴於立監官者。以其察羣臣忠邪也。今與勢太輕。其建白報告。概由人宣達。是何在其爲察忠邪也。小臣之邪。不必害國。大臣之邪。必至危國。苟重監官之勢。則大臣無不謹飭也。奚翅大臣然也。小臣何有不風厲者哉。奚翅大小臣然也。亦足以抗諫於君也。故監官之任。當以察君之非爲第一。察巨室大吏次之。察小臣爲下。難者將謂如此則君之耳目。獨及於上。而不及於下。民庶疾苦。何由而知焉。是淺露之見也。如此而後耳目不獨及於上。而得及於下耳。夫臣民微事。知之何益。今察人君及大臣之非。則人君及大臣□非皆關民庶疾苦者也。人君之德日進。而其權柄益固矣。噫權柄者。君之所恃以爲君也。故明君立制。其意甚密。使後嗣不喪其所恃焉。而大吏之以輪直宰事也。監官之勢不重也。皆有足以喪焉。則密之過也。後嗣不眩於俗論。而守古制。固美德也。然徒守古制。而不知古制所以立之意。而副之。謂之守古制不可也。賢公名卿。其亦盍慮此。故廢輪直重監官者。似不

守古制也。而不守古制。適所以守古制。守古制。適所以不守古制。則何必守古制哉。

銓吏革弊

必宜有也。不必宜有也。有則有以司事。不有則無以司事。是非必宜有者乎。有則足以助事耳。不有則不足以助事耳。是非不必宜有者乎。古之善治國者。以長官爲必宜有者。以胥吏爲不必宜有者。故事立而不弊。後世則反之。請言事之尤大者。夫計曹者。國用所贏縮也。郡曹者。國本之所安危也。市曹者。國法所弛張也。古者國用司於計司。而計胥助焉耳。國本司於郡司。而郡胥助焉耳。國法司於市司。而市胥助焉耳。今者籌錢穀算緩急。委於計胥。監豊耗管徵比。委於郡胥。審問擬理盜賊。委於市胥。而三司贅於上矣。是之謂三大事弊。然此三者。其始或有便於國之勢。而未有弊於國之形。是弊之所以不去也。何則胥吏之體。近於其民。而嫻於其曹。民之情僞如擢髓也。曹之案簿故事如指掌也。上之人視其然也。以爲便焉。使其久焉而不變。長司之體遠於其民而疎其曹。民之情僞如帷面也。曹之案簿故事如望洋也。上之人視其然也。以爲不便焉。使其不久焉而屢易。屢易之至。且至暮遷。如客其曹。不

變之至。襲子傳孫。如主其曹。以主其曹者之心。受客其曹者之令。以帷面望洋之識。御擢髓指掌之情。而弊乃起矣。計曹之弊蠹。郡曹之弊刁。市曹之弊墨。夤緣籌算之際。不誤具覆。不爽勾覈。而暗有所蠹。夤緣監管之際。動廚傳擾閭里。刁勤下戶而銷擱豪族。透戳洒換之患。由之而至。夤緣審理之際。所欲甘心。雖有可末滅者。而舞文巧詆。必致刻深。所欲報德。雖有可痛懲者。而折律貳端。必附解免。蓋其俸薄而其員少。其任久而其權專。故雖廉且厚者。不得不然也。其始也猶於案簿交錯之際。爲紛紜眩人之計。使長司不得覺。至其終也。籍制之術漸熟。爪牙之黨漸廣。高下起滅。唯其所爲。及至此也。上之人非不知其爲弊也。而如無見也。何則以其必宜有也。至若夫長司也。詮選甄別。概拘資格。起於紈袴。而遽幹劇務。唯胥吏之成是仰。體專勢孤。則袖手傍觀耳。卽有強幹精明者。欲察其弊而釐革之。而客主之勢已不可較。甚則衆謗囂騰。譏彈倒起。生仕途之梗焉。是以游移遷延。以三曹爲傳舍。推諉於後至。而汲汲於前陞。及至此也。上之人非不心知欲革弊者之爲是也。而如無見也。何則以其不必宜有也。吁弊而至此。其勢誠不可去耶。盍反其始。勢者在上之所制。嚮之制也誤矣。苟回其勢。漸而釐之則何有乎。紈袴而贅焉者罷免之。詮計司必取其堪籌算。詮郡司必取其

堪監管。銓市司。必取其堪審理。而資格不論也。皆使久而不易焉。近焉嫺焉。必至彼擢髓指掌。專其任責其成。不苛察而掣撓之。果便於國乎。時增秩下賞。鼓舞其氣。使不怠倦。則彼其心必欣欣然。有所聊賴。司國事不異私事。視計曹如家產。視郡曹如家園。視市曹如家廳。措置營設。不敢苟簡。乃以視其效爲樂也。雖不至襲子傳孫。而終身於此不陞轉焉。亦無憾也。夫而後嚮以爲不必宜有者。今也以爲必宜有矣。至胥吏則察其貪墨之甚者斷而逐之。然後擇其稍謹敏忠朴而無黨援者。厚其俸而分其權。悉聽於司之所御。果弊國乎。且至而暮遷可也。夫而後嚮以爲必宜有者。今也以爲不必宜有矣。是之謂回其勢。勢回而弊去。何患事之不立。又何患彼國用之不贏國本之不安。國法之不張乎哉。

分祿等位

三代之法未必可則也。夫世祿者三代所共。所謂王政也。其祖有功勞。其孫宜受之報。於是乎。世其祿。使其常在於上。與宗社相終始也。然有功勞者。所謂才者也。無功勞者。所謂不才者也。不才者之子孫。未必皆不才。概皆才矣。才者之子孫。未必皆才。概不才矣。蓋祿而在於

上者。無不驕逸。不祿而在於下者。無不艱難。無不艱難則無不才。無不驕逸則無不不才。是不才悉在於上。而才悉在於下也。而國不危者。未之有也。何哉。彼不才者。無在於下之慮。則謂己之所當然。而不德其上。不德其上則將自肆。彼才者無在於上之望。則謂己之所當然而不勸其上。不勸其上則將自棄。才者自棄。不才者自肆。其無危乎。欲使之勸其上則不得不舉在於下者也。不得不祿無祿者也。欲使之德其上。而不宜降在於上者也。不宜奪有祿者也。而國不絀者。未之有也。何哉。昔之才者。祿而至今。今不得奪之也。今之才者。祿而至後。後亦不得奪之也。遞至百世。其無絀乎。國之祿有限。而國之才無窮。以無窮之才。而貪於有限之祿。在於不才者之祿有餘而與於才者之祿不足。欲不與於才者乎。無誼也。欲剝取於民乎。無惠也。弊而至此。非三代之法致之乎。夫人君之所恃以御臣民者。爵祿而已矣。善御之者。使臣民德乎我勸於我。雖數升之祿片紙之文。無不躍然來趨焉。無不欣然感戴焉。而後億萬之人唯我所御。苟不德不勸。自肆自棄。則其勢各自爲之將。謂人君之權不足重也。人君將何恃御之。然而猶謂之三代之法乎。世之論王政者。曰。列國之法。有世祿有否。否者非也。是殆不知用權之術也。以愚觀之。否者固是矣。世祿者。雖其祖法不可忘易。而宜我爲

融酌以不使至危與絀。夫彼周者爲世祿。秦漢者。侯王之外以時上下。唐宋明淸者。皆以科擧之法。御億萬臣民。昨不厭糟糠。而今也食於連府。今食於連府。而明也不厭糟糠。唯其才不才是視。何啻不世之。故天下之祿不至不足。而天下之臣民常勸。常勸之弊至奔競趍薄矣。本邦先古報功之祿。有上中下三等。或世或否。及至後世。乃一授采地。與宗社相終始。臣民之祿常有餘。而臣民之功勞報。簡靖忠厚勝漢土萬萬。而其弊也自肆自棄。痿痺偏枯矣。痿痺偏枯之與奔競趍薄。其爲患均矣。卽患之欲以猝取漢土之法。何特國勢人情之不可爲。亦開易法之端導僥倖之途也。故無若就世祿中稍爲融酌也。融酌者何如。立之期限也。分之等流也。曰。自昔至今其祿者世之如故。曰。自今至後其祿者不許世之。等其職銜。而殺之。不才而無職者有常祿。才而繫祿者。增其祿。及其身而奪職。及其子孫而不得襲焉者。皆失其增祿而復其常祿。有罪辜則更損其常祿。有功勞則更加其增祿。如此則彼不特不怨之。而且德之勸之。然而擧其才。宜如科場。每歲令世祿子弟。於各隊長之家。試其射騎鎗劍。試其陣法戰略。試其時務之議。簡其俊者。薦諸執政。執政每三歲會而再簡焉。薦諸公。公每六歲親會試焉。授之職祿。止於甲科一人。如此則上之費祿至少。而不至不足。下之德之勸

之至衆。而不至有餘。庶幾享和漢二法之利。而不受和漢二法之弊乎。是所謂融酌者也。所謂融酌者之外。又有法之可立。漢土古今有祿有爵。本邦先古亦然。先古之爵自正從一位。至大少初位凡三十階。遇才而有功勞者。則等而報之。而所謂位記者。亦片紙之文耳。然受之者無不欣躍也。至於後世。武人質魯。所恃以御臣民者。獨止於職祿。而祿無不世之。則至使其不德乎我不勸於我。鎌倉二氏未全有天下之祿也。故其分祿雖皆世之。猶嗇而節之。受其祿者。亦頗德之也。至室町氏及近世浪速氏。則天下祿利之權全歸其握。故其分祿大濫太侈。又從而世之。受其祿者。不惠之。有功勞者。不勸之。以至危且絀而止。此豈獨世祿之弊也哉。亦由不知有爵位之法也。從政者知爵位之爲誼。而欲立其法。亦宜斟量古今情勢就素有之職銜假其名而虛其實以定其階級。遇才而有功勞者。則等而報之。其他或就彼之佩服儀衛。或就我之書記敎命。立之文章。制之等差。此數者皆取方今體貌稍存者。因而定之。新臣民之耳目。而不至駭臣民之耳目。則無非爵之類也。如此則亦上之費祿不至不足。而下之受祿不至有餘也。我朝古法有其可倣如此。而不知倣焉。漢土古法有其不可則如彼。而乃則焉。非不知用權之術也乎。今君苟能知此術。而融酌世祿。亦定爵位以輔其祿。

自重而用之。自節而出之。不至濫與侈。則才悉在於上。而不至艱難。不才悉在於下。而不至驕逸。德其上而不自肆。勸其上而不自棄。無痿痺偏枯至危與紲之患。而數升之祿。片紙之文。足以籠絡鼓舞擧國之豪俊也。

用才取人

治天下國家有術。得才而已矣。得才有術。不求備而已矣。夫治術之急務。莫若得才。才苟得乎。理法禁。制財用。御衆吏。撫細民。何政不可備。何事不可擧。才苟不得乎。雖有法禁。弛而不振。雖有財用。壅而不阜。雖有衆吏細民。怠惰衰削。而不可御且撫之。人主徒有修政擧事之志。而莫能副焉。是故得才與否。天下國家治亂否泰之所決也。天下國家之治。人主無不好也。天下國家之否亂。人主無不惡也。而去其所好。而就其所惡。比比皆然。夫去其所好。而就其所惡。豈人之情也哉。暗昧有以致之。後世人主坐享祖宗遺業。而如己力得之。驕逸怠傲。爲目前十數人所承奉。不知外事。法制弛也。財用壅也。衆吏怠也。細民衰也。而坦然四顧。曰。國家已治。何必汲汲焉以求才爲務。是暗之上者也。後世人主或曰。吾非不求才也。如無才

何。是暗之次者也。暗之上者。亡論也已。暗之次者。愚將言其所以暗焉。夫有非常之能者。必有非常之失。善于此者。未必無不善于彼。備百能而無一失。具百善而無一惡者。則天下何有此乎。故其明者有一能。從而用之。而其失不問也。有一善。從而取之。而其惡不論也。是以上自世臣士大夫。下至新進府吏胥徒。皆奮躍磨礪。不至自棄也。是則不才者亦將至於才。況其才者乎。其國之富才也亦宜。政以修。事以擧。天下國家豈有不治焉哉。其暗者反之。遇一能則曰。彼有某失。未可用也。遇一善則曰。彼有某惡。未可取也。是以上自世臣士大夫。下至新進府吏胥徒。皆無不銷沮自棄也。是則才者亦將至於不才。況其不才者乎。其國之乏才也亦宜。政以不備。事以不擧。天下國家豈有治焉哉。明者之所以爲明。暗者之所以爲暗。不亦較著乎。甲斐山本晴行有言。曰。明主試之。暗主論之。譬之刀劍。論之則名工所鑄亦不保無瑕。試之則雖屠者所棄。或有利器。由此觀之。人主之以謂無才者。亦不試之也。人之才有長短得失之偏。有細大煩簡之殊。不可以使撫細民也。而或善御衆吏矣。不可以使制財用也。而或善理法禁矣。人主各察其能之所當。而數試用之。則天下之利器出矣。夫已得利器。則國家事務。雖有弛者壅者怠者衰者。縱横紛亂而不可備擧者。而以此臨之。則裁割斷

制。迎刃而解。何難治之有。故曰。治天下國家有術。得才而已矣。得才有術。不求備而已矣。

均田釐籍

戰國之法。存至治世。無不便者。以其簡而近民也。世之腐儒動稱三代。是古非今。是外國非本土。欲以禮文度數變馬上之規。夫馬上之規存矣。是以不萠馬上之患。變馬上之規。能不萠馬上之患哉。然則馬上之規。悉便乎。曰。馬上之規。悉便矣。而有一事不便也。是何謂也。治農之法。是也。夫所貴於馬上之規者。以其簡而近民也。治農之法。簡則簡矣。如不近民何。不近民。將不便民。民之不便。國受其弊。是可不爲之慮哉。何謂不便。民產不均也。黃籍不精也。民產不均者何。古昔平安之治。倣李氏。制天下之民。皆有口分二段之田。周之井地。此爲近焉。中世以降。縱民私賣買田。貧者日貧。富者日富。加之。神計佛資。淆雜其間。守介之命。有所不及。而田制始壞矣。戰爭相踵。無復有明制。至豐臣氏。町畝丈尺。一變古法。而田制再壞矣。豪戸有田。至數十頃。至窮戸或不及一頃。勢力相役。收大牟稅。東家連倉列廠。牛欄馬槽。星羅其內。耒耜器械。鱗次其外。而西家則鶉衣百結。一鬻之麥。淆以草芽。夫妻分之。夫天下之

田。固足以分於天下之民而有餘也。然而如此。非民產不均乎。均之之道。欲如古之口分田。則事情有太不可者。至若井地之制。彼之地形。夷坦平曠。此之地形。則腹背隆而凋。首尾卑而狹。其勢不可倣也。欲强倣之。方邪豐殺。高卑迂直之形。籌之至艱。分之至煩。且猝褫豪戶。苛擾窮戶。怨讟紛起。不致禍患者幾希矣。是聖人之制。用以釀亂也。斷不可倣矣。故宜酌古昔量今時。稍爲之等限。徐視其功效耳。每一家田一頃。是爲定限。過之者不許買。而及之者不許賣。過之者之中。其不盈二頃者不分。分於子弟。而盈二頃者。許分於子弟。無子弟者。豫畫分之。待有子弟而分之。或使不及之而極窮困者。佃而耕之。如此則數年之後。自然融通。無不均矣。是均民產之道也。黃籍不精者何。古昔平安之治。最重戶籍。五戶相保。一人爲長。五十戶一里。每里長一人。六年一造。撿其加減。夫彼周漢而降亦無不重版籍。至明清而甚詳。明清之法。戶丁籍。曰黃冊。土田籍。曰魚鱗冊。黃爲緯。以定賦役之法。魚鱗爲經。以質田畝之訟。以一百十戶爲一里。推丁糧多者十戶爲甲。十戶一甲。十甲一里。里之長一人曰老人。董一里之事。糧長三人管公稅。貧而老者司木鐸。守令監其勤惰而升降之。每一里編爲一冊。冊首總爲一圖。鰥獨不任公役者。帶管於百十戶之外。而列於圖後。名曰畸零。每十年一大

造。其他三門九則之法。爲至詳悉。本邦後世亦非無此制也。特略而不詳。戶籍之法。附諸頭陀。郡曹計曹之所司。民數穀數田祿分等之簿。每郡不過領其大槩。流寓逃散。唯其所爲。其所樂則聚爭尺寸。其所不樂則汙萊不治。而保首里正鄉長大鄉長之類。或以一人管數里。權重而情苟。或以一家襲數世。其庸愚者。藉上之威武斷鄉曲。聚稅之外。不知有職。助富民而困小戶。結納猾胥而蔽罔上司。是以小民散漫。莫或親睦。奸僞日長。逋欠歲多。種種弊端。不可摟數。衝劇之郡。因衝劇爲奸。僻曠之郡。因僻曠爲奸。要之皆坐數簿之略也。非戶籍不詳乎。詳之之道。欲分差官吏搜檢釐革。則煩擾民情。而多寡廣狹。因賂而成。猾其上下。而肥其中間也必矣。宜因今日素有之制。參酌明淸之法。以定其法。概小自五戶。大至一郡。體統相包。管轄相攝。帶管畸零。其從明淸制。每一鄉編爲兩簿。一簿錄男女廬舍牛馬之數。一如舊法。一簿圖各戶頃畝之田。及東西南北四至界次。及丈數若干。斗額若干。每八歲稽查之。分立前管新買除賣見在四目。今稽之前管。卽先稽之見在。防奸於流轉之際也。年月頃畝。略於除賣。而詳於新買。防奸於鬻產之際也。如此則混淆之弊革矣。凡一糧升降。穀祿分等。貧富之證。爭訟之質。亦可按之而定也。是詳黃籍之道也。黃籍已詳。民產已均。則夫不便民

者悉去乎。曰、未也。所以不均不詳者。由不近民也。國之處戰爭。詳於外防而略於內治。故司令之級。在帥尉之下。以罷軟者充之。以充之爲羞也。以一人攝數十里。取於其多供軍糧而止。延至治世猶不改也。其屬隷胥吏以食升斗祿者五六員。總攝數十縣。一歲之中。徵比監撿。往來數返。供帳相望。需索百端。雞犬爲之不寧。民之釜鬲日竭。而公之倉廩不必實也。故斗升祿而富比素封矣。而其御之者。非罷軟則乳臭。聽其橫肆概焉不察。巡視統領。徒充文具。延領望遷。如是而已。英君誼辟。苟察其爲弊乎。則斷然創法。升郡司於執政之次。升郡舍於帥府之上。重其詮選。選才充之。使以充之爲榮。取其能宣德意聯民情。而嚴急掊克。能奏羨餘。則不取也。咎其不能陳力凶荒庇護其下。而稽遲逋欠則不咎也。厚胥吏之俸。有廉謹勤幹者。則時增俸錫金。或列書司令及賤吏姓名於公之燕室。日夕省之。以爲簡黜。察其勤惰貪廉。而黜陟之。凡察此之法。後世唯無時差憲部僚吏而訪之。體不重而事不擾。固善法也。然唯眄眄然遺利是摘。適足以生郡官之猜疑而增其掊克也。而其供帳相望者。與彼郡胥無大異同。則何在其不擾乎。且此輩之與郡胥同爲聲應。則均之歸蔽罔耳。英君誼辟。宜擇親信授德意專問其貪與惰。或破前格親見賤胥。而問民事。或托射獵以輕裝行僻郡。召

見老農。親問疾苦。如此則上下日近。源澄流淨。民產日均。黃籍日詳。而不便之政革矣。或曰。使民以其簡也。今之所陳無乃如十羊而九牧乎。無乃如煮小鮮而屢擾之乎。無乃類腐儒之習乎。曰誠然。然亦顧立法之始如何已。揭畫一之法。嚴禁其煩苛。使如一母一子必不和苟。則不前戒不警導單車裹糧。毫不累民。舊法似簡而擾。此則似擾而簡。亦顧立法之始如何已。且也。民皆知上之貴農如此。則背本業末之俗衰矣。則此法也。不獨富民。亦所以富國也。富國之術無他。其源在均民產詳戶籍之法而已矣。

新策卷之四終

新策 卷之五

二十三論 中

財利之計　凡六則

虛敎非不美。民未堪其敎也。虛治非不具。國未堪其治也。治國敎民。可不求其實乎。何之謂實。曰財。財者。國家之所以安危也。四民之所以叛服也。苟充其倉庫。足其衣食。則何治不可爲。何政不可施。實之已立。文斯從生。是情勢之自然也。世之談治者。每曰。先王之仁義。三代之禮樂。治國之所當先也。聞富國之說。則概謂之曲學。殊不知倉之乏也。庫之匱也。飢而不興。荒而不發。上之趨利。不異商賈。而啾怨之聲。塡于草野。而猶謂之仁義禮樂乎。世之談政者。每曰。庠序以訓忠信。師儒以諭孝弟。是敎民之所當先也。聞豐民之說。則槩謂之卑論。殊不知飢之無食也。寒之無衣也。逋欠不得不多。巧僞不得不滋。仰事俯育之資。無由而給。而

賤老貴壯之習。行于家庭。而猶謂之忠信孝悌乎。是治也者亂國。而敎也者導民於姦也。然則治云敎云。皆不可爲耶。曰。何不可爲。吾徒憎夫先虛文而不求其實者耳。實之已立。文斯從生。惡憂其不可爲。實者何。充於國也。足於民也。夫國之倉庫已充。則施於下可以漸仁。國之倉庫已充。則取於下可以漸義。國之倉庫已充。則爭奪之風息。而豐亨之氣洽。可以漸言禮樂。仁義禮樂之實已立。則仁義禮樂之文。斯乃有可與之勢。因其勢而參酌之。何啻其虛者哉。夫如此。故能保其富。故能長安而不危。民之衣食已足。則奉其租稅。可以漸忠。民之衣食已足。則對其吏胥。可以漸信。民之衣食已足。則供甘旨而給輕暖。有同爨相恤之力。而無分門割戶之患。可以漸言孝悌。忠信孝悌之實已立。則忠信孝悌之文。斯乃有可與之情。因其情而誘導之。何啻其虛者哉。夫如此。故能保其豐。故能長服而不叛。國之長安而不危。民之長服而不叛。治敎之至也。而所以致此至治至敎者。悉在於財。財者。治敎之實也。治敎者。財之文也。文以保實。實立而文從。譬如畜馬。豐其芻豆。其毛自澤。策而馭之。折旋周馳。無不如意。彼治國敎民者。不求其實。而虛文是先。侈華采章。謂之美矣。不省其府庫之匱竭。煩苛碎細。謂之具矣。不恤其衣食之窮削。是策飢馬而責其毛之不澤。欲施之金羈玉勒而馭焉

也。彼惡乎堪之。非顛而仆則蹄齧而走。危矣乎。

財利之計

量入以爲出。古昔之制用也。量出以爲入。後世之制用也。古昔之所以富有。後世之所以匱乏。其皆出於此乎。古昔之所以易得民。後世之所以易失民。其皆出於此乎。吾觀古昔之制國用也。取民以十一爲額。至歲之杪百穀皆入之時。則以地之大小。視年之豐耗。以計來歲之所出。今歲租稅。分之爲四。以其一爲經費。餘其三爲儲蓄。三年耕而餘一年之食。通融三十年之會計。則九年之食斯餘。蓋一歲之入。充十歲之出而有餘也。故所入豐則所出或豐。所入約則所出必約。約其常也。豐其變也。是量入以爲出者。非耶。吾觀後世之制國用也。取民概無常額。唯費用是視。少費用則已。苟過多費用。則橫斂暴征。無所不至。今歲租稅。盡以爲來歲之經費。爲儲蓄之不暇。亡論無九年之食。所謂六年三年之食。亦不能存焉。蓋一歲之出。費於一歲之入而不足也。故所出豐則所入必豐。所出約則所入或約。約其變也。豐其常也。是量出以爲入者。非耶。是故古昔之倉庫。雖水旱飢蝗。而不至匱乏。況平時乎。後世之

倉庫。雖平時而不至富有。況水旱飢蝗乎。是以古昔之民。雖水旱飢蝗而不忍叛其上。況平時乎。後世之民。雖平時而疾視其上。況水旱飢蝗乎。豈天地之生財。贏於古昔。而縮於後世歟。人民之懷德。愿於古昔。而黠於後世歟。蓋亦在制用之得術與否也已。夫財生於土地。而成於人民。其所生成。入之於人主。人主取之。以爲己之出。是人主所得於天之分。然天之立君。豈取於萬人。而供於一人之用而已乎。亦使一人慮萬人之用也。用度之數無窮。而生成之財有限。以有限者。充於無窮者。以無窮者。資乎有限者。一旦遇不慮之事。將不可悔焉。故節制其無窮者之源。而經紀於有限者之內。以立萬人之表。又蓄此之有餘。而備彼之不足。是之謂能以一人慮萬人之用。不能以一人慮萬人之用。古之人猶且愧之。以一人之用困萬人。謂之何哉。

財利之計

國之多事也。計不必告縮。國之無事也。計不必告贏。贏縮之由。其可不察耶。草創之日多事。泰平之日無事。多事則供億無究。無事則經用易給。供億無究則不得不罔利剝民。經用易

給。則不待罔利剝民而足焉。是必然之勢也。然事乃有大謬者。夫彼草創之日如何。版圖未全收。貨幣未全通。軍旅未全息。餽餉未全絕。其倉庫之入。何啻百減於無事之日耶。其費用之供。何啻百增於無事之日耶。而加徵民租之政。草創之冊不載也。征關禁澤之政。草創之冊不載也。告緡錢數舟車之政。草創之冊不載也。籠治興壙榷酤算茶稅鹽之政。草創之冊不載也。非國計之告贏。則何能如彼乎。夫彼無事之日如何耶。版圖既全收。貨幣既全通。軍旅既全息。餽餉既全絕。其倉庫之入。何啻百增於多事之日耶。其費用之供。何啻百減於多事之日耶。而加徵民租之政。泰平之冊相望也。征關禁澤之政。泰平之冊相望也。告緡錢數舟車之政。泰平之冊相望也。籠治興壙榷酤算茶稅鹽之政。泰平之冊相望也。非國計之告縮。則何遽如此乎。天之生財。少於泰平。而多於草創乎。水旱盜賊之災。彼或甚於此。地之生財。少於泰平。而多於草創乎。地力未盡於彼。而無不盡於此。人之生財。少於泰平。而多於草創乎。民力未聚於彼。而無未聚於此。然而如此。吾不能知其所以然。豈泰平之日。天下更有所洩泄而然歟。有所湮壅而然歟。姦胥蠹緣爲欺罔攫竊而然歟。租稅之逋欠。歲月相因而然歟。蠹於廩歟。蠢於廩歟。古有妙算祕籌之吏。而今不得之歟。此數者皆無不慮而防之。募

而求之矣。而計之告縮。仍總總然。利愈不得不興。民愈不得不剝者。其由果何在。曰。由文侈之習長。而閑冗之官滋。

財利之計

海內之財產。用諸海內之事而有餘也。猶一家之財產。用諸一家之事而有餘也。而天下常苦財之不足。何哉。一家之中。有妻有兒有兄弟有奴婢。衣服飲食之需。以至諸器用玩好。皆仰一家之財矣。主一家者。計其產所入。以爲其用度。如此者比屋皆然。然有用而有餘者。有用而不足者。用而有餘者。不必富也。新聚之家槩然也。用而不足者。未必貧也。久安之家槩然也。新聚之家。宜不足。而有餘。久安之家宜有餘而不足。是何故也。蓋人之情。新聚則凡百之事。皆從苟簡。久安則凡百之事漸趨具備。是比屋之財。所以有有餘不足之異也。故善爲家者。其制產也。雖迨久安而常如新聚之時。限其用度。嚴爲之節。有不可無者。有可有可無者。衣服之於體。飲食之於口。屋宇之於風雨。一奴一婢之於役使。釜鬲刀鋸耒耜皿盒之於器用。是不可無者也。其他玩好之具。皆可有可無者也。其不可無者。猶必從其苟簡粗惡。況

其可有可無者。斥而去之耳。如此則一家之財。用諸一家之事而有餘。雖不幸遇疾病死喪水火之災。而不至於流離。不善爲家者。新聚則然。至於久安則忘其本。恥粗糲而非粱肉不食也。恥大布之衣而非絹縠不服也。屋宇奴婢器用亦皆稱之。其不可無者已然。至其可有可無者。亦求其具備。我不以爲侈矣。而人以爲常也。如此則一家之財。用諸一家之事。而不足。苟不幸遇疾病死喪水火之災。則必至於流離。雖邦國天下亦猶此乎。天下之財。非有古今之異也。而守成之天下。天下之財或用於天下之事而不足。而回視創業之天下。不然也。蓋創業者。新聚之家也。守成者。久安之家也。是知。彼國用之有餘不足。亦判於從苟簡與趨具備也已。夫守成之君。自好奢侈者無論焉。卽其號恭儉者視諸創業之君則已侈矣。豈盡其罪哉。情勢風習。漸移於冥冥之中。而不自知也。珍貴也。繕造也。禱祀也。濫賜橫賞也。左右使令之員。後宮侍御之選。有增無減也。自大吏至府史胥徒。每遇一事則加一員。世其祿而不削也。比例典故創於中世者。因仍踏襲。有冗費之大而不察也。可有可無者。已不從苟簡。則不可無者。能不求其具備哉。乃至會計告不足。則自食租衣稅。以至末征雜課。無不盡取而廣求之。求已廣。取已盡。而計猶不足。不幸遇非常之災。其焉不竭乎。苟有英斷之君。出反

其本而思之。凡百之事。一切苟簡。如草創之時。其可有可無者。斥而去之。特在其不可無者。而嚴爲之節。庶乎其可救也。噫庶人之家。用財無節。以至失産。猶可借貸於比隣。海內而不得其計。以至失其財産。則亦有可貸之比隣歟。

財利之計

利不必興也。害可必除也。興利而害至。除害而利生。故善慮國家者。日求害而除之。而其不善者日求利而興之。求利而興之者。後害而救害也。求害而除之者。先利而生利也。而世之言理財術者。每喋喋然以興利爲說。某地開鐵冶。將得利若干。某處開鹽場。將得利若干。某關算舟車。某市榷酤酒。將得利若干。某山劚而興墾。某池塡而課耕。某河口。某海鹵。築塢起堤。以爲奧爲津港。將得利若干。凡爲是說。國用之不足也。國用不足。經費之無度也。經費無度之不問。而取於民。興乎事。欲以補苴之。此非後害而救害者乎。古之言理財術者。殆乎異於此。以除害爲說而已。某興作爲無益。是害財若干。某修造爲無用。是害財若干。某賜爲濫。某賞爲橫。某官員爲冗。某典故。某比例。自何世始。自何歲興。爲非所宜因襲。是害財若干。苟

從是說。經費將有度焉。經費有度。國用將有餘焉。國用果有餘也。利何求乎。先利而生利者。如疏水流之。刷其淤而利其壅。因勢而導之耳。後害而救害者。如撲火滅之。隨撲隨燃。適足煽其燄。二者未可同日而語也。是故除害之說似無術。興利之說似有術。有術之術。人見其跡。是術之末至者也。無術之術。人不見其跡。是之謂天下之至術。術之末至者。煩勞人力。擾動人情。功效雖著於赫赫之外。而物力已屈於冥冥之內。術之至者。無一所煩勞。無所擾動。功效雖不著於赫赫之外。而物力已息於冥冥之內。息於冥冥之內爲社稷者。而著於赫赫之外爲其身者也。取爲其身之說。而棄爲社稷之說。豈能慮國家者也哉。雖然爲社稷之說。亦有眞僞焉。眞者獨欲其息於冥冥之內。故嚴於上而緩於下。詳於大而略於細。以徐觀其害之除。其僞者仍欲其著於赫赫之外。故嚴於下而緩於上。略於大而詳於細。以急計其利之興。徐觀爲儉。急計爲嗇。唯其嗇矣。是以其煩勞人力。擾動人情者。尙猶議財之流也。慮國家者。其亦自省思。此果爲社稷耶。將爲其身耶。

財利之計

富國之術。莫善於節用度而愛民力。蓋財用之於天下。不可一日無者也。有焉則安。無焉則危。安危之機。將於是乎在。其孰忽之。自古國家常苦財用之乏。才之可以殖財利用者。無不求也。政之可以殖財利用者。無不張也。而國計之告乏自若也。是其弊未可以知其所窮歟。彼殖財云者。果何爲哉。必暴取於民。或虐責逋欠。或加徵常租。吏之悍急苛酷者。稱爲才能。吏之緩和平恕者。稱爲不才不能。苟稽遲則罰從之矣。苟搜索剝括。爬羅剔抉。則賞從之矣。則天下之號牧民者。乃皆困民者也。如此而財之能殖者。吾未之能信。彼利用云者。果何爲哉。必煩興乎事。開礦也。興治也。墾荒蕪也。堙汚澤也。改作錢幣。以爲陽予陰奪之法也。懸新令撓市井。而爲扼吭拊背之術也。如此而用之能利。吾未之能信。何則民者財用之所由生也。其所由生。保而護之。愛而養之。猶且或至於瘁。況暴之乎。譬之木。欲其枝葉之茂。則宜先培其根。不培其根。伐而歷之。幾何其不胥而枯也。彼暴取于民者。自以爲殖財焉。吏之責愈嚴。而租之逋愈繁。民之力漸弱。而地之利漸遺。是其殖財適以歷財也。事者。財用之所由輸也。其所由輸。省而闕之。節而制之。猶且或至於冗。況煩之乎。譬之人。患其精元之耗。則宜先

節其慾。不節其慾。而徒欲服金石以補之。幾何其不撓其臟而涸其髓也。彼煩興乎事者。自以爲利用焉。而一事之興。一弊必從興。一利之生。一害必從生。當其始握籌也。工費之當。無不較量。而其終也。其所失或不償其所得。是其利用適以損用也。損用也歷財也。乃訑訑然自得也。謂富國之才莫我若。而富國之政莫此若。而國計猶告乏。則謂取於民與乎事之未至也。將求其所未至而張之。是斧纔存之根。而劉纔潤之髓者。非耶。然則富國之術何爲。曰。莫善於節用度而愛民力。

務農勸耕

一農捨末。海內將有受其飢者。一婦破機。海內將有受其寒者。況十國中之籍。末其八而本其一乎。農夫織婦。國之根也。士與商工。國之葉也。葉之茂人能見之。根之深人或不見之。其所見而重之。其所不見而忽之。是世之常習也。背其所忽。嚮其所重。是人之常情也。變其習而回其情。以富其國。非有識者其孰能之。有識者之所以爲富。無識者之所以爲貧也。無識者之所以爲富。有識者之所以爲貧也。有識者之所以爲富如何。誘天下之民而使其自嚮

田野。苟可以殖稻粱之與桑麻。則寸地不遺也。苟可以課耕耘之與繰織。則一人不置也。稱爲賈者。取於其足以通有無。而都無冗賈。稱爲工者。取於其足以給興作。而邑無冗工。衣食之數。多於貿衣食之具。生衣食之人。多於資衣食之人。而受其治者。多於施其治者。故見其都邑索如也。見其田野鬱如也。而無識者見其末焉。而不見其本焉。則其貧之也亦宜。無識者之所以爲富如何。誘天下之民。而使其自聚於都邑。苟可以置肆店之與器材。則寸地不遺也。苟可以執牙籌之與錐刀。則一人不置也。稱爲農夫者。取於其足以責租稅。而田無餘農。稱爲織婦者。取於其足以供文采。而野無餘婦。貿衣食之具。多於衣食之數。資衣食之人。多於生衣食之人。而施其治者。多於受其治者。故見其田野索如也。見其都邑鬱如也。而有識者置其末焉。而察其本焉。則其貧之也不亦宜矣哉。然而彼無識者。猶不察之也。見其鬱如者。謂國之富在此也。保護之。其索如者。則不知恤焉。抑制禁防之政不敢無故而加。賈豎之巧術日長。輕重之權操於市井。而無知奪之也。蠲租減額之典不敢無故而舉。農民之耗散日衆。膏腴之土棄於山林。而無知墾之也。習以爲常。不知重末忽本之爲非也。闔境之民。見上之所重在彼而所忽在此也。乃日捨其耒破其機。厭其田野而樂其都邑。側肩蹋足。有

如流水。競殖錢幣。遊手而食。情之所常。無知背本嚮末之爲非也。是以其末之勢日益厚。而其本之勢日益薄。國內之仰哺。而資給者日益多。則督責剝括者日益急。削其根柢而滋其枝葉。根柢之力居其十二。枝葉之力居其十八。制量海內一歲之所生。纔足以資海內一歲之給。不幸有水旱凶荒以加之。其何以備之。然而猶恬然以謂。黃白圓方之幣。皆我所作。大賈富胥之庫皆我外府。穀粟之乏不必憂也。布帛之匱不必恤也。噫彼庫中物雖千億乎。不過貿衣食之具耳。一鄕之凶。一國之飢。猶可諉曰糴於外。當夫海內之田荒。而海內之廩竭。菜色塡野。道殣相望之時也。其煌如鱗如。箱溢而貫朽者。不足以飽於一日。不足以暖於片時。欲持焉以貿焉。何從取之。根斯蹷。枝葉能獨不枯哉。

裁商權酤

邦國之所以安危者財也。財之所最重者穀粟也。穀粟生于地而成于天。而助其生成之功者則在于人焉。天地之事不可期。而人民之力可權。不可期者雖聖智。而無若之何。而可權者則明哲之所用其心也。曰水。曰旱。曰蝗飢。是其不可期者也。曰士。曰農。曰工商。是其可權

者也。知其可權而裁之。知其不可期而備之者。是之謂人君。不裁而使其偏重。不備而使其飢餓者。是之謂君非其君。夫古之天地猶今之天地也。古之人民猶今之人民也。天地人民無古今之異。而穀粟之生于其間者。有古今之異。吾不能知其所以然。何者。海內之士。固足以食海內之人。而有餘也。苟有餘乎。則雖有水旱蝗飢之災。宜不至飢餓焉。然古者不至飢餓而後世否焉。古者明主之君於海內也。當其平時。海內殷富。家給人足。穀價常輕賤而氓隸之食或飧稻粱。不幸而災乎。公私之所儲蓄。足以賑而支之。是以雖至壞山襄陵流金鑠石之時。而民無菜色。雖欲背叛。其可得乎。後世庸主之君於海內也。當其平時。海內有殷富之名。而無殷富之實。人之家於都者。日收奇贏。人之家於野者。日憂不給。穀價動騰貴。而氓隸之食非麥則菽。雜以草芽木葉。不幸而災乎。公私之所儲蓄。不足以賑而支之。是以雖不至壞山襄陵流金鑠石之時。而途莩相藉。雖欲不背叛。其可得乎。夫古之歲非歲歲而豐也。後世之歲非歲歲而歉也。古之生齒非加少於後世也。後世之生齒非加多於古也。海內之土。固足以食海內之人而有餘。而古食之有餘。後世食之不足。是獨何歟。曰。由民力之弱。而已矣。民力之弱。由海內之勢偏重於都邑而已矣。冗官世祿者。連甍相望。而大豪素封者。列

據衝要。尸位素飡之族。兼併遊惰之徒。如此之多。則供其耳目口鼻之娛。釣奇射利者。如雲而起。乘其曠間無聊之隙。惑志亂心者。亦如雲而起。奇技淫工歌童舞妓。海內之籍十居其三。禱祈符章僧道巫祝。海內之籍十居其二。凡是皆徒手食粟者也。是以沉湎之俗。玩戲之習。日長月增。槽壚罌醡之具。倍於耒耜之數。珍禽奇獸之畜。倍於耕牛之數。凡是皆無故糜穀者也。徒手食粟。無故糜穀者。聚於都邑。都邑之勢重。則鄙野之勢不得不輕也。且夫好游惰而惡勤勞。人之常情也。使勤勞而飽。游惰而飢。而人猶將苟安於游惰。況在於鄙野。則勤勞。而不得自食。在於都邑。則游惰而取食於人乎。使勤勞而貴。游惰而賤。而人猶將苟安於游惰。況在於鄙野則勤勞而比於奴隸。在於都邑則游惰而通於士大夫乎。故農民耕隸舍其耒耜。賣其耕牛。背於鄙而嚮於都者。歲以千數。而其所餘鳩頭鵠面之民。蓋僅僅然。輕者日以愈輕。重者日以愈重。而民力弱矣。唯其民力弱矣。是以地力未盡矣。唯其地力未盡矣。是以海內之穀粟。不及於古之有餘矣。舉國內人民。成之者三。糜之者七。譬如以銖兩稱鈞石也。如以寸木支大樹也。穀價安得不騰貴。氓隸安得不食草木。至有水旱不可期之災。安得公私所儲足以賑而支之乎。是豈古人預備素計。制其財用。以助天地之功之意乎。是豈

所以計長安乎。憂之則何爲。曰。天地人民。固無古今之異。亦在人君之爲之而已矣。曰。人君之爲之何爲。曰。如古之明主而已矣。何爲則如古之明主。曰。限都鄙之章。限士與工賈之數。又嚴限歌童舞妓僧道巫祝之數。而禁背於鄙而嚮於都。不禁背於都而嚮於鄙。自今以往者。在於所限。自今以來者。在於所禁。願爲農者。官爲貸牛種籽糧。緩其稅而勸其穡。業商賈者。重其征賦。而賤其品流。不得通士大夫。則徒手食粟者衰矣。糟壚罷醉之具。盡收諸官。官權而鬻之。少於舊額而賤於舊價。其所獲之利。不納諸公庫。特造庫于街衢儲之。以爲賑貸新農之資。使舊酤家易產。產之未殖。官或助之。珍禽奇獸。悉逐而絕之。則無故糜穀者絕矣。徒手食粟者衰。無故糜穀者絕。則海內之勢偏重於鄙野矣。偏重於鄙野。則民力强矣。民力强則地力盡矣。地力盡而穀粟不及古之有餘。穀粟之價不至輕賤者。未之有也。是所謂可權者也。裁其可權者如此。則於備其不可期者乎何有。古之明君其亦爲之而已矣。曰。衰徒手食粟者。絕無故糜穀者。利則利矣。恐其梗時勢而逆物情。且穀價至太賤。則或有傷士與農之患。而自今以往射利於糶糴之間。以爲產業者。將焉爲生。曰。然。雖然。因所謂時勢。隨所謂物情。而施其術。則梗時勢逆物情者。亦無不可行矣。穀價至太賤。官以術而少貴之。則士

與農亦無傷矣。且穀粟之太貴。農豈有餘可糶焉乎。若夫射利於糶糴之間者。猶彼盜鑄私鹽之徒乎。概姦民也耳。姦民易產。而四民富財。邦國之所以長安也。凡此類亦皆在人君深思其由。廣求其說。而徐觀其效而已矣。

平均穀價

併邦國之利權而操之者君也。慮人民之資用而備之者君也。民操利權而不知禁。民困資用而坐視之。惡在其爲君也。利權之在邦國。無常形也。或貴或賤。因時而變。何者人民之資用。有豐乏之異也。資用之於生民。無常量也。或豐或乏。因時而異。何者。生物之本。有凶穰之變也。世之無遠慮者。無若小民。當其穰也。粒米狼戾。誠有餘也。彼以其有餘也。視穀粟如糞土。有食而盡之者。有糶而貿之以爲日用器服之資者。賤者益賤。無儲其廩也。當其凶也。藜藿不充。誠不足也。彼以其不足也。視穀粟如珠玉。雖欲食而無可食矣。雖欲糶而無可糶矣。貴者愈貴。轉於溝壑而止也。是之謂民困資用。世之兼併者。無若豪民。取之於其糞土視之時。而予之於其珠玉視之時。不以其緩而貴取之。且乘其緩而百減之。不以其急而賤予之。

且乘其急而百倍之。寓巧術於取予之際。而併利權於緩急之間。是之謂民操利權。民操利權而不知禁。民困資用而坐視之。惡在其爲君也。故古之明君立之法。曰。歲穰則貴取之。畜而待之。歲凶則賤予之。以救其乏。凡所以準平時價裁節物力。以使農與末皆無傷。使穰與凶皆無困也。古之所立。猶可行于今。雖古今之勢異乎。上之人揆而酌之。舉而施之。詎有不可行者哉。苟有慮上憂下之君。輔以識古通今之相。定議創事。就港汊總會漕輓輻湊之處。各開平糴務。列置倉廥。皆計司總之。斷棄帑金數千鎰以爲糴本。就計曹與郡曹。各選廉明之吏一人。分遣各處司之。厚其俸給。責以大義。不必伺察也。而使其自選齊民中諳糴糶之事。熟耕作之道者。各十數人。以爲其屬。常候時氣之變移。察市價之升降。撿諸穀之熟否。上熟則糴三舍一。中熟糴二。下熟糴一。小飢發小熟之所斂。中飢發中熟之所斂。上飢發上熟之所斂。共若古法。或不能然也。則穀之太賤時。不必糴三舍一糴二糴一。稍貴於時價而買之。穀之太貴時。不必以上熟中熟下熟之價。稍賤於時價而賣之。民亦誘其利。無不率而趨之。且其糴之也。不必糴米粟也。大小麥大小豆黍稷之類。隨其價賤而糴之。其糶之也。不必待歲飢而價貴也。紅腐陳蠹不可久藏者。量時糶之。或運漕諸乏且貴之地而糶之。以所糶之

穀爲所糴之備。以所糴之錢爲所糴之本。輕重斂散。操其樞機於上。而運動伸縮之。誠如此法。則庶幾小民之不困貧用乎。有便利之法如此。而不知擧焉。使夫兼併厚畜之徒翕張小民豪橫都市。可勝嘆哉。然假使人君有欲行此法者。而吾知其不能也。何者。是法非官帑金錢有餘。則不可擧焉。古者量一歲之入。以爲一歲之出。用度之外猶餘數年之積。故立法與事。無所爲而不擧矣。民蒙其利矣。而及其終也。官亦有利矣。後世量一歲之出以爲一歲之入。用度之內猶有不足者。況能爲貴糴賤糴之法。使民蒙其利哉。夫已不能貴糴而賤糴。則或將賤糴而貴糶。是徒能操邦國之利權而不能慮生民之資給也。則商賈之雄耳。君之所爲。已可窺其跡。則民不肯趨之。若夫小吏屬隸之類。橫暴攫竊。挾上之威權。而凌轢羣下。上下共無所利。而其中飽矣。所謂興一利而生一害。是詎若不興之爲愈乎。噫是古之所以貴於節用也夫。

窮盡地力

民力之未聚。地利之所以有遺也。地力之未盡。民利之所以有闕也。墾荒之說。其可不講乎。

古者明王之爲制也。計地以布民。計民以分地。地無不有民之地。民無不有地之民。知民力之所堪而聚之。地利是以無有闕焉。後世之習則反之。吾請得詳言之。昇平之俗。貴末而賤農。重金錢而輕米粟。相習相率。不知其不可也。是以捨耒耜賣牛犢而遊四方。易其業而改其產。共求爲商賈百工技藝之人。遊手浮食。大半於天下之籍。而地著食力之民厪厪焉。民力之未聚如此。地利其不有遺乎。唯其然。是以僻地遠邑。不能無汙萊之區。膏腴沃肥生穀之土。捨於山林而無之或墾也。逋逃離散之餘。淹潦旱涸之後。爲草蕪。爲磽确。爲沙淤。爲沮洳。爲鹵蕩蘆葦之場。而無之或復也。地力之未盡如此。民利其不有闕乎。欲民利之無闕。則無若盡地力。欲地利之無遺。則無若聚民力。墾荒之說其不可不講也果矣。果欲講之乎。不必擾庶民也。不必煩庶官也。或差良有司練熟民事通曉地理者數員。歲巡視可開墾之地。徐誘夫遊手浮食之民而趨之。約而勸之。區而分之。勸勉而鼓舞之。量地境之高卑。度種樹之宜否。無水之處激而取之。多水之處宣而洩之。斗門閘牐。激水之具。無不廣求其術而講焉。而皆使以便宜行事。無一所撓掣。授其資而責其成。褒其效而作其氣。禁絕其聚議不決推諉相荷之端。則墾荒之事可以不煩擾而集矣。或檢國內之籍。籍其失業蕩產之民變爲

遊手者。而招徠之。貸其耒耜之具。助其牛種籽粒之費。約之以幾年之租。盡捐而與之。如此則應募者必踴躍而聚。趨耕者必人人自奮。墾荒之事亦可以不煩擾而集矣。誠如此。民利何闕之有。地利何遺之有。或者曰。後世之弊。不在地力之未盡。而在地力之太盡。不在民力之未聚。而在民力之過聚。墾荒之說誠利矣。但恐其無所施也。曰。不然。口分之制久壞。戸籍之法不明。萬民不地著而縱意所之。唯其所安之地。則躡足而集。雜沓重疊。山陵邱阜。無不耕者。尺寸之地不得更休。而其所不安則雖膏腴地。捨不知耕。卽知耕亦因其故常之安。憚其興造之費。不敢墾也。有司號稱開墾興利者。亦就其雜沓重疊之處。計增區區。是以海濱河口多增田。而僻遠之地否焉。卽田畝之價貴於此而賤於彼。彼之不察而此之見。乃謂地力大盡民力過聚。其亦溺於習俗之見耳。我是以益信先王之制慮後代之深也。

新策卷之五終

新策　卷之六

二十三論　下

水利之術

利之最博者。無水若也。害之最大者。亦無水若也。水利興。而國內之民無不被其利。水害生。而國內之民無不被其害。古人之所以難於治水。蓋有以也。天下之利以穀爲大。而穀無不生於土。土之所以能生穀者。資於水也。一日無水。是無穀也。故自川而澮。自澮而溝。自溝而遂。以爲灌漑。天下之田無不皆然。資其潤膏。以能生百穀。水之爲民利。其不亦博乎。天下之害以民之失業爲最。而民之失業莫迅於水患。堤防之不愼。疏濬之不加。卒値淫霖。或決焉。或溢焉。稻粱菽麥。廬舍牛馬。瞬息蕩然。或至數千萬頃盡爲不毛。流離傾散。天下皆然。水之爲民害。其不亦大乎。是民之利害。盡萃於水也。爲民上者。安可不治水。治水之術不講。則民

害不除。民利不興。然先除民害。則民利從興。未能除其害焉。而欲興其利焉。則誤矣。民之害於水。其原何在。蓋水之爲害。有出於天時者。有生於人事者。出於天時者。猶可以人力救之。況生於人事者乎。吾將先陳其生於人事者。夫辭高就卑。行於其所不得不行。赴於其所不得不赴。是水之天也。水之常勢也。苟任其天。順其常勢。則水固不能爲民害矣。唯夫不順其常勢。而加以私智。是謂以人逆天。夫以人逆天。而有不生民害者哉。以人逆天者何如。或欲便漕運也。乃塞順流之口。使其徙而近於城邑。或欲興田畝也。乃埋之以土。添其岸而隘其流。或菹澤汚地。水之所旁洩休息之地。亦埋之以土。以興田畝。或東其入海之口。以興田畝。使其委之幅員。殆狹於其原。或山之旁川源者。肆赭其木。使沙土崩下。日淤其流。或築塲塢。不得地勢之宜。適使水激而抵衝其旁近之岸焉。或合其當分者。以增水怒。每少霖雨。輒決焉。或分其當合者。以弱水力。下流日淺。每少霖雨。輒溢焉。大凡所謂以人逆天者。不可勝指。而此數者其最大者也。是皆水害之生於人事者也。吾將陳其出於天時者。夫治水者。雖任其天。順其常勢乎。加以非常淫霖。滿川之量踰川之限。不得不旁溢。卽其不然。經歲月之久。河身海口。不能無沙淤之患。是亦水勢之自然乎。抑天之託於人君也。水害之出於天時者。

此數者而已。出於天時。生於人事。二者皆可以人力救之也。吾將陳其所以救之之術。蓋生人事者。誠能知其非水之天。則反焉復其天而已矣。不必求他術也。唯眩惑於興利之說。貪戀於尺寸之土。而不察工費之積。所得不償所失者。不能斷於此。夫明斷之主。遠慮之輔。加以熟知水勢之吏。度其經費。徐爲之區畫指置。不至擾動下民招致人怨。則庶幾其暫勞而永逸也。水害之出於人事者。不亦可以人力救之乎。至若夫出於天時者。尤不可不求其術以答天之所託也。後世之稱善時河者。槩峻其堤防。是術之拙者耳。蓋我邦海心一大島也。故其地形梁脊高而四下漸海。雖其稱平地者。所謂四下之裔稍遠者耳。天下之川。皆各出其梁脊之中。紆回兩山之間而入海。其勢險其節短。故其水力自刮泥沙。不至淺淤。不用堤防。而無決溢之患。視諸西土治水者。尤易爲力也。唯其四下之裔稍遠者。多因斥鹵以爲都會城邑。水至其地。勢之險者稍變爲夷。節之短者稍變爲脩。則水力不足以刮泥沙。而日淤日淺。且斥鹵之地。因開田畝。造閘于河身。以拖淡水。造閘于海口。以洩鹹水。則上涸下浮。其土輕脆。泥沙愈淤。加以霖雨。不能不決潰旁溢。然則不獨出於天時也。堤防之說。於是乎起。而其患猶不止也。則謂堤之卑。以加其峻。數溢數加。水底殆乎高於平地。噫是猶築夾墻而

蓄水耳。可乎。如此者無若濬而浚之。濬而浚之。雖人力乎。猶爲近於天焉。築牆而蓄、豈天乎哉。苟欲爲其近於天者。則得所謂熟知水勢之吏數員。以督衆工。以招募夫貧困浮食之民。區分而授其工。鼓舞而作其氣。則不必大興役。而彼疏瀹塡淤剔抉湮塞之功。可計日成矣。苟海口之形。稍卑於上流。則其餘不必用人力而濬矣。何則彼勢之夷者復其險。節之脩者復其短。而泥沙之在於河身者。不能勝順流之力而獨留也。是其功速於加堤。其費亦少於加隄而其利豈不亦愈於築夾墻而蓄者哉。是濬而浚之之說也。至救所謂非常之淹潦。則亦無若牐而洩之也。苟審視地形。就其厚堅之地。多穿股渠。等其淺深。作石牐於其口。以時蓄洩。雖有非常之淹潦。以此備之。分殺水怒。其勢必不至爲太害也。彼分宜合者。常則能弱水力。霖則不能殺水怒者。詎可與此比哉。是牐而洩之之說也。水害之出於天時者。不亦可以人力救之乎。濬而浚之。牐而洩之。不特以去淤而備霖也。古之賢者。有取河身之泥淘去其沙以布於磽确之田者。數千萬頃。資其膏潤。化爲沃壤。稻粱菽麥。畝收一鍾。此術也或可揆其土之便宜而用也。古之聖王。有制爲澮洫溝遂之等者。自大達小。縱横布畫。灌漑土田。資其生殺之力以阜民利。此術也或可揆其土之形勢而用也。何特此二術哉。平底尖船。以

便漕運之法。古人用之。實施於穿渠作牐之後也。是數者皆除民害。而民利從興者。非耶。苟能知此。則水之爲博利。庶幾其被國內之民乎。

錢鈔之制

錢幣者。非天下之寶也。所以疏通天下之寶者也。然則何謂之天下之寶。曰。米穀也。布帛也。無之則饑。無之則凍。若夫錢幣。有之不飽。有之不暖。故米穀布帛。不可一日無焉。金幣錢鈔。可百年無焉。可百年無焉者。官何汲汲於造之。而民何汲汲於獲之乎。曰。以米穀易布帛。米穀不可合勺分也。分則耗矣。以布帛易米穀。布帛不可尺寸裂也。裂則棄矣。而夫數石之重。數匹之大。不可輒轉擎矣。不可分裂不可轉擎。則不可一日無焉者。或將不給矣。是所以汲汲於可百年無焉者也。金幣錢鈔。可折之分釐而資日用。可藏之襟懷而行千里。輕以轉重。微以輪大。以通天下之有無。以發天下之滯聚。可百年無焉者。於是乎。亦不可一日無焉也。民是以汲汲於得之。民唯汲汲於得之。故官汲汲於造之。故規民之利而造之。且以裁天下之貨權。利於民。卽所以利於官也。規官之利而造之。不足以裁天下之貨權。弊於民。卽所以

弊於官也。金幣錢鈔之利弊。可以是兩語而斷也。請歷陳古今造幣之因革。所謂利弊。可以就其中而見也。本朝近世之事。不敢言焉。以西土事言之。夫三代而上所造錢幣。有利而無弊者。何也。無他規民利也。秦漢而下之錢幣。利弊相半者。何也。無他或規官利或規民利也。彼周之大錢。秦之半兩。漢之白金皮幣三銖赤側。王莽之二十八品。孫權之大錢。共廢而不行者。蓋皆欲懸虛聲而欺民以增官之利。或官之奢侈究。而國用竭。於是淆雜他物。以益見數。以薄爲重。以小爲大。以無用物。爲有用物。欲藉威强行之也。其民始受其欺。中覺之。而勉從之。終乃斷不用。至此則雖威强不可行也。官之所造。竟歸於無用物而止。徒規官利而不規民利。曷足恠焉。彼漢文・武共縱私鑄。宋王安石弛錮禁。似仁而有弊。武帝乃收銅於官。非三官錢不得行。周宋之主亦嚴銅禁。皆似貪而有利。蓋或不必利於民。或不必利於官也。唐宋金元造交鈔。亦皆以無用物爲有用物也。而官民共受其利者。規民利而非規官利也。宋季元末有交鈔之弊。而至明淸。鈔法終不行者。因規民利者。而漸規官利也。吁乎利於民卽所以利於官也。弊於民卽所以弊於官也。其驗不亦歷歷乎明哉。後之造金幣錢鈔者。歷鑒於此。無徒以規官利爲利。而深知規民利之爲利。則庶幾永有其利而無其弊矣。曰。漢唐宋

明其專規官利者。其弊固如此。然其中亦有規民利而官又利者矣。而盜鑄一弊終不能止者。何也。曰。此亦規官利之念未絕也。何則官之鑄錢。欲用銅少而得錢多。是以或小其體。或淆他物。是以致盜鑄之患也。苟不愛銅。而重大其體。如漢五銖錢。唐開元錢。則民知工費之與利不相當也。而盜鑄之弊自止矣。交鈔僞造之弊。可以此意推也。官已絕規官利之念。而民猶盜鑄僞造。則自甘刑辟者也。斷而誅之何庸傷。曰。錢幣也。楮鈔也。共不規官利而造之也。而錢輕物重。鈔輕物重之弊。常不能止者。何也。曰。是則權也已矣。非規官利之咎也。物與錢。錢與楮。皆如秤也。此輕則彼重。此低則彼昂。非人力所及也。雖然官之所造。苟規民利。而非規官利。則所謂人力所不及者。亦可裁其權也。錢多而易得。則錢輕而賤。錢輕而賤。則物重而貴。是秤衡自然之權也。於是設術斂錢於官。以準平之。錢之分釐重而低。則物之分釐輕而昂。是亦秤衡自然之權也。鈔多而易得。則鈔輕而賤。鈔輕而賤。則錢重而貴。是秤衡自然之權也。於是設術斂鈔於官。以稱提之。鈔之分釐重而低。則錢之分釐輕而昂。是亦秤衡自然之權也。雖然此非虛聲欺民。淆雜多數。侵本錢。抑糴價。屢革擾下者之所能也。唯規民利而不規官利者能之。其造之之始。已有人力與自然之異也。大凡自然者。可以自然裁也。

故準平稱提。有能定民心焉。其自然者。不可以人力勝也。故威强禁令。無能行官志焉。蓋行金幣錢鈔於民。固欲以此易米穀布帛以發滯聚通有無耳。蓋以彼有之不飽。有之不暖之物。易於彼無之則饑。無之則凍之物。以此可百年無焉者。易於彼不可一日無焉者。以彼疏通天下之寶者。易於彼天下之寶也。然而民利之者。知金銀銅之可珍貴也。其於楮鈔。亦知其爲本錢之劵。而珍貴之也。故能規民利者。因民之所珍貴者而爲之制。故謂之自然。不規民利而規官利者。淆珍貴以粗賤。或棄珍貴而行粗賤。欲藉威强行之。故謂之人力也。後世之造金幣錢鈔者。不以人力而以自然。則彼錢輕物重。鈔輕錢重之弊。何患其不可止哉。

銅工之禁

以無用之事。費有用之物。以無限之工。糜有限之貨。是天下之大弊也。夫金銀銅錫者。宇内精英之所凝聚。百歳而生。千歳而成。爲地至疎。爲體至眇。明智之主。乃節而採之。聚而淘之。甄而鎔之。以爲寶貨錢刀。因其貴賤輕重。定其數而等其章。以母權子。以子權母。使天下大小之民用爲交易。轉大運重。排滯敗聚。皆莫不資於此。此非有限之貨。有用之物乎。及至後

世。奢侈之習長。而朴素之風銷。男子之於刀劍。婦女之於釧釵。以及宴游戲玩之具。無不以金銀飾之。貧賤已然。況於富貴人乎。甚則至銷其已爲貨幣者。加之僧道之徒鼓游惰之民。寺院道場之創也。莊嚴彫鏤。百倍古昔。施及齊民之家。無不置佛龕。其像其器無不用銅。每一戸口之增。輒增一佛龕。是以天下都邑每有以鑄佛像佛器爲生業者。而無不以致富。甚則至銷其已爲錢者。此非無用之事。無限之工乎。英察剛斷之主。苟能洞察其弊。則可不嚴立之禁哉。雖然世習人情因襲爲常。欲驟禁之。則曷翅不可禁焉。或開騷擾之端也。宜徐出明諭。以漸革之耳。若夫鎧冑刀鎗。及耒耜斧鋸鍋釜鉞刀鐍鑰之類。四民日用不可闕者。皆用鐵而足矣。燈燭盆盂之類則用陶而足矣。其餘凡不得不用六物者。特定其節。至所謂無用之事。無限之工。則一切絶之。凡天下之以銅爲佛像及佛器者。盡以官錢購之。銷以爲錢。凡天下之以金銀爲器用者。盡以官錢購之。銷以爲貨幣。器用之節。禮制不得不備者。代以骨角毛羽采色之類。佛像及佛器。民情之不得不存者。代以陶與木石。飾以金彩。使諸僧道諭其無異同。以銅工爲生者。官爲助之使漸易産。或因以爲官工。使伺察私鑄之徒。則上下倶享其利矣。而彼采取之繁急。漸屬緩徐。精英所凝成。滋息於礦。不至涸竭。有用之物有限

之貨。庶幾不靡費也。或曰。銷器用以爲貨用。可也。至銷佛像及銅器以爲錢。則雖其利甚博。而或有錢賤傷賈之患。曰。然。錢與物相爲輕重。相爲貴賤。錢賤則物貴。物賤則錢貴。物賤傷農。錢賤傷賈。農之傷。國之害也。賈之傷。何必害乎國。且夫權物價制低昂。盡在上所爲而已。錢少則重。重則貴。貴則散之以法。使其多矣。錢多則輕。輕則賤。賤則斂之以法。使其少矣。亦何患焉。而所以能制斂散多少之權者。亦由於銅禁之嚴而得焉耳。苟弛銅禁縱民鑄冶。而無知其泄耗之端。則雖欲權物價制低昂。其可得焉乎。然則嚴金銅銀錫之制者。豈非革弊之急務耶。或曰。世亦有貴殊方之物而賤本土之貨者。罽絨綿綾瓊瑤翠羽。果爲有用耶。金銀銅錫鐵鉛之屬。果爲無用耶。何爲乎貴彼賤此。今是之不問。而區區器用佛像之察。無乃明於小而昏於大耶。器用佛像猶尚在於海內。彼闌出殊方者。豈亦可購而求乎。曰。不敢言已。

征課厚薄

有所厚也。而後可以有所薄也。有所重也。而後可以有所輕也。是之謂明主取於民之法。是之謂明主均乎民之術。何以謂之明主取於民之法。曰。將薄於彼。且厚於此。將輕於彼。且重

於此。不厚無以爲薄。不重無以爲輕。民知其所以爲薄也。故雖厚不怨。民知其所以爲輕也。故雖重不恨。不怨不恨。是以謂之取於民之法。何以謂之明主均乎民之術。曰。厚云重云。民情之所常苦也。薄云輕云。民情之所常樂也。民之所趨民之所就。則懸其所苦而示之。使其厭而去之。是以不至偏衆。民之所厭民之所去。則懸其所樂而示之。使其趨而就之。是以不至偏寡。不偏衆不偏寡。是以謂之均乎民之術。寓均乎民之術於取乎民之法。是古昔之國所以富也。蓋後世之患。莫大於民之不均。而民之不均。由取於民不得其宜。昇平之久。民之習俗。漸好游惰。去田野而就都邑。厭農夫而趨商賈。是以食力者日寡。而游手者日衆。生財者之力日衰。而糜財者之力日盛。此非民之不均乎。昇平之久。吏之習俗。愛於近而苟於遠。厚田野之斂而薄都邑之征。重農夫之租而輕商賈之課。是以食力者不享其全利。而游手者收其畸贏。生財者常遇徵求。而糜財者常漏禁網。此非取於民不得其宜乎。唯其取於民。不得其宜。是以民之不均益甚。是後世之國所以貧也。吏民之習於昇平不得然也歟。雖然吏民之習俗無常也。亦在人主之所爲而已。苟有明主出。求均乎民之術而行之。其何患焉。均乎民之術。宜寓諸取於民之法也。取於民之法。宜厚於都邑也。宜重於商賈也。游民所收

之畸贏。宜收諸上也。糜財者宜使不得漏禁網也。緡宜告也。舶宜算也。煮鹽之場。冶鐵之礦。酤酒之壚。宜皆開務榷之。置關征之也。或曰。嘻是皆非衰世暴主所爲耶。今也爲之。以招怨恨。何以爲明主之政。曰。何其然。如此則經用足矣。經用足。則田野之斂可以薄也。農夫之租可以輕也。暴主奢侈。農租之不足。以充經用。然后爲此政以招怨恨。其所爲同。而其所以爲有天壤之異。苟知其所以爲。則誰敢怨恨。且古之明主。使民慕悅者。求諸西土。三代後莫如漢祖。漢祖實重商賈之征。而困辱之。當時未聞其怨恨也。後世亦不得曰漢祖以暴主。目西京以衰世也。亦顧其所以爲如何而已。然則今也。擧而爲之。何可不以爲明主之政哉。且夫爲之數十年。民之風俗。皆嚮上之所尙。向之所厭今則趨之。向之所去今則就之。十國內之籍而食力者生財者居其八九。經用益足。其富無比。假使其怨恨。怨恨者一二耳。其八九則皆感戴於我。以八九敵一二。加以富足之力。何恐之有。

貨權輕重

有慮乎民而立法者。有利於上而立法者。慮乎民而立法者。百世可行也。利於上而立法者。

不一日可行也。然嚮者之法慮乎民而立也。而今者舉而用之。欲以利於上矣。則百世可行者。不可行諸一日也。嚮者之法利於上而立也。而今者舉而施之。欲以慮乎民。則不一日可行者。可行諸百世也。故法一也。或博施濟衆。爲明君賢相所舉。或陰謀潛奪。爲暴君貪吏所舉。顧其意如何而已。雖明君賢相之法乎。使暴君貪吏用之。何往而不爲陰謀潛奪之歸哉。故雖暴君貪吏之法乎。使明君賢相舉之。何往而不爲博施濟衆之歸哉。今有一法舉而施之。足以濟衆而不察也。民利之不均未始不由此也。明君賢相可不爲之慮哉。曰。何法也。準平貨權之法是也。何之謂準平貨權。請略陳之。夫民之始非偏富而偏貧也。而至素封之家。役貧弱而驕王侯者。出貨權之不平。而所謂貨權之始。亦非偏輕而偏重也。而貴賤之低昂。常不至平者。何也。時有緩急而地有歉足也。時之緩也。地之足也。貨物太賤。不足相支。時之急也。處之歉也。貨物騰踴。不可制止。狡賈猾民買之於其太輕之間。以待其時。賣之於其騰踴之際。以收其利。積貯倍息。不厭千倉。轉販搬移。不憚千里。而其巧術之委曲變化。殆乎無知端倪。富者以愈富。而貧者以愈貧。其不均也至如莛楹。無他其相倚伏。相因積。勢之所必至也。是故明君賢相從其輕重而常平之。使貨物不至騰踴。不至太輕。又使民不至愈貧。不

至愈富。是準平貨權之法。所以不可已也。苟欲立其法。以得人爲先。必擇仁恕公平洞知下情者一人。而委任之。次擇明交周廣練熟賈術者數人。而爲之副。以次相薦。多置屬吏。分居衝要。皆體德意。以使民不至大貧爲心。酌量時勢人情而奉行之。其法俱沿古人。就所在撿察。凡百貨物有其價因時太賤者。則官悉買之。待其價太貴而賣之。使農民計其地之歛足。而相委輸灌澆。至如商賈之爲官。皆償其價。所在豫置倉庫。以儲其所獲。使民明知非官代商賈而網民利也。然後以之爲勸農課耕之資。賑貸貧民。薄息而緩取。至其極貧困者。則棄而予之。誠如此則時無緩急之殊。地無歉足之別。物價常不至騰踴。不至太輕。而貧民免其困苦。狡賈猾民無所施其術。積貯轉販之利爲上所奪。而失其驕王侯之勢矣。貨權之平如衡之準矣。故曰。今而施之。足以濟衆。此法是已。明君賢相盍少察之。或曰。陋矣哉。策也。是非桑弘羊之所請漢武者乎。漢武爲暴君。弘羊爲貪吏。往古爲之者。宋有神宗。而神宗又爲暴貪之歸。且夫漢武宋神。皆以此法施乎天下。爲陰謀潛奪之術。而戶口衰耗。民心騷擾。其始似利。其終則害。如合符也。汝其忍汚其吻焉哉。乃欲使明君賢相擧施諸民。陋矣哉。策也。曰。小白亦衰世之明君也。夷吾亦衰世之賢相也。夷吾輔小白。博施濟衆。致驩虞之化。職是之

由。書諸簡爲百世可行之法。何則慮乎民而立之也。漢武宋神之所舉。無非此法也。然而民擾事沮。不一日可行者。利於上而立之也。亦顧其意如何而已。後之明君賢相苟慮於民而舉此法。則其致化猶夫齊也。何必概棄之哉。曰。小白夷吾覇者耳。準平貨權之法。功利苟且之說耳。而汝何謂百世可行乎。曰。慮乎民出於至誠。則王者之政也。慮乎民出於苟且詐僞。則覇者之政也。亦顧其意如何而已。世之腐儒善立畛域。自謂。非三代聖人之法不言也。殊不知。聖人起於盛世。天下之變未多也。後世之處於衰而救之以術者。亦何可闕哉。而聖人慮周萬物。故處於盛而豫於衰。後之明者。巧法千變。不能出其範。彼儒者自守其範而虛其實矣。周官司市辨物而平市。亡者使胥師平貨賄。泉府買滯貨待時賣之。是則後世平貨權之法已囿於此矣。彼儒者亦謂之功利苟且之說乎。

法律因革

箝制天下之民。使不敢叛其上不敢逞其欲者。法律是也。蓋民之爲物。如悍馬然。少紓其備乎。將踶齧奔逸而不可禁。善馭馬者。知其如此也。於是。制之羈絡具之銜勒而後鞭策而驅

馭之。唯我之所欲爲。故法律者。馭民之銜羈鞭策也。天下之論民政者。無不言制法律之爲便者。而吾未之盡信也。蓋法律之制。其來久矣。吾嘗昔學之。而粗記其名也。請言其概。彼鄭之鑄刑書。其事邈遠不可詳焉。其後尤著者。魏有李悝。悝之律六。曰盜。曰賊。曰囚。曰雜。曰具。囚有二類。繼作之者。漢有蕭何。何之律加以三。曰戶。曰興。曰廏。倂爲九章。魏晉六朝。稍更加之。至於楊隋。承宇文氏之法。而唐亦因之。定爲十二。曰名例。曰衞禁。曰職制。曰戶昏。曰廏庫。曰擅興。曰盜賊。曰鬭訟。曰詐僞。曰雜律。曰逋亡。曰斷獄。其用刑也五。曰笞。曰杖。曰徒。曰流。曰死。宋・元亦因之。至於明。重釐正之。五刑仍其舊。而律則分其類於吏戶禮兵刑工六部。故分戶昏爲二。曰戶役。曰昏姻。分鬭訟爲二。曰鬭毆。曰訴訟。分廏庫爲二。曰廏牧。曰倉庫。分職制爲二。曰公式。曰受職。裁定其目。爲四百六十條。清亦因之不革。而今之談律者專稱之。凡唐以來讀律之例八。曰准。曰以。曰皆。曰各。曰其。曰及。曰卽。曰若。其後亦有十六字訣者。曰加。曰減。曰計。曰通。曰坐。曰聽。曰依。曰從。曰竝。曰餘。曰遞。曰重。曰但。曰亦。曰稱。曰同。蓋歷世所因革。雖有增損。大抵世愈降。文愈密。亦勢之不得不然也。如我中邦。文武帝之朝敕藤原不比等。撰定律書。而今也殘缺亡失。不可得而考其詳。然令書則全然猶在。而格式之編。亦有存者。

律令格式。皆唐氏之所以名刑法。而本朝倣之也。今也考諸令及格式。概模倣唐制。則當時所謂律者。亦倣唐律。而稍出入焉耳。唐律卽明律之所因也。然則今之談明律者。假使其倣而制之。亦仍如我上代而加其繁也耳。平安失御。亂離相踵。刑政之事悉歸武人。經鎌倉室町數世。皆無載籍可徵。則其所建置莫得而知。其所見獨有北條氏所作貞永式目者。而其文簡質。視諸所謂律者不可同日而論也。然中世以降之法。率因其舊。皆以所謂簡質爲宗。相襲至今。而天下之士方以制律令爲說也。夫法律之制。和漢古今之可槩見者如此。然有制而便者。有制而不便者。蓋無律文立。則聽訟斷獄。徒因比例。天下之法。空虛無據。而吏或爲姦於其間。以意上下。至不推究。民之耳目無所向準。而小惡細姦不無漏其網。天下之情。散漫放逸。各自爲之。不受上之馭使。苟制一定之律。等其文立其目。則可以使斷獄之吏有所憑據而考式。可以使天下之民有所持循而規避。上之所欲爲。民不敢不趨。是制律之所以爲便也。然律之爲文。起於彼之叔季。故繁苛如彼。碎細如彼。義例精微。或一事而兩端。制行之久。弊生意外。姦吏蠧緣。貪爲舞文巧詆之具。人民凋弊。巧僞愈繁。上下相遁。至疾視其上如讎隙。是制律之所以爲不便也。要二者便不便。各居其半。吾之不盡信制律之說以此

也。唯其有明智之主出。察時宜。酌人情。因其風土氣俗。以裁簡明嚴確之律。使吏民曉然知所去就。則善矣。苟不然而驟取彼繁苛碎細者。不察時運土俗之宜。而徒欲施諸民。而求其治。吾不知其可也。且夫所貴於立法者。使下之耳目曉然於此也。今彼律者。讀例解訣之屬。雖老獄吏則未易通達。蚩蚩者豈能悉記而每避焉乎夫。是之謂陷民於戾而導吏於奸矣。陷民於戾而導吏於奸。豈上之所欲也哉。律有以致之。且夫制律之說爲便乎。彼所謂笞杖徒流死者。視諸我中世以後之法。易笞杖徒三者以驅逐境外之刑。死刑者至近世有絞斬梟磔鋸炮數等。而要之其意大同。但未立其目耳。自名例至斷獄。較諸我中世以後之法。大意亦同。但未著其文耳。所謂制律之說。亦不過立其目著其文。而欲立其目著其文。自非明智之裁吏。則其勢不能不至繁苛碎細。繁苛碎細。則陷民於戾。而導吏於奸而已矣。是究其說所至。殆乎屬贅言矣。夫凡中世以後之法。質略簡易。濟以武斷。不貴文罔。然國勢民情亦宜之安之。卽回視上代之倣唐制者。乃如不若今之便者。蓋我邦氣運未至如彼澆季。故上下之俗。厚篤樸摯。刑不上士。罪人不孥。凡此皆非彼所敢望也。以如彼之法。施如此之俗。宜乎。其不相稱也。由是觀之。彼制而不便者。什八九。不啻居其半也。夫治民如牧馬。擇牧人而

任之。深察其好惡喜怒之情。養以簡易質略之法。齕草飲水。嘶鳴羣居。其悍惡害羣者。痛杖而除之。如此而止。不亦可乎。雖不盡爲我用。而亦足以馴服于我。因其性而全其天。天之附托人君。亦豈非此乎。苟徒恃其銜勒羈絡之具備。不務察其情。而煩策苛鞭。拂其天性。則雖能箝制諸一時。而豈長安之計也哉。

訟獄利害

斷訟之政其可已矣哉。民有不平而告上以求其平。不告何以得其平。民有寃枉而呈上以求其白。不呈何以得其白。彼斷訟之官。其司直也。如權衡以稱之。其用明也。如暾日以炤之。然後可以使民得其平。可以使民得其白。訟獄之不可以已也。用法之政其可已矣哉。剔朽蠹而良木斯茂。不剔將蝕之。芟蔓草而嘉穀斯長。不芟將損之。夫用法之官。懾伏如神。去一而護百。示威如火。收一而懲百。然後可以使良木茂。可以使嘉穀長。用法之不可以已也。斷訟用法豈不可講其政之得失乎。斷訟之政何爲。曰。政救其弊耳。後世斷訟之弊任强折。服之以威。以謂善斷訟也。此强之也。非斷之也。然原其所由。蓋由用法之官兼斷訟之官也。夫

用法之官慣於嚴急威猛。而少簡靖和平之度。其聽訟也。亦用嚴急威猛處之。故至以強爲
斷也。苟於法司之外。別立聽訟之官。必以簡靖和平近於民而體其情者充之。吏胥皁隸之
役。拷掠搒箠之具。凡所以威民志而究虛實者。盡如法司。見有可擬罪則拏送法司。以正典
刑。則以強爲斷之習改矣。後世斷訟之弊在上下之太遠也。法司之宮。高據城上。邃深森嚴。
民已憚之。雖有寃枉不平而不敢告呈之。苟告呈之。如升天然。如接鬼神然。上官坐於層壇
縹緲之間。聽審取供。唯吏之任。一言囁嚅。搒掠從之。豫賂吏皁。則曲而得直。袖手而去。不豫
賂吏皁。則直而得曲。必至痛搒而告狀。稟案到單審語無不以其意爲增減。懦而少錢者每
屈。健而多錢者每伸。民稔知其如此也。是故吞聲忍氣。以其安於寃枉不平。爲愈於求平求
直。上官乃坦然以謂我能使民無訟。惑矣。豈戰國厭煩之習也與。而仍用諸治日不可也。苟
於街衢衝要之處。別開聽訟之局。使民得容易投稟。上官日莅親聽斷之。吏胥皁隸唯供其
逮捕寫詞而已。如此則庶幾無覆盆之不炤乎。古者平安之盛。實天子親斷訟矣。自弘仁廢
之。民心以離。可不鑒乎。今假使不親斷。而猶使斷官親斷。則庶幾矣。後世斷訟之弊。在於以
喧噪也。官吏之斷訟者。非枝蔓其辭則盛怒折之。蓋以爲導而使言。嚇而使吐實也。今夫有

酗於筵者。筵之人不知其曲直。在帷中者知之。有鬭於巷者。巷之人不知其勝負。在樓上者知之。何則以不喧噪者待喧噪者也。今枝蔓其辭盛怒折之。則先自喧噪矣。何以剖人之喧噪乎。適足以使下窺測上意。惡在其使言而吐實也。苟以簡御煩以靖待動。則於剖曲直乎何有。凡欲明剖曲直。不在聽訟之時。而在聽訟之前。豫於獨處之際。取原告被告呈狀。以平氣讀之。以其身置於兩造之地而體察之。此事之起。由於如此。于證之者由於如此。某詞爲僞。某詞爲情。情之所歸。蓋欲如此也。里居姓名年月物件。無一不記。然後莅堂。寫供吏以外。不許一人侍。至訟人則不使同時進也。不先問兩造也。使同時進而問兩造。則黨類同口也。故先進原告之干證問之。待其出而後進被告之干證問之。兩證口供。視諸呈狀。察其同異。乃進原告被告如前。合而察之。則曲直之槩已剖矣。然後森列皂隸與掠具。使兩造兩證駢進而對質。其詞平而其色常者爲直。其詞支而其色沮者爲曲。於是。上官出一言以指其竅。則彼無不折服矣。其他誑誘鈐制之術。皆在上官豫擿其伏而時應其機而已。豈可悉言哉。後世斷訟之弊在縱奸民而無禁之也。奸猾之民無恆產業。而諳練獄訟之道。善持吏之短長者幸人家之有事。唆而嗾之。鼓而煽之。使必告官。結構告狀。盡出其手。揣摩而教之。曰。汝

告之如此。則官詰之必如此。乃對之如此。官復詰之如此。則汝復對之如此。事無不濟矣。輕浮者信之。聚衆抗訴。彼傍觀其間。以規大利。至形迹敗露。則飄然引去。而害止於當事者。至以觸刑戮。凡如是者所在不少。苟上之人訪察得其實。嚴治痛懲。剪其根柢。諭告齊民。明示利害。則無實之訟息矣。夫斷訟之政多端。而其大要在此數者。用法之政何爲。曰。政救其弊耳。後世用法之弊。在吏徒之苦民。甚於盜賊也。奸僞之覺也。故緩其逮捕之期。以竢苞苴。得焉則舞文爲解。不則鍛錬歸重。或株連蔓引。以爲大獄。盜賊之獲也。敎援平民。羅織無辜。以擊其所欲甘心者。民不忍一時之苦。無不順而承焉。其他奸猾不可勝數。吏之苦民也如此。法司皂隸其徒甚繁。囊槖盈則穩其逮捕而輕其拷擊。囊槖虛則凌逼酷虐無所不至。或老賊宿盜。數獲數免。多識其面者。盜亦以此爲倚賴。聲氣相結。入獄則慫臾新囚。在外則蠹害市里。而徒隸常爲之地。其他閭閻小民之遊手而通非類者。巧黠而善微訐者。官因以爲耳目。系徒隸之屬。遠邇相聯。如蛛網然。雖民間釜鬲之中。無不洞然而通官也。及其有事。遞郵緝訪。在數千里外者。旦命而夕獲。其相應也。如率然。而官之摘伏如神者。蓋無不用之。然此輩亦常爲奸盜之地。賭之窟。盜之窖。業已獲之矣。而出其不意以虛喝之。以網收其利。收其

利者數。則官之所欲逮。則豫報知之。使遷而避之。至則無獲矣。雖然是其害民。害猶爲淺也。其平居自恃其爲官之耳目也。使平民微知之。摘其陰私而脅之。則不得不啗厚利以緘其口。即娼坊劇場。凡衝劇之地。黨類碁布。而店鋪之業不賂於此。無以得焉。其痛悍者藉於官權。見細事不法。輒呼號糾壓。以資需索。民之困之豈淺鮮哉。吏徒之苦民也如此。苟精明之上官。密訪得驗。就吏徒之中。擇其貪墨奸黠尤甚者各一人。取付拉挫。以懲其餘。則無不震慄改飭矣。凡所貴於伺訪者。以其使人不覺也。今至恃官權以困平民。則果何益乎。宜一使人覺者立奪其權擇他人任之也。寧微訐不巧。愈於困民矣。然後廉公矜持以率其下。則吏徒何有不化者乎。後世用法之弊在於保甲不詳也。蓋後世之法。郡縣村野。必五家爲保。以相聯屬。而若都市乃無其法。或十戶爲一保。或七八戶爲一保。各街異法。而稱伍長街胥老人大老人者。不過管其大綱耳。或其權不重。或其體太尊。街中之事不得自制。徒經其手以通上耳。故街中有伏姦。而耳如不聞。蓋亦以所謂上下太遠。法司太嚴。故憚呈告也。且小官細吏之家。錯雜其間。動爲撓擾。長胥之令不得均一。是其法雖似簡便乎。禁網疏濶。未足以絕姦猾之蹤也。苟申保甲使綱紀明截。則無蠹矣。申保甲之法。亦因舊法。而加密耳。自五戶。

至二百五十戸。管轄而上。統之市司。官吏之家萃於別處。隷士人之坊。不得錯雜。五戸之長有牌。書五戸姓名丁口。爲何生産。何年來住。生齒增減。因爲塡抹。街胥老人大老人所管皆如之。而統其全藏於市司。凡戸之遷徙。屋之鬻賣。訴訟之狀。稱貸之劵。皆經長胥老人之簽押。自非大事。任其聽斷。不必上請焉。凡賭之窟。盜之窖。在同甲中。知而告者有賞。知而不告者連坐。凡驛道之外不許私留羈旅。有浮游無籍。蹤跡可疑者。或乞丐之徒爲奸盜導引者。則立捕究詰。可逐則逐之。一保之首。作一門。保中丁壯輪而守之。捕盜弭鬭。輒閉其門。遇失火。則街胥老人帥所管丁壯以防之。市司監官等官人以外不許他街之人混入。雖親戚相救者而不許也。凡各保之牌。每歲切稽之。以按丁産升降。如此則其始如苦其煩者。終以安其便。而奸猾無容足之地矣。且夫厭村野趨都市。背農嚮末。後世之通弊。則假使苦其煩。亦足以改民志變民俗也。用法之政多端。而其大要在此數者。夫已革斷訟之弊。亦革用法之弊。而民之不平者未平。民之寃枉者未伸。朽蠹猶蝕良木。而蔓草猶隕嘉穀者。未之有也。雖然民有不平而平之是矣。而何若使其無不平乎。民有寃枉而伸之是矣。而何若使其無寃枉乎。剔朽蠹去蔓草是矣。而豈無絕朽蠹蔓草之方乎。不能使其無。待其有而舉之。雖如權

衡如皦日如神如火。而抑末也。此豈能斷訟用法者之責也哉。蓋有任其責者。秉彝之民。孰不知懿德乎。我示之以偏。彼之偏苟有甚於此。我示之以曲。彼之曲將有甚於此。我示之以詐僞貪殘。彼之詐僞貪殘將有甚於此。有甚於此而責之。亦盍示之以廉平正誠也。蚩蚩之民。誰非我赤子乎。飢之而責其奪食。寒之而責其奪衣。亦盍豐其衣食也。我已示之以平與正。而彼猶偏曲也。我已示之以誠與廉。而彼猶詐僞貪殘也。夫而後斷之訟可矣。我已豐其食。而彼猶奪食也。我已豐其衣。而彼猶奪衣也。夫而後用之法可矣。吁後之爲政者。勿獨以斷訟用法爲不可已也哉。

男復
男醇　同校

新策卷之六　大尾

刻二新策一序。

余舊藏二山陽先生新策謄本一。時樂レ讀レ之。頃見二一活字本一。間有二繆誤一。乃欲三校正以刻二于家一。請二之先生令子士剛・子春二君一。二君曰。是先人少時所レ著。係二未定書一。後刪定爲二通議廿八篇一。不三復留二此本于家一。其爲二芻狗一可レ知矣。子何以刻爲。余曰。然。先生晩年。文益精。識益確。固不レ待レ言。而此篇明言快論。一讀聳レ人。人先讀レ此。後及二通議一。以見三其文與レ識之所二變且定一。亦未二必無レ裨二於學者一。況既有二活版行レ世。不レ行則止。行而有レ繆。二君其無レ責二於校訂一乎。二君領レ之。乃得二其同校一。付二之剞劂一。刻成。因謹識二其由於簡首一。

安政二年乙卯秋七月。

後學・杉本貞健。（墨隱大亦留書）

校正

通議

賴氏藏版

『通議』解題

『通議』ハ、『新策』ノ修正ニ出デシコト、前ニコレヲ言ヘリ。ソノ一部ノ成書トシテ、新タニ世ニ問ハントスルニ至リシハ晩年ノ事ニ屬シ、天保元年（五十一歳）、篠崎小竹ニ與ヘシ書翰ニ、

「舊臘（文政十二年十二月）以來論策、此節、黒汗になり刪正、大槩就レ緒候。通議・通論など名（づけ）可レ申哉、深慮篇など之様の名あり度と申ものも（是あり）、よき名前（標題）に候哉。所レ謂和漢古今（に亘り）、非ニ專論ヒ今と云意しれる様の名、ほしく候。」

即チ論策（新策）ヲ刪正シテ、『通議』ソノ他ノ假題ヲ附シタルナリ。

次ニ、同年十月十八日、門人村瀨藤城ニ與ヘシニハ、

「拙者論策は、通ニ論古今和漢一もの故、通議と名付置候へども、名は未定に候、何分成就はいたし候。廿七篇にて、上・下二巻ほど、各三四五十葉ほどに候。其實は論ニ

「當世〔徳川氏〕政治得失ニ候ものにて、其名目體貌は論レ古也。」

見ルベシ、『通議』ハ時代ノ政論ニシテ、而モ時代ニ憚カリ、一ハ、「非ニ專論ヒ今と云意しれる様」―世間一般ニ爾カク思ハシムベク、表面ヲ繕ヒ、又一面ニハ、「論ニ當世政治得失ニト、ソノ本旨ヲ明ラカニシタルヲ。

天保二年〔五十二歳〕正月十一日ニ至リ、又、小竹ニ向ヒ、

「通議〔自注。火技・水戰など無ニ著落一、今少し兵學家言を出度と云ものあり、それで改ニ篇名一可レ申と存候也、如何〕、とくより可ニ差上一處、歳節〔年末歳始〕御多川と差扣、此節差出候。……其言〔本篇所論〕未ニ必足ニ實用一、其文則可ニ商量一〔自注。其評も未レ可レ捐歟、僕は兵家にて随分有レ之と存候也。初より上・中・下と致候へ共、全體二篇、無ニ上・中一者〔に〕有レ之故、それと配する心にて、火・水などゝいたし候也〕、得ト斗御覧可レ被レ下候、不レ妨ニ塗抹一ハ勿論也……使ニ後世併テ觀山陽與ニ小竹一、細ニ論文之肯綮一、亦妙乎、不レ待ニ後世一、卽得ニ今日之益一。享ニ今日之樂一可レ申候。如ニ〔茅〕鹿門・錢牧齋之評ニ蘇氏〔東坡〕論策一之狀上、是を奉レ冀候〔自注。非ニ以レ蘇自居一、而茅・錢老

兄也、言ニ其體一也」。日課ニ一文、廿七日可レ了レ課、二文「づゝならば」、十三日半可レ了。世張「門人後藤松陰」へも御傳示、是にも可レ然被ニ仰付一可レ被レ下候「自注。生涯心血所レ注候、二冊可レ敵ニ外史二十二冊一也」。

「目錄ノ尾、篇名一作「標題」—通議一作ニ通論一」を浮簽「附紙」に仕置候、何れか可也乎、御定可レ被レ下候。」

卽チ『通議』ハ東坡ノ論策ニ擬シテ作ラレタリ。「『東坡策』ト題シテ、藤森天山ガ嘉永年中、二十五篇ヲ鈔出セルモノアリ」。ソノ成稿ト共ニ、コレヲ小竹ニ示シテ、ソノ細評ヲ求ムルニ汲々タルモノ此クノ如シ。

本集、附載シタル小竹手批本ハ、大垣・故金森毅斎氏遺愛ニシテ、予ハ、氏ノ生前、借閱謄寫セリ。ソノ言フ所ヲ觀ルニ、普通諛評ノ類トハソノ趣ヲ殊ニシ、切劘質正、眞ニ「肯綮ヲ細論」シテ、讀者ノ目ヲ刮ラシムルニ足リ、而モ從前、未ダ世ニ公ニセラレザルモノ。今コノ機會ニ當リ、コヽニ採錄スルヲ得ルヲ快トス。

更ニ同月十八日ニモ、

「通議、日々御覧被レ下候哉、未御掛〔著手〕なき歟。」

ト、ソノ手批ヲ促ガシテ已マザリキ。

山陽ノ歿後、〔天保三年〕十月廿七日、關藤藤陰ヨリ、在江戸・頼聿庵ニ報告セシ書翰ニ

徳川氏大奥ノ事ヲ論ズル内廷篇ノ事ニ就キ、

「九月十九日〔歿前五日―「行狀」ニハ「先レ死三日トアリ」ニ、通議ヘ補入被レ遊候内廷ト申一篇ヲ淨錄、被二仰付一、是モ九月初旬ノ御起草ナリ。其御草稿讀兼候處ヲ、十九日ニ別ニ、側ニ有合ノ反古ヘ御書御座候………御絶筆に相成候姿、御臨終ノ時分、如何シテヤ殘リ居候。………右内廷ノ論、〔藤陰自身〕十九日所二淨錄一候」

「題二新著通議後一。七首」ノ詩ハ、天保元年冬ニ成レリ。稿本ニ添ヘテ、ソノ初稿ヲ姫路藩老職河合寸翁ニ贈示シタル識語ニ、

「近草二閲古論二十七篇一。偶感作二此唫一。憶嘗與二漢年〔寸翁字〕老丈一論二及是等目錄一。併レ詩寄示。乞二一語一。」

文政中、廛寸翁ニ聘セラレテ、ソノ創立セル仁壽山學問所ニ開講スル毎ニ、經世策ニ就キ、互ニ所見ヲ交換シタルヲ念ヒ、今、ソノ一閲ニ供シタルナリ。コヽニ「閲古論」ノ名ヲ用キタルハ、ソノ公吏タルニ顧ミテナルベシ。

七首ノ一ニ、

「肉食謀存誰置レ評。自嘲多事老書生。一窓風雪妻兒臥。奮レ筆燈前紙有レ聲。」

『通議』ノ整錄ニ就キ、俛焉トシテ「黑汗ニナリ刪正」ノ功ヲ積ミツヽ、風雪窓下、妻兒ノ臥牀ニ就キタル後マデモ、深夜燈前、筆ヲ奮ヘリトイヘルハ、サモアルベク、而モ、コノ一首ヲ誦シテ、聯想セラルヽハ、文政八年〔四十六歲〕ノ冬ニ、蘇老泉ノ策論〔審勢・審敵〕ヲ讀ミ、詩五首ヲ作リシ中ニ、

「國論游移只息レ兵。大謀却出老書生。想聞風雪眉山夜。奮レ筆燈前紙有レ聲。」

前後全ク同一趣向ノ作意ナルヲ思ヘバ、『通議』ノ策論ハ、東坡ノ外ニモ、老泉ノ所論ニ傾倒シテ、得ル所ノ多キモノアリシヲ想ハシムルモノアリ。

『通議』ノ初刊本ハ、又同ジク拙修齋本ニシテ、コレニ次ギ、弘化四年〔校訂本〕・嘉永三年〔校正本〕、及ビ明治九年・十一年・十二年版ノモノアリ。

ソノ評本トシテハ明治九年版ニ、古賀穀堂ノモノヲ附シ、更ニ天保十一年二月、岩國藩儒〔後、學問所養老館督學〕二宮錦水ガ、同窓都志見省卿・及ビ下海門・山田青門等ト相謀リ、ソノ師〔後督學〕玉乃九華ノ評ヲ載セ、木活版ヲ用ヰテ刊行〔五十部限版〕セシモノ三巻アリ。コノ書、現存スルモノ多カラズ、予ハ姫路矢内正夫氏ニ藏セラルヽヲ聞キ、ソノ借閲ヲ期シツヽアリシ際、本會故玉井源作氏ハ、偶然廣島ノ一書肆ニ就キ、コレヲ探求セラレ、乃チソノ評言ヲ本書ニ加フルヲ得タリ。而モ、今、ソノ新刊成ルニ方リ、氏ハスデニ逝キテ在ラズ、本書ノ刊行ヲ目スルニ及バレザルコトヲ痛惜スルニ禁ヘズ。本書ハ此クノ如クニシテ、坊間流布本以外、小竹及ビ九華ノ批評ヲモ増加列載スルヲ得タルハ、竊ニ自珍已マザルモノアリ。

九華ガ、『通議』ニ加評シタル縁起ハ、ソノ自跋ニ、

「文政丙戌〔文政七年、廿八歳〕ノ春、西、筑紫ニ遊ビ、昭陽龜井先生ニ草香水亭ニ謁

シ、遂ニ留マルコト數月ナリキ。一日、話次、賴氏ノ人ト爲リニ及ビ、予ハ少シクソノ短ナルヲ言ヘリ。先生ハ則チ曰フ、子成ハ未ダ毀リ易カラザルナリ、先人〔南冥〕シバシバ子成ヲ稱シテ、天下ノ奇男子ト爲シ、吾レ人ヲ見ルコト多カラズトナサズ、未ダ嘗テ子成ト雁行スル者アルヲ見ズト曰ヘリ、子成ハ未ダ毀リ易カラザルナリト。

爾時、予ハ默セリト雖モ、而モ心未ダ誠ニ服セザリキ。鄕〔岩國〕ニ歸リテ、居ルコト未ダ幾バクナラズ、其ノ著ストコロノ外史・政記・樂府、及ビ通議ノ數編ヲ得、尋デコレヲ讀ミ、然シテ後、始メテ先生ノ我ヲ欺カザリシコトヲ知レリ、賴子ハ果シテ人傑ナル哉。

コノゴロ西肥ノ穀堂古賀氏ガ通議ヲ評スルモノヲ看ルニ、推重特ニ至レリ。德、孤ナラズトイフト雖モ、抑亦賴氏ノ知己ヲ得タルコト、何ゾ其ノ多ナルヤ。予、歆美ノ餘、自ラ固陋ヲ忘レテ、コノ書ヲ評論シ、古賀氏ノ評スルトコロヲ幷セタリ、而モ未ダ其ノ狗尾續貂タルヲ顧ミルニ遑アラザルナリ。

因リテ記フ、先生〔昭陽〕ノ書牘中、頼氏トトモニ外史ヲ揚搉スル文字アルヲ見ル、而モ未ダ片言隻句ノ、通議ニ及ベルモノヲ見ズ。意フニ、先生、未ダ目ヲ經ザルモノ歟、予深ク爲メニコレヲ恨ム。而シテ頼氏ハ壬辰ノ冬〔秋〕ヲ以テ逝ケリ、今ニ至リテ八タビ歳次ヲ更ヘタリ。予、其ノ世ニ在ル日ニ於テ、毎ニ京都ニ遊バンコトヲ欲シ、志未ダ果サズ、故ヲ以テ未ダ頼氏ノ墓下、香花ヲ供シテ、一拜ヲ爲スコトヲ得ズ。

江都ノ人中西某〔伯基〕、通議ヲ上木シテ、コレヲ四方ニ鬻ゲリ。其ノ頼氏ニ功德アルコト、海內ニ於テ無量ナリト謂フベシ。予ガ、コノ書ノ爲メニ、評論ヲ作レルハ、聊亦コレヲ國俗ノ寫經、以テ追福トナセルモノニ擬スト云フコト爾リ。

天保十年己亥冬十二月二十五日、九華・玉〔乃〕惇成識。」

附記。九華、名惇成・字裕甫　別號松雪洞・稱小太郎〔故大審院長玉乃世履ノ父〕、嘉永四年十二月六日歿ス、享年五十五歲。錦水、名倘德・字子容、松崎慊堂ノ門人、明治七年六月廿九日歿ス、七十歲。

好倘　木崎愛吉

通議目次

卷之一

通議目次終

通議　卷之一

賴襄子成　著

論勢

天下之所以分合治亂安危者勢也。勢者以漸而變。以漸而成。非人力所能爲。而及其將變而未成。因而制爲之。則在於人。人不能違勢。而勢亦或由人而成。苟諉曰是勢也。而不肯爲之謀。爲之謀而不因其勢。皆不知勢者也。故勢不可不論。且以外國事論之。周因夏商之勢。分建諸侯。新舊相制。而周以治。其後所建者。相幷成七雄。而合於秦。秦矯周弊。革爲郡縣。而亡於叛民。漢因秦與周之勢。竝立郡國。國止其子弟。而漢以治。及叛國爲亂。乃專削弱之。後不復置。而亡於權臣。晉矯其弊。厚親藩。授兵權。致其交爭。外敵乘之。南北分離。而合於唐。唐因北周之勢。置府兵。制外敵。而唐以治。及兵制漸壞。乃成藩鎭之强。而爲五代。

爲宋。宋矯其弊。收奪將權。兵備太弱。而爲金元所取。元革宋制。務漁中國征賦。而爲明所滅。明因宋與元之勢。專用文吏。置省府。總理天下。而明以治。而亡於內叛。如元。歸於外敵。如宋。此歷代之君。其各爲謀。皆不能不因當時之勢。或有不因而失之者。或有因而不全得者。而其勢亦因而變遷如此。國朝之始。以臣・連執政。以國造・郡司分治海內。有世襲。有否。是國朝自有之勢也。後因其勢。以定其・制。置六十六國之守。選任易置。由於朝廷。如秦宋之郡縣。元明之省府也。置兵團於邊要。更番屯衞。如唐之府兵也。而國守之權太輕。其典兵者。積任不移。世相之臣。專政於內。而世將之臣。竊據方隅。天下分裂。而終歸於源氏。源氏因兵制解弛之勢。每國選武族。爲守護。而總其權於帥府。猶王朝之於國守也。故權臣之橫。亦同於王朝。而加速焉。北條氏簒源氏之權。而仍其所制。武族漸成世襲。乘其失政。一時竝叛。天下亂崩。而終歸於足利氏。足利氏因守護世襲之勢。封其勳舊子弟。不復易置。如周・漢・晉之封建。唐之藩鎭也。而勳臣之力太强。爭權構兵。交相噬搏。最後其雄桀。起而服之者。爲織田氏。爲豐臣氏。二氏皆

因其爭搆始平之勢。建置藩國。猶足利氏之於勳臣也。故其致呑噬。亦同於足利氏。而加速焉。蓋我國之俗。有異於漢土者。故帝王一姓。無叛民得志者。然將相方鎭。迭起司權。其勢數變數成。故前郡縣。而後封建。與漢土之古今相反。而因其勢而制爲之者。亦各有得失之可言。夫王家之一事權於朝廷。以內制外。以重馭輕。得矣。使不恃之而稍重守宰之權。親王之任大國者。不特空名。內常顧其外。有以相忌。則將相之族。未必至專恣。是王家未爲無失也。源氏亦恃帥府之權。而更翦削子弟。以致權奸之無忌。則最失矣。足利氏封建勳親。以爲藩維。得矣。使不恃之。而稍删殺其力。末不勝其本。有以相制。則未必致其爭攫之禍。是足利氏未爲無失也。織田氏暴於删殺。豐臣氏倍加其力。或速反噬。或致跋扈。則最失矣。是故制勢得。則其治且合者久。制勢失。則其亂且分裂者速。速者固不如久者。而久者亦不可恃其久也。何者。所以治且合者。此勢也。而所以亂且分裂者。亦此勢也。勢之於天下。其猶水歟。水之趨而成流。不可遏也。然因其所趨而利導之。汩汩然而來。不患不可爲。當水之欲東也。而西之。當其欲西

以上。恐當置舵字。不然其維持可如何。

也。而東之。皆勢之不可爲者也。從水之所欲矣。而不少裁節之。則亦東抵西觸。其所奔注漱齧。皆足以致潰決之患。故善治水者。從其流。而不專任其流。善治天下者。因其勢。而不專恃其勢。專恃其勢者。譬之順風之帆。徒乘其快。而不有以維持之。不覆舟者幾希。故知勢者。使其本末內外。輕重相適。而無偏重。重者偏於此。則勢趨於此。數十百年之間。日推月移。而莫之或察。及其勢之已成也。欲擧天下之力而挽之。其可遏哉。夫一代祖宗之制。爲其勢。各有其意。知其意而守其制。則可。守其制而不知其意。則不可。且如王家與鎌倉之事。其意在於以重馭輕。強本弱末也。子孫特務輕之弱之。而不達其所以輕之弱之之意。則輕與弱者。極於其輕與弱。而重與強者。極於其重與強。重與強者危矣。何以然。曰。勢也。勢極則變。變則成。如彼漢宋。亦可以見已。故使當時有知勢者。及其勢之未極也。因而裁節之。庶幾可以長持其治安。而不馴致夫分裂。夫及其勢之未極而爲之。則爲之者有權。而出於天下之意外。已極而爲之。則天下窺其不得不爲之勢。而爲之者無權。因其勢矣。而使人不知其因勢。是之謂善制勢也。

小竹曰。不論道理。但論制勢。非孔孟之宗旨。

穀堂曰。勢也者。莫之爲而然者也。所謂善制勢者。在明治體察時變。而先後取舍之而已矣。所謂秦漢以來與我源北條以下。及織豐二氏之國勢。究竅審處。如老吏讞獄。如戰國策士坐而論天下成敗。竊意。目今之勢。滔滔趨下。所謂制勢之時。莫之過也。假使子成端委立朝。將何術以制之。豈未遑論之歟。將有所諱而不言歟。至其行文之起伏囘折。遒宕精練處。蘇家論策之外。拔戟成隊。姑屬之餘事云。

九華曰。治亂皆有勢。今也既以勢治。安知後世不亦以勢亂。山陽賴氏著通議二十八篇。論勢居首。蓋微意所在。寧無制之之術哉。穀堂古賀氏爲之評。曰。竊意。目今之勢。滔滔趨下。所謂制勢之時。莫之過也。是似知其意者。而如其曰。假使子成端委立朝。將何術以制之。豈未遑論之歟。將有所諱而不言歟。何其不達也。既已論之。非未遑也。既已言之。非有所諱也。但其言論尚有所未盡。蓋亦微意所在。故爲是歇後。而欲使覽者有自得焉耳。至其篇末一

代祖宗之制以下二百二十五字。譬諸射者引而不發。吾見其躍如也。而其所謂且如王家與鎌倉之事。豈翅王家之謂哉。豈翅鎌倉之謂哉。覽者察諸。

論權上

君所以爲君者。何哉。曰。權在焉爾。權也者。物所由而爲輕重也。家由此而輕重者。能君於家。國由此而輕重者。能君於國。天下由此而輕重者。能君於天下。天下國家所以爲輕重。不在於君。而移於大臣者衰。移焉而不能復者亡。故自古創業之君。慮其子孫。使權常在焉而不移。其爲法制。不一而足。而列置宰臣。不專任一人者。其最大者也。世之俗儒。乃動援古義曰。相必專任一人。而後可以展其才。使人主或眩其說。則不致衰亡之漸者幾希。吾請。歷舉古今之事以折之。夫秦漢與胡元之丞相。唐宋之平章事。皆以專任。動至橫邪。唯漢光武不任三公。分權於臺閣。朱明廢相。分權於六部。置閣臣視草。得矣。子孫不守其法。故

自失其權也。我王家。古有大臣。後加置大連。防其專權也。然已有入鹿・馬子之禍。後又置左右大臣。分轄政事。又特置內臣。以分其權。如太政官。乃爲官省之名。知太政官事。猶漢之錄尙書事耳。而非皇子不爲之。其後人臣爲之。曰太政大臣者。始於昏主之嬖臣。以一人總諸政。終致王權之移於私門。至於攝政關白。內覽宣旨。皆私立名目。以資專權。非祖宗之制也。鎌倉始置政所。專任別當。後改曰評定衆。以親信十餘人分領之。然其最親者。常主計議。而其權移於北條氏。北條氏簒國。自稱執權。固其所也。而其號令天下。猶因源氏之舊。連署行事。如後世曰加判列者。內管領。乃其私家宰。如後世曰公用人者。非專領大政也。鎌倉之制。可謂密矣。至於室町。乃取王室弊餘之制。置管領一員。專執天下之權。故又曰執權。此以北條氏之所自稱。以冒其臣也。猶王朝之呼關白爲執柄。是豈人臣所當稱哉。其亂亡也固宜。夫政分諸部。管轄而上。總合於一焉。而君以一人操之。是君之所以不可無也。而業已有以一人操之者矣。則無君可矣。有執柄而天子如弁髦。有執權而將軍如弁髦。何足恠焉。今謂相宜專任一

徒法不能以自行。

以經義爲俗說。非明君賢相也。

人。是使後世有弁髦其君者也。雖然。爲此論者。亦有說已。曰。不專任。則將使人臣謂君猜我。非所以任賢也。夫治國。不賴於人而賴於法。今雖皆忠且賢矣。何知百世後。不有横邪者哉。故立之制。使後嗣守之。雖有奸人。不至竊其權。是所貴於法也。法不獨防大臣也。所以保全之也。爲大臣者。知其所以保全我也。孰敢謂猜我哉。況忠賢之心。唯國之久安是謀者乎。故明君賢相。固守舊法。毋眩俗說。則國與家。可以兩全矣。雖然。法必有所以立之意。而法之與意。或有相差者。不可不察也。如織田・豐臣之制。令列宰月次輪直視事。是其意亦在不專任一人而已。然當是人之直。則此人專之矣。同列不得與聞也。則與專任一人奚異。夫列坐而議也。而其任久望隆者。衆以其言爲輕重。而同列唯唯而已。甚則君亦唯唯。毋敢可否。而權移焉。常也。而況併無其唯唯耶。

小竹曰。此亦恐與孔氏異宗。不論知人。而論分權。君子小人混焉而可乎。敬大臣。中庸九經或問詳言之。子成廢古義。卽廢經義也。大臣有一人。有二三人。若唐虞稷契皐陶成周。周公召公。亦不妨爲專任大臣。後漢及明。雖較

周之盛時。齊晉秦楚。不能兼幷。既兼幷。不受制於王卿士。此論恐不通。

異其制。合經義則治。背經義則亂耳。

論權中

天下有權有力。有力者無權。有權者無力。而後天下安。有權有力。所以危亂也。刑政也。法度也。而予奪之者。在我之謂權。土地也。甲兵也。而我擁而擅之之謂力。昔在周氏。王之卿士。執天下之政。而其采地不敵小國諸侯。予權不予力也。齊晉秦楚據山河兵賦之雄。而受制於王之卿士。予力不予權也。至晉主夏盟。韓魏趙三家。有土藏甲。而更執國政。則幷有權力。宜以分晉矣。西漢諸侯王。未嘗執政權。而丞相御史。莫有封土之力。猶周制也。其後以大將軍領尚書事。則亦幷有權力也。而屬之外戚。外戚宜以危劉氏矣。漢之七國竝起。其力足以撼天下。而遂就撲滅者。無權焉爾。唐宋以下之執政者。雖專橫一時。其敗亦不旋踵者。無力焉爾。力者實也。權者虛也。執虛權者。能制實力。而有實力者。能勝虛權。二者其勢相持而不能相幷。而人君得以制其間。人君幷有權力。而人臣則

織田反噬。豈在力哉。

分而有之。是人君馭天下之術也。此術也。非術也。出於自然者也。何哉。虎狼有吻牙。而不能飛揚。鷹隼有羽翼。而不能噬齧。若使吻牙而又羽翼之。幾何其不飛而食人也。人臣而并有權力。何以異此。吾王制。宰執之祿不大。其後多占莊園。引武人爲爪牙。故至不可制。鎌倉以文吏視政。其後北條氏以七國地頭。爲評定之最。故能成其簒。其利弊亦明矣。至足利氏。則管領三家與上杉氏。皆據大封。言其力則諸將莫能抗衡。而言其權則總攝諸政。如山名氏。其力有海內六分之一。而內旨倚賴之。使與管領埒權。則有應仁之亂。終之細川擅京府。而上杉擅關東。豈非并有權力故耶。織田氏之於諸將。分給兵馬。而未嘗予政權。然亦至以其力而爲反噬爭攫之禍。豐臣氏立五奉行。分掌政權。其封土皆不足比外諸侯。然至末年。以封土最隆者。爲大老。不鑒王家與源氏之弊。而襲足利氏之失制。雖出於不得已。不足以爲後世法也。夫當源氏・足利氏之時。使北條・細川・上杉。其土地兵馬之力。不如此之強。則上之人。見其專權之跡著也。出一言奪之。何亂之能爲。卽能爲亂。使其執政權無素。則撲而滅之。亦無難也。如

景時・道譽與義盛・氏清之事。可以見焉。夫王家之有相門。其力不至如源氏之有北條足利之有細川・上杉也。是以雖專且橫。猶不至呑噬其君者。無他。不幷有權力之效也。故不使人臣幷有權力者。明君之所深謀以安天下。而子孫當守不失也。易之則危亂至矣。可不懼哉。

論權下

人主欲不失其權。專防大臣而已。可乎。曰。未可也。人主之專防大臣。而自用其權。權之所以失也。何以言之。曰。人主患其權之移於下也。而己獨爲天下之事。天下之事千萬矣。人主非有千手萬目也。則勢不能不使人。使大臣。則大臣竊其權。使小臣。則小臣竊其權。權一也。竊者有大小之異耳。而大者之姦易視。小者之姦難察。虎之噬攫人也。爪如戈。牙如鋸。其視眈眈然。望而可懼也。可避也。不可避。則可聚衆設機而斃之也。至於狐狸。則其形微。其蹤詭。人不懼不避。而爲之魅而不覺。覺而莫能捕而斃之。是大小臣之辨也。昔在漢宣帝光武。皆中

興英主也。宣帝懲霍氏之專。光武不任事三公。皆汲汲總攬權柄。而子孫皆困於宦寺。何哉。如我王朝之有藏人。始於嵯峨。武門之有奏者頭。始於足利義滿。亦皆非庸主。而充其官者。皆士人。非閹豎之比。然其貽患子孫等耳。無他。其防大臣而不專議事。使己之命令。出外朝之意外。曰。知我密旨者。獨此傳宣之小臣耳。不足慮也。殊不知小臣之竊權。甚於大臣。大臣位貴祿重。不必竊可矣。小臣位賤祿輕。非竊無以足其欲。當爲英明所使。獨不敢肆也。及得庸主。則意態頓異。人主特喜其便慧。非如外朝大臣之可憚也。是以見大臣日疎。而此輩無日不議事。出入之閨闥。狎侍之宴私。任之以我耳目喉舌。而不知我耳目喉舌之變於外。外之羣臣。亦知其位賤其祿輕。而其路要。所與市約。而所欲必得也。則爭趨於此。終得致其權傾內外。雖大臣亦懼之。人主猶不察也。而謂己之權能制大臣矣。或終斥大臣。代以此輩。其斗筲穿窬之心。猶如舊也。以舊之心乘今之勢。何所不至。至以一己之欲買天下之怨。而貽之人主。而不悟。及纔悟。則已以其黨類代己。據其舊位。以箝制人主。及至於此。欲除之而不得也。雖然。是

烏知非。當作二不知二字。哉作也。不然文勢不達。

未足言也。或有其未至此。而大臣之姦猾者。結之以分大利者。則其禍不可勝言矣。如源右將之寵任大江廣元・梶原景時等。後世徒惡二人之佞智耳。烏知非北條時政結之以壞源家哉。右將位至二位元帥。而時政不過遠江守。非不防之也。而一傳而權歸北條氏者。得非防之過乎。結城・和田之屬六十餘人。連署罪狀景時。而傳達之者。廣元也。廣元遷延之。終決於時政。而權移焉。使賴家常見此六十餘人者。而議可否。何有此患哉。至一幡之變。諸將盡黨北條氏者。亦賴家獨與比企能員議事之過也。今夫狡奴猾僕之竊主人之物。必於其室。不於其廳也。於其獨使。不於其衆會也。是故人主專防大臣。而恃小臣防之。所恃以防者。又不可不防。所恃愈近。則所防愈急。甚則房帷之內。枕席之間。盡爲敵國。至死生繼嗣。盡出其私。而天下不與知焉。嗚呼如此。則人主誰用以爲天下之事乎。曰。用天下之人。以爲天下之事。不恃一人也。日視外朝。與羣臣而議政事。是是非非。露其肝膽。絕其猜防隱匿之色。則其忠賢者。益奮勵其志。而大姦巨猾。莫以容計其間。故人主不議事閨帷。而議事朝廷。不常信小臣。而常親

大臣。常親大臣。乃所以防大臣。而持其權於己也。

穀堂曰。余讀論權。有深感者。今權之下移也久矣。自王公至於庶人。其臣僕家人。擅權自恣。而爲之主者。徒擁空器。儽然在上。如木偶人者。往往而有焉。試使其讀茲論。則小知所自警乎。夫權者。存乎其人者也。天子諸侯之尊。權孰加焉。然而。苟非其人。則大柄倒持。而失其所以爲尊也。又有振威恃權。凌虐無道。人思其亡。失其所以尊者。均矣。故夫爲人主者。無惑溺之心。無偏私之行。坦蕩平直。動止中禮。則權無下移之患。不然而徒欲攬主權御羣下。則駸駸墮乎縱橫捭闔之術。人之不服者。將益甚。可不懼也哉。論中論權力處。大有關係。精采動人。上下二篇。似小遜。要之。總非尋常經生家言也。

九華曰。論權三篇。中篇盡善。下篇次之。獨上篇吾未能信也。夫相必專任一人。而後可以展其才。固古義也。賴氏謂之俗儒之陋。而自作說。曰。列置宰臣。不專任一人。是君所以爲君。卽其意謂。古義不合時宜也。不然。聖人之設官。有冢宰。賴氏豈未之知者邪。而其歷擧和漢。以言專任致禍。是指其所弊耳。

苟指其所弊。何法終不有弊。夫蜀先主之於諸葛。秦符堅之於王景畧。專任特至矣、而無害有功、是猶異國故事。所謂不合時宜者歟、吾請、舉本邦近世以示之。備先侯之於熊澤伯繼。肥先侯之於堀君綽。專任特至矣、而無害有功。乃知專任一人。而後可以展其才者。古今一揆矣。此雖小。亦可以喩大也。若夫列置宰臣。不專任一人者。固足以防其擅權。雖然。外則相顧。內則相競。功罪無所歸矣。唯簿書期會是務。而膏澤不降於民。職此之由。且相之擅權。上者廢之可矣。君之不君。下而廢之不可矣。既已有君。復又置相。蓋爲此故也。且君世君。世君而不可必賢。相不世相。不世相而可必賢。既已有君。復又置相。蓋爲此故也。古昔、聖人之設官。有家宰。豈可以後世。而不由之哉。賴氏之見。多出於蘇長公。而蘇長公史學也。其所論。有時乎愆於經義。詩云、維其有是、是以似之。賴氏之謂也。古賀氏評曰。夫爲人主者。無惑溺之心、無偏私之行。坦蕩平直。動止中禮。則權無下移之患。不然而徒欲攬主權御羣下、則駸駸墮乎縱橫捭闔之術。人之不服者。將益甚。可不懼也哉。此雖老成常談

譬恐不切。新樹亦有不可不大者。所謂大邦維翰。

如無精采。自是篤論。

論機上

無非機也。機之在於物。其最大者爲天下。天下者。善動之物也。抑則昂。揚則伏。易於搖撼。而難於維制。維制之於百世之久。而使無搖撼者。必有其機。機之最大而善動者。亦制之以機。機也者。一日萬變。來去無窮者也。而可豫設耶。天下有可豫設之機。天下不知。而爲天下者獨知之。夫爲天下者。謀安天下。而百世不動。莫不欲盡去天下之可疑可憚者。而以可信可倚者。代守其處也。而勢有不可者。於是乎兩存之。不必疑憚彼而薄之也。不必信倚此而厚之也。厚其宜薄者。而薄其宜厚者。以示天下以吾不疑不憚。吾不疑不憚天下。而使天下相疑相憚。天下相疑相憚。則其勢不相合。而我得以制之。是制天下之大機也。夫樹國猶樹木。木有舊樹者。有新樹者。新樹者。必幹小而根薄。而舊樹者。擁腫蟠結。患其擁腫蟠結。有稍翦削之。使可容新者而已。則新者雖處其薄。得以相持

而固。痛鋤甚伐舊者。而厚培於新者。則新者無所庇。適以搖撼而不安。故厚舊者。所以維持新者也。其機如此。此機也。設於不得已者也。天下知其不得已。而不知創業者之乘不得已之機。以設其機。其機之所以不廢也。足利氏唯不知此機也。是故特以出下野者。以爲可信可倚。而分守六十六國之地。地廣而守者少。則皆大其封鎌倉之封擅八州。三管之類。率以一人據四五州。前代舊藩。如大內・大友。可屈指而數。其餘皆勳臣也。列立海內。而無所忌憚。人人驕矜。處之不疑。曰。我天下之諸侯也。其自視非復如在下野時。而其君視之。猶其在下野時。則相顧勃然。裂眦而起。故足利氏之天下。終始於動搖者。其機在於此。織田氏唯不知此機也。是故盡鋤海內之故家大族。可疑可憚者。而以出尾張・美濃者代之。出尾張・美濃者。亦人人無所忌憚。織田之富。未及足利。而其將校之封。或與足利之自稱諸侯者。無大異。故其心殆平視其君。曰。彼亦我之較大者耳。何必臣僕我。何必無禮我。何必讓削我。織田氏之不能維制天下。而後嗣無所倚頼者。其機在於此。足利之克鎌倉。克山名。幸也。織田之斃於明智。亡於羽

柴。非不幸也。皆不知此機之過也。嚮使二氏曉於此機乎。其所封建。新故相雜。犬牙相制。故者必大。新者必小。小者之視大者。不敢比也。自知其小弱。非倚其君。不能自立也。君不必倚其臣。而臣不能不盡倚於君。盡倚於君。則君之勢尊。而其威可以壓天下。天下見其勢威。雖素據山河之大者。惴惴然聽令奔走。唯懼一旦獲罪。而彼驅其羣僕。來誅讓之也。儻使其羣僕與之比肩。與之比肩者也。非其羣僕也。則天下之勢合而我孤矣。故抑之於此。而揚之於彼。彼昂而此伏。伏者所以制昂者。故謂之機也。天下在此機之所維制。是以百世而不搖。而無知其爲機者。苟知其爲機。不可謂之機也。雖然。使此機之抑揚低昂。常如其始設時。而不弛廢失墜者。守機者責也。故守機者。不可不知其爲機也。

小竹曰。聖賢所謂機。一家仁。一國興仁之類而已。其他機變・機術。非所貴也。

論機中

存。藉制姦雄之機。於平常無事之日。使後世賴以持權柄於上。而張紀綱於下。

〔小竹點。下同。〕

者。明君之法爲然。曰。君之馭臣。以誠。不以機。機者。術也。出於詐者也。君以詐術使臣。臣必以詐術邀之。嗚呼。是老生常談耳。使臣猶馭馬。使馬皆馴而善走。走而不踶且齧。則何須彼銜轡。銜轡所以須者。備其踶齧也。舍其踶齧。而獨用其馴者。則所用皆駑也。欲用不駑者乎。則不能無銜轡。有銜轡。而後可以馭馬。有機而後可以使臣。臣之易馭者。概不足用。足用者。概難馭。大難馭者。則必大可用。用大難馭者。而無機焉。是舍銜轡而騎千里馬。未五百里而墜且踶死矣。懼之何如不騎。不騎則馬之才棄矣。故明主愛臣之才。欲不棄而盡用之。是故不可無機。無機則君臣兩傷。有機則君臣兩全。長保福祿。故此機非出於詐也。出於誠也。唯出於誠。故不設之臨時。而制之平日。不施之術。而寓之法。何謂法。在於制官。制官在於宰臣與監察。監察微矣。其勢可以敵宰臣乎。曰。使其勢可以敵宰臣。是之謂機爾。昔者西漢之盛。御史大夫。與丞相大尉。列爲三公。唐之興。使諫官從宰相入對。相臣籍諫官之口。則有天寶之亂。凡唐宋及明。言官重者。必君明國興。輕者君暗國衰。或有目爲宰相私人者。則姦雄得志之世也。我朝

古置彈正臺。以親王爲之尹。資望之隆。與太政官抗。祖宗所以制天下之機。實在於此。至後王。視爲閑曹。充其任者。皆乳臭之人。以風流都雅相高。不足以威震百官。何望其抗衡宰臣哉。夫宰臣下人君一等。以身總百官。百官所懼也。使其忠且謹。猶不保不至橫邪。一遇姦雄。乘可爲之勢。何所不爲。而不爲者在所不敢。使之不敢爲者。必有機焉。如以汗血駃騠。出於空濶之野。豈不欲橫鶩。而爲銜轡所箝也。百官莫不懼宰臣。而宰臣莫所懼。獨懼人君。而人君一人也。宰臣之橫者。必樹黨中外。則誰爲人君之援者。故人君於其平居。預自置其援。使宰臣有所懼。有所懼者。必有所制。有所制。故有所縱而不危。故曰機也。此機存於無事之日。而見於有事之時。動之輙振。故曰。在於立法也。武門之制官。當其事方殷。責在雄傑將帥而已。及事稍定。乃以此秉政事。則鎌倉之執權。室町之管領是矣。而孰不驕驁難制哉。無他。不知置耳目之官以制之也。況封建之世。天下之難制馭者。駢肩而立。不獨宰執而已。不重憲部之勢。何以振肅綱紀。有所維制耶。則如此。歷代之君。可謂無馭天下之機矣。如掌八尺之龍。而徒手臨。

究竟須論君明暗。何必論機。

察君非本篇主意。然自是格言。

之。何怪其騰躍奔迸哉。是故明君必置監察。而重其勢。雖無事之日。內外諸局。出入自如。造膝奏事。不關白宰執。而彈劾不法。不避貴戚藩鎮。豈非有深意耶。雖然。不知其意。而徒爲文具。則如王朝之季耳。不務察大吏。而務察小臣。則如所謂宰相私人耳。則機之馭臣者。臣將用此以馭君。是則係君之明暗也。故均之機也。君明則成其爲機。君暗則不成其爲機。不成其爲機。則雖監察。不能敢言。成其爲機。則雖非監察者。亦能敢言。言路一開。綱目悉張。上下之間。筋脈通暢。雖有姦雄。不敢竊弄國權。不然則何所不至。至堂階之下。君不能知。亂氣憤張於天下。而安然處之。故天下之有言路。如人之有心鬲。開則生。塞則死。生死之機。在於心鬲。安危之機。在於言路。而言路莫大且要於監察。故明君務擇監察之堪其任者。而任監察者。亦務益其君之明。故監察之任。察君者爲上。察大臣者次之。察小臣者又次之。

小竹曰。言路非獨監察所係。然我邦不置諫官。故作者立言。不得不如此。但所謂機者。人君所以御下。而結末以察君言。恐不免支離。

論機 下

國何患。患財不阜乎。曰。非也。吏不勤乎。曰。非也。國家之威權不尊乎。曰。非也。號令不周乎。上之所欲擧。當成而數圮乎。曰。非也。然則無所患乎。曰。有。曰。何也。士氣不振而已矣。士氣不振。在於士則可恥者。抑何關於國。國之所以爲國。以其有士。士之所以爲士。以其有氣。士有氣。而後有以自立。擧國之士。有以自立。則國立。擧國之士。無以自立。則國仆。仆與立之機。在於士氣。此識者之所獨見。而世俗之所嗤以爲迂濶者也。言固有迂濶。而有時而不迂濶者矣。且夫有是國者。非有是國之城池草木之謂也。有是國之士也。有是天下者。非有是天下之城池草木之謂也。有是天下之士也。無士則城池而已。草木而已。有士矣。而無其氣。與無士何異。國與天下之有士。猶人之有手足骨肉也。而士之有氣。猶其有血脈精神也。有手足骨肉。而無血脈精神。是木偶也。列千萬木偶而爲之主。曰。吾有此濟濟之多士。可以無憂矣。孰知有竊顰蹙之者耶。木偶猶曰無用云

爾。士氣之不振。不啻無用而已也。我國之士。勇決尙氣。非漢士所及。故上古直士不乏於朝。節士不乏於邊。所以能獨立而不受外侮也。及至中古。倣禮文於彼。而失我固有之氣。及升平之久。則漸甚焉。吾嘗觀保元・建久之事。深考其所以然之機。非必有暴虐之君與大姦劇惡之臣。所謂士大夫者。無有氣節。所以爲務者。非進官階。則殖利漁色而已。以修飾邊幅爲高。以風流奢侈相尙。上者養尊。而下者奔競。賄賂交於朝廷之間。取之者不忌。而納之者不恥。媮爲一切。不知廉隅節概爲何事。或有慷慨之士。則目爲知古而不達今者也。當是之時。人主以天下之財自供。百吏奔走。所令而從。所擧而成。四顧天下。如無一所患者。而衰亂之機。已伏於其中。豈無深識之士。窺而見之者。而不敢言也。饒使言之。衆必以爲病狂之論。掩耳而走耳。當其平居。冠帶佩劍。立殿陛之上。至下視將吏。不肯相齒。豈不儼然士大夫哉。而察其中所存。與商賈婦人無別。唯然。是以權臣營私。從而附和。兵禍一作。爭先避逃。委天下之患於人主。而無一人出身爲國家者。而伏節死事之士。皆出於其平日之所下視者。平日之所下視者。

君相振。則士氣振。則八條目九經。非迂濶也。

乃起而據我上。我仰其鼻息。而天下一變。天下國家興替之機。豈不甚明哉。鎌倉・室町之一興一替。亦皆決機於此焉耳。故明主之大興其國者。無他術也。務養其士氣。獎鯁直犯顏之士。以爲愈先登陷陣之功者。非有見於此耶。雖然。歷視古今。士氣與國勢俱者也。非人所能爲也。時自有急務。此不必憂之也。籍令憂之。數十百年所陵夷靡蕩者。欲振之而不可。則此說也。終爲迂濶不識時勢耳。曰。不然。雖其方振之時。不有以養之則消。雖其方不振時。有以作之則復。譬若壯夫恣欲逸居。而得癱緩之疾。悟而自治。加以鍼灸則立健矣。是在君相而已。當室町之始興。尙財利威權。而不尙節義。而天下諸侯。又以是足利氏之威無不屈膝嚮之。猶異時之於鎌倉也。是以爭進媚納賂於下野功臣。而足利氏不禁。曰。是足見我威權耳。諸侯務伺上之意向而疾趨之。至更相告語。求不失其寵。天下既一。而其習如故。是故其朝廷內外。以佞諛爲常。士無氣概。細川賴之憂之也。痛禁苞苴。收諸國守護恩典。託於變權而得者。盡停廢之。又置童坊。士之突梯滑稽者。衆呼之曰士童坊。謂士而無士之氣也。以靳辱之。於是乎。士

知所恥。人人淬勵。有以自立。遂以立夫十三世之國基者。是其大機也。則在賴之一撥轉間耳。而謂賴之爲迂濶不識急務。不達時勢者。可乎。曰。不可也。

小竹曰。使讀者爽然。豈謂迂濶。論權論機六篇中。第一文章。然豈謂機哉。

穀堂曰。上篇。論天下大勢。鑿鑿中窾。自非審本朝事典。晰治亂根由者。不能爲此議論。此子成絕技。可與外史諸傳仇觀也。中下二篇。論監察。論士氣處。亦匪夷所思。但如明末御史虛矜洁激。發言盈廷。而終不救於明之亡。如勝代士氣。非不虓闞振奮。而終不救於織田・豐臣之亡。故監察之臣。必生於忠藎報國。而後可也。士氣之可尙。必出於重義守節而後可也。若此。然後無滲漏無玷缺。

九華曰。論機三篇。上篇論制天下有大機。古賀氏爲之評曰。鑿鑿中窾。自非審本朝事典。晰治亂根由者。不能爲此議論。以予觀之。蓋亦今日就跡而立論者。何則其所謂足利氏。唯不知此機也。是故特以出下野者。以爲可信可倚。而分守六十六國之地。地廣而守者少。則皆大其封。是勢已。假使其知此

機。亦不能不然。北條氏臣族。與北條氏俱絕。新田氏臣族。與新田氏俱亡。則前代舊藩如大內・赤松。其可封皆封之。其餘則楠・菊池皆不我從者。如之何其封之。織田氏唯不知此機也。是故盡鋤海內之故家大族。可疑可憚者。而出尾張・美濃者。代之。是勢已。假使其知此機。亦不能不然。如淺井・朝倉。皆與我抗衡者。如之何其得不鋤之。其所謂此機也。設於不得已者也。天下知其不得已。而不知創業者之乘不得已之機。以設其機。此句暗有所指然。而予亦唯知其不得已。而不知創業者之乘不得已之機。以設其機。不見夫豐臣氏乎。其所封建新故相雜。犬牙相制。故者必大。新者必小。夫然。乃謂爲知此機者乎。將爲未知此機者乎。就跡而立論者。其論窮矣。雖然本篇譬諸美人照鏡。非鏡中有美人。則吾形美已。非有賴氏技柄。孰能爲此。此論亦終不可廢者也。中・下二篇論監察處。論士氣處。卽是今日急務。賴氏胸襟平生不平所發。筆端縱横。縱其所之。自成文矣。自成章矣。但其論士氣處。恐世俗嗤以爲迂濶也。丁寧反覆。遂至引細川賴之以爲徵。予因悲賴氏之意。世固可與

言者鮮矣。寧勝浩歎。

又曰。古賀氏曰。監察之臣。必生於忠藎報國。而後可也。士氣之可尚。必出於重義守節。而後可也。若此。然後無滲漏無玷缺。此語的確。非實歷者。不易知。非有用實才者。不易言也。中・下二篇。有此著語。然後可以方行。不然監察作賊。士氣作暴。未見其效。先見其弊。中・下二篇。必有此著語。然後實無滲漏。實無玷缺。

論利上

天下之財。用之天下之事。不應有不足也。而天下每病財之不足。不足者。不於多事之日。而於無事之日。何哉。當彼創業之時。版圖未全。貨幣未周。而征伐營建未息。其倉庫之入。必百減無事之日。而所出必百倍之矣。而今覽其志。加徵民租之政。不載也。裁減士祿之政。不載也。征市括商。籠冶榷酤之政。不載也。及至守成之時。則未全者全。未周者周。而未息者息。其入必百倍多事之日。而其

史學精到。

所出必百減之矣。而前之不載者。相望於其册。是非事之大謬者哉。如此者。觀之和漢。歷歷可指也。源右大將之興。西討東伐。千里餽餉。而北條氏承之。亦數有大役。當是時。未聞其國計告不足也。而子孫一遇元弘之亂。以新田一邑多豪戶。課之十萬貫。其他可推而知也。足利氏之初。課文武邑入。以充軍興費。不過五十分一。至中葉以後。借金於富商。謂之藏役。至義政則借而不返。號曰德政。當時國有大事。課諸侯。助其費。曰大儀。率十歲一擧。至義政。五歲九擧。尊氏・義詮死於鞍馬奔走之間。而義政坐享全盛之業。其顚倒有如此者。豈守成之世。天下之財。有所泄歟。壅歟。蠹於廩歟。蠡於庫歟。夫天下之財。用諸天下之事。猶一家之財用諸一家之事也。一家有父母。有妻子。有奴婢。衣食之需。屋宇之庇。與器物之用。皆仰給於一家之財。主於家者。計其產之所入。以爲用度。比屋皆然。然有用而贏者。有縮者。贏者非必皆富也。新聚之家概然。縮者非必皆貧也。久安之家概然。蓋人之情。新聚則凡事皆從苟簡。久安則漸趨具備。善爲家者。雖處久安。視如新聚。不可無衣。苟足以蔽體。雖無副可矣。不可無食。苟足以

冷然善。

餬口。雖無貳可矣。屋宇足以庇風雨。奴婢足以使。而釜鬲杯椀足以用。可矣。其他可有可無者。斥而去之。如此則一家之財。常用而有餘。以其有餘。備其無虞。可以不至失措矣。不善爲家者。新聚則然。至久安則忘其初。其不可無者。寧精勿粗。寧豐勿歉。至可有可無者。亦莫不然。我不以爲侈。人以爲常也。是以雖其平時。病其不足。不幸遇疾病。死喪。水火之災。不至流離蕩散者幾希。天下之財。亦猶此乎。創業者。新聚之家也。守成者。久安之家也。夫守成之君。驕奢如義政之類。毋論已。卽號爲恭儉者。視諸創業之主。則已侈矣。是豈盡人主之罪哉。習之所成。有不自知焉耳。夫唯英斷之君。能反其初。凡百之事。一切苟簡。如草創之時。斥去其可有可無者。特存其不可無者。而嚴爲之節。何患不濟也。嗚呼。庶人之家。用財無節。以至失產。猶可借貸於比鄰。無可貸之比鄰者。其可不預慮歟。

小竹曰。言近而易行。古人所謂恭儉。不外乎此。吾人亦須置一通於座右。豈獨人君。

興利之害。

除害之利。

引譬明之。

論利中

利可興乎。曰可。雖然不必興也。興利不若除害之爲利也。利興而害從焉。害除而利生焉。故善慮國家者。日求害而除之。而其不善者。日求利而興之。興利者。如投薪救火。適足煽其燄。除害者。如疏水流之。刮其壅。塞其泄。因勢而導之。二者損益明矣。而世之言理財者。每喋喋於興利。某幣可造。某市可榷。某山闢而興礦。某水塡而課耕。凡所以爲是者。由於國用不足。而國用之不足。由於經費無度。不察於此。而徒欲有以補苴之。隨補隨陷。未見其益也。識者則異於此。某繕造爲無益。某供御爲無用。某賜爲濫。某賞爲橫。某官員爲冗。某典某例。自何時始。爲非所宜因襲。求其害於財者。而日除之。積之之久。經費有度。而國用有餘。果有餘乎。則何必擾擾然有所興作哉。夫欲作是事者。必有是人。有是人則有是費。當其始握算運籌。較量得失。無不得其當也。而其終也。所得每不償所失。譬之好色之人。而憂其精元之耗。不先節其慾。而服金石以補益之。不至撓

引史實之。

此轉。人主喜利。利歸於姦人。而怨歸人主。王荊公一生不悟此意。

其藏而涸其髓。不已也。孰與屛藥謝醫。特遏其耗精者。則日夜所息。源源而來。不患不爲強壯之人矣。是除害之說也。在昔中興英主。稱能濟世富國者。莫若光仁・桓武與後三條焉。而未聞其爲興利之政也。光仁・桓武併省官員。汰冗兵而已。後三條屛四方進奉。痛抑奢侈而已。而鬻官之事。見於白河之時。課錢守護之令。發於後醍醐之朝。皆未幾而致衰亂。或暫興旋圮。興利除害之勝負。可以判焉。然後世人主。常喜興利之說。何哉。不唯興利便於己。而除害否也。以除害爲無術。興利爲有術焉爾。夫有術之術。民見其跡。故彼亦以術邀之。彼已知我心之在利也。雖美其名稱以令之。終於廢格不行者多矣。我或陽予而陰奪。扼吭而拊背。以爲天下之至巧。不知彼狡黠者。熟其事而處其便。其術之繆巧變化。非官吏可及。饒使其術行乎。贏餘在上之耳目。而耳目所不及。耗屈不可數。損與怨。歸於人主。而下利其功賞而已。何若無術之術之利國家而無其跡也。則爲人主計。取利國家者耶。取自利者耶。

小竹曰。此耶律公嘗言之實不刊之論。

不可期是客。可權是主。抑末重本。論之醇者。

論利下

國之所以安危存亡者。財也。財之所最重者。穀粟也。穀粟生於地。成於天。而助其生成在於人。天地之事不可期。而人民之力可權。曰水。曰旱。曰蝗。是不可期者也。曰士。曰農。曰商與工。是可權者也。權其可權者。以備其不可期者。治國者之任爲然。不權而使其偏重。不備而使其飢餓。是失其任也。昔之治國者。當其平常。烟火萬里。斗米數錢。家給而人足。不幸遇凶災。公私所儲。足以賑而濟之。雖欲背叛。不得也。後世則不然。海內有殷富之形。而無其實。人之家於都者。日收奇贏。其家於野者。每病不給。穀價動騰貴不可遏。一遇水旱。稀廩竝空。坐視其斃而已。其不羣起爲盜者。幸也。夫昔之歲。非歲歲而豐也。後之歲。非歲歲而歉也。後之生齒。雖加多於昔。昔之土田。加少於後。可知也。而昔食之有餘。後食之不足。是獨何歟。吾嘗觀鎌倉古墟。其廣袤不如後世之一藩府。則他邑聚可以此推也。當時將士。散處各邑。職事長上。其數有限。固也。覽其志所載。有定鎌

虛說。卻是實用。

倉賈人員之令。是在其刱建三四十年之際。以常情視之。當招聚豪戸。以壯形勢。而所爲乃如此。可謂有識矣。其富强非後世所及者。未必不由此。及室町以後。武人淺識。徒見都邑之繁盛。以爲國之富在此。恃其以重馭輕。壓服四外之勢。而不知根本之日弱也。冗官世祿。連甍相望。兼并之豪。列據衝要。無益之工。不急之技。與夫恣爲僧道巫覡者。居版籍之十四。皆徒手食粟者也。是以沈湎游戲之習歲增。槽壚罌醡。殆敵耒耜。歌童舞妓。殆敵耕牛。皆無故靡穀者也。而並聚於都邑。都邑之勢日重。則鄙野之勢。不得不日輕。且夫好逸而惡勞。人之常情也。使勞而飽。逸而飢。勞而貴。逸而賤。而人猶將取逸。況居此。終歲佗佗。而不得自食。居彼。袖手取食於人。居此。比於奴隸。居彼。交通士大夫乎。故舍其末。賣其牛。背於鄙而嚮於都。歲不下百千。而鳩鵠之民。僅守其舊。輕者愈輕。重者愈重。譬若以銖稱鎰。以眇木支大樹也。而可以百世而無危乎。憂之則何爲。曰。天地猶昔之天地也。人民猶昔之人民也。亦在爲人上者所爲而已。誠使室町中葉之君。慨然察於此。藉令不能如鎌倉之時。略辨都鄙之章。限商賈之數。嚴

良賤之籍。定釀酤之程。復古度牒之制。而禁其背於鄙嚮於都。不禁背於都嚮於鄙。自今以往者。在於所限。自今以來者。在於所禁。蕩產之民。願爲農者。官爲稱貸之。薄息而緩取。業商賈者。增其征賦而不得交士大夫。則海內之勢。漸不病偏重。而民力强。民力强則地力盡。地力盡而穀粟不及昔之有餘。而價不至輕賤者。斷無之矣。是所謂可權者也。則其不可期者。庶幾可備而無憂乎。曰。如此者。利則利矣。恐其梗時勢而逆物情。且穀價太賤。或有傷士與農之患。而夫商賈之射利糴糶之間。以爲產業者。將焉爲生。曰然。雖然。豈無可因所謂勢與情而施其術哉。穀價太賤者。官以法少貴之。則士與農亦無傷矣。且當其太貴也。士與農豈有復可鬻焉耶。至若射利糴糶者。猶彼盜鑄私鹽之徒。概姦民幸國之危者耳。姦民敗產。而四民富財。豈非國所以長安耶。曰。後世之患。不獨穀價貴也。諸物皆貴。嗚呼。穀者。財之最重者也。穀賤則諸物隨之。抑諸物所以貴者。亦由於國勢之偏重焉爾。國勢之輕重適矣。而物價之輕重不平者。不也。

穀堂曰。今天下之爲政者。其所汲汲殫精竭慮唯利而已矣。不暇及政刑文

武之事也。然而利未必興。而害已從之。究之彼汲汲乎言利者。大率襲苞苴肥囊橐之徒。絶不知政教之源。不亦可悲乎。論中所曰。興利不若除害。此雖陳言。確不可易。彼頭童齒豁。汨沒乎利中者。子成具一隻眼。以筆硯餘暇。一筆勾之。何其快也。唯在即今下手處。所謂興者未必可全廢。而除者未必可全恃。此非面商量。不能畢其說。請待之。

九華曰。論利三篇。皆的確。而下篇所載擧鎌倉定都下賈人員之令。在其制建三四十年之際。以斥室町以後。武人淺識。徒見都邑之繁盛。以爲國家之富在此。恃其以重馭輕。壓服四外之勢。而不知根本之日弱也。實可謂百世龜鑒矣。中篇論興利不若除害。古賀氏評之曰。此雖陳言。確不可易。但在即今下手處。所謂興者未必可全廢。而除者未必可全恃。是必古賀氏有所見云爾。予亦有一說焉。興利之有害。人既知之。除害之中又有不利。人或未之知焉。興利生事。固當有害。除害省物。固當無不利。而其有不利。何哉。其所謂除害者。言其害於財也。我所謂有不利者。言其不利於士民也。非不利於財

也。凡所施設者。損於上而益於下。亦或有之。以其害於財。一切除之。乃士民則苦矣。且也後世爲政者。大抵唯求其害於財者是除。而不顧於士如何。於民如何。是以利導下也。故在下者。亦不顧於理義如何。於鄕里如何。唯利是務。於是乎廉恥壞矣。而姦僞起矣。夫政也者在立士氣而已矣。治也者在安民心而已矣。然廉恥壞。而士氣不立。姦僞起。而民心險。士氣不立。其謂政何。民心險矣。其謂治何。君之爲君。以有士也。國之爲國。以有民也。士不士。民不民。而府庫充矣。貨財聚矣。乃曰。積以待有用。其爲有用果何事也。

通議卷之一終

通議　卷之二

論官制　上

以一人奔走千萬人。竭其筋力精神。而欣戴於我者。何用而然哉。白刃如雪。飛鏃如雨。進則死。退則生。我指而進之而進。非欲得我祿乎。苦心蹙額。計畫我利。寧萃憎怨於己。而不辭。非欲得我祿乎。簿領之山積。爲我揮汗理之。睽其父母妻子。渴蹶萬里。非欲得我祿乎。我有天下之利權。而天下就我以取之。是以唯我所使。然而有足使者。有不足使者。不足使者。我斥而退之。不肯與我祿。我祿我將蓄以待彼足使者與之。否則彼求無窮。而我祿有限。以有限給無窮。啻而不與。則彼將不平於我。盡與飽其求。則我情見形屈。而權廢矣。是唐・宋・明・清之所以有科擧也。科擧譬若聚羣兒而擲一菓。擲者不費。而拾者德之。不拾者不

彼我各有弊。

封建之世。

王家。

藤氏專國。

得怒也。我國無此法。而仕者世祿。如人供一膳而守其殘餘。有更求者。不可與也。而人不敢不平者何哉。其勢與俗異也。彼有恆言。曰。王侯將相。寧有種乎。如漢高帝・明太祖之輩。其所稱爲聖人者。其實皆大盜之得志者耳。已擅天下之利。而不與天下之才共之。則天下立叛。我則異諸。王有種。侯有種。將有種。相有種。非其種者。莫能爭之。至封建之世。則更甚焉。天下大小之臣。皆有其種。而其祿概世之。某族爲某官。某家爲某職。以其年勞。次第而進。如演傀儡爲戲耳。雖然。其風俗。上忠厚而下朴靖。比之彼之刻薄爭競。則有間矣。彼之弊。如氣體暢榮者。肆酒食。冒風寒。或得暴疾。我無此病。病在壅滯偏枯。亦不能無漸衰不救之憂。雖我王家。亦嘗慮及之也。報功之祿。有大上中下。多者不過田百町。非大功不世襲。吏有考課。視其才否。又有三十階位・十二等勳。以助於祿。及藤氏專國。其族類常爲卿相。天下莊園。盡爲所占。而非上之恩。除吏以資例。如彼元魏之貴門地。用停年格。及其衰極。將吏自棄於邊疆。橫肆不忌。而朝士有才。沈滯下僚者。走仕之。爲之謀畫。以傾朝廷。而移其權。又如魏朝之不逞者。盡爲高宇

疏通之譬。

疏通之術。

之用。則壅滯之潰裂也。至武門戶國。汗馬血戈之勞。必以厚祿報之。傳之子孫。勢不得如王制。然鎌倉二氏。未全有天下之利權。是以猶節而予之。而受者莫不欣勸奔走。至於室町則全有之。故分祿太濫。受者不德。以爲當然。又以其質魯。所以使其臣者。止於祿。無爵以助之。其國之衰絀。與王家同病。而更速其斃者。始無其慮爾。夫壅滯之爲病。數十百年所養成。欲變化其體。雖神醫不能爲。獨有疏通之而已。人之氣血。貴周流上下。當其少壯。莫不皆然。所以無病。及其老。則上者亢而不下。下者滯而不上。則偏枯不遂矣。夫國亦有壯老。善觀國者見其老。則疏通而運動之。可以復壯矣。當夫創業。進才而退不才。祿不患不足。至守成之久。則不才之祿。不可退而奪。而才者不可不進而祿之。進而祿之。則亦不復可削。遞而加之。國何以支。故至君幸臣之亡。而臣欺君以謀存。安在其爲忠厚朴靖也。國之有官。譬若家之有器。庋廚箱篋之類。久而覺不周於用。更置新者。新者久則亦廢。廢陳之物。纍纍盈屋。而新置之費不貲。漢土之使人。棄陳置新也。我之使人新陳竝置也。今欲變而從漢法。斷不可爲矣。又不當爲也。

獨無可就其陳者而修理之哉。明諭之曰。汝父祖。皆嘗有功於國。當與國終始。雖然。汝寧可徒然居之。宜各磨淬。以給上用。吾將不次用之。人君亦自思曰。吾所以有此利權者。祖宗百戰之力也。吾寧可徒然居之。自勵精盡心於用人。自擇大吏。大吏各擇其小。破其門地與資格。唯其才不才是視。不時召見。多方試之。試而可使。則加其祿。試而不可使。則削奪之。自非祖宗之所祿。我予我奪。誰得齟齬。進一人而千萬人勸。退一人而千萬人懼。費於我者少。而達於彼者多。又就素有之職銜。假其名而虛其實。立其等級。以酬其勞。則亦爵之類。足以助祿之不足也。是之謂疏通之術矣。使王家及室町之君有悟於此。則數升之祿。片紙之文。足以運動鼓舞擧國之豪俊。不然則已有手足而不可使也。

小竹曰。申韓口氣。然疏通之說。實可施當世也。

論官制　下

以馬上取之。何事詩書。是漢祖所以拒陸賈。武人之見。莫不皆然。賈則曰。馬上

主張質實。而惡文縟。則其言不詭於正。然豈以馬上治國哉。

以下則馬上治國之弊。

治民之職。不可不勸。格言不磨。

之法。不可以治天下。而後世儒者祖述焉。吾常以爲儒者之說不可從。馬上之法不可改也。自古國家之衰。莫不由子孫視草創之制。以爲質略。改從文縟。自隳其紀綱也。昔在貞觀・延喜。其禮文。豈不周備。然有以萌衰亂焉。室町之中葉。謬倣王家未造之制。亦蹈其敗矣。後世武門之制。軍國一致。文武不分。有古人寓軍令於內政之意。是國勢所以常盛。改之則衰。吾知其必然已。故曰不可改也。雖然。所謂不可改者。以其便於國爾。或有不便者焉。則不可不察也。國之處戰也。詳於治兵。而略於治民。專於催科。而遺乎撫字。是以牧宰之任。在校尉之下。不直屬執政。而隸之度支。掌支配軍須。率以能軟不勝用者充之。任之者。人以爲辱。故一任或終身不得代。至襲之子孫。其員少而其祿微。以一人攝數十鄉。取多供糧餉而已。爲之屬隸者。亦員少祿微。催租督稅。雞犬不寧。民之釜鬲日竭。而官之倉廩未必實也。是猶飢烏鳶之腹。而縱之烏雀之羣。望其不攫搏難矣。夫士之官於國者。莫不以是官爲榮也。以是官爲榮則勤是事。勤是事。則見是效。於是乎。有超擢遷進之望。不止是官也。今已以是官爲辱。不得已而任

竟是執拗。

之。勤與惰。效與否。無損益於己。而終身於此。此其勢何所望哉。人唯有所望也。然後可以責其廉。可以責其恥。可以責其撫民而益國。不然而責之。責之者過也。且夫國論之所尙則曰。富國而已。無以民爲也。國之所以富者在於民。無民。是無國也。所謂提封幾十萬。幾百萬者。非出於民而何出乎。如夫戰國之時。攻擊四出。固有不暇撫民者。然能收流亡。務耕耨者。足以强兵而制敵。而況非戰國者乎。昔及王國之末衰且亂也。國守品秩。雖不甚貴。然考課之法。勸勉之意。常最於諸官。又置使觀察之。其功效著見者。擢爲卿士。故當時名臣。多出於國守。受其任者。莫不自淬勵以澤民結君爲務。而爲公卿者。又閱民事曉下情。所以治也。及至其後。依門地遷敍。視國守爲賤有司。以致民心不親乎上。而國權移於下。可不察乎。縱令不能超擢遷進如古制。所以慰其心而作其氣。未必無其方。昔鎌倉之興。以平賀義信善牧武藏之民。手書褒賞。令諸國守護。當以義信爲法。爲義信者。寧不以爲榮。諸吏於國者。寧不爲其所鼓舞。彼有大將亦非以馬上得之者耶。

小竹曰。奇論驚人。子成不獨去陳言。幷厭陳說。故時有若論。

穀堂曰。上論。揮霍頓挫。而文法井井。立意的確。下論。馬上語。用翻案法。屹不可動。此子成長處。余嘗論。本邦官制雜糅。名義混淆。莫此爲甚。安得遣右文之化。而論定官制。各職其職。而無紊亂哉。論中未之及繼應揚摧。

九華曰。論官制上下二篇。上篇揮霍頓挫。而文法井井。立意的確。下篇馬上語。用翻案法。屹不可動。此子成長處。古賀氏所評。亦有眼矣。然而馬上語。屹不可動。是客。其論牧宰之任。在校尉之下。是主。覽者勿錯認主客。而上篇以唐・宋・明・淸之有科擧。對之我公・侯・相・將。及列國士大夫。皆有其種。各擧其弊曰。彼之弊。如氣體暢榮者。肆酒食冒風寒。或得暴疾。我病在壅滯偏枯。亦不能無漸衰不救之憂。譬喩允當。殊可翫味也。予因謂。有官有爵。和漢通制。至幕府代政。而有官無爵。非無爵也。爵不與官。離官遷爵。從猶無爵也。以其功勞遷之官。才非其所宜。不遷之官。則孰能無倦。故爵者助官者也。不唯助祿也。在昔。徂徠物夫子。詳之於政談。而肥先侯試之於事實。人才各得其所至。

患田之不均。欲因今法而變通之。即是井田之活法。

今肥人以誇之外人云。

論民政　上

儒者之談治道。動輒曰禮。曰樂。曰學校。曰井田。是可言而不可行者也。吾嘗歷觀彼二十二代之史。其志禮志樂云者。皆行於喪祭。而不行於平時。行於朝廷。而不行於民間。則惡在其所謂移風易俗也。饒令行之。其摘擗之容。澶漫之音。誰能樂而爲之者。或有興鄉痒黨序。申孝悌忠信之敎。吾知其欠伸而逃避也。其無實效也如此。故曰不可行也。至如井田。則不可行之尤者矣。漢・唐君臣。非無欲復經界者。彼之秦・晉・梁・楚。夷坦平曠。不改三代之舊。而猶且不可。況我之地形。腹背隆而首尾窄。方邪迂直。籌之至難。分之至煩。褫有餘而授不足。怨讟紛起。禍患立至。是所謂聖人之制。用以速亂亡耳。故曰尤不可行也。然田法之不均。民數之不詳。國計之所由贏縮也。非如禮樂學校之無損益於國。故尤不可行者。不可不尤加意焉。唐因混一之時。計田授民。最爲近古。而吾平安之制

是則定論。

取焉。民之丁者。皆有口分二段之田。五戶相保。一人爲長。五十戶一里。里有長。六年一造。檢其加減。其均且詳如此。自王政之衰。縱民私賣買田。私邑寺封。混淆其間。守介之令。有所不及。而田法始壞。戰爭相踵。無復明制。至豐臣氏。町畝丈尺。一變古制。而田法再壞。不復均矣。兵亂初平。流亡未復。雖有帳籍。不必檢校。監管之法。分付僧侶。而民政不復詳矣。富戶占田數十頃。而窮戶或不及其十一。勢力相役。如奴僕然。而里正鄉長之類。或以一人管數十邑。權重而情苟。其不均不詳極矣。若使豐臣氏有願治之心。輔以有識之士。而乘其幷呑之勢。官地命吏。私地命各主。饒使不能如口分戶籍之周。師其意而變通之。豈無可爲哉。及其既定。則不可復爲矣。後世儻有不達變者。欲革焉而行古法。使人主或聽之。必亂天下。夫計民丁授田者。田盡在官。故可爲也。後世田盡在民。而民與田不相離。於是視田之在民者稅之。不論其多寡。而井田廢矣。秦以後是也。隨民之有田者稅之。不問其丁中。而口分廢矣。唐中葉以後是也。其不均不詳。漢土已然。而更宋・元・明・清而不能革者。以其便爾。至我之後世。何獨不然。故官

今之便。

今之弊。

知某邑某里稅額幾何而已。其民之多少貧富。與田之廣狹肥瘠。不必問也。特督其稅如數則已。或不如數。責其正長。有貧而積欠者。使賣其田於富者以償之。富者益有餘。而貧者益不足。於是。不足者。每借有餘者之地。以食其力。有餘者。每借不足者之力。以治其地。交用相濟。而併入其獲於官。雖其不均不詳之至此。其爲法也。亦可謂簡便也。若使如古之官田。其授受之煩。勸課之勤。官盡任之。而民之勞逸相濟。必不能如今日。儒者每非今是古。殆不察於此爾。然則今法盡無弊乎。曰。非然也。官未見其不均不詳之弊耳。民之賣買田也。賣者。苟免今日之流亡。而買者預計後日之詭逃。故有田狹且瘠。而稅重者。有廣且肥。而稅輕者。其價貴賤。亦因致錯繆。不可推覈。姦吏猾胥。左右鬻利。罔乎上。漁乎下。而官受其弊矣。有田者不耕。耕者無田。無田者務吝其力。而有田者不能糞其地。肥者少獲。瘠者汙萊。而官又受其弊矣。皆生於不均不詳也。欲救此弊。抑亦難矣。古法之不可行則毋論已。欲稍均其不均。詳其不詳。亦不得不大發令遣吏。理圖帳。稽民籍。民必以爲官之搜遺利。而無容足之地也。必騷擾生變。如

名言。

至此則孝弟忠信。非可逃避。

是子成所不欲言。然不得不言也。

彼之稅法。陳歷代之田制。歸恤今之民。實上人者之藥石。

豐臣氏檢奥羽之田。而速民叛。可以見焉。夫爲政。貴因不貴革。治民貴簡不貴煩。苟使君相願治之心。誠實孚物。大小之吏。盡體其心。則因其舊而加之意。要使貧民不至流亡。富民亦不破其產。田野日闢。汙萊日理。不患不均。不患不詳。而國計贏矣。國計苟贏則上不厲民。民知仁義。先禮後食。鼓腹擊壤。不必作學校禮樂。而學校禮樂之實效見矣。蓋實效者。必以誠心得之。苟無誠心。雖有善政。亦不可行也。

小竹曰。井田不可行。古人往往論之。至拜禮樂學校廢之。則太甚矣。

論民政 下

租稅之法。周取十一。秦取十五。漢初取十五之一。文・景之際。取三十之一。觀王莽所言。則漢之取。其實十五。雖其言不可信。亦非必三十取一。可知也。唐因魏・周之制。定租・庸・調。丁男一人。給田一頃。出租粟二石。則近於十一矣。及其經喪亂。民多流徙逃籍者。不復問其丁中。視其見在資產。而歲再收之。夏收麥。秋取

此段之稅法。如其畝。然乎。

米。謂之兩稅者。宋・元・明・清。因之不革。大氏重於十一矣。國朝倣唐制。其計田。曰段。曰町。大約町如唐之頃。段如其畝。以二段給一丁。每段獲稻五十束。舂得米二石五斗。以町計之。得二十石。而官取一石一斗。視唐減大半。則是二十而取一也。而水必蠲。旱必蠲。凶蝗疫厲必蠲。而數免逋欠。史不絕書。大凡中葉以前之志。冊冊皆如漢文帝紀所載。其後蓋不能盡然也。及鎌倉置守護於正稅之外。每段取糧五升。而租始重矣。及足利氏。天下田租。盡輸武門。而其取之之式。不可概見。蓋愈久而愈重。至織田・豐臣氏。則六民而四公。重於漢・唐。而近於秦。較之王家爲十倍矣。而水不蠲也。旱不蠲也。訴凶蝗疫厲。以爲欺上也。何況望免逋欠乎。甚則有預防其耗。每苞多幾升者矣。王制所謂一段。爲三百六十坪。豐臣氏削其六十坪。坪蓋方八尺。又縮爲七尺强。後人因又縮爲六尺强。而仍收一段之稅。王家之永祚。豐臣氏之促亡。判於此而已。抑亦有勢使然者。古郡縣之世。四海一王。食租衣稅。用度有限。其不得已者。如桓武營宮城。征蝦夷。非世世而然也。其餘之靡財者。非後房內寢之飾。則宴遊服玩。修繕賜予。皆得已

而不已者耳。及至豐臣氏之時。封建成治。帥府城池之大。輿馬兵衞之夥。固什倍古之王京。而諸藩國之建。規模雖有小大。皆什倍古之國司。則其費用之廣且大。什倍於古。是亦有不得已者。故租賦之重。什倍於古。亦其宜也。抑所謂重者。租而已。漢有算賦。魏・周有戶・調。而唐有庸・調。國朝亦然。已租於田。又庸於人。調於戶。後世唯有其一。宜其重也。然鎌倉軍興之制。有興役。有公事。至室町。一石之田。課之百錢。又役其身。不役者。日收十錢。及戰爭已息。則不必然。然民之居邑聚者。亦有地子錢。如漢之算賦。其沿驛道者。亦不免驅役。予直太少。而妨農太多。民之廬舍田中者。收其租準田。又有邑役者。邑有興作修繕。又課之民則不爲無庸・調也。但國有大役。則官給直傭夫。爲非古之比。然課之諸侯。諸侯亦各課之民。古制。歲役民止於一日。不役者。折出庸布。庸布一丁成端。調布四丁成端。服役者免庸。服役過三十日者。租・調共免。其取之輕。而又不並取。如此。後世寧能如此乎。抑雖租之重。一斂之而已。不同夏秋再收者。然民之服耕者。概佃人之田而已。田主所收。率每段八斗。已奉於官。又奉於私。則與彼兩稅。無

大異也。且彼之兩稅。率以錢納。兼庸・調也。我已有如庸・調者。而租之重。等於兩稅。豈不可憫哉。由是觀之。如織田・豐臣之取於民。雖曰二十倍王制。可也。吾邦之民。不生於古。而生於此時。何其不幸也。夫民終歲暴露泥土。而所獲升合。不得自食。一鬻之麥。雜以草芽木皮。以爲仰事俯育之資。而吏呵責其逋欠。鞭撻從之。雖遇水旱。不肯諒恤。民剜其肉。竭其膏血。而不能償焉。則有流散死亡而已。君之有民。猶木之有根。掘壓斬伐其根。以求木之榮華。無是理也。使人主苟有曉於此乎。則焉得不少息其肩。以養其力也。而不能然者何哉。曰。有不得已爾。嗚呼。吾恐其得已者。廣且大於其不得已者也。

穀堂曰。民政之不可不講也。公田與藩國。租稅懸隔。措置異方。至其僻境窄地。則槌髓浚膏。道饉相望。艱苦流離之狀。有若所謂石濠吏垂老別者。是臨民之官不可不知也。民者邦之本。先王所重。莫過焉。其於治道。關係綦重。上下論根。究弊由瞭。如指掌。何物子成。未嘗預撫字催科之事。而得之於山紫水明之間。子成書齋號曰山紫水明處。故知傅巖之說。渭水之呂。俄出而爲王者相。初非

猾猾學爲官而後爲之者也。措大眼孔。小判儒吏爲二途者。實醯雞之見也。九華曰。論民政上下二篇。聯璧連城。然予則下其上。上其下焉。上篇涉處置。下篇唯空出。何以上其下也。夫民事尙信。未見信。雖良法不行也。已見信。雖拙政可施也。使民心深信上之所施。皆出於濟己之誠實。則何事不可行也。但其當任者。大抵精幹之才有餘。而哀矜之情不足。立功之心有先。而撫育之思不切。此其所以壞也。夫見赤子之將入井。何待仁人君子。而後拯之。雖行路之人。皆怵惕焉。乃寫其赤子之將入井狀者。下篇千百二十餘字。所謂一字一淚。一句一哭。至如其曰嗚呼吾恐其得已者。廣且大於其不得已者也。則呼天一聲。心腸寸斷。古人有言。讀諸葛出師表。而不墮淚者。非忠臣也。讀李密陳情表。而不墮淚者。非孝子也。乃讀賴氏論民政。而不墮淚者。豈得爲志士哉。有志之士。實不可不圭復。而賴氏於政記末結。復申是論。而彼更有切於此。宜參看。嘗聞。有一雙玉。形相同。色相同。而價不相若。從側視之。厚有倍焉。予於本篇上下亦云。

論內廷

事有如雷霆擊。如山岳壓。如江河決。而莫之能禦。天下奔走駭汗。雖有士大諸侯。寧破其家壓其國。而不敢不奉令。而或問此令何從出。則如捉風捕影者矣。問主吏。主吏必曰。非吾所知也。問宰執。宰執必曰。吾未曾與此議也。問人主。人主必曰。吾未曾命此事也。豈非天下之恠哉。而如此者。自古有之。人習不察耳。昔者。三善清行論仁明朝後房內寢之飾。過絕前代。雕文刻鏤。窮極華麗。朝造夕改。天下之費。二分而一。夫天下之費。二分而一。是弊蠹之莫大者。當時名公卿列朝者。何不一言匡正之。而使至於此。仁明之紀。美事盈冊。此事漠然。是吾所謂恠也。蓋此令之出。不經外朝。而直稱內旨。雖其事曖昧。而不敢詰問。其情然也。大凡奢侈無益之事。必起婦人。婦人唯取美麗可娛耳目。而天下之費。臣民之困。則與己痛痒不相關。而所居之地。挾人主。以爲奧援。凡所欲爲。皆可矯令出之。以資攫竊。而大吏莫敢牴牾。牴牾則禍不測矣。二者久而成習。承以諂

訣。戚以請謁。終至牢不可破。其中又有老其局嫺其事者。當時戚里擅權。鉗制人主。蓋用此輩。以爲耳目爪牙耳。漢土有宦官。毎蠹人家國。而不可除也。亦以挾人主。張威福。而稱其性陰賊險狠。與婦人似。今是眞婦人也。而其貪婪無厭則甚焉。何則男女之樂。子姪眷屬之娛。與閹人異。蓋有家稱金穴。富比人主。亦有過閹人。無不及者。弊蠹之端。未可知其所究也。下及源平之際。藤原兼實結丹波局。以計固寵。此輩爲大臣所畏。據苞苴之源。自昔如此。建武之業。隳於內謁。天下之亂。五十餘年而未已。是不待言也。且如足利義政之時。課費於諸侯。頻煩什倍前代。天下困弊。萌應仁之亂。當時非有大兵役大興作也。何以困供億如此哉。觀當時所記。室町之甍。至費六十萬緡。是主將所居。雖奢猶可恕也。高倉第障子一間。直二萬錢。是主將母所居也。奉於母厚。孝也。然烏知非母所居如此。妻所居亦如此。羣子女所居亦如此哉。記者特擧一端所見。以概其餘爾。夫甍必用六十萬緡。障子必用二萬錢。所謂號令天下。不能違者也。豈尊氏所定乎。義滿所立乎。不特尊氏・義滿無此例。雖義政不必發此令也。是所謂如

捉風捕影。而天下諸侯。破其家。匱其國者也。當時喧言者。必曰。畠山氏之供障子也。然。今斯波氏何不若焉。細川氏之供甍也。然。今山名氏何不若焉。是不敬也。或有言其無益。則與不敬同科。是其所以不敢詰問。不敢牴牾也。且甍未必有六十萬緡之實也。障子未必有二萬錢之實也。今夫利而飽其中者夥焉爾。故諸侯有破家匱國之費。而無尺寸補於主將。是何爲者哉。義政不足恠。以豐臣太閤之英明。末年惑於嬖妾。至窮極奢麗。抗敵正室。天下諸侯。隱然樹黨相軋。則與應仁無以異。應仁記稱。當時夫人及乳母尼媼之類。乘內宴之間。賂聞而遂行。進退諸侯。易其繼嗣。如反覆手。然。已而天下桀驁之人。以此藉口。敢擊斷無忌。而大亂塗地。夫不敢詰問。不敢牴牾者。常也。然常不可恃也。不敢之極。則敢者出矣。噫可不懼而預治之哉。

〔此編係臨歿命筆。所以小竹無讀評〕

九華曰。周之興。觀之於關雎。周之亡。兆之於瞻仰。興亡皆自內廷出者也。詩亦有之。刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。內廷實德化之基也。先是諸建言

者。未嘗有言及內廷。今至于賴氏。始論內廷。可謂獨見。然其所言則止於奢侈無度。與婦寺長舌以加警戒而已。而如其防之之方。無一句也。何哉。凡事制之於未發者易矣。禁之於已發者難矣。而制之於未發者。在乎禮與敎焉。然賴氏家學。曰法。而不曰禮。曰政。而不曰敎。且內廷之事。必於隱而不於顯。則政與法。勢有不可也。夫禮敎也者。儒者常言。而爲吏迂濶。賴氏厭其常言。而避其迂濶。別布一陣。旗幟立變。則使吏卷舌矣。雖然禮豈儒之禮乎哉。敎豈儒之敎乎哉。乃聖人之所設也。賴氏外禮敎而建言焉。能致遠。抑亦禮敎。爲吏迂濶。豈得行之於今邪。是賴氏所以外此而取彼歟。亦時勢所使然也。

論市糴

利權之在國。無常形也。或貴或賤。因時而變。何者。民之資用。有豐乏之異也。民之資用。有豐乏之異者。則生物之本。有凶穰之變也。爲政者。幷國之利權而操之。慮民之資用而備之者也。民操利權而不知禁。其困資用而不能救者。惡在

主意。

此句不能解。

其爲政也。世之無遠慮者。無若小民。同一穀粟也。當其穰。視之如糞土。有食而盡之者。有需以爲日用器服之資者。至其凶。則視之如珠玉。欲食無可食也。欲鬻無可鬻也。豪民之黠者。取之其糞土視之時。而予之其珠玉視之日。因其緩而百減之。而乘其急而百倍之。海內津要之地。皆有黨類。千里相報。捷於烽燧。視晴雨之候。揣低昂之應。先機射利。莫知端倪。爲國政者。惡得坐視而不之禁耶。故古聰明之人立之法。曰。穰則貴取。凶則賤予。所以準平時價。裁節物力。使農與末皆無傷也。吾不必遠引魏人與漢人也。且如我王朝。京師有穀倉院。諸國公廨。有不動穀。遇米價騰踊。則減價糶之。後置常平司于東西市。賤賣官米。以濟飢民。鎌倉・室町之世。有能行之者耶。苟有志於行之。雖國勢有異於古郡縣時。而揆而施之。上令下傚。詎有不可行也。當穀之太賤也。不必三舍一糴二。糴一也。稍貴於時價而買之。當其貴也。不必以上中下熟之價也。稍賤於時價而賣之。民亦觀其利。無不率趨矣。且其糴之也。不必止米粟也。雖雜穀。視其價賤者而糴之。其糶之也。不必待歲飢價貴也。紅腐陳蠹。不可久藏者。量時而糶

究竟歸於節用。雖老生常談。此外無眞經濟。

之。或運諸乏且貴之地而糶之。以所糴之穀。爲所糶之備。以所糶之錢。爲所糴之本。操其輕重斂散之權於上。而運動伸縮之。庶幾可以濟民乎。民覩其所以濟已也。可以久行而不廢矣。且黠民之取予焉。曰幾千石幾萬石者。概虛聲而已。今收其權於官。官之所號稱。皆見在實數也。誰有舍其實而趨其虛者哉。則彼竊弄利權。翕張小民者。不禁自解矣。有便法如此。而不知施焉。可勝惜哉。雖然。假使有欲行之者。吾知其難也。何哉。此法非官帑金錢有餘。則不可。古者。量入以爲出。用度之外。猶餘數年之積。故無行而不可。民蒙其利。而其終。官亦有利也。後世則量出以爲入。官之用度。猶有不足。況能貴糴而賤糶。有濟於民哉。夫已不能貴糴而賤糶。則或將賤糴而貴糶。是特能操利權。而不能慮民用也。則商賈之雄耳。民謂上意之在於自利也。則不肯趨之而吏之幹其事者。挾上之威。或結於豪民。以陰資攫竊。上下共無所利。而徒飽其中矣。是欲興一利。適生一害。詎若不行之爲愈乎。嗚呼。是治國之所以貴於節用也夫。

小竹曰。論市糴。不說民之濟否。而說利權之所在。納約自牖之意。然此編不

論及今之所謂相場者何也。

穀堂曰。糶糴之利害。商賈能知之。而士人則懵焉。所以姧吏猾胥接踵而罔其利也。但使治國者。常有餘積。操斂散之權。則姧猾之徒不得乘其弊。而歲之荒歉。小民不至於轉溝壑。是緊要之論。治國者當圭復。

九華曰。爲政者。不可與商賈爭利。亦不可使其權不在我也。自使穀粟之價。定乎商賈之口。而爲利者。併其權而操之。是所謂虎傅翼者也。飛揚食人。不爲惡語也。自爲利者操權。而後有年。未必凶。民已告饑饉。而況於飢歲乎。貧弱轉壑。豪民抃舞。何其不均之甚也。有心之士。不能無慨於此。

論地力

世之言富國之策者。何哉。曰。多方殖金錢而已。天下之事。有時有非金錢所能濟者。國之所以爲國。以有土地爾。以有人民爾。二者萬世而可賴者。就焉爲計。豈爲無策哉。國之貧富。由於地力之盡否。地力之盡否。由於民力之聚散。無古

不可。恐可不。

今。一也。古吾王國。建口分之制。計地以布民。計民以分地。地無有不耕之民。民無有不可耕之地。及至後世。生齒之繁。應什倍於古。而倉廩之積。或不及古者。其故寧不可知耶。古制之不可復。則姑無論可已。習俗之所見。重金錢而輕米粟。貴商賈而賤農民。而征賦之徵。每苛於所賤。而緩於所貴。是以有田之民。舍其田。無田之民。舍其業。游手浮食。居國籍之大半。民力之未聚如此。唯然。是故僻邑遠地。不能無汙萊之處。生穀之土。捨於山林。而無之或墾也。逋逃之餘。水旱之後。爲荒蕪。爲菹洳磽确。而無之或復也。地力之未盡如此。欲國之無貧。其可得乎。考之古制。以田野之治否。爲守介之殿最。至百姓流亡。十人以上者。解見任。無他慮。民散而地蕪也。元正朝議。以民戶漸多而田地窄也。課諸國墾闢。凡發役所須。皆備官物。給粮食。令各郡國司督役。得良田一百萬町。當時陸奧・出羽。未全入版圖。每叛出師。其費不貲。而未嘗聞困於供億者。豈非是之效哉。夫一百萬町。以町得二十石計之。則是得二百萬石也。天下公民之積。在常數之外。忽增二百萬石。其爲利不亦博乎。而何從得之乎。地力之所蘊。而用民力

豪民恐不肯出其費。小民不肯出其力。然使之出費出力者。亦必有道矣。

地力之所不盡。大抵山邑僻地。使小民游手安於僻地。其法如何。

發之也。使其蘊而不發。則是舍二百萬石而不用也。後世之地。古之地。依然也。所蘊未發者。蓋不可勝言矣。以生齒之數如此。而不足以發之者。不得其術耳。夫小民之失業逃籍。變爲游手。而未定其產者。在在皆是。而豪民之財。亦多欲稱貸假息。而未得其當者。誠得熟民事。曉地理者。徐規畫之。募豪民。出其費。而募小民。出其力。約之以幾年之租。盡捐與之。至與所出財。相倍稱而止。則出財趨耕者。皆奮而來聚。則不煩擾而成矣。成之後。以爲官田。而佃游民作之。可也。或用以業豪民。而收其租。亦可也。是之謂聚民力以盡地力。庶幾可以積倉廩。不讓於古矣。可以使百萬之兵。坐食而無憂矣。富國之策。有踰此者乎。曰。後世之患。不在地力之未盡。而在地力之太盡。不在民力之未聚。而在民力之過聚。則此策恐無所施耳。曰。不然。自田制籍法之不明也。農不地著。而縱意所之。唯其所安之地。則雜沓駢居。山陵邱阜。無不耕者。尺寸之地。不得更休。而其所不安。則雖膏腴地。捨不知耕。卽知耕。憚其興舉之費與租賦之急。而不敢措手。所謂號稱開墾興利者。亦就其雜沓駢居之處。以計增區區。是以海瀕河口。歲增

田畝。而山僻之邑歲減。減者之不察。而增者之見。乃謂太盡而過聚。亦溺於習俗之說耳。且夫習俗之說。則必曰。不有漕運者乎。鎌倉之興。諸國兵糧。各仰其地之入。而東北最多穀之地。未歸其手。非盡八州之地力。則何所賴乎。而豈恃漕運哉。但彼足利氏處京師迫蹙之地。不得不仰近畿西國之運也。應仁之亂。七道兵民。集且鬪於府下者十餘年。糧餉乏絕。以畠山義統屬東陣。通北地之糧。而後纔得以平定山名氏。漕運之不可恃也如此。吁乎。是地力之所以不可不盡也。能盡地力。所以壯國力也。

穀堂曰。僕來往山陽者。無慮二十餘度。而由舟者三之一。周覽藝備防長之海濱。島嶼之地。開墾無遺。稻麥菜茹。青黃如畫。可謂盡地力矣。至於九國。則大不及。若我西肥。尤乏開墾。蓋民俗之勤惰。相距霄壤。以致有之。此論於我頂上一鍼。當思所以施之之方。庸詎識數十年之後。不有我肥盡地力如藝備諸國。然後叩子成之門。而拜賜者邪。

九華曰。論地力一篇。多少福田。賴家子孫。可百世無飢渴矣。諸侯之寶者三。

土地・人民・政事。爲政者苟存忠義之心。則於此篇。寧能漠然閣之。而如其曰後世之患以下百八十七字。此一段議論。殊屬緊要。古賀氏評。僕來往山陽者。無慮二十餘度。而由舟者三之一。周覽藝・備・防・長之海濱。島嶼之地。開墾無遺。稻麥菜茹。青黃如畫。可謂盡地力矣。予則山陽人。而未嘗一度涉藝・備境。則安知其間三四封國。果能盡地力否。但古賀氏由舟中所覽。海濱島嶼。開墾無遺者。卽賴氏所謂就其雜沓駢居之處。以計增區區。是海灘河口歲增田畝。而山僻之邑歲減者。亦未可知也。雖然其歲增者。於其歲減者。則其利當倍。倍未必不可也。抑亦其歲增者。在衆目所見。而其歲減者。在一人所不知。然其衆目所見有限。而其一人所不知無限。且國勢貴人與土相稱。使其偏重欲傾者。無遠慮者之所致也。

論水利

利莫大於水。而害亦莫大於水。天下之利。以粟爲本。而粟無不生於土。土之所

以能生粟者。資於水也。一日無水。是無粟也。故自川而澮。而溝。而遂。以爲灌漑。天下之田皆然。然而淹潦之降。或決或溢。至數千萬頃。頓爲不毛。流離之餘。不可驟復。其爲害有如此者。則是天下之利害。盡萃於水。水其可不治哉。然欲興水之利。先除水之害。水之爲害。有出天時者。有生人事者。夫辟高就卑。行其不得不行。赴其不得不赴。是水之天也。水之常勢也。任其天。順其常勢。水固不能爲民害。唯夫不順其勢。而加以私智。以人逆天。所以生害爾。或欲便漕運也。塞其順流。使徙近城邑。或欲興田畝也。增其岸而隘其流。塡其菹澤。奪水所旁洩休息者。束其入海之口。使其委殆狹於其原。或山之旁川源者。肆赭其木。使沙土崩下。日淤其流。或置堰柵。不得地勢之宜。適使水激而抵衝他岸。或合其當分者。以增水怒。每霖輒決。或分其當合者。以弱水力。下流日淺。每霖輒溢。是皆所謂生於人事者也。雖任其天。順其常勢。而加以非常淫霖。滿川之量。不得不旁溢。卽不然。經歲月之久。河身海口。不能無沙淤。是亦水勢之自然也。所謂出於天時者。是已。吾嘗讀淸和紀。以秋霖鴨河暴溢。敕禁民請河旁地。穿渠墾田。

凡田爲堤害者。公私皆廢。是察水害之生人事者而禁之也。又嘗讀紀氏所私記。承平中。歸自土佐。至津口。溯而入京。敍其牽舟艱難。然則沙淤之患。出於天時之不得已。自古既然。然而淀河漕運之利。至今未廢。則知其固可以人力治也。而況其生於人事者乎。夫生於人事者。誠能知其非水之天。則反焉復其天而已矣。不必求他術也。但眩惑於利。貪戀尺寸之土。而不察得失之相當者。不能斷焉耳。至若夫出天時者。則不可不求其術也。後世之稱善治河者。概峻其隄防。是術之拙者也。蓋我邦獨立海心。其梁脊高。而四下漸海。雖稱平地者。所謂四下之裔。稍遠者耳。天下之川。皆出梁脊中。紆回兩山間而入海。其勢險。其節短。故其水力。自刮泥沙。不至淺淤。不必待隄防。而無決溢之患。視諸西土治水者。尤易爲力。唯其裔稍遠者。多因斥鹵。以爲都邑。水至其地。險者稍變爲夷。短者稍變爲脩。而日淤日淺。且因斥鹵開田。務爲拖淡洩鹹之計。則上潤下浮。其土脆鬆。泥沙愈淤。加以霖雨。不能不決且溢。然則不獨出於天時也。隄防之說。於是乎起。然而其患未止也。則謂隄之猶卑矣。每加其峻。數溢數加。水底殆

高於平地。是猶築墻而蓄水耳。何若濬而浚之哉。浚之者。雖曰人力。猶爲近於天。增堤之一尺。不若浚河之一寸。苟使海口之形。稍卑於上流。則其餘不必用人力而濬矣。何則彼夷者。復其險。脩者。復其短。而泥沙之在河身者。不能勝順流之勢而獨留也。是其費少於加堤。而功則倍之。是浚之之說也。其次無若牐而洩之也。審視地形。就其厚堅之地。多穿股渠。等其淺深。作石牐其口。以時其蓄洩。雖有非常淹潦。可以分殺水怒。不致大害。此與彼分宜合者。常則能弱水力。霖則不能殺水怒者。其亦異矣。是二說者。不特以除害也。古人有因浚河。取泥淘沙。以布磽确者。有因作牐。等其蓄洩之程度。用漑新畬者。凡此類從其地便宜施之。可使未生粟之土。亦生粟焉。則水之利。庶幾可興歟。

小竹曰。古來所難議者。條達明鬯。非胸有成竹。則誰能與之。苟能用此議。則害除而利興也必矣。

轂堂曰。水利。莫大於支那之黄河。古人之論。如聚訟。我邦人視爲秦越人之相視肥瘠。無復有留意於其間者。至於我邦水利。比彼絶少。所謂海內三太

郎之類。非無決溢之患。然而未聞其論晰利害者也。但諸侯浚河之役。費用浩繁。如自今豪富獻金。濬伏水坂港。不知其果保永遠不淤塞否也。至於所謂天時之害。不豫爲之防。而氾濫陷溺。不可勝數者。是備患不周之所致。不可不速求其方。以盡其力也。於是乎。隄防之害。餬口之利。有司者有以主張其說。則其益於人也。必鉅矣。

九華曰。論水利。委曲盡矣。如其見我邦地形。以爲兩下屋。曰天下之川。皆出梁背而入海。其勢險。其節短。乃得其綱領矣。不然。我邦無神禹功。自上古至今日。二千五百年。水未嘗逆行氾濫於中國者。其可得乎哉。抑亦水皆夾兩山。曲曲爲流。下流必不能無淺淤。於是諸治水論興焉。然而引西土黃河。以論我治水。所謂割雞以牛刀者也。雖然如其自下流而浚之之說。彼此一般。大小莫違者也。嘗見鳩巣室夫子對治水策。亦復引彼論此。而古賀氏評曰。諸侯浚河之役。費用浩繁。如自今豪富獻金。濬伏水・阪港。不知其果保永遠不淤塞否也。此何言也。雖有十白圭。不能使其果保永遠不淤塞必矣。唯當

以時施功而已。因謂。泉水在山。宜疏通使無壅塞也。不然仆木崩石。遮欄其下。水脈支離。爲回爲伏。而平日如無害。五六月際。淫霖鬱蒸。駕之以非常大風雨。山鳴巖壞。飛流數十里。城郭田圃。爲之一洗。世人以說蟄龍飛躍者。大概皆是也。

論錢貨 上

古今錢貨利弊。可兩言決耳。曰。規民利而造。則官亦利。規官利而造。則官民共不利。何以言之。彼錢幣者。非天下之寶也。所以疏通天下之寶也。何謂天下之寶。曰。米穀也。布帛也。無之則饑。無之則凍。若夫錢幣。有之不飽。有之不暖。故穀帛不可一日無。而錢幣可百年無。可百年無者。官何汲汲於造之。而民何汲汲於獲之乎。曰。以穀易帛。穀不可合勺分也。分則耗矣。以帛易穀。帛不可尺寸裂也。裂則棄矣。而數石之重。數匹之大。不可輙轉齎焉。則彼不可一日無者。或將不給也。若夫錢幣。可析之分厘。而資日用。可藏之懷袖。而行千里。輕以轉重。微

以輸大。以通有無。以疏滯聚。民是以汲汲於得之。民汲汲於得之。是以官汲汲於造之焉爾。唯然。故造焉。以規民利者。足以制天下之貨權。造焉。以規官利者。不足以制天下之貨權。姑以西土之事歷言之。彼周之大錢。秦之半兩。漢之白金皮幣。三銖赤側。王莽之二十八品。孫權之當十錢。共廢而不行者。蓋皆欲懸虛聲欺民。以增官利。或官之奢侈極而國用竭。於是淆雜他物。以益見數。以薄爲厚。以小爲大。則是以無用爲有用。而欲藉威强行之也。民始受其欺。中覺之而勉强從之。終乃斷不用。至此雖以威强而不可行。官之所造。終歸於無用而止。規利而不得利。不足怪也。彼漢文縱私鑄。宋神宗弛銅禁。似仁而有弊。武帝乃收銅於官。非三官錢不得行。周・宋之主。亦嚴銅禁。皆似貪而有利。蓋或非利於民。或非必利於官也。唐・宋・金・元造交鈔。數寸腐爛之紙耳。是以無用爲有用之甚者也。而官民竝被其利者。本出於規民利也。宋季・元末。有交鈔之弊。而至明・清。鈔法終不行者。漸規官利也。吁乎。果孰利。孰不利耶。曰。雖規民利而造焉。盜鑄僞造之弊。終不能止者。何也。曰。此亦規官利之心未絕也。何則官之鑄造。

欲用物與力少而得幣多。故或輕薄其體。或淆他物。所以致此患耳。苟不愛其物。而精緻其製。如漢五銖。唐開元錢之類。則民知工費與利不相當。誰敢冒死爲之者。官已絶規官利之心。而民猶盜且僞。則自甘刑辟者矣。斷而誅之。庸詎傷。曰。錢也。鈔也。共不規官利而造也。而錢輕物重。鈔輕銀重之弊。常不能止者。何也。曰。此則非規官利之咎也。物與錢。鈔與銀皆如秤衡然。此輕則彼重。此昂則彼低。非人力所爲也。權也。而無不可制也。錢多而易得則物貴。於是。設術。斂錢於官。以準平之。錢纔昂則物輒低。鈔多而易得則銀貴。於是。設術斂鈔於官。以稱提之。鈔纔昂則銀輒低。是亦權之自然也。雖然。此非虛聲雜物。侵本銀。抑糴價。屢革擾民者之所能也。唯規民利者能之。其造之之始。已有人力與自然之異也。其自然者。可以自然制。故準平稱提。有能定民心。其自然者。不可以人力勝。故威强禁令。無能行官志。是和漢之同轍者矣。我鑄錢司之制。不可得而詳。如中世以來。後醍醐。中興之天子也。造交鈔而不得行。徒駭天下之耳目。而煽延元之亂。武田信玄。割據之雄耳。爲金幣而行於國中。雖四外之民。或便而

用之。至豐臣氏。大制天下之幣。亦不得不因其規摸。蓋用錢幣於民。以夫可百年無者。易於不可一日無者。非耶。而民利之者。何歟。知金銀銅之可珍貴也。其於楮鈔。亦知其爲本銀之券而珍貴之也。故因其所珍貴者而爲之制。故謂之自然。淆珍貴以粗賤。或舍珍貴用粗賤。而欲以威強行之。故謂之人力。嗚呼。後世之造錢幣者。不以人力而以自然。則彼天下之貨權。雖坐而制其輕重。可也。

小竹曰。此議人人知之。不能。然而數改鑄者。由奢侈甚。而用不足耳。

論錢貨　下

有以無用費有用。以無限耗有限。而不察焉者。是古今大弊也。夫金銀銅。宇內精英之所凝聚。百歲而生。千歲而成。其地疎。其體眇。非如菜楮魚介之歲歲而可擷。處處而可種也。古明智之主。知其可利於我民也。極人力而採之。陶而鎔之。等其形摸。子母相權。行之悠久。使大小之民。用爲交易於海內。轉大運重。挑滯散聚。莫不資於此。此非有限有用者乎。及至後世。奢侈成習。器用服佩。以及

〔初作通元寶。〕
當作元通寶。
〔刻本卽作通元寶非是。〕

宴遊戲玩之具。往往銅造之。金銀飾之。加之寺塔佛像以莊嚴雕鏤相尙。施及齊民每增一戶。輒加一龕。造此以爲業者。所在皆是。甚則至銷其已爲錢幣者爲之。此非無用無限者乎。嘗考之先古。雖我邦五金殊絕萬國。然開闢以還。數百年而未發也。至天武・元明之際。始因得銀銅之貢。置鑄錢司于京。融通其利於海內。未聞其費之於他事也。及聖武得金貢。不以爲民用。而謂之佛感。尋銅造大像。又置國分寺。然後上下競倣之。如白河法皇。至鑄大小像三千有餘。極其靡耗。而錢之用衰矣。嘗觀古幣之存於今者。如元・明之和銅錢。精好純雅。不減唐開通元寶也。而寬平・延喜諸錢皆瑣屑薄惡。有衰世之風。宇多・醍醐皆明主。厲精爲政。造錢不當至如此。豈非以前世銷銅之夥。發掘採取。凋竭根本故哉。至其後。蓋因互市。得宋錢。而用之於我。我不復鑄也。至室町之時。明永樂錢盛行於我。亦襲此故也。夫郡縣之政。地著之世。其金錢之用。未盛也。猶且不免此患。而況其不然者。可不慮耶。雖然。所謂既費且耗者。猶存於海內。自若也。向使英明剛斷。如後三條者。永其世。而施其政。察彼無用無限者之爲弊。必有以

嚴禁之。雖習俗之成。不可驟回。徐出明諭。革之以漸。無不可爲也。凡器用之飾。禮制之不得不備者。代以骨角毛羽采色。足矣。燈燭盆盂。民用之不得闕者。以陶足矣。佛像及器。民情之不得不存者。以木石粉澤之。足矣。凡嘗用金銀銅以爲佛像及器者。官盡購之。銷爲錢幣。造此爲業者。官資之改產。或因以爲官工。伺察犯者。則上下共享其利矣。而彼采取之繁急者漸舒。而滋息壙中者。可繼也。是增有用者。以養有限者也。或曰。銷器用以爲貨幣可也。至銷佛像及器。以爲錢。雖其利甚博。或有錢賤傷賈之患。曰。錢賤則傷賈。物賤則傷農。農之傷。國之害也。賈之傷。非必害國也。且夫此錢與物。竝在海內者也。制其輕重斂散之權。豈爲無術哉。而術所以可施者。亦由銅工之禁嚴而得焉。苟弛其禁。縱民銷鑄。而無知其泄耗之端。則雖欲制之權。有難施者矣。雖然。世更有泄耗之大而不察者。又未可知也。當我市易彼宋錢也。宋蓋弛其銅禁。不察其闌出海外也。苟使察而禁之。則吾之不利。乃彼之利也。至於近世。則彼國用專資於錢。歲鑄鉅萬。而其錢非得我銅質劑之。則不可造。我苟察而禁之。彼之不利。乃我之利

也。嗚呼。安得明古今利弊者與極論之。

九華曰。奢侈風也。錢貨塵也。風起塵揚。是今日時勢也。苟不制奢侈。則盡天下山。而掘得金銀銅。亦不能一朝不散也。況於銷佛像及器用。以爲貨幣者乎。況於改造貨幣。以益見數者乎。賴氏論錢貨。有上下二篇。畢竟不及制奢侈三字矣。抑亦制奢侈三字。發之於口舌。雖易。而施之於事實。極難矣。物夫子送岡仲錫序曰。江都諸侯所家焉。而諸侯之祿。大踰百萬。而小萬石。以百數。而其士以春秋從之。來代者歲數十萬。各收租其國邑。而揮金江都之市。昇平成奢。靡麗日上。六十之州。不瀕海者僅十。舟帆如飛。萬里須臾。海內之貨。何物勿東。此民之易爲生。未有甚於是者也信矣。是以游手無賴之徒。自西自東自北自南。皆輻湊於此。奇技淫巧。惑人心術。以資己口腹焉。是欲其不奢侈。其可得乎哉。且如其寫其游惰嬉戲。而曰江都爲大都會。周・漢・唐・明所不能及。則此俗亦古今所無也。讀之益見其奢侈難制。亦益見其不可不制也。當時已如此。況於今日乎。世之勢有不復同焉。然則爲之如何。無乃首

篇論勢在焉乎。然其尙有所未盡也。覽者須察其微意所在焉。因謂。士庶人家。父子兄弟。分產別居。則費用倍他日矣。何況以列國之君。兩處爲家。隔年移居。其多費可知矣。今日海內。於錢貨。如孺子慕父母。宜矣哉。

通議卷之二終

通議 卷之三

論法律

律者律也。律起於累黍。至於旋十二管。而不容少差。微之至。嚴之極也。而謂之者。則在於人。故不知律之意。而徒賴律之文者。不可與論律也。世之論刑法者。無不言制律爲便者。吾未能盡信也。吾嘗推究古今和漢之制。周之五刑。稱其屬三千。雖不詳所犯何罪。時承二代之弊。其文已不勝密。可知也。其後蓋浸廢不用。鄭鑄刑書。晉造刑鼎。革而從簡確也。然當時猶有譏其啓民僞者。至魏李悝。刱作法經六篇。曰盜賊囚雜具。因有二類。漢蕭何加以戶興廏。合爲九章。魏・晉稍更加之。至隋承宇文氏法。而唐因之。定爲十二。曰名例・衞禁・職制・戶昏・廏庫・擅興・盜賊・鬭訟・詐僞・雜律・捕亡・斷獄。其用刑五。曰笞・杖・徒・流・死。宋・元亦因之。

及至於明。重釐正之。五刑仍舊。而律分其類於吏・戶・禮・兵・刑・工六部。故分戶婚。爲戶役・昏姻。分鬪訟。爲鬪毆・訴訟。分廄庫。爲廄牧・倉庫。分職制。爲公式・受贓。裁定其目。爲四百六十條。較之前代。頗爲簡該。故淸亦率因之不革。而世之談律者。專誦法焉。其曰准以皆各其及卽若者。讀例也。曰加減計通坐聽依從竝餘遞重但亦稱同者。解訣也。是皆一出一入。爭在毫釐。而決其生死者。蓋歷世所因革。雖有增損。概世愈降。文愈密。猶十二律生八十四聲。積十七萬之實。其勢然也。如我王朝。律書殘缺。不可詳。然考之令與格式。猶可推知。亦不過倣唐律。稍删潤之。唐卽明之所因也。則使世言明律者。倣而制之。亦如王制而加密焉耳。自刑政之歸武門。其所制置。無可徵者。獨有北條氏式目。而不過戒飾之詞。乃令之極簡質者。非律類也。爾後數氏。隨時制宜。無有定制。更相因襲。以至於近世。而世方以制律爲說也。夫制律之所以爲便者何乎。無律令之立。斷罪處刑。概因比例。非必有明據。吏之論擬。或以意上下。而民之耳目。無所向準。小惡漏其網。疑案難其結。苟制一定之文。可以使吏有所憑。而民有所避矣。然律令

古人所謂律是八分之書者。亦以長吏姦長民僞也。此議自確矣。

之作。作於彼之叔季。故其文煩苛。或文簡而義密。讀例解訣之屬。雖老獄吏。未易通達。蚩蚩者。寧能悉諳其所謂令者而避之哉。及受刑。或有茫然不自曉其何犯以得此擬者矣。使其既通且諳。則吏之貪墨者。必舞其文以鬻其利。雖有詳讞。不能盡詰。民之黠者。又持其長短。巧設遁計。鬬於錐刀之末。則是律者。增吏姦而長民僞者也。便乎。不便乎。夫古人制律之意。果何在哉。豈非欲犯情與所擬之允當不差乎。然民之情無窮。而律之文有限。以有限而待無窮。雖如蠶絲牛毛。有不能盡者。是故饒使制法。其究不能不任於人也。苟得其人。所謂心誠求之。雖不中不遠者。猶簫笛雖不備。得解音者操之。固愈不解者也。何必盡賴於律也。且使制律之果爲便乎。我見行之法。五刑無笞杖耳。而流與死有數等。其意大同。但未立其目耳。自名例至斷獄。意亦大同。而歷朝斷例。簡易明確者。按録輒擧。或逢疑獄。博諮可決。但未著其文耳。著其文。立其目。則不能不至密與苛。至密與苛。則增吏姦而長民僞。是究其說。終歸於贅而已。蓋我邦氣運。未至如彼之澆季。上下之俗。忠厚朴摯。刑不上士。罪人不孥。凡此類非彼所敢

望。是以中世以後之法。質略簡易。濟以武斷。然國勢宜之。民情安之。卽囘視前倣唐制者。如不若後者之便者。雖織田・豐臣之猛酷。而其文罔之密。則未甚也。其用刑。或有以割據之制。而用之混一之後。以爲容姦之地者。亦未見其有大弊。國勢之不貴文。而民俗之易治。可以見已。以如此之俗。而施如彼之法。吾斷知其不相稱矣。夫樂之律。準四海者也。而風氣之異。古今之升降。不能無小變。刑之律。寧不然耶。

小竹曰。所謂其究不能不任於人。亦確言。初卷論權曰。治國不賴於人。而賴於法。與此矛盾。

穀堂曰。古者之五刑姑舍之。讀明淸律。而有凌遲夷族之刑。本邦之極刑。莫過於磔・焚二刑。而其非常之刑。乃有鋸頸釜煎等事。然此非世所常有。比諸西土。極寬厚矣。所論制律之非。極屬卓見。夫當今之獄吏。虎而傅翼。舞文弄法。姧黷殘忍。不可窮詰。究之法之立。自非簡易明白。若漢祖約法者。未易遵守也。故刑法之條。雖無凌遲夷族之虐。而其冤毒無辜。蔑棄三尺。莫所不至

矣。嗚呼。安使典獄之官。能曉刑律之意。而聖世無顲天之民也。予成此論。爲秋官者各書一通。寘諸座右可也。

九華曰。世之言刑法者。皆制律爲便。予亦以爲然。獨賴氏不欲制律也。如其曰律之作於彼之叔季。故其文煩苛。或文簡而意密。讀例解決之處。雖老獄吏。未易通達。蚩蚩者。寧能悉諳而避之哉。其然。豈其然乎。孰有欲以其老吏難通者。而強之於蚩蚩者。悉諳而避之者哉。曰。及受刑。或有茫然不自曉其何犯。以得此擬者矣。其然。豈其然乎。孰有欲使其受刑者。自知其於律文。何由以擬此者哉。但使其心服。其刑斯可矣。曰。使其既通且諳。則吏之貪墨者。必舞其文。以鬻其利。民之黠者。又持其長短。巧設遁計。則律者增吏奸。而長民僞也。便乎。不便乎。其然。豈其然乎。使其果能通且諳。則實有其害。然其必不能通。必不能諳。則何增吏奸。而長民僞之有。此段賴氏難詰。卒爾聽之。雖似有理。少渉思議。總屬空論。而況於我所謂制律者乎。素不欲如明清律。其文煩苛。或文簡而義密。唯制一定之文。以使吏有所憑。而民有所準而已。何

增吏姦而長民僞之有。刑法苟無一定之文。則賴氏所謂概因比例。非必有明據。吏之論擬。或以意上下。而民之耳目。無所向準者有之。其爲害。豈小小哉。何在乎其便不便。而其以意上下輕者。猶可至其有均犯一法。未十數年。前者死。後者免。後者死。前者免者。夫刑法也者。非唯爲其人一人設之。誅其人一人。以懲其他千萬者也。其不可不一定者。未有大於是者。如夫死於後者。抱怨恨。無論已。雖爲免於後者似有恩德。爲千萬人發之僥幸之心。旣發之僥幸之心。其得罪者滋多。其得罪者滋多。豈刑法之意哉。以今日無禮樂之世。律者不可不制。亦不可煩苛。斯爲善矣。

論訟獄

訟獄者。人主之所以服天下之心。天下之心。所由以去就也。天下之人無小大也。服其心。則我法行。而我威尊。不服其心。則法壅而威墮。故古之聽訟斷獄者。不畏强禦。不侮鰥寡。務服其心而已。欲服其心。在於體其情。欲體其情。在於自

降而近之。我王朝刑律。雖倣唐氏。其聽斷之制。自有家法。列聖不改。每昧爽出御。百僚陪位。設案置箱。受民投訴。有司以次奏陳。羣議而取裁焉。有可疑者。直召訴者審之。或及日昃。卽朝堂進膳。事畢肯入。其降而近之。如此。是王法所以行。王威所以尊也。中世以來。人主不親聽斷。設虛椅。聽羣議。藏人傳達之。是其所以壅且墮也。後三條置記錄所。親聽民訴。所以能中興。後醍醐。亦擧其故事。而憂勤不終。所以旣興復廢。武人爲天下。唯北條氏。能致少康者。以泰時・時賴之盡心於聽斷。而其致亂亡。則由於高時之委嬖寵縱貪墨。人心之所去就。豈不盡在於此哉。源賴家逢訟田者。以墨界圖中。似息爭也。足利義敎署管領廳凡訴事者。奉狀後。十日出對。過期勿聽。似防壅滯也。然其不足以服人心。可以見焉。至於織田公。矯室町婾惰之習。豐臣公戒飾五吏。莫以私害公。皆能以服天下於一時。而其不務體下情。不降而近之。以貽天下之弊者。則不可不議也。蓋戰國之習。攻討爲急務。聽斷之事。委之數有司。遠者委之各地尹。大臣不必審之也。况望人主之親聽乎。而所謂聽斷。徒以威折服之。以强爲斷。非實能服

擇人二字。而

其心也。當其選任者。概視資格。或起於紈袴。而遽幹劇務。體尊勢孤。則不能不倚賴於吏。吏往往生長曹中。諳練其案簿故事。其位賤祿薄。而其於民近。是以予奪是非。概以賄成。而長官袖手傍觀之。卽有強幹精明之人。欲釐革其弊。則議彈倒起。生仕途之梗。是以游移遷延。推諉於後至。而翹望於前陞。至視官曹爲傳舍。偃然監臨。仰吏之成而已。至於訴者之心服與不服。概乎不省也。不獨吏也。徒亦然也。徒之尤賤者。其權尤要。閭閻小民之游手。而交通非類。狡慧而善徼訐者。官因爲耳目。以資發姦擿伏。爲吏之爪牙。勢每相結。擿民之陰私。而市其厚利。官知其弊。而不能去也。何則以其不可少也。所以不可少者。以其近於民。而洞知其情也。近於民而知其情者。此輩爲最。其次爲吏。其次爲長官。又其次爲大臣。以吏與徒。爲不可少。則長官可少也。長官已可少。則大臣又可少也。乃至於人君。亦未必不可少也。可不思歟。然則如古之王制乎。封建與郡縣。治體自異。則有不可行者矣。雖然。不可行者其制也。可行者其意也。藉不親聽。猶使大臣審之。藉不使大臣審之。猶使各長官親之。君與大臣謀。常擇其人。必

聽訟之道盡矣。不獨聽訟。一部通議。其要在知人耳。

視能勝其事與否。誠勝其事乎。久其任。而責其成。褒其效。而作其氣。使展其廉明之政。嚮之以爲不可少者。進之可也。退之可也。擊而去之可也。苟不能然者。其人不勝事也。則人君之進退之。亦如之。宿弊之革。蓋不待終日矣。凡爲民上者。盡視徼之疾於風草。天下之人心。服而就之。曰君眞不可少者矣。則其法行而威尊。什倍他日必也。雖然。是語其小者耳。至大者之爭訟。則不可委之各長官。又不可委之大臣。而傳達聽之。必親聽斷之。如夫足利義政之聽於奏者頭。以定斯波氏之嗣。而受山名宗全之詬罵。則自墮其威之甚。而不服天下姦雄之心者也。

九華曰。物有本末。使士氣有振。使民心有向。是其本也。聽訟斷獄。是其末也。然後世爲政者。大抵忽其本。而務其末。是猶泉源溷濁。而欲其清流。不亦難乎。士無禮義。無廉恥。民無所不至。於是乎。訟獄不得不日繁。訟獄日繁。於是乎其聽之者。亦不能無心厭之。心厭之。於是乎其未訟者。士民姦僞。知爲不知。而唯聽其已訟者。唯聽其已訟者。復又不卽斷之。知爲不知。故姦僞增長。

不即斷之。故訟者難訟。於是乎。從以爲計之佳者。而不省其姦僞增長所由也。雖然後世政事。唯在財利。其以聽訟斷獄。爲政事者。較之爲愈。欲使其務本。亦難矣哉。

論兵制　上

兵不可廢於天下者也。而天下之費。莫大於兵。故古寓兵於農。無事則耕。有事則戰。謀其不費也。而民一人。兼耕與戰。或致田蕪而兵無食。是以分之。農力耕以養兵。兵力戰以護農。兵與農不相兼。而有以相濟。其法最爲便利。而其弊也。兵坐食而驕。不可用。兵愈多而農愈困。其費於是乎大矣。是不可不察也。國朝上古文武一途。農無非兵。及至中古。倣唐氏制。特置兵團。四分每國之丁。而取其一。衞京戍邊。一年而更。邊疆有事。下尺一之符。調發沿道。數十萬兵馬立具。事止則散歸卒伍。未嘗列屯坐食。當是時。未見兵之費也。及王政弛廢。將帥世官。兵士世隸將家者。自號武士。而鎌倉以後。以武人充諸國守護。每畝課糧。

非復舊制。雖然。其兵皆地著。亦未見其費也。至足利氏起東國。而開府京師。諸國武士稍離故土。就其將帥。隨而轉徙。天下之兵。漸不地著。至織・豐二氏之時。數更將帥之封。常聚其兵於城府。其不地著者定。而天下之費。始不可支矣。古者養兵者。常慮其費。而後世不知費之由於養兵。是古今之異勢。而莫之或察者也。蓋國朝雖倣唐制。近衞兵衞之士。不過七八百。獨衞門倍之。又非如唐之府兵。耕田自給也。不耕田自給。則取糗糧於農。故少其數。而不使常屯聚。簡點爲兵者。止於丁壯。老則免籍。故不至以困農也。鎌倉雖變其制。兵與農相雜。當其無事。親畜牧樵蘇之勤。有事。各齎糧而起。則正如唐之府兵也。及足利以後。兵與農異處。極於織・豐之際。而其所謂兵有士。有徒。有卒。卒之點補能免有時。而徒以上。一給其祿。襲之子孫。有事有役。又倍給之。故其自處驕矜。與鎌倉之兵大異。況於王制乎。困農之厚。以爲當然。而不知己之爲兵。乃如唐季與宋之驕兵。但其君臣世契。習尙廉恥。非如彼之喧譟無賴。觖望易叛耳。然至其窳弱不可用者。恐不異也。夫以一小藩之兵。猶倍蓰古之六衞。而常屯坐食。推之天

下。未知其幾何。又其將帥。歲來衞於府者。不下數百。其率士徒。不下各數千。絡繹道路。而雜沓邸第。通而計之。成數十百萬。是歲歲而興數十百萬之軍也。不獨應仁之役也。不獨西伐島津。東伐北條也。而國何以支之。當戰爭未息。幸其兵死亡者半。而糧之羸者半。農可以力耕而給之。及戰息則又無之也。而國何以支之。不唯國不支也。古者無養兵之費。而兵又易於自養。後世養兵之費如此。而其兵又人人自困。是兵與農兩困。而國幷受其弊也。嗚呼。弊而至此。終不可矯乎。曰。不可矯者。矯之以人情。夫人人自困。寧其情之所樂哉。病之而無奈何也。其將之率焉者。亦病之。而無奈何也。天下之可慮者。莫大於無奈何。無奈何之極。雖有善術。不可施也。及其可施。施之曰術。何謂術。曰。因其情。而濟其困而已矣。後世之兵不地著也。而非無其地也。兵皆有其地。而不著也。故許其困者。著之於地。使著者之班。在不著者之上。與農雜處。以自給。以時番上。緩其期限。少其徒從。其將之率焉而衞者。亦如之。其自給者多。則其不自給者。必願比之。不待令而往。如此者十數年。農息其肩。而兵革其驕。使足利與織田・豐臣。早

施此術。則天下之兵。可以倍其強。而不以費天下也。

小竹曰。土著之說。來翁亦曾言之。此論殊詳。須講而行之。是非緩務也。

論兵制 下

兵欲精。不欲多也。多而精者上也。少而精者次之。不精而多者爲下。顧制兵如何而已。制兵善。無兵不精。制兵不善。無兵不不精。勇健善戰。以衛其將之謂精。惰不可用。怯弱易散走之謂不精。不精之兵。雖百萬不足以衛國。故兵不欲多而欲精。精何以得哉。素拊循則精。素教練則精。數用則精。親其上。習其長則精。與其同伍。相馴相愛則精。反之則不精矣。精不精之由。不可不察也。古今之兵。莫精於鎌倉。當其時。海內武士莫不地著。兵與農未嘗異也。所謂大名・小名。猶今之里正・鄉長也。所謂家子・郎等。猶今之編氓・佃戶也。是以上下相親。卒伍相愛。不啻骨肉手足。以此更番屯衛。則一心護君。有事檄召。則相帥而起。同進同退。致死不去者。人人皆然。至足利氏以後。則漸離其地。來聚城府。而猶因其地

之大小。祿之多少。等其兵役。曰。千石之士。應具幾卒。萬石之將。當率幾隊。然舊蓄之臣十一焉。其餘皆傭僮奴。以足其數。主非素戴。長非素習。同伍非素相識也。特利我傭錢。烏合而來者。不用則已。用則不烏散魚潰者幾希。寧肯止而戰。故五百人之陣。徒見五十騎在而已。而所謂五十騎者。亦不成用也。何者番衞之將。以資格選。換易無常。至不與所部相識面。推而上之。至雖元帥。亦不與將領相識面。則緩急果何用乎。地之大。祿之多。不足以衞國。而適足以蠹國。是何也。不地著之弊也。不地著者。聚在城府。而其心散。地著者。散在各邑。而其心一。心一則氣奮。心散則氣惰。故不地著之萬。不足以當地著之千。地著之一。足以敵不地著之百。故曰。欲精不欲多也。多者其名也。精者其實也。名可稱於無事之日。而實可用於有事之時。制兵者。寧務其名耶。抑務其實也。曰。是有識之所憂。固也。雖然。彼以漸成習者。饒使足利氏有復古制之志。而寧可革耶。嘗竊策之曰。使士之困窮者。稍退居其邑。以自給。猶病之以漸成者。當以漸治之也。然醫病者亦多術矣。有以漸治者。有以頓治者。以頓治者。舉大關而乘其機也。夫

鎌倉之有較獵。無識者以爲豪擧也。不知其及四方無事。恐其素精者。浸惰而趨於不精。故因此閲兵爾。及有承久之事。其兵勇健善戰依然。是非其驗歟。況其素不精者乎。至武田・上杉之兵鋒。天下無敵者。則非甲越之兵生而皆精也。亦訓練之而已。故不數年。皆成其精如此。有如此之驗者。必有如此之方。如右大將與武田・上杉者。兵之良醫也。其方具在。何國不可施也。誠使足利氏有英斷之君。修紀綱。節用度。豫使將領與所部。其邑相聯屬。而大閲於近郊。會焉。一歲一擧。數擧之後。盡留在其邑。以待後擧。始如戍役。後遂移其孥。而番衛於府。各將置場。每月訓習。角其材技。分其殿最。及大擧則親角其最者。賞罰之。數擧而傔從不換者。與換者。亦有賞罰。而將領之勤惰於訓練。亦如之。數罰不悛者。然後收其部。換其將。則地著之制可頓復。不精之兵。可頓變爲精也。甲越之時。爭招亡命。有與力。同心之名。又收山澤漁獵之民。入執鳥銃。列於行伍。有山徒・海徒之名。此又故方之可襲用者。然在今日。漁獵可收。亡命不可招。可招者。有游手無業。窮民失產者。招之使墾荒地。因以爲兵。皆置頭領。以將士子弟可大

賞者充之。以其租入爲之祿。隸於敎習之後。此變化故方。而施之也。則亦可以頓增兵矣。而非如不精而多者比也。誠如此。不唯千石必有千石之實。萬石必有萬石之實。舊者如新受賜。新者如舊浴恩。戴上親長。相愛相死之心。百倍於他日。既以衞國。又以富國。使其國內之地。隱然常著百萬之兵。其兵皆精。雖內有叛者。外有侵者。不待新募。而事可立辨。此術也。行之足利氏之中葉。庶幾可以革其積習。古論兵者。曰。朝氣銳。晝氣惰。暮氣歸。夫天下之氣。亦有惰時矣。此作而新之也。

小竹曰。亦古人之成議。非新說。實可擇用。

穀堂曰。農兵。土著。古今之通論也。然而在今日。則有極難行者矣。夫秉耒耜事耕耨。皸瘃胼胝。夜以繼日。而一旦猝然。遇兵刃刧殺之事。不失其常度而奔北者。幾希。雖曰其寓兵於農講武於農隙。然今古戰爭之勢。大異。昔之以弩矢者。今爲發熕。昔之爲長刀者。今爲長槍。其他。兵器之銳利。將卒之悍勇。十倍往古。以三時力田。一時講武之人。而當彼悍勇銳利。其不能敵也昭昭

矣。故農自農。兵自兵。而農者服南畝。給兵之食。兵也者。士也。士業講武。備農之不虞。被工商以百貨。給士之用。亦猶農之與士也。此若不免於唐宋以來養兵之弊。然而當今之世。欲強復之於古者之農兵與士著。則余恐事未成而禍從之也。惟其兵欲精。而不欲冗。因其提封之廣狹。俸入之多寡。以制之。禁游惰。革庸散。調練撫摩。足禦強寇。則庶乎策之得者也。余往年持農兵土著之論。然視之於今日之時勢。而爲濟急之說者如玆。以質鄙見。

九華曰。今之士。古之兵也。賴氏因論兵制。以明今之士多費焉。而論兵制上下二篇。上篇當深著眼。又當與首篇論勢參看。下篇特其緒餘耳。夫農兵土著。在昔。物夫子於政談。於鈐錄。詳其有用而無費。乃先賢遺說。如賴氏。述而明之者也。豈可忽略。而古賀氏評。論其於今日不可行。何也。曰。秉耒耜事耕耨。皸瘃胼胝。夜以繼日。而一旦猝然。遇兵刃刼殺之事。不失其常度。而奔北者。幾希。是就目前農夫云爾。然農兵自與農夫異矣。夫所謂講武於農隙者。言千百習戰耳。豈不有平日控弦擊劍之事乎。且其田舍質素之風。比之今

之士。畫眉顧影。媚婦女子者。蓋有間矣。曰。昔之以弩矢者。今爲發熕。昔之爲長刀者。今爲長槍。其他兵器之鋭利。將卒之悍勇。十倍往古。兵器之鋭利。固當十倍往古。將卒之悍勇。有何所見而言之。人皆有言。古今之兵。莫强於鎌倉。鎌倉之强。其不亦地著乎。曰。兵欲精。而不欲冗。因其提封之廣狹。俸入之多寡。以制之。禁游惰。革庸散。調練撫摩。足禦强寇。則庶乎策之得者也。是當以度制云爾。苟不以制度。則兵既冗矣。何以制之。既游惰矣。何以禁之。既庸散矣。何以革之。乃以賞罰禁令已乎。應三日革面耳。苟不改制度。則今日士方困。其欲自振。亦何以得。然而農兵土著。雖物子。雖頼氏。豈謂之易行哉。人情安於因循。奪其所安。而改之。豈謂之易行哉。自非因勢而制勢者。必不能爲也。且不見本篇所謂將帥歳來衞於府者。不下數百。其率士徒。不下各數千乎。非自上先爲制於此。則彼難於下手。乃以列國之君。而不可獨行之。抑亦不見頼氏所詠薩摩詞。鄕兵團結百餘區。帶箭人交荷鋤夫乎。乃以列國之君。而獨行之者。不必無也。或謂。將帥歳來。衞於府者。既爲制於此。則土著

不必爲斯可乎。曰。可也。雖然今之士。古之兵也。既無戎馬。亦有間暇。則飽食煖衣。不可教誨也。嗚呼。書不盡言。書必有差。安得遇其人。與共語之。

論騎兵

騎戰之廢久矣。而其利終不可廢也。王朝兵制。五人爲伍。伍五爲火。每火六馬。其便騎者。爲騎隊。餘爲步隊。所謂六馬。則以載糧食器械。非用於戰。然馬之多可知也。當是時。坂東宜馬之地。皆有監牧。以時貢馬。建左右馬寮。以蓄養之。及源氏世將於東。蓋擅有其利。藤原氏之落賀陽第。源頼光以馬數十匹。分贈諸客。是王家之所以失戎政。而源氏之代之興也。及源平之鬬。平氏校尉。憚源軍之多馬。曰。人蓄五六匹。馳山谷如平地。是平氏之所以不支。而源氏之兵無敵於天下也。源右將之慶東大寺。以金千兩・馬千匹。與後世將帥之相贈物。金多馬少迥異。宜其騎兵之盛也。及新田・足利之爭。騎兵猶不廢也。新田中將稱尤喜平地騎戰。其用兵非有他奇。每以衝突得利。北畠顯家收奥兵入援。議者欲

及其馬足未軟而用之。京地迫蹙。行在與賊營非遠也。而必用馬者。可見賴騎兵之利也。故楠正成以鈕聯楯。蔽而射敵。敵卻則進。以破足利氏軍。可見其憚騎兵。而求術克之也。而京畿以西之兵。則蓋每少騎也。卽足利氏雖起於東。而開府京師。則東國宜馬之地。捐爲藩國。蓋馬之用。於是漸疎。而其產者亦漸少。至織田・豐臣。則起於近畿。固多步少馬。而當時言兵者。推甲・越二家。二家所鬪。其地嶮阨。不便騎戰。騎。徒取致遠。及戰則徒。其法遂偏天下。而騎戰漸衰矣。雖然。河中之戰。越軍銜暗渉河。非騎不辨也。甲之別軍。聞戰聲還救。亦非騎不辨也。則騎兵之利。非全廢也。長篠之戰。織田右府憚甲兵馳突。結柵叢銃。纔能克之。則騎兵之利。果不可廢也。然織田・豐臣。百戰經紀四方。而藩鎮制兵者。率皆從二氏興者。於是。騎戰終廢矣。豐臣・太閤之西伐也。令具三十萬人糧・二萬匹馬芻。其少馬也如此。余嘗觀鎌倉時戰圖。一隊之兵。及僕從。無不騎者。後世士有祿三百石。然後得具一馬。而一萬石者。出士十六騎。騎者指揮。而步者戰。則是騎無益於戰。非如王制立騎隊之意也。置馬於廏。不於野也。養馬以豆。不以

草也。馬取其毛色之澤。不必其力之強與蹄之堅勁也。騎之者習其節奏。不習其縱橫馳驟也。而騎戰不可復焉。可勝惜哉。曰。騎廢而步。猶車廢而騎。夫車之不若騎勿論已。謂騎不若步。則吾所不信。騎之不若步者。行隘道也。結陣不動也。至夫聚散倏忽。則步不若騎。控馨進退。則步不若騎。聯鑣而前。突敵陷陣。則步不能支騎也。夫卒居前。士居後。卒放銃而退。士下馬執槍代進。天下陣法戰法皆然。然而或有馬上發銃。含銃即馳。每戰得志者。則騎之勝步。不待智者而後知也。而拒之者。令衆橫槍坐。及騎迫齊起。是以彼聯楯結柵之不可驟爲也。而出於此。此又非人人所能爲也。待勇者而後能也。騎果不若步耶。曰。騎之勝步則然。奈少馬何。古今風氣之變。蓄牧亦有息耗歟。抑人不加之意也。加意養之。無物不息。草木菜蔬蟲魚。無不皆然。何獨於馬而恠之哉。古少金而今多金。非金息於今。而耗於古也。今加意而古否焉耳。馬則反之。有志於治戎者。苟知騎兵之利。而欲復之。反其所爲而已。其養焉。習焉。亦反其所爲而已。如彼朝鮮。視之我邦。稱多馬善騎也。文祿之役。假使彼以彍騎鏖岸迎我。我固多步少馬。

下船上陸。其足瑟縮。而彼攢蹄蹂躪。馳而雨射。則我敗矣。嗚呼。是用之於我。亦備我邊之策也。

小竹曰。步戰不及騎戰。固也。然有馬則養馬之費與勞。亦多矣。我邦海國也。恐不如步兵之簡便。吾則與織田・豐臣氏矣。

穀堂曰。步不若騎之論至矣。但山陽以西。多不產馬。所謂加意養之。庶有其效。然不敵東國之蕃庶矣。若我西肥。以海防爲重。然多平地曠野。宜用騎。而馬羣殊乏。要當講求之耳。想他藩地勢之險易。馬匹之多寡。必有得失之不同。應待異日而叩問。

九華曰。今也不唯兵農分矣。馬亦兵農分矣。馬亦兵農分。而馬非馬也。農之馬。用之於搬運。兵之馬。代之於徒行。何謂馬非馬也。曰。豈謂是歟。古之騎兵。馳山谷如平地。自馬有兵農以來。農之馬如牛。兵之馬如驢。而驢與牛者。不可用之戰也。且也。兵農分。而兵寡矣。兵農分。而馬寡矣。豈唯馬寡矣哉。其寡者皆驢也。而今蓄驢調驢。謂之武備。吾未知其可也。因記對馬儒雨森氏所

著載。本邦養馬之方。不如韓人。然亦使本邦今之土地著。則其養馬之方。未必不如韓人也。

論邊防

國之防寇。猶家之防盜也。盜之來無時刻也。無方所也。高其垣墻。固其扃鐍。備其僮奴與挺梧。擊柝而警之。比屋皆然。然家屋之所建異勢。而僮奴之所執殊事。利於西家者。不便於東家。雖然。不可不參而考之也。漢土與西北虜接壤。盜來無時。而我則大海而四周之。遠斥淺沙。盜不易來。然其來無方所者。更甚焉。非彼專防西北之比也。則勢如不若彼之便者。然而有利於彼者矣。考彼防寇之策。不過曰屯戍而已。是其盜之來。有方所也。無方所者。屯戍不可用。然吾知其不足用也。何則彼郡縣。而我封建也。郡縣之勢。兵有處而無。有時而無。所以有屯戍。至封建。則兵無處而無。無時而無。無事於屯戍也。盜來無方所者。非此無以防也。而所以防之。利於彼矣。何則諸侯各土其土。民其民。則不能不防。非

諸侯者。士非其士。民非其民。則不敢不防。不敢者與不能者。其竭力致效有間
矣。故善防邊者。舍其不敢者。而用其不能者。使之食土之毛。倚民之力。習我水
土。熟彼情狀。事至則應。無所擾動。以逸待勞。以主制客。其勝負之形。定於不戰
之前。不然。彼之來侵。東沒西起。使我之遣發轉輸。勞費相萬。而其將卒流寓客
土。未見寇。而死者十六七。即見寇。不戰而走。是其勢之相懸。不啻霄壤。然處勢
之不便者。雖知其便。不能用也。處其便。而用其不便。可謂善防寇乎。故封建之
世。務興滅繼絕。非徒爲厚也。所以自衞也。譬之富民之獨家山野。環置房室。借
於小民居之。盜來各自奮。拒守其財。苟撤其房屋。則主人獨當之耳。孰便孰否
乎。而其防盜之器械。亦有利有否。漢人防寇於陸。我防寇於海。陸寇所挾。馬與
弓也。海寇所挾。船與火也。所挾在此。則所防亦在此。而防者不足。攻者有餘。何
哉。寇長而我短也。我非事事而短也。寇非事事而長也。我每用吾短。而使寇每
用其長。謀莫失焉。亦盍出寇之所短乎。寇之所短。乃我之所長。曰短兵也。格鬪
也。執短兵而格鬪也。則彼之十。不足以當我一。故彼據其船而挾其火。我不必

較也。及其來迫。決死敢進。出沒奮擊。使彼不暇用其所長。縱使其上陸。要之阻隘。伏其前後。可擊而鏖之。夫我所守者。非土地乎。吾之土地。寸不可失。寸之外。雲海茫茫。與天爲際。何與吾事。何必擾擾爲也。今夫盜挾梯與鋸。以求鑽我屋。我則持梃逐之。使不入則已。其事異也。我舍吾梃。而執梯與鋸。恂恂呼號。與之戰於門外。則誤矣。大凡我邦人之防寇。每不審彼我之勢。視彼過重。內自勞弊。而及鬬又不知事各有長短。是古今通患也。當我郡縣之時。鎭守宰府。亦不得不用屯戍。其勢然也。及封建之漸成勢。其善防寇者。莫若北條氏。蓋元虜窺我。而病其不便加兵。欲擾而取之。我誅其使。以必我守志。而所以待彼。則節用蓄力而已。不遣戍也。不輸糧也。罷兵就其國。就其國。卽衞吾邊也。如少貳。如河野。不能不竭力致效者。皆自爲守。非專爲北條也。憑陸嚴備。走舸逆戰。及其上陸。我非無死傷。終能驅而下之。彼恃其艦與礮。而勇敢勁捷。固不及我也。如北條氏。可謂自知其勢。而用其長矣。如豐臣氏之攻韓。與明人戰。亦因諸侯用之。然見遣者。不敢不往。雖故士戰異域。其鋒淩鈍。亦勢宜然爾。明以火箭敗我於平

壤。而我以短兵克彼於碧蹄。至蔚山之事。彼火器什倍平壤。而我孤軍支持累月。及援兵來迫。彼之所挾。亦不能以逞。其事之長短。可以見焉。而況客主異勢。攻守異事者乎。嗚呼。防邊之利害便否。可以此決也。

小竹曰。舍短用長。要言不煩。

穀堂曰。彼此長短之論。別具隻眼。此狡焉者之所最忌。而廟堂之上。每不免憒憒。如長崎・松前。以爲外夷互市之地。則可也。其爭鬪之地。則環海之內。唯彼所爲。我不得而方物。安得膠柱守株。晏然待其至乎哉。雖然。舟楫之技。亦不可不精也。彼有哨船快艣。以窺覘我形勢。而我懵不察知。則濱海之戶口。不免於蹂躪虀粉。又如追北伏途。不可以我短而漫然放過也。嗚呼。安得用心邊防者。仔細論之。

九華曰。邊防之策。予年十八九時。每與人語之。皆不能可否。既知其無可與言者。爾後不復語也。及賴氏之論出。全與吾策符合。於是乎益自信英雄所見。本無二途。亦但賴氏之爲人。英氣過於孟舍。故至其及其來迫。決死敢進。

而及其使其上陸。要之阻險。予唯奉聖人戒子路之語。故先其使其上陸。要之阻險。而次其及其來迫。決死敢進。此所以少異者也。而其所少異。吾似怯矣。然而短兵格鬪。我固十倍彼。而彼者。環海皆是也。安知其中不有奇器異械。毒箭火丸。以虀粉我者乎。在昔。北條氏覆元寇。不可守株者也。豈如瀕海之民。淸野而退。防諸要害。則我諳地理。而彼不知也。出沒自在。奇正變化。擊而破之。萬無一失。抑亦瀕海土地。必不〔不必〕皆同。或利於水戰。或利於憑岸。不可拘泥。要之臨機制宜。在乎其人。

論火技

兵有古今之別。不可執古以論今也。古之兵。短者爲刀。長者爲槊。而皆不及於遠。及於遠者爲弓矢。弓之尤大且勁者爲弩。故漢·唐皆以此爲最利之器。而我王制亦有弩。三善淸行封事。有請增弩手之議。以此爲防邊要物。可見也。然鎌倉·室町之世。戰鬪無虛日。而未聞用弩也。北條氏防元寇。亦未嘗用弩也。皆用

弓而已。及至文祿・元龜之際。乃有鳥銃。而弓之用微矣。毛利氏之拒陶賊。賊有銃七口。櫓楯不支。則以土豚扞之。其用於東國。相摸爲始。而甲・越二雄交用之。則又以竹束扞之。及豐臣氏攻朝鮮。得發熕佛郎機諸礮。船載而歸。雖未盡其用。知其粉虀陣隊。壞裂壘壁。蓋銃之尤大且勁者。猶弓之有弩也。於是海內言兵者。莫不偏講於火技。火技以其大且勁者爲貴。曰。有弩則弓不足用。有銃則弩不足用。有大礮則銃不足用。苟有此物。無敵於天下。而吾常以爲不然。夫此物固無敵於天下。而天下之敵。不坐而待我用此物也。我用之彼亦用之。曰。使吾所用多於彼。善於彼。故勝。夫善於彼者可爲也。而不可必也。多於彼者可必也。而不可爲也。不可爲者技也。不可必者力也。我講技精矣。而彼之所講。或精於我。則我敗矣。故曰不可必也。我力有分有限。使我常富於彼則可。一遇富於我者。則我敗矣。故曰不可爲也。吾且言其不可爲者之驗矣。織田氏之鬭甲斐也。以三千之銃每千迭發。以致大勝。是以其富於武田耳。設有富倍織田者。織田用三千。彼將用五六千。使織田欲更辨萬銃。豈可驟辨耶。此以海內言之也。

至於海外。其不可爲者愈甚矣。而不可必者皆是也。或者恃此爲防邊要物。猶古之弩者。知其末而不知本者也。古之人。未必恃弩以防邊也。使弩果可恃乎。則其後戰爭之世。何以不用弩而獨用弓。是寧不可思其由耶。且我用之。彼亦用之。獨恃我之所用。而彼之所用。不可無以扞之也。故昔用銃矣。亦有扞銃之物。銃且不可不扞。而況銃之尤大且勁者乎。而未言以何物扞之也。使發熕大礮之來。在文祿・元龜之際。則必有以扞之。如彼土豚・竹束者矣。而後之人。概乎不察也。則可見其不驗諸實矣。不驗諸實者。不適於用也。夫銃之大者。不便運用。能運用之如銃。又能命中者。是異材之士。不常有者也。僥倖有之。一國不過數人。通計海內。不過數十人。用數十人。可以防四邊乎。設墩焉于要害之處。待敵來用之。可矣。而敵之來。不必是處也。施牀焉于陣營與船。隨敵所來用之。可矣。而烏知敵無知其在此。當此以虛。而以實襲彼者哉。且物之大且勁。載之者亦勝其任。苟不勝其任。其所激越簸蕩。適足以自累。而可用以傷敵乎。患之而輕其藥。則其鉛之大不可發。小其鉛。則失其勁。故曰不驗諸實者。不適於用。苟

不適於用者。不可恃也。恃此者危。曰。然則此物不可用乎。曰。可用。吾特言其不可恃。恃則用失其用耳。然則何恃。曰。恃謀。使長篠之戰。無襲鳶巣之謀乎。則三千之銃爲無用矣。是兵之無古今別者也。是兵之本也。

小竹曰。恃謀是聖敎。知此則知兵之不可恃。不獨火技也。恃火技者。亦出於怯耳。

穀堂曰。火術。無於古而盛於今。今之戰。則用火術者十居八九。然未聞搬運之輕便。捍禦之的確者也。至如長沼諸兵家。既以弓弩爲無用。而歸重於火術。其說甚長。應別論之。噫嘻。天造兹毒器。焚炙元元。慘酷之烈。所不忍聞。一片婆心。唯待有神智之士出焉。而制禦紅衣將軍之具耳。此火技之不可不愈講究也。

九華曰。自從火器相傳。雖有勇士。雖有猛將。難乎爲鬭。兵之毒。莫火器若焉。是以海內言火技者。後出愈精。有以百發百中者。有以發發無間者。有以飛箭十里者。有以大礮粉陣者。凡十宗百派。不可屈指。而賴氏論火技。謂大礮

爲不甚適於用。予意亦竊謂。爲當然。而吾初不學火技。未知其果然否。抑亦賴氏所謂扞銃以土豚竹束。而發熕・佛郞機諸礮。未言以何物扞之。乃可以見其不驗諸實矣。亦可以見其不甚適於用也。是豈足以見之哉。何者自從發熕・佛郞機諸礮相傳。亡幾干戈熄焉。雖則有諸礮。未熟其用之之法也。故不驗諸實矣。以其無扞之之物。以決其不甚適於用也。可乎。夫言火技者。後出愈精。卽使當時諸礮。果無適於用。安知今日海內。其不有適於用者。卽使今日海內。其果無適於用。安知異日海外。其不有適於用者。而來驗之於我。可懼乎哉。火技其不可不講究也。

論水戰

我國處大海之心。猶天塹而四周之。是其所恃以防寇。寇所不敢窺也。然恃者。我有其險耳。使寇有之。猶無險也。彼六朝及宋。皆恃江險。以防江寇。然防之江南。不如防江中。防江中。不如防江北。無他。我有軼。敵有軼。敵與我。分有殊也。猶

我恃蒐道・勢多。以防東人者每敗。是故高師泰之防奧軍。背二水戰。曰。我勢蹙咫尺內。而敵勢奮數百里外。所以敗。況彼破萬里波浪而來者乎。而吾可復恃彼洶湧者。坐而待之也。豐臣氏之伐北陸。伐南海。每以船軍別進取勝。及其伐朝鮮。已取王城。而舟師爲全羅水兵所扼。不能策應。所以終不得志。故欲使寇不得志乎。水戰不可不講也。吾嘗策邊防曰。船與火技不可以角。是言勿驚擾而遠出也。言其一未及其二也。夫水戰有彼此之別。利害係焉。講之者。不可不先辨。彼涉萬里而來。其船甚大。設櫓施礮。礮發而船不搖。而我所謂水戰。戰我海濱而已。則其船皆小。礮不可施。可施者止於鳥銃。依其素法。整隊而進。彼以其大艦巨礮。來乘於我。我披靡粉虀矣。寧得近之。卽得近之。我仰彼俯。勢甚不利。噫何以策之哉。於是。有欲倣漢制造艦者矣。有欲舍船列礮海岸者矣。夫彼之艦制。非我所熟。饒使摸而成。操之不習。焉能用戰哉。而其爲費不貲。伐韓之役。課諸國造船。船非大也。猶不堪其敝。況其大者乎。至列礮海岸。則所謂不有我險也。不有我險。則雖以百萬礮環國。彼冒焉而進。我舍焉而潰。終歸無用耳。

然則何用。曰。用其舊耳。夫小有小之利。大有大之不利。大之不利。進退不便也。合不輒分。分不輒合也。小之利。欲進則進。欲退則退。欲合則合。欲分則分。我之船小而不合。則彼之礮。難於命中。而彼之船大而不分。則我之銃。仰發無虛丸。況我之海岸。遠斥多礁。彼大者每膠於淺。淺。我小者之所利也。我能動而彼不能動。倏忽聚散。擾而斂之。可矣。彼乘潮而進。我縱其進。而出其背可矣。彼之礮。利於及遠。我募敢死。梯上其艦。短兵迫鬪。使彼不暇發。可矣。彼或舍船上陸。我正兵壁岸。奇兵繞奪其艦。可矣。苟能辨於此。艦不必造也。礮不必設也。船與銃。皆仍其舊。而操之用之者。講而習之而已。瀕海將卒之不講習焉。久矣。求其講習焉者。捕鯨之夫。是已。以小攻大。以分合聚散制之。其勢似也。誠收用之。使士卒雜焉而學之。常與活物決勝負於波浪洶湧中。其勝於死守常法。整隊伍備故實者。不啻萬萬。古豫州兵。稱習水戰。至視其所屬。以知勝敗。近世羣雄。乃有呼海賊隊者。是皆用習於水者耳。我習於水。而寇不如我習。則四面之海。乃我之海也。海之險。然後萬世而可恃也。

小竹曰。亦用吾長。出於彼之長也。前篇恃謀兼之矣。

穀堂曰。水戰者。海國之事。而東山諸國遠海之地。則不使水戰。以甲州之善兵。猶不曉水戰。是局於山國耳。鎮西諸國。瀕海與外寇隣。水戰之不可不講爲最急。而望洋無策。恃舟自強。其內寇則難兄難弟。彼善於此者或有。至於外寇。則安保其不一敗塗地乎。外寇之論。詳於邊防中。當參差錯綜以無遺漏也。因論凡論兵六策。大率經濟家所忽。而甲越之所苦心焦慮而不能言。而子成以一布衣儒生。袖手傍觀。坐策成敗。晰如龜筮。試使子成著羽綸巾。持鐵如意。與今之所謂兵家。櫜鞬鞭弭。周旋中原。子成出其胸中所蘊。奇正變化。鏖敵如芥。則何快如之。子成既以前數十論。禁俗吏之口。又以此六論。噤兵家之口。足爲儒生文人吐氣。嗚呼。何天之獨寵靈子成。而又不使之預事。殊可怪也。

九華曰。先制其不爲彼所勝之勢。而後求其勝彼之方。是用兵之法也。故先邊防。而後水戰。水戰卽勝彼之法也。然國中自古。用舟師者少矣。賴氏論之

於外寇。宜矣。而其所論。不必造艦。不必設礮。船與銃。皆仍舊。使瀕海將卒。雜捕鯨之夫而學之。皆得便宜。誰能間焉。但其立論。少有可議者。賴氏曰。我國處大海之心。猶天塹而四周之。是其所恃以防寇。寇所不敢窺也。固然。如其曰恃者。我有其險耳。使寇有之。猶無險也。因引彼六朝及宋。恃江以防北寇。與我恃兎道・勢多。以防東人。以狀之。以予觀之。似甚無謂也。何則毋論兎道・勢多。雖曰大江。可一跳以越之。而其越之者。兵勢頓變。故其防之者。防之江南。不如防江中。防江中。不如防江北。如我國。處大海之心。瀕海皆地利。非遠斥多礁。則懸崖絕壁。舟師不易近焉。而大抵水戰。恐風與火。況彼凌千萬里而來者。安得不顧。其汎乎長在波濤洶湧間。而中他奇計耶。乃天塹四周。使寇有之。猶我險也。非彼之險也。若夫曹孟德水軍八十萬。爲周郎所一炬燼。非以風火者耶。非以江中者耶。何況我東海。疾風狂瀾。乘之以火。雖則夜叉・阿修羅王。可擊而鏖之矣。

文政丙戌（九年）春。西遊筑紫。謁昭陽龜井先生於草香水亭。遂留數月焉。

一日話次。及頼氏爲人。予少言其短。先生則曰。子成未易毀也。先人(南冥)亟稱子成。爲天下奇男子。曰。吾見人不爲不多。未嘗見有與子成雁行者。子成未易毀也。爾時予默然。而心未誠服也。歸鄉。居未幾。得其所著外史・政記・樂府。及通議數編。尋讀之。然後始知先生不我欺也。頼子果人傑乎哉。頃者看西肥穀堂古賀氏評通議者。推重特至。雖曰德不孤。抑亦頼氏得知己。何其多也。予歆羨之餘。自忘固陋。評論斯書。幷古賀氏所評。而未遑顧其爲狗尾續貂也。因記。先生書牘中。見與頼氏。揚攉外史文字。而未見片言隻句。及通議者。意者先生所未經目者歟。予深爲恨之。而頼氏以壬辰冬(天保三年秋)逝。至今八更歲次。予於其在世日。每欲遊京都。志未果。以故未得頼氏墓下供香花。爲一拜。而江都人中西某(伯基)上木通議。鬻之四方。其有功德於頼氏。於海內可謂無量矣。予爲斯書作評論。聊亦擬之於國俗寫經。以爲追福者云爾。

天保十年己亥冬十二月二十五日。九華玉(乃)惇成識。

去年來。友人越君鈴・都省卿・下不器・森子敬・山子雅五人者。相謀製二活版一。得二字數千一。適學中讀二山陽通議一。吾九華爲レ許。甚有レ助焉。先試併印レ之。字莫レ不レ足矣。遂成二五十本一。須三與二某某一。固非下公二之於世一者上。聊以代二諸生謄寫之勞一云レ爾。

天保［十一年］庚子春二月。宮子容識。

通議 卷之三 大尾

男 賴元協
男 賴復
男 賴醇 同校
門人 後藤機

題通議後。七首。

傍觀時議添蛇足。熟識官途編虎鬚。却有世情灰不盡。著論猶欲擬潛夫。

一穗寒燈萬古情。膝穿木榻老書生。縱論寫到關心處。奮筆行行紙有聲。

陳編儘許口縱横。敢趁諸公賛太平。未必語言當菽粟。且憑筆墨闘蛟鯨。

誰欲朝儀爲綿蕝。又謀經野畫楸紋。吾無周禮横胸裏。直攄肝腸寫示君。

敬輿駢體含流動。和仲分編見貫穿。跛鼈自知千里隔。學文亦似上青天。

洪流日夜淺成深。未缺金甌自古今。策漢過秦同一意。無人識得賈生心。

半生歳月酒中消。落魄耽詩鬢欲凋。小杜唯留二論在。豈無身後李文饒。

男　復　敬校

序。

山陽先生著書之行于世。最大者爲外史・政紀。而外史特係源平以下。雖有論贊。不至盡焉。因通王代古今於政紀。論之至此全備矣。然皆不過就國史論。至說先生胸中所蘊大經濟。則在通議廿八篇也。先生學之所詣。志之所存。盡見于此。其刻之合外史・政紀。公之天下。傳之後世。固宜。而所恨遺古賀穀堂翁評論。翁爲先生舊識。最深知先生。先生之所以屬此評。翁之所以細閱而詳論也。今幷刻之。始可以無遺憾也。假令先生有知。亦必頷之。抑余亡友。野本萬春嘗論先生云。先生之學可及也。先生之文可及也。先生之詩可及也。而先生之識不可及也。蓋讀此篇。所言亦爲善知先生。余因又附其言于此。視者幸勿爲蛇足可矣。歲在丙子（明治九年）嘉平。月中浣。　濟叟。宮原龍撰幷書。

昭和七年四月十日印刷
昭和七年四月二十五日發行

賴山陽全書（全集中）

發行者　廣島縣廳內
賴山陽先生遺蹟顯彰會
代表者　大田清

印刷者　東京市京橋區銀座西七丁目一番地
大谷仁兵衛

印刷者　東京市京橋區銀座西八丁目五番地
渡邊安雄

發行所　廣島縣廳內　賴山陽先生遺蹟顯彰會
電話　五七七八番
振替　下關六三三〇番

帝國地方行政學會印刷
民友社印刷所印刷



